一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

住吉遺跡
渡池跡
北内遺跡
池下遺跡

2008.2

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

住吉遺跡
渡池跡
北内遺跡
池下遺跡

2008.2

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序　　文

住吉遺跡、渡池跡、北内遺跡、池下遺跡は、一般国道32号綾歌バイパスの建設に伴って発掘調査が行われた、香川県丸亀市綾歌町栗熊東に所在する遺跡です。

発掘調査は、北内遺跡は平成10・11年度に、池下遺跡は平成11年度に、住吉遺跡は平成12年度に、渡池跡は平成13年度に香川県教育委員会からの委託で財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施されました。

北内遺跡からは弥生時代中期～後期の集落が検出されました。この遺跡では弥生時代中期の廃棄土坑が数多く検出され、中期～後期の灌漑用水路が検出されたことにより、また、隣接する池下遺跡でもこの時期の水路群が検出されたことにより、当該期のこの地域の水田開発の様子を明らかにすることができました。

また、住吉、北内、池下遺跡にまたがって中世の集落が検出されたことにより、この地域に広範囲にわたって中世集落が営まれていたことが明らかになりました。併せて渡池の堤防の調査をしたことにより、渡池築造の時期の下限を知ることができました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年２月

香川県埋蔵文化財センター

所長　　渡　部　明　夫

例　　言

1．本報告書は、一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第２冊で、香川県丸亀市（発掘調査時は綾歌郡）綾歌町栗熊東に所在する住吉遺跡（すみよしいせき）、渡池跡（わたりいけあと）、北内遺跡（きたうちいせき）、池下遺跡（いけしたいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が国土交通省四国地方整備局（2000年までは建設省四国地方建設局）から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、以下のとおり実施した。

（平成10年度）　北内遺跡
　調査期間　平成10年７月27日～平成11年１月25日
　調査担当　川井　國博　乗松　真也　中村　文枝
（平成11年度）　北内遺跡、池下遺跡
　調査期間　平成11年４月１日～平成11年12月31日
　調査担当　島田　英夫　佐々木正之　東条　貴美
（平成12年度）　住吉遺跡
　調査期間　平成12年４月１日～平成12年４月30日
　調査担当　信里　芳紀　松岡　晶　秋山　亮
（平成13年度）　渡池跡
　調査期間　平成13年４月１日～平成13年６月30日
　山元　素子　石原　徹也　松田　朝由

4．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本書の執筆・編集は文化財専門員山元素子が担当した。

5．調査に当っては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
国土交通省四国地方整備局　綾歌町教育委員会（当時）　地元自治会　地元水利組合

6．本報告書で用いる北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT.P.を基準としている。
また、遺構の略号は以下のとおりである。

SB：掘立柱建物跡	SE：井戸跡	SD：溝状遺構	SK：土坑
SP：柱穴跡	SX：性格不明遺構	SR：自然河川跡	ST：墓

7．石器実測図中、スクリーントーンの部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを表す。
なお、現代の折損は濃く黒で塗りつぶしている。

8．本報告に当っては、下記の機関に業務を委託した。
北内・池下遺跡樹種同定……株式会社　古環境研究所

9．本報告に当っては、下記の機関に鑑定を依頼した。

池下遺跡出土人骨……香川医科大学（現香川大学医学部）法医学教室

10. 遺構断面図及び土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

11. 出土遺物観察表中の土器の残存率は図化のために径を計測した箇所の全体に対する割合で、完形品に対する割合ではない。

本　文　目　次

序　文
例　言

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　住吉遺跡、渡池跡の調査の成果
　第１節　予備調査の結果 …… 11
　第２節　遺構・遺物
　　１．Ⅰ区の調査 …… 14
　　２．Ⅱ区の調査 …… 19
　　３．19トレンチの調査 …… 21
　　４．渡池跡堤防の調査 …… 23
　第３節　小結 …… 24

第３章　北内遺跡の調査の成果
　第１節　土層序 …… 28
　第２節　遺構・遺物
　　１．縄文時代の遺構・遺物 …… 41
　　２．弥生時代中期の遺構・遺物 …… 41
　　３．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 79
　　４．中世の遺構・遺物 …… 96
　　５．包含層出土遺物 …… 114
　第３節　小結 …… 130

第４章　池下遺跡の調査の成果
　第１節　土層序 …… 133
　第２節　遺構・遺物
　　１．縄文時代の遺構・遺物 …… 148
　　２．弥生時代中期の遺構・遺物 …… 154
　　３．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 164
　　４．古墳時代の遺構・遺物 …… 164
　　５．中世の遺構・遺物 …… 167
　　６．近世の遺構・遺物 …… 200
　　７．包含層出土遺物 …… 208
　第３節　小結 …… 214

第５章　自然科学分析の結果
　第１節　北内・池下遺跡における樹種同定 …… 216
　第２節　池下遺跡　Ⅲ区ST01・ST02出土人骨の鑑定結果 …… 220

第６章　まとめ …… 239

挿 図 目 次

住吉遺跡、渡池跡

第１図　遺跡の位置(1) …… 1
第２図　遺跡の位置(2)（1/12,500）…… 3～4
第３図　周辺の遺跡（1/50,000）…… 6
第４図　渡池・住吉地区予備調査トレンチ配置図（1/2,000）・土層柱状図（1/40）(1) …… 7～8
第５図　渡池・住吉地区予備調査トレンチ配置図（1/2,000）・土層柱状図（1/40）(2) …… 9～10
第６図　予備調査トレンチ出土遺物（1/4）…… 11
第７図　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/100）…… 15～16
第８図　Ⅰ区SB01平・断面図（1/60）、SB01・SP87出土遺物（1/4）…… 17
第９図　Ⅰ区SB02・03平・断面図（1/60）、SB02出土遺物（1/4）…… 18
第10図　Ⅰ区SD01・03・04・SX01、Ⅱ区SD01～03断面図（1/40）…… 19
第11図　Ⅱ区SX01平・断面図（1/40）、SK01・02、SX02・03断面図（1/40）、SX01・03出土遺物（1/4）…… 20
第12図　19トレンチ遺構配置図（1/100）、SD01・SK01・SX01～03断面図（1/40）、SK01・SX02・03出土遺物（1/4・1/2）…… 22
第13図　渡池堤防平面図（1/400、1/100）…… 25
第14図　堤防部南壁土層断面図（1/80）…… 26
第15図　堤防部北壁土層断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 27

北 内 遺 跡

第１図　調査区割図（1/1,200）…… 29
第２図　Ⅰ区遺構配置図（1/200）…… 30
第３図　Ⅱ区遺構配置図（1/200）…… 31
第４図　Ⅲ区遺構配置図（1/200）…… 32
第５図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）…… 33
第６図　Ⅴ区遺構配置図（1/200）…… 34
第７図　Ⅰ区土層断面図（1/40）…… 35
第８図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(1)（1/40）…… 36
第９図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(2)（1/40）…… 37
第10図　Ⅳ・Ⅴ区土層断面図（1/40）…… 38
第11図　Ⅴ区土層断面図(1)（1/40）…… 39
第12図　Ⅴ区土層断面図(2)（1/40）…… 40
第13図　Ⅴ区SR02断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）…… 42
第14図　Ⅴ区SR02上位出土遺物（1/4・1/2）…… 43
第15図　Ⅲ区SK03・04平・断面図（1/40）、出土遺物(1)（1/4）…… 44
第16図　Ⅲ区SK03・04出土遺物(2)（1/4・1/2）…… 45
第17図　Ⅲ区SK03・04出土遺物(3)（1/4・1/2）…… 46
第18図　Ⅲ区SK06平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 47
第19図　Ⅳ区SK12・ST02平・断面図（1/40）…… 48
第20図　Ⅳ区SK12出土遺物(1)（1/4）…… 49
第21図　Ⅳ区SK12出土遺物(2)（1/4）…… 50
第22図　Ⅳ区SK12出土遺物(3)（1/2）…… 51
第23図　Ⅲ区SK17平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 51
第24図　Ⅲ区SK18平・断面図（1/30）…… 52
第25図　Ⅲ区SK18出土遺物（1/4）…… 53
第26図　Ⅳ区SK19平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 54
第27図　Ⅲ区SK20・21平・断面図（1/40）、SK20出土遺物（1/4）…… 55
第28図　Ⅲ区SK22平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）…… 56
第29図　Ⅲ区SK05平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）…… 57
第30図　Ⅲ区SK15平・断面図（1/30）…… 58
第31図　Ⅲ区SK15出土遺物(1)（1/4）…… 59
第32図　Ⅲ区SK15出土遺物(2)（1/2）…… 60
第33図　Ⅲ区SK16平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 61
第34図　Ⅲ区SK34平・断面図（1/20）…… 62
第35図　Ⅲ区SK34出土遺物（1/4・1/2）…… 63

第36図　Ⅳ区SK36平・断面図（1/20）…… 64
第37図　Ⅳ区SK36出土遺物（1/4・1/2）…… 65
第38図　Ⅳ区SK41・43平・断面図（1/40）、
SK41出土遺物（1/4・1/2）…… 66
第39図　Ⅲ区SK33平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 67
第40図　Ⅳ区SE01・02平・断面図（1/40・1/20）、
出土遺物（1/4）…… 68
第41図　Ⅲ区ST01平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 69
第42図　Ⅳ区ST02平・断面図（1/20）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 70
第43図　Ⅲ区SD110・025断面図（1/40）、
SD025出土遺物（1/4・1/2）…… 71
第44図　Ⅲ区SD110（最下層）
出土遺物（1/4・1/2）…… 72
第45図　Ⅲ区SD110（下層・中層）
出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 73
第46図　Ⅲ区SD110（中層）
出土遺物(2)（1/4・1/2）…… 74
第47図　Ⅲ区SD110（上層）出土遺物(1)（1/4）…… 75
第48図　Ⅲ区SD110（上層）
出土遺物(2)（1/4・1/2）…… 76
第49図　Ⅲ区SD110（その他）
出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 77
第50図　Ⅲ区SD110(その他)出土遺物(2)（1/2）…… 78
第51図　Ⅴ区SR03断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 80
第52図　Ⅰ区SR01・SD001・103断面図（1/40）…… 81
第53図　Ⅰ区SD001・103出土遺物（1/4）…… 82
第54図　Ⅰ区SD103出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 83
第55図　Ⅰ区SD103出土遺物(2)（1/4）…… 84
第56図　Ⅰ区SD103出土遺物(3)（1/4）…… 85
第57図　Ⅰ区SD001・103・SR01出土遺物（1/4）…… 86
第58図　Ⅱ区SD011断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 88
第59図　Ⅲ区SD021～024断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 89
第60図　Ⅲ区SD092～095断面図（1/40）、
SD093出土遺物（1/4）…… 90
第61図　Ⅲ区SD28断面図（1/40）、出土遺物（1/4）… 91
第62図　Ⅲ区ピット出土遺物（1/4・1/2）…… 92
第63図　Ⅳ区ピット出土遺物（1/4）…… 93
第64図　Ⅲ区SK02平・断面図（1/40）…… 93
第65図　Ⅳ区SK37・40平・断面図（1/40）、
SK37出土遺物（1/2）…… 94
第66図　Ⅳ区SD069・Ⅴ区SD111・
112断面図（1/40）…… 94
第67図　Ⅳ区SD084～086断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 95
第68図　Ⅲ区SB01平・断面図（1/60）、
SP021出土遺物（1/4）…… 97～98
第69図　Ⅲ区SK32平・断面図（1/40）…… 99
第70図　Ⅳ区SB02平・断面図（1/60）…… 100
第71図　Ⅳ区SB03平・断面図（1/60）…… 101
第72図　Ⅳ区SD026平・断面図（1/30）…… 102
第73図　Ⅳ区SB03・SD026出土遺物（1/4）…… 103
第74図　Ⅳ区SB04平・断面図（1/60）…… 104
第75図　Ⅲ区SK53・Ⅱ区SK14平・断面図（1/40）… 104
第76図　Ⅴ区SX07・SK54平・断面図（1/40）…… 105
第77図　Ⅴ区SX07・SK54出土遺物（1/4・1/2）…… 106
第78図　Ⅳ区SK08・09平・断面図（1/40）、
出土遺物図（1/4・1/2）…… 107
第79図　Ⅳ区SD059・060・072・073・075・076・
080断面図（1/40）、SD059・062・072
出土遺物（1/4）…… 109
第80図　Ⅳ区SD030・035・052断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 110
第81図　Ⅳ区SD036・043～045断面図（1/40）、
SD043出土遺物（1/2）…… 110
第82図　Ⅳ区SD057・058断面図（1/40）…… 111
第83図　Ⅳ区SD032・034・041・049～051断面図
(1/40)、SD032出土遺物（1/4・1/2）…… 111
第84図　Ⅳ区SD055・056・Ⅴ区SD115(断面図)(1/40)、
SD056出土遺物（1/4）…… 112
第85図　Ⅱ区SD013断面図（1/40）…… 113
第86図　Ⅲ区SD020断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 113
第87図　Ⅱ・Ⅲ区グリッド配置図及び
遺物出土状況（1/200）…… 115～116
第88図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物(1)（1/4）…… 117
第89図　Ⅱ区包含層出土遺物(2)（1/4・1/2）…… 118
第90図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(1)（1/4）…… 119
第91図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(2)（1/4）…… 120
第92図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(3)（1/2）…… 121
第93図　Ⅲ区包含層D7・D8出土遺物(1/4・1/2）…… 122

第94図　Ⅲ区その他出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 123
第95図　Ⅲ区その他出土遺物(2)（1/2）…… 124
第96図　Ⅲ区その他出土遺物(3)（1/4・1/2）…… 125
第97図　Ⅲ区部分予備調査トレンチ
出土遺物（1/4・1/2）…… 125
第98図　Ⅳ区その他出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 127
第99図　Ⅳ区その他出土遺物(2)（1/2）…… 128
第100図　Ⅴ区その他出土遺物（1/4・1/2）…… 129
第101図　遺構変遷図（1/1,000）…… 131～132

池下遺跡

第１図　調査区割図（1/1,000）…… 134
第２図　Ⅰ区遺構配置図（1/200）…… 135
第３図　Ⅱ区遺構配置図（1/200）…… 136
第４図　Ⅲ区遺構配置図（1/200）…… 137
第５図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）…… 138
第６図　Ⅰ区土層断面図(1)（1/40）…… 139
第７図　Ⅰ区土層断面図(2)（1/40）…… 140
第８図　Ⅰ区土層断面図(3)（1/40）…… 141
第９図　Ⅱ区土層断面図(1)（1/40）…… 142
第10図　Ⅱ区土層断面図(2)（1/40）…… 143
第11図　Ⅱ区土層断面図(3)（1/40）…… 144
第12図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(1)（1/40）…… 145
第13図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(2)（1/40）…… 146
第14図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(3)（1/40）…… 147
第15図　Ⅰ区SD105・106・Ⅱ区SD215～218
断面図（1/40）、Ⅰ区SD105・
Ⅱ区SD215・218出土遺物（1/4・1/2）…… 149
第16図　Ⅰ区SR11断面図（1/40）、
SR11下層出土遺物（1/4・1/2）…… 151
第17図　Ⅰ区SR11出土遺物（1/4・1/2）…… 152
第18図　Ⅰ区SR12・13断面図(1)（1/40）…… 153
第19図　Ⅰ区SR12・13断面図(2)（1/40）…… 154
第20図　Ⅰ区SD108断面図（1/40）…… 154
第21図　Ⅰ区SD101断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 155
第22図　Ⅱ区SD201・205断面図（1/40）…… 156
第23図　Ⅱ区SD201出土遺物（1/4・1/2）…… 157
第24図　Ⅱ区SD205出土遺物（1/4・1/2）…… 158
第25図　Ⅱ区SD211断面図（1/40）…… 159
第26図　Ⅱ区SD211出土遺物（1/4・1/2）…… 160
第27図　Ⅱ区SD214断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 161
第28図　Ⅲ区SD301～303断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 162
第29図　Ⅲ区SD304～306断面図（1/40）、
SD306出土遺物（1/4・1/2）…… 163
第30図　Ⅱ区SR21断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 165
第31図　Ⅱ区SK208平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 166
第32図　Ⅱ区SE21平・断面図（1/20）…… 167
第33図　Ⅱ区SE21出土遺物（1/4）…… 168
第34図　Ⅲ・Ⅳ区SD312断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 168
第35図　Ⅰ区SA12平・断面図（1/60）…… 169
第36図　Ⅲ区SB31・SA31平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 169
第37図　Ⅲ区SB32平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 171
第38図　Ⅲ区SB33・SA32平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 172
第39図　Ⅲ区SB34平・断面図（1/60）…… 173
第40図　Ⅲ区SB35平・断面図（1/60）…… 173
第41図　Ⅲ区SB36平・断面図（1/60）…… 174
第42図　Ⅲ区SB37・38・SA33平・断面図（1/60）…… 175
第43図　Ⅲ区SB37・38・SA33出土遺物（1/4）…… 176
第44図　Ⅲ区SB39平・断面図（1/60）…… 176
第45図　Ⅳ区SB41平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 177
第46図　Ⅳ区SB42・SA41平・断面図（1/60）、
出土遺物（1/4）…… 178
第47図　Ⅰ区ピット出土遺物（1/4）…… 179
第48図　Ⅱ区ピット出土遺物（1/4）…… 179
第49図　Ⅲ・Ⅳ区ピット出土遺物（1/4）…… 180
第50図　Ⅳ区SE41平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 181
第51図　Ⅲ区ST01平・断面図（1/10）…… 182
第52図　Ⅲ区ST01出土遺物（1/4・1/2）…… 183
第53図　Ⅲ区ST02平・断面図（1/10）…… 184

第54図　Ⅲ区ST02出土遺物（1/4・1/2）…… 185
第55図　Ⅱ区SK207平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 186
第56図　Ⅱ区SK210平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 187
第57図　Ⅲ区SK307～310平・断面図（1/40）、
SK308・310出土遺物（1/4）…… 188
第58図　Ⅲ区SK301・302・303・306・312・313・
SX310平・断面図（1/40）…… 189
第59図　Ⅰ区SX105平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 190
第60図　Ⅱ区SX201・202平・断面図（1/40）、
SX201出土遺物（1/4）…… 191
第61図　Ⅲ区SX301・305・306・SK311平・断面図
（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）…… 192
第62図　Ⅲ区SX303平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 193
第63図　Ⅲ区SX304・307～309平・断面図（1/40）、
SX308出土遺物（1/4）…… 194
第64図　Ⅲ区SX311・312・313平・断面図（1/40）、
SX313出土遺物（1/4）…… 195
第65図　Ⅱ区SD202断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 196
第66図　Ⅱ区SD210断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2）…… 197
第67図　Ⅳ区SD413断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 198
第68図　Ⅰ区SD109断面図（1/40）、
出土遺物（1/4）…… 198
第69図　Ⅱ区SD207・209、Ⅲ区SD307・308・311
断面図(1/40)、Ⅲ区SD311出土遺物(1/4)…… 198
第70図　Ⅰ区SA11平・断面図（1/60）…… 199
第71図　Ⅰ区SE11・SK101～103平・断面図(1/40)…… 200
第72図　Ⅰ区SK104～109平・断面図（1/40）…… 202
第73図　Ⅰ区SK110・111・
Ⅱ区SK204・211平・断面図（1/40）…… 203
第74図　Ⅱ区SK209平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/4・1/2・1/6）…… 204
第75図　Ⅲ区SD309・310断面図（1/40）、
SD309出土遺物（1/4）…… 205
第76図　Ⅲ区SK305平・断面図（1/40）、
出土遺物（1/2）…… 205
第77図　Ⅰ区SX101・103・104平・断面図（1/40）…… 206
第78図　Ⅰ区SD102～104断面図（1/40）、
SD103出土遺物（1/4）…… 207
第79図　Ⅱ区SD219断面図（1/40）…… 207
第80図　Ⅰ区出土遺物（1/4・1/2）…… 208
第81図　Ⅱ区出土遺物(1)（1/4・1/2）…… 209
第82図　Ⅱ区出土遺物(2)（1/4・1/2）…… 210
第83図　Ⅱ区出土遺物(3)（1/4・1/2）…… 211
第84図　Ⅲ区出土遺物（1/4・1/2）…… 212
第85図　Ⅳ区出土遺物（1/4・1/2）…… 213
第86図　遺構変遷図（1/1,000）…… 215

表　目　次

第１表　発掘調査及び整理作業の体制 …… 5
第２表　渡池・住吉地区予備調査
トレンチ一覧(1) …… 12
第３表　渡池・住吉地区予備調査
トレンチ一覧(2) …… 13
第４表　北内・池下遺跡における樹種同定結果 …… 219

付　　図

付図１　北内遺跡　遺構配置図　(1/200)
付図２　池下遺跡　遺構配置図　(1/200)

写 真 目 次

住吉遺跡、渡池跡

遺 構 写 真

写真１　Ⅰ区完掘状況　東から（図版１）
写真２　Ⅰ区西半部完掘状況　東から
写真３　Ⅱ区完掘状況　東から
写真４　Ⅱ区完掘状況　西から（図版１）
写真５　Ⅱ区SX01　南北断面その①　西から
写真６　Ⅱ区SX01　完掘状況　東から
写真７　堤防部　全景　東から
写真８　堤防部南半　全景　北から（図版２）
写真９　堤防部南半　全景　北から
写真10　堤防部　全景　西から
写真11　堤防部掘り下げ終了後　全景　北から
写真12　堤防部掘り下げ終了後　全景　北から
写真13　堤防部掘り下げ終了後　全景　北から(図版２)
写真14　堤防部　北壁土層断面　南から
写真15　堤防部　北壁土層断面　南から
写真16　堤防部北壁(上段)土層断面　南から（図版３）
写真17　堤防部北壁(上段)土層断面　南から（図版３）
写真18　堤防部北壁(上段)土層断面　南から（図版３）
写真19　堤防部北壁(上段)土層断面　南から
写真20　堤防部北壁(中段)土層断面　南から
写真21　堤防部北壁(中段)土層断面　南から（図版３）

遺 物 写 真

写真22　14トレンチSR01
写真23　Ⅰ区SB01－SP051
写真24　Ⅰ区SB02－SP082
写真25　Ⅱ区SX03（図版３）
写真26　19トレンチSX03（図版３）
写真27　堤防部北壁トレンチ

北 内 遺 跡

遺 構 写 真

写真１　Ⅲ区　完掘状況　南東から
写真２　Ⅲ区　完掘状況　南西から（図版４）
写真３　Ⅲ区　完掘状況　南東から
写真４　Ⅳ区　全景　東から（図版４）
写真５　Ⅱ・Ⅲ区　完掘状況　西から
写真６　Ⅴ区　上層完掘　北から
写真７　Ⅴ区　上層完掘　北から
写真８　Ⅰ区　西壁土層断面　東から（図版５）
写真９　Ⅱ区　東壁土層断面　西から
写真10　Ⅱ区　調査区北壁土層断面　南から
写真11　Ⅲ区　北壁土層断面　南から
写真12　Ⅳ区　調査区西壁土層断面　東から
写真13　Ⅲ区SK03・04　土層断面　西から
写真14　Ⅲ区SK06　土層断面　南から
写真15　Ⅳ区SK12 a-a' 土層断面　北から
写真16　Ⅳ区SK12 c-c' 土層断面　南から
写真17　Ⅳ区SK12 d-d' 土層断面　東から
写真18　Ⅳ区SK12　遺物出土状況　南西から
写真19　Ⅳ区ST02　土層断面　北から（図版５）
写真20　Ⅳ区SK12・ST02　遺物出土状況　北から（図版５）
写真21　Ⅳ区ST02　完掘状況　南東から
写真22　Ⅲ区SK18　土層断面　東から
写真23　Ⅲ区SK18　完掘状況　北東から（図版５）
写真24　Ⅲ区SK18　遺物出土状況　北から
写真25　Ⅲ区SK20　完掘状況　北から
写真26　Ⅲ区SK20　遺物出土状況　西から（図版５）
写真27　Ⅲ区SK20　遺物出土状況　西から
写真28　Ⅲ区SK05　土層断面　南東から
写真29　Ⅲ区SK05　土層断面　北東から

写真30　Ⅲ区SK05　遺物出土状況　南西から（図版５）
写真31　Ⅲ区SK15 a-a' 土層断面　東から
写真32　Ⅲ区SK15　遺物出土状況　北から（図版６）
写真33　Ⅲ区SK34　遺物出土状況　西から
写真34　Ⅲ区SK34　土層断面　西から
写真35　Ⅳ区SK36 a-a' 土層断面　北西から
写真36　Ⅳ区SK36　遺物出土状況　南西から（図版６）
写真37　Ⅳ区SK41　完掘状況　南から
写真38　Ⅳ区SE01最下層　遺物出土状況　東から
写真39　Ⅳ区SE01　土層断面　東から
写真40　Ⅳ区SE01　完掘状況　北から
写真41　Ⅳ区SE02　土層断面　北から
写真42　Ⅳ区SE02　遺物出土状況　北から（図版６）
写真43　Ⅲ区ST01　土層断面　東から（図版６）
写真44　Ⅲ区ST01　棺痕跡検出状況　東から
写真45　Ⅲ区ST01　遺物出土状況　北から
写真46　Ⅲ区ST01　棺痕跡断面　北から
写真47　Ⅲ区ST01　棺痕跡検出状況　東から（図版６）
写真48　Ⅲ区ST01　遺物出土状況　東から
写真49　Ⅲ区ST01　完掘状況　東から
写真50　Ⅲ区SD025　遺物出土状況　南東から
写真51　Ⅲ区SD025　土層断面　北から
写真52　Ⅲ区　調査区南壁土層断面
（SD110・SD025部分）北から
写真53　Ⅲ区SD110　遺物出土状況　北から
写真54　Ⅲ区SD110 c-c' 土層断面　北から
写真55　Ⅲ区SD110中層　遺物出土状況　南から
写真56　Ⅲ区SD110上層　遺物出土状況　北から
（図版６）
写真57　Ⅲ区SD110上層　遺物出土状況　西から
（図版７）
写真58　Ⅲ区SD110上層　遺物出土状況　西から
写真59　Ⅴ区SR03　遺物出土状況　北東から
写真60　Ⅴ区SR03　遺物出土状況
写真61　Ⅴ区SR03南壁土層断面　北から
写真62　Ⅰ区SD001　検出状況　南東から
写真63　Ⅰ区SD001最下層　遺物出土状況　南から
写真64　Ⅰ区SD001 a-a' 土層断面　西から（図版７）
写真65　Ⅰ区SD103 a-a' 土層断面　東から
写真66　Ⅰ区SD103　完掘状況　北から
写真67　Ⅰ区SD001・SD103交差部分検出状況　北東から
写真68　Ⅱ区SD011 a-a' 土層断面　北から
写真69　Ⅱ区SD011 a-a' 土層断面　北から
写真70　Ⅱ区SD011 b-b' 土層断面　北から（図版７）
写真71　Ⅲ区SD022 a-a' 土層断面　北西から
写真72　Ⅲ区SD023 a-a' 土層断面　北西から
写真73　Ⅲ区SD024 a-a' 土層断面　北西から
写真74　Ⅲ区SD028　土層断面　北東から
写真75　Ⅲ区SD028南端部分　遺物出土状況　北から
写真76　Ⅲ区SP050　遺物出土状況　東から
写真77　Ⅴ区SD111土層断面　北から
写真78　Ⅲ区SB01　完掘状況　南西から（図版７）
写真79　Ⅲ区SK32　土層断面　東から
写真80　Ⅳ区SB02・03・04　完掘状況　東から（図版７）
写真81　Ⅳ区SB02　完掘状況　南から
写真82　Ⅳ区SB03　完掘状況　南から
写真83　Ⅳ区SD026 a-a' 土層断面　西から
写真84　Ⅳ区SD026西辺部分　遺物出土状況
北から（図版７）
写真85　Ⅳ区SD026 b-b' 土層断面　西から
写真86　Ⅳ区SB03－SP158土層断面　南から
写真87　Ⅳ区SB04　完掘状況　東から
写真88　Ⅲ区SK53　検出状況　東から
写真89　Ⅲ区SK53　土層断面　西から
写真90　Ⅴ区SX07　完掘状況　東から
写真91　Ⅳ区SK08　土層断面　北から
写真92　Ⅳ区SK09　土層断面　北から
写真93　Ⅳ区SD072 a-a' 土層断面　南から
写真94　Ⅳ区SD073 a-a' 土層断面　南から
写真95　Ⅳ区SD080 a-a' 土層断面　南から
写真96　Ⅳ区SD059　土層断面　東から
写真97　Ⅳ区SD072・073　土層断面　北から
写真98　Ⅳ区SD035　土層断面　東から
写真99　Ⅳ区SD052　土層断面　北から
写真100　Ⅳ区SD052　土層断面　南から
写真101　Ⅳ区SD043・044・045　土層断面　北から
写真102　Ⅳ区SD057　土層断面　東から
写真103　Ⅳ区SD058　土層断面　北から
写真104　Ⅳ区SD049　土層断面　北から
写真105　Ⅳ区SD056　土層断面　南から
写真106　Ⅲ区SD013 a-a' 土層断面　北から
写真107　Ⅱ区SD013 b-b' 土層断面　北から
写真108　Ⅱ区SD013 c-c' 土層断面　北から
写真109　Ⅱ区C9グリッドc3ブロック
遺物出土状況　東から

写真110　Ⅱ区C9グリッドd3ブロック
遺物出土状況　東から
写真111　Ⅱ区C9グリッドc3ブロック
遺物出土状況　東から
写真112　Ⅱ区C9グリッド゛c3ブロック
遺物出土状況　東から
写真113　Ⅱ区C9グリッドc2ブロック
遺物出土状況　東から
写真114　Ⅲ区C8グリッドb5ブロック　土器・
礫集中部検出状況　北東から
写真115　Ⅲ区　包含層　遺物出土状況　南から

遺物写真

写真116　Ⅴ区SR02上位（図版８）
写真117　Ⅲ区SK03
写真118　Ⅲ区SK04
写真119　Ⅲ区SK03・04
写真120　Ⅲ区SK06
写真121　Ⅳ区SK12(1)
写真122　Ⅳ区SK12(2)
写真123　Ⅳ区SK12(3)（図版８）
写真124　Ⅲ区SK18(1)（図版８）
写真125　Ⅲ区SK18(2)
写真126　Ⅳ区SK19
写真127　Ⅲ区SK20
写真128　Ⅲ区SK15(1)
写真129　Ⅲ区SK15(2)
写真130　Ⅲ区SK15(3)
写真131　Ⅲ区SK15(4)
写真132　Ⅲ区SK34
写真133　Ⅳ区SK36
写真134　Ⅲ区SK33
写真135　Ⅳ区SE01(1)
写真136　Ⅳ区SE01(2)
写真137　Ⅳ区SE02(1)
写真138　Ⅳ区SE02(2)
写真139　Ⅲ区SD025(1)
写真140　Ⅲ区SD025(2)
写真141　Ⅲ区SD110下層
写真142　Ⅲ区SD110中層(1)
写真143　Ⅲ区SD110中層(2)
写真144　Ⅲ区SD110上層(1)
写真145　Ⅲ区SD110上層(2)
写真146　Ⅲ区SD110その他
写真147　Ⅰ区SD001下層
写真148　Ⅰ区SD103(1)
写真149　Ⅰ区SD103(2)
写真150　Ⅰ区SD103(3)
写真151　Ⅰ区SD103(4)（図版９）
写真152　Ⅰ区SD001・103・SR01
写真153　Ⅱ区SD011下層
写真154　Ⅲ区SD022～024
写真155　Ⅲ区SD028
写真156　Ⅳ区SP273
写真157　Ⅳ区SD084
写真158　Ⅳ区SB03
写真159　Ⅳ区SD026（図版９）
写真160　Ⅳ区SK08
写真161　Ⅳ区SK09
写真162　Ⅳ区SD056
写真163　Ⅲ区SD020
写真164　Ⅱ区包含層(1)
写真165　Ⅱ区包含層(2)
写真166　Ⅱ区包含層(3)
写真167　Ⅱ区包含層(4)
写真168　Ⅱ・Ⅲ区包含層
写真169　Ⅲ区包含層C8(1)
写真170　Ⅲ区包含層C8(2)
写真171　Ⅲ区包含層D7（図版９）
写真172　Ⅲ区包含層
写真173　Ⅴ区包含層(1)
写真174　Ⅴ区包含層(2)
写真175　Ⅴ区包含層(3)
写真176　Ⅴ区包含層(4)

池下遺跡

遺構写真

写真１　Ⅰ区完掘状況　東から
写真２　Ⅱ区完掘状況　西から
写真３　Ⅱ区完掘状況　東から（図版10）
写真４　Ⅱ区東部完掘状況　東から
写真５　Ⅲ区完掘状況　北から（図版10）
写真６　Ⅲ区完掘状況　北から（図版11）
写真７　Ⅳ区完掘状況　西から
写真８　Ⅳ区西部完掘状況　西から（図版11）
写真９　Ⅱ区東壁土層断面　西から
写真10　Ⅲ・Ⅳ区南壁土層断面　北から
写真11　Ⅱ区SD215～217土層断面　南から
写真12　Ⅱ区SD218　土層断面　西から
写真13　Ⅱ区SD218　土層断面　東から
写真14　Ⅰ区SD101 a-a' 土層断面　北から
写真15　Ⅰ区SD101土層断面　北から
写真16　Ⅱ区SD201・205トレンチ　東から
写真17　Ⅱ区SD201・205トレンチ　北から
写真18　Ⅱ区SD201・205土層断面　西から
写真19　Ⅱ区SD205　完掘状況　北東から（図版12）
写真20　Ⅱ区SD211　土層断面　南から
写真21　Ⅱ区SD211　南土層断面　南から
写真22　Ⅱ区SD211　北土層断面　南から
写真23　Ⅱ区SD211　完掘状況　北から
写真24　Ⅱ区SD214　土層断面　南から
写真25　Ⅲ区SD301・302・303トレンチ c-c' 土層断面　西から
写真26　Ⅲ区SD301　土層断面 c-c'　西から
写真27　Ⅲ区SD303　土層断面 a-a'　南から
写真28　Ⅲ区SD304　土層断面　西から
写真29　Ⅲ区SD304　土層断面　南から
写真30　Ⅲ区SD305　土層断面　南西から
写真31　Ⅳ区SD305　土層断面　北東から
写真32　Ⅲ区SD306　土層断面
写真33　Ⅲ区SD306　土層断面　西から
写真34　Ⅱ区SK208　完掘状況　南から
写真35　Ⅱ区SE21　完掘状況　南から
写真36　Ⅱ区SE21　土層断面　南から（図版12）
写真37　Ⅱ区SE21　遺物出土状況　南から
写真38　Ⅱ区SE21　遺物出土状況　西から
写真39　Ⅰ区SP014　土層断面　南から
写真40　Ⅲ区SB31　北から（図版12）
写真41　Ⅳ区SB41　北から
写真42　Ⅳ区SB42　北から
写真43　Ⅳ区SB42　完掘状況　西から（図版12）
写真44　Ⅲ区SP218　遺物出土状況　西から
写真45　Ⅲ区SP217　遺物出土状況　東から
写真46　Ⅳ区SP667　遺物出土状況　南から
写真47　Ⅳ区SE41　完掘状況　南から
写真48　Ⅳ区SE41　南壁土層断面　南から
写真49　Ⅳ区SE41　土層断面　南から
写真50　Ⅲ区ST01　人骨出土状況　東から
写真51　Ⅲ区ST01　土層断面　南から（図版12）
写真52　Ⅲ区ST01　土層断面　南から
写真53　Ⅲ区ST01　土層断面　西から
写真54　Ⅲ区ST01　土層断面　北から（図版12）
写真55　Ⅲ区ST01　人骨出土状況　南から
写真56　Ⅲ区ST01　人骨出土状況　南から（図版13）
写真57　Ⅲ区ST01　人骨出土状況　東から
写真58　Ⅲ区ST01　底板検出状況　南から（図版13）
写真59　Ⅲ区ST01　遺物出土状況　東から
写真60　Ⅲ区ST01　遺物出土状況　南から（図版13）
写真61　Ⅲ区ST01　遺物出土状況　南から
写真62　Ⅲ区ST01　人骨・銭出土状況　東から（図版14）
写真63　Ⅲ区ST01　遺物出土状況（銭）　東から
写真64　Ⅲ区ST01　人骨出土状況　東から
写真65　Ⅲ区ST01　遺物出土状況（銭）　南から
写真66　Ⅲ区ST02　土層断面　南から（図版15）
写真67　Ⅲ区ST02　土層断面　南から
写真68　Ⅲ区ST02　土層断面　北から
写真69　Ⅲ区ST02　人骨出土状況　西から
写真70　Ⅲ区ST02　人骨・遺物出土状況　北から（図版14）
写真71　Ⅲ区ST02　人骨（脚部）出土状況　東から
写真72　Ⅲ区ST02　人骨（膝部）出土状況　東から
写真73　Ⅲ区ST02　人骨（頭部）出土状況　東から
写真74　Ⅲ区ST02　遺物出土状況　北から（図版15）
写真75　Ⅲ区ST02　人骨出土状況　西から

写真76　Ⅲ区ST02　底石出土状況　南から
写真77　Ⅲ区ST02　遺物出土状況　東から（図版15）
写真78　Ⅲ区ST02　遺物出土状況　東から（図版15）
写真79　Ⅲ区ST02　鉄刀出土状況　南から
写真80　Ⅱ区SK210　完掘状況　東から
写真81　Ⅲ区SK308　土器出土状況　東から
写真82　Ⅲ区SK308　土層断面　西から
写真83　Ⅲ区SK308　土器出土状況　西から
写真84　Ⅰ区SX105　土層断面　北東から
写真85　Ⅳ区SD312①土層断面　北から
写真86　Ⅲ区SD313　土層断面　南から
写真87　Ⅳ区SD413　土層断面　南から
写真88　Ⅰ区SD109　土層断面　西から
写真89　Ⅲ区SD307　土層断面　南から
写真90　Ⅰ区SE11　土層断面　西から
写真91　Ⅱ区　SK209　土層断面　東から（図版15）

遺物写真

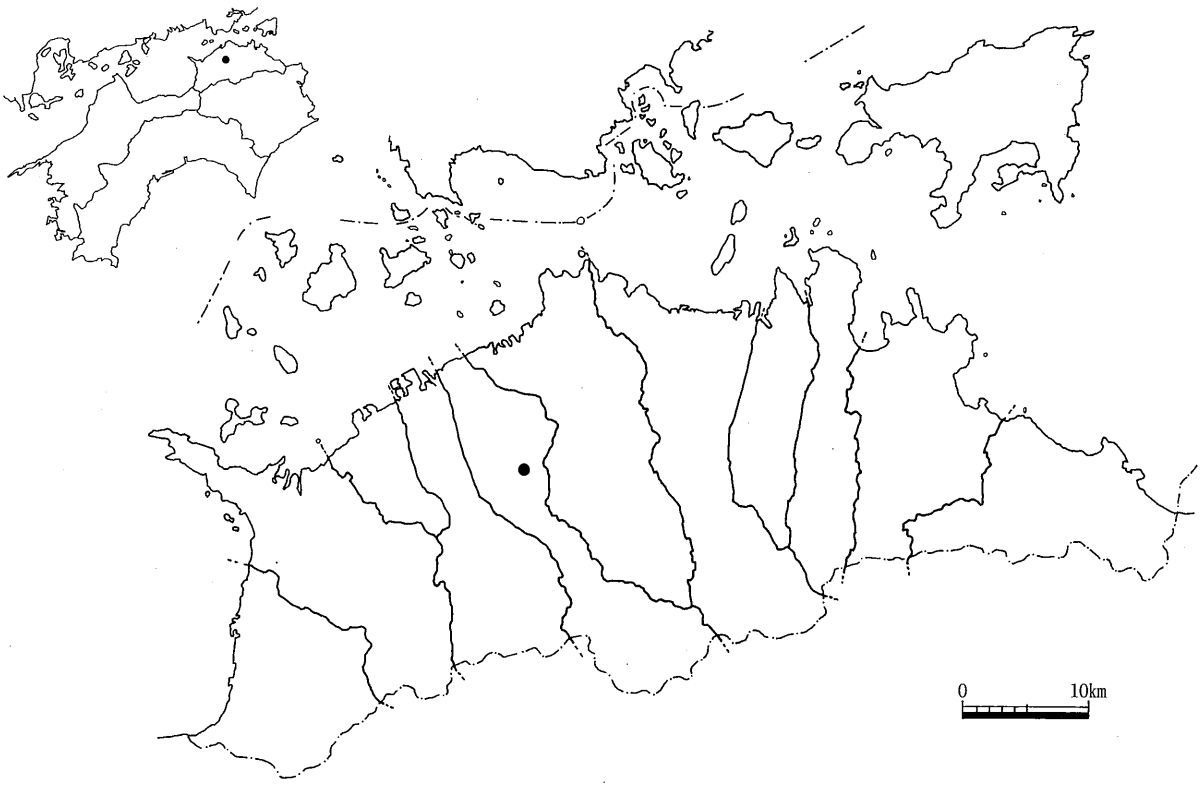
写真92　Ⅰ区SR11下層(1)
写真93　Ⅰ区SR11下層(2)
写真94　Ⅰ区SR11中層(1)
写真95　Ⅰ区SR11中層(2)
写真96　Ⅰ区SR11中層(3)
写真97　Ⅰ区SR11中層(4)
写真98　Ⅰ区SR11中層(5)
写真99　Ⅰ区SR11上層
写真100　Ⅱ区SD201第5層
写真101　Ⅱ区SD201第3層・第1層・層位不明
写真102　Ⅱ区SD205上層
写真103　Ⅱ区SD05上位
写真104　Ⅱ区SD211下層
写真105　Ⅱ区SK208
写真106　Ⅱ区SE21(1)
写真107　Ⅱ区SE21(2)
写真108　Ⅱ区SE21(3)
写真109　Ⅲ・Ⅳ区SD312
写真110　Ⅳ区SD312
写真111　Ⅲ区SB33－SP086
写真112　Ⅲ区SB37－SP447
写真113　Ⅳ区SB41－SP591
写真114　Ⅰ区SP123
写真115　Ⅲ区SP217
写真116　Ⅲ区SP322
写真117　Ⅲ区SP339
写真118　Ⅳ区SP667
写真119　Ⅳ区SE41(1)
写真120　Ⅳ区SE41(2)
写真121　Ⅲ区ST01(1)（図版16）
写真122　Ⅲ区ST01(1)
写真123　Ⅲ区ST02(1)（図版16）
写真124　Ⅲ区ST02(2)
写真125　Ⅲ区ST02(3)
写真126　Ⅱ区SK210
写真127　Ⅲ区SK308
写真128　Ⅰ区SX105
写真129　Ⅲ区SX313
写真130　Ⅱ区SD210
写真131　Ⅳ区SD413
写真132　Ⅰ区SD109
写真133　Ⅱ区SK209
写真134　Ⅰ区SD103
写真135　Ⅱ区包含層(1)
写真136　Ⅱ区包含層(2)
写真137　Ⅱ区包含層(3)
写真138　Ⅳ区包含層

第１章　調査に至る経緯と経過

国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財の保護については、これまで香川県教育委員会と国土交通省四国地方整備局の間で適宜協議を行い、適切な保護に努めてきた。中讃地域の主要幹線道路として整備が進められている一般国道32号バイパスのうち、綾歌バイパスと綾南バイパスについては、平成７年12月20日付建四香第1755号で埋蔵文化財の所在の有無および取り扱いについての照会があり、10地区37ヶ所の埋蔵文化財の所在を回答している。

平成８年度には、このうち津畑地区において香川県教育委員会事務局文化行政課による試掘調査で遺跡が確認されたため、教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で平成９年４月１日付に締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにより、平成９・10年度に発掘調査が実施された（佐古川・窪田遺跡）。平成９年度には財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、国道32号綾歌バイパスのうち、栗熊地区西半部と馬指地区について予備調査を行っている。その結果、馬指地区の東部は馬指川の氾濫源により遺構は認められなかったものの、中央から西部にかけては微高地に相当し、弥生時代の集落が広がることが確認された（北内遺跡）。なお、栗熊地区西半部については、微高地に挟まれた幅広い谷部に当たることが想定され、遺跡は確認できなかった。

平成10年度には、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で４月１日付に締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、栗熊地区の予備調査のうち、平成９年度に実施できなかった東半部の予備調査と予備調査で確認された北内遺跡について発掘調査が行われた。栗熊地区の予備調査では、西側では前年度同様谷部であることが確認され、近代まで湿地であったという地元の言い伝えが実証され、長く開発から取り残されていたことが判明した。東側では東大東川へ向けて微高地になっており、中世の遺構を検出したほか、縄文時代後期後半、弥生時代中期初頭の遺物包含層が確認され、次年度以降に本調査を行うこととなった（池



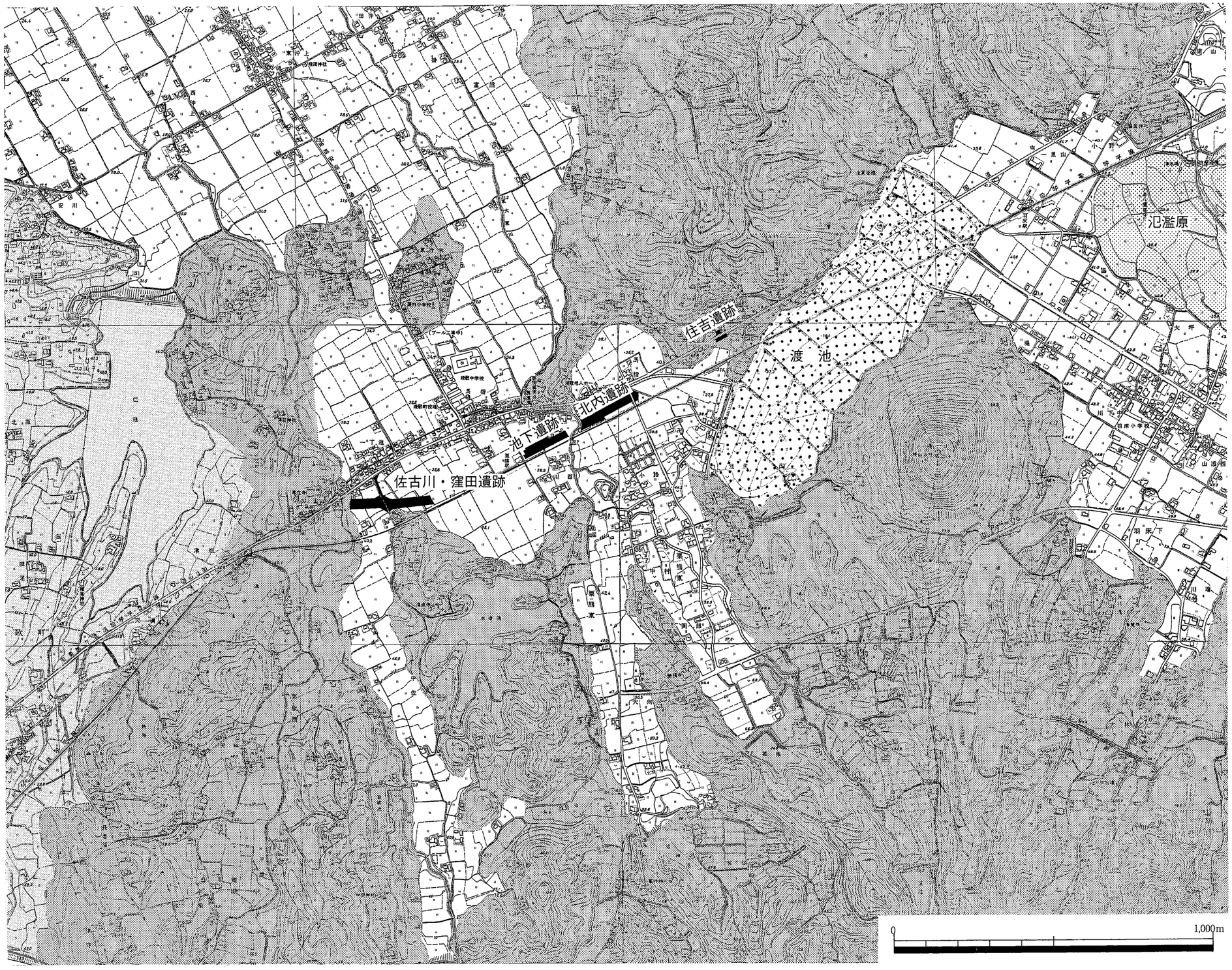
第１図　遺跡の位置(1)

下遺跡)。北内遺跡の発掘調査については、調査期間は平成10年７月27日～平成11年１月25日、調査面積は5,608㎡で実施された。

平成11年度には、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で４月１日付で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、前年度調査のできなかった北内遺跡Ⅴ区と、東大束川を挟んで西側に立地する池下遺跡の発掘調査が行われた。調査期間は、北内遺跡と池下遺跡を合わせて平成11年４月１日～12月31日までで、調査面積は北内遺跡が1,202㎡、池下遺跡は5,125㎡であった。

平成12年度には香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で４月１日付で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、一般国道32号綾歌バイパスのうち住吉地区・渡池地区についての予備調査が行われた。その結果、中世の遺構を確認した631㎡については住吉遺跡として本調査が実施された。調査期間は平成12年４月１日～４月30日までで、本調査もその期間内に実施した。

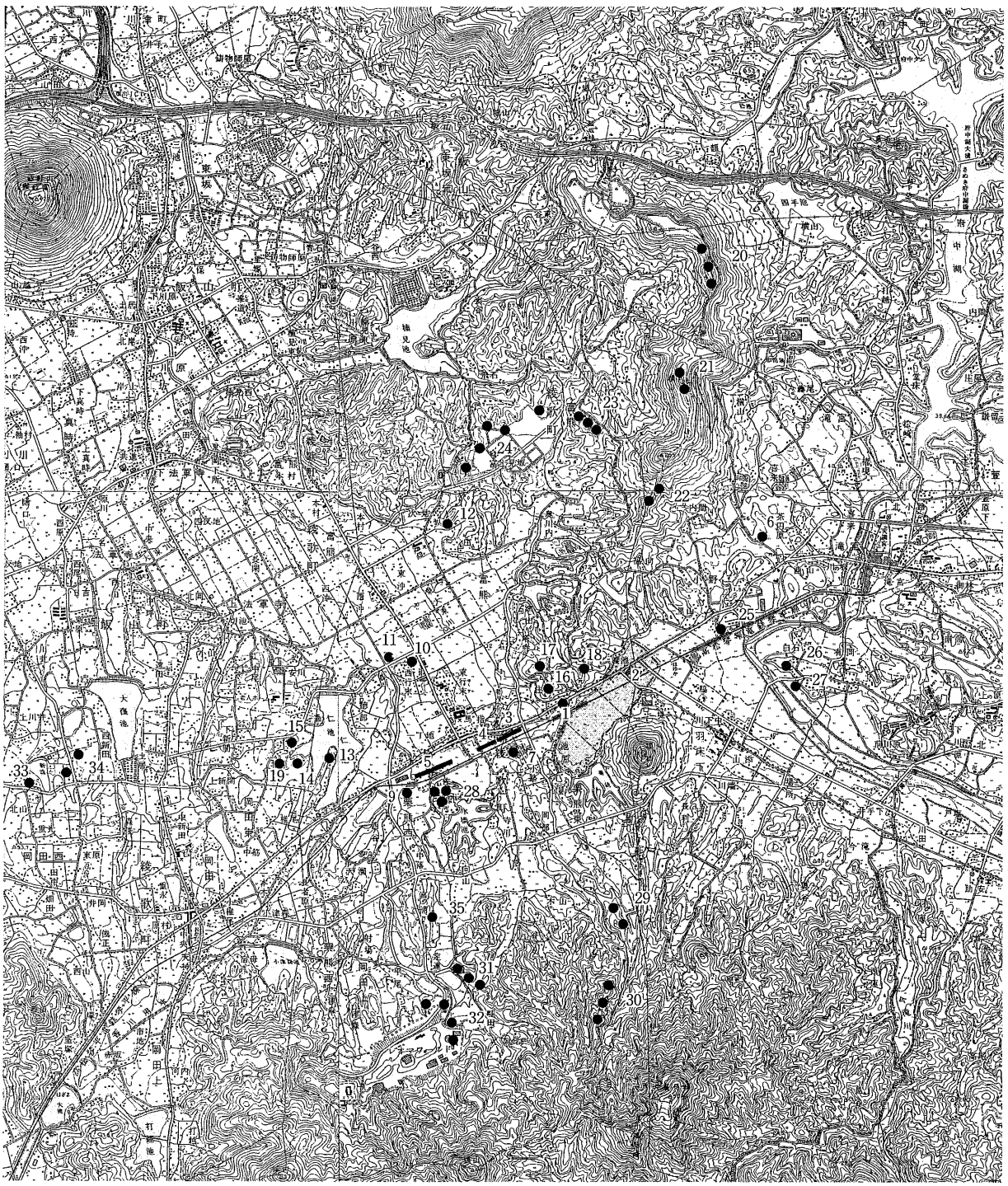
平成13年度については香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で４月１日付で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき、前年度用地買収が終了していなかった部分について平成13年４月１日～６月30日まで予備調査が実施されが、遺跡の広がりは認められなかったため、予備調査をもって調査を終了した。また、併行して渡池の堤防部分の調査（1,500㎡）も実施された。



第２図　遺跡の位置(2)(1/12,500)

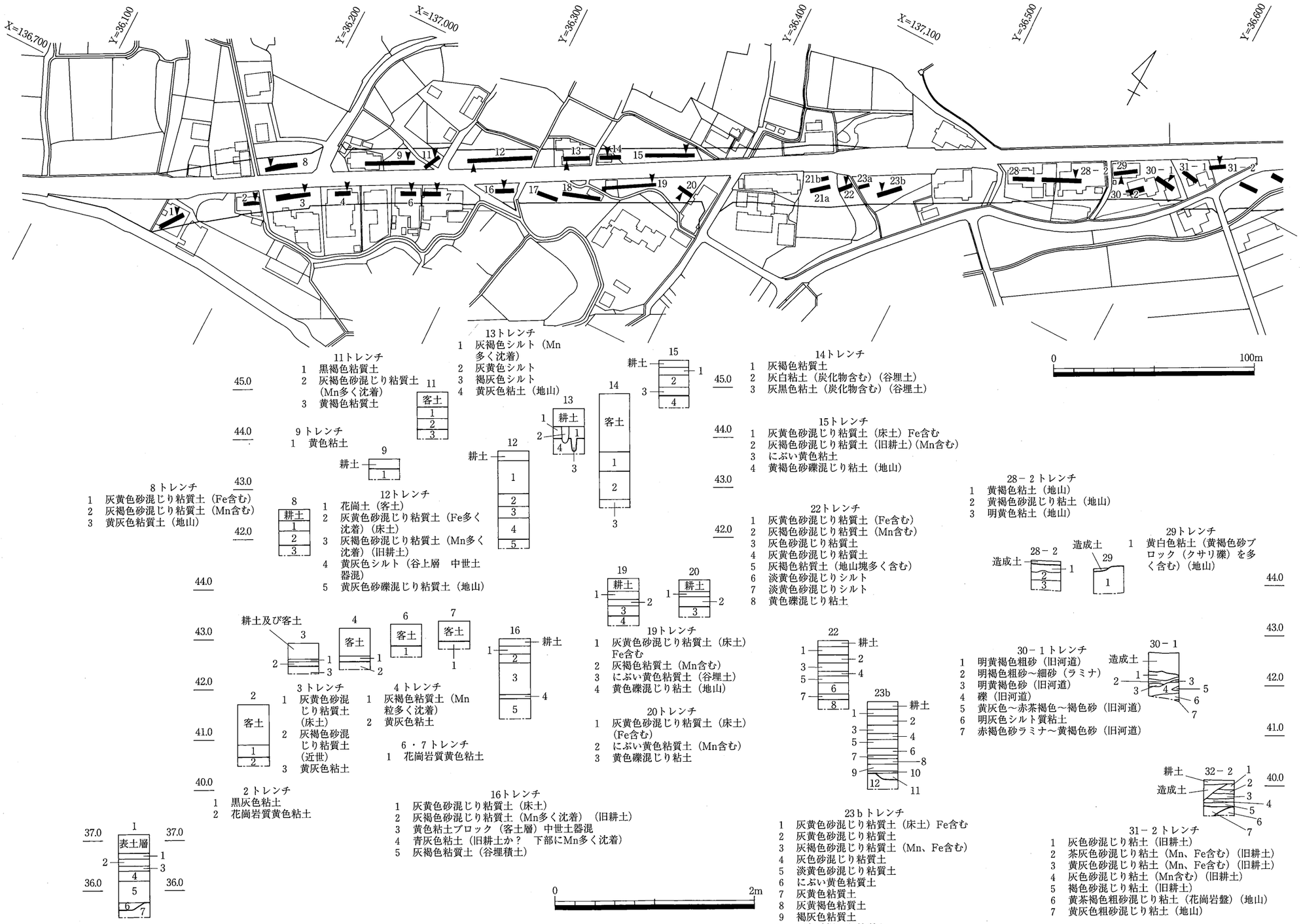
発掘調査												整理作業		
香川県教育委員会														
平成10年度			平成11年度			平成12年度			平成13年度			平成18年度		
総括	課長 課長補佐 副主幹	小原　克己 北原　和利 渡部　明夫	総括	課長 課長補佐 副主幹	小原　克己 小国　史郎 廣瀬　常雄	総括	課長 課長補佐 副主幹	小原　克己 小国　史郎 廣瀬　常雄	総括	課長 課長補佐	北原　和利 小国　史郎	総括	課長 課長補佐	三谷　雄治 中村　禎伸
総務	副主幹兼係長 係長 主査 主査	西村　隆史 中村　禎伸 三宅　陽子 松村　崇史	総務	係長 主査 主査	中村　禎伸 三宅　陽子 松村　崇史	総務	係長 主査 主事	中村　禎伸 三宅　陽子 亀田　幸一	総務・芸術 文化グループ	副主幹 主査 主事	中村　禎伸 須崎　陽子 亀田　幸一	総務・芸術 文化グループ	副主幹 副主幹 主任 主任主事	河内　一裕 谷　主昌 林　照代 脇　悠介
埋蔵文化財	係長 主任技師	西村　尋文 塩崎　誠司	埋蔵文化財	係長 文化財専門員 主任技師	西村　尋文 森　格也 塩崎　誠司	埋蔵文化財	係長 文化財専門員 文化財専門員	西岡　達哉 森　格也 宮崎　哲治	文化財 グループ	副主幹 主任 文化財専門員 文化財専門員	大山　真充 西岡　達哉 古野　徳久 宮崎　哲治	文化財 グループ	課長補佐 主任 文化財専門員 文化財専門員	藤好　史郎 山下　平重 信里　芳記 乗松　真也
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター												香川県埋蔵文化財センター		
総括	所長 次長	菅原　良弘 小野　善範	総括	所長 次長	菅原　良弘 川原　裕章	総括	所長 次長	菅原　良弘 （～10.31） 小原　克己 （11.1～） 川原　裕章	総括	所長 次長	小原　克己 川原　裕章	総括	所長 次長	渡部　明夫 榊原　正人
総務	副主幹兼係長 主査 参事	田中　秀文 新　一郎 別枝　義昭	総務	副主幹兼係長 副主幹兼係長 係長	六車　正憲 田中　秀文 新　一郎	総務	副主幹 副主幹 係長 主査 主任主事	六車　正憲 大西　誠治 新　一郎 山本　和代 高木　康晴	総務	参事 副主幹 係長 主査 主任主事	河野　浩征 大西　誠治 多田　敏弘 山本　和代 高木　康晴	総務	課長 主任 主任	野口　孝一 嶋田　和司 田中　千晶
調査	参事 主任文化財専門員 主任技師 技師 調査技術員	長尾　重盛 藤好　史郎 川井　国人 乗松　真也 中村　文枝	調査	参事 主任文化財専門員 文化財専門員 文化財専門員 調査技術員	長尾　重盛 藤好　史郎 島田　英夫 佐々木正之 東条　貴美	調査	参事 主任文化財専門員 主任技師 技師 調査技術員	長尾　重盛 藤好　史郎 信里　芳紀 松岡　昌 秋山　亮	調査	参事 主任文化財専門員 文化財専門員 技師 調査技術員	梅木　正信 藤好　史郎 山元　素子 石原　徹也 松田　朝由	資料普及課	課長 文化財専門員 整理作業員	廣瀬　常雄 山元　素子 猪木原美恵子 徳永　貴美 中山　尚子 西桶　右子 馬場　聡子 矢野ゆかり

第１表　発掘調査及び整理作業の体制

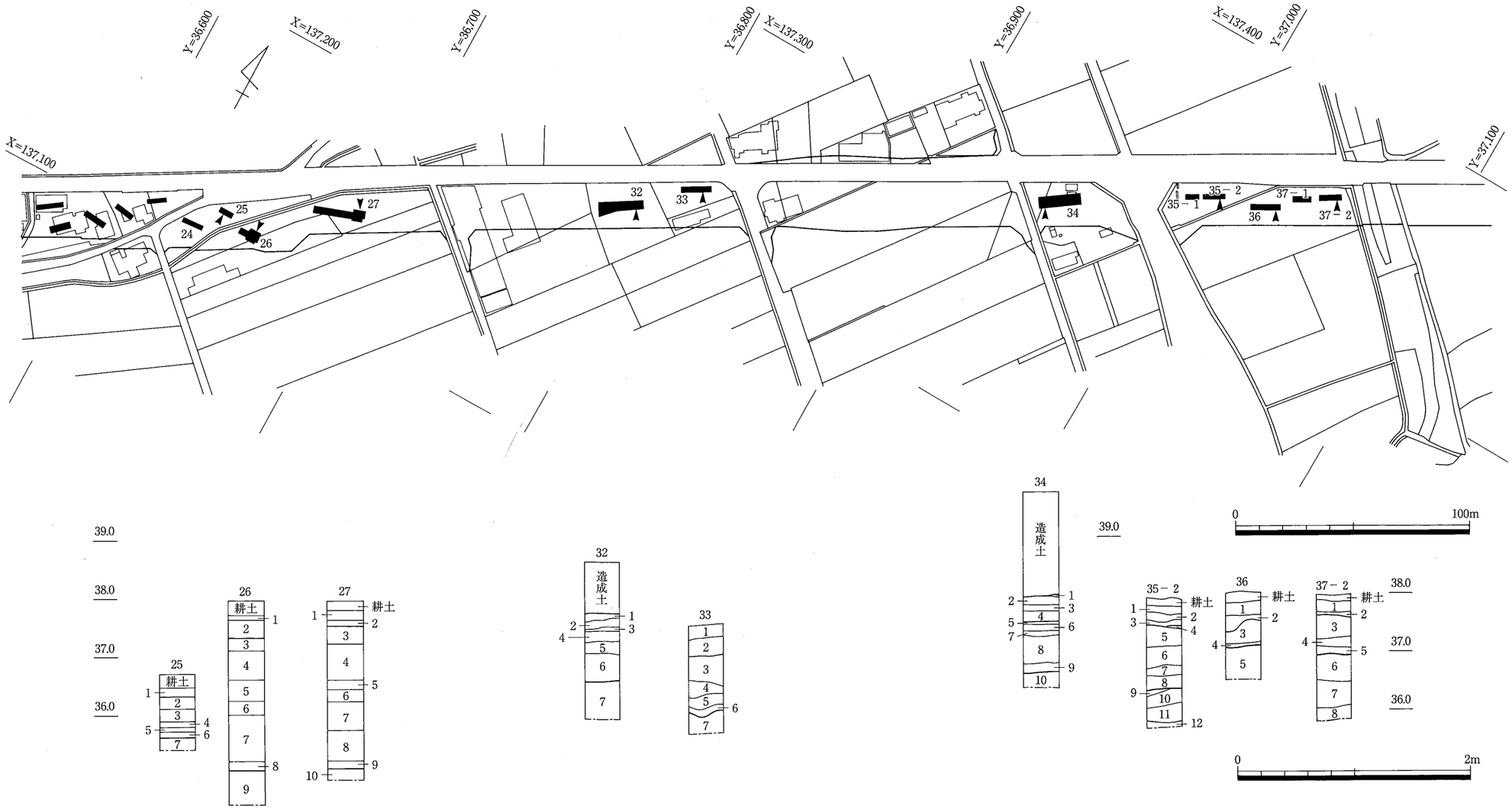


1	住吉遺跡	2	渡池跡	3	北内遺跡	4	池下遺跡
5	佐古川・窪田遺跡	6	白梅遺跡	7	栗熊遺跡	8	下土居遺跡
9	佐古川遺跡	10	行末遺跡	11	行末西遺跡	12	次見遺跡
13	椎尾東遺跡	14	椎尾遺跡	15	北原遺跡	16	快天山古墳
17	薬師山古墳	18	住吉神社頂上古墳	19	北原古墳	20	横山古墳群
21	横峰古墳群	22	奥川内古墳群	23	陳ノ丸古墳群	24	地神山古墳群
25	浦山古墳群	26	津頭西古墳	27	津頭東古墳	28	石塚山墳墓群
29	原竜王山古墳群	30	休場池東墳墓群	31	定蓮池東丘墳墓群	32	平尾墳墓群
33	車塚古墳	34	岡田弓塚古墳群	35	宇閇神社古墳	36	横山廃寺

第3図　周辺の遺跡（1/50,000）



第４図　渡池・住吉地区予備調査トレンチ配置図（1/2,000）・土層柱状図（1/40）(1)



25トレンチ
1 灰黄色砂混じり粘質土（床土）Fe含む
2 灰褐色砂混じり粘質土（Mn含む）
3 灰色砂混じり粘質土（Mn含む）
4 灰色粘土
5 黄褐色砂質土
6 黒褐色砂質土
7 黄色礫混じり粘土（地山）

26トレンチ
1 黄灰色砂混じり粘質土（2.5Y5/1）Fe多く沈着（床土）
2 黄灰色砂混じり粘質土（2.5Y6/1）Fe多く沈着（旧耕土）
3 青灰色粘土（5B6/1）Fe沈着（グライ化）
4 緑灰色粘土（5G6/1）Fe沈着（グライ化）
5 暗オリーブ灰色粘土（2.5GY4/1）少量の炭化物含む（グライ化）
6 灰色粗砂（N6/）
7 明緑灰色砂混じり粘土（5G7/1）（地山）
8 緑灰色粗砂（5G6/1）自然木含む
9 明緑灰色粘土（10G4/1）（地山）

27トレンチ
1 浅黄色砂混じり粘質土（2.5Y7/4）（床土）Fe含む
2 黄灰色砂混じり粘質土（2.5Y6/1）Fe含む（旧耕土）
3 緑灰色粘土（5G6/1）Fe含む（上層）
4 暗灰色粘土（5G4/1）（中層）
5 暗灰色粘土（10G4/1）（中層）
6 明緑灰色粘土（7.5Y6/1）（中層）
7 緑灰色粗砂（5G6/1）（下層）
8 灰色粗砂（7.5YR6/1）（下層）
9 黒褐色粘土（10YR3/1）植物遺体あり（最下層）
10 暗緑灰色粘土（10G4/1）

32トレンチ
1 黄色粘土（床土）
2 褐灰色粘土（植物遺体あり）
3 褐灰色粘土（やや明るい、植物遺体あり）
4 粘性灰色粘土
5 青灰色砂混じりシルト（渡池埋土）
6 明青灰色粘土（植物遺体あり）
7 青灰色粗砂混じり粘土（地山）

33トレンチ
1 暗青灰色砂混じり粘土（旧耕作土）
2 暗青灰色砂混じり粘土（砂多い）（旧耕作土）
3 青灰色粘土
4 緑灰色粘土
5 褐灰色粘土（植物遺体あり）
6 褐灰色粘土（植物遺体あり、５層と７層の土を一部巻き込む）
7 青灰色粘土（地山）

34トレンチ
1 青灰色砂質土（旧耕土）
2 灰色砂混じり粘土（旧耕土）
3 オリーブ灰色砂混じり粘土（旧耕土）
4 明灰色粘土（黄色土が斑状に混じる）
5 黄褐色粘土（上部にMn集積）
6 明灰色粘土
7 灰色粘土
8 明褐色粘土（９層の土が下の方にブロック状で混じる）
9 明青灰色粘土
10 明青灰色粗砂混じり粘土（よく締まる）（地山）

35－２トレンチ
1 黄灰色砂混じり粘土（Mn含む）（旧耕土）
2 明黄灰色粘土（Mn含む）
3 赤褐色粘土（Fe集積）
4 灰色粘土
5 褐灰色粘土
6 明青灰色粘土
7 灰色粗砂（ラミナ）
8 褐色粘土
9 暗灰色粘土（地山）
10 青灰色粘土（地山）
11 褐色シルト（地山）
12 青灰色粘土（粘性が強い）

36トレンチ
1 青灰色砂混じり粘土（旧耕土）
2 灰色砂混じり粘土（旧耕土）
3 青灰色粘土
4 褐灰色粘土（明青灰色粘土がブロック状に混じる）
5 青灰色粘土（よく締まる）

37－２トレンチ
1 青灰色砂混じり粘土
2 灰色砂混じり粘土
3 褐灰色粘土
4 灰色粘土（細砂一部ラミナ状、５層ブロック混）
5 緑灰色粘土
6 緑灰色粘土（よく締まる）（地山）
7 緑灰色シルト（地山）
8 灰色シルト（旧河道埋土か）

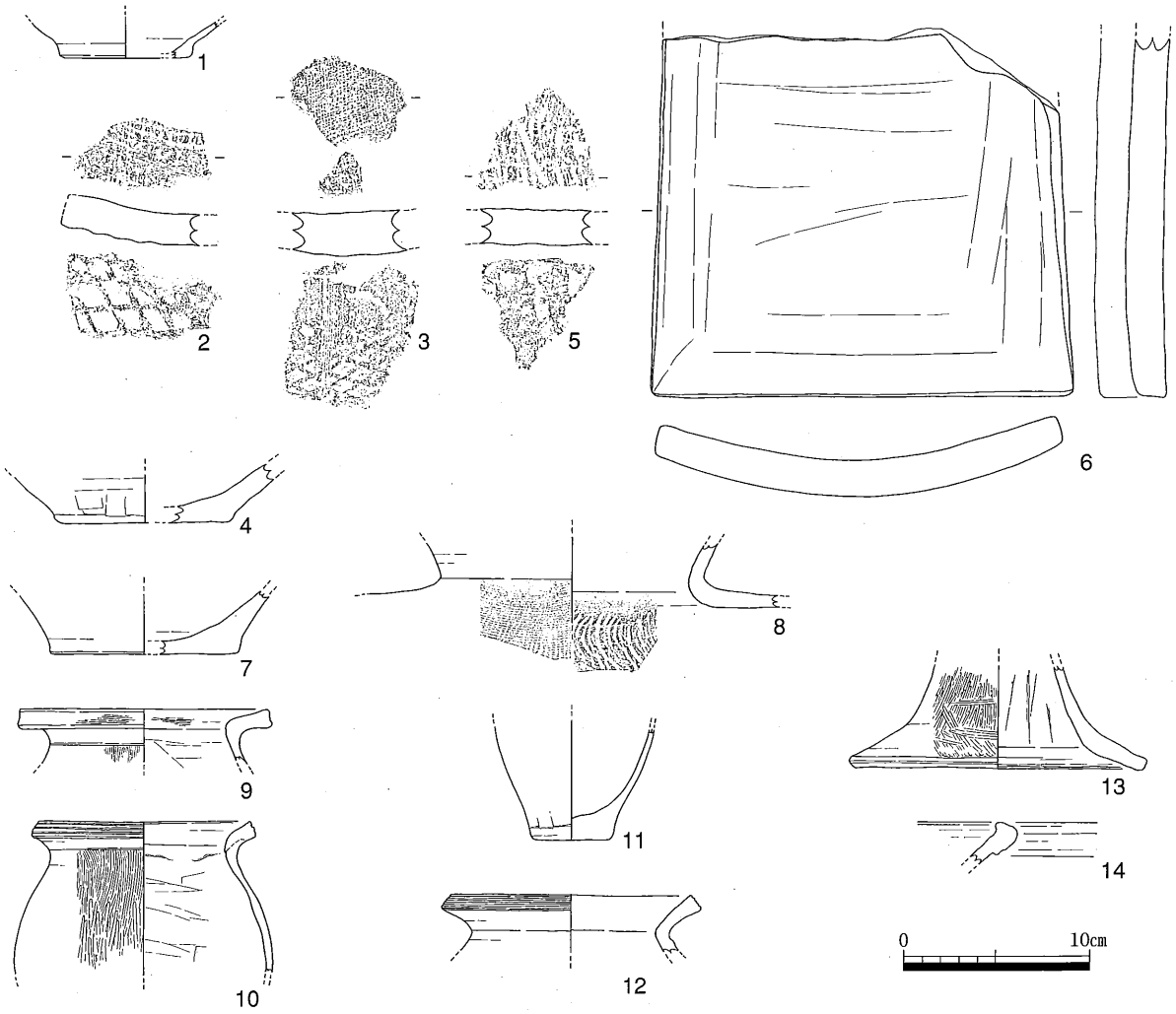
第５図　渡池・住吉地区予備調査トレンチ配置図（1/2,000）・土層柱状図（1/40）(2)

第２章　住吉遺跡、渡池跡の調査の成果

第１節　予備調査の結果（第４～６図）

渡池・住吉地区では合計37本のトレンチを設定した。１～23・28～31トレンチは住吉地区、24～27・32～37は渡池地区である。

住吉地区は、西は馬指川、北は丘陵地、東側は湿地帯で囲まれた地域である。１トレンチは馬指川の氾濫源で、青灰色粗砂の厚い堆積が認められる。２～10トレンチは北から延びる丘陵部の尾根上に相当し、層序は概ね耕作土、床土（灰黄色砂混粘質土）、旧耕土（灰褐色砂混粘質土）、黄灰色粘質土（ベース）であるが、場所によっては削平が著しく、造成土の下部にベースが認められる場合も多い。12～19トレンチは谷状に入り込む場所である。12・16トレンチは谷筋がもっとも深く切れ込む場所で、谷の埋積土が厚く堆積する。14・15・19トレンチでも谷の堆積土があるが、谷は浅いものであったようである。19トレンチでは谷が埋没した後の堆積土に中世後半の遺構が検出されている。13・17・18トレンチは浅い谷に挟まれた微高地上にあたり、中世後半の遺構が広がっていた（本調査実施）。21～23トレンチは北側の丘陵地の谷筋に当たる場所で、地割の乱れから渡池へと連続していくようである。これらのトレンチでは耕作土・床土の下部に谷の埋土と考えられる粘質



第６図　予備調査トレンチ出土遺物（1/4）

トレンチ番号	長さ(m)	幅(m)	地表面の標高(m)	土層堆積状況	遺構内容	遺　物	備　考	調査年度
1トレンチ	12.9	2.2	37.1	表土層・床土の下部は中世遺物包含層、青灰色砂層が堆積する	なし	土師質土器擂鉢・足釜	馬指川氾濫源	平成12年度
2トレンチ	8.1	1.4	41.7	造成土の下部はほぼ地山である花崗岩質黄色粘土	なし	なし	丘陵地（削平）	平成12年度
3トレンチ	16.6	2.3	42.8	造成土・耕作土、床土、灰褐色粘質土（旧耕土）、黄灰色粘土（ベース）	溝、ピット	布目瓦、土師質土器杯	丘陵地	平成12年度
4トレンチ	7.4	2.3	43.2	造成土の下部は灰褐色砂混粘質土（近世遺物包含層）、黄灰色粘土（ベース）	なし	土器小片	丘陵地	平成12年度
6トレンチ	7.0	1.7	43.3	造成土の下部はベースである花崗岩質黄灰色粘土	なし	土器小片	丘陵地（削平）	平成12年度
7トレンチ	9.0	1.7	43.3	造成土の下部はベースである花崗岩質黄灰色粘土	なし	なし	丘陵地（削平）	平成12年度
8トレンチ	15.0	2.0	42.6	耕作土、灰黄色（床土）・灰褐色砂混粘質土（旧耕土）、黄灰色粘質土（ベース）	ピット	弥生土器底部、サヌカイト片	丘陵地	平成12年度
9トレンチ	24.0	1.7	43.4	表土の下部は黄色粘土（ベース）	なし	なし	丘陵地（削平）	平成12年度
11トレンチ	9.3	1.5	44.9	造成土、黒褐色粘質土、灰褐色砂混粘質土（旧耕土）、黄褐色粘土（ベース）	なし	布目瓦片	丘陵地	平成12年度
12トレンチ	32.6	2.0	43.7	耕作土、造成土、灰黄色（床土）・灰褐色砂混粘質土（旧耕土）、谷埋土（中世遺物包含）、黄灰色砂礫混粘質土（ベース）	谷	土師質土器片	谷部分	平成12年度
13トレンチ	12.6	1.8	44.6	耕作土、灰褐色・灰黄色・褐灰色シルト、黄灰色粘土（ベース）	溝、ピット	土器小片、弥生土器	本調査実施	平成12年度
14トレンチ	10.3	1.6	44.9	造成土、灰褐色粘質土（旧耕土）、谷埋土	谷	平瓦（中世）	谷部分	平成12年度
15トレンチ	24.2	1.4	45.5	耕作土、灰黄色（床土）・灰褐色粘質土（旧耕土）、にぶい黄色粘土（谷埋土か）、黄褐色砂礫混粘土	なし	弥生土器 土師質土器擂鉢	浅い谷部分	平成12年度
16トレンチ	9.0	1.6	43.0	耕作土、灰黄色（床土）・灰褐色粘質土（旧耕土）、黄色粘土ブロック（中世土器混）、灰褐色粘質土（谷埋土）	なし	土師質土器	谷部分	平成12年度
17トレンチ	10.9	1.7	42.6	—	ピット	土器小片	本調査実施	平成12年度
18トレンチ	18.8	1.7	42.6	—	ピット、溝、土坑	土師質土器擂鉢・杯	本調査実施	平成12年度
19トレンチ	27.0	1.3	44.2	耕作土、灰黄色砂混粘質土、灰褐色粘質土、にぶい黄色粘質土（谷埋土）、黄色礫混粘土	溝、土坑、ピット、谷	弥生土器、土師質土器杯・小皿・擂鉢・足釜、青磁	浅い谷部分 炭焼窯遺構あり	平成12年度
20トレンチ	7.8	1.6	44.1	耕作土、灰黄色砂混粘質土（床土）、にぶい黄色粘質土、黄色礫混粘土	なし	なし		平成12年度
21aトレンチ	10.0	1.4	44.1	西部では耕作土の下部にベース 東部では灰黄色砂混粘質土（床土）、灰褐色・灰黄色・灰色砂混粘質土（谷埋土）	谷	近世瓦、陶磁器	東部は谷部分	平成12年度
21bトレンチ	3.3	1.9	—	—	なし	近世瓦、陶磁器		平成12年度
22トレンチ	7.0	1.5	43.0	耕作土、灰黄色砂混粘質土（床土）、灰褐色・灰黄色・灰色砂混粘質土・淡黄色シルト（谷埋土）、黄色礫混粘土	谷または自然河川	土師質土器杯、須恵器甕・壺、近世瓦、陶磁器	氾濫源	平成12年度
23aトレンチ	4.8	1.3	41.8	耕作土、灰黄色砂混粘質土（床土）、灰色・灰褐色・褐灰色砂混粘質土、にぶい黄色粘質土、黄灰色礫混粘質土	谷または自然河川	土師質土器小片、須恵器甕、近世瓦、陶磁器	氾濫源	平成12年度
23bトレンチ	12.9	1.9	41.7	耕作土、灰黄色砂混粘質土（床土）、灰褐色・灰色・淡黄色・にぶい黄色粘質土など、青灰色粘土、緑黄色粘土（ベース）	なし	弥生土器壺・甕、布目瓦、土師質土器足釜・擂鉢、須恵器甕、近世瓦、陶器	氾濫源	平成12年度

第2表　渡池・住吉地区予備調査トレンチ一覧(1)

トレンチ番号	長さ(m)	幅(m)	地表面の標高(m)	土層堆積状況	遺構内容	遺　物	備　考	調査年度
24トレンチ	9.3	1.9	—	—	なし	土師質土器小片	渡池跡	平成12年度
25トレンチ	6.2	2.3	36.7	耕作土、灰黄色（床土）・灰褐色・灰色砂混粘質土、灰色粘土、黄褐色砂質土、黒褐色砂質土、黄色礫混粘土（ベース）	なし	なし	渡池跡	平成12年度
26トレンチ	8.5	3.5	37.9	耕作土、黄灰色砂混粘質土（床土）、青灰色・緑灰色・暗オリーブ灰色粘土、灰色粗砂、明緑灰色砂混粘土（ベース）	なし	なし	渡池跡	平成12年度
27トレンチ	21.8	3.2	37.9	耕作土、床土、旧耕土、緑灰色・暗灰色・暗緑灰色粘土、緑灰色・灰色粗砂・黒褐色粘土、暗緑灰色粘土（ベース）	なし	須恵器甕、近世陶器	渡池跡	平成12年度
28－1トレンチ	11.2	2.1	45.0	造成土の下部はベースである明黄色砂混粘土	溝	磁器片	丘陵地	平成13年度
28－2トレンチ	19.3	1.9	44.4	造成土の下部はベースである黄褐色粘土	ピット	近世瓦片	丘陵地	平成13年度
29トレンチ	11.1	2.0	44.4	造成土の下部はベースである黄白色粘土	なし	なし	丘陵地	平成13年度
30－1トレンチ	10.1	2.0	42.7	造成土の下部は厚い砂層の堆積	なし	なし	旧河道	平成13年度
30－2トレンチ	8.5	2.3	43.0	造成土の下部はベースである明灰色シルト質粘土	なし	なし	丘陵地	平成13年度
31－1トレンチ	8.0	1.5	40.2	造成土の下部は黄褐色粗砂混粘土	なし	なし	丘陵地	平成13年度
31－2トレンチ	8.0	1.8	40.2	造成土の下部は近世までの包含層が堆積する。ベースは花崗岩盤	なし	なし	丘陵地	平成13年度
32トレンチ	19.4	3.3	38.7	床土の下部は褐灰・灰・青灰色粘土（植物遺体含む）	なし	土器小片	渡池跡	平成13年度
33トレンチ	13.2	3.0	37.5	耕作土の下部は青灰・緑灰・褐灰色粘土（植物遺体含む）	なし	土師質土器擂鉢	渡池跡	平成13年度
34トレンチ	18.1	4.4	39.7	造成土・旧耕土の下部は明灰色・灰色・明褐色粘土	なし	植物遺体	渡池跡	平成13年度
35－1トレンチ	5.0	1.9	38.0	耕作土の下部は褐灰・灰・青灰・暗灰色粘土で、ラミナ状堆積が所々見られる	なし	なし	渡池跡	平成13年度
35－2トレンチ	8.9	1.9	38.0	耕作土の下部は褐灰・灰・青灰・暗灰色粘土で、ラミナ状堆積が所々見られる	なし	なし	渡池跡	平成13年度
36トレンチ	12.5	2.0	38.0	耕作土の下部は青灰・褐灰・明青灰色粘土	なし	なし	渡池跡	平成13年度
37－1トレンチ	9.0	2.2	38.0	耕作土の下部は明灰色・灰色・明青灰色粘土	なし	なし	渡池跡	平成13年度
37－2トレンチ	7.1	2.3	38.0	耕作土の下部は明灰色・灰色・緑灰色粘土	なし	なし	渡池跡	平成13年度

第3表　渡池・住吉地区予備調査トレンチ一覧(2)

土層・シルト層が堆積し、湿地状態であったことが窺える。28～30トレンチは丘陵裾部に当り、削平が著しく、造成土の下部にはベースである花崗岩質の土が認められた。

24～27・32～37トレンチは渡池跡内に相当する。土層序は、耕作土の下部は青灰・緑灰・褐灰・明灰色などの粘土が概ね50～120cm程度堆積する。遺構は認められず、湿地であったことが裏付けられた。

１～14は予備調査時に出土した遺物である。１～３は３トレンチ出土遺物である。１は土師質土器杯底部小片で、10世紀代の遺物である。２・３は平瓦小片である。２は須恵質、３は土師質で、いずれも凸面に格子タタキ痕、凹面に布目を残す。１の土師質土器と概ね同時期と考えられる。４は８トレンチ出土遺物で、弥生土器底部である。５は11トレンチから出土した平瓦小片である。須恵質で、凸面は格子タタキ痕、凹面は布目痕を残す。２・３とほぼ同時期の遺物と考えられる。６は14トレンチから出土した平瓦である。土師質でほぼ完形である。調整の痕跡はほとんど残らない。７は15トレンチから出土した弥生土器である。壺の底部と考えられる。８～14は23トレンチから出土した遺物である。８は須恵器甕である。外面はカキ目が施され、７世紀代の遺物と考えられる。９～13は弥生土器である。９・10・12は甕、11は小型の壺の底部である。10・12には口縁端部には凹線が施され、いずれも弥生時代中期後半頃と考えられる。14は壺小片である。

第２節　遺構・遺物

１．Ｉ区の調査

丘陵裾部に位置する。予備調査で実施した17・18トレンチを拡張して調査区を設定した。調査区からは中世の掘立柱建物跡をはじめピット約130穴と、土坑跡、溝状遺構が検出された。

Ｉ区SB01（第７・８図）

Ｉ区西部で検出した掘立柱建物跡である。南部は調査区外へ延び、全体の規模は明らかではない。桁行４間（7.4m）以上、梁間１間（2.1m）で、面積は15.5㎡以上である。柱間は桁行が1.4～2.5m、梁間が2.1m、柱穴は円形で直径28～36cm、深さは22～38cmを測る。主軸方位はＮ14°Ｅである。柱穴のうちいくつかには柱材が残されていた。埋土中からは土師質土器、瓦片が出土した。

15・16は土師質土器小皿である。ともに体部は内湾しながら立ち上がり、16は底部外面に回転糸切り痕が残る。17は平瓦である。須恵質の焼成で、凹面には細かい布目痕跡が残る。凸面にはナデ以外の調整痕は残らない。18はSB01に近接して検出されたSP87から出土した平瓦片である。土師質の焼成で、調整は凹・凸面とも磨滅のため不明である。

遺構の時期は14世紀末～15世紀初頭と考えられる。

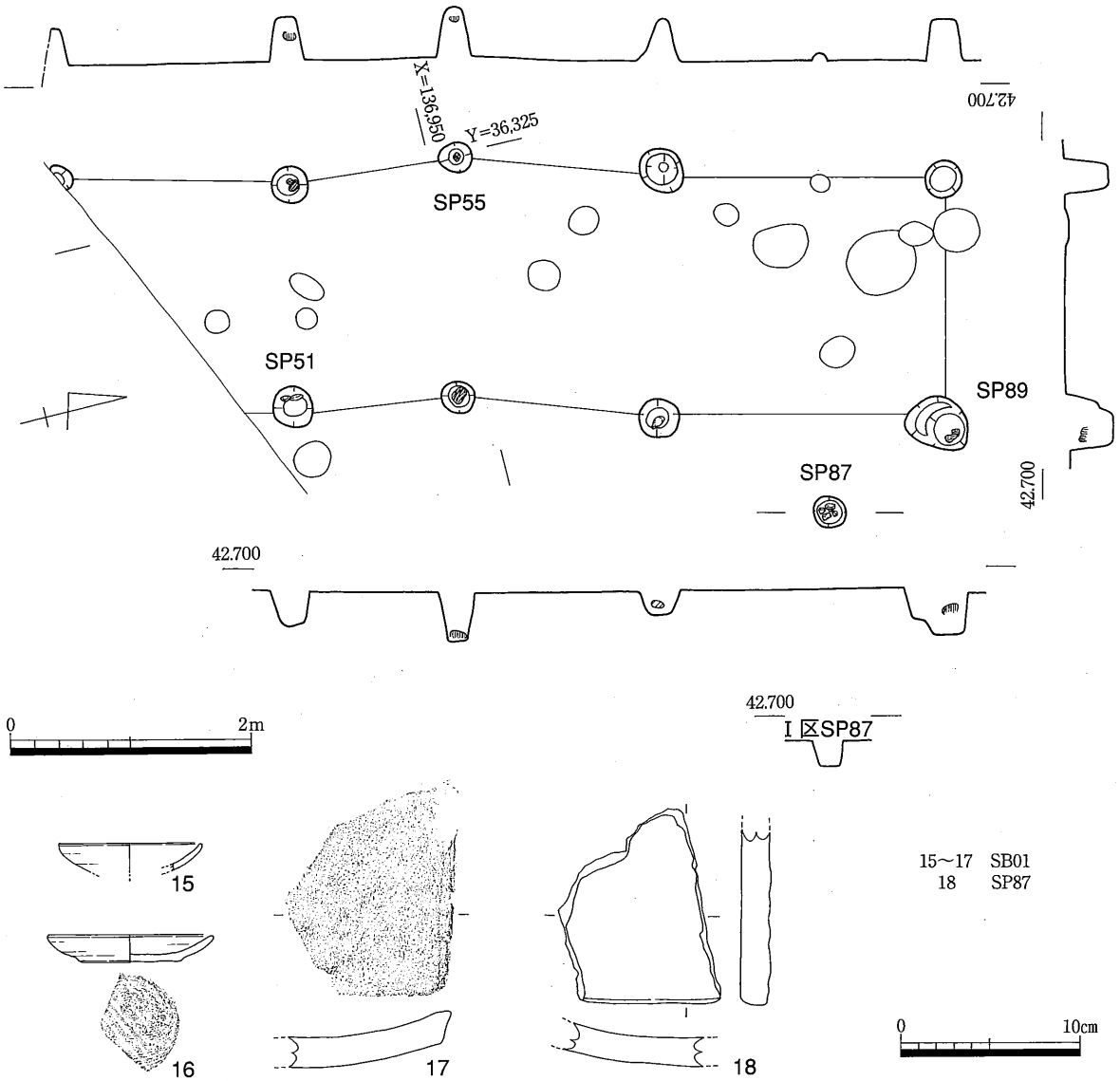
Ｉ区SB02（第７・９図）

SB01の東側約3.7mの位置で検出した掘立柱建物跡である。南東部は調査区外へ延び、全体の規模は不明である。桁行または梁間とも２間以上（5.1m以上、4.1m以上）、柱間は1.9～2.2m、主軸方位はＮ16°Ｅである。柱穴は円形を呈し、直径38～48cm、深さは16～43cmを測る。ピットからはSB01出土と同様の平瓦片が出土した。遺構の時期は出土遺物と建物の方向性からSB01と同時期と考えられる。

Ｉ区SB03（第７・９図）

SB02の北側にほぼ接して検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（3.9m）、梁間１間（2.3～2.4m）を測り、主軸方位はＮ13°Ｅを指す。柱間は桁行1.7～2.2m、梁間2.3～2.4m、柱穴は円形を呈し、直径33cm程度、深さ20～31cmである。埋土中からの出土遺物はなかったが、SB01・02と概ね同時期と考えられる。

第７図　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/100）



第８図　Ⅰ区SB01平・断面図（1/60）、SB01・SP87出土遺物（1/4）

Ⅰ区SD01・02（第７・10図）

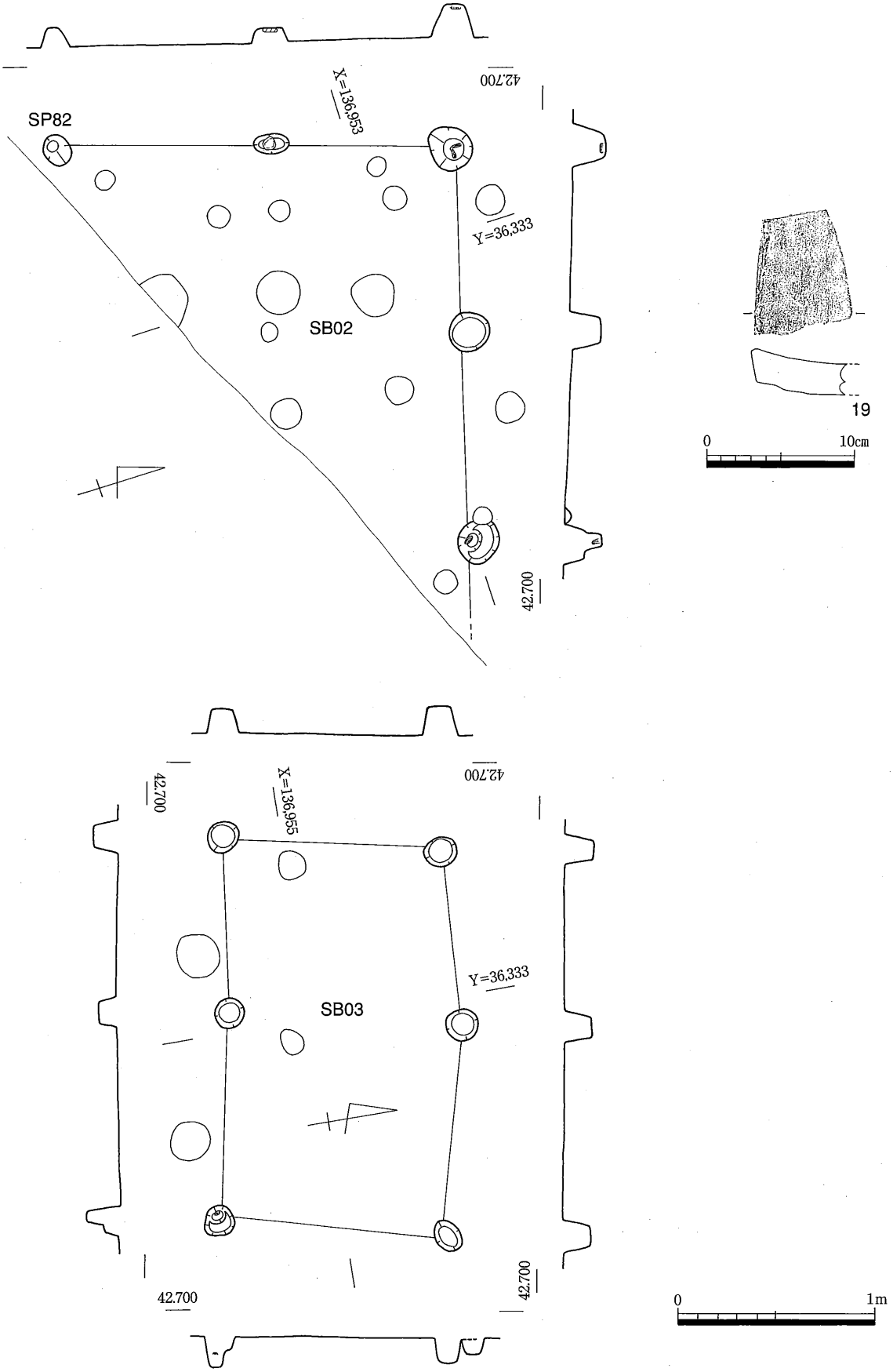
調査区南西隅で検出した。互いに平行に位置する溝状遺構である。SD01とSD02の中心間の距離は約50cmを測り、主軸方位は掘立柱建物跡とほぼ直交するN80°Wを示す。SD01は幅28cm、深さ５cmを測り、SD02は幅16cm、深さ７cmを測る。埋土中からの出土遺物はなかった。

Ⅰ区SD03（第７・10図）

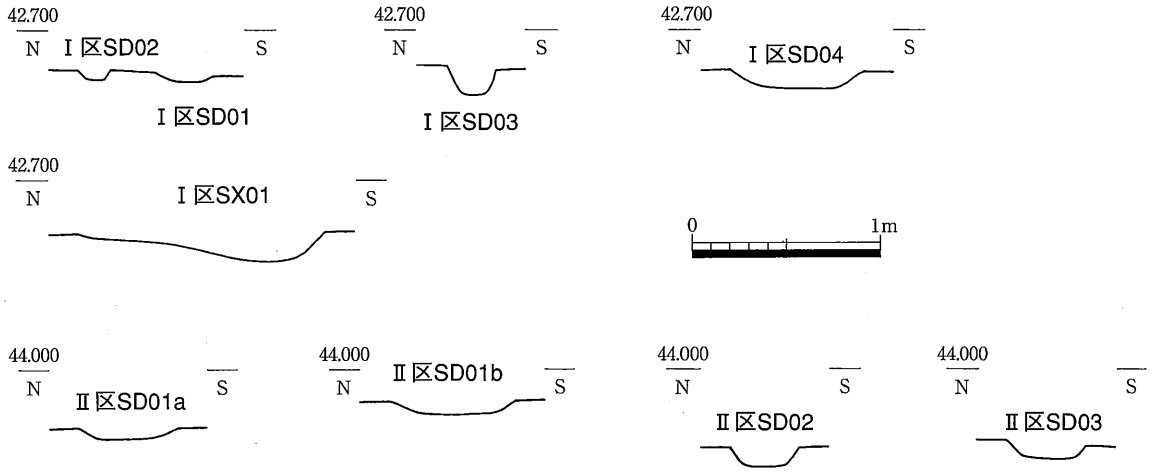
SB01の北側約2.1mの位置で検出した溝状遺構である。SB01の北側柱筋と概ね幅を揃えて検出した。検出長はSB01の梁間の長さとほぼ等しく1.85m、幅27cm、深さ16cmを測り、溝の西端でわずかに北側へ屈曲する。埋土中からの出土遺物はなかったが、配置からSB01に関連する遺構と考えられ、時期もそれと同時期と考えられる。

Ⅰ区SD04（第７・10図）

調査区の東端で検出した溝状遺構である。への字に屈曲する溝で、SB01・02とほぼ方向が同じである。幅70cm、深さ10cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。



第９図　Ⅰ区SB02・03平・断面図（1/60）、SB02出土遺物（1/4）



第10図　Ⅰ区SD01・03・04・SX01、Ⅱ区SD01～03断面図（1/40）

2．Ⅱ区の調査

国道32号を挟んでⅠ区の北側に位置し、Ⅰ区同様丘陵裾部に当たる。予備調査で実施した13トレンチを拡張して設定した調査区である。Ⅱ区からはピット25穴、溝状遺構３条、土坑４基、炭焼き窯遺構１基が検出された。

Ⅱ区SD01（第７・10図）

Ⅱ区中央付近で検出した溝状遺構である。SD02の1.8m北側、SD03の2.4m北側に位置し、東西方向を向き、幅50cm、深さ６cmを測る。中央付近の大部分はSX01により壊される。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅱ区SD02（第７・10図）

Ⅱ区南西部で検出した溝状遺構である。SD01の1.8m南側、SD03の0.3m北側で、これと平行して検出された。検出長は約0.8mで、それより東側では消失する。幅36cm、深さ10cmである。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅱ区SD03（第７・10図）

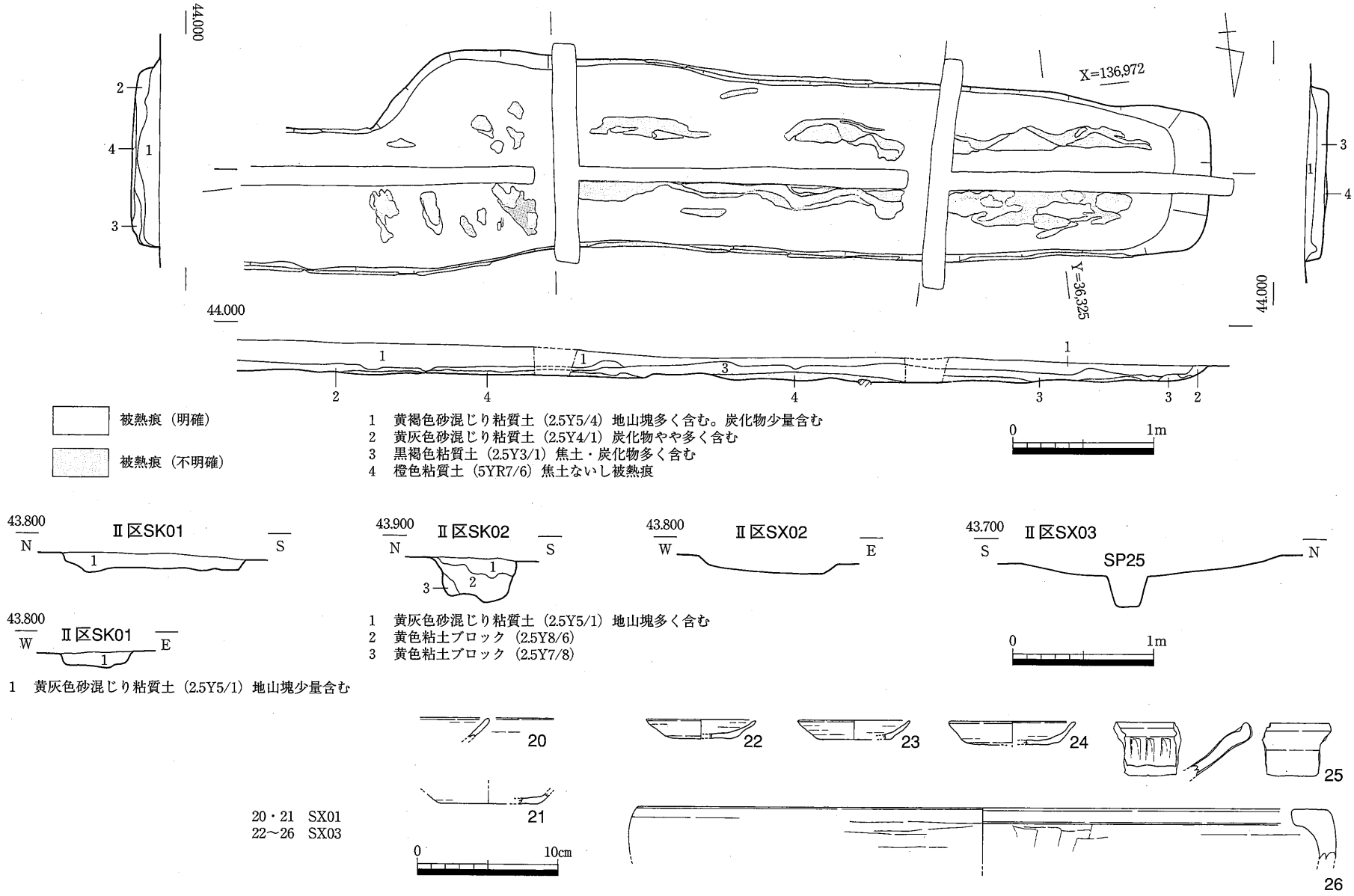
Ⅱ区南西隅で検出した溝状遺構である。SD02の0.3m南側で検出した。SX02、SX03により遺構の一部を壊される。幅42cm、深さ９cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅱ区SX01（第７・11図）

Ⅱ区中央付近で検出した焼成遺構である。概ね溝状遺構と同方向を向き、SD01の上面で検出された。東側では調査区外へ延びる。長軸6.9m以上、短軸1.3m、深さ18cm、断面形状は逆台形である。遺構の底は被熱痕が明確に残り、西側に特に被熱痕跡が顕著である。また、遺構の立ち上がりに部分も被熱痕は残る。東側の遺構の立ち上がりは不明確であった。底付近には焦土・炭化物が多量に堆積し、埋土にはベースブロックが大量に混入していた。土坑の底からは小ピットが数穴検出された。

遺構の底に傾斜が見られないものの、遺構の平面形態や、底に被熱痕跡が顕著なこと、埋土の底に炭化物が堆積すること、埋土中にベースブロックが大量に混じることから、炭焼き窯であったと考えられる。埋土中からは土師質土器小皿などが出土した。

20・21は土師質土器杯小片である。時期を判別することは難しいが、概ね中世のものと考えられる。



第11図　Ⅱ区SX01平・断面図（1/40）、SK01・02、SX02・03断面図（1/40）、SX01・03出土遺物（1/4）

Ⅱ区SK01（第７・11図）

Ⅱ区西端部付近で検出した土坑である。ほぼ長方形を呈するが、北西隅部と北東隅部はピットにより壊される。長軸1.30m、短軸0.55m、深さは12cmで、埋土は黄灰色砂混粘質土である。遺構の主軸方位はSX01や溝状遺構などと直交する。埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土の類似性や方向性から、他の遺構と概ね同時期と考えられる。

Ⅱ区SK02（第７・11図）

Ⅱ区南端中央付近で検出した土坑である。隅丸長方形を呈すると考えられるが、遺構の大半は調査区外へ延びると考えられ、規模は明らかではない。長軸は1.1m以上、短軸0.58m、深さは32cmで、埋土中にベースブロックを多量に含み、掘削後あまり期間を置かずに埋められたようである。埋土中からは出土遺物はなかった。遺構の時期は明確ではないが、SK01と埋土の一部が類似することから、これと同時期と考えられる。

Ⅱ区SX02（第７・11図）

Ⅱ区南西隅付近で検出した遺構である。不整形を呈し、南半部は調査区外へ延びる。幅１m以上、深さ８cmを測る。遺構の重複関係によりSD03より新しい。埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅱ区SX03（第７・11図）

Ⅱ区西端隅付近で検出した遺構である。遺構の西半部は調査区外へ延び、全体の規模は明らかではないが、概ね隅丸方形を呈すると考えられ、深さ14cm、断面形状は浅いⅢ状を呈する。遺構の重複関係によりSD03より新しい。浅い落ちこみ状の遺構と考えられる。埋土中からは土師質土器杯、瓦質土器鉢などが出土した。

22～24は土師質土器小Ⅲである。口径は7.8～9.1cmで、底部はヘラ切りである。25は青磁鉢である。内面に鎬を持つ。26は瓦質土器の鉢である。22～25は13世紀、26は江戸時代以降の遺物である。遺構の形状や重複関係から考えれば、22～25はSD03からの混入で、遺構の時期は江戸時代以降と考えられる。

３．19トレンチの調査

19トレンチでは、Ⅱ区同様、焼成遺構や溝状遺構が検出されたので、その概要を記す。

19トレンチSX01（第12図）

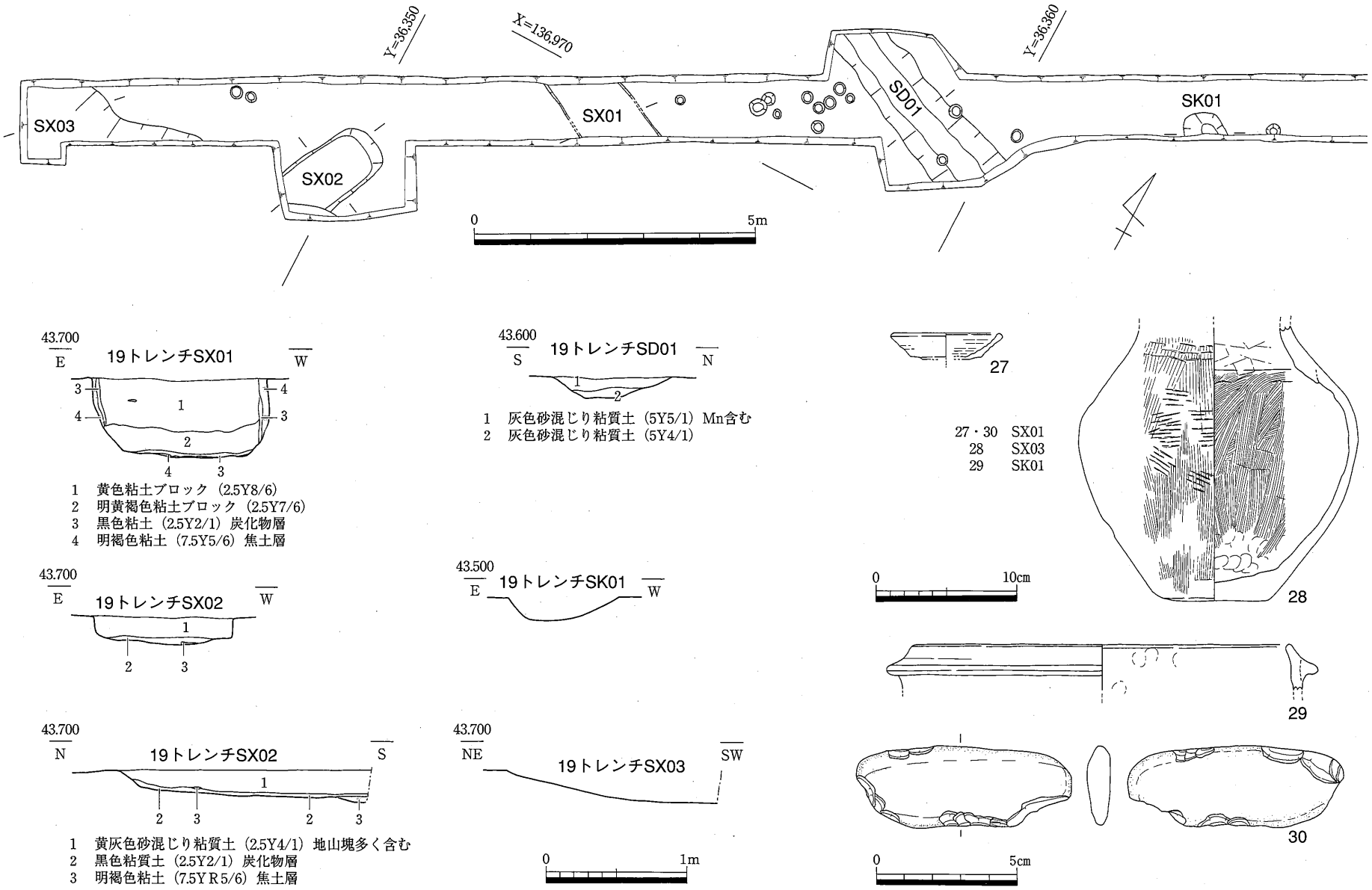
トレンチの中央部付近で検出した遺構である。北・南側ともトレンチ外へ延び、全体の規模、形状は明らかではない。幅は1.2mを測り、深さは54cm、断面形状は逆台形で、遺構の最下層には炭化物が堆積し、ベースの表面は焼けて赤色化している。埋土の上半部はベースブロックを多量に含む。埋土中からは土師質土器小Ⅲなどが出土した。Ⅱ区SX01と同様炭焼き窯遺構と考えられる。

27は土師質土器小Ⅲである。30は結晶片岩片である。側縁部にわずかに加工痕が認められる。

遺構の時期は14世紀頃と考えられる。

19トレンチSX02（第12図）

トレンチの西部で検出した遺構である。幅約1.0mを測る隅丸長方形を呈する遺構と考えられる。深さ20cm、断面形状は、短軸側は逆台形であるが、長軸側は立ち上がりが緩やかである。埋土は、最下層に炭化物を含み、ベースは焼けて赤変している。遺構の軸はSX01とほぼ直交していると考えられる。埋土中からは出土遺物はなかったが、SX01と同じく炭焼き窯遺構と考えられ、時期も概ね同時期と考えられる。



第12図　19トレンチ遺構配置図（1/100）、SD01・SK01・SX01～03断面図（1/40）、SK01・SX02・03出土遺物（1/4・1/2）

19トレンチSX03（第12図）

トレンチ西端で検出した、緩やかな落ち込み状の遺構である。幅は1.7m以上、深さは24cmを測る。埋土中からは弥生土器壺が出土した。

28は弥生土器壺である。しっかりした平底を呈し、内外面ともハケで仕上げる。

19トレンチSK01（第12図）

トレンチ東部で検出した土坑である。遺構の南半部は調査区外へ延びる。概ね隅丸方形と考えられ、深さは16cmを測る。埋土中からは土師質土器足釜が出土した。

29は土師質土器足釜小片である。遺構の時期は出土遺物により炭焼き窯遺構と概ね同じ14世紀頃と考えられる。

19トレンチSD01（第12図）

トレンチ中央付近で検出した溝である。北・南とも調査区外へ延びる。幅84cm、深さ14cmを測り、埋土は概ね灰色砂混粘質土である。遺構の主軸方位は概ね焼成遺構と同じである。埋土中からは出土遺物はなかった。

4．渡池跡堤防の調査

① 堤防の現況（第13図）

旧綾南町（現綾川町）と旧綾歌町（現丸亀市）の境に、北西から南東方向に向き、高さ約２m、幅13mの土手状の高まりが残る。この部分は寛永十年に作成された「讃岐國絵図」に見える渡池の東側の堤防と考えられ、これは国道32号を挟んで約325m続く。堤防と考えられる土手状の高まりは東側の堤防の約1,100m南西側でも認められ、周辺の地割から、渡池は北側と南側は丘陵により、西側と東側は堤防により限られていると考えられる。

今回の調査では堤防の断面を調査することにより、堤防の築造過程や築造方法を知り、堤防の築造時期や廃絶時期を知る手がかりが得られることが期待された。調査はまず、堤防中央付近を重機で掘削し、堤防の断面を観察し、層序を把握した後、層序ごとに人力で掘り下げ、遺物の採集に努めた。

② 堤防の断面（第14・15図）

表土を除去した後の堤防の土層は概ね褐灰色～黄褐色砂混弱粘質土層、褐灰色・黄褐色粘土・粘質土ブロックによる層、褐色・灰色砂質土を版築状に重ねた層で、これらを交互に盛土して堤防を築造している。まず堤防部の東端部分（池の外側）を粘土で堤防状に盛土して、その西側（池側）へ砂質土系の土を版築状に交互に盛り、堤防の芯にする。その後、堤防の池側に向けて灰褐色粘質土を盛ったのち、上部へ向けて褐灰色粘土ブロックと黄褐色弱粘質土ブロックを、さらに池側には粘質土層、粘土ブロック、砂質土層を版築状に盛った層、粘土ブロックからなる層を順に盛り土している。これらの層の境目には段状に土を切って次の盛り土を行う腹付けと呼ばれる工法が随所に見られ、土滑りを防ぐ工夫がに行われていたことがわかった。

③ 堤防下部の断面（第14・15図）

堤防の下部まで掘り下げを行った結果、堤防を築造した基盤土は厚い緑色～青灰色粘土で、この層は渡池跡内部の予備調査を行った際に検出された粘土層と同一であることが判明し、堤防はこれらの粘土層の上部に築造されたことがわかった。予備調査時はこれらの厚い粘土層は渡池の埋土と考えていたが、国土基本図などを見ると、綾川の氾濫原と考えられる地割の乱れが渡池の東側の堤防の約350m東側にまで迫っており、これらの粘土層は東側を流れる綾川の氾濫源であったことが可能性が高い。従って、渡池は綾川の氾濫を利用して築造されたものと考えられる。

④ 出土遺物（第15図）

堤防の埋土からは出土遺物はなかったが、堤防北壁の11－⑪層（青灰色粘土層）から土師質土器土鍋が出

土した。この層は堤防築造以前の、綾川の氾濫により堆積した層で、旧渡池一帯にも広がる層である。堤防下部の堆積土から比較的良好な出土遺物があったことで、渡池の築造時期の下限が押さえられ、貴重な成果となった。

31は土師質土器土鍋口縁部である。小片であるが、ほとんど摩滅は受けていない。16世紀前半頃のものである。

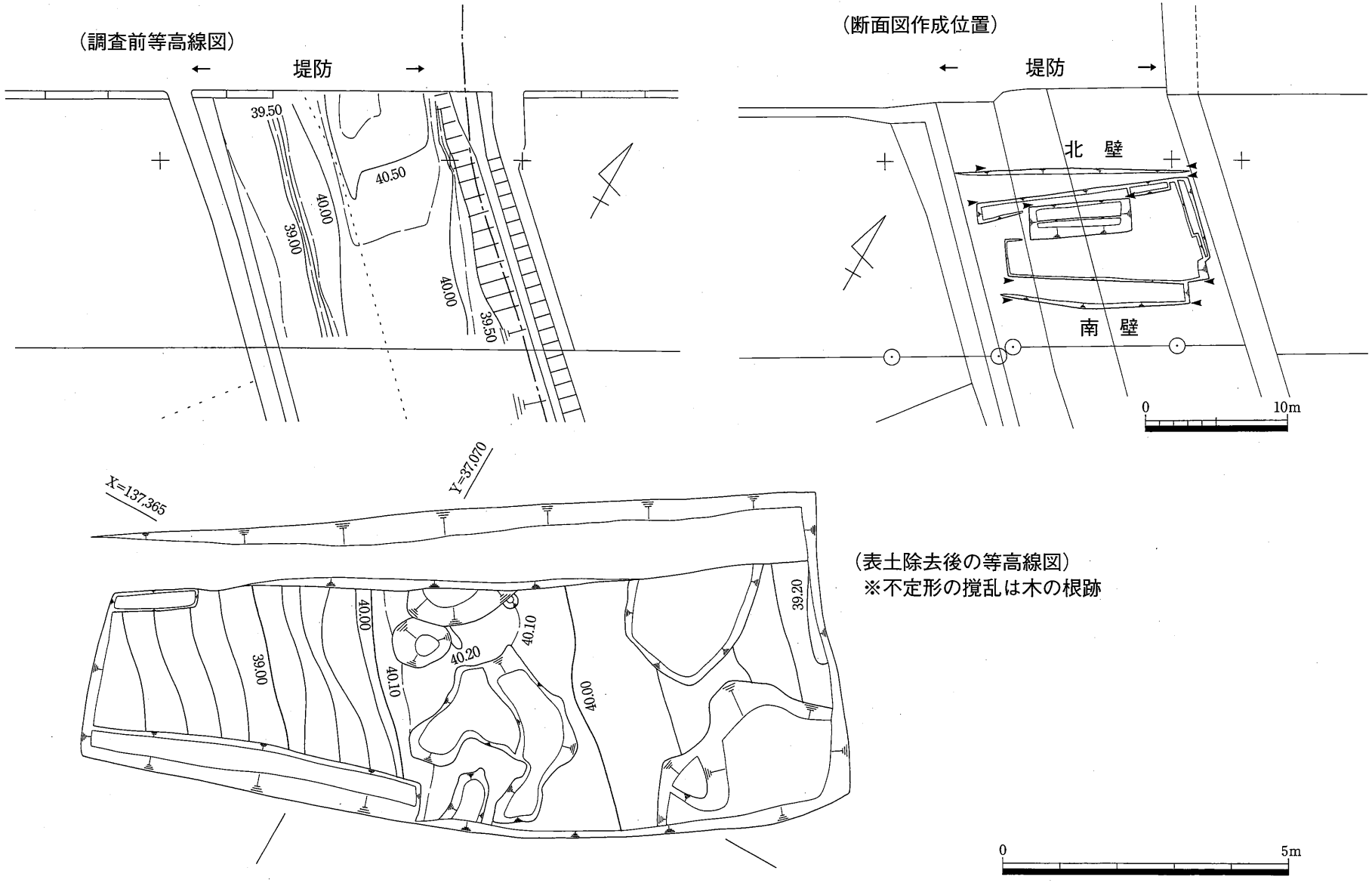
出土遺物の時期により、渡池の築造は16世紀前半以降と考えられる。

第3節　小結

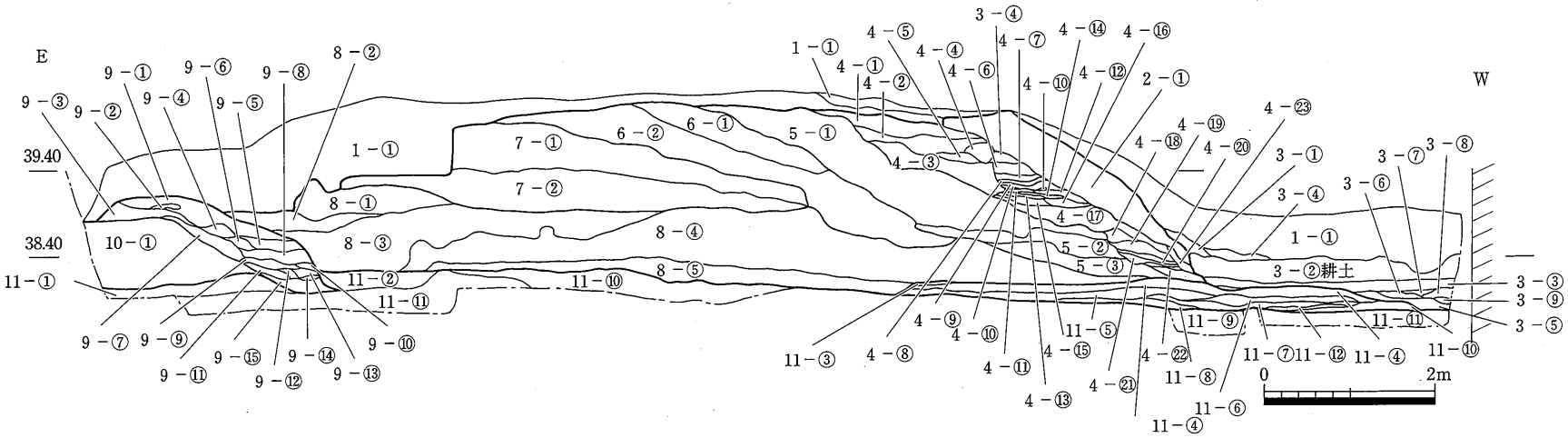
丘陵裾部に立地する住吉遺跡では、中世後半を中心とする集落跡が検出された。溝状遺構と掘立柱建物跡が中心であるが、それらの主軸方位は真北方向を向いており、周辺に残る条里型地割の方向や、同じく中世の集落が検出された池下遺跡、北内遺跡の遺構の主軸方位が条里型地割の方位を指すのと異なる。しかし、これは丘陵裾部という地形に制約されたからと考えられる。また、住吉遺跡で特徴的なのは、隅丸長方形を呈し、遺構の底部が焼けて赤変し、埋土最下層に炭化物を含む土坑が3基検出されたことである。これらの土坑は他の類例から炭焼き窯であることが想定される。立地と考え合わせ、炭焼きを行う集落であったと考えられる。

渡池跡の堤防の調査では、堤防盛土からの遺物はなかったが、堤防の下部の基盤土からは16世紀代の土師質土器土鍋片が出土し、渡池の築造がそれ以後であることが判明した。また、渡池内部の予備調査の結果、検出された厚い粘土の堆積層と渡池堤防の下部に広がる粘土層の関係から、渡池は綾川の氾濫源を利用して造られた溜池であることも判明した。

狭い範囲の調査ではあったが、綾歌地区東部の中世の開発の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができた。

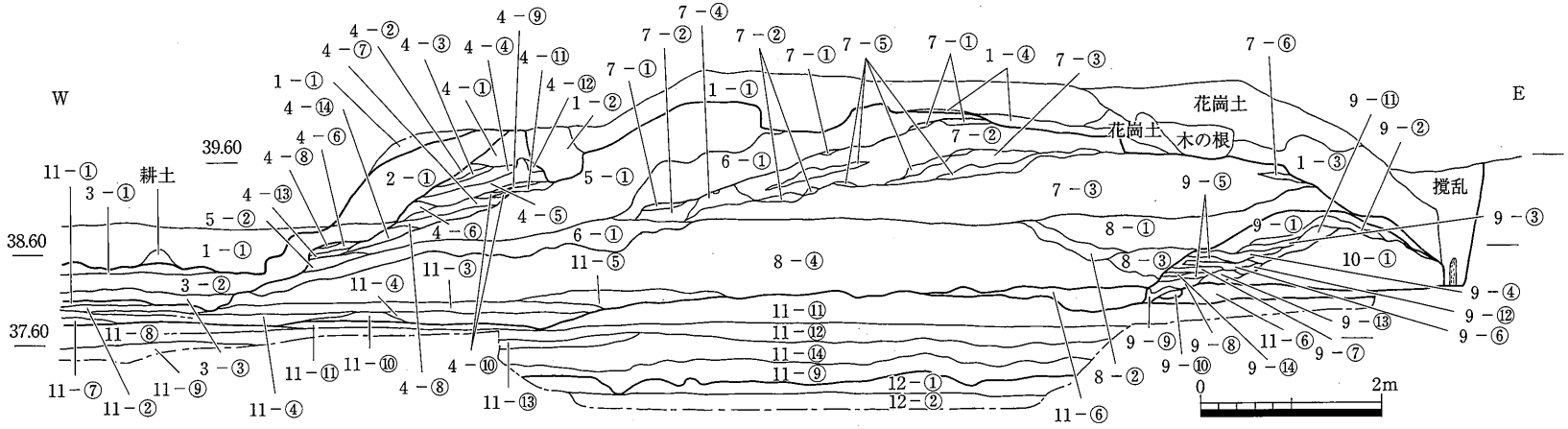


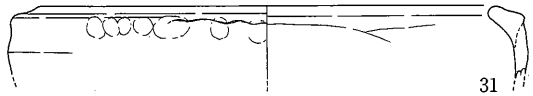
第13図　渡池堤防平面図（1/400、1/100）



1－①　表土・造成土
2－①　灰色粘土と明灰色粘土のブロック
3－①　明灰色粘土　3－②層のブロック混じる
3－②　灰褐色砂混じり粘質土（2.5Y6/1）Fe混じる
3－③　明黄灰色粘土（2.5Y6/2）
3－④　茶褐色砂混じり弱粘質土（10YR4/2）旧耕土
3－⑤　明灰色シルト質粘土（7.5Y7/1）上面にFe
3－⑥　灰色粗砂混じり粘土（10Y6/1）
3－⑦　明灰色粗砂（10Y7/1）
3－⑧　明褐灰色粘土（2.5Y7/2）Mn・Fe・砂混じる
3－⑨　明褐灰色粘土（2.5Y6/1）上面にFe
4－①　黄褐色砂混じり粘土（2.5Y6/3）
4－②　暗灰色砂混じり粘土（5YR4/1）4－①層のブロック混じる
4－③　黄褐色粗砂混じり砂質土（10YR6/6）
4－④　黄褐色砂混じり砂質土（10YR5/3）黄色粘質土ブロック（10YR7/6）混じる
4－⑤　暗褐灰色砂混じり粘土（7.5YR4/1）
4－⑥　赤褐色粗砂質土（5YR5/8）花崗土
4－⑦　黄褐色粗砂混じり砂質土（2.5Y6/3）
4－⑧　灰褐色粗砂混じり粘質土（7.5YR5/3）
4－⑨　黄褐色砂質土と赤褐色砂質土（10YR6/4・7.5YR5/6）筋状
4－⑩　黄褐色砂質土（10YR4/6）
4－⑪　赤褐色粗砂質土（5YR5/8）
4－⑫　茶褐色砂質土（7.5YR5/8）
4－⑬　暗褐灰色砂混じり粘質土（7.5YR4/1）
4－⑭　黄褐色砂質土（2.5Y6/4）
4－⑮　黄褐色砂混じり粘質土（2.5Y6/4）
4－⑯　明黄褐色粗砂混じり砂質土（10YR7/4）
4－⑰　赤褐色粗砂混じり砂質土（7.5YR6/8）明灰色粘土ブロック混じる
4－⑱　黄褐色粗砂混じり砂質土（10YR6/6）
4－⑲　茶褐色粗砂混じり砂質土（10YR5/3）灰色粘土ブロック少し混じる
4－⑳　明褐灰色粘土（7.5YR7/1）下部に筋状に赤色砂混じる
4－㉑　褐灰色粗砂混じり砂質土（7.5YR6/1）
4－㉒　明灰色粘土（2.5Y6/1）上面に版築の砂層薄く堆積
4－㉓　灰褐色砂混じり粘質土（2.5Y6/1）3－②層に版築土の花崗土混じる
5－①　明褐灰色粘土と明灰色粘土ブロック（7.5R6/1・7.5Y7/1）7－①層に同じ
5－②　明灰色粘土（7.5Y6/1）上面にFe沈着
5－③　明褐灰色粘土（10YR7/1）
6－①　灰色粘質土（5Y6/1）黄褐色シルト質粘土ブロック（2.5Y7/2）混じる
6－②　黄褐色シルト質粘土（2.5Y7/2）黄褐色シルト質粘土（10YR6/3）混じる
7－①　明褐灰色粘土と明灰色粘土ブロック（7.5YR6/1・7.5Y7/1）
7－②　明褐灰色粘土（7.5YR6/1）明灰色シルト質粘土ブロック（7.5Y7/1）少し混じる
8－①　黄褐色シルト質粘土と明灰色粘土ブロック（2.5Y7/4・7.5Y7/1）
8－②　茶褐色シルト質粘質土（10YR5/3）
8－③　明褐灰色シルト質粘土（2.5Y7/1）8－④層より少しシルトっぽい
8－④　明褐灰色シルト質粘土（2.5Y7/1）Fe混じる
8－⑤　明灰色粘土（5Y5/1）Fe・Mn混じる
9－①　茶褐色粗砂混じり砂質土（10YR4/3）
9－②　黒褐色粘土（10YR2/3）
9－③　暗褐色砂混じり粘土（10YR3/3）
9－④　茶褐色砂質土（10YR4/3）
9－⑤　黄褐色砂質土（2.5Y7/6）
9－⑥　赤茶褐色砂質土（7.5Y6/8）
9－⑦　茶褐色粗砂混じり砂質土（10YR4/3）
9－⑧　褐色砂混じり粘質土（5YR5/1）
9－⑨　褐色粗砂混じり粘土（10YR5/1）
9－⑩　明橙褐色砂混じり粘質土（7.5YR7/8）
9－⑪　灰褐色砂混じり粘土（2.5Y5/1）Mn混じる
9－⑫　橙褐色粗砂混じり砂質土（7.5YR6/8）
9－⑬　茶褐灰色粗砂混じり粘土（10YR6/1）
9－⑭　赤褐色粗砂混じり粘土（5YR5/8）Fe沈着層
9－⑮　暗灰色砂混じり粘土（7.5YR4/1）上面にFe
10－①　明灰褐色粘土　Fe混じる．砂少し．質は11－①層に似る
11－①　明灰色粘土（N6/）Fe混じる．砂少し
11－②　明灰色粘土（N6/）上面にFe．砂わずかにあり
11－③　明灰色粘土（5Y5/1）Mn含む
11－④　明褐灰色シルト質粘土（2.5Y6/1）
11－⑤　明灰色粘土（5Y5/1）Mn含む
11－⑥　灰色シルト質粘土（5Y5/1）Fe・Mn混じる
11－⑦　赤褐色シルト質粘土（5YR5/6）Feが非常に多い
11－⑧　青灰色粘土（10BG5/1）粘性がやや弱い
11－⑨　灰色粘土（N4/）粘性が非常に強い
11－⑩　明灰色粘土（2.5GY6/1）上面にFe沈着
11－⑪　青灰色粘土（10BG6/1）
11－⑫　明灰色粘土（7.5Y7/1）Mn含む

第14図　堤防部南壁土層断面図（1/80）





1－① 表土・造成土
1－② 黄褐色粗砂混じり砂質土　木による撹乱
1－③ 黄褐色砂混じり粘質土（2.5Y5/3）旧水路埋戻土
1－④ 濃茶褐色砂混じり粘質土　旧耕土
2－① 灰色粘土と明灰色粘土のブロック　5－①層に似る
3－① 茶褐色砂混じり粘質土（10YR4/2）旧耕土
3－② 茶褐色砂混じり粘土（10YR5/3）旧耕土　堤防の土ではない
3－③ 黄灰褐色砂混じり粘質土（10YR5/4）旧耕土
4－① 黄褐色砂質土（10YR6/6）粗砂混じる
4－② 黄茶褐色（粗砂混じり）砂質土（10YR5/4）
4－③ 黄褐色砂混じり粘質土（10YR5/6）
4－④ 褐色粗砂混じり粘質土（10YR5/4）
4－⑤ 赤灰色砂混じり粘質土（5YR4/1）4－⑥層の花崗土ブロック混じる
4－⑥ 橙褐色粗砂質土（5YR7/8）花崗土
4－⑦ 褐色細砂質土（10YR6/3）
4－⑧ 黄褐色砂混じり粘質土（10YR6/6）
4－⑨ 赤褐色粗砂混じり砂質土（5YR5/6）
4－⑩ 赤灰色砂混じり粘質土（5YR4/1）
4－⑪ 黄褐色砂質土（10YR6/3）
4－⑫ 4－⑤層と4－①層のブロック（5YR4/1・10YR6/6）
4－⑬ 褐灰色粗砂混じり粘質土（2.5Y6/1）
4－⑭ 褐灰色粗砂混じり粘土（2.5Y6/1）下面にFe沈着
5－① 褐灰色粘土と黄褐色弱粘質土のブロック（5YR5/1・2.5Y7/4）2－①層に似る
5－② 灰色粘質土（2.5Y6/2）Fe多く混じる
6－① 黄褐色弱粘質土（2.5Y7/4）Fe混じる
7－① 褐色砂混じり粘土（7.5YR6/4）
7－② 褐灰色粘土（10YR5/1）Fe混じる
7－③ 灰褐色粘土と明灰色粘土と黄褐色粘土（5YR5/1・7.5Y7/1・2.5Y7/4）5－①層に似る
7－④ 明灰色粘土ブロックと黄褐色土ブロック・褐灰色粘土混じる（7.5Y7/1・2.5Y7/4・10YR5/1）
7－⑤ 明黄灰色粘土（2.5Y8/3）
7－⑥ 褐色砂質土（10YR5/3）
8－① 明黄褐色弱粘質土（2.5Y7/4）上の層の粘土ブロック少し含む
8－② 8－③層と7－③層ブロック
8－③ 明茶褐色弱粘質土（2.5Y7/4）
8－④ 灰褐色粘土　Fe・Mn混じる。やや粘性弱く耕作土に近い
9－① 茶褐色粗砂混じり砂質土（10YR4/4）
9－② 茶灰色粗砂混じり粘質土（2.5Y5/2）
9－③ 茶褐色砂混じり粘質土（2.5Y5/4）
9－④ 灰褐色砂混じり粘質土（2.5Y5/1）
9－⑤ 灰褐色砂混じり粘土（2.5Y5/1）
9－⑥ 黄褐色粗砂混じり粘質土（2.5Y6/6）
9－⑦ 黄灰色粗砂混じり粘質土（2.5Y6/1）
9－⑧ 9－⑤層に筋状に赤茶色粗砂混じり粘質土が混じる（2.5YR6/8）
9－⑨ 灰色粗砂混じり粘質土（N5/）
9－⑩ 赤茶色粗砂混じり粘土（10YR6/8）Fe多い
9－⑪ 黄茶褐色粗砂混じり粘質土（10YR4/3）
9－⑫ 灰褐色粗砂混じり粘質土（2.5Y5/1）
9－⑬ 茶褐色粗砂ブロック（10YR5/6）間に粘土混じる
9－⑭ 褐色粗砂混じり粘土（2.5Y6/2）
10－① 明黄灰色粘土（2.5Y7/2）砂少し。Fe混じる
11－① 明灰色粘土（5Y6/1）
11－② （黄）褐灰色弱粘質土（2.5Y5/1）
11－③ 明灰色粘土（7.5Y7/1）Fe混じる
11－④ 明赤灰色粘土（7.5YR6/8）Fe多い
11－⑤ 明灰色粘土（7.5Y7/1）Fe・Mn多い
11－⑥ 明灰色粘土（7.5Y7/1）Fe多い
11－⑦ 明青灰色粘土（5BG6/1）
11－⑧ 暗灰色粘土（N4/）
11－⑨ 暗灰色粘土と明灰色シルト質粘土がブロック状（N4/・2.5GY7/1）
11－⑩ 明緑灰色粘土（5G6/1）上面にFe沈着
11－⑪ 青灰色粘土（10BG5/1）
11－⑫ 青灰色粘土（5BG5/1）
11－⑬ 灰色粘土（10Y6/1）下端に植物遺体か薄く堆積
11－⑭ 灰色粘土（10Y5/1）
12－① 明緑灰色粘土（5G7/1）
12－② 青灰色粘土（10BG4/1）地山。固い

第15図　堤防部北壁土層断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

第３章　北内遺跡の調査の成果

第１節　土層序

調査区は東から順にⅠ～Ⅴ区を設定した。調査区全体が谷地形に相当するが、Ⅰ区からⅤ区へ向けて徐々に地形は高くなる。

１．Ⅰ区土層（第７図）

Ⅰ区西壁で土層図を作成した。耕作土・床土の下部は厚さ約50cmにわたって暗灰黄色砂質土、にぶい黄褐色砂、明褐色砂、明褐色砂質土などが堆積する。遺構面のベースは黄褐色粘土、暗灰色粘土で、深くなるほどグライ化が著しくなる。地表面の標高は約37.0m、遺構面の標高は36.3mである。

２．Ⅲ・Ⅳ区土層（第８～10図）

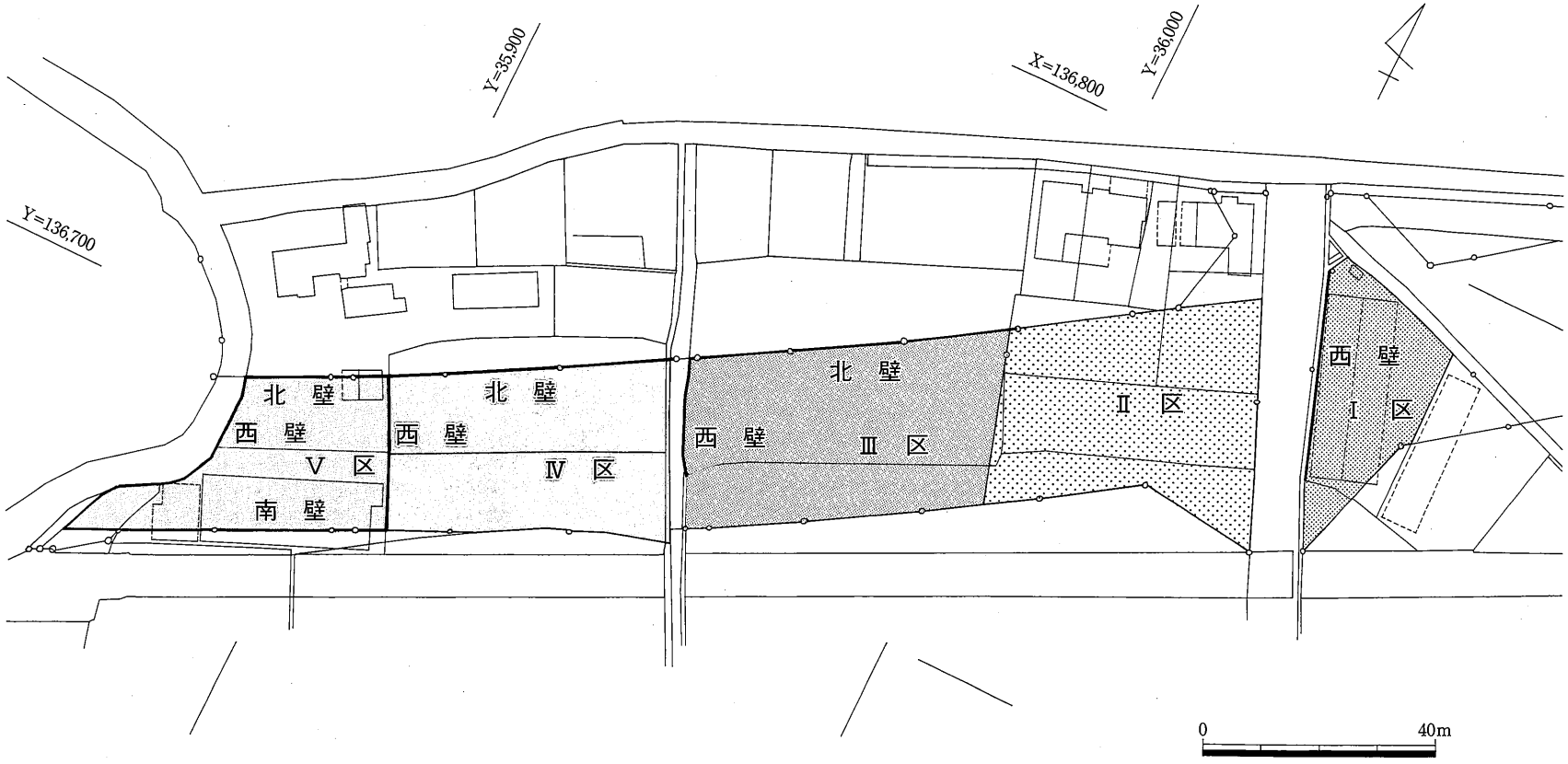
Ⅲ・Ⅳ区の西壁と北壁の土層図を作成した。

Ⅲ区西壁では、厚さ約30cmの耕作土の直下で暗黄灰色～黄褐色粘質土のベースが堆積する。遺構面の標高は約36.9m、地表面の標高は約37.1mである。北壁では地表面の標高は約36.8m、遺構面の標高は36.4～36.7mである。概ね東側ほど包含層が厚い。耕作土・褐灰色弱粘質土層＋明赤褐色弱粘質土層の下部に中世遺物包含層である褐灰色弱粘質土層がⅢ区中程から東側で厚さ約20cmにわたって堆積し、その下部にはⅢ区中程から東側へかけて、弥生時代後期の包含層である砂粒～小礫を含む黒色粘質土層・黒褐色粘質土層が堆積する。ベースはその下部の褐色弱粘質土層であるが、弥生時代後期の遺構は弥生時代の遺物を含む層を切り込んでおり、実質的な遺構面はこの砂粒～小礫を含む黒色粘土層・黒褐色粘質土層であると考えられる。

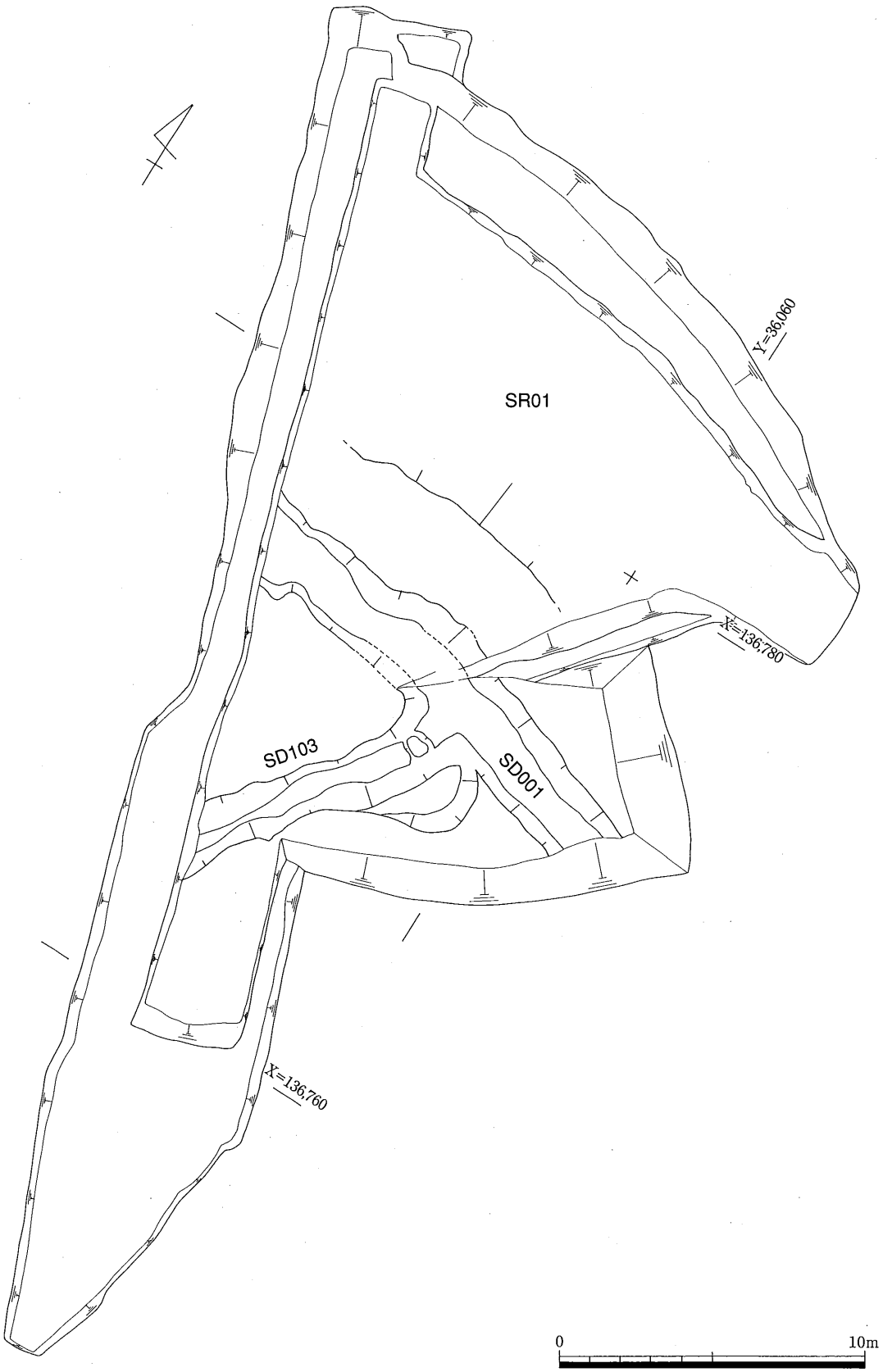
Ⅳ区西壁では厚さ15cm程度の耕作土・床土の下部に厚さ５cm程度の中世遺物包含層、厚さ５～15cm程度の弥生時代中期の遺物包含層が堆積する。弥生時代中期の遺物包含層は北側ほど厚く堆積する。ベースは黄灰色粘質土で、南側では上部で灰色砂を多量に含む。北壁では厚さ約15cmの耕作土・床土の下部で厚さ約10cmの褐灰色粘質土である中世遺物包含層、砂粒・小礫を含む厚さ約５cmの黒褐色粘質土である弥生時代後期の遺物包含層が堆積する。ベースは褐色弱粘質土で、中世の遺構が弥生時代後期の包含層を切り込むのが観察できる。

３．Ⅴ区土層断面（第10～12図）

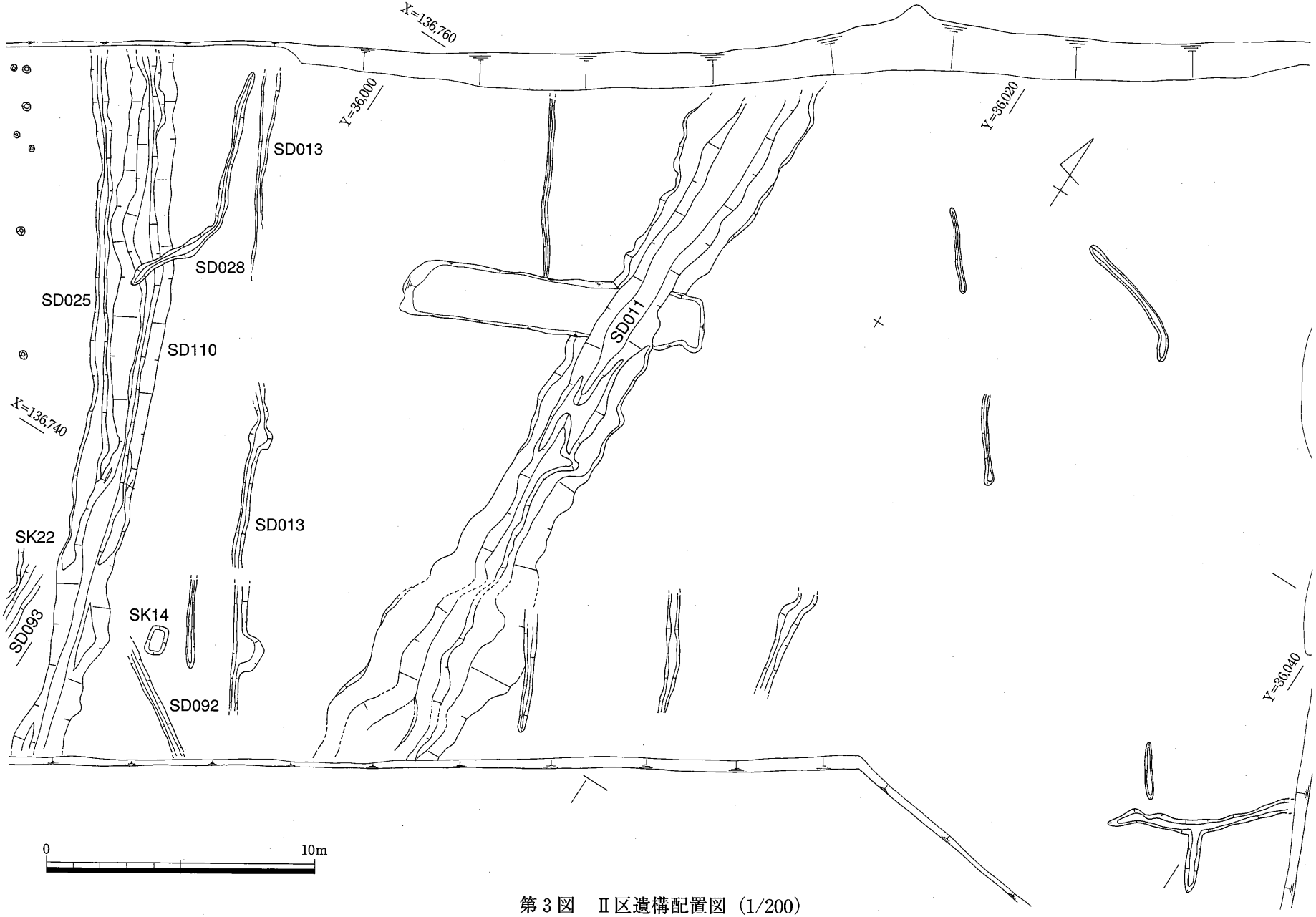
Ⅴ区は北・南・西壁で土層を断面を作成した。北側では約30cmの表土の下部で、灰黄色シルト層のベースを検出した。南壁では厚さ20～30cmの表土の下部で灰褐色シルト、灰黄色中砂、灰黄色砂礫層、黄灰褐色細砂混じりシルト層などのベースが検出された。遺構は灰黄色砂礫、黄灰褐色細砂混じりシルト層から切り込まれている。弥生時代・中世の遺物包含層はみられず、いずれも表土の直下でベースを検出した。



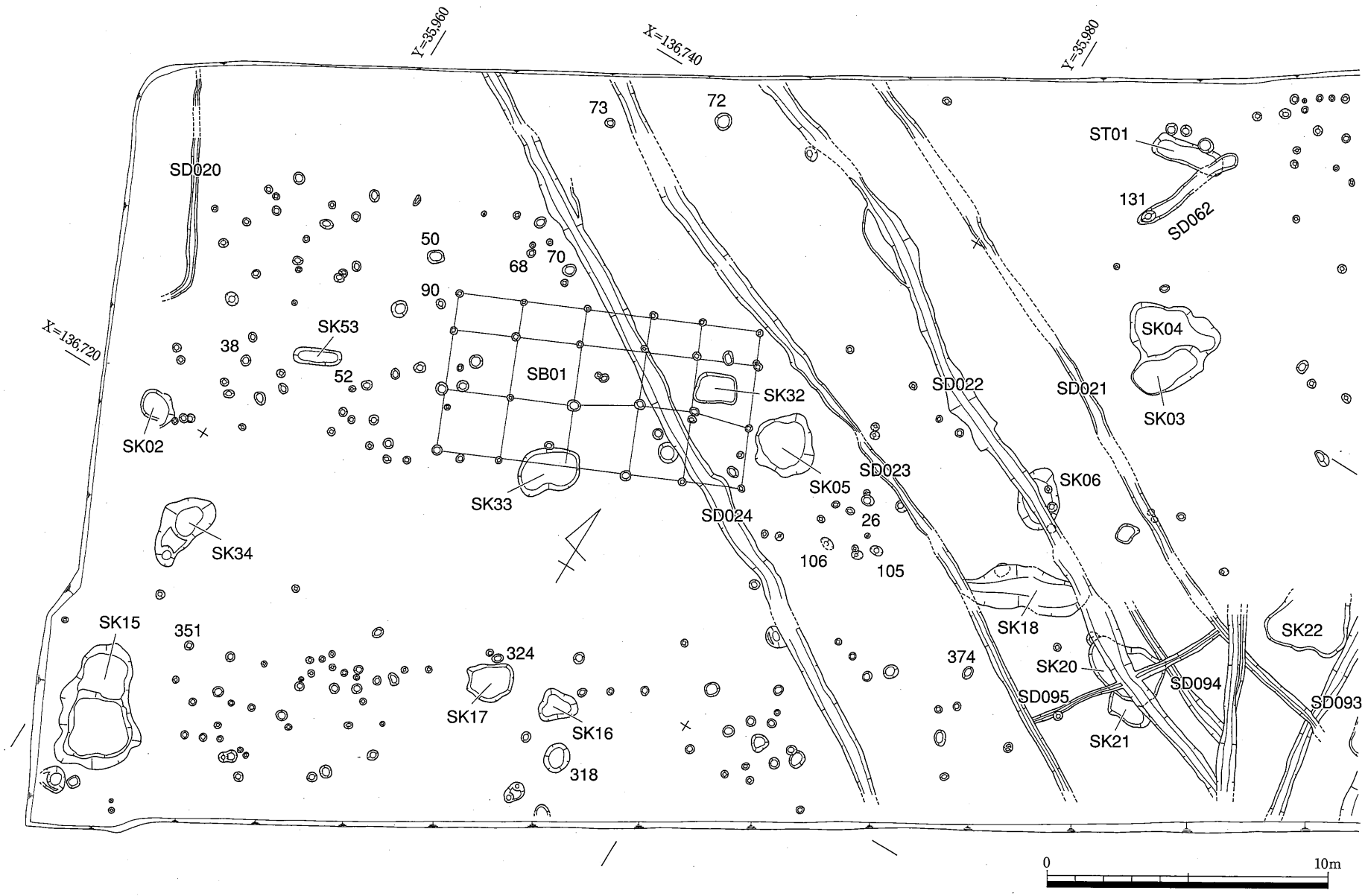
第１図　調査区割図（1/1,200）



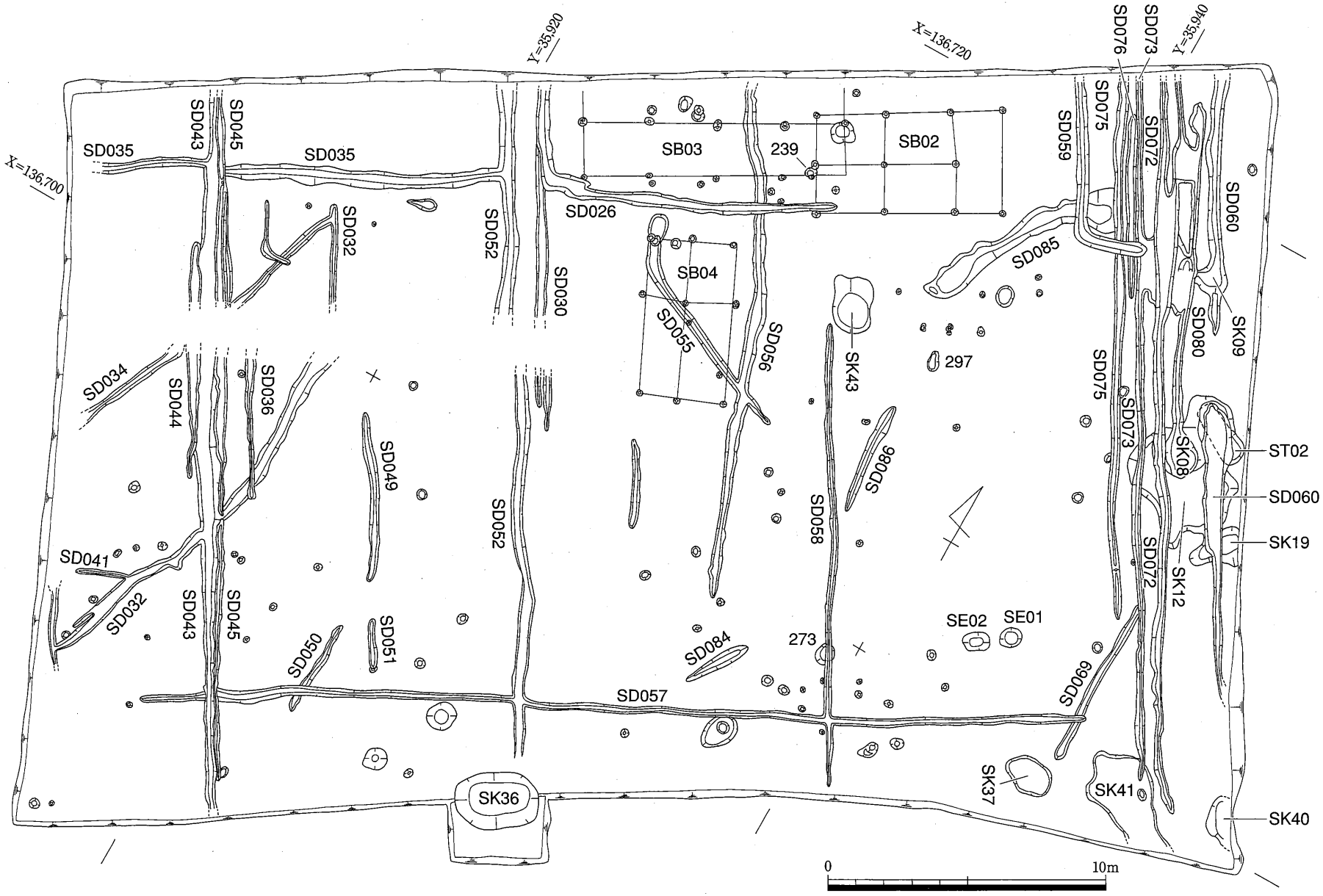
第２図　Ⅰ区遺構配置図（1/200）



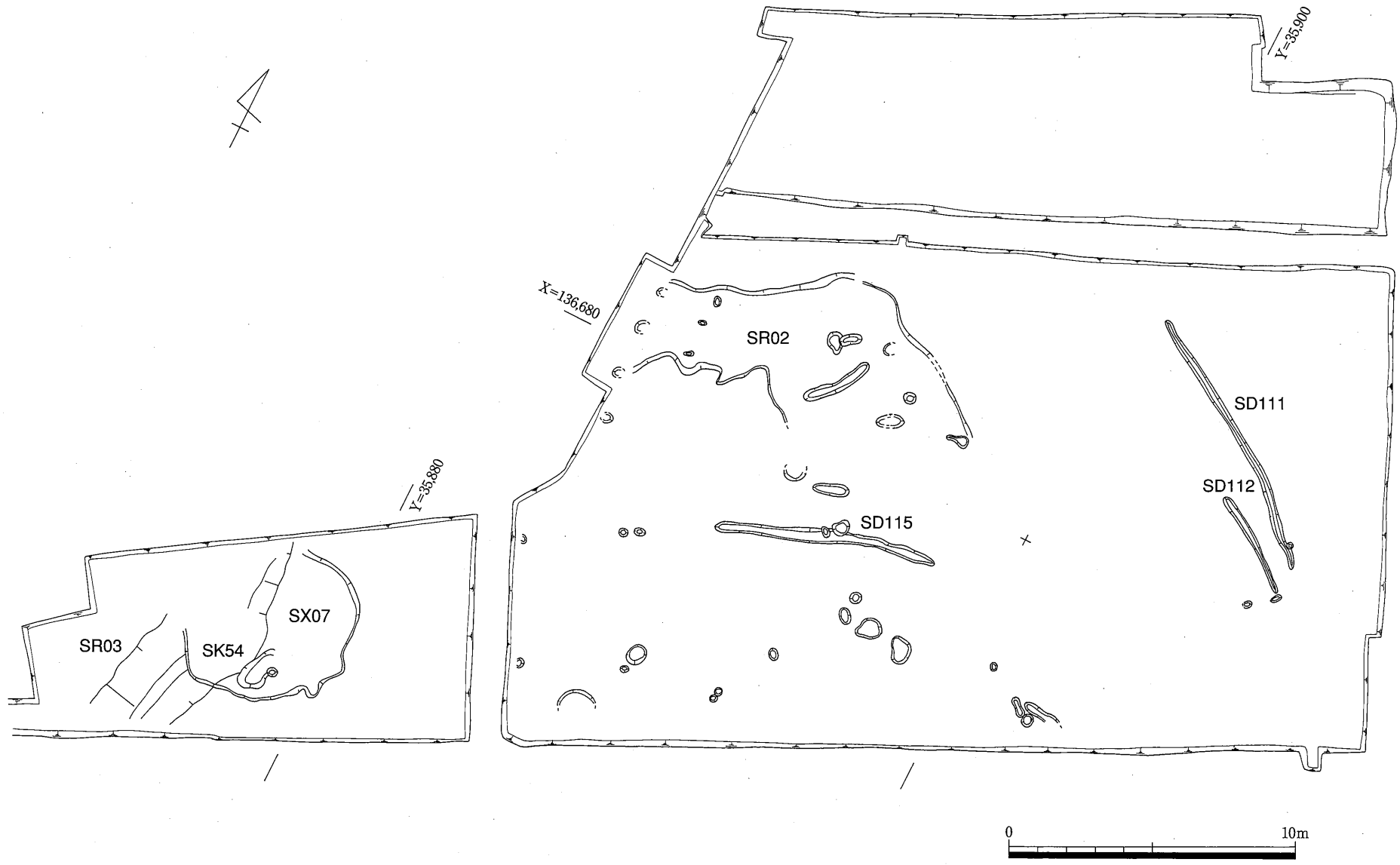
第３図　Ⅱ区遺構配置図（1/200）



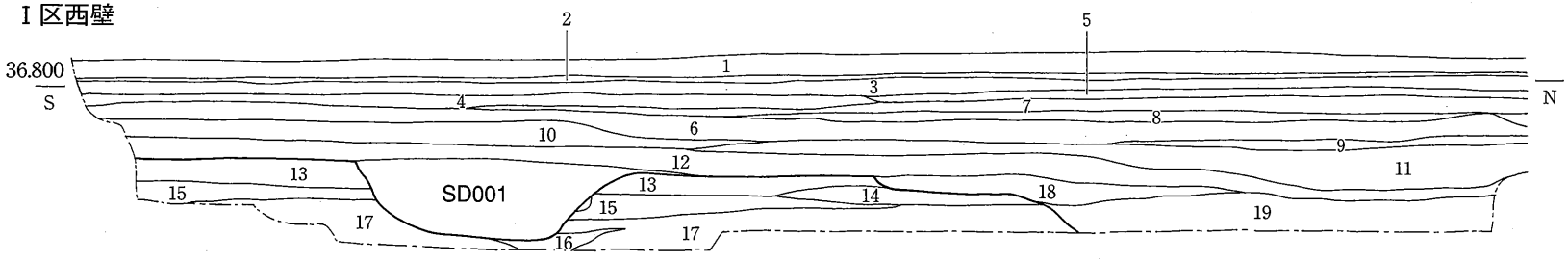
第４図　Ⅲ区遺構配置図（1/200）



第５図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）



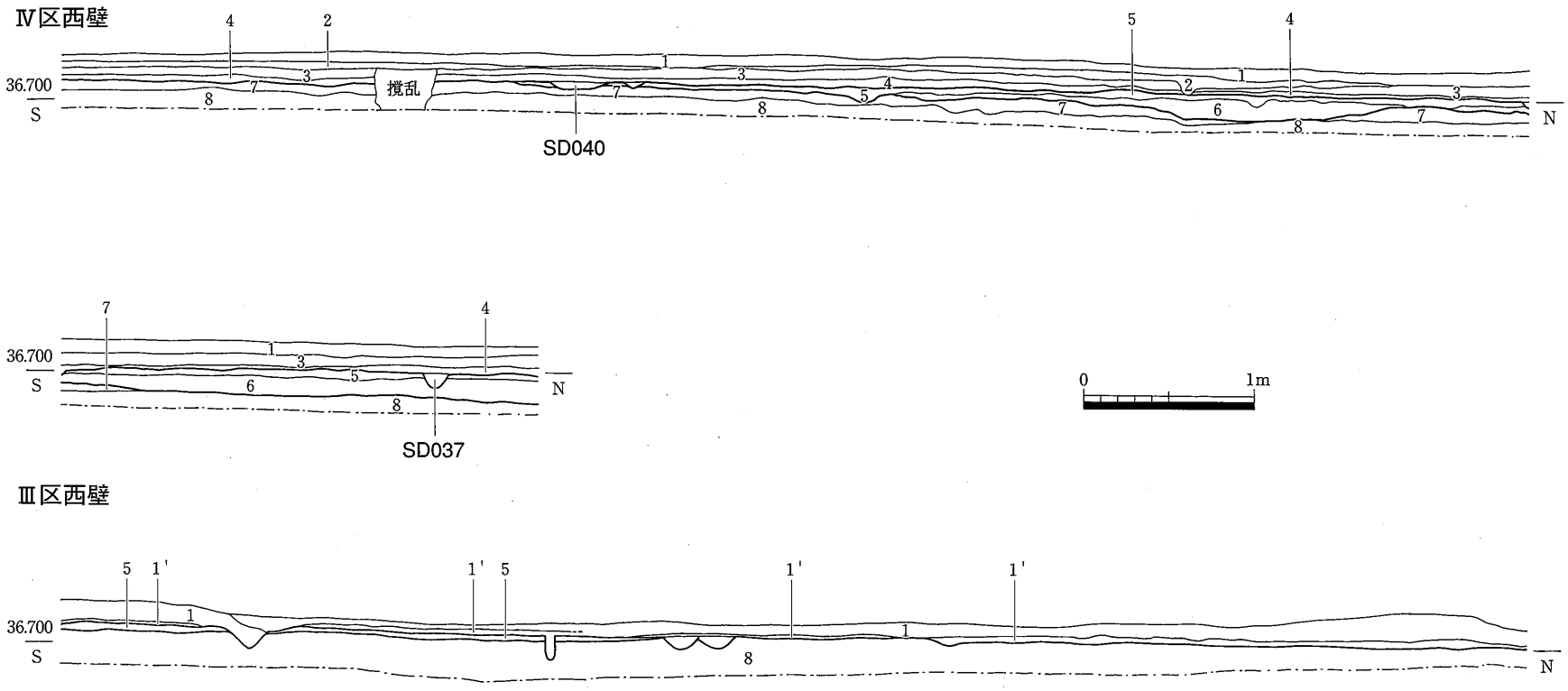
第６図　Ⅴ区遺構配置図（1/200）



1　耕作土
2　床土
3　暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）
　Mn少量含む
4　にぶい黄褐色砂（2.5Y5/3）
5　明褐色砂（7.5YR5/8）
　北へ行くほど礫が多くなる
6　にぶい黄橙色細砂（10YR6/4）
7　灰黄褐色砂（10YR4/2）
8　にぶい黄褐色～黄褐色砂（10YR5/4～5/8）
　北ほど礫が多くなる
9　明黄褐色細砂（10YR6/8）
10　明褐色細砂質土（7.5YR5/6）
　若干粘性あり
11　褐灰色粘質土（10YR5/1）
12　褐灰色粘質土（10YR4/1）
13　黄褐色粘土（2.5Y5/4）
14　灰色砂（7.5Y4/1）
15　暗灰色粘土（N3/(YR)）
16　暗緑灰色砂（7.5GY3/1）
17　黄褐色粘土（10YR5/6）
　深くなる程グライ化激しい
18　黒褐色粘土（10YR3/1）若干砂粒を含む。
　0.5～1㎝大の灰白色くさり礫（2.5Y8/2）を多量に含む
19　黒色粘土（N2/）

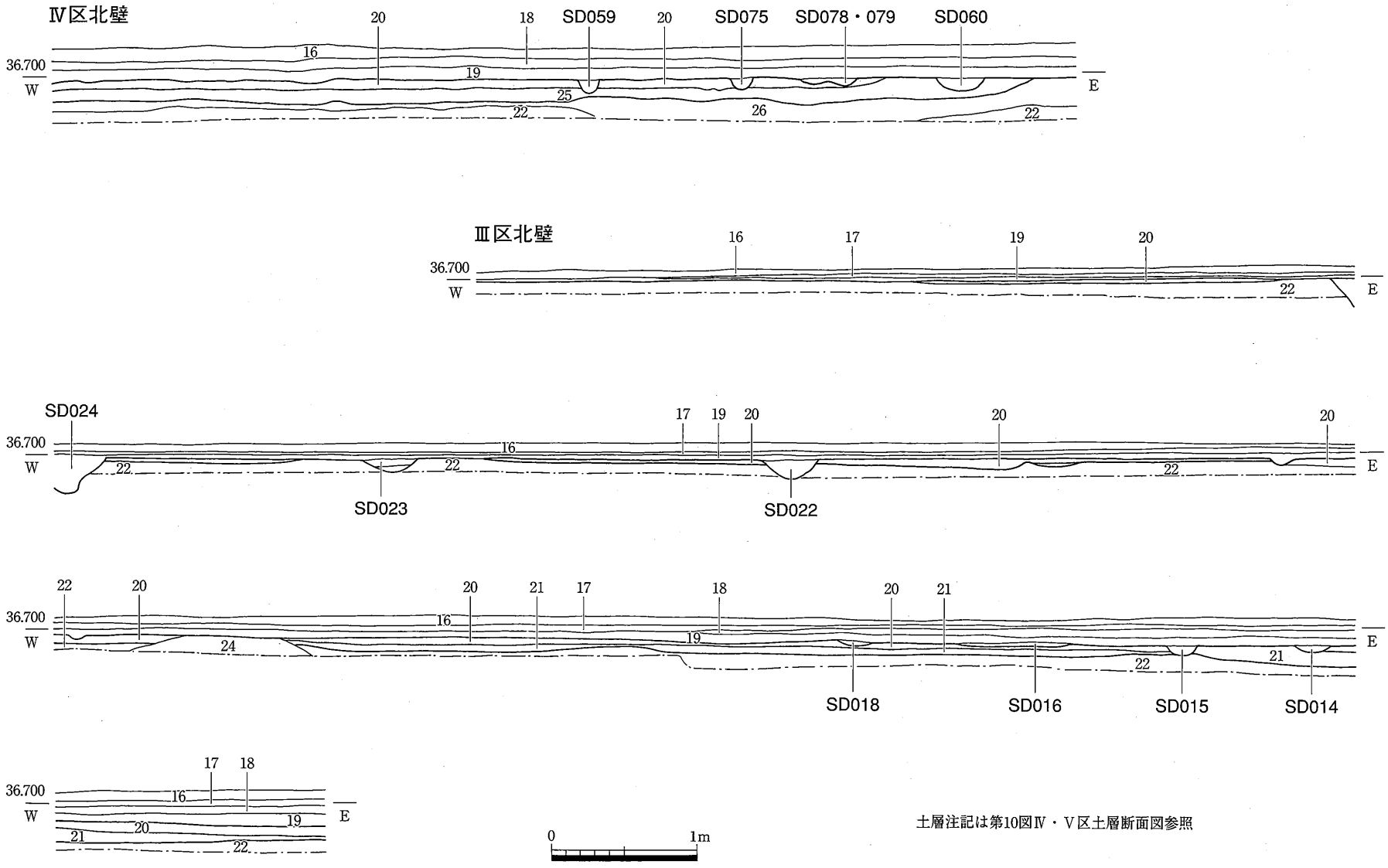
0　1m

第7図　Ⅰ区土層断面図（1/40）

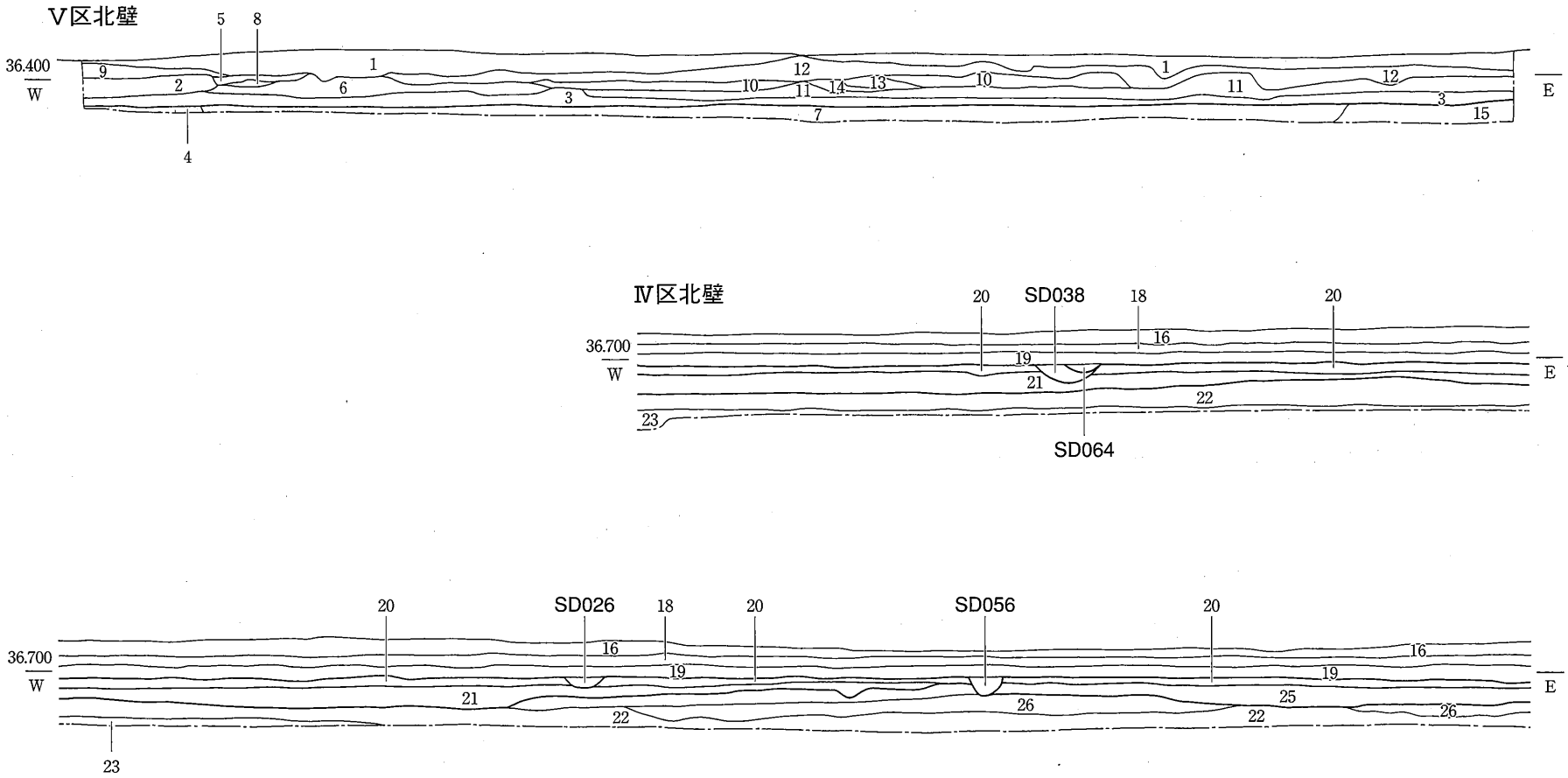


1　耕作土
1'　床土
2　灰色砂（7.5Y5/1）
3　橙色細砂質土＋褐灰色細砂質土（7.5YR6/8＋10YR6/1）
4　黄褐色＋灰黄褐色砂質土（10YR5/8＋10YR5/2）（中世包含層）
5　暗灰色粘質土（N3/(YR)）橙色（7.5YR6/8）砂を少量、灰白色（5Y8/1）砂を含む。
　南ほど砂粒が細かく、砂質が強い
6　褐灰色粘質土（10YR4/1）南ほど砂質強い（弥生中期包含層）
7　黄灰色粘質土（2.5Y4/1）灰白色砂（5Y8/1）を多量に含む
8　暗黄灰色～黄褐色粘質土（2.5Y5/2～2.5Y5/3）Mn含む。
　北ほど黄褐色が強くなる（ベース）

第８図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(1)（1/40）



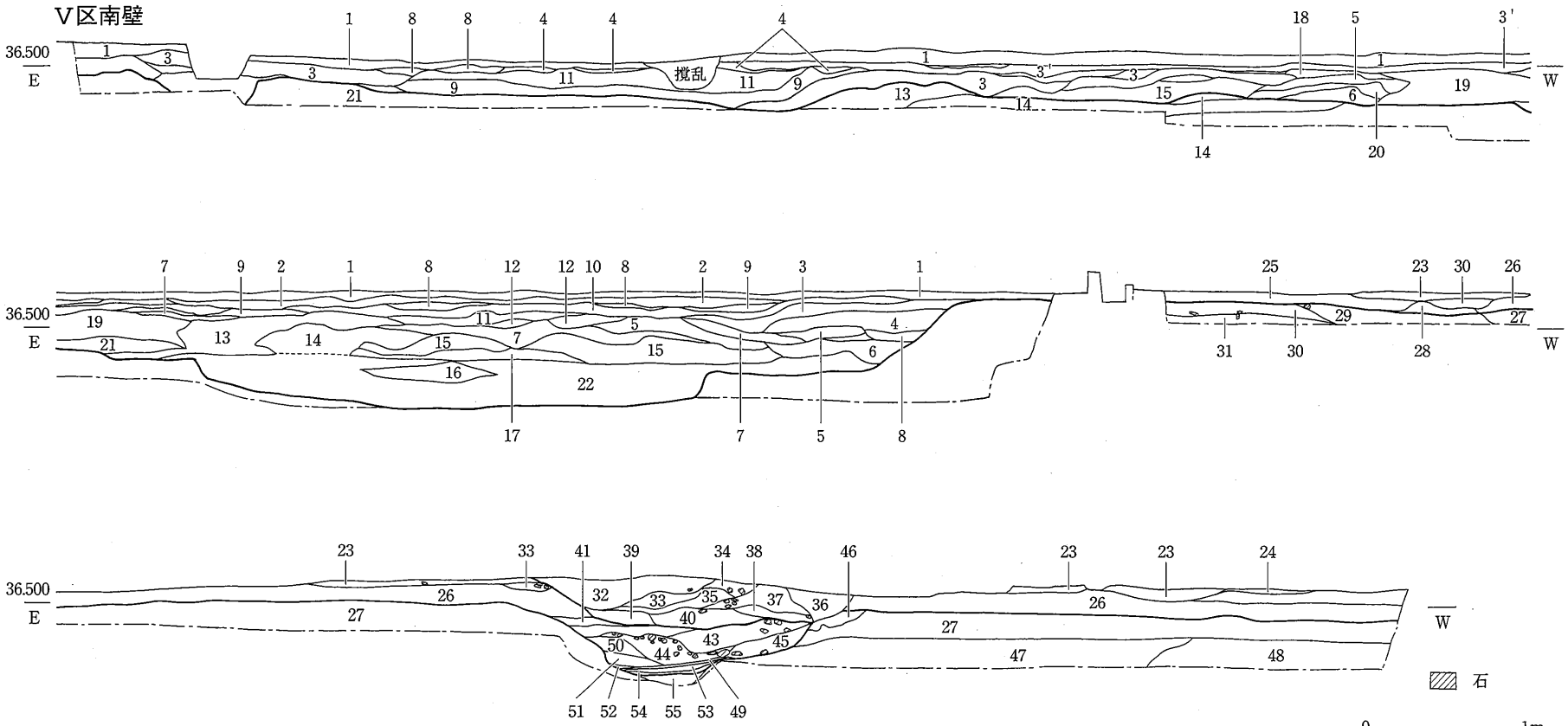
第9図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(2)（1/40）



1　造成土　5～15cmの礫を多く含む
2　花崗土
3　灰褐色細砂
4　褐灰色シルト（ベース）
5　緑灰色中砂
6　灰褐色シルト
7　灰黄色シルト　弱粘質（ベース）
8　褐灰色中砂
9　黒褐色細砂
10　灰色細砂
11　灰色シルト
12　黒褐色シルト
13　灰褐色中砂
14　黄灰色粗砂　小礫を含む
15　灰褐色砂礫（ベース）
16　灰色砂質土(N4/)（表土）
17　褐灰色弱粘質土＋明赤褐色弱粘質土（10YR5/1＋5YR5/8）
18　Ⅳ区西壁３層と同一
19　褐灰色弱粘質土(7.5YR5/1)（中世包含層）
20　黒色粘質土（7.5YR2/1）明橙褐色（10YR6/8）
灰白色（10YR8/2）の砂粒～小礫を含む（弥生後期包含層）
21　黒褐色粘質土（7.5YR3/1）Ⅲ区の西へ行くほど黒色（7.5YR2/1）に近くなる。
土壌化が著しくなる（弥生後期包含層）
22　褐色弱粘質土（10YR4/4）
23　黄灰色砂（2.5Y4/1）
24　暗灰色粘質土（N3/(YR)）１～10cm大の礫を多量に含む
25　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）
26　暗灰黄色粘質土（2.5Y4/2）

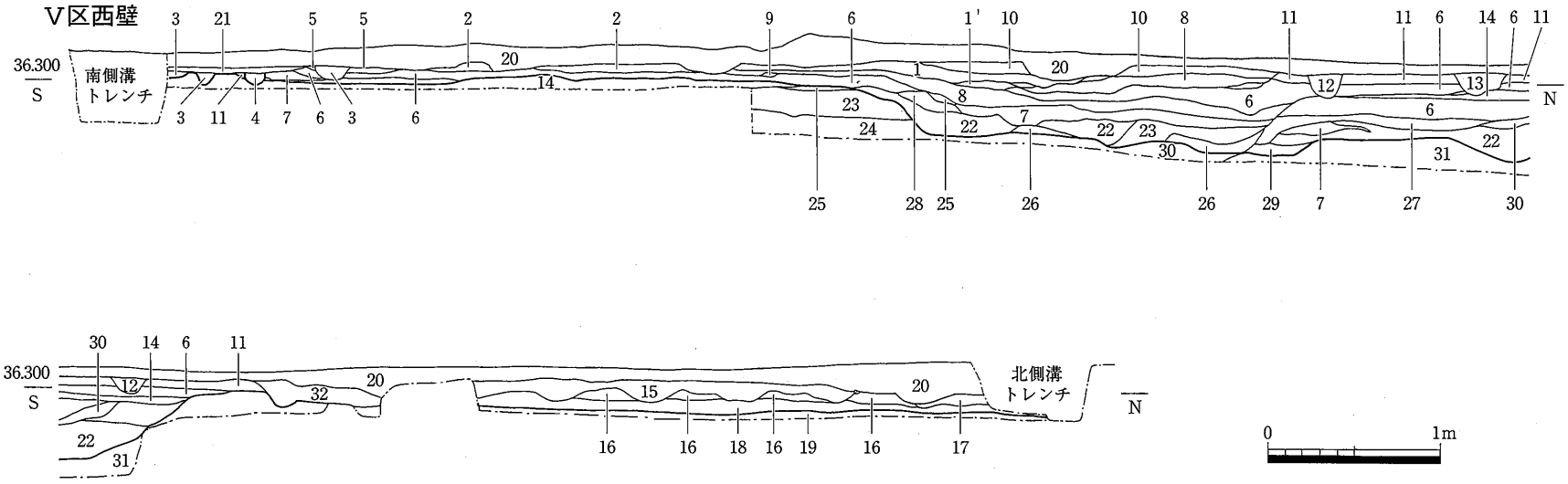
0　1m

第10図　Ⅳ・Ⅴ区土層断面図（1/40）



1　造成土
2　黒褐色粘質土
3　暗褐灰色粗砂混じりシルト
3'　暗褐灰色粗砂混じりシルト
　3層に小礫が加わる
4　褐灰色細砂混じりシルト
5　暗灰色砂礫層（礫２～４cm）
6　灰色砂礫層（礫５～10cm）
7　灰色細砂
8　暗褐灰色中砂混じりシルト
9　褐灰色中砂混じりシルト
10　褐灰色細砂混じりシルト
11　灰褐色細砂混じりシルト
12　暗灰色細砂
13　灰黄色中砂
14　灰黄色砂礫層
15　灰黄色砂礫層　14層より礫大きい
16　砂層
17　灰色粗砂
18　橙灰色粗砂混じりシルト
19　橙灰色細砂混じりシルト
20　灰褐色粗砂
21　灰褐色シルト
22　砂礫層（５～15cmの石多量）
23　濁褐黄灰色砂混じりシルト（床土）
24　濁灰黄褐色砂混じりシルト
25　褐灰色中砂質土　５cmの礫が含まれる
26　灰褐色粗砂混じりシルト
27　黄灰褐色細砂混じりシルト（地山）
28　灰褐色中砂　２～３cmの礫が含まれる
29　灰色砂礫　３～５cmの礫の密度が高い
30　黒褐色粗砂　２～３cmの礫が含まれる
31　灰色中砂　拳大の礫を若干含む
32　灰褐色礫混じりシルト　２cmの礫が混じる
33　淡灰色細砂混じりシルト　植物の細い根を含む
34　灰褐色砂礫　２～３cmの礫の密度が高い
35　褐色細砂
36　濁灰褐色シルト質土（撹乱）
37　暗灰色礫混じり細砂　２cm～拳大の礫が混じる
38　灰褐色細砂　２～３cmの礫を含む
39　灰褐色細砂
40　暗褐灰色中砂　２～３cmの礫を若干含む
41　黒褐色粗砂
42　灰色細砂　１～２cmの礫を若干含む
43　黒褐色粗砂
44　灰色砂礫　５cm～拳大の礫が混じる
45　灰色中砂　５cm～拳大の礫を若干含む
46　褐灰色シルト　炭の小片を含む（地山）
47　暗褐灰色細砂混じりシルト
48　暗褐灰色礫混じり砂質土　拳大の礫が混じる
49　橙色砂礫
50　褐灰色シルト
51　灰褐色粗砂
52　灰色中砂
53　青灰色シルト
54　暗灰色細砂混じり粘質土
55　青灰色シルト混じり細砂（地山）

第11図　V区土層断面図(1)（1/40）



1　黄褐色砂混じりシルト
1'　黄褐色砂混じりシルト　1層より砂多い
2　黄褐色シルト
3　褐灰色シルト
4　暗褐灰色細砂
5　灰褐色砂混じりシルト
6　黄灰色シルト
7　灰褐色細砂
8　灰褐色中砂
9　黄灰色砂混じりシルト
10　褐灰色中砂
11　褐灰色砂混じりシルト
12　黄灰色砂混じりシルト
13　暗褐灰色中砂混じりシルト
14　灰褐色砂混じりシルト
15　濁黒灰色土（撹乱）
16　暗灰褐色砂混じりシルト（旧耕作土）
17　灰黄色細砂（旧耕作土）
18　灰褐色細砂（旧耕作土）
19　褐灰色シルト
20　造成土・撹乱
21　褐灰色細砂
22　灰色砂礫
23　黄灰色細砂
24　灰黄色細砂
25　灰褐色細砂
26　暗灰色粘質土
27　灰色細砂混じり粘質土
28　灰黄色シルト
29　灰色中砂
30　褐灰色粗砂
31　灰褐色粗砂混じりシルト
32　暗灰褐色砂混じりシルト

第12図　V区土層断面図(2)（1/40）

第２節　遺構・遺物

１．縄文時代の遺構・遺物

Ⅴ区SR02（第６・13・14図）

Ⅴ区中央部付近で検出した自然河川である。調査区中央付近で出現し、北西方向へ延びた後、南西へ屈曲し、調査区外へ延びる。調査区南半部では攪乱が及んでいて検出できなかった。幅は9.4m、深さ50cm程度、断面形状は浅い窪地状を呈する。埋土は概ね下層は灰色砂礫、灰褐色砂混シルトなどで、上層は灰褐色細砂、灰黄色シルトなどである。ベースは灰黄色細砂、灰褐色粗砂混シルトなどで、地盤の不安定な土地に流路は刻まれている。埋土中からは縄文土器、サヌカイト片が出土したほか、流路の上面からは多くの縄文土器が出土した。

１・２は埋土中から出土した遺物である。１は縄文土器深鉢である。内外面とも貝殻状痕が残る。２はサヌカイト製石鏃である。凹基式である。

３～23はSR02の上位層で出土した遺物である。３～14は縄文土器である。３～７は浅鉢である。８～14は深鉢である。８～10は口縁部で、口縁端部から少し下側に突帯文を巡らせる。８・９は刻目を持つが、10は刻目はない。11～14は体部の中位部分である。刻目を持つ突帯を巡らせ、その上部はヘラミガキやナデ、下部はヘラケズリ、板ナデで調整する。15・16は弥生土器である。15は甕である。バケツ型を呈する器形で、逆Ｌ字型の口縁端部が付く。口縁端部には刻目を施す部分と施さない部分がある。体部外面には４条のヘラ描き沈線が巡らされる。16は蓋である。17～23はサヌカイト製石器である。17～21は石鏃である。17・18は平基式石鏃、19～21は凹基式である。22は石錐である。23は打製石斧である。ほぼ全体に敲打痕、先端には摩滅痕が顕著に残る。

遺構の埋没時期は概ね縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてと考えられる。

２．弥生時代中期の遺構・遺物

Ⅲ区SK03・04（第４・15～17図）

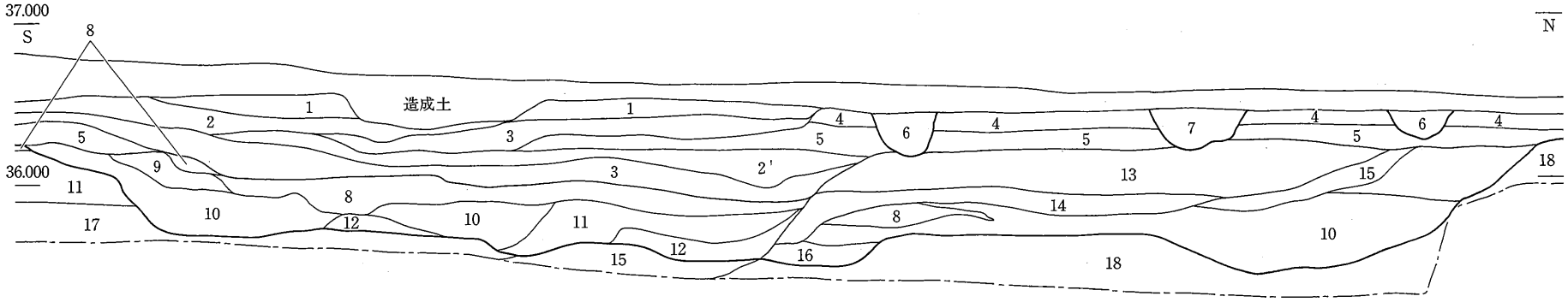
Ⅲ区中央やや東より付近で検出した土坑である。２基の土坑が連なって検出された。断面観察からは土坑の掘り込みはSK04のほうが先行するが、最終的な埋没は同時であったと考えられる。SK03とSK04を合わせて28ℓ入りコンテナ１箱分の遺物が出土したが、全般に摩滅が著しい。

SK03は楕円形を呈し、長軸2.60m、短軸1.33m、深さ44cm、埋土は上層が黒褐色弱粘質土で小礫を若干含み、中層はオリーブ黒色砂質土、下層は灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器が出土した。

SK04は南東側をSK03により壊されているが、楕円形を呈し、長軸3.32m、短軸は２m程度、深さは29cm、埋土は上層がSK03と共通で、下層は黒色粘質土で炭化物を若干含む。埋土中からは弥生土器が出土した。

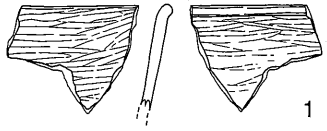
24～40はSK03から出土した弥生土器である。24は壺頸部で、４条の貼付突帯を残す。25～33は甕である。25～27は外面が無文で、ヘラミガキを施す。口縁端部はすべて逆Ｌ字型口縁を呈する。28～33は体部に概ね５～６条１単位の櫛描き沈線文を３～４単位施し、その下部には30は工具による刺突文を、31・32は櫛描き波状文を施す。28・31・32は如意状口縁、その他は逆Ｌ字型口縁で、29には不等間隔の刻目を、31には刻目を施す。34～36は鉢である。５～６条１単位の櫛描き沈線文を３～４単位施し、35・36は櫛描き波状文を施す。35・36は２孔１対の穿孔を施す。37は蓋である。体部中位部分は欠損するが、頂部と端部は同一個体である。38は底部である。39は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。半分程度は割れて欠損する。40は砂岩製の砥石である。４面に擦痕を残す。壺は前期末頃、その他は概ね中期初頭頃と考えられる。

41～46はSK04から出土した弥生土器である。41は壺体部である。７条１単位の櫛描き文を施し、櫛描き文の間には刺突文を施す。42～46は甕である。42は逆Ｌ字型口縁を呈し、ヘラ描き沈線を３条施す。43・44は

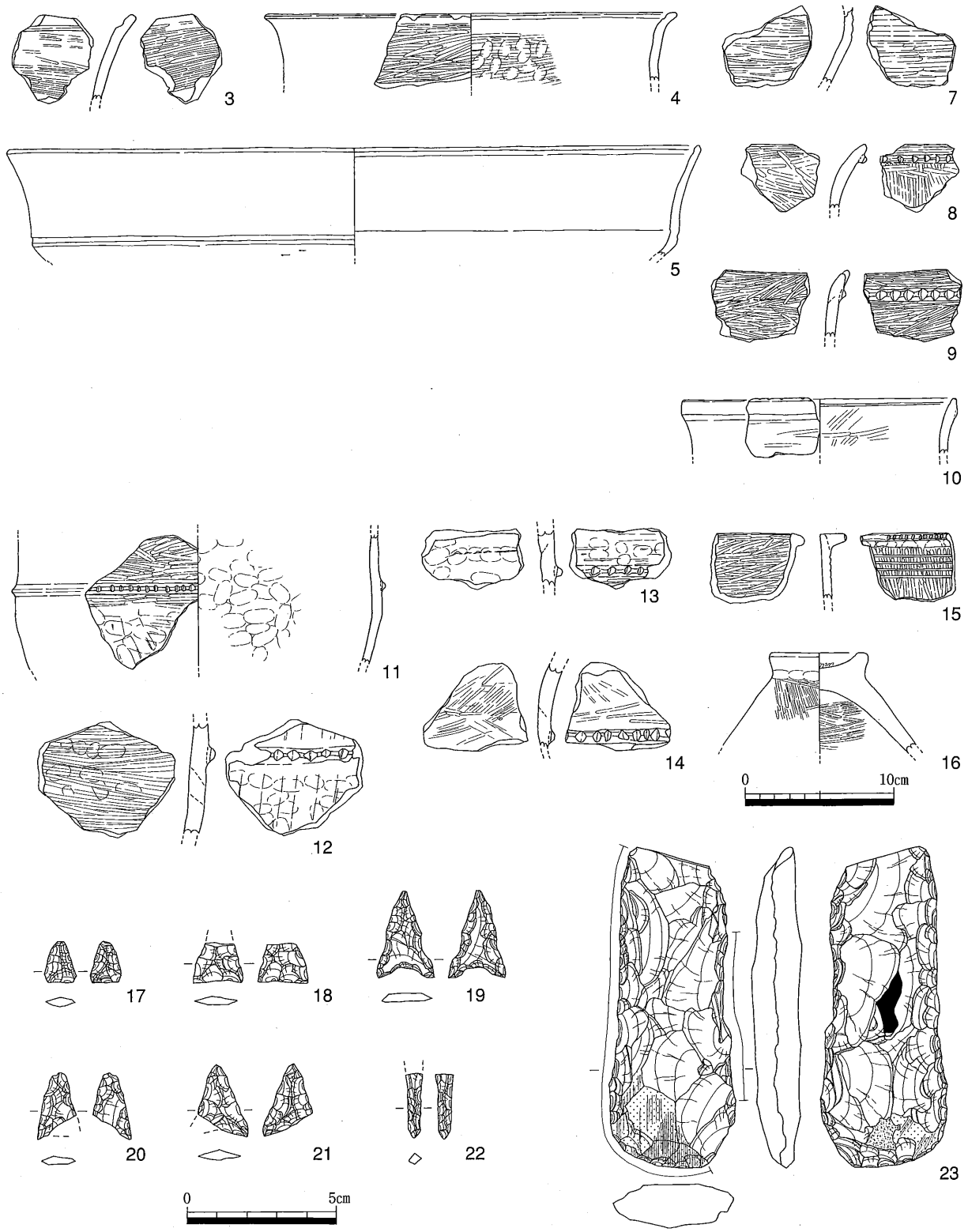


1　褐灰色中砂
2　黄褐色砂混じりシルト
2'　黄褐色砂混じりシルト
（2層より砂が多い）
3　灰褐色中砂
4　褐灰色砂混じりシルト
5　黄灰色シルト
6　黄灰色砂混じりシルト
7　暗褐灰色中砂混じりシルト
8　灰褐色細砂
9　灰黄色シルト
10　灰色砂礫
11　黄灰色細砂
12　暗灰色粘質土
13　灰褐色砂混じりシルト
14　灰色細砂混じり粘質土
15　褐灰色粗砂（ベース）
16　灰色中砂
17　灰黄色細砂（ベース）
18　灰褐色粗砂混じりシルト（ベース）

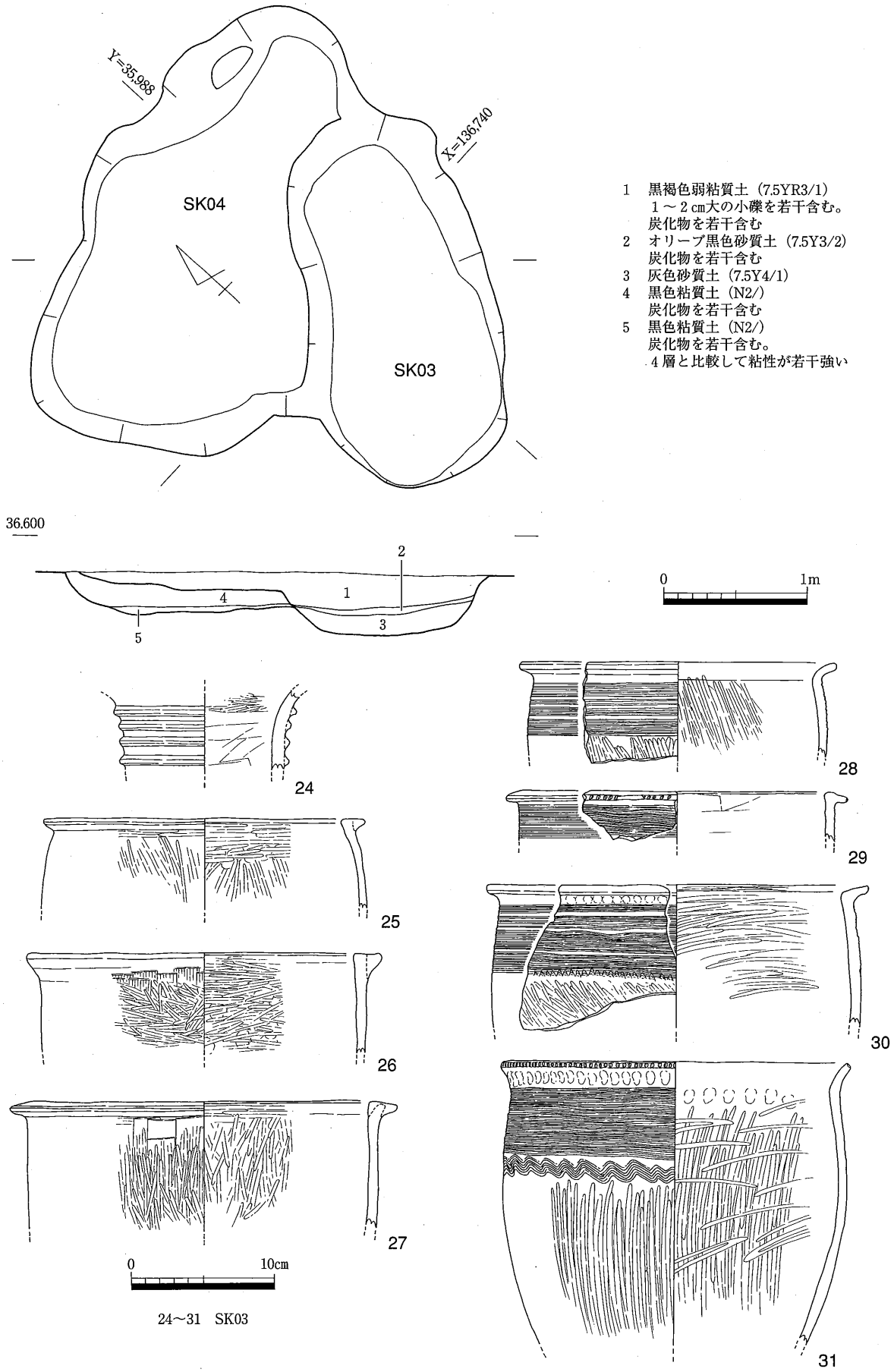
8～14・16　SR02



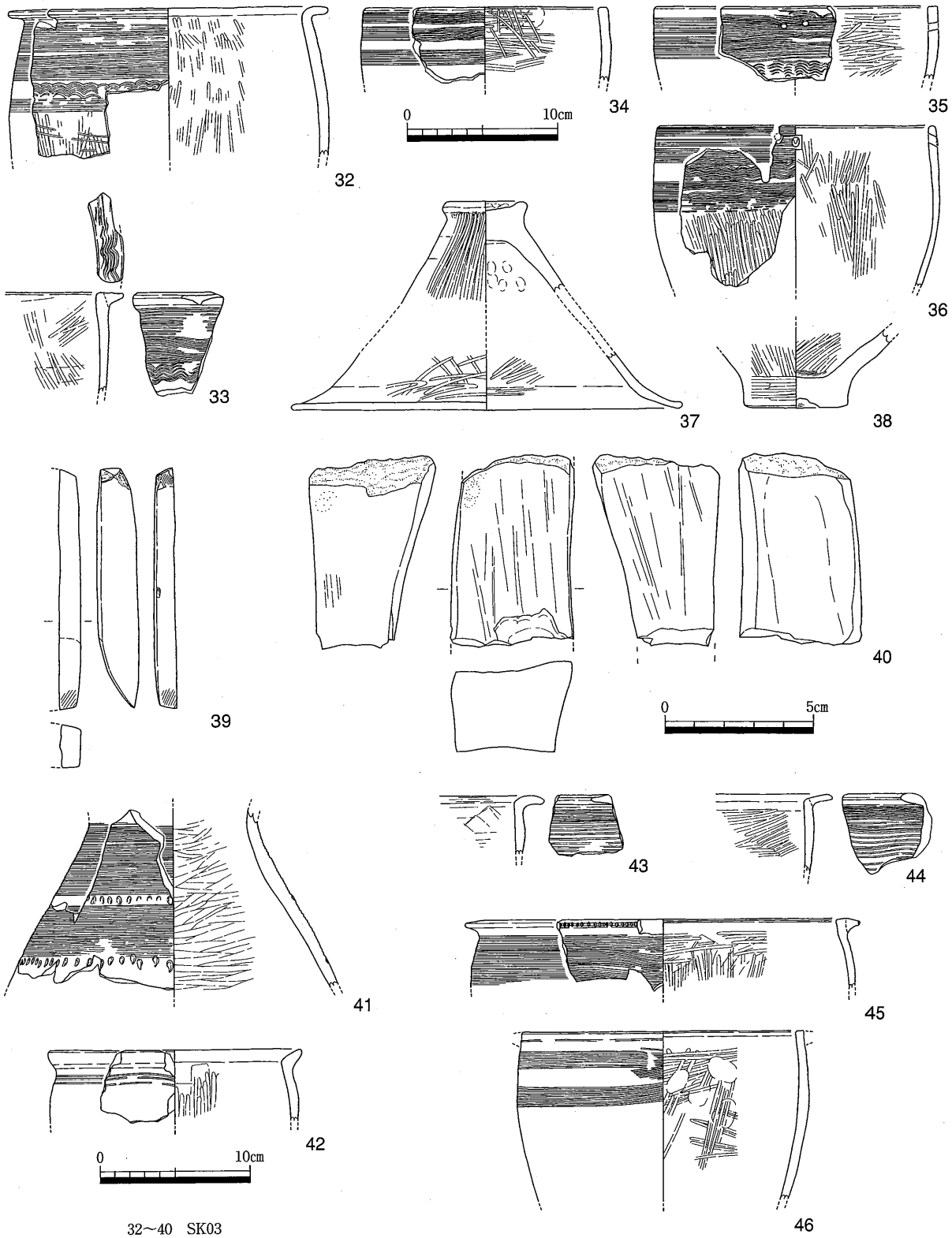
第13図　Ⅴ区SR02断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第14図　Ⅴ区SR02上位出土遺物（1/4・1/2）

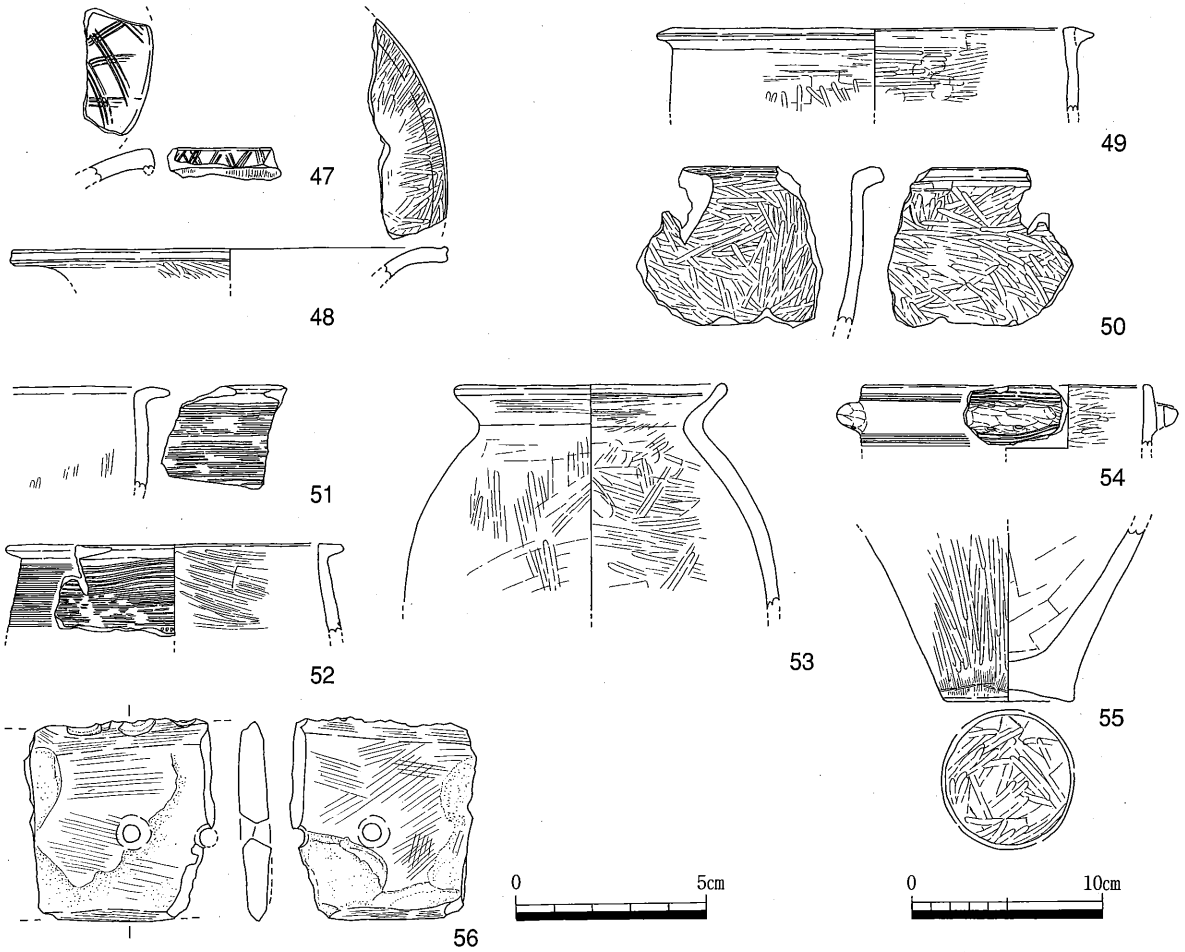


第15図　Ⅲ区SK03・04平・断面図（1/40）、出土遺物(1)（1/4）



32～40　SK03
41～46　SK04

第16図　Ⅲ区SK03・04出土遺物(2)（1/4・1/2）



第17図　Ⅲ区SK03・04出土遺物(3)（1/4・1/2）

小破片で、如意状口縁を呈し、４～６条１単位の櫛描き沈線文を施す。45は７条１単位の櫛描き沈線文を３単位以上施し、口縁端部には刻目を施す。46は櫛描き沈線文を４単位程度施すと考えられるが、摩滅が著しく観察がむずかしい。本来逆Ｌ字状の口縁端部を持つと思われ、口縁端部から１cm幅の剥離痕跡がある。

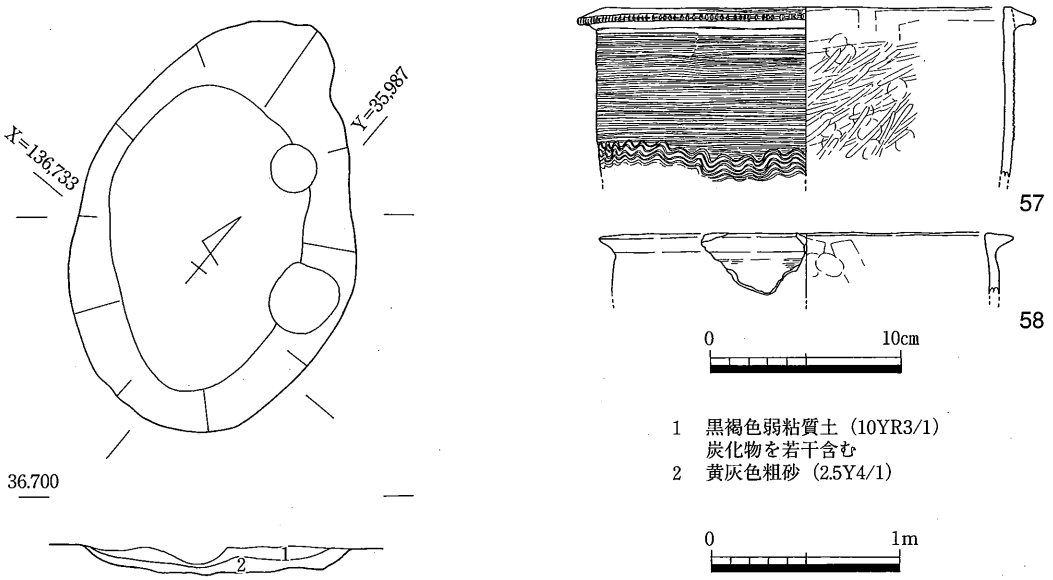
47～56はSK03・SK04を同時に掘り下げた際に出土した遺物で、上層部分のものと考えられる。47～55は弥生土器、56は石器である。47・48は広口壺の口縁部で、47は口縁端部と口縁部内面にヘラ描きによる斜格子文を施す。口縁端部は下側へ拡張すると考えられるが、剥離している。49～53は甕である。49・50は外面は無文で、内外面ともヘラミガキで調整する。51・52は４～６条１単位の櫛描き沈線文を４単位程度施す。52はその下部に円形の刺突文を施す。53は土師器甕で、混入品と考えられる。54は鉢の把手部分と考えられる。把手の上・下側に櫛描き沈線文を施し、把手部分に２ヶ所に穿孔する。56は磨製石庖丁の未製品と考えられる。安山岩製で、表面には擦痕と割れ面が残る。孔が２ヶ所に残る。

出土遺物により、SK03・SK04の時期は弥生時代中期初頭頃と考えられる。

Ⅲ区SK06（第４・18図）

Ⅲ区東部で検出した土坑である。SD22の下部から検出した。楕円形を呈し、長軸2.21m、短軸1.48m、深さ13cm、埋土は上層が黒褐色弱粘質土で炭化物を含み、下層は黄灰色粗砂である。埋土中からは弥生土器甕片、サヌカイト片が出土した。

57・58とも弥生土器甕である。ともに逆Ｌ字型口縁を呈し、櫛描き沈線文を施す。57は６条１単位の櫛描き沈線文を５単位施し、その下部に櫛描き波状文を施す。口縁端部には刻み目を施す。58は表面の摩滅が著しく、櫛描き沈線文はわずかに残るものの、ほとんど観察できない。



第18図　Ⅲ区SK06平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期初頭頃と考えられる。

Ⅳ区SK12（第５・19～22図）

Ⅳ区東端付近で検出した土坑である。断面観察によりST02の上面から掘り下げられたことがわかる。不整形を呈するが、北側の張り出した部分はやや浅めで、本来は長軸3.94m、短軸2.94mの隅丸長方形の土坑に北側と南側に浅い張り出しがついた形状であろう。断面形状は浅いⅢ型で、深さは26cmである。16層の下部付近から弥生土器がまとまって出土した。廃棄土坑と考えられる。

59～87は弥生土器である。59～61は壺である。59は頸部小片で、ヘラ描き沈線文が８条残る。中央付近の最もくびれた箇所は突帯状に削り出しており、そこに刻目を施す。60は頸部外面と口縁端部内外面に刺突文を密に施す。61は体部で、直立する頸部が付くと考えられる。62～80は甕である。62・63はともに小片で６条以上のヘラ描き沈線を施し、口縁端部に刻目を施す。64～76は櫛描き沈線文を施す。概ね５～６条１単位の櫛描きで、３～６単位程度を施す。調整は概ね内外面ともヘラミガキである。64・69・71・75は如意状口縁、他は逆Ｌ字型口縁である。66～70は櫛描き文の下部に楕円形の刺突文を、71～73は波状文を施す。77～80は外面が無文である。口縁端部は逆Ｌ字型にし、調整は概ね内外面ともヘラミガキである。81～84は鉢である。81・82は口縁部小片で、口縁端部を緩く外反させ、刻目を付ける。81はヘラ描き沈線を３条施す。83・84は外面は無文で、口縁端部を外側へ強く折り曲げ、外面調整はハケの後下部はヘラミガキを施す。85・86は甕底部、87は底部を穿孔する。88～90はサヌカイト製石器である。88は凹基式石鏃、89・90はスクレイパーである。上部に敲打痕が残る。

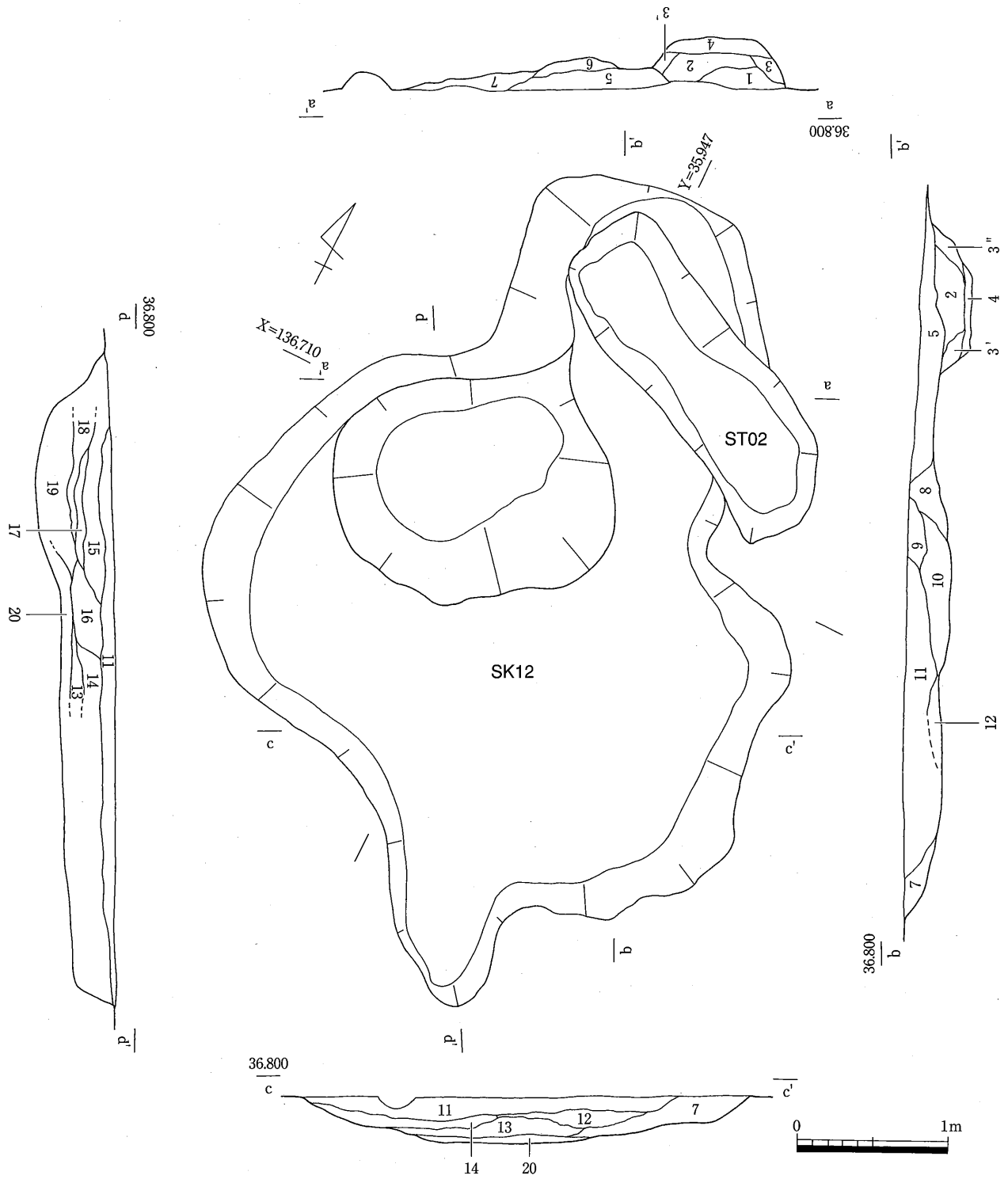
遺構の時期は弥生時代中期初頭である。

Ⅲ区SK17（第４・23図）

Ⅲ区南西部で検出した土坑である。隅丸方形に近いが、南側でやや遺構のラインが乱れている。長軸1.54m、短軸1.32m、深さ10cmで、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からは礫などとともに弥生土器小片が出土した。

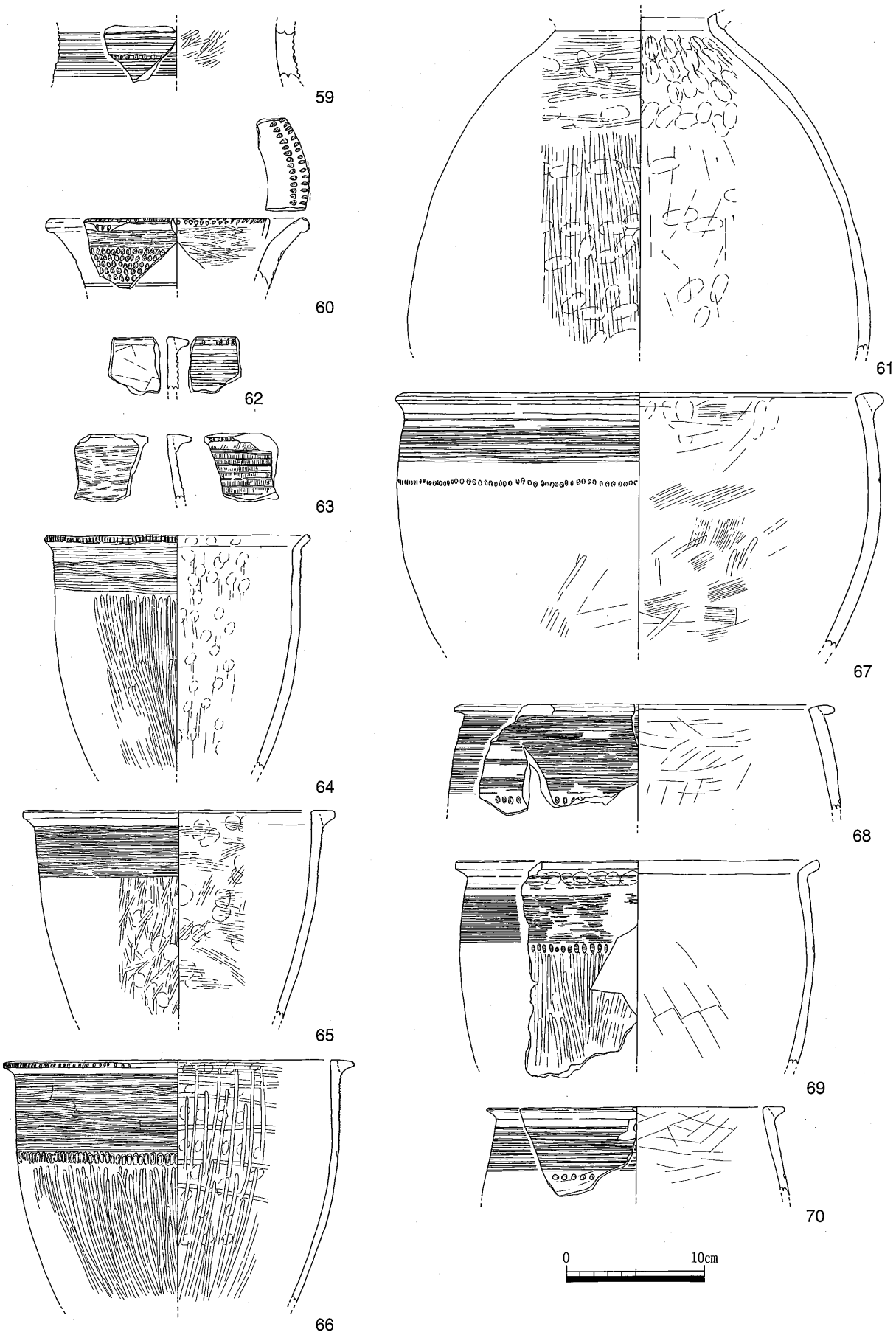
91・92とも弥生土器甕である。91は口縁部小片で、外面には６条以上のヘラ描き沈線文を施す。弥生時代前期末頃と考えられる。92は底部である。

遺構の時期は出土遺物からは弥生時代前期末頃と考えられるが、周辺の状況を考えれば、中期初頭頃の可能性もある。

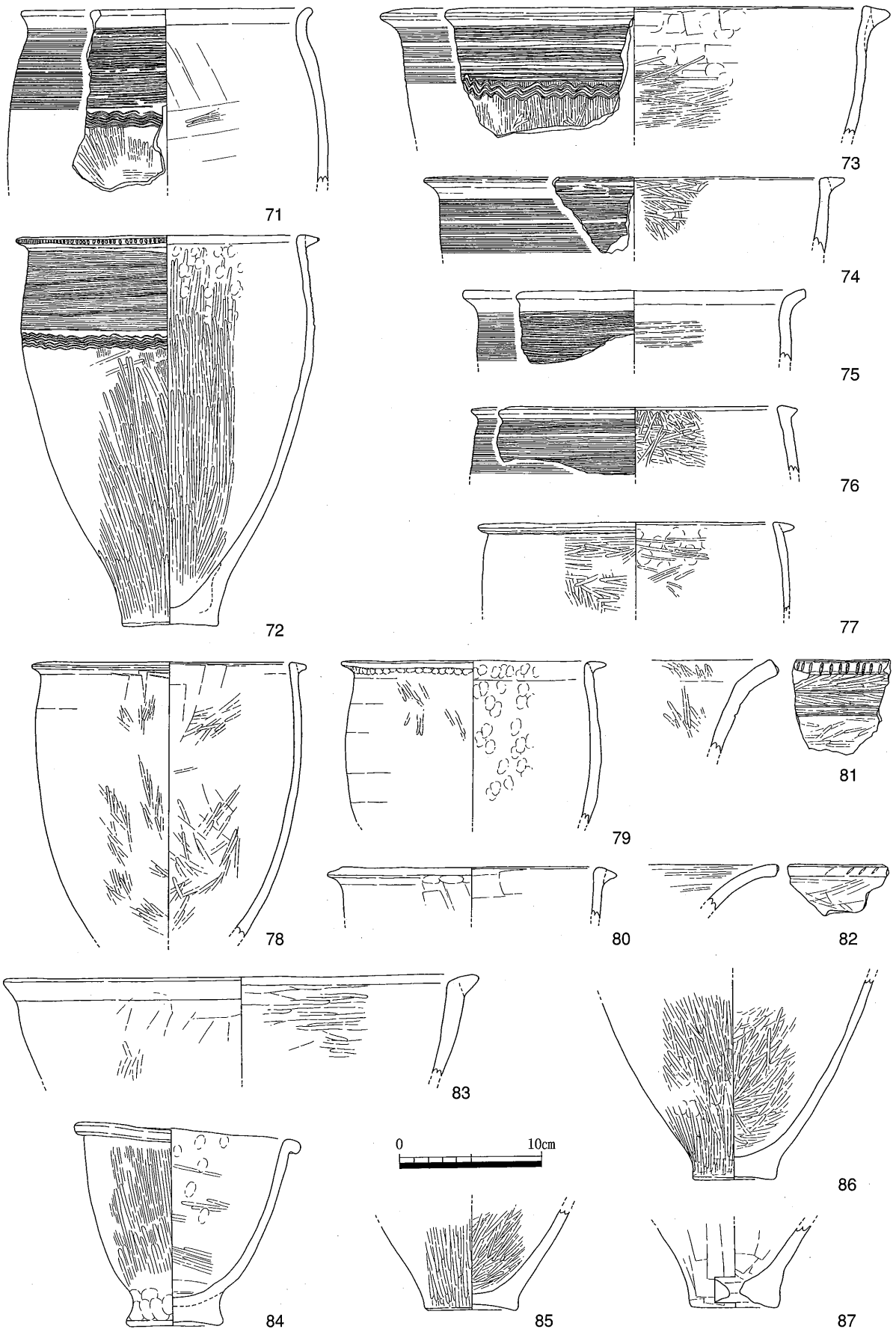


1　褐灰色弱粘質土（10YR4/1）Mn含む
　2層に比べて砂粒粗い
2　褐灰色弱粘質土（10YR4/1）Mn含む
3　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）砂粒細かい
　ベース（黄褐色砂質土（2.5Y5/3））のブロックを含む
3'（3層に同じ）ただし3層に比べ若干色調暗い
3"（3層に同じ）ただし若干粘性強い
4　暗灰色粘土（N3/）炭化物含む
5　黒褐色弱粘質土（2.5Y3/1）Mn含む
6　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）砂粒細かい
7　褐灰色砂質土（10YR4/1）砂粒細かい
8　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）砂粒粗い
9　黒褐色砂質土（10YR4/1）砂粒やや粗い
10　黒褐色砂（2.5Y3/1）砂粒粗い
11　褐灰色弱粘質土（10YR4/1）砂粒やや粗い
12　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）砂粒やや粗い
13　褐灰色弱粘質土（10YR4/1）砂粒やや粗い
14　黒褐色弱粘質土（10YR3/2）砂粒やや細かい
15　灰黄褐色弱粘質土（10YR4/2）砂粒やや細かい
　炭化物含む
16　黒色弱粘質土（2.5Y2/1）
17　黒褐色砂質土（10YR3/2）
18　黒褐色砂質土（10YR3/1）砂粒やや粗い
19　灰色砂（5Y4/1）砂粒粗い
20　暗灰色粘土（N3/）

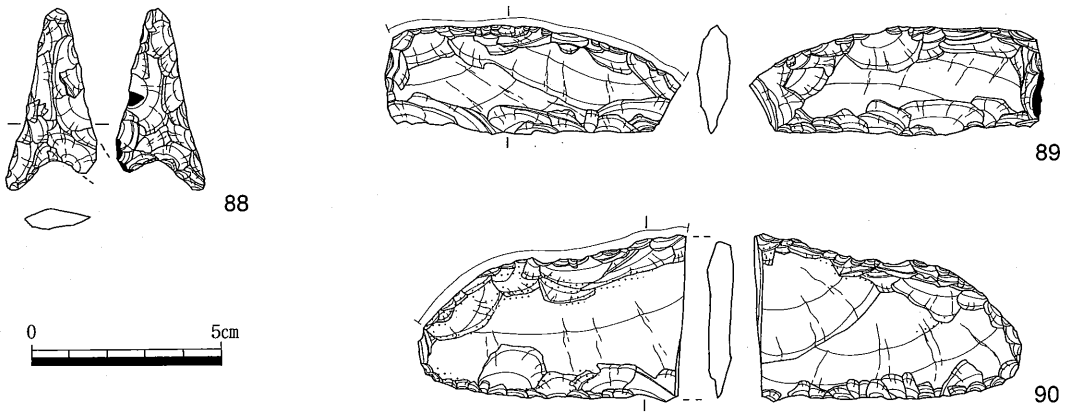
第19図　Ⅳ区SK12・ST02平・断面図（1/40）



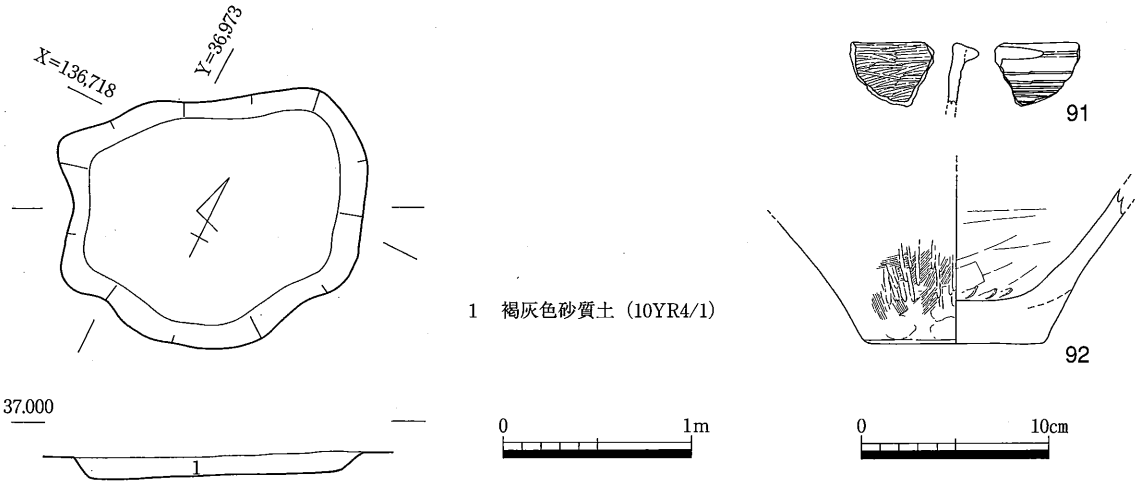
第20図　Ⅳ区SK12出土遺物(1)（1/4）



第21図　Ⅳ区SK12出土遺物(2)（1/4）



第22図　Ⅳ区SK12出土遺物(3)（1/2）



第23図　Ⅲ区SK17平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅲ区SK18（第４・24・25図）

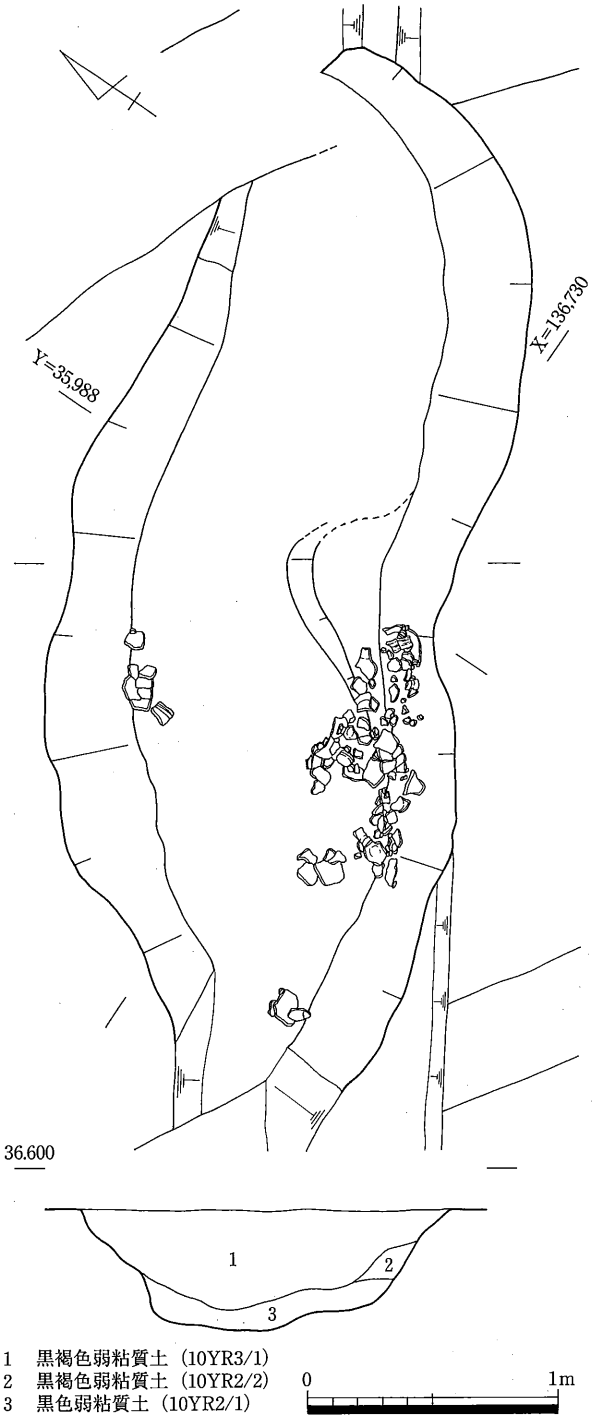
Ⅲ区南東部付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸4.26m、短軸1.53m、断面形状は逆台形に近い。埋土は概ね黒褐色弱粘質土で、最下層は黒色弱粘質土である。土坑の南西辺の立ち上がり部分付近から弥生土器が張り付くように出土した。廃棄土坑と考えられる。

93～104は弥生土器である。93は壺である。頸部は短く、球形の体部を持つ。94～103は甕である。94～98は外面無文で、ヘラミガキを密に施して調整する。94・95・97は如意状口縁、その他は逆Ｌ字型口縁を持つ。96は口縁端部上面にもヘラミガキを施す。99～103は櫛描き沈線文を施す。概ね５～６条１単位で、５単位程度を巡らせる。櫛描き沈線文の下部に100・101は刺突文、102・103は波状文を施す。調整はいずれも内外面ともヘラミガキを密に施す。102は口縁端部に刻目を施す。100は焼成後に底部に穿孔を施す。103は口縁端部を欠くが、体部は丸みを帯び、くの字に屈曲する口縁端部を持つと考えられることから、他の櫛描き沈線文を持つ土器より若干新しいと考えられる。104は鉢である。口縁端部まで櫛描き沈線文を施し、沈線の下部には３角形の刺突文を巡らせる。

遺構の時期は弥生時代中期初頭～前半頃と考えられる。

Ⅳ区SK19（第５・26図）

Ⅳ区東端部で検出した土坑である。東半部は調査区外へ伸びるため全体の規模・形状は不明であるが、概ね



第24図　Ⅲ区SK18平・断面図（1/30）

長楕円形を呈すると考えられ、長軸1.98m以上、短軸1.42m、深さ24cmを測る。埋土中からは弥生土器が出土した。廃棄土坑と考えられる。

105～108は弥生土器である。105～107は甕で、105は櫛描き沈線文、106はヘラ描き沈線文を施し、107は無文である。108は壺の底部と考えられる。

遺構の時期は弥生時代中期初頭頃と考えられる。

Ⅲ区SK20・21（第４・27図）

Ⅲ区南部から検出した土坑である。２基重複して検出した。遺構検出時の平面形態からSK20が新しい。SD22・SD95の下部で検出した。

SK20は不整形を呈し、長軸2.83m、短軸1.83m、深さ17cmを測る。

SK21は不整形で、長軸1.64m、短軸0.76m以上、深さ６cmを測る。SK21からは出土遺物はなかった。

109～111はいずれもSK20から出土した弥生土器である。109は壺で、外面には６条１単位の櫛描き沈線文を４単位と３角形の刺突文をそれぞれ２段に施す。110・111は甕で、概ね５条１単位の櫛描き沈線文を４単位程度と櫛描き波状文を施す。調整は内外面ともおもにヘラミガキで調整する。110には口縁端部に刻目を施す。111は体部は丸みを帯び、口縁部はくの字に屈曲しており、新しい要素が加わったものと考えられる。112は鉢である。４条１単位の櫛描き沈線文を４単位とその下部に櫛描き波状文を施す。

遺構の時期は弥生時代中期初頭～前半頃と考えられる。

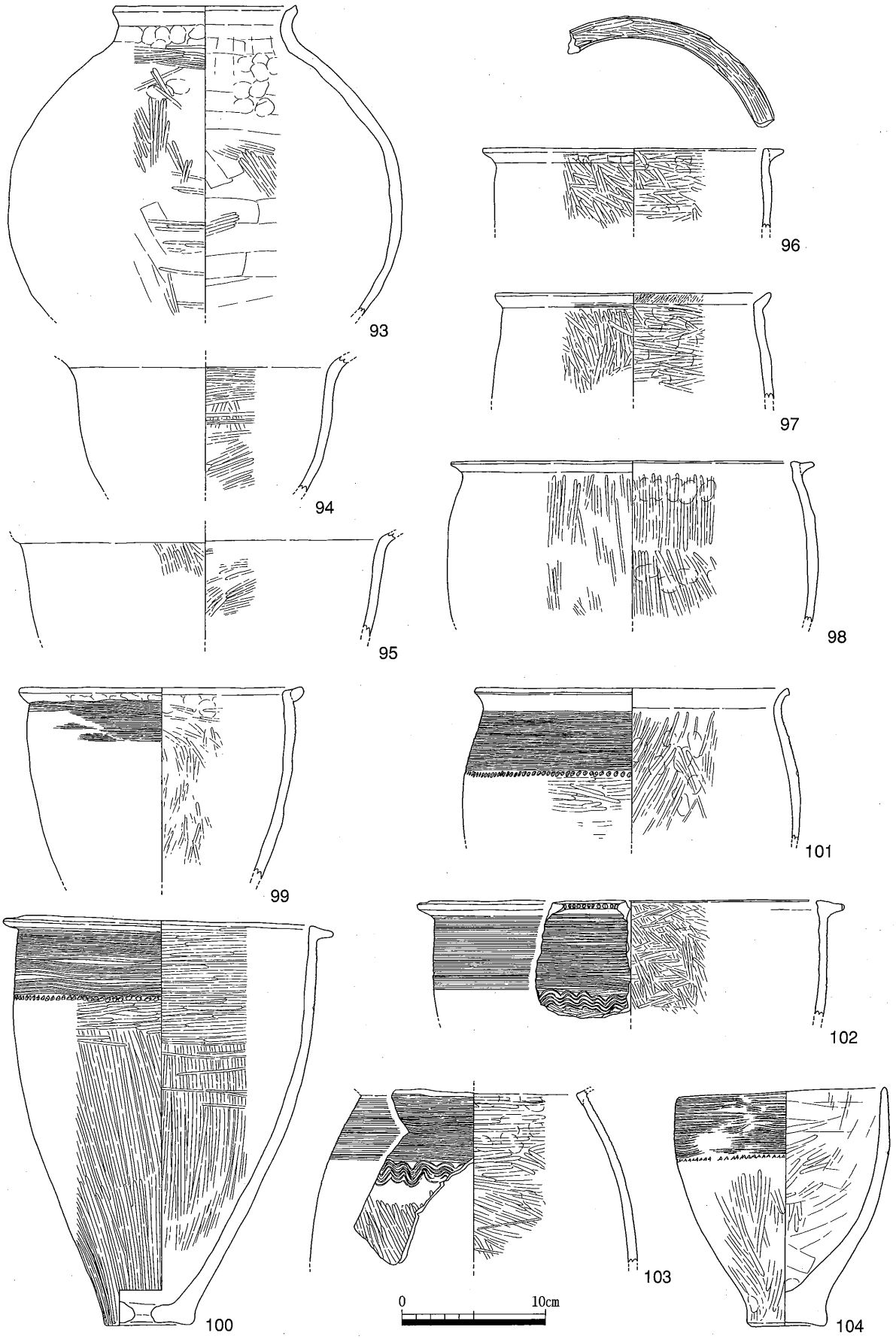
Ⅲ区SK22（第４・28図）

Ⅲ区南東部で検出した土坑である。北側の一部は削平のため検出できなかった。形状はSK20と類似する。不整形を呈し、長軸3.20m、短軸1.93m以上、深さ12cmを測る。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

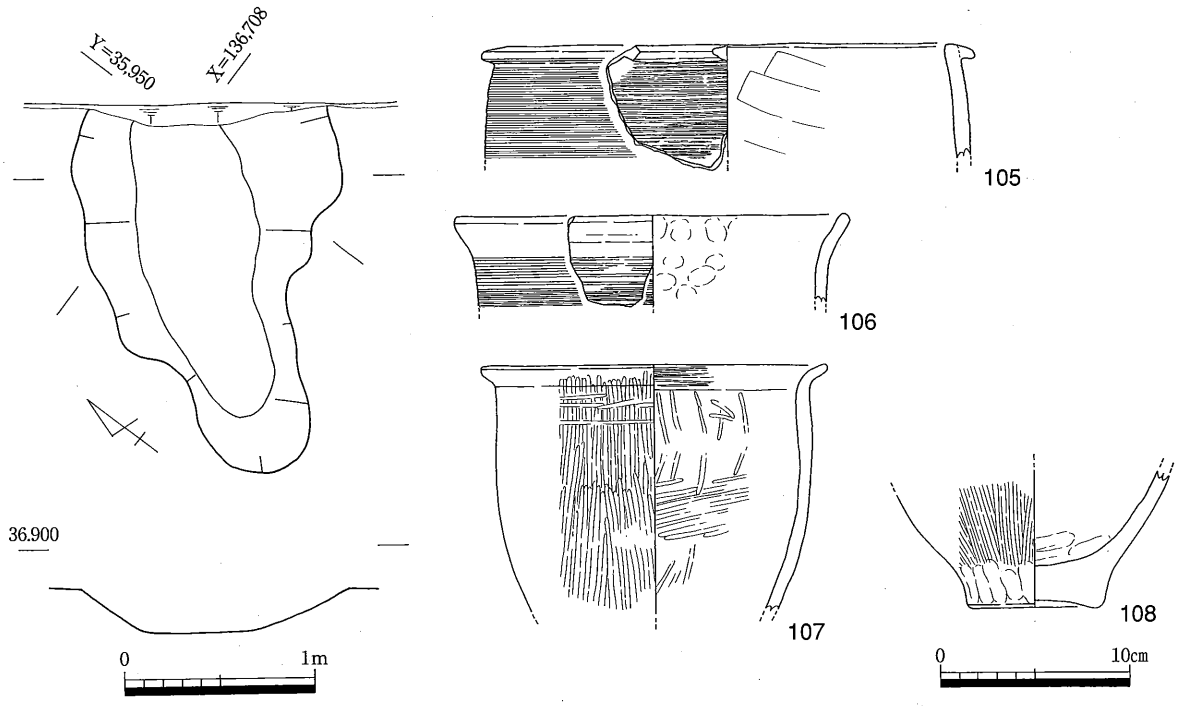
113・114は弥生土器甕である。ともに逆Ｌ字型の口縁を持つ。113は無文で内外面にヘラミガキを密に施す。114は６条１単位の櫛描き沈線文を４単位施し、その下部に波状文を施す。115はサヌカイト製の凹基式石鏃である。116は安山岩製のスクレイパーである。

Ⅲ区SK05（第４・29図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。不整円形を呈し、長軸4.21m、短軸3.54m、深さ32cm、断面形状は擂鉢状を呈する。埋土は概ね黒褐色砂質土で、１～５cm大の礫、炭化物を含む。土坑の南東部および中央付近の



第25図　Ⅲ区SK18出土遺物（1/4）



第26図　Ⅳ区SK19平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

埋土上層部分の底付近で多量の弥生土器が出土した。廃棄土坑であったと考えられる。

117～122は弥生土器である。117・118は壺で、ともに５～７条の櫛描き沈線文と櫛描き波状文を施す。119～122は甕である。いずれもくの字に曲がる口縁部をもつ。

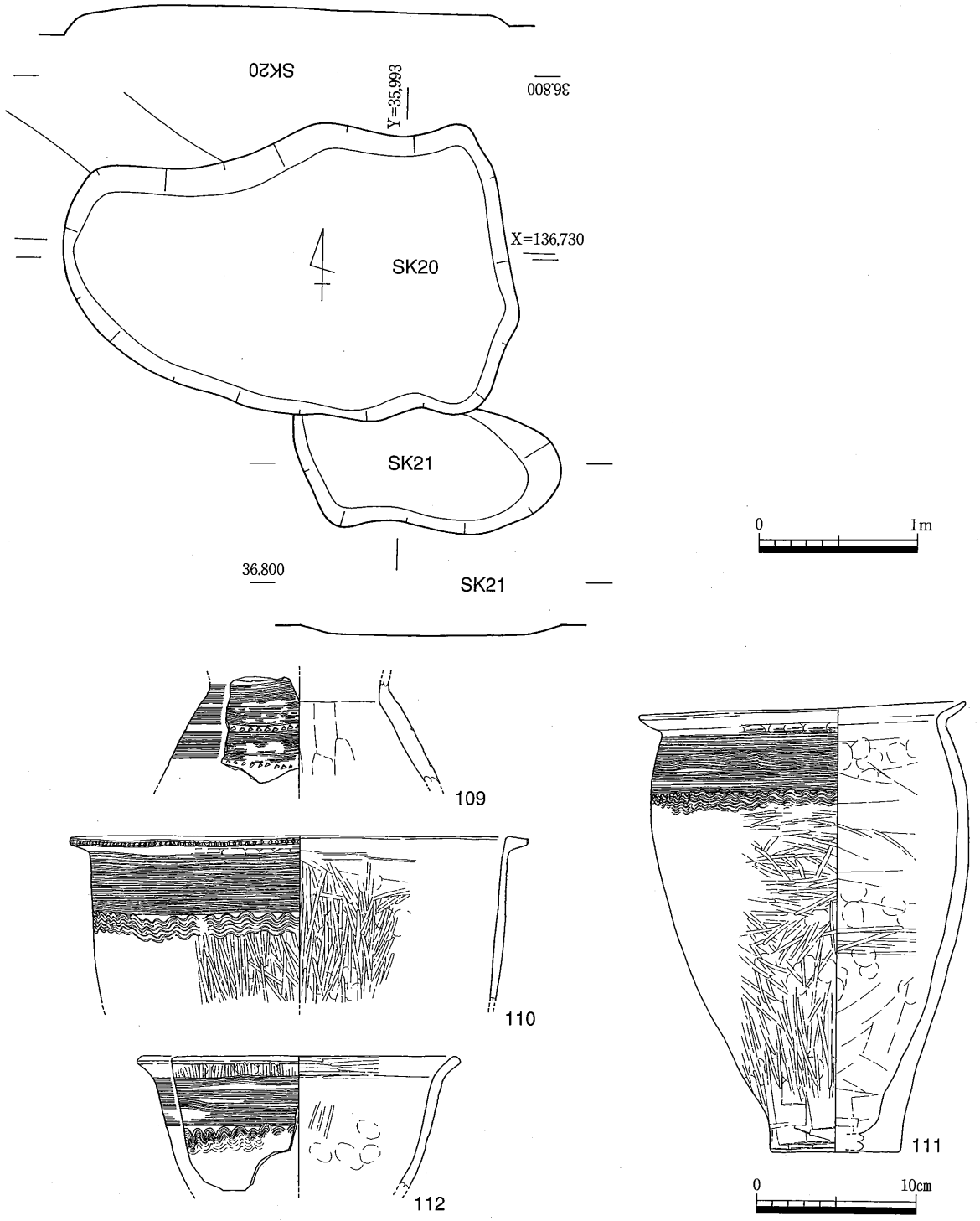
遺構の時期は弥生時代中期中頃である。

Ⅲ区SK15（第５・30～32図）

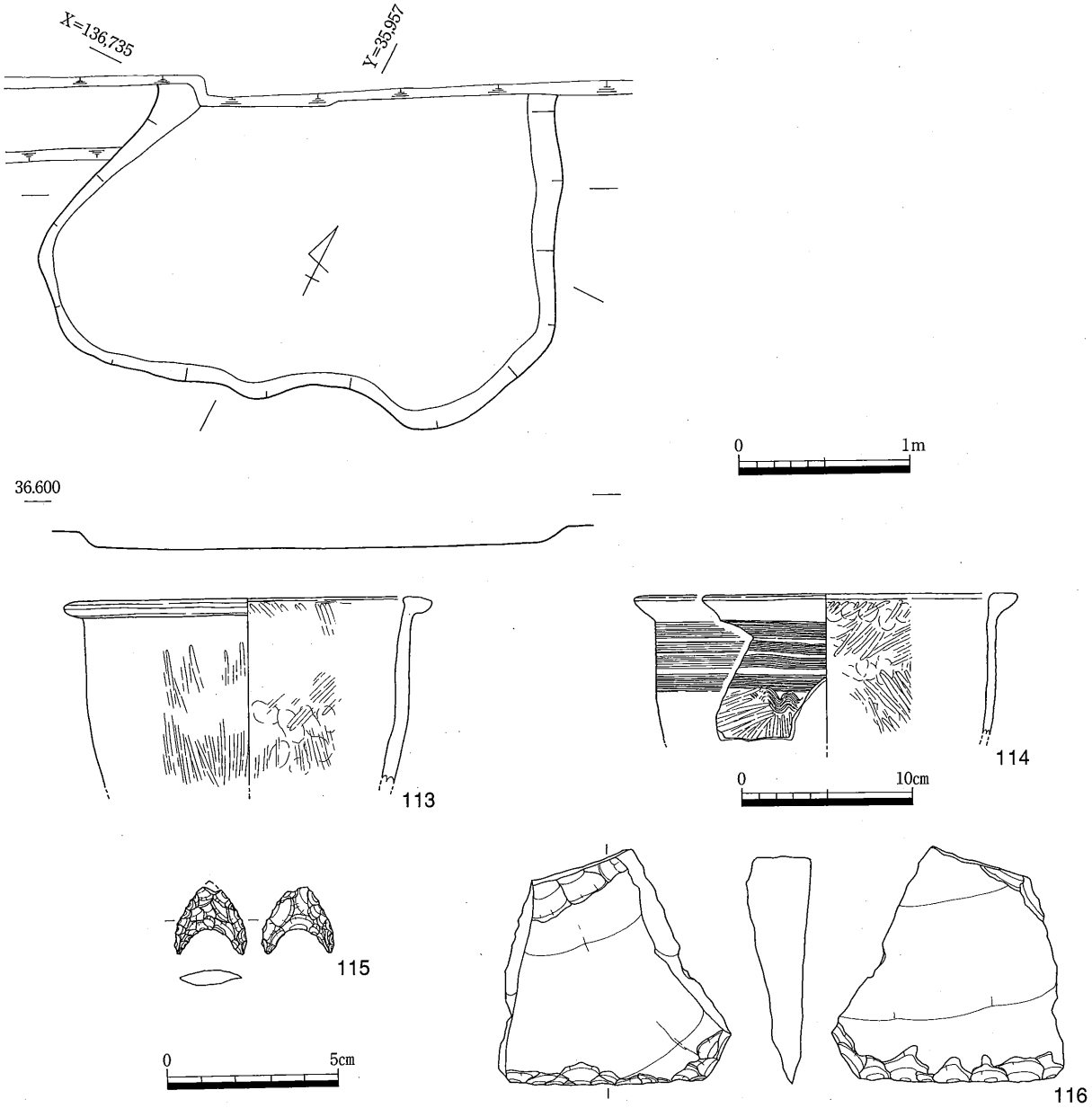
Ⅲ区南西部で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸4.62m、短軸1.80～2.85m、深さ55cmを測る。断面形状から土坑の北側は１段高くなっており、深さは33cmを測る。埋土は概ね上部が褐灰色系・暗灰黄色系、中部が黄灰色系、下部が黒色系である。平面形状の不整形な部分は型が崩れたことによるものであろう。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が多く出土した。廃棄土坑であったと考えられる。

123～141は弥生土器である。123～128は壺である。123～125・128は広口壺で、125は口縁部内面に斜格子の、口縁端部には山形のヘラ描き文を施す。128は頸部に押圧突帯を巡らせる。129～138は甕である。口縁端部はくの字に屈曲させ、外面は概ねハケののちヘラミガキで調整する。137・138は口縁端部に縦方向の刻み目を付ける。139は鉢である。ほぼ全面をヘラミガキし、口縁端部には刻み目を施す。140は底部で、側面から底面にかけて穿孔がある。141は高杯脚部である。142・143は分銅型土製品である。142はくびれた部分とその下部が残る。表面、裏面、側縁に刺突文が密に施される。143には文様は認められない。144～160はサヌカイト製石器である。144～149は石鏃である。145は平基式、その他は凹基式である。150は石鏃または尖頭器の未製品と考えられる。151は下部が欠損しているが、石鏃または尖頭器の破片と考えられる。152・153は石錐である。154～158は楔形石器である。156以外は上・下部に敲打痕が認められる。159はスクレイパーと考えられる。上部には敲打痕があるが、その他はほとんど加工されない。160は打製石斧である。下部は欠損するが、両側縁に敲打痕がある。

遺構の時期は弥生時代中期中頃と考えられる。



第27図　Ⅲ区SK20・21平・断面図（1/40）、SK20出土遺物（1/4）



第28図　Ⅲ区SK22平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区SK16（第４・33図）

Ⅲ区南西部で検出した土坑である。隅丸長方形に北西部分が張り出す形状で、長軸1.38m、短軸1.10m、深さは17cmを測る。埋土中からは摩滅した弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

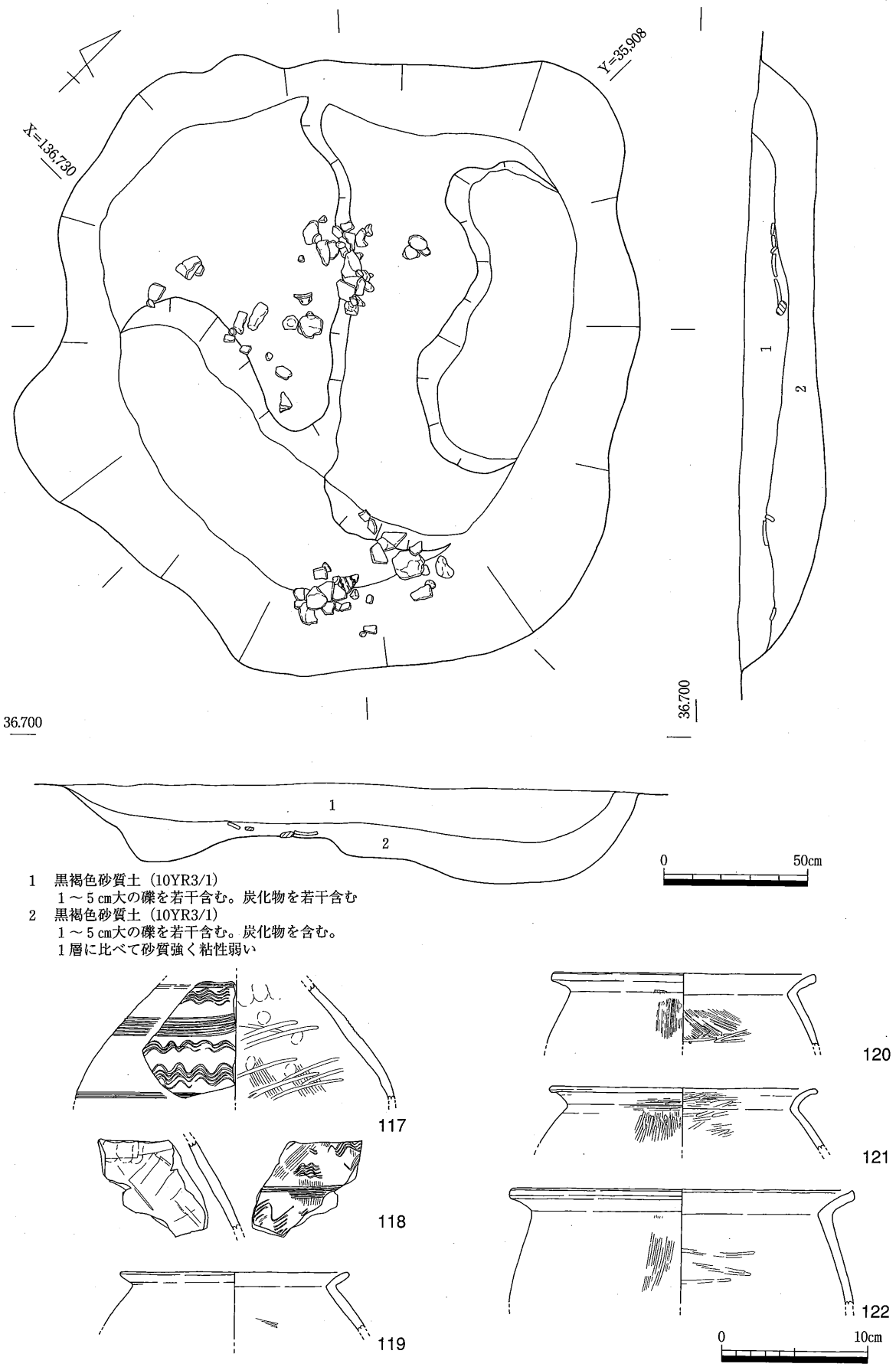
161は弥生土器甕である。内面の調整は磨滅のため不明であるが、外面はヘラミガキで調整し、口縁端部はくの字に屈曲させる。

遺構の時期は弥生時代中期中頃と考えられる。

Ⅲ区SK34（第４・34・35図）

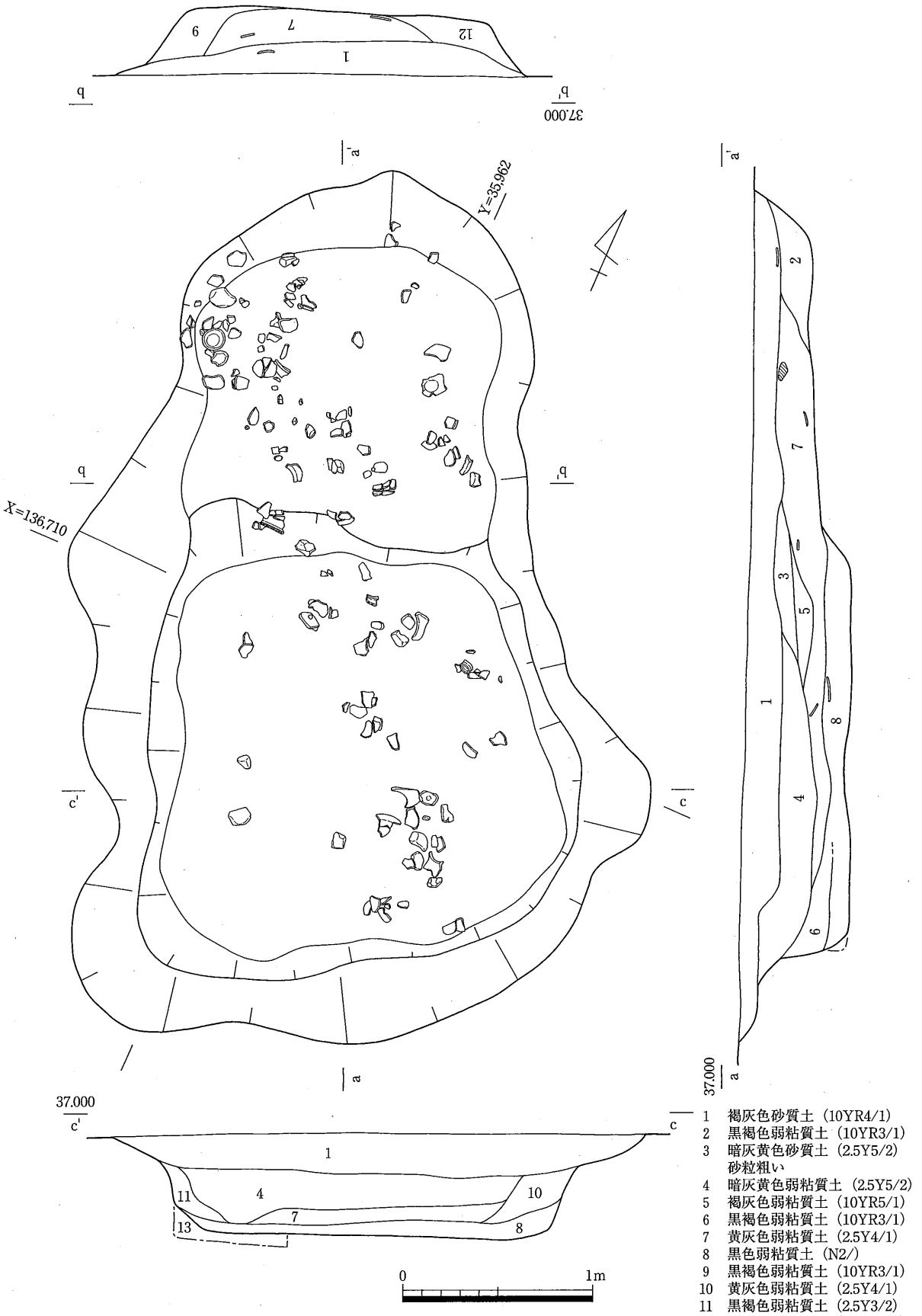
Ⅲ区西端付近で検出した土坑である。長楕円形で、長軸2.83m、短軸0.98～1.60m、深さ40.5cm、埋土は上層が褐灰色砂質土・弱粘質土、下層が黒褐色粘質土・砂質土である。土坑の北側からは土器が集中して出土した。廃棄土坑と考えられる。

162～164は弥生土器甕である。162は逆Ｌ字型口縁をもち、163・164は屈曲する口縁部を持つ。調整は概ねハケとヘラミガキを施す。165～170はサヌカイト製石器である。165～167は石鏃で、165は平基式、



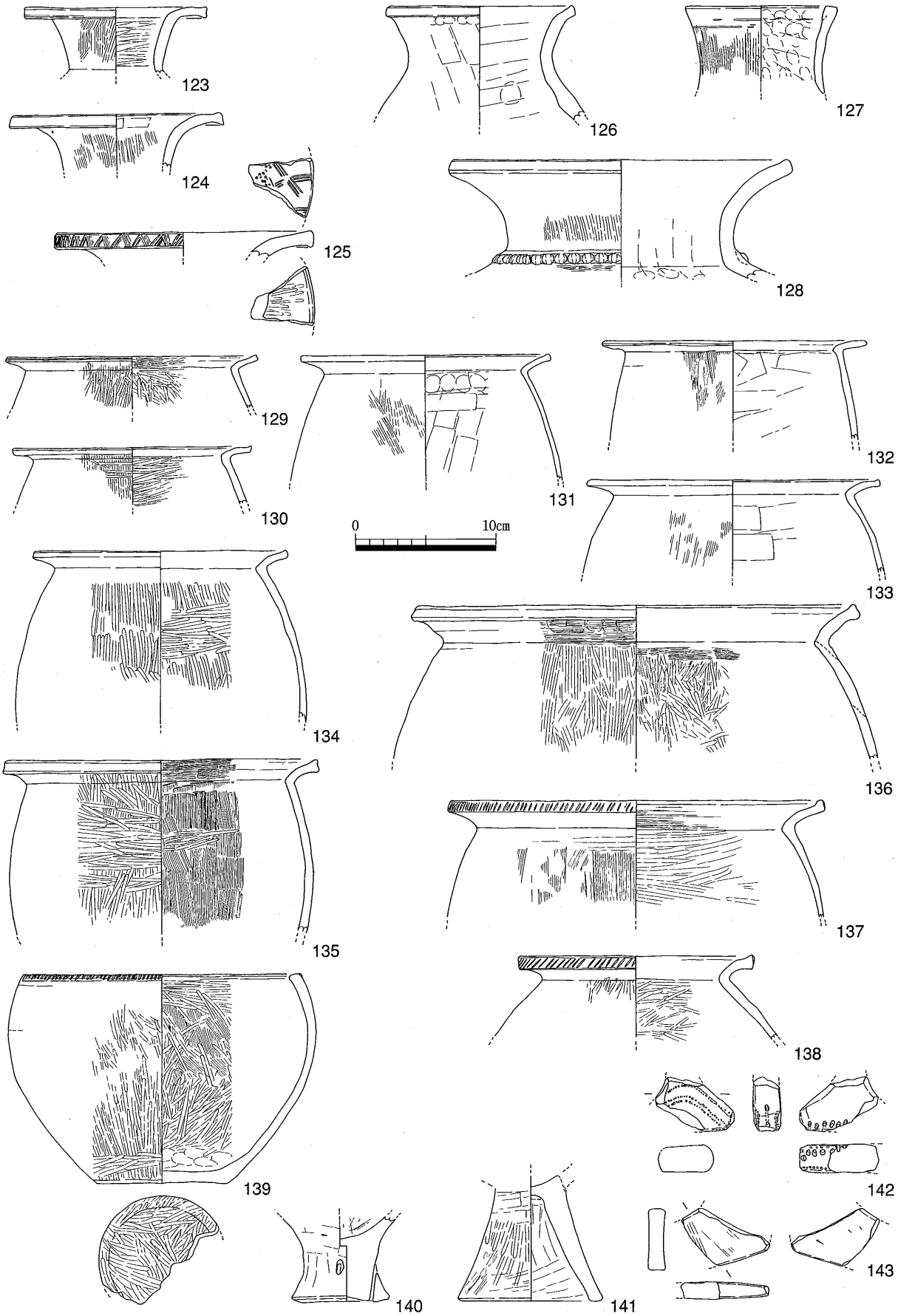
1　黒褐色砂質土（10YR3/1）
　1～5㎝大の礫を若干含む。炭化物を若干含む
2　黒褐色砂質土（10YR3/1）
　1～5㎝大の礫を若干含む。炭化物を含む。
　1層に比べて砂質強く粘性弱い

第29図　Ⅲ区SK05平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

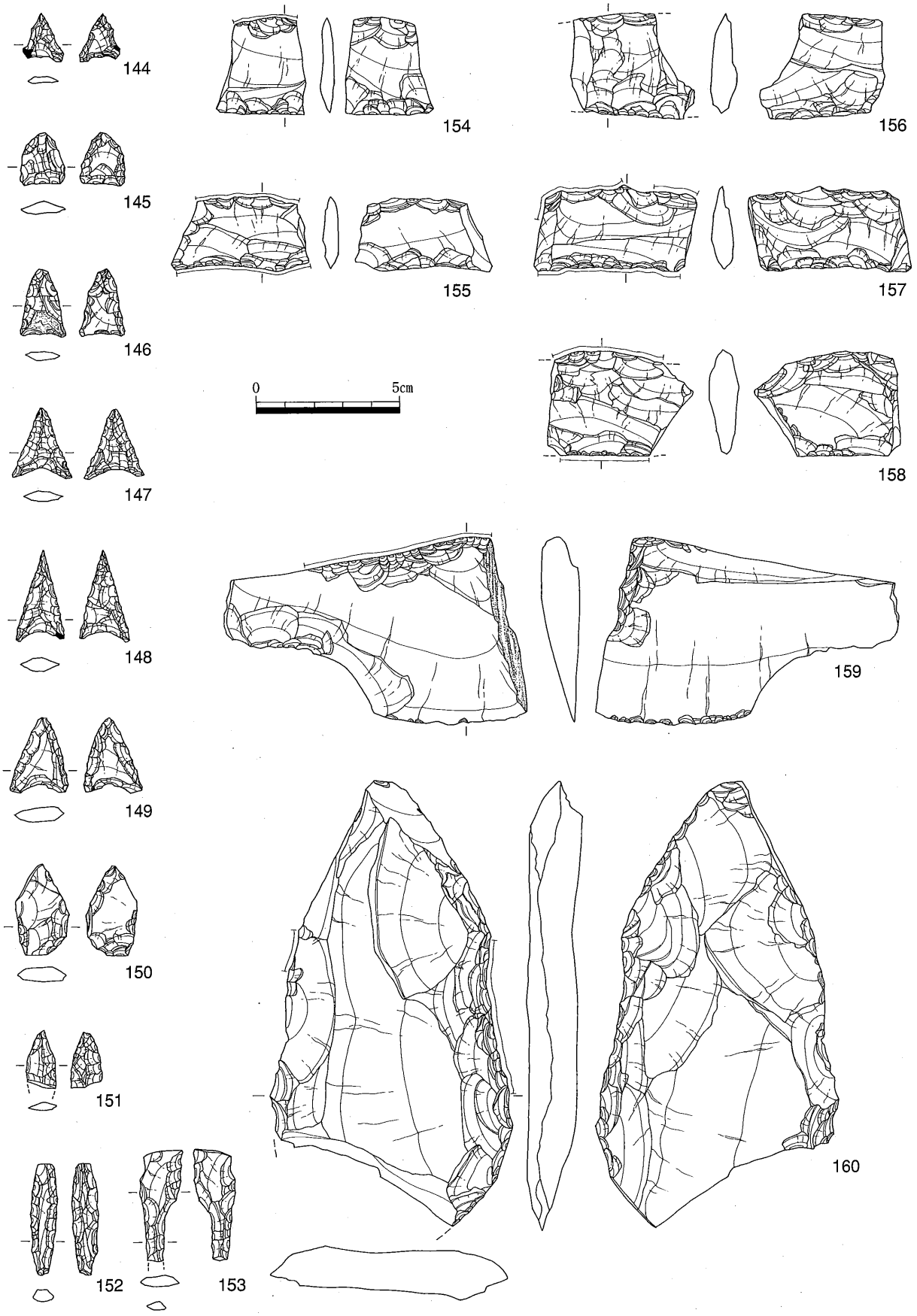


1　褐灰色砂質土（10YR4/1）
2　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）
3　暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2）
砂粒粗い
4　暗灰黄色弱粘質土（2.5Y5/2）
5　褐灰色弱粘質土（10YR5/1）
6　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）
7　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）
8　黒色弱粘質土（N2/）
9　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）
10　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）
11　黒褐色弱粘質土（2.5Y3/2）
12　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）
13　褐灰色弱粘質土（10YR5/1）
（ベース）

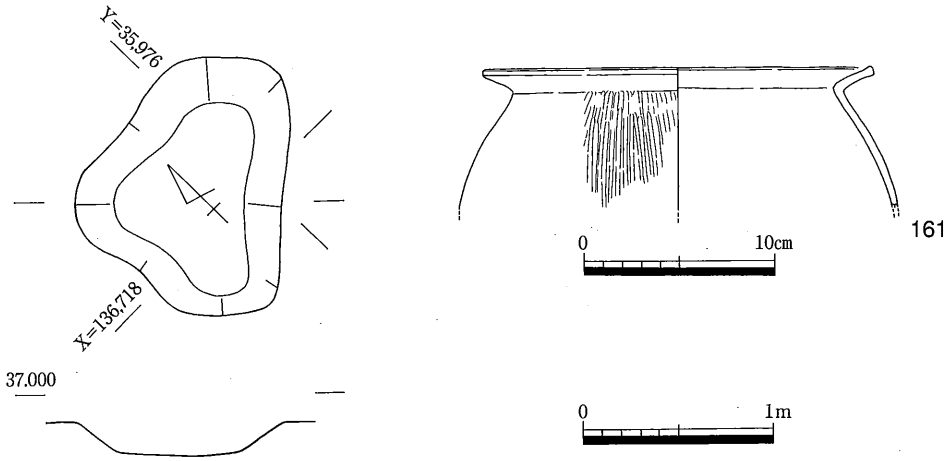
第30図　Ⅲ区SK15平・断面図（1/30）



第31図　Ⅲ区SK15出土遺物(1)（1/4）



第32図　Ⅲ区SK15出土遺物(2)（1/2）



第33図　Ⅲ区SK16平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

166・167は凹基式である。168は石錐の未製品と考えられる。169は刃部をわずかに作り出しており、スクレイパーと考えられる。表面に自然面を残す。170は打製石庖丁で、半分程度は欠損する。側縁部に抉りがある。

162の時期は弥生時代前期末頃と考えられるが、163・164は弥生時代中期前半頃と考えられ、遺構の時期も概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

Ⅳ区SK36（第５・36・37図）

Ⅳ区南端付近で検出した土坑である。隅丸長方形を呈し、長軸3.05m、短軸2.06m、深さ23cm、埋土は主に黄灰色砂質土で、底付近で灰色砂、灰黄褐色粘土、灰色・褐色粘質土が堆積する。埋土中からは弥生土器が集中して出土した。廃棄土坑と考えられる。

171～179は弥生土器である。171は壺肩部で、５条１単位程度の櫛描き波状文が２単位認められる。172～176は甕である。いずれも調整にはヘラミガキを施し、172では体部外面中位に３列の列点文が施される。177は鉢である。178は底部として図化したが、蓋の可能性もある。179は壺底部である。内面の底付近は剥離が著しい。180は土師質土器擂鉢で、５条１単位の卸し目を施す。混入品と考えられる。181・182はサヌカイト製の石器で、181はスクレイパー、182は楔形石器と考えられる。

遺構の時期は概ね弥生時代中期前半頃と考えられる。

Ⅳ区SK41（第５・38図）

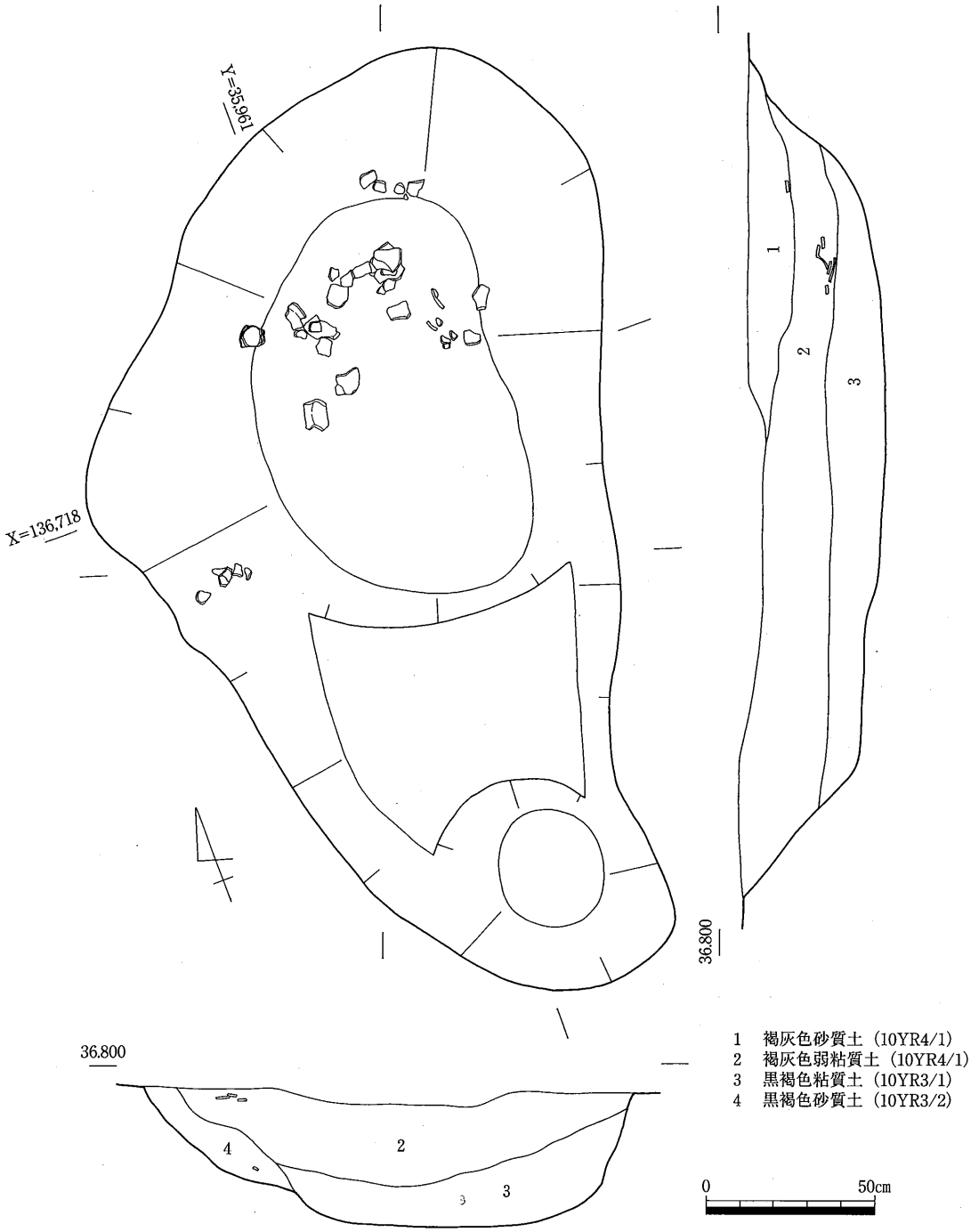
Ⅳ区南東隅で検出した土坑である。南東部は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は明らかではない。概ね長楕円形と考えられ、長軸3.65m以上、短軸1.18～2.18m、深さ13cmを測り、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器、サヌカイトが出土した。

183～186は弥生土器である。183～185は壺で、183は頸部には２条の貼付突帯が残る。184・185は広口壺である。184は口縁端部に円形浮文を貼り付け、内面には突帯による加飾を施す。185は口縁端部下端に粘土紐を足して口縁端部を拡張している。186は底部である。187はサヌカイト製石器で、楔形石器である。

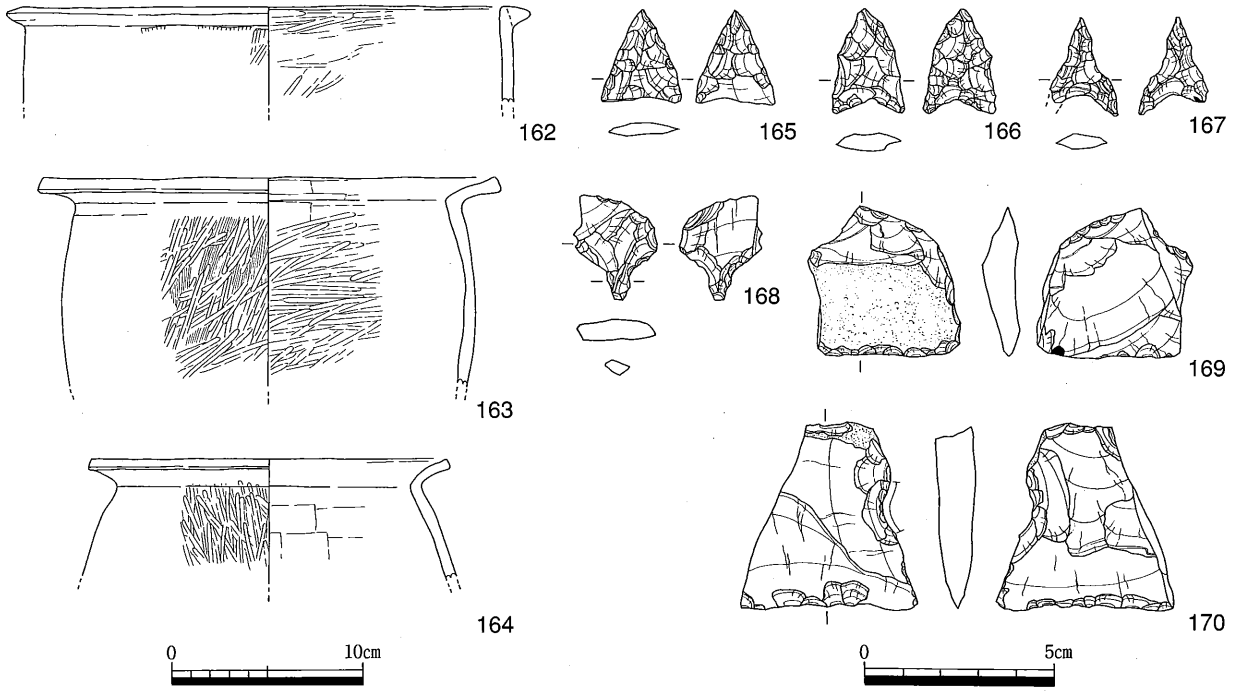
183は弥生時代前期末頃に比定されるが、遺構の時期は184・185の時期である弥生時代中期前半頃と考えられる。

Ⅳ区SK43（第５・38図）

Ⅳ区中央やや東寄りで検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸2.00m、短軸1.37m、深さ12cmを測る。埋土中からは弥生土器小片が出土した。



第34図　Ⅲ区SK34平・断面図（1/20）



第35図　Ⅲ区SK34出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区SK33（第４・39図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸2.24m、短軸1.38m、深さ15cm、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からはサヌカイト剥片や結晶片岩製の柱状片刃石斧片が出土した。

188は結晶片岩製柱状片刃石斧である。端部に擦痕が残る。上部は剥離する。

遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。

Ⅳ区SE01（第５・40図）

Ⅳ区南東部で検出した井戸跡である。円形で直径1.05m、深さ79cm、断面形状は上部は法面が崩れたようになだらかな傾斜を示すが、下部は直線的に落ち込んでおり、原形は直径60cm程度の井戸跡であったと考えられる。埋土は上層が黒褐色砂質土、下層は暗灰色粘質土・暗灰色粘土などで、炭化物を含む。

189～196は弥生土器である。189は広口壺で、口縁端部には刻目、体部と頸部の境には浅い沈線を３条施す。190～194は甕である。いずれもくの字に屈曲する口縁部を持ち、外面はハケで調整する。193は体部最大径よりやや上部に３列の刺突文を施す。195は鉢小片、196は底部である。

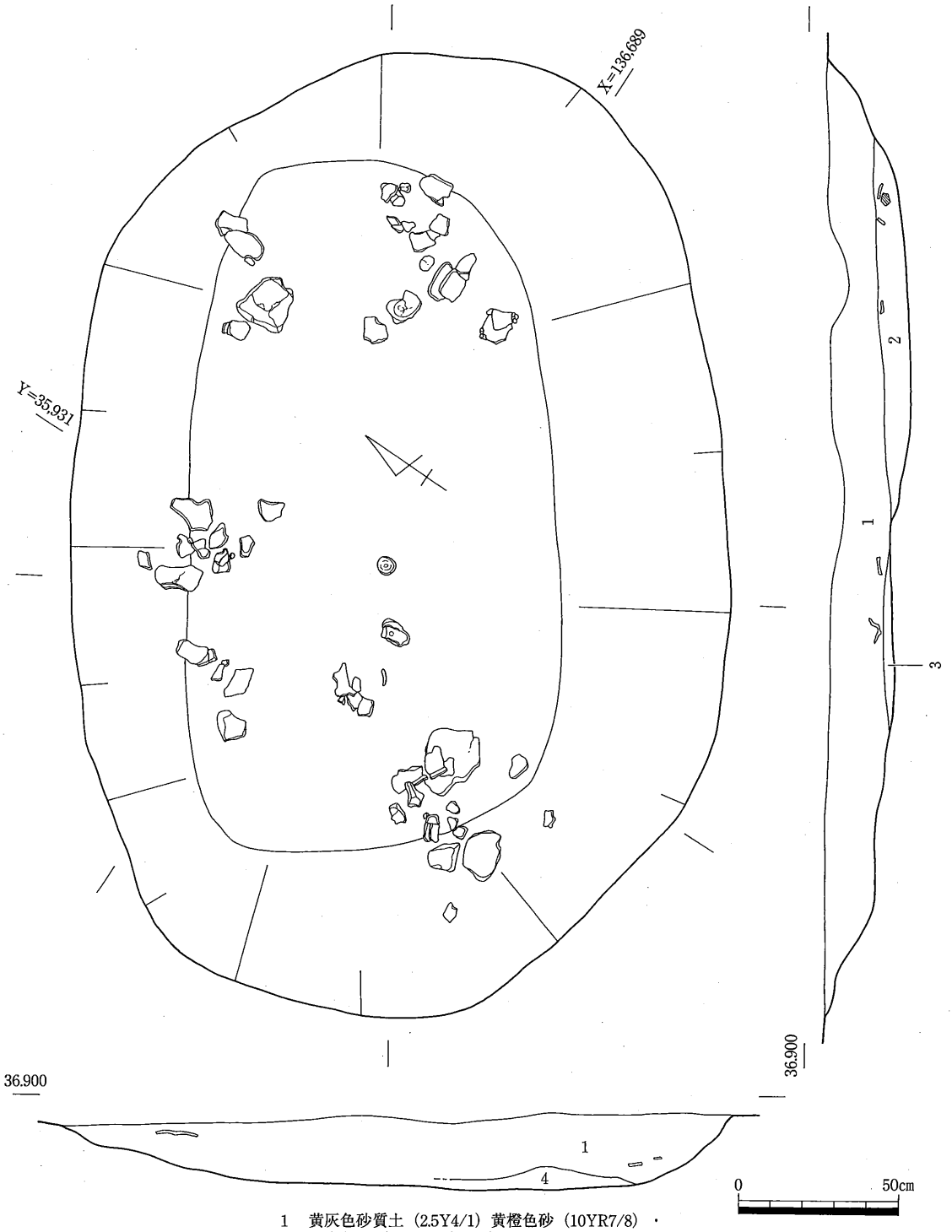
遺構の時期は弥生時代中期中頃と考えられる。

Ⅳ区SE02（第５・40図）

Ⅳ区東南端部で検出した井戸跡である。楕円形を呈し、長軸0.94m、短軸0.70m、深さ60cm、埋土は上層が黒褐色砂質土、下層は暗灰色粘土で、土坑の中位から下部では炭化物を含む。井戸跡の西から南へかけての法面で弥生土器が集中して出土しており、井戸の廃絶時に土器を投棄したと考えられる。

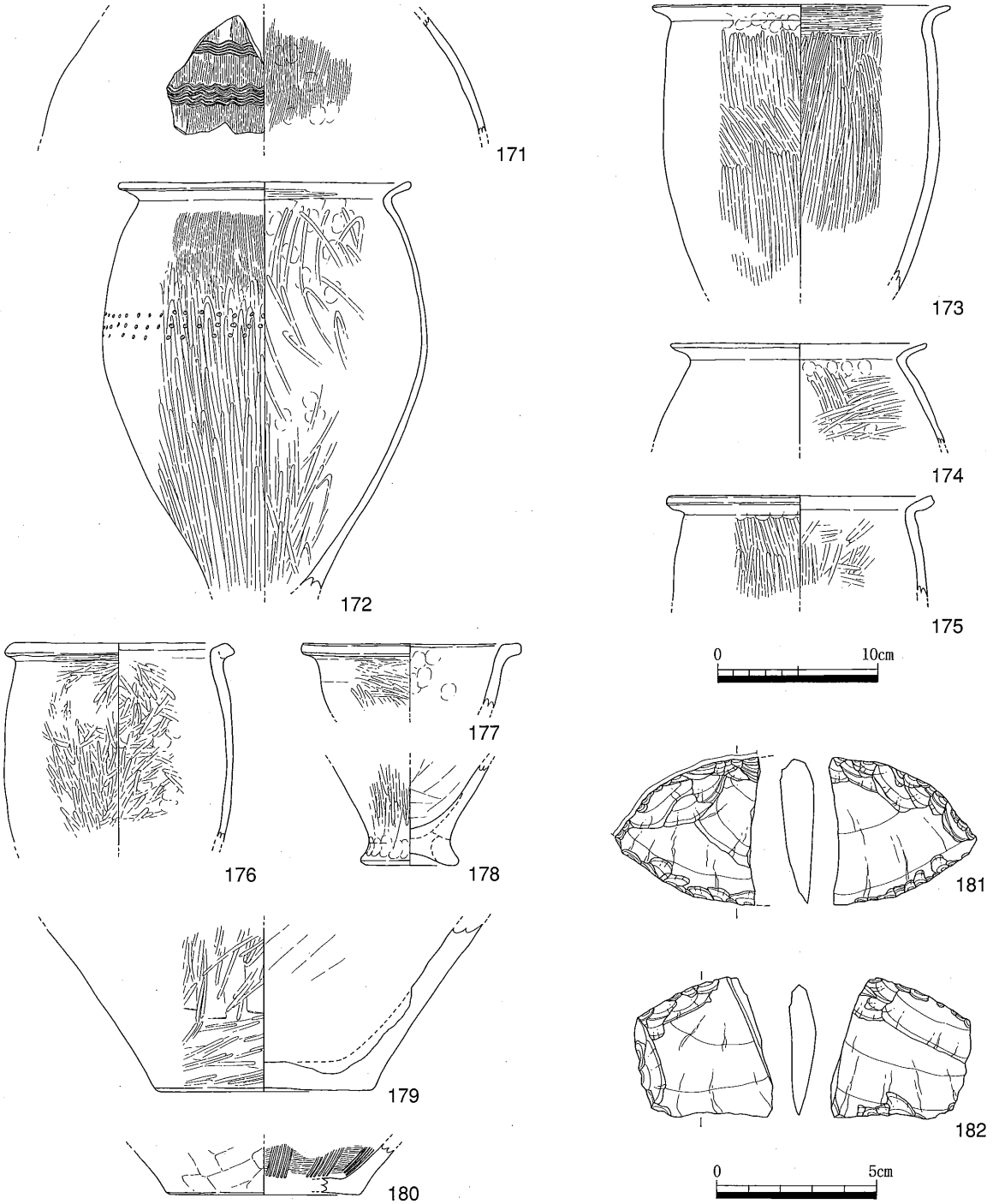
197～201は弥生土器である。197・198は広口壺である。197の口縁端部には浅い刻み目が観察できる。199は壺体部で、上部には198のような口縁部が付くと考えられ、広口壺になると考えられる。体部最大径よりやや上部にハケの先端を押し付けて施したと考えられる縦６列の列点文が巡る。200・201は甕である。いずれもくの字に屈曲する甕で、内外面ともヘラミガキを施す。

遺構の時期は弥生時代中期中頃である。

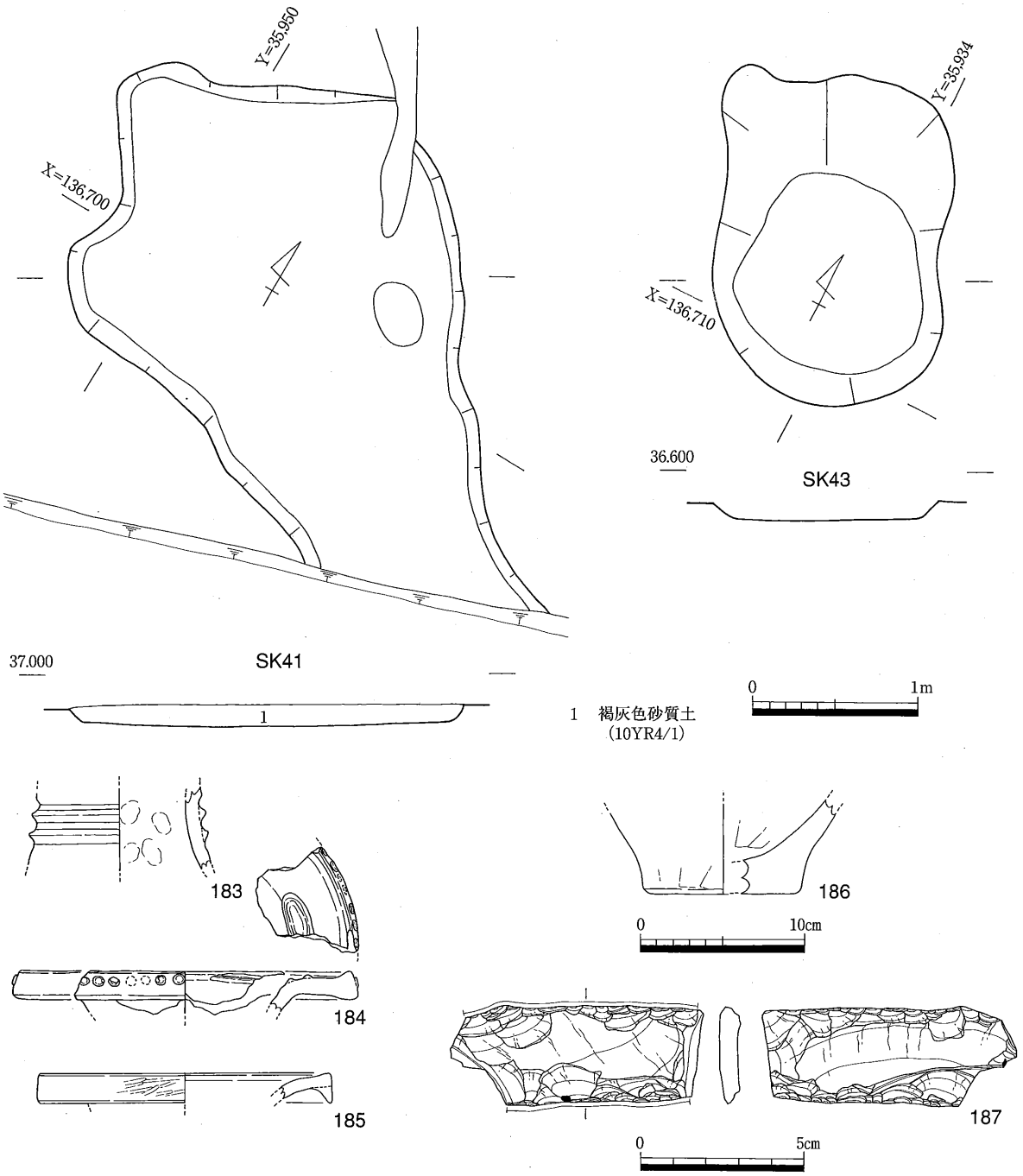


1　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）黄橙色砂（10YR7/8）・灰白色砂（10YR8/1）を含む
2　灰色砂（5Y4/1）
3　灰黄褐色粘土（10YR4/2）
4　灰色・褐色粘質土（5Y4/1・10YR4/6）

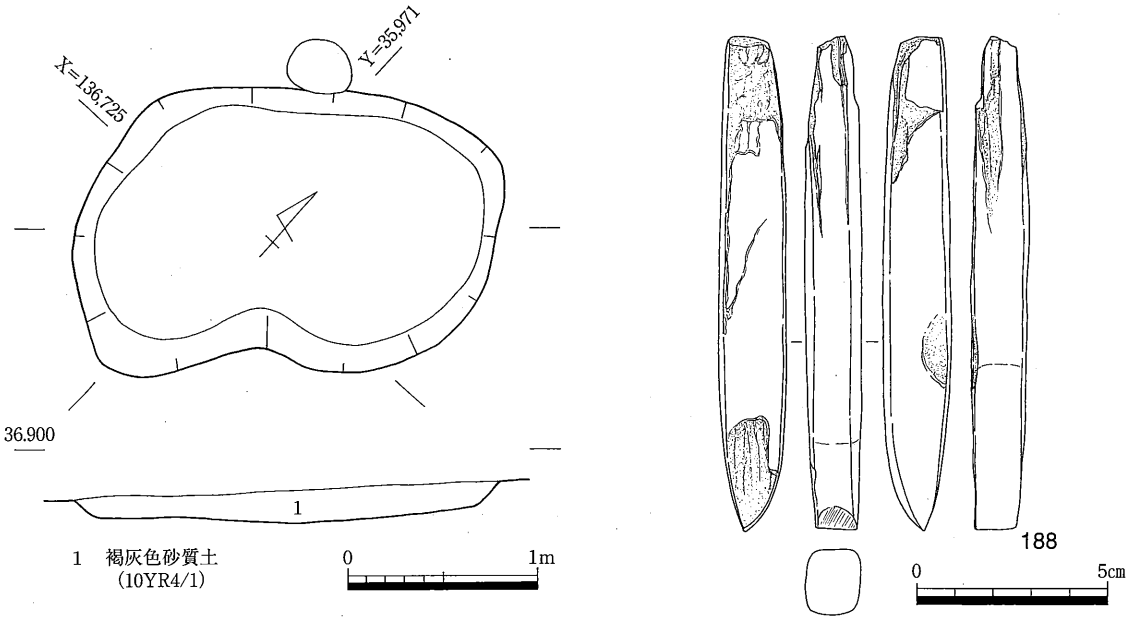
第36図　Ⅳ区SK36平・断面図（1/20）



第37図　Ⅳ区SK36出土遺物（1/4・1/2）



第38図　Ⅳ区SK41・43平・断面図（1/40）、SK41出土遺物（1/4・1/2）



第39図　Ⅲ区SK33平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）

Ⅲ区ST01（第４・41図）

Ⅲ区北西部で検出した墓跡と考えられる遺構である。隅丸長方形を呈し、長軸2.58m、短軸0.74m、深さは28cm、埋土は上層が黒褐色砂、下層は黒色砂質土である。上層を掘り下げた時点で、土坑の北辺と東辺で幅８cmの木棺痕跡が認められたが、土層断面では観察できなかった。また、上層を掘り下げた時点で遺構の主に西側から土器がやや集中して出土したが、完形や完形に近いものはなく、すべて破片であった。

202～209は弥生土器である。202は壺頸部小片である。頸部と体部の境には屈曲が見られる。203は体部小片で、３条のヘラ描き沈線文を施し、その下部に３条の刻目突帯を貼り付ける。204～206は甕である。204・205は逆Ｌ字型口縁、206は如意状口縁を呈し、205には口縁端部に刻目を施す。いずれもハケの後204は６条、205は４条以上、206は９条以上のヘラ描き沈線を施す。207～209は底部である。210～213はサヌカイト製の石鏃である。210は下部が欠損していて形状が不明であるが、それ以外は凹基式である。

遺構の時期は弥生時代前期後半頃と考えられ、土坑群よりやや早い時期が想定できる。

Ⅳ区ST02（第５・19・42図）

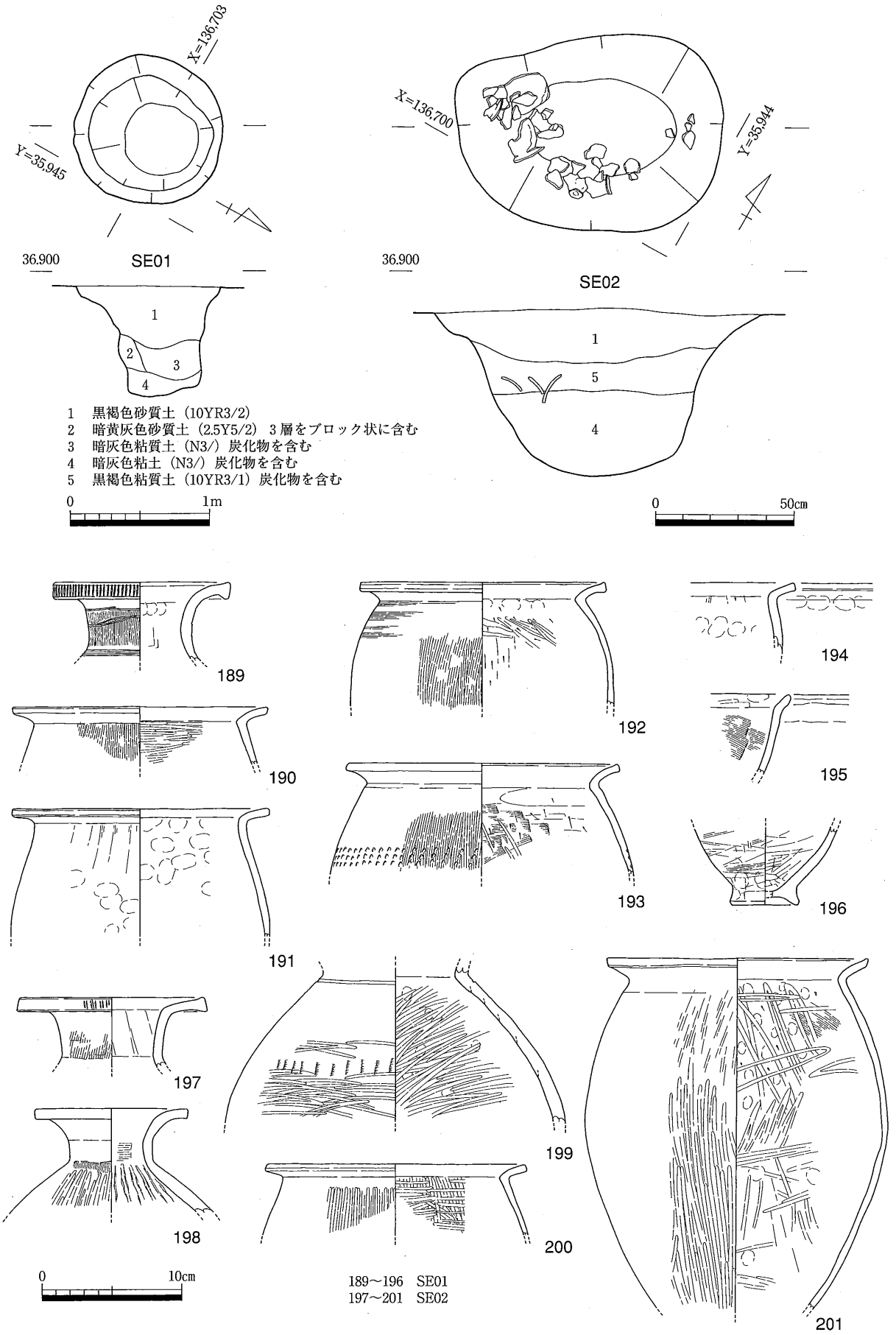
Ⅳ区東端付近で検出した墓跡と考えられる遺構である。土層断面からSK12の下部で検出したことがわかる。隅丸方形を呈し、長軸2.35m、短軸0.70m、深さは検出面から22cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は、最下部に炭化物を含む暗灰色粘土、両肩部はベースブロックを含む黄灰色弱粘質土でベースに近い色調、上層部は褐灰色弱粘質土である。遺構の南側からは弥生土器が出土しているが、底からかなり浮いた状態のものも多く、ST02に伴わないものもある可能性がある。規模・形状はST01と類似するが、木棺痕跡は認められず、土壙墓の可能性が考えられる。

214～218は弥生土器である。214～216は壺頸部で、214には貼付突帯２条とそれらをつなぐ楕円形の浮文が、216には頸部と体部の境に押圧突帯が付く。217・218は甕である。いずれも体部は無文で、217は強く外側へ折り曲げた口縁が、218はくの字に屈曲した口縁が付く。219～221はサヌカイト製石錐である。

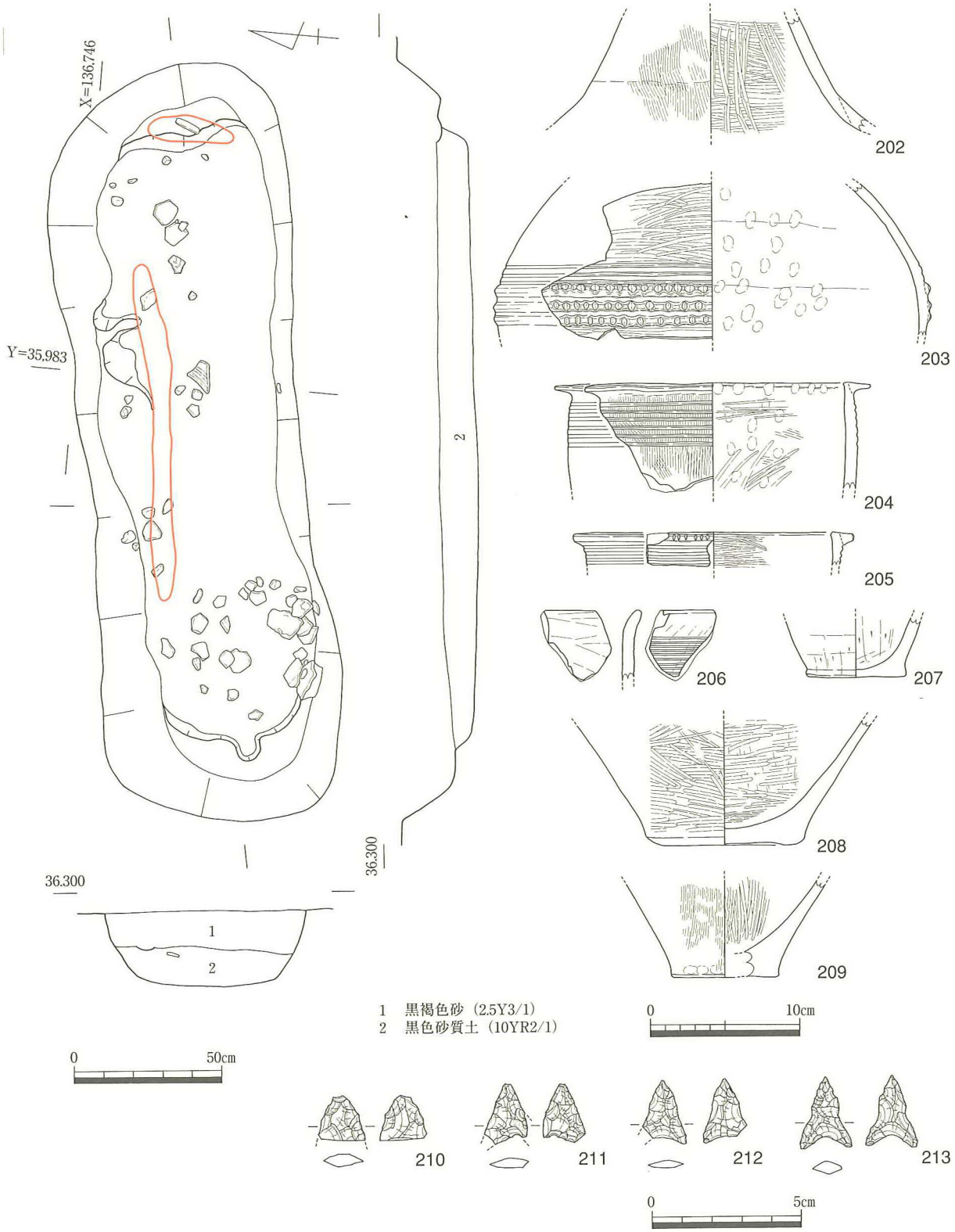
遺物の時期はおおむね弥生時代中期前半～中頃である。

Ⅱ区SD110・SD025（第４・43～50図）

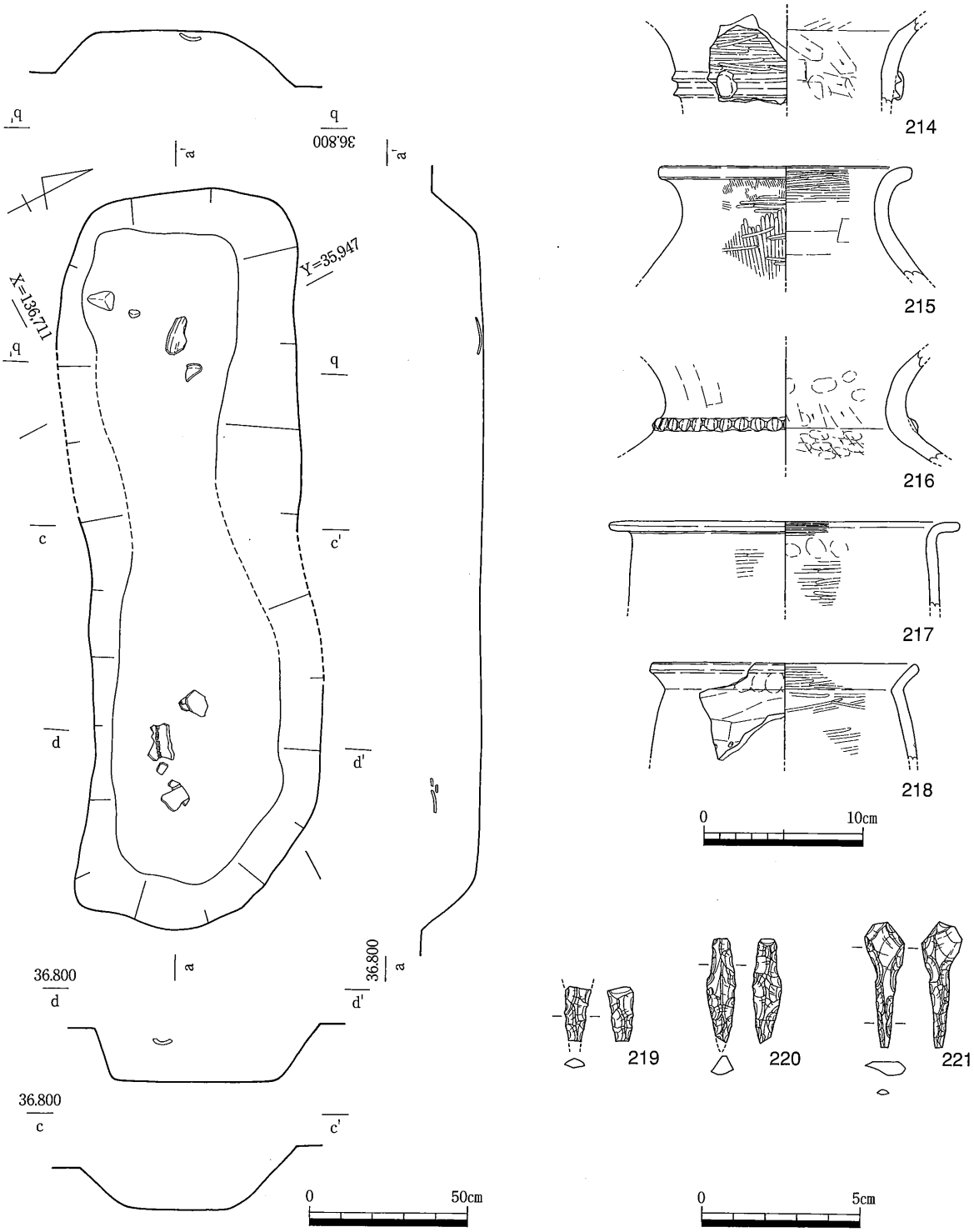
Ⅱ区西端付近を南から北へ流れる溝状遺構である。土層断面によりSD025はSD110埋没後に切り込まれたこ



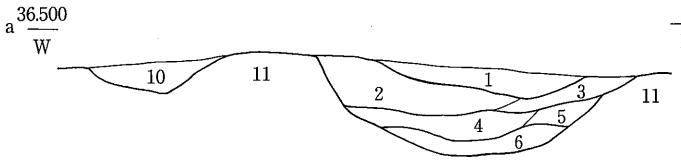
第40図　Ⅳ区SE01・02平・断面図（1/40・1/20）、出土遺物（1/4）

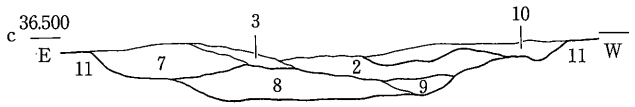


第41図　Ⅲ区ST01平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）



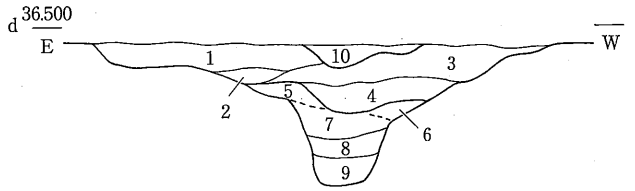
第42図　Ⅳ区ST02平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）





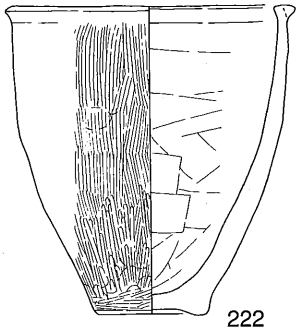
1　黒褐色粘質土（7.5YR3/1）Ⅲ区の西へ行くほど黒色（7.5YR2/1）に近くなる。土壌化が激しくなる（弥生前期包含層）
2　黒褐色弱粘質土（10YR3/2）
3　黒褐色砂質土（10YR3/2）
4　黒褐色粗砂（2.5Y3/1）1～3㎝大の小礫を含む
5　褐色砂質土（10YR4/4）
6　黄灰色細砂（2.5Y4/1）5・6層のブロック含む
7　黒褐色砂質土（10YR3/1）1～5㎝大の小礫を含む
8　黒褐色砂質土（2.5Y3/1）下層に比べ砂粒細かい
9　暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2）砂粒細かい
10　褐灰色砂（10YR4/1）（SD025）
11　褐色弱粘質土（10YR4/4）

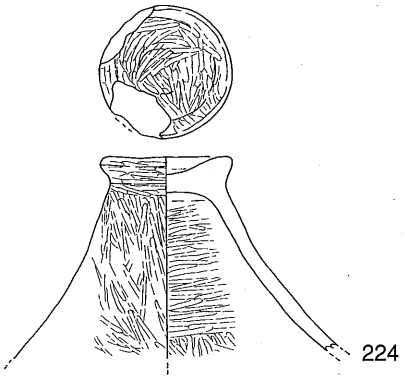
1～3	上層
4・5・9	中層
7・8	下層
6	最下層

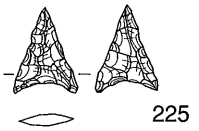


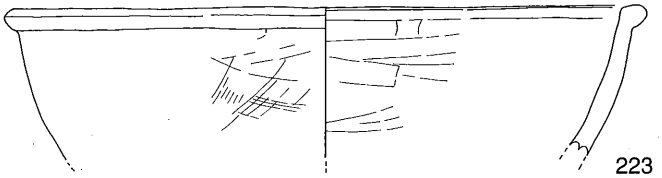
1　灰黄褐色弱粘質土（10YR4/2）
2　褐色弱粘質土（10YR4/4）
3　にぶい黄褐色弱粘質土（10YR4/3）
4　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）砂粒細かい
5　黄灰色砂（2.5Y5/1）砂粒粗い。1㎝大の褐色小礫（10YR4/6）を含む
6　褐灰色砂（10YR4/1）砂粒粗い。1㎝大の褐色小礫（10YR4/6）を含む
7　褐灰色砂（10YR5/1）砂粒粗い
8　褐灰色砂（10YR5/1）砂粒粗いと灰色粘土（N4/）がラミナ状に堆積
9　暗青灰色砂（10BG4/1）砂粒かなり細かい
10　暗灰黄色砂（2.5Y5/2）（SD025）

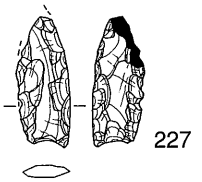
1～4　中層
5～9　最下層







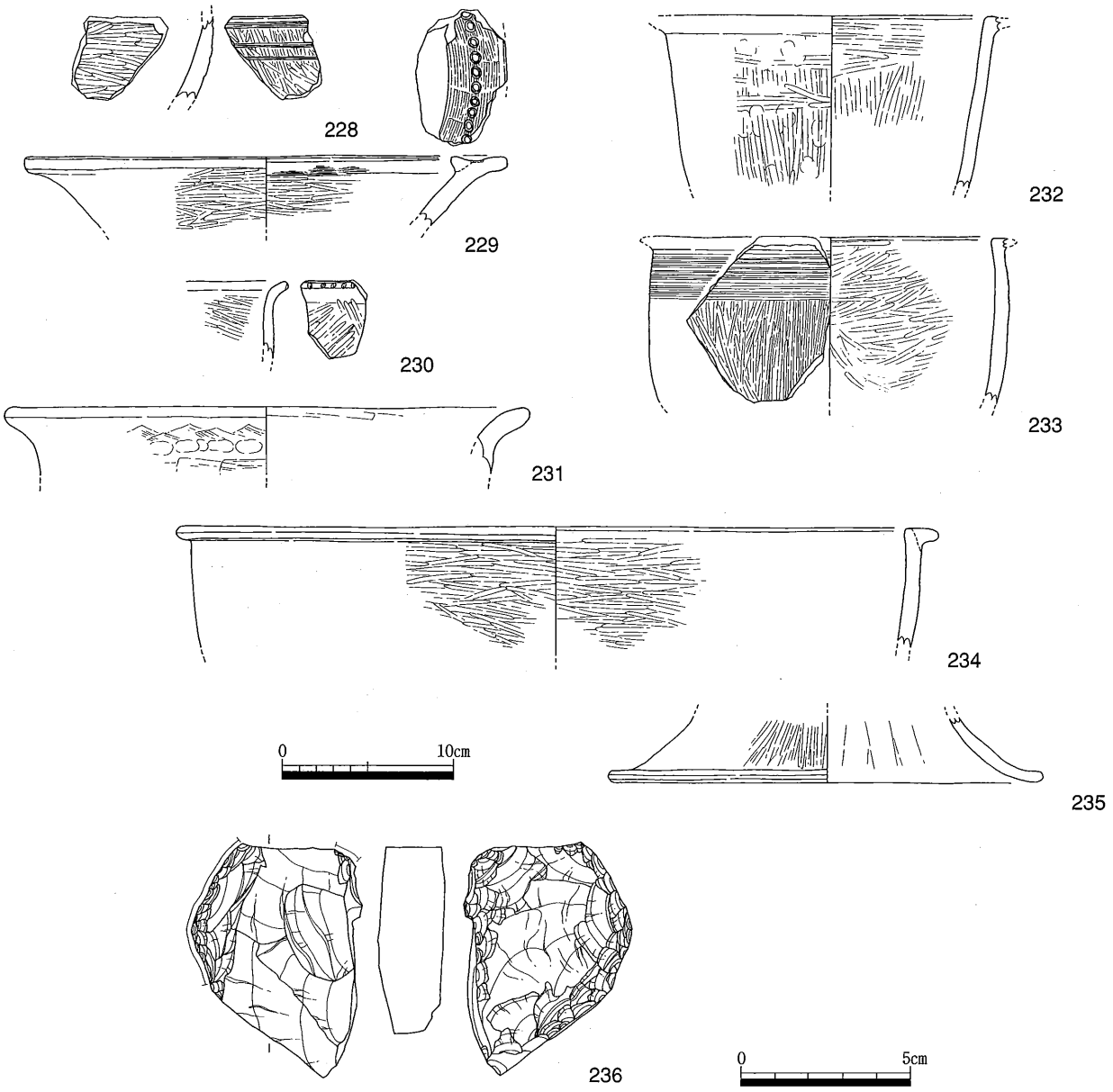




0　10cm

0　5cm

第43図　Ⅲ区SD110・025断面図（1/40）、SD025出土遺物（1/4・1/2）



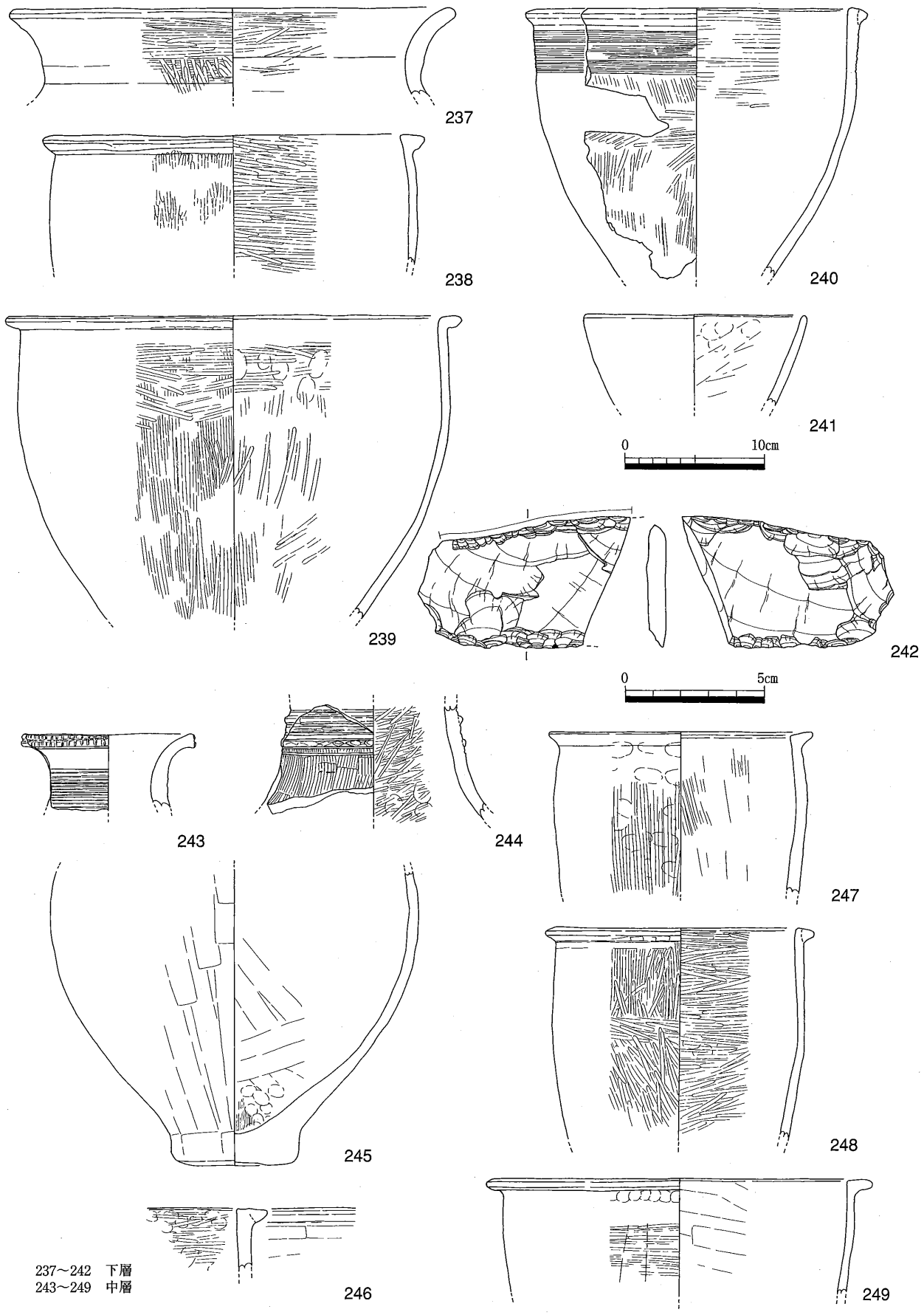
第44図　Ⅲ区SD110（最下層）出土遺物（1/4・1/2）

とがわかる。SD110は幅120～240cm、深さ34～74cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘質土で土壌化が著しい層、中層が黒褐色粗砂、黒褐色・褐色・暗灰黄色・黄灰色砂質土など、最下層が黄灰色細砂、黄灰色・褐灰色砂である。断面形状は最も南側で作成した断面図では下半部がU字状、上半部はなだらかな皿状、北半部では皿状を呈する。南側では最下層の砂層が鋭く切れ込み、厚く堆積する。溝は当初砂層による堆積が短期間に進み、溝の深さが半分程度になったところでしばらく機能した後、徐々に埋没していったことがわかる。

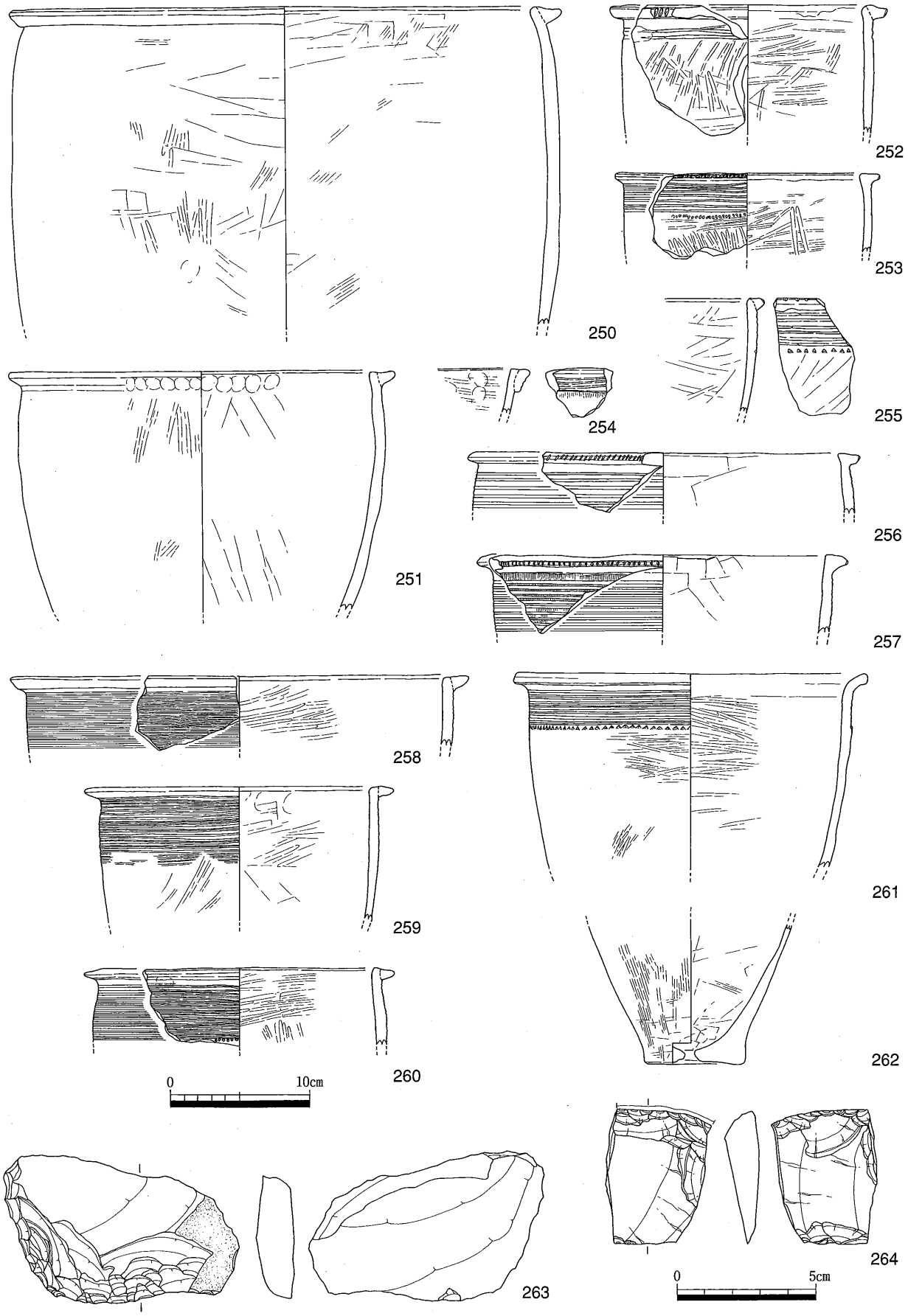
SD025は調査区南側ではSD110と重複して、北側では西側約50cmの位置で検出した。幅40cm、深さ10cmを測り、断面形状は浅い皿状である。埋土は褐灰色砂の単層であり、流れは一時的であったと考えられる。

222～227はSD025の部分から出土した遺物である。222～224は弥生土器である。222は逆L字型の口縁部をもつ無文の甕で、外面はハケで調整する。223は鉢、224は蓋である。225～227いずれもサヌカイト製の凹基式石鏃である。

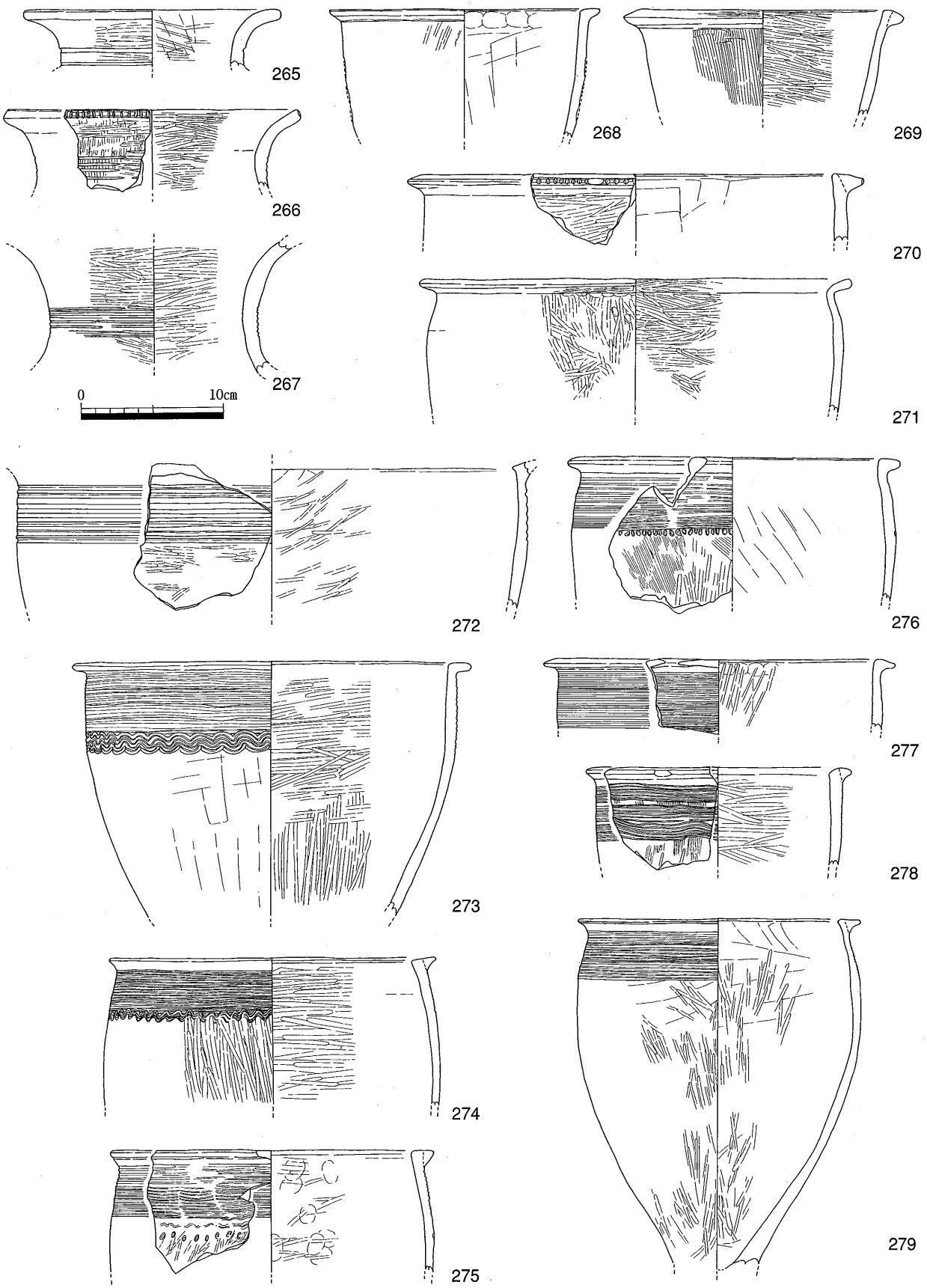
228～236はSD110最下層で出土した。228～235は弥生土器である。228・229は壺である。228は体部最大径付近の小破片で、３条以上のヘラ描き沈線を施す。229は口縁端部内面に突帯を巡らせて口縁部を拡張し、そこに竹管文を施す。230～234は甕である。230・231は如意状口縁を持つ。230は口縁端部に刻み目を施し、



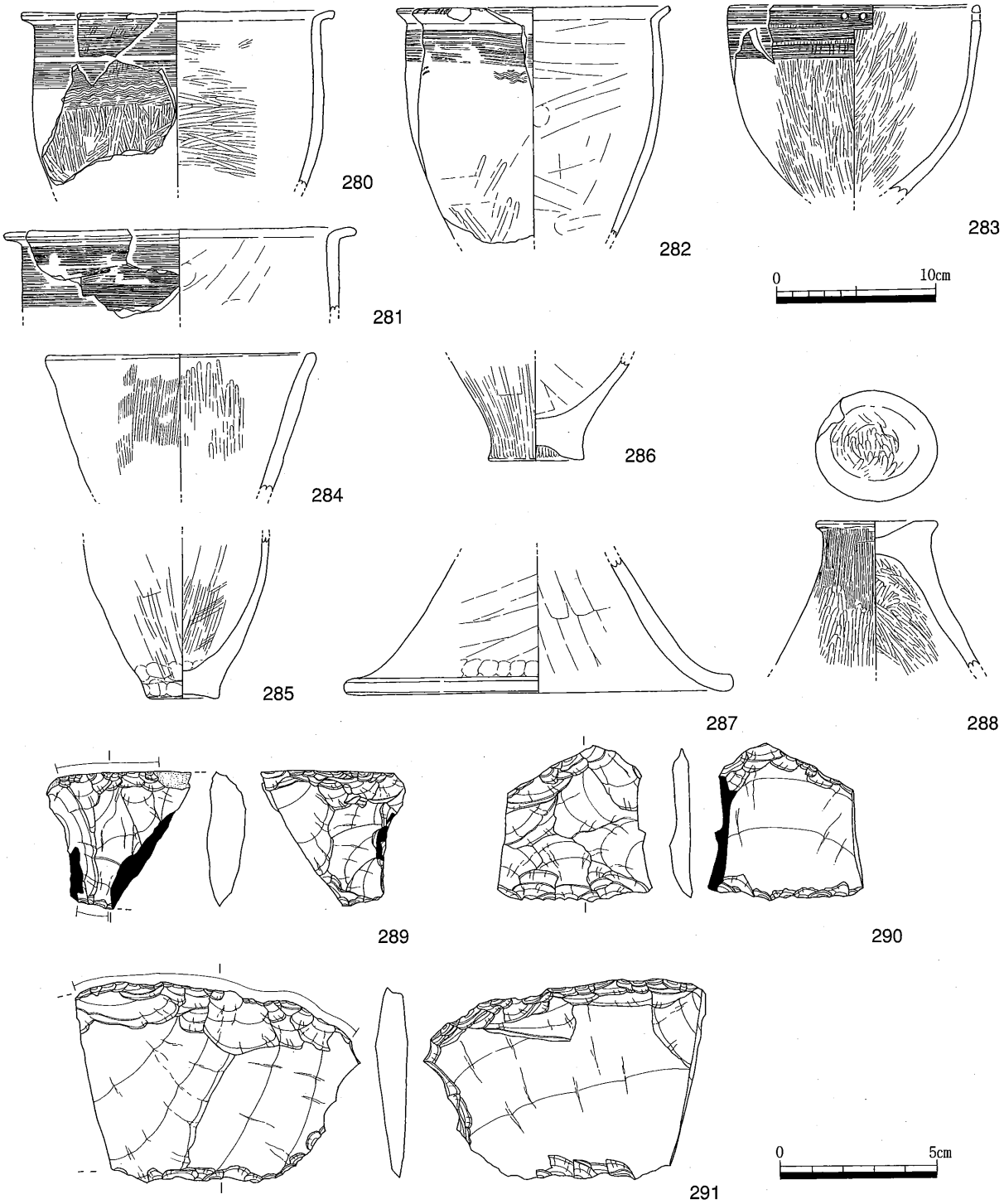
第45図　Ⅲ区SD110（下層・中層）出土遺物(1)（1/4・1/2）



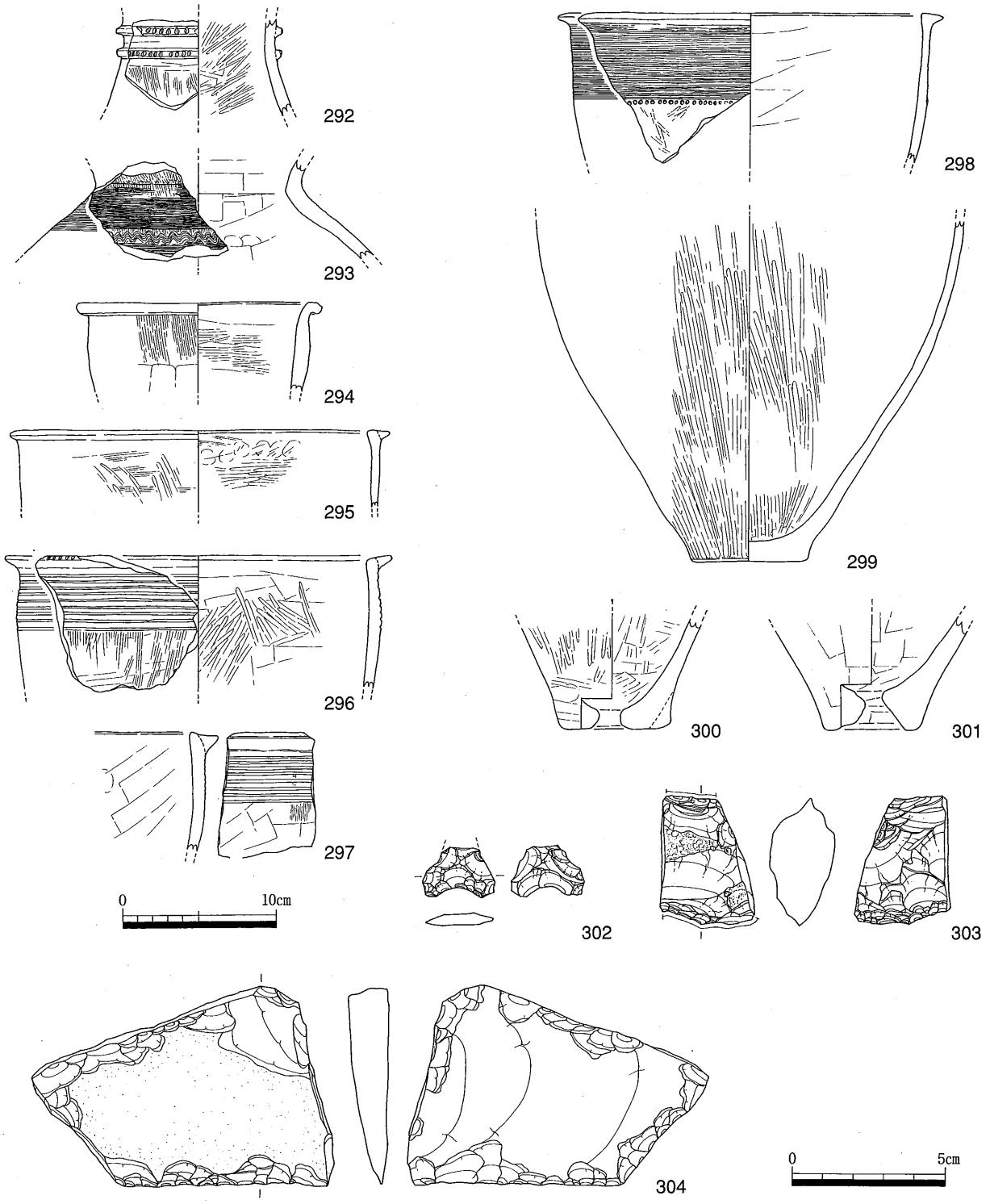
第46図　Ⅲ区SD110（中層）出土遺物(2)（1/4・1/2）



第47図　Ⅲ区SD110（上層）出土遺物(1)（1/4）



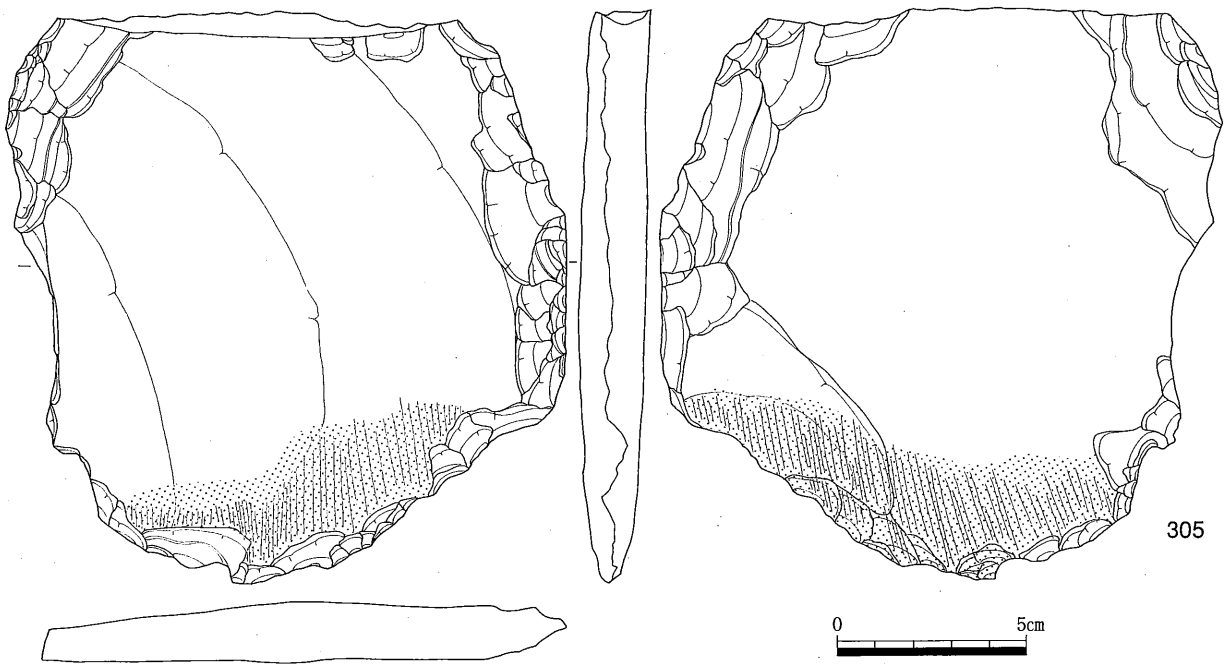
第48図　Ⅲ区SD110（上層）出土遺物(2)（1/4・1/2）



第49図　Ⅲ区SD110（その他）出土遺物(1)（1/4・1/2）

体部は無文である。232～234は逆Ｌ字型口縁部をもち、233には10条のヘラ描き沈線が施される。235は蓋である。236はサヌカイト製石器である。一方の側縁部に敲打痕を残す。上・下部と側縁部が部分的に折損している。打製石斧の欠損品と考えられる。

237～242は下層から出土した遺物である。237～241は弥生土器である。237は壺である。238～240は甕である。いずれも逆Ｌ字型口縁部をもち、内外面ともヘラミガキで調整する。239は外面はハケの後粗いヘラミガキを施す。240は４条１単位の櫛描き沈線文を３単位巡らせる。241は埦型の鉢である。摩滅が著しい。242はサヌカイト製のスクレイパーである。上部に敲打痕を残す。



第50図　Ⅲ区SD110（その他）出土遺物(2)（1/2）

243～264は中層から出土した遺物である。243～262は弥生土器である。243～245は壺である。243は口縁端部に縦方向の刻目を施した後に横方向に沈線を巡らせる。244は頸部にヘラ描き沈線を施した後、２条の押圧突帯を巡らせる。246～261は甕である。246～251は体部が無文のもので、口縁端部はいずれも逆Ｌ字型口縁を呈する。252～257は体部にヘラ描き沈線を巡らせるものである。252は２条のヘラ描き沈線を施し、口縁端部には刻目を施す。253・255～257は６～10条程度のヘラ描き沈線を巡らせ、口縁端部には刻み目を施す。253・255ではその下部に刺突文を施す。254は口縁端部外側に広めの突帯を巡らせ、そこに３条のヘラ描き沈線を巡らせる。258～261は体部に櫛描き沈線文を施す。259・260は５条１単位の櫛描き沈線文を４単位、261は４条１単位の櫛描き沈線文を３単位施し、260・261は櫛描き沈線文の下部に刺突文を施す。262は底部穿孔土器で、焼成後に底部１ヶ所に穿孔する。263は安山岩製のスクレイパーである。264はサヌカイト製の楔形石器で、上部に敲打痕を残す。

265～291は上層から出土した遺物である。265～267は壺である。265は頸部にヘラ描き沈線を２条以上、266はヘラ描き沈線を５条、267は頸部にヘラ描き沈線を７条巡らせる。266は口縁端部に刻み目を施す。268～282は甕である。268～271は体部が無文で、268～270は逆Ｌ字型口縁をもつ。271は口縁部を外側へ屈曲させ、体部は丸みを持つ。272は体部に７条のヘラ描き沈線を施す。273～282は体部に櫛描き沈線文を施す。概ね５条１単位のものが３単位巡らされ、273～275・280・282はその下部に波状文を、276には刺突文を描く。275には波状文の下部に刺突文を施す。280～282は如意状口縁、その他は逆Ｌ字形口縁で、282にだけ口縁端部に刻目を施す。283～285は鉢である。283は７条１単位の櫛描き沈線文が３単位巡らされる。最下部の櫛描き沈線には滑らかに描けなかったのか櫛原体が押し付けられた痕跡が観察できる。口縁端部には２孔１対の孔が残されていた。287・288は蓋である。289～291はサヌカイト製の石器である。289は打製石庖丁で、2/3程度は欠損するが、側縁部にわずかに抉りが残る。290・291はスクレイパーである。291は上部に敲打痕を残す。

292～305は層位ごとに取り上げなかった遺物である。292～301は弥生土器である。292・293は壺で、292は頸部に刻み目突帯を２条以上巡らせる。293は頸部から体部へかけての破片で、体部には７条１単位の櫛描き沈線文を３単位とその下部に波状文、さらに櫛描き沈線文を施す。294～299は甕である。294・295は体部無文、296・297は体部に８～９条のヘラ描き沈線文、298は５条１単位の櫛描き沈線文を５単位程度施し、

その下部に円形の刺突文を施す。299は甕の体部から底部で、体部は丸みを帯びる。300・301は底部穿孔土器で、いずれも焼成後に1孔穿孔する。302・303はサヌカイト製の石器である。302は凹基式石鏃で、上半部は欠損する。303は楔形石器として図化した。上・下部に敲打痕を残し、両側は割れている。打製石斧の折損品の可能性も考えられる。304は安山岩製のスクレイパーで、片側には自然面を多く残す。305は安山岩製の打製石斧である。端部の摩滅痕は顕著である。

出土遺物からはSD025の時期は概ね弥生時代前期末頃、SD110最下層は弥生時代中期中頃の壺片を含むが、その他は概ね弥生時代前期後半頃、下層は弥生時代中期初頭頃、中層は弥生時代前期後半～中期初頭頃、上層は弥生時代中期初頭頃で、遺物量は中層、次いで上層が多い。したがって、SD110は前期後半頃に掘削され、中期初頭頃におもに機能し、最終的には中期初頭頃に埋没したと考えられる。

SD025は土層断面からはSD110より新しいが、出土遺物からは時期差はないと考えられる。

Ⅴ区SR03（第6・51図）

Ⅴ区西端付近で検出した自然河川である。おおむね南から北方向へ向くと考えられるが、遺構の北半部分はSX07により壊される。幅2.6m、深さ88cm、埋土は下層が主にシルト層、中層が暗褐色礫混粗砂層、上層がおおむね暗褐色・黒褐色礫混中・粗砂層で、上面部分は礫を多量に含む。埋土中からは弥生土器などが出土した。西側を流れる東大束川の氾濫原の一部と考えられる。遺物は上層・中層・下層に分けて取り上げた。

306～308は下層から出土した遺物である。306・307は弥生土器である。306は壺で、頸部に3条の削り出し突帯がある。破片の上・下部とも粘土紐の接合部分から剥離したものである。307は甕である。如意状口縁を持ち、口縁端部に沈線をもつ。体部には4条のヘラ描き沈線を巡らせる。308はサヌカイト製の平基式石鏃である。309・310は中層から出土した遺物で、ともに弥生土器である。309は甕小片で、体部には4条のヘラ描き沈線を施す。如意状口縁で、口縁端部には刻目を付ける部分と付けない部分がある。310は壺底部である。311～317は上層から出土した遺物である。311は縄文土器浅鉢で、口縁端部外面に凹線を3条巡らせる。312は縄文土器深鉢で、口縁端部をやや肥厚させ、端部内面には沈線を施す。313は弥生土器壺である。頸部に3条以上の刻目を持つ貼付突帯を施す。314～316は弥生土器甕である。314は体部に9条以上のヘラ描き沈線を施す。315・316は体部に櫛描き沈線文を施し、316は下部に三角形に刺突文を施す。315は沈線文の下部に楕円形の刺突文があるが、1ヶ所に円形浮文が残されており、本来は円形浮文が貼られていたと考えられる。317は土師質土器杯である。13世紀後半頃と考えられる。

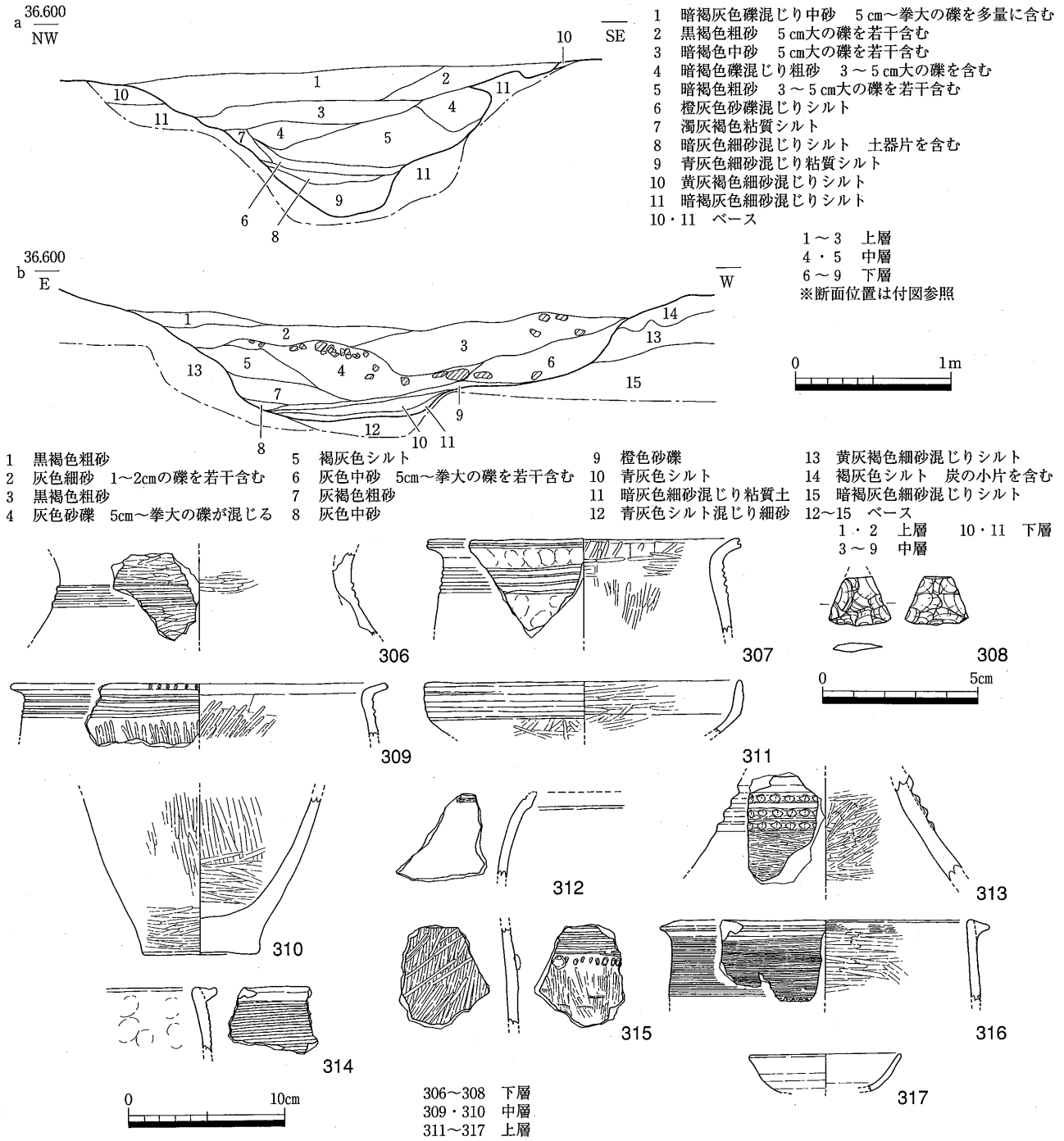
下層から中層にかけては弥生時代前期中頃、上層では主に弥生時代中期初頭頃の遺物が出土していることから、弥生時代前期中頃から形成され、弥生時代中期初頭頃には埋没したものと考えられる。317の土師質土器杯はSX07からの混入であろう。

3．弥生時代後期の遺構・遺物

Ⅰ区SR01・SD001・SD103（第2・52～57図）

Ⅰ区SD001はⅠ区中南部で検出した溝である。SD001は西から東へ流れ、幅260～268cm、深さ76～90cmを測る。埋土は最下層が緑灰色砂・暗緑灰色砂・暗灰色砂等の砂層により堆積し、短期間で埋没したことがわかる。上層は黒色粘土・粘質土等で、礫やクサリ礫を多量に含み、徐々に堆積したと考えられる。SD103と重複するが、断面観察によれば、SD103より新しいことがうかがえるが、SD103がSD001より北側へ及んでいないので、両者は概ね同時に機能していたと考えられる。遺物は上層から最下層まで出土しているが、上層出土遺物は小破片のみで、最も遺物量の多いのは最下層であった。

SD103はⅠ区南部で検出した溝である。SD001とほぼ直交する方向で、断面観察によりSD001より古いが、SD001より北側では検出していないため、両者はほぼ同時期に機能していたと考えられる。幅316cm、深さ102cmを測る。埋土の大半は砂層で占められ、埋没が急激に進んだことがわかり、水路としてはあまり機能してい



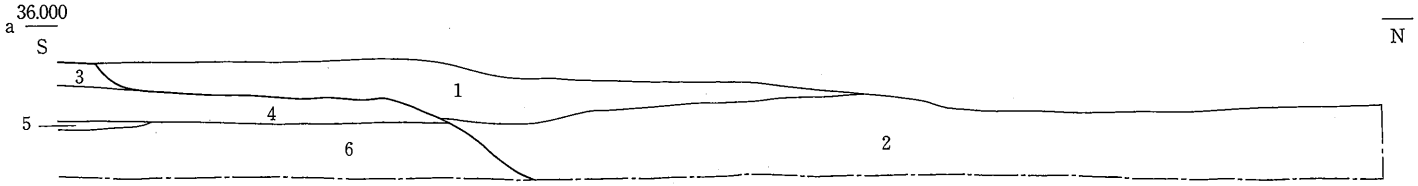
第51図　Ⅴ区SR03断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

なかったと考えられる。埋土中からは28ℓ入りコンテナで3箱分の遺物が出土した。

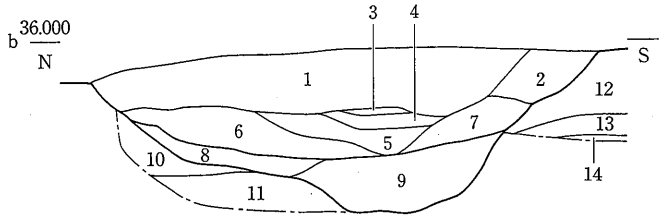
SD103最下層部分からは広鍬の未製品をはじめとする木製品が出土している。木製品の周辺にはその他にも木屑が多量も出土しており、木製品の水漬け遺構の可能性が高いであろう。

SR01は調査区北半で検出した自然河川で、遺構の北側のラインは調査区外へ延びる。幅8m以上、深さ60cm以上、埋土は概ね黒色粘土層で、上部にはクサリ礫を多量に含む。一帯が湿地状であった様子が窺える。埋土中からは遺物は出土しなかった。

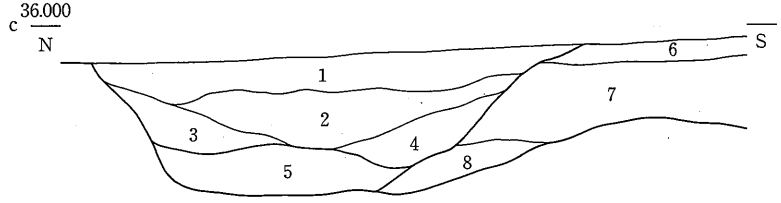
318～328はSD001最下層部分から出土した遺物で、すべて弥生土器である。318・319は広口壺で、頸部を319は直立気味に、318は外傾気味に立ち上がる。320～322は甕である。320・321は寸胴形の胴部に逆L字型または鋭く屈曲する口縁部をもつ。322はほぼ球形の体部を持つ。323～325は底部である。323は壺の、



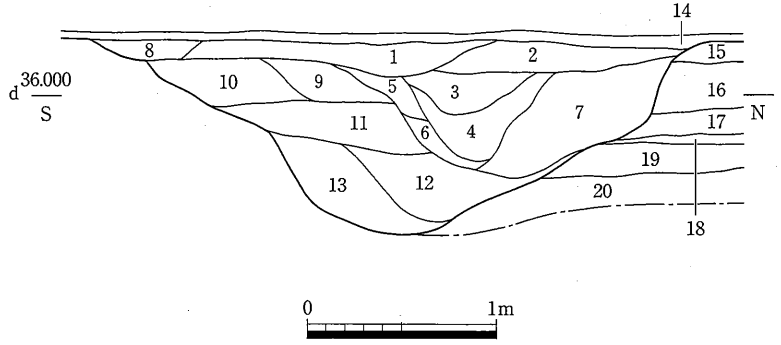
1　黒褐色粘土（10YR3/1）若干砂粒を含む。0.5～1㎝大の灰白色くされ礫（2.5Y8/2）を多量に含む
2　黒色粘土（N2/）
3　黄褐色粘土（2.5Y5/4）
4　灰色砂（7.5Y4/1）
5　暗灰色粘土（N3/）
6　黄褐色粘土（10YR5/6）深くなるほどグライ化激しい
1・2　SD001上段



1　黒色粘質土（N2/）1～3㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）のくされ礫を多く含む。砂粒は比較的大きい
2　黒褐色粘質土（10YR3/1）0.5～1㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）のくされ礫を多く含む
3　黄灰色細砂（2.5Y4/1）
4　黒色粘質土（N2/）
5　暗灰色砂（N3/）
6　黒色粘質土（N2/）0.5～2㎝大の小礫を含む。底になるほど小礫が多い
7　灰色砂質土（5Y4/1）0.5～1㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）のくされ礫を含む。0.5～1㎝大の小礫を含む
8　緑灰色砂（5G6/1）
9　緑灰色砂（10G5/1）1～5㎝大の小礫を多く含む
10　暗青灰色粘土（10BG4/1）若干砂粒を含む
11　暗緑灰色砂（10G4/1）1～3㎝大の小礫を含む
12　暗灰黄色粘土（2.5Y5/2）砂粒を含む
13　暗灰色粘土（N3/（YR））若干砂粒を含む
14　黄褐色粘土（10YR5/6）砂粒を含む。溝の底部に近いほどグライ化（明緑灰色（10G7/1））が激しい
1～9　SD001　　1～4　上層　　5～7　下層
8～9　最上層　　10～14　ベース



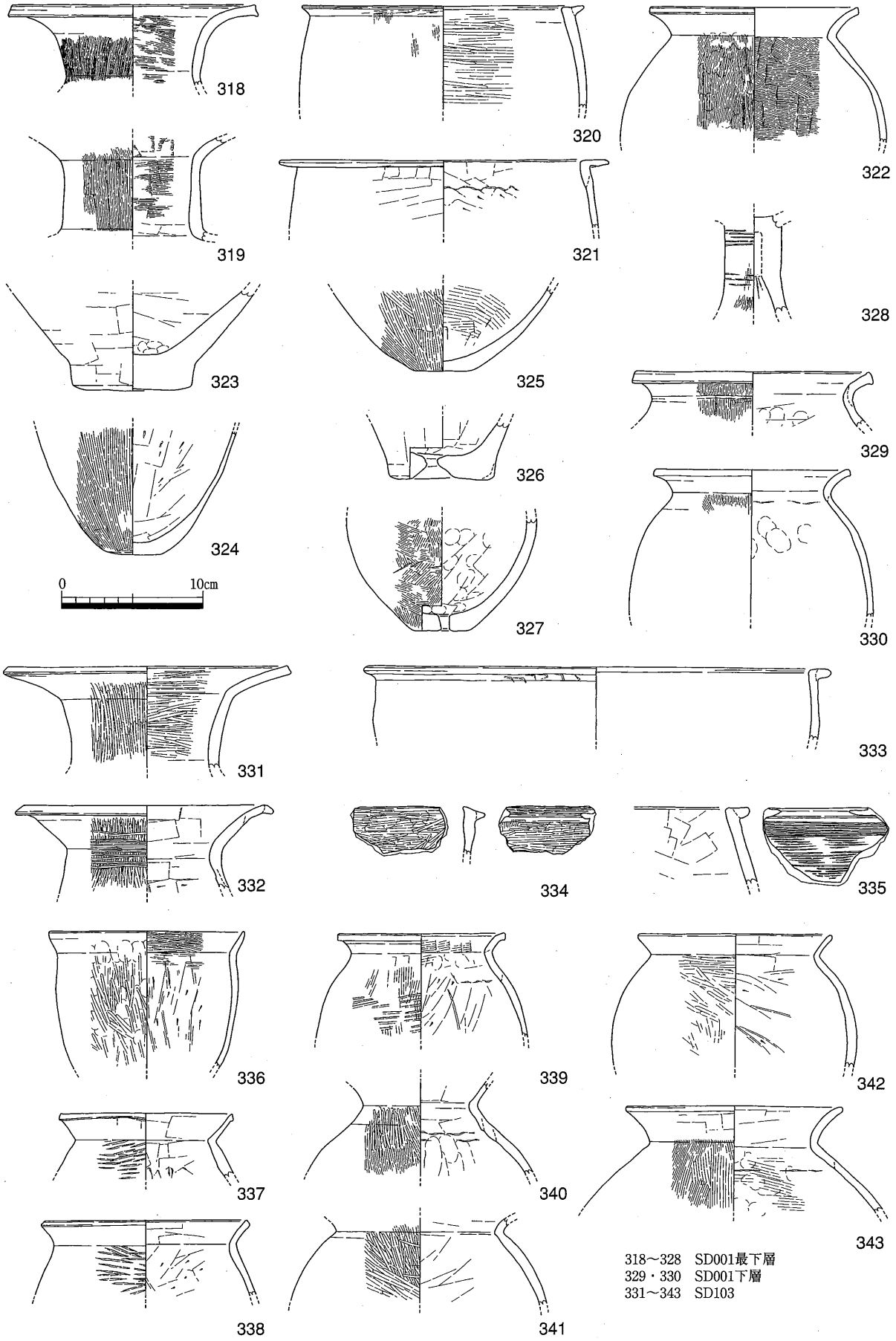
1　黒色粘土（N2/）1～5㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）の礫を多量に含む
2　黒色砂質土（N2/）1～5㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）の礫を含む
3　暗灰色粘質土（N3/）
4　暗灰色砂（N3/）1～5㎝大の礫を多量に含む
5　暗緑灰色砂（5G4/1）
6　黒褐色粘質土（10YR3/1）
7　灰黄褐色砂（10YR4/2）1～5㎝大の礫を多量に含む
8　灰色砂（N4/）
1～5　SD001　　1～3　上層　　4・5　最下層
6～8　SD103



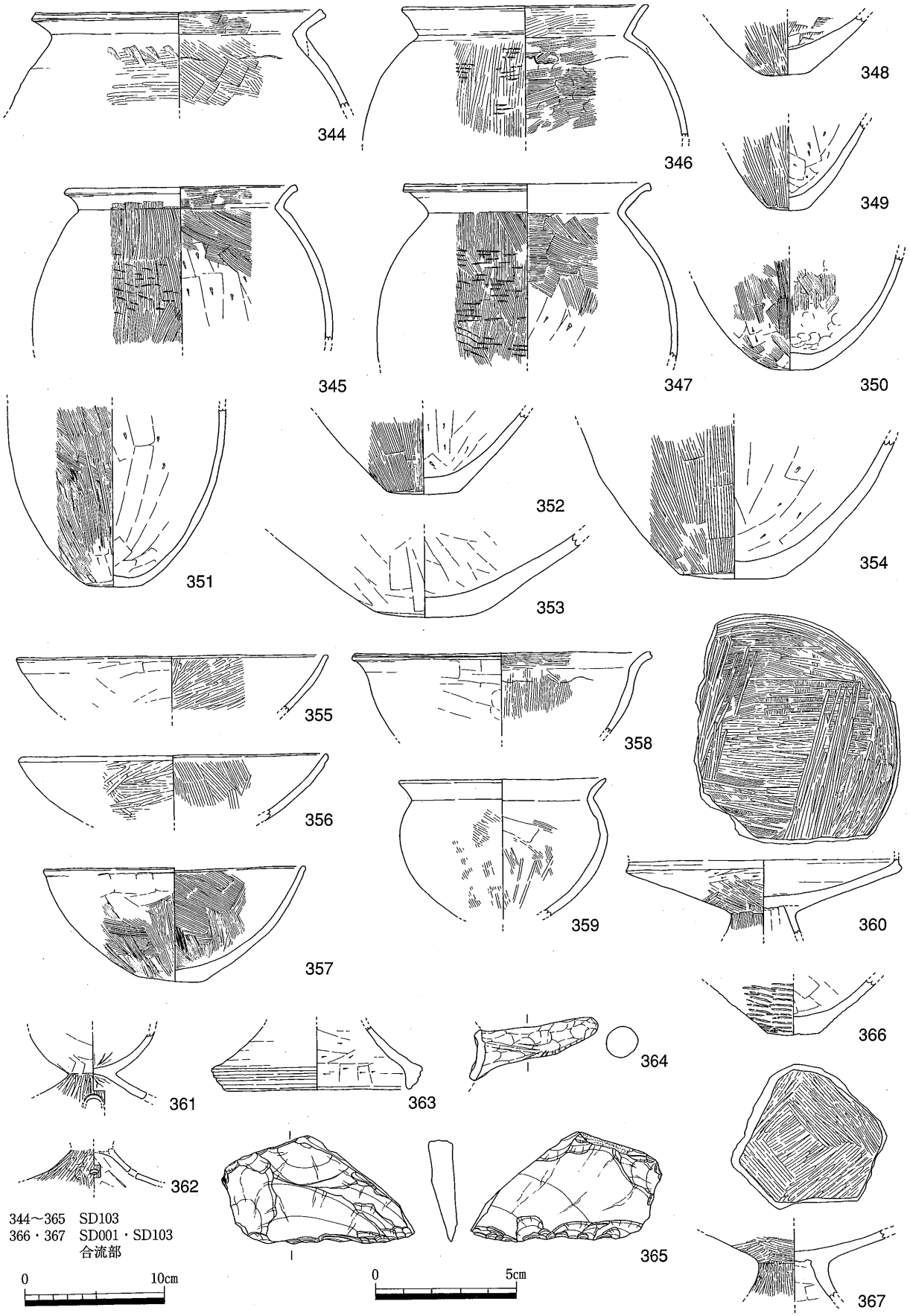
1　黒色弱粘質土（10YR2/1）1～2㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）の小礫を多く含む
2　暗灰色砂（N3/）
3　暗灰黄色砂（2.5Y4/2）
4　黒褐色砂（2.5Y3/2）砂粒粗い
5　灰オリーブ色砂（5Y4/2）砂粒細かい
6　灰色砂（7.5Y4/1）
7　灰黄褐色砂礫（10YR4/2）1～10㎝大の礫を多量に含む
8　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）1㎝大の明黄褐色礫（10YR6/8）を含む
9　黄灰色砂質土（2.5Y4/1）砂粒細かい
10　黄灰色砂質土（2.5Y4/2）砂粒細かい
11　灰色砂（4N/・砂粒細かい）と灰色弱粘質土（N4/）がラミナ状に堆積
12　暗青灰色砂（5B4/1）1～5㎝大の礫を含む．砂粒粗い
13　暗灰色砂（N3/）砂粒やや粗い
14　暗灰色弱粘質土（N3/）1～2㎝大の明黄褐色（10YR6/8）・灰白色（10YR8/2）の小礫を多量に含む（弥生後期包含層）
15　黒褐色砂質土（10YR3/1）
16　褐灰色・褐色粘質土（10YR4/1･7.5YR4/4）（弥生中期包含層）
17　褐灰色・黄褐色粘質土（10YR4/1･10YR5/8）
18　褐灰色砂（10YR5/1）
19　黒色粘土（N2/）
20　青灰色粘土（10BG5/1）
1～14　SD103

※a～dの位置については付図参照

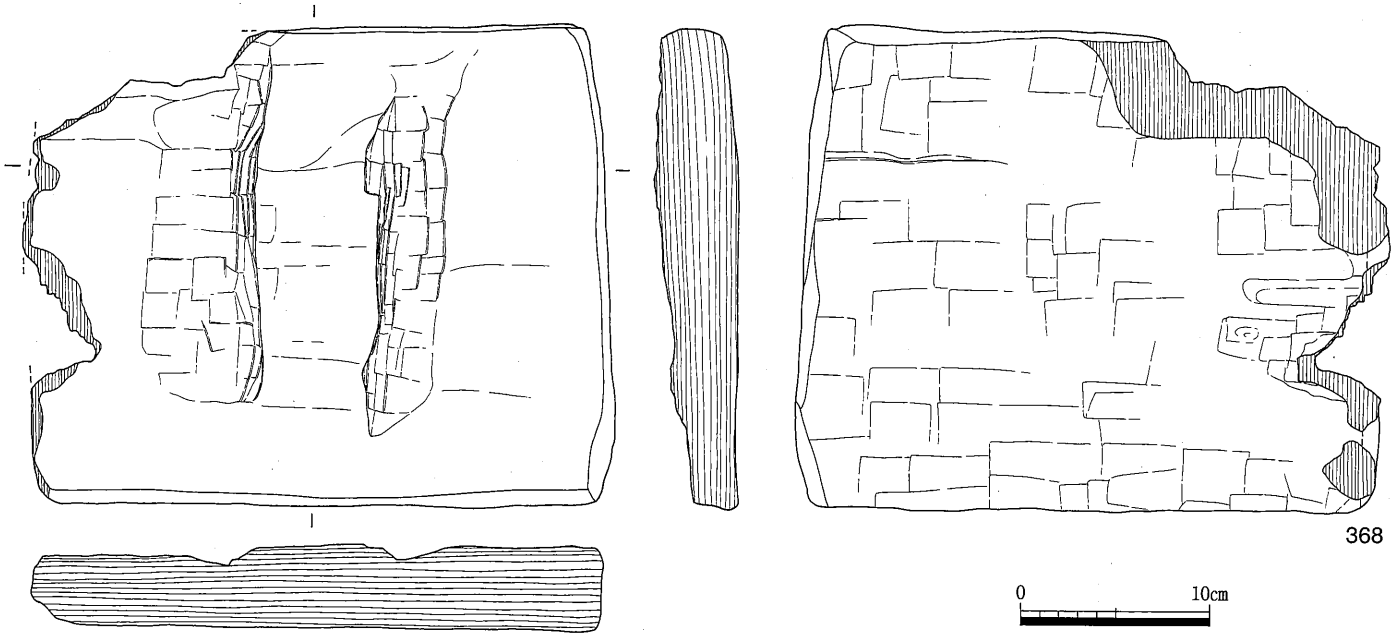
第52図　Ⅰ区SR01・SD001・103断面図（1/40）



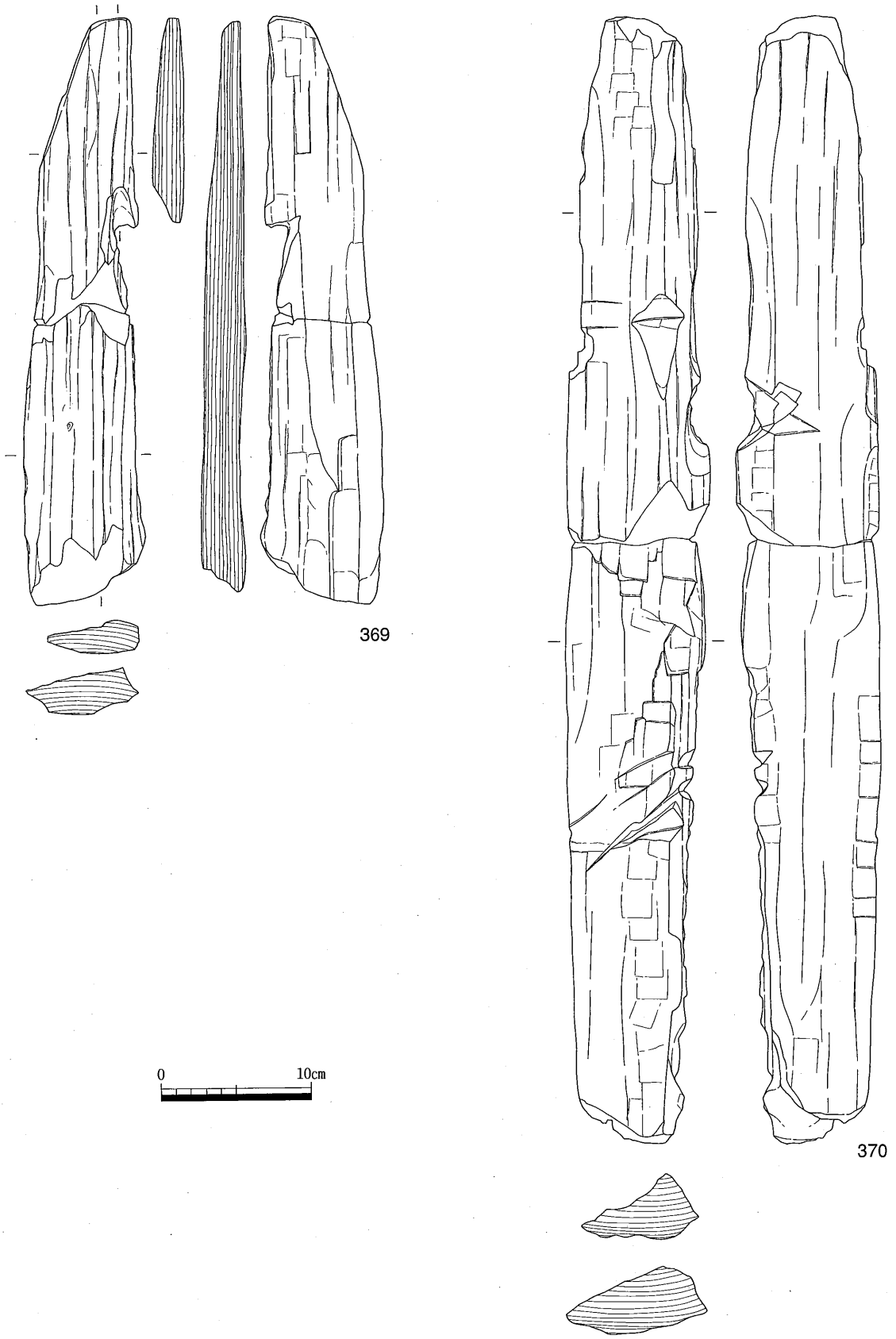
第53図　Ⅰ区SD001・103出土遺物（1/4）



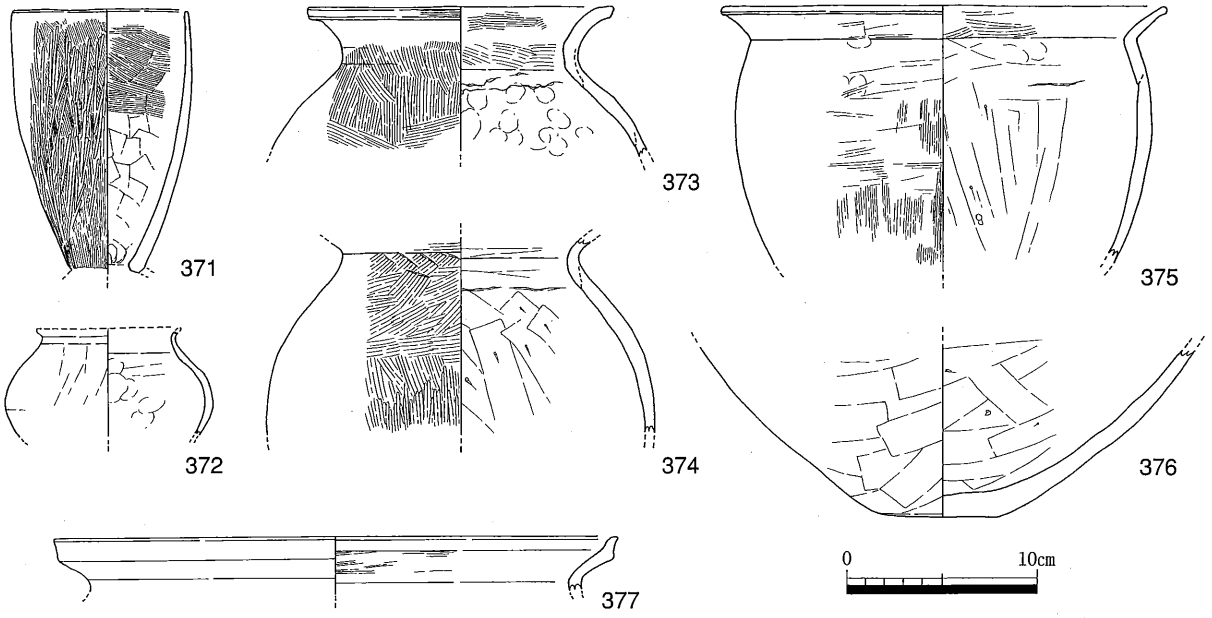
第54図　Ⅰ区SD103出土遺物(1)（1/4・1/2）



第55図　Ⅰ区SD103出土遺物(2)（1/4）



第56図　Ⅰ区SD103出土遺物(3)（1/4）



第57図　Ⅰ区SD001・103・SR01出土遺物（1/4）

324・325は甕の底部である。326・327は底部穿孔土器である。328は高杯脚部で、脚部の２ヶ所にヘラ描き沈線文を３～５条巡らせる。最下層の遺物の時期は、320・321・323など中期前半前後のものも認められるものの、概ね318・319・322の時期である弥生時代終末期頃と考えられる。

329・330は下層部分から出土した遺物で、いずれも弥生土器甕である。外面はハケ、内面はほとんど調整痕跡を残さない。弥生時代終末期頃と考えられる。

上層からは土器小片やサヌカイト片が少量出土したのみで、時期の確定できる遺物は出土しなかった。SD001は概ね弥生時代終末期頃洪水砂を受けて1/3程度が埋没したと考えられる。

331～365はSD103から出土した遺物である。331・332は広口壺で、やや外傾気味の頸部をもつ。333～347は甕である。333～335は逆Ｌ字型口縁をもつもので、333・334は体部を無文、335は６条１単位の櫛描き沈線文を４単位以上施す。336～347は球形の体部で、外面の調整痕は337・338がタタキ痕しか残らないが、他は概ねタタキの後ハケで調整し、内面は板ナデやハケ、ヘラケズリで調整する。348～354は底部で、353は壺の、他は甕の底部である。調整は他の甕と同じく概ね外面はハケ、内面はヘラケズリまたはハケである。355～357は埦形の鉢、358・359は口縁部が屈曲する鉢である。360・363は高杯である。360は杯部は内外面とも４分割のヘラミガキを行う。胎土中には角閃石を少量含む。363は脚部である。脚端部には凹線３条を施し、内面は横方向にヘラケズリする。361・362は脚付きの鉢である。ともに脚部に穿孔が１ヶ所確認できる。脚部の調整はヘラミガキにより丁寧に行う。364は甑の把手である。365はサヌカイト製のスクレイパーである。

333～335が弥生時代中期初頭、363は弥生時代中期後半頃であるが、出土遺物の大半は弥生時代終末期であり、SD103の時期はSD001最下層とそれほど変わらない弥生時代終末期と考えられる。

366・367はSD001とSD103の合流部分で出土した遺物で、ともに弥生土器である。366は甕の底部で、外面にタタキ痕が残る。367は高杯で、杯部は内外面とも４分割のヘラミガキを行う。胎土中に角閃石をわずかに含む。これらの遺物の時期はSD001やSD103の出土遺物と同じ時期である。

368～370はSD103の底付近から出土した木製品である。これらは集中して出土した。368は広鍬の未製品である。長さ30.6cm、幅25.4cm、厚さ約4.2cmの板目材の中央付近に、周囲を削り込むことによって幅約9.1cmの突起を作り出そうとしている。その他についてはまったく加工されていない状態である。369は鍬の未製品と考えられる。下部、側半部は欠損する。厚さ３cmの板目材を使用し、上部は角をカットし、穿孔をしていると考

えられる。370は割り材である。樹種同定の結果、368・370はコナラ属アカガシ亜属、369はクリであることが判明し、いずれも遺跡周辺からもたらされたものと考えられる。木製品の未製品が溝の最下部から集中して出土したことから、これらは水漬け保存されていた状態であったと考えられる。

出土遺物により、SD103とSD001下層まではほぼ同じ時期に砂により急激に埋没し、SD001の上層は徐々に埋没していったと考えられる。

371～377は予備調査の際にSD001・103・SR01相当部分から出土したと考えられる遺物で、371～376は弥生土器である。371・372は壺である。371は細頸壺である。下川津Ｂ類土器の形態と類似するが、胎土中に角閃石は含まない。372は短頸壺である。373～375は甕である。外面はハケ、内面は概ねヘラ削りで調整する。376は壺の底部である。377は土師器甕の口縁部小片で、寸胴形の体部が付く。

377以外は概ねSD001・103の時期と同じ弥生時代後期後半～終末期頃の遺物である。377は８世紀代のもので、混入と考えられる。

Ⅱ区SD011（第３・58図）

Ⅱ区中央付近で検出した溝である。南から北へ流れる。幅３～５ｍ程度、深さ50～58cmを測る。埋土は概ね上層が黒色粘土・粘質土でクサリ礫を含み、中層が黒色粘土・黒色粘質土で小礫を含み、下層は灰色細砂質土、砂層、ラミナ層である。断面形状は、下層部分は逆台形を呈するが、上層部分はなだらかなⅢ型である。下層部分は短期間に、中・上層部分は比較的ゆっくりと埋没していったと考えられる。SD011はその規模から当該期の幹線水路の役割を果たしたと考えられる。

378～382は下層から出土した遺物で、378～381は弥生土器である。378は広口壺である。ほぼ直立する頸部で、頸部と底部は直接は接合しないが、胎土や調整から同一個体と考えられる。379～381は甕である。379は体部に櫛描き沈線文を施すが、摩滅が進み、条数や単位は明らかではない。380・381は体部をタタキで調整する。382はサヌカイト製の打製石庖丁である。上部には敲打痕、側縁部には抉りを残す。下層出土遺物の時期は、弥生時代中期初頭と考えられる379を除けば概ね弥生時代後期後半頃と考えられる。383～386は中層から下層にかけて出土した土器で、いずれも弥生土器である。383は壺頸部で、５条以上の稚拙なヘラ描き沈線を施す。384～386は甕である。384は逆Ｌ字型口縁を持ち、口縁端部には刻目を施す。体部には櫛描き沈線文を巡らせる。385・386は口縁端部を屈曲させるものである。383は弥生時代前期後半頃、384は弥生時代中期初頭、385・386は弥生時代中期中頃～後期初頭頃である。387～389は中層から出土した遺物で、いずれも弥生土器甕である。外面はハケ、内面は板ナデまたはハケで、底部はわずかに平底の部分がある。390・391は上層から出土した遺物で、いずれも弥生土器である。390は広口壺の口縁部である。391は鉢小片と考えられる。貼付突帯の上部にヘラ描き沈線を４条以上巡らせる。392は出土層位が不明の遺物で、弥生土器底部である。

383・391が弥生時代前期後半、379・385・386は弥生時代中期初頭～中頃の遺物であるが、最下層からは弥生時代後期後半の遺物が出土しており、溝の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

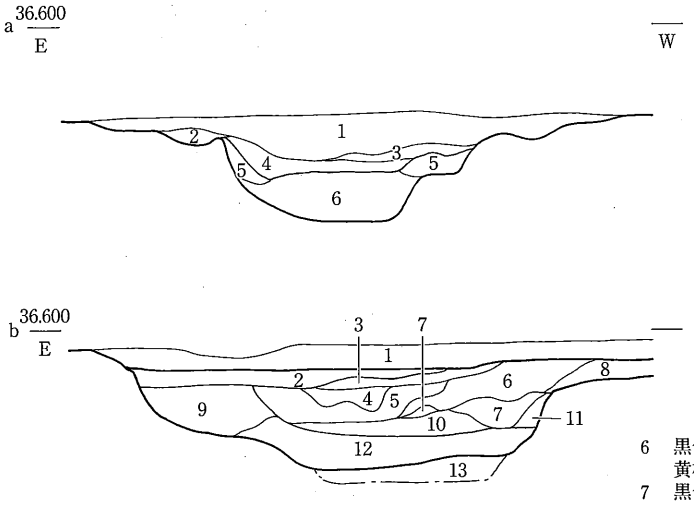
Ⅲ区SD021～024（第４・59図）

Ⅲ区中央付近を南東から北西方向へ流れる溝である。概ねそれぞれ４～５ｍ間隔でほぼ同方向に流れる。SD022・024がやや規模が大きく、SD021・023は小規模である。

SD021は最も東側に位置する溝で、幅35cm、深さ１cmを測る。南端付近でSD093を壊す。埋土中からは弥生土器片が出土した。

393は弥生土器甕小片である。刻目を持つ逆Ｌ字型口縁で、ヘラ描き沈線が２条現存する。

SD022はSD021の３～４ｍ西側に位置する溝である。幅134cm、深さ37cmを測り、断面形状はＶ字に近い。埋土は最下層に黄灰色砂が堆積するが、大半は黒色粘質土で占められ、最下層以外は徐々に埋没した様子が窺

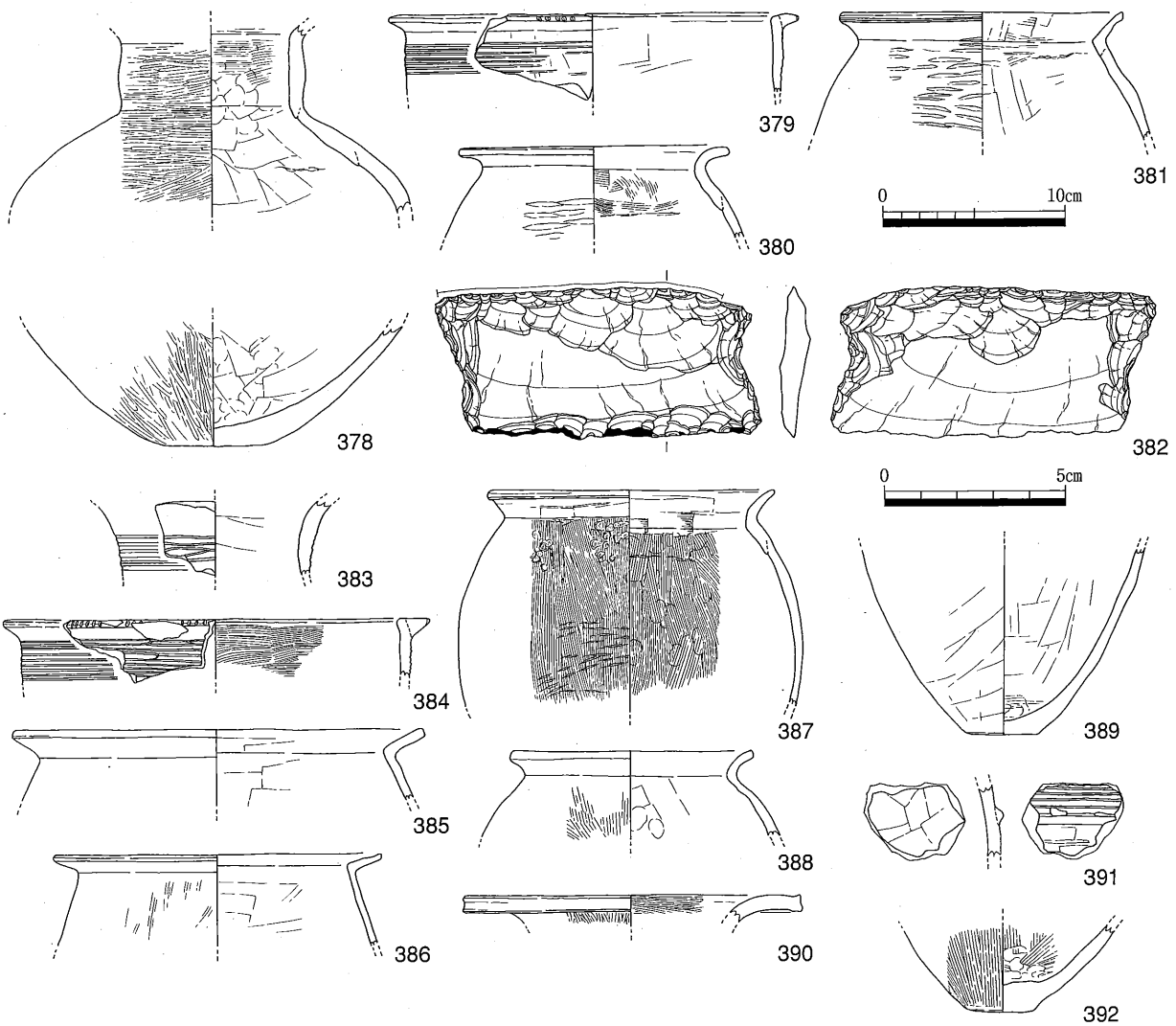


1　黒色粘土(7.5YR2/1) 0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色(10YR7/8)のくされ礫を多く含む．北ほど多い
2　灰色砂質土（N4/）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）のくされ礫を若干含む
3　暗灰色粘質土（N3/）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）のくされ礫を含む
4　灰色細砂質土（N4/）
5　黄灰色粘土（2.5Y4/1）
6　黄灰色砂（2.5Y5/1）0.5～1cm大の小礫を含む

1～3　上層
4～6　下層

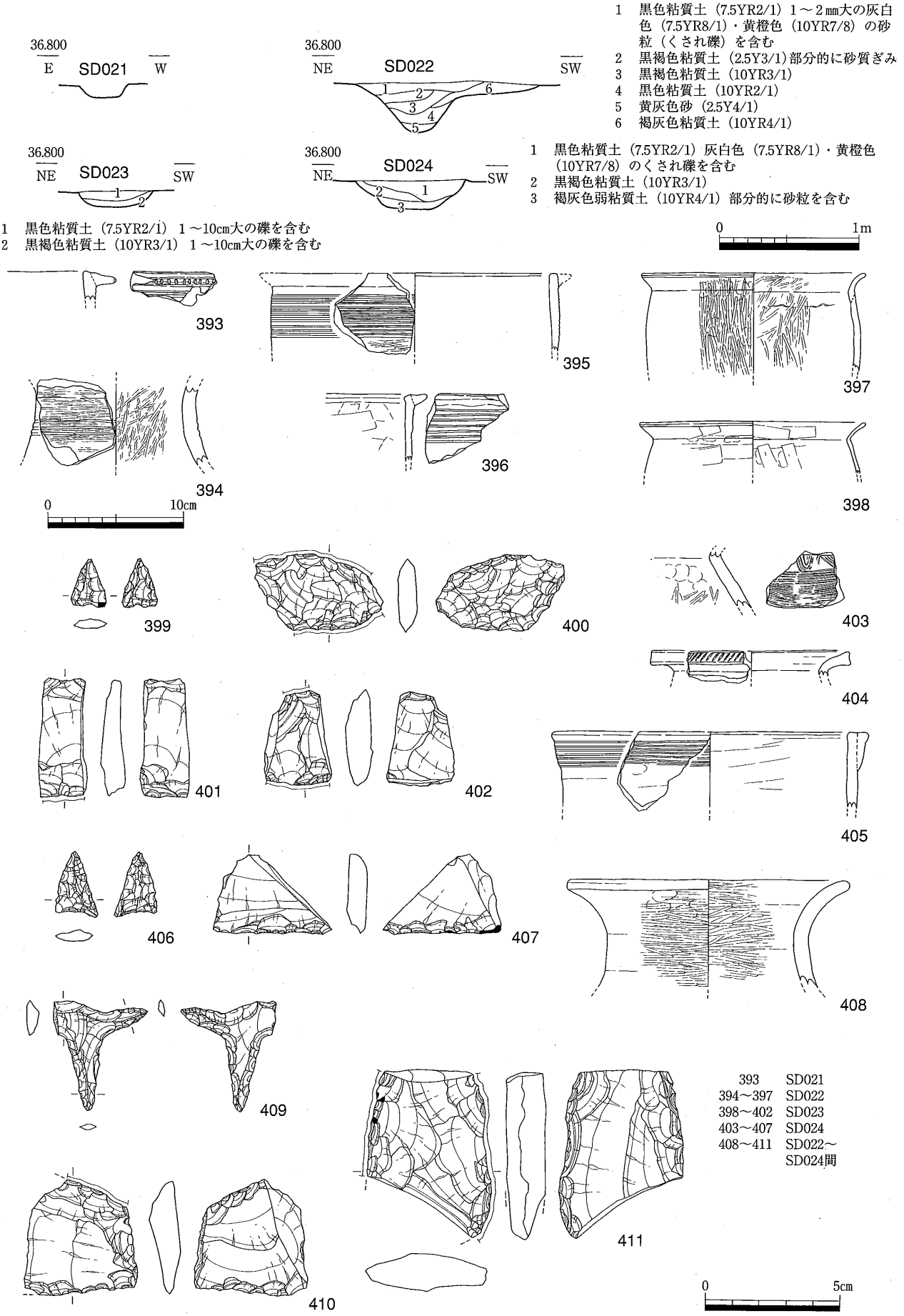
0　1m

1　褐灰色砂質土（10YR4/2）0.5cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）の小礫を少量含む（包含層）
2　黒色弱粘質土（7.5YR2/1）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）の小礫を含む（上層）
3　黒色粘質土（7.5YR2/1）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）の小礫を含む（上層）
4　褐色砂（7.5YR4/6）砂粒粗い（中層）
5　黒色粘土（N2/）(中層)
6　黒色粘質土（7.5YR2/1）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）の小礫を多量に含む（中層）
7　黒色粘土（N2/）16層に比べ若干砂粒を含む（中層）
8　黒褐色弱粘質土（2.5Y3/1）（中層）
9　黒色弱粘質土（7.5YR2/1）0.5～1cm大の灰白色（7.5YR8/1）・黄橙色（10YR7/8）の小礫を多量に含む（中層）
10　灰色砂（N4/）（中層）
11　黒褐色砂質土（10YR3/1）砂粒やや粗い（中層）
12　黒色粘質土（N2/）と灰色砂（N4/・砂粒細かい）がラミナ状に堆積（下層）
13　黄灰色砂（2.5Y4/1）砂粒粗い（ベース）



378～382　下層　　387～389　中層　　392　層位不明
383～386　中・下層　390・391　上層

第58図　Ⅱ区SD011断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第59図　Ⅲ区SD021～024断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

える。遺構の重複関係によりSK06・18・20より新しい。

394～397はSD022から出土した遺物で、すべて弥生土器である。394は壺頸部小片である。頸部にヘラ描き沈線を３条施す。395～397は甕である。395・396は逆Ｌ字型口縁をもち、体部に７条（396）、12条（395）のヘラ描き沈線を施す。

SD023はSD022の３～４ｍ西側で検出した溝である。幅54cm、深さ11cmを測り、断面形状は浅いⅢ状を呈する。埋土は黒色・黒褐色粘質土で礫を含むもので、SD022・024の上層部分とほぼ同じである。遺構の重複関係により、SK18より新しい。埋土中からは弥生土器片、サヌカイトが出土した。

398は弥生土器甕である。摩滅が著しい。399～402はサヌカイト製の石器である。399は凹基式石鏃である。400はスクレイパーで、上・下部ともに敲打痕がある。401・402は楔形石器である。401は下部に、402は上・下部ともに敲打痕があり、両側縁はともに折れ面になっている。

SD024はSD023の３～5.5m西側で検出した溝である。幅80cm、深さ20cmを測り、断面形状は逆台形、埋土は最下層に褐灰色粘質土が堆積するが、大半は黒色粘質土で、SD022・023と共通する。埋土中からは弥生土器片・サヌカイト片が出土した。

403～407はSD024から出土した遺物である。403～405は弥生土器で、403・404は壺である。403は小片で、体部に櫛描き沈線文と波状文を施す。404は広口壺で、口縁端部に刻み目を施す。405は甕である。口縁端部に幅広く粘土を貼り付け、そこにヘラ描き沈線文を６条施す。406・407はサヌカイト製の石器である。406は凹基式石鏃、407はスクレイパーである。

408～411はSD022～024付近を精査した際に出土した遺物である。408は弥生土器壺である。409～411はサヌカイト製の石器である。409は石錐と考えられる。先端を尖らせた部分をほぼ直角に２ヶ所に作り、１ヶ所は折れ面になる。410は楔形石器で、上部に敲打痕が残る。411は打製石斧片で、両側縁に敲打痕を残す。

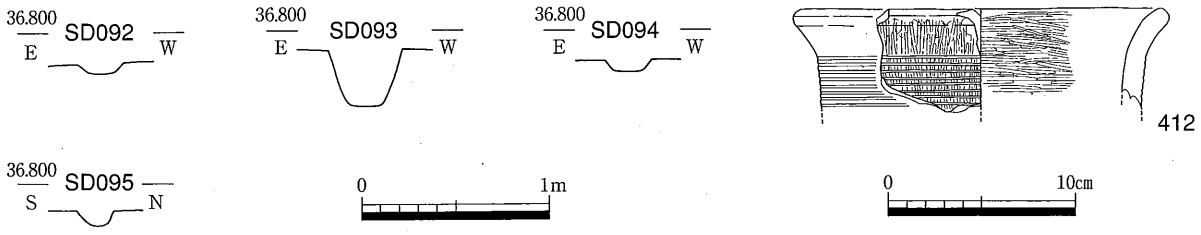
それぞれの溝から出土する遺物は、SD021出土の393が弥生時代前期末前後、SD022出土の395～396が弥生時代前期末、SD023出土の398が弥生時代後期後半、SD024出土の403～405が弥生時代中期初頭～中頃と考えられるが、いずれも弥生時代中期初頭前後の土坑を壊していることを考えれば、遺構の時期はそれ以降であると考えられる。これらの４条の溝は、その配置からおおむね同時並存と考えられ、出土遺物や弥生時代後期後半頃の幹線水路SD011との関連を考慮して、これと同時期と考えられる。

Ⅲ区SD092～SD095（第４・60図）

Ⅱ区西南部からⅢ区東南部にかけて検出した小規模な溝群である。SD092・094はほぼ方位を同じくし、SD021～024とも概ね方位を同じくする。SD093はこれらの溝とは斜交する方向、SD095はこれらと直交する方向である。

SD092はⅡ区西南隅付近で検出した。延長約４ｍ分を検出し、幅24cm、深さ７cmを測る。SD110付近で消失し、それより北西側では検出できなかった。

SD093はⅢ区東南部で検出した。延長7.8m分を検出したが、SD110付近で消失し、これより北東側では検出できなかった。幅40cm、深さ29cmを測る。遺構の重複関係により、SD021より古い。埋土中からは弥生土器壺



第60図　Ⅲ区SD092～095断面図（1/40）、SD093出土遺物（1/4）

片が出土した。

412は弥生土器壺である。頸部に８条以上のヘラ描き沈線文を巡らせる。弥生時代前期末頃のものである。

SD094はⅢ区東南部で検出した。SD021とSD022の間で、これらにほぼ平行して検出した。延長約5.5mを検出したが、それより北では検出できなかった。幅25cm、深さ６cmを測る。

SD095はSD021とSD023をつなぐように検出した。SD021・022・023・094とほぼ直交し、SD021・022とは前後関係が認められない。延長約7.4mを検出し、幅19cm、深さ８cmを測る。

SD093以外は埋土中からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、SD021～023との位置関係と規模、方向性からこれらと概ね同一の時期の遺構の可能性が高い。

Ⅱ区SD028（第３・61図）

Ⅱ区北西隅付近で検出した小規模の溝状遺構である。約10mを検出した。途中１ヶ所屈曲する。幅35cm、深さ７cmを測り、埋土はオリーブ黒色粘質土である。SD110の上面で検出しており、これより新しい。埋土中からは弥生土器片が出土した。

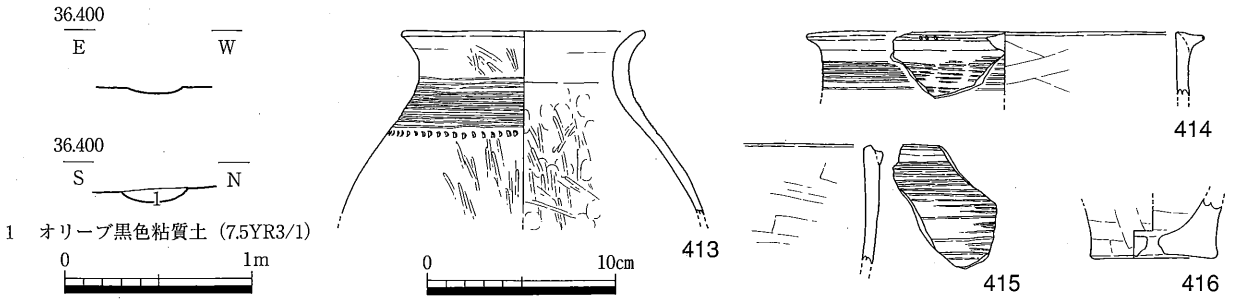
413～416は弥生土器である。413は壺で、頸部に８条１単位の櫛描き沈線文を２単位巡らせ、その下部には楕円形の刺突文を施す。414・415は甕である。いずれも体部に５条１単位程度の櫛描き沈線文を施す。415は口縁端部からわずかに下がった位置に突帯状の粘土紐を巡らせ、逆Ｌ字状に近い形態にしている。416は底部穿孔土器である。

出土遺物はいずれも弥生時代中期初頭頃のものであるが、これらはSD110に由来するものである可能性が高い。

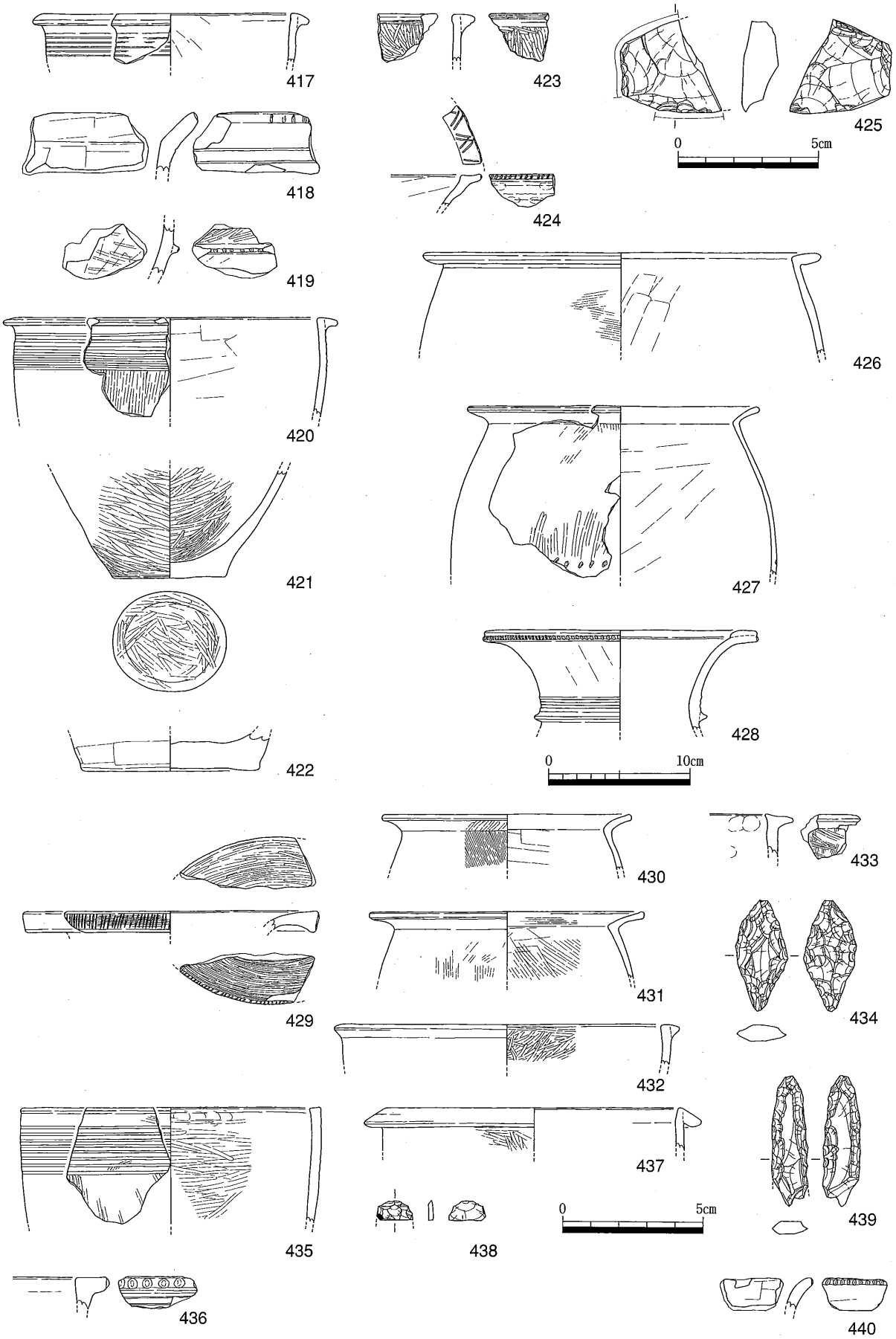
Ⅲ区ピット出土遺物（第４・62図）

Ⅲ区からは約230穴のピットを検出した。時期で大きく分ければ、後述する中世の集落に伴うものと、土坑と時期の同じ弥生時代前期末～中期前半の頃のものがある。ここでは弥生時代のものを取り上げる。

417～428はD7グリットで検出したピットから出土した遺物で、石器以外はいずれも弥生土器である。417はSP038から出土した甕である。体部にはヘラ描き沈線を５条以上巡らせる。やや摩滅が進む。弥生時代前期末頃である。418～421はSP050から出土した遺物である。418は口径の大きい鉢である。ヘラ描き沈線を２条以上巡らせる。口縁端部の刻目は不規則的である。419は壺体部小片である。体部最大径付近に刻目を持つ貼付突帯を巡らせる。420は甕で、体部にはヘラ描き沈線を７条巡らせる。421は壺底部である。概ね弥生時代前期末頃と考えられる。423・424はSP068から出土した弥生土器である。423は甕小片で、逆Ｌ字型口縁を持ち、体部は無文である。424は鉢小片である。口縁端部には刻み目、上面には山形のヘラ描き文を施す。弥生時代中期初頭～前半頃である。425はSP070から出土したサヌカイト製スクレイパーである。426はSP072出土の弥生土器甕である。あまり胴部が張らないもので、弥生時代中期前半頃のものである。427はSP073出土の弥生土器甕である。胴部はやや丸みを帯び、胴部最大径には列点文を巡らせる。弥生時代中期前半頃である。



第61図　Ⅲ区SD028断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第62図　Ⅲ区ピット出土遺物（1/4・1/2）

428はSP090から出土した弥生土器壺である。頸部には突帯を１条巡らせ、その上部にヘラ描き沈線を２条巡らせる。口縁端部には刻目を施し、口縁端部内面には幅広めの粘土紐を足して、厚くしている。弥生時代前期末頃である。

429～434はE7グリットで検出したピットから出土した遺物である。石器以外はいずれも弥生土器である。429～431はSP318から出土した遺物である。429は広口壺小片で、やや厚くした口縁端部に刻目を、口縁端部上端にもさらに刻目を施す。430・431は甕である。いずれも外面はハケで調整し、胴部はあまり張らないものである。弥生時代中期中頃である。432はSP324から出土した甕小片である。体部は無文である。弥生時代中期初頭頃である。433・434はSP351出土遺物である。433は弥生土器甕小片である。体部は無文である。434はサヌカイト製の尖頭器である。

435はC8グリットで検出したSP131から出土した弥生土器甕である。SD062の下部で検出した。もとは逆L字型の口縁部を持つと考えられるが、口縁端部は剥離していた。口縁端部に１条、体部には８条のヘラ描き沈線を持つ。弥生時代前期末頃である。

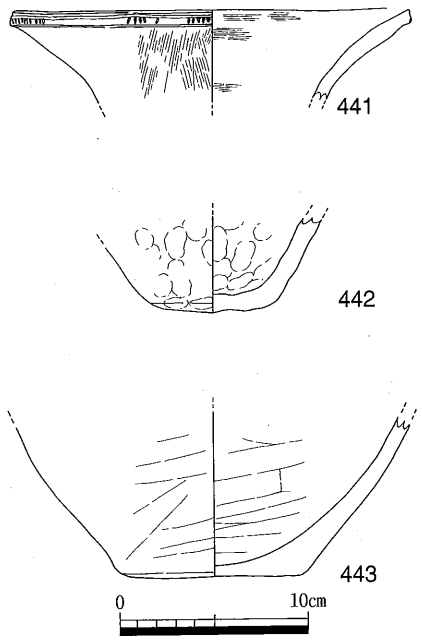
436～440はD8グリットで検出したピットから出土した遺物である。石器以外はいずれも弥生土器である。436はSP026から出土した甕小片である。ヘラ描き沈線を２条以上施し、口縁端部には円形浮文を貼り付ける。弥生時代後期末頃である。437はSP106から出土した甕である。体部は無文である。438はSP105から出土したサヌカイト小片である。加工は腹面だけで、背面は未加工である。439はSP115から出土したサヌカイト製の槍先である。下部は欠損する。440はSP374から出土した甕である。口縁端部に刻目を持つ。小片のため沈線の有無は明らかではない。

これらの出土遺物は概ね弥生時代前期末～中期前半頃のもので、周辺の土坑と時期の合うものである。

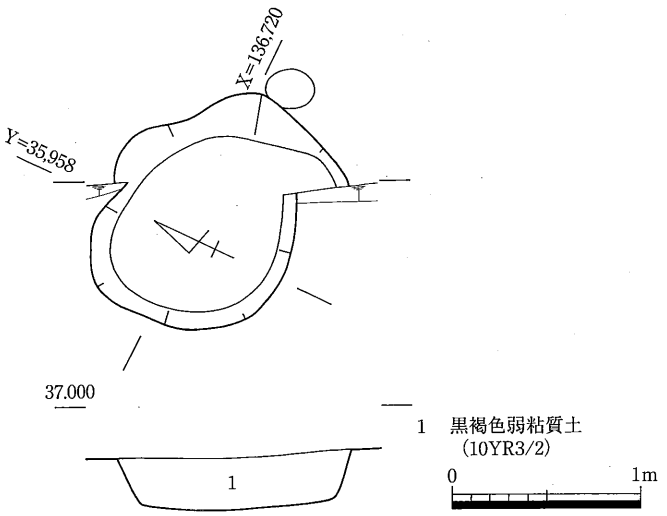
Ⅳ区ピット出土遺物（第５・63図）

Ⅳ区からは約90穴のピットを検出した。Ⅲ区と同様中世の集落の由来するものと、周辺の土坑と時期が合う弥生時代中期頃の遺物が出土するピットに分けられる。

441はSB02の西側で検出したSP239から出土した広口壺の口縁部である。口縁端部には凹線を１条巡らせ、その後不均等に間隔をあけながら刻目を施す。弥生時代中期中頃である。442はSD058の下部で検出した



第63図　Ⅳ区ピット出土遺物（1/4）



第64図　Ⅲ区SK02平・断面図（1/40）

SP273出土遺物である。壺の底部と考えられるが、成形の際の指押え痕が顕著に残り、その他の調整痕は認められず、作りの粗いものである。443はSD085とSD086の間で検出したSP297から出土した弥生土器壺底部である。

Ⅲ区SK02（第４・64図）

Ⅲ区西端部で検出した土坑である。概ね円形と考えられ、直径1.32m、深さ27cm、埋土は黒褐色弱粘質土である。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト片が出土した。埋土から弥生時代の遺構と考えられる。

Ⅳ区SK37（第５・65図）

Ⅳ区東南端で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.86m、短軸1.23m、深さ５cm、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト片が出土した。

444はサヌカイト製石鏃で、下部は欠損している。

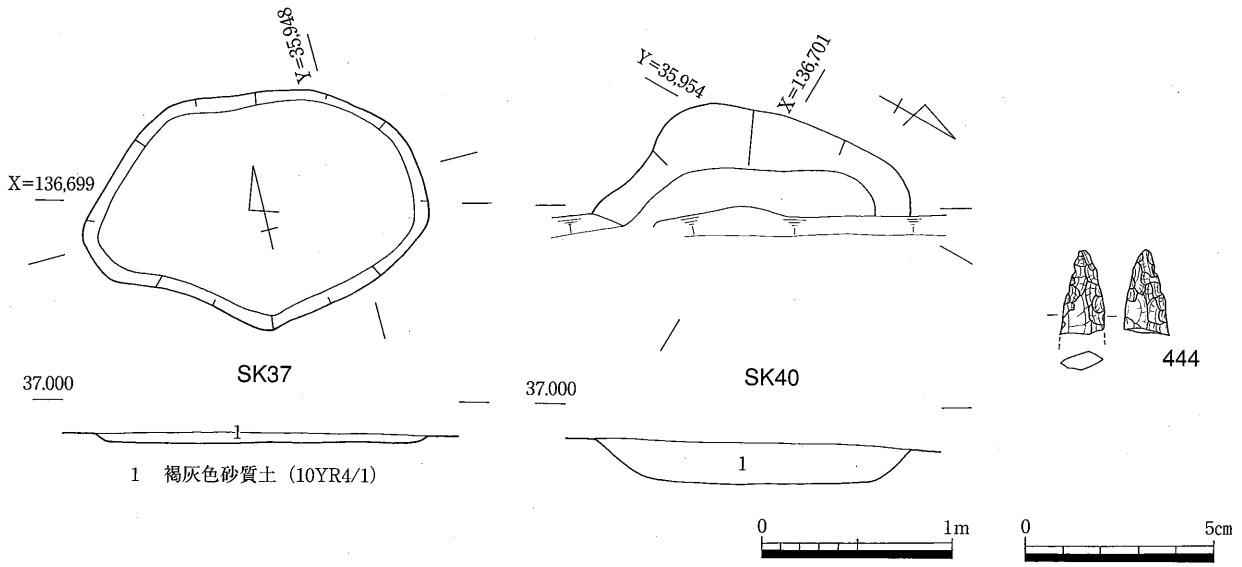
遺構の時期は出土遺物から弥生時代と考えられる。

Ⅳ区SK40（第５・65図）

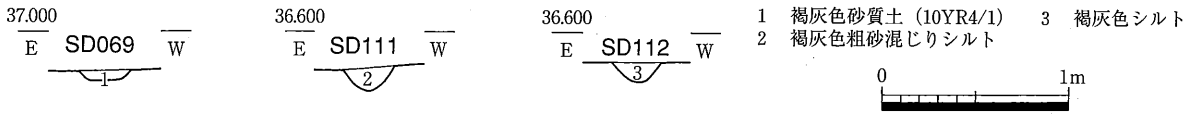
Ⅳ区東端部で検出した土坑である。土坑の大半は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は明らかではないが、深さは24cmを測り、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。遺構の時期は出土遺物とSK37と埋土が共通することから、SK37と同じ弥生時代と考えられる。

Ⅳ区SD069（第５・66図）

Ⅳ区東南部付近で検出した溝状遺構である。中世の溝状遺構であるSD057・073の下部で検出し、これらよ



第65図　Ⅳ区SK37・40平・断面図（1/40）、SK37出土遺物（1/2）



第66図　Ⅳ区SD069・Ⅴ区SD111・112断面図（1/40）

り古いことがわかる。遺構の方向はⅢ区SD093に類似する。検出長は6.4m、幅28cm、深さ５cm、埋土は褐灰色砂質土である。埋土中からはサヌカイト小片が出土しただけであった。

遺構の時期は遺構の重複関係と方向性・埋土から弥生時代と考えられる。

Ⅴ区SD111・112（第５・66図）

Ⅴ区東部で検出した溝状遺構である。ほぼ同じ方向で、互いに約1.1mの間隔をあけて検出した。

SD111は検出長9.5m、幅26cm、深さ12cmを測り、埋土は褐灰色粗砂混シルトである。埋土中からはサヌカイト小片が出土しただけであった。

SD112は検出長3.8m、幅26cm、深さ10cmを測り、埋土は褐灰色シルトである。埋土中からの出土遺物はなかった。

SD111・112はその位置関係から同時並存であったと考えられる。時期は溝の方向性から弥生時代と考えられる。

Ⅳ区SD084（第５・67図）

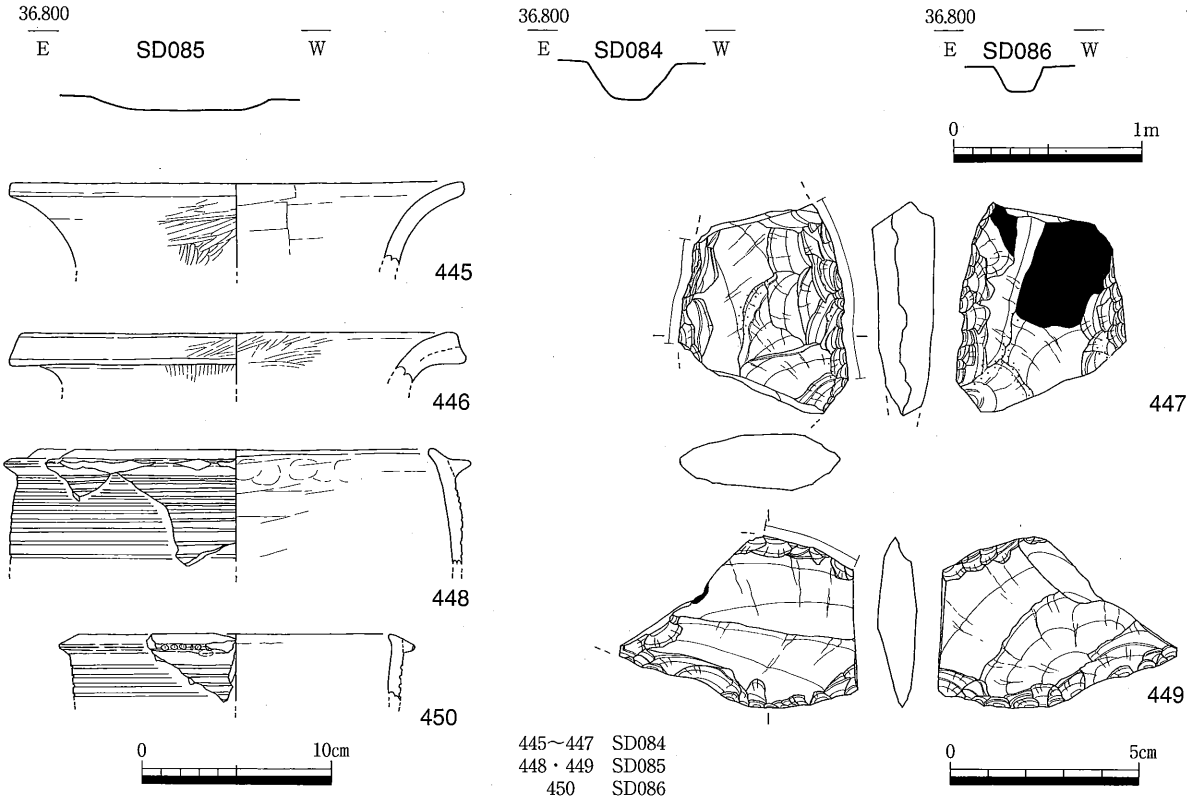
Ⅳ区中央やや南寄りで検出した溝状遺構である。検出長2.6m、幅46cm、深さ19cmを測る。埋土中からは弥生土器やサヌカイト片等が出土した。

445・446は弥生土器広口壺である。446は口縁端部の下部に粘土紐を足して、厚くさせた様子が観察できる。447はサヌカイト製の打製石斧である。上・下部は折損する。両側縁には敲打痕が残る。

出土遺物から遺構の時期は弥生時代中期頃と考えられる。

Ⅳ区SD085（第５・67図）

Ⅳ区北東部で検出した溝状遺構である。検出長は8.3m、幅95cm、深さ８cmを測る。遺構はやや弧を描きながら北東の方位へ向く。遺構の東端付近で中世の溝状遺構群により壊され、これらより古いことがわかる。埋



第67図　Ⅳ区SD084～086断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

土中からは弥生土器片やサヌカイト片が出土した。

448は弥生土器甕である。口縁の形状は逆L字状に近いが、口縁端部よりやや下がった位置に突帯を巡らせる。体部には9条以上のヘラ描き沈線文を施す。449はサヌカイト製スクレイパーである。上部には敲打痕が残る。

遺構の時期は弥生時代前期末頃と考えられる。

Ⅳ区SD086（第5・67図）

Ⅳ区中央やや東よりで検出した溝状遺構である。検出長は4.2m、幅26cm、深さ13cmを測り、概ね真北方向を向く。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

450は弥生土器甕小片である。やや下がり気味の逆L字状の口縁部に刻目を施し、体部には4条以上のヘラ描き沈線文を施す。弥生時代前期末頃のものである。

4．中世の遺構・遺物

Ⅲ区SB01（第4・68図）

Ⅲ区中央部やや西よりで検出した掘立柱建物跡である。桁行5間、梁間は2間の総柱建物で、北側の柱列は柱穴の規模や柱間隔が狭いことから庇と考えられる。桁行は10.9m、梁間は4.3m、庇までの距離は1.2mで、柱間は、桁行の東から2間目は2.0mと他よりやや短く、その他は桁行、梁間とも概ね2.1～2.3mである。建物の面積は46.9㎡、建物の主軸方位はN24°Wで、おおむね周辺の条里型地割と揃う。柱穴は円形で、身舎部分は直径は21～42cm、深さ12～30cm、庇部分は直径22～30cm、深さ12～22cmを測る。埋土は黄灰色弱粘質土であった。

451は桁行方向で中央の柱列の東から2穴目のピットから出土した遺物である。弥生土器壺体部小片で、胴部最大径付近に刻目を持つ貼付突帯を2条巡らせる。

遺物は弥生時代前期後半のものであるが、ピットの埋土が他の柱穴と共通することから、遺物は混入と考えられ、遺構の時期は中世頃と考えられる。

Ⅲ区SK32（第4・69図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。隅丸長方形を呈し、長辺1.50m、短辺1.04m、深さ18cmを測る。断面形状は逆台形で、埋土は黄褐色粘質土に弥生時代の遺構の埋土に類似する褐灰色粘質土・黒褐色弱粘質土をブロック状に含む。遺構はSB01身舎部分の北東端の、柱穴に囲まれた位置で検出した。埋土中からは弥生土器甕片、サヌカイト片が出土した。埋土からSB01と同時期である中世頃と考えられ、位置関係から、SB01に関連する、貯蔵施設のような遺構であったと考えられる。

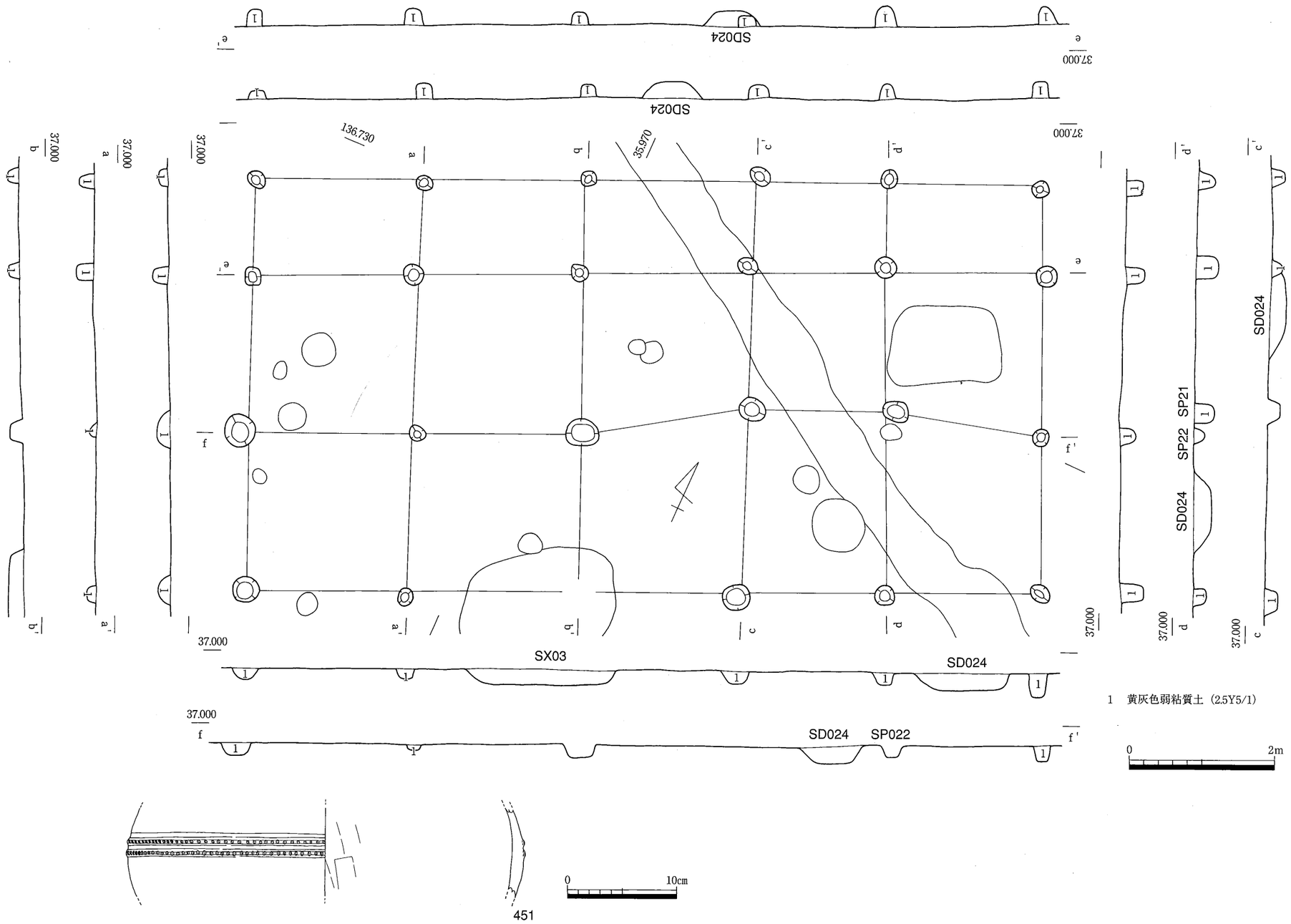
Ⅳ区SB02（第5・70図）

Ⅳ区北東部で検出した掘立柱建物跡である。桁行2間、梁間2間の総柱建物で、東側に柱筋を揃えて庇をつける。SB03と重複する位置にあるが、前後関係は明らかではない。桁行5.0m、梁間3.54m、柱間は桁行が2.43～2.58m、梁間は1.71～1.81mで、身舎部分と庇の距離は1.74～1.86mである。建物の面積は17.7㎡、庇とした部分まで含めると23.9㎡、建物方位はN29°Wで、周辺の条里型地割と揃う。柱穴は円形で直径18～26cm、深さ18～30cmで、身舎部分と庇部分の規模の差はない。埋土は黄灰色弱粘質土層で、SB01と共通する。

ピット中からは出土遺物はなかったが、埋土と建物の主軸方位より遺構の時期は中世と考えられる。

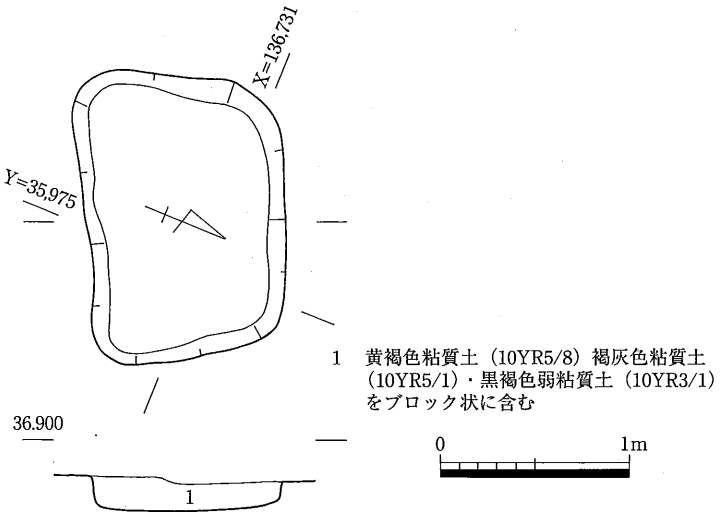
Ⅳ区SB03（第5・71・73図）

Ⅳ区北部中央付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行は4間、梁間方向は2列の柱筋を検出しているが、北側は調査区外へ伸び、全体の規模は明らかではない。南東側の柱列は北西側に比べて柱穴が小さいことから



第68図　Ⅲ区SB01平・断面図（1/60）、SP021出土遺物（1/4）

この柱列は庇である可能性も考えられる。検出した範囲がすべて身舎部分とすれば、桁行は9.45m、梁間は3.06m以上、柱間は桁行方向が2.22～2.40m、梁間方向が1.85～2.04mで、建物の面積は28.9㎡以上、建物の主軸方位はN29°Wで、周辺の条里型地割に揃う。柱穴は概ね円形であるが、北西側の桁方向の柱列は西から4穴目までが、断面が段掘り状の形状を示し、柱穴もやや大きい。その部分の柱穴は直径36㎝程度、深さ21～45㎝、他の部分は直径16.5～22.5㎝、深さ18～33㎝を測る。埋土は黄灰色弱粘質土である。建物跡の南東側0.96mと南西側1.20mの位置で建物を囲むようにL字状に屈曲する溝状遺構を検出した。雨落ち溝または地鎮のための溝と考えられる。北西側の柱穴列の西から2穴目と3穴目から土師質土器が出土した。



第69図　Ⅲ区SK32平・断面図（1/40）

452・454・455は西から2穴目のピットから出土した土師質土器である。452は小皿である。454は甕である。寸胴型の体部で、口縁端部をわずかに上方へ引き上げる。これは後述するSD026との接合資料である。455は竈の鍔部分である。453は西から3穴目のピットから出土した土師質土器皿である。遺物の時期は概ね11世紀後半～末である。

遺構の時期は、概ね11世紀後半～末と考えられ、後述するSD026との接合資料があることから、これと同じ時期のものと考えられる。

Ⅳ区SD026（第5・72・73図）

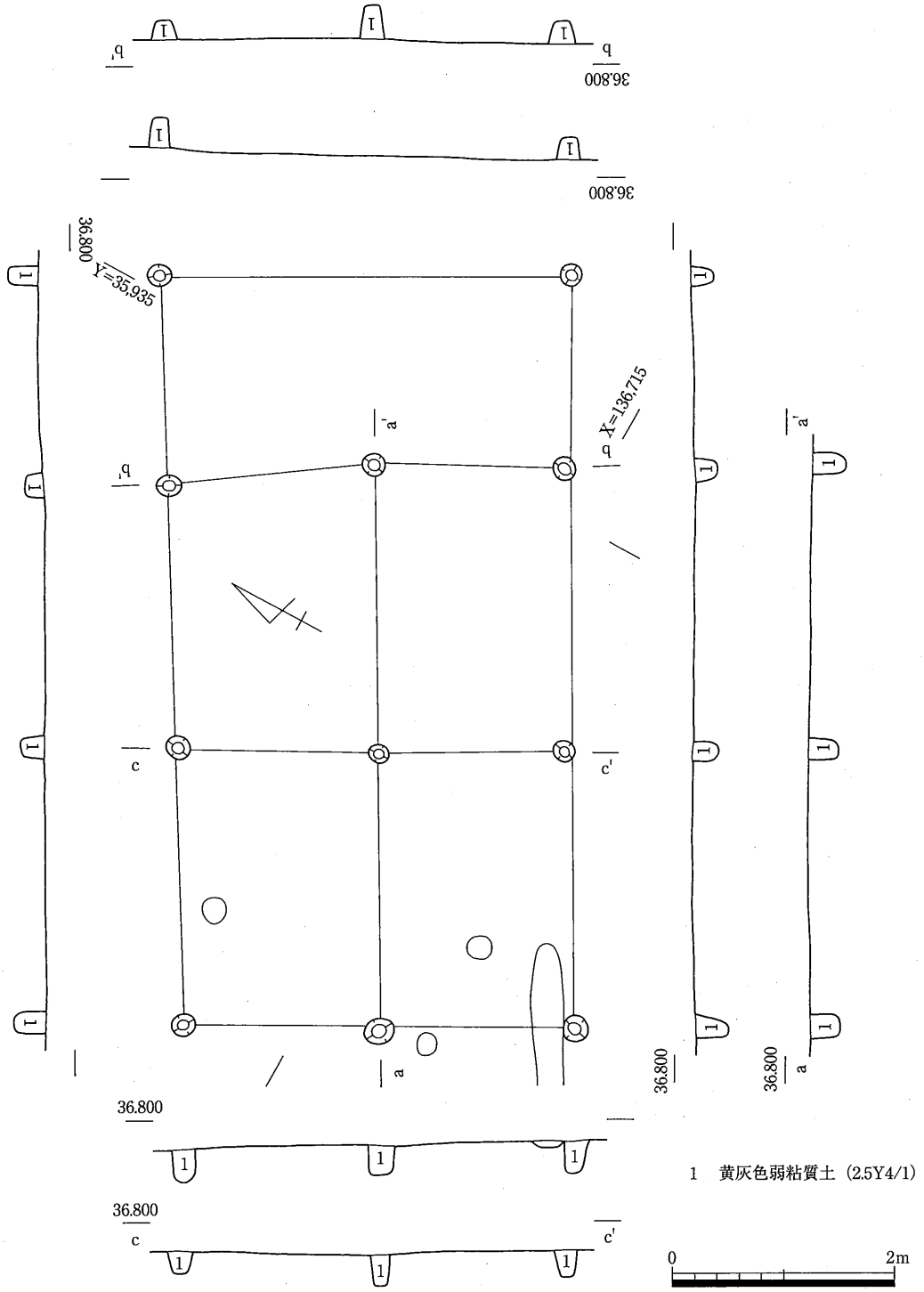
Ⅳ区中央北端付近で検出した溝状遺構である。SB03の南東側0.96m、南西側1.20mの位置をL字型に屈曲する遺構である。西南のコーナー部分でいったん屈曲した後約9m東側でさらに鍵型に屈曲した後に東へ向く。幅92～106㎝、深さ16～24㎝で、埋土はおもに黄灰色弱粘質土でベースブロックを含む。この溝状遺構はSD030、SD056の上面で検出しており、SD030、SD056より新しいことがわかる。主に溝の屈曲部付近から土器が集中して出土した。この遺構はSB03との位置関係から、SB03の雨落ち溝、または地鎮のための溝と考えられる。

456～471は土師質土器である。456～459は皿である。底部から口縁部にかけての立ち上がりは直線的である。口径は10.6～11.8㎝である。460～464は杯で、口径はいずれも14㎝前後と考えられる。465～467は円盤状高台を持つ杯である。468～470は埦である。468は外面には横方向の、内面には横方向のヘラミガキが密に施される。470は皿に高台を付けた器形である。471は甕小片である。口縁端部をやや細くしている。472・473は黒色土器埦である。外面には横方向の、内面には円周状のヘラミガキがある。

遺物の時期は概ね11世紀末前後で、遺構の時期も同じ時期と考えられる。

Ⅳ区SB04（第5・74図）

Ⅳ区中央部付近やや北寄りで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間、梁間2間の総柱建物で、桁行5.55～5.76m、梁間3.12m、面積は17.6㎡、建物の方位はN65°Eで、周囲の条里型地割に揃う。柱間は南東側の柱列と中央の柱列の間が広く3.50m、中央の柱列と北西側の柱列の間は2.00～2.22m、梁間方向は概ね1.54mである。柱穴は円形で直径22～28㎝、深さは16～51㎝を測る。埋土は黄灰色弱粘質土である。建物の北西隅のピットは



第70図　Ⅳ区SB02平・断面図（1/60）

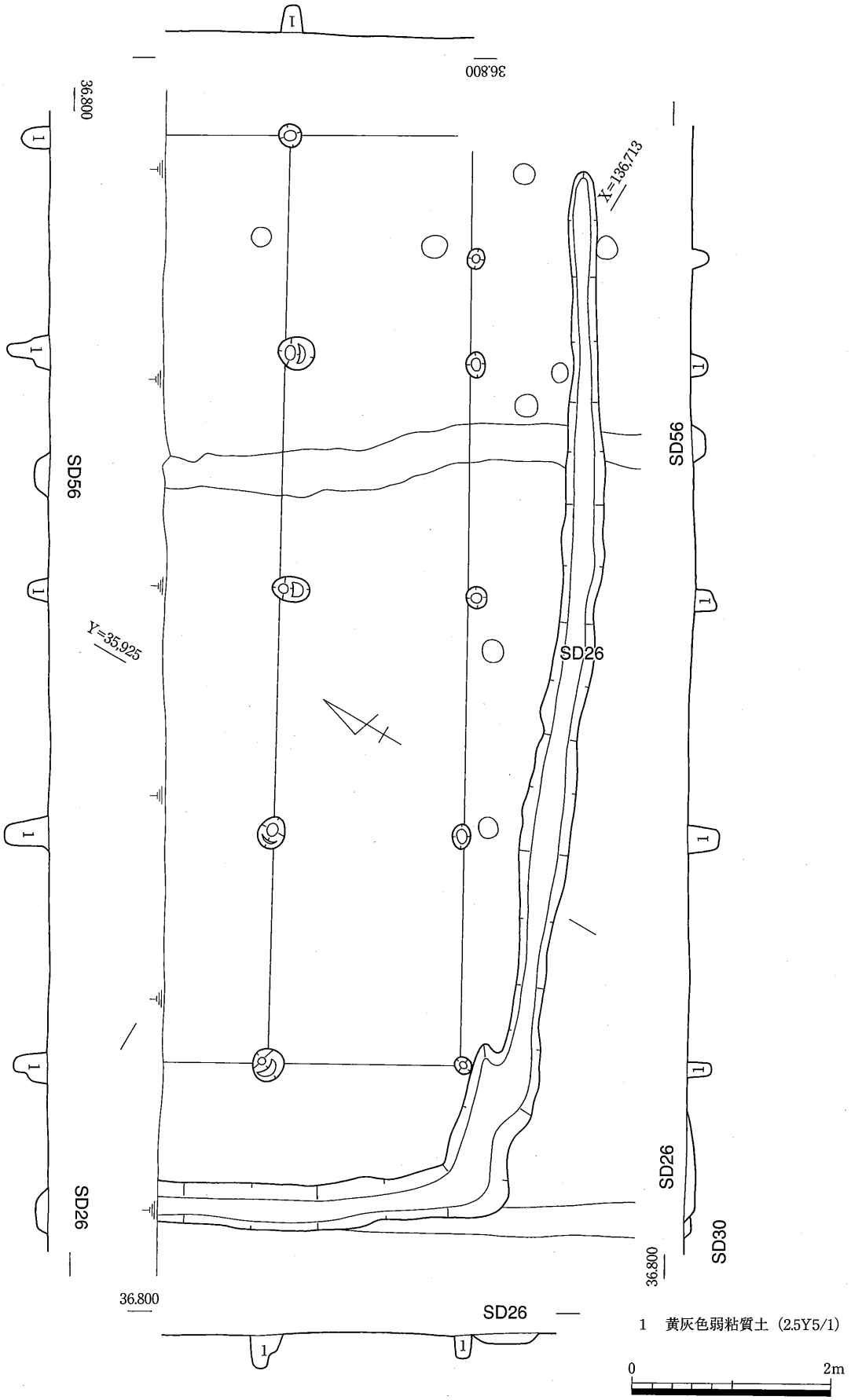
SD055の上面で検出し、SB04はこれより新しいことがわかる。

ピット埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土と建物の方向性により遺構の時期は中世頃と考えられる。

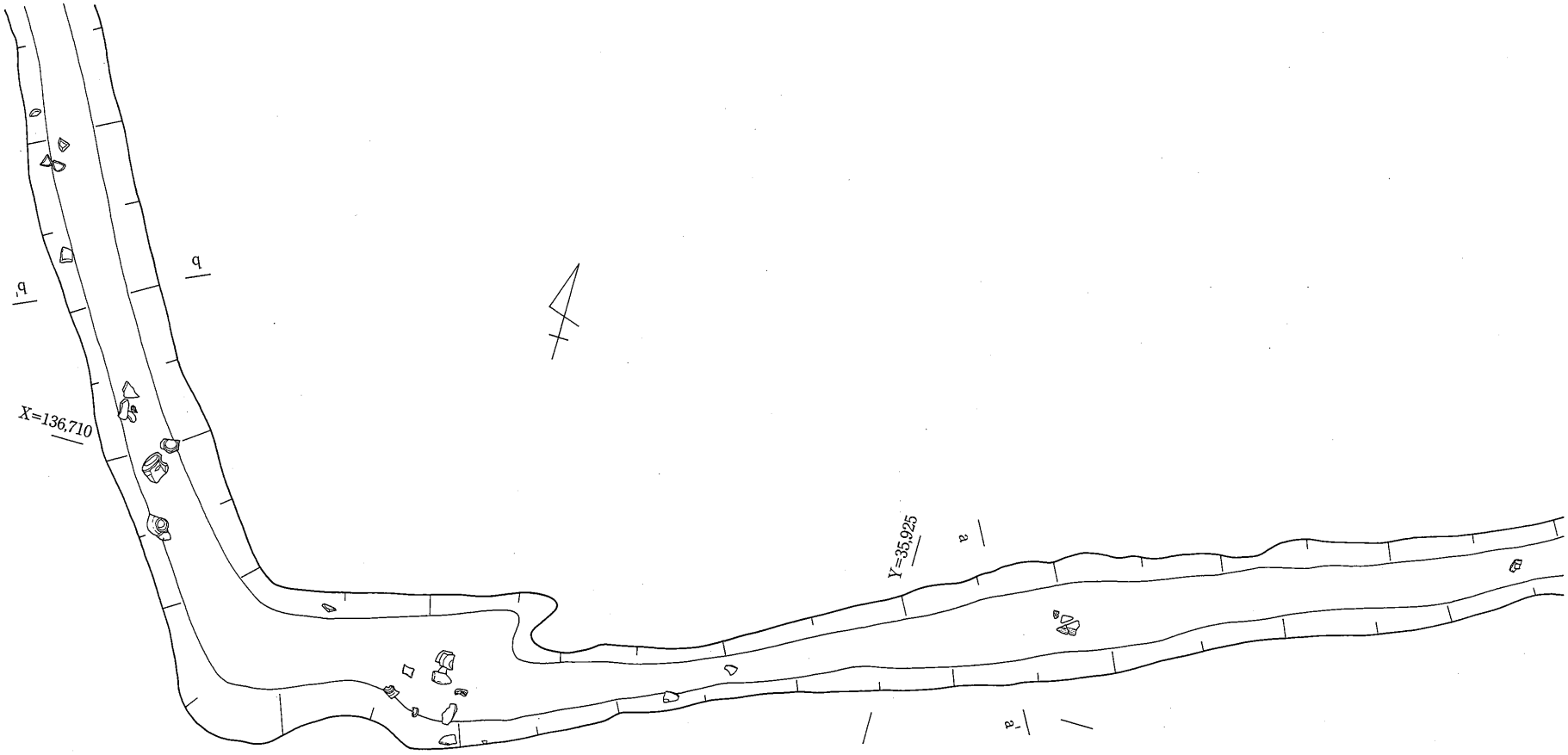
Ⅲ区SK53（第４・75図）

Ⅲ区西部で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長辺1.66m、短軸0.68m、深さ14cm、埋土は概ね黄灰色弱粘質土で、上半部にはベースブロックを含む。SB01の中央の柱穴列から主軸方位を揃えて3.8m西側に位置する。埋土中からは弥生土器小片が出土しただけだった。

遺構の時期は、埋土から中世と考えられる。

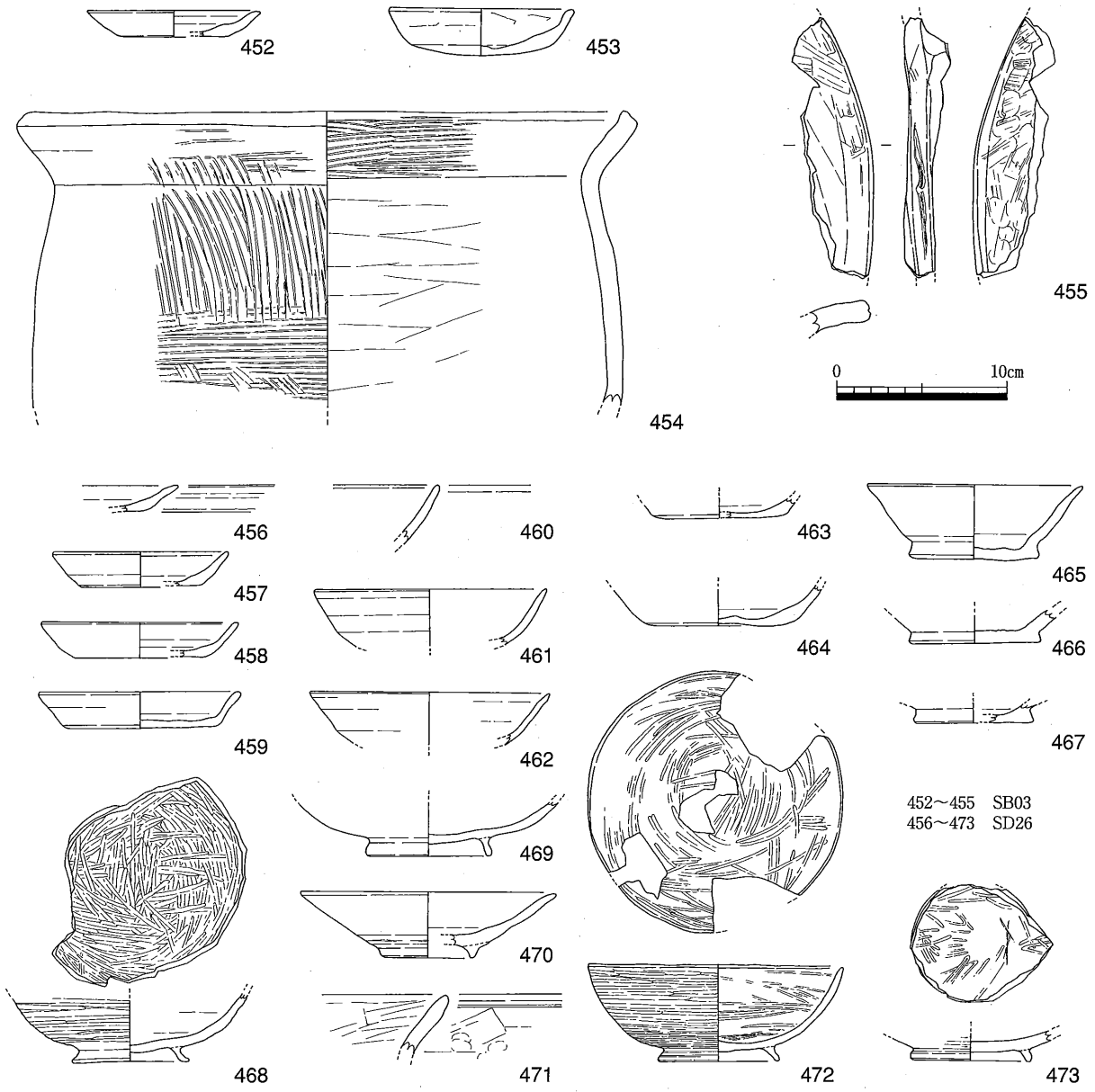


第71図　Ⅳ区SB03平・断面図（1/60）



1　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）黄褐色弱粘質土（10YR5/6）ブロックを含む
2　褐灰色弱粘質土（10YR4/1）
3　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）黄褐色弱粘質土（10YR5/6）ブロックを含む。
　ただし１層に比べて含有量は少ない

第72図　Ⅳ区SD026平・断面図（1/30）



第73図　Ⅳ区SB03・SD026出土遺物（1/4）

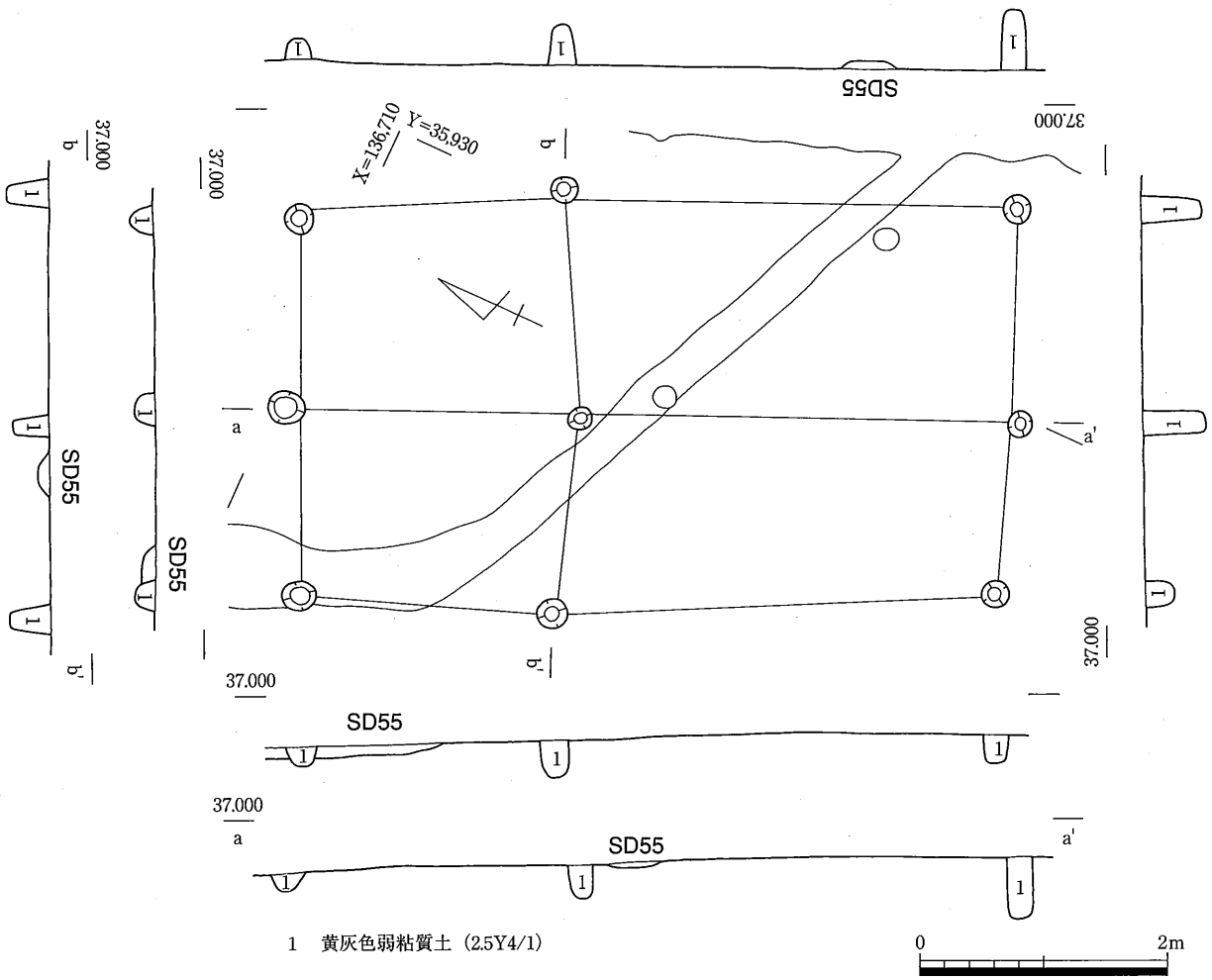
Ⅱ区SK14（第４・75図）

Ⅱ区南西端付近で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長辺0.88m、短辺0.57m、深さ６㎝、埋土は黄褐色粘質土で弥生時代中期頃の遺構埋土である褐灰色粘質土・黒褐色弱粘質土ブロックを含む。埋土中からは出土遺物はなかった。埋土はSK32と同じで、遺構の時期もこの頃と考えられる。

Ⅴ区SX07（第６・76・77図）

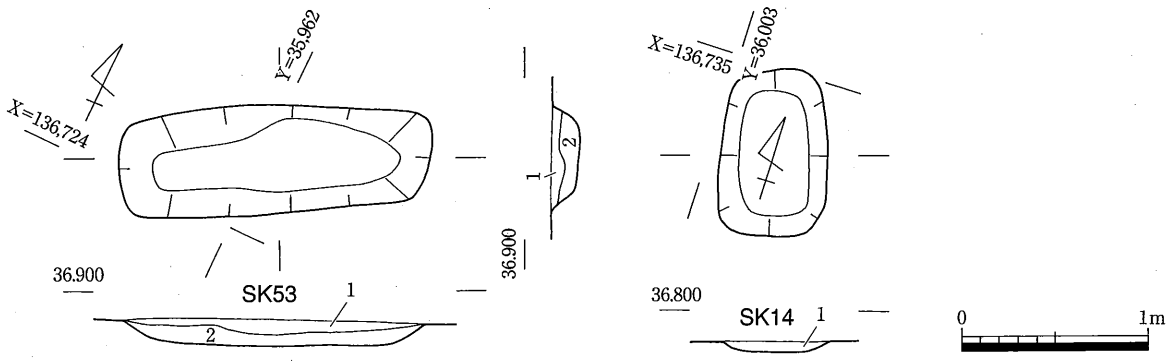
Ⅴ区西部で検出した遺構である。不整円形の浅い落ち込み状を呈し、西側は後世の削平により壊される。概ね直径6.2m程度を測り、深さは20㎝程度、埋土は黄灰色細砂混シルト、黄褐色シルト、暗灰褐色細砂質土、灰褐色細砂混シルトなどが堆積する。SX07の上面からはSK54が掘り込まれており、遺構はこれより古いことがわかる。埋土中からは弥生土器小片、土師質土器片、サヌカイト片が出土した。

474は土師質土器足釜である。内外面とも指押え痕が顕著に残る。475・477は土師質土器擂鉢である。475は内面には６条１単位の卸目がある。477は口縁端部の先端を細くする。476は須恵器椀である。摩滅のため調整は不明である。478・479はサヌカイト製石鏃である。478は凹基式で、一部欠損する。479は平基式で、



1　黄灰色弱粘質土（2.5Y4/1）

第74図　Ⅳ区SB04平・断面図（1/60）



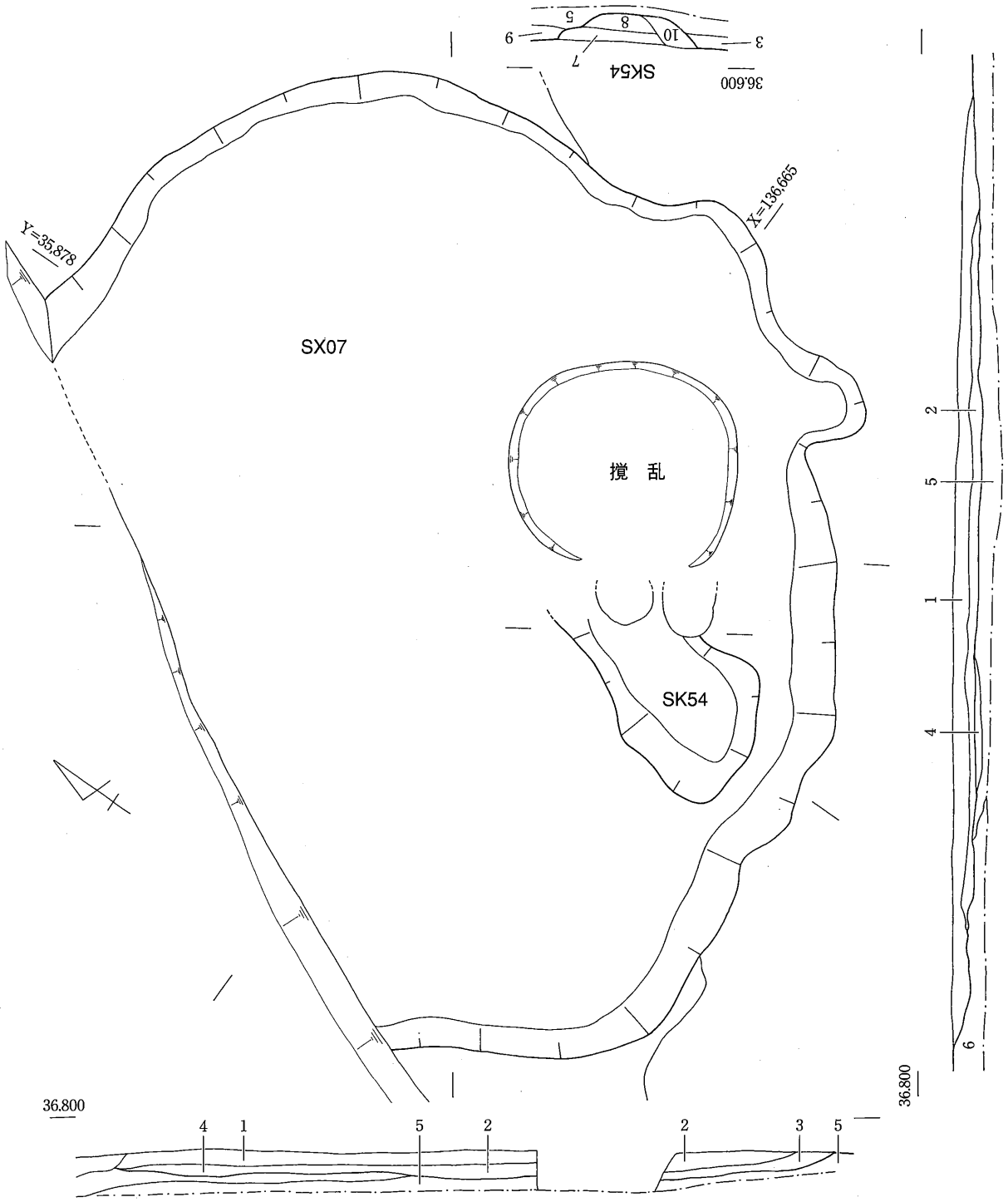
1　黄灰色弱粘質土（2.5Y5/1）Mnを含む。
　　黄褐色弱粘質土（10YR5/6）ブロックを若干含む
2　黄灰色・黄褐色弱粘質土（2.5Y5/1・10YR5/6）

1　黄褐色粘質土（10YR5/8）褐灰色粘質土（10YR5/1）・
　　黒褐色弱粘質土（10YR3/1）をブロック状に含む

第75図　Ⅲ区SK53・Ⅱ区SK14平・断面図（1/40）

先端部が欠損する。背面の加工はほとんど行われていない。

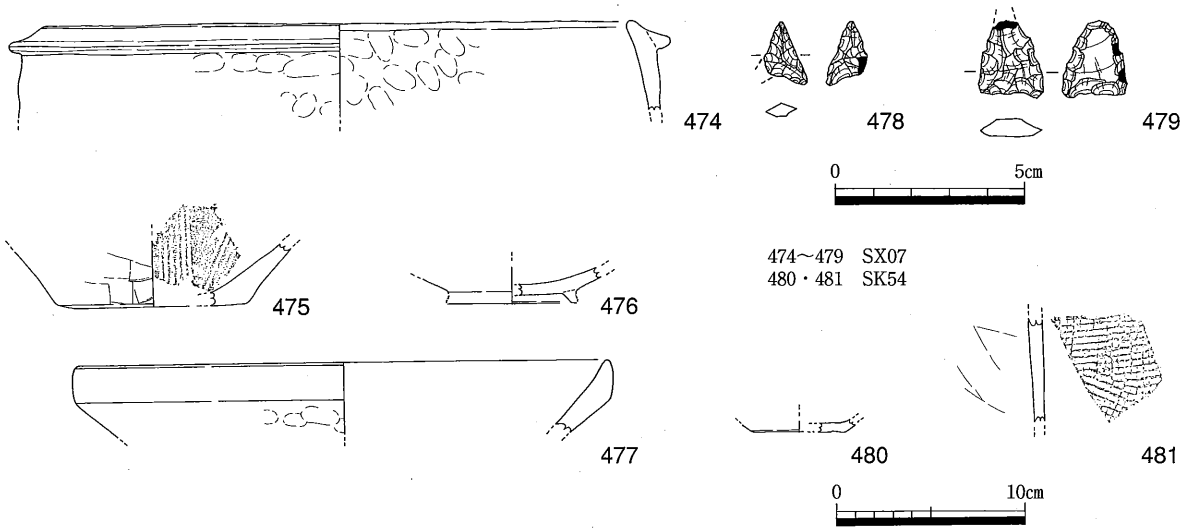
須恵器椀の時期は13世紀前半頃と考えられ、他の出土遺物よりやや古いが、他の遺物は概ね14世紀末頃のものなので、遺構の時期もこの頃と考えられる。



1　黄灰色細砂混じりシルト
2　黄褐色シルト
3　暗灰褐色細砂質土
4　灰褐色細砂混じりシルト
5　黒褐色粗砂混じりシルト
6　黒褐色礫混じり粗砂
7　暗灰褐色粗砂混じりシルト　3層より灰色が強い
8　暗灰色細砂質土
9　黒褐色礫混じり粗砂　3～5㎝の礫が混じる
10　暗褐灰色細砂質土

0　1m

第76図　Ⅴ区SX07・SK54平・断面図（1/40）



第77図　Ⅴ区SX07・SK54出土遺物（1/4・1/2）

Ⅴ区SK54（第６・76・77図）

Ⅴ区西部、SX07の上面で検出した土坑である。東部は撹乱により壊され、遺構の全体の規模・形状は不明である。幅90cm、深さ18cmで、埋土は暗灰褐色粗砂混シルト、暗灰色細砂質土などである。埋土中からは土師質土器、須恵器が出土した。

480は土師質土器杯底部小片である。481は須恵器甕である。小片のため傾きは不明で、実測図の傾きは任意である。外面に格子タタキを施し、内面には調整痕はほとんどない。

遺物の時期はいずれも13世紀中頃と考えられるが、SX07との前後関係から、遺構の時期は14世紀末以降と考えられる。

Ⅳ区SK08（第５・78図）

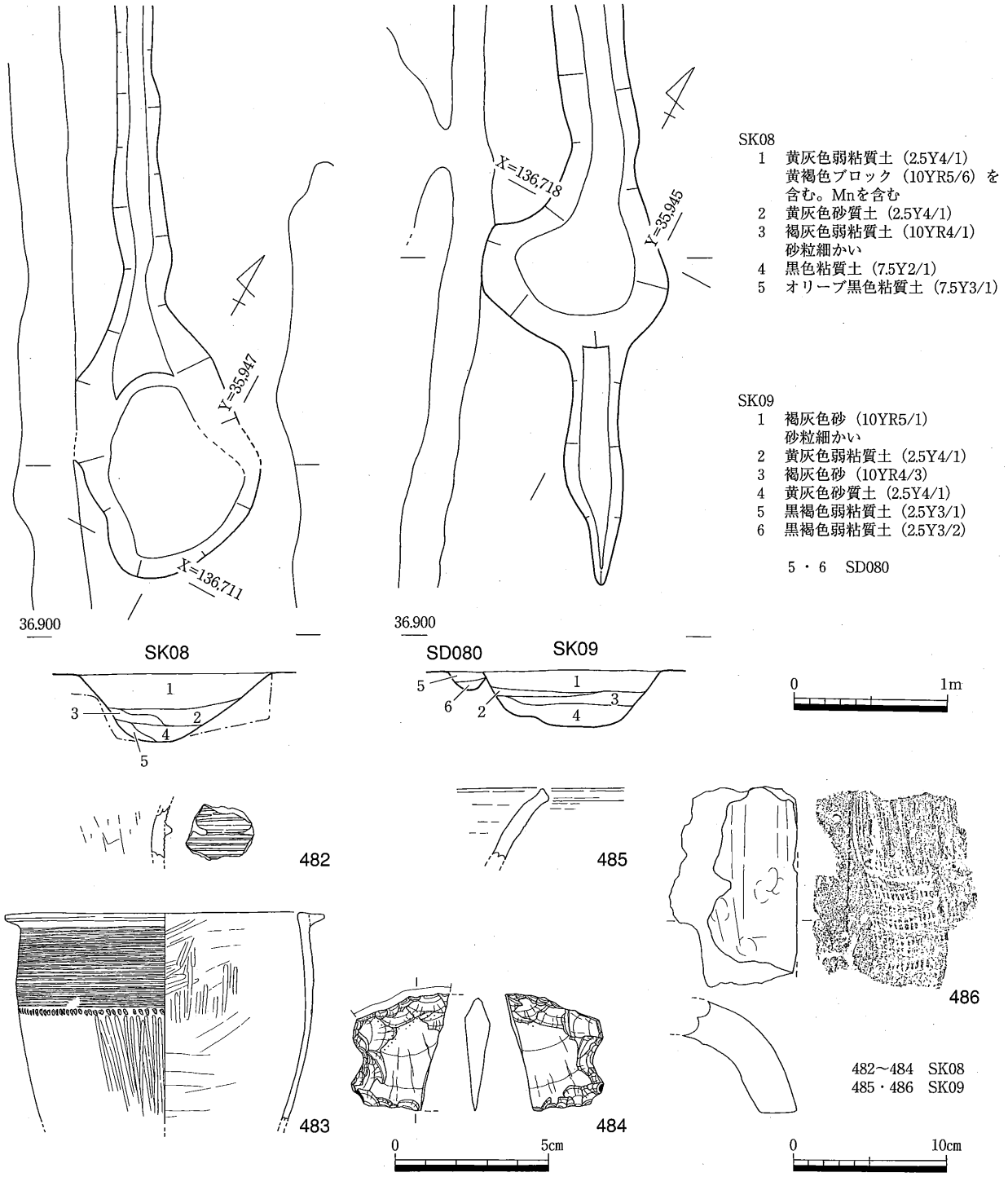
Ⅳ区東端部付近で検出した土坑である。SD080の南端部でこれに連続して検出し、SK08より南側までSD080は続かない。SD080との重複関係はない。楕円形状を呈し、長軸1.25m、短軸1.09m、深さ42cmを測り、断面形状は擂鉢状を呈する。埋土は上位が黄褐色弱粘質土、黄灰色砂質土など、下部は黒色粘質土、オリーブ黒色粘質土である。埋土の上半部はベースブロックを含み、故意に埋め戻された様子が窺える。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

482・483は弥生土器である。482は壺頸部小片で、貼付突帯を１条巡らせ、その上・下部にはヘラ描き沈線文を施す。483は甕である。５条１単位程度の櫛描き文を４単位施し、その下部には楕円形の刺突文を巡らせる。484はサヌカイト製石庖丁である。上部に敲打痕がある。半分程度は折れて欠損する。

出土遺物はいずれも弥生時代中期初頭頃のものではあるが、遺構の埋土は中世のものと共通することから、遺構の時期も中世と考えられる。SD080との位置関係から小規模ながら出水の役目を果たしたと考えられ、遺構の時期はSD080と同じ12世紀後半頃と考えられる。

Ⅳ区SK09（第５・78図）

Ⅳ区東北部で検出した土坑である。SD060の南端部近くで、これに連続するように検出し、SD060との重複関係はない。SD060はSK09より南側約1.5mの位置で消失する。土坑は楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸は0.9m程度、深さは34cm、断面形状は逆台形を呈する。埋土は下部に黄灰色砂質土が、上部には褐灰色砂が厚く堆積し、洪水砂により短期間で埋没した様子が窺える。SD060との位置関係から、SK08同様、小規模ながら出水



第78図　Ⅳ区SK08・09平・断面図（1/40）、出土遺物図（1/4・1/2）

のような役目を果たしていたと考えられる。埋土中からは須恵器片、瓦片が出土した。

485は須恵器壺口縁部小片である。486は丸瓦片である。凹面側の端面は広く面取りをする。布目は非常に粗い。

SD060との関係から、遺構の時期もこれと同じ12世紀後半頃と考えられる。

Ⅳ区SD060・072・073・075・076・080（第５・79図）

Ⅳ区東端部で検出した溝状遺構群である。いずれも条里型地割と同じ方向で、SD076以外は互いに約0.5m間隔にある。Ⅳ区の東側は条里型地割の坪界線に相当し、これらの溝状遺構はそれに関するものと考えられる。

SD060はこれらの溝状遺構群の中で最も東側で検出した。北から約9mの位置でいったん途切れるが、約2.5m南側で、再び検出され、東側では調査区外へ延びる。溝状遺構が途切れる約1.5m北側では出水状遺構であるSK09を検出している。幅52cm、深さ18cmを測る。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片、黒色土器埦などが出土した。

487・488は黒色土器A埦である。見込み部分にはヘラミガキ痕が顕著に残り、487では内面のヘラミガキを行う前に施されたハケメが観察できる。また、高台貼付部分には3条程度の円弧状のヘラ描き沈線を施し、高台と埦本体が密着しやすいようにしている。

SD080はSD060の約0.5m西側で検出した。約11.5mを検出し、遺構の南端では出水状遺構であるSK08を検出しており、これに伴う溝状遺構であると考えられる。北から約2mの位置では、約0.5m西側で検出したSD072と接する。幅22～28cm、深さ12～14cm、埋土は概ね黒褐色弱粘質土であるが、南側の上部では黄灰色弱粘質土が堆積する。埋土中からは出土遺物はなかった。

SD072はSD080の約0.5m西側で検出した。北から約4mの位置から北側では二股に分かれる。調査区南端付近では消失する。幅28～34cm、深さ10～18cm、埋土は上部は黄灰色弱粘質土、下部は黒褐色弱粘質土である。溝状遺構の北から約2mの位置ではSD080と、北から約3mの位置ではSD073と繋がっており、埋土も共有している。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

489は弥生土器壺体部小片である。櫛描き沈線文の上から円形浮文を貼り付け、その上部にはヘラ描きの斜格子文を施す。弥生時代中期中頃のものであるが、遺構の時期を反映しているとは考えられず、混入と考えられる。

SD073はSD072の約0.5m西側から検出した。調査区南端付近では消失する。北から約3mの位置でSD072と繋がる。幅20～26cm、深さ11～20cm、埋土は概ね黄灰色弱粘質土である。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

SD075はSD073の約0.5m西側で検出した。北から約19mの位置から南側では検出していない。幅29cm、深さ7cmを測り、埋土は黒色弱粘質土で、白色砂を含む。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト小片が出土した。

SD076はSD073とSD075の中間に位置する。約6.5m分を検出した。幅21cm、深さ3cm、埋土は黄灰色弱粘質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

これらの遺構の時期については、埋土中から弥生土器片やサヌカイト片が出土するものの、遺構の主軸方位や埋土などを考え合わせれば、いずれも近接した時期のものと考えられる。SD060から12世紀後半の黒色土器が出土していることから、これらの溝状遺構の時期は12世紀後半頃と考えられる。

Ⅳ区SD059（第5・79図）

Ⅳ区北東部で検出した溝状遺構である。概ね条里型地割と同じ方向で、北から5.4mの位置で東側へ直角に屈曲し、2.2mの位置で消失する。SD075・076の上面で検出し、これらより新しいことがわかる。幅50cm、深さ12cmを測り、埋土は黒色・黒褐色弱粘質土で、上部には白色砂を含む。埋土中からはサヌカイト片、弥生土器片、須恵器片、黒色土器片が出土した。

490は黒色土器A埦である。内面にはヘラミガキ痕が顕著に残るが、外面では観察できない。

遺構の時期は、出土遺物から12世紀後半頃と考えられる。

Ⅳ区SD030・052（第5・80図）

Ⅳ区中央やや西寄りで検出した溝状遺構である。互いに約0.8mの間隔をあけて検出した。SD060・072～074・080・081の溝跡群からは20～25m西側へ位置する。

SD030は北から約12mまで検出した。溝状遺構の南端付近では二股に分かれる。幅40cm、深さ10cmを測る。溝状遺構の北半部ではSD026により壊される。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

491は弥生土器壺体部片である。13条以上のヘラ描き沈線を施し、２段以上に円形浮文を貼り付ける。弥生時代中期のものである。

SD052はSD030の約0.8m西側で検出した。幅42～45cm、深さ６～20cm、埋土は概ね黒色粘土・粘質土で、白色砂を含む。北から約３mの位置で西へ向くSD035と分岐し、南から約２mの位置ではSD057と交差する。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

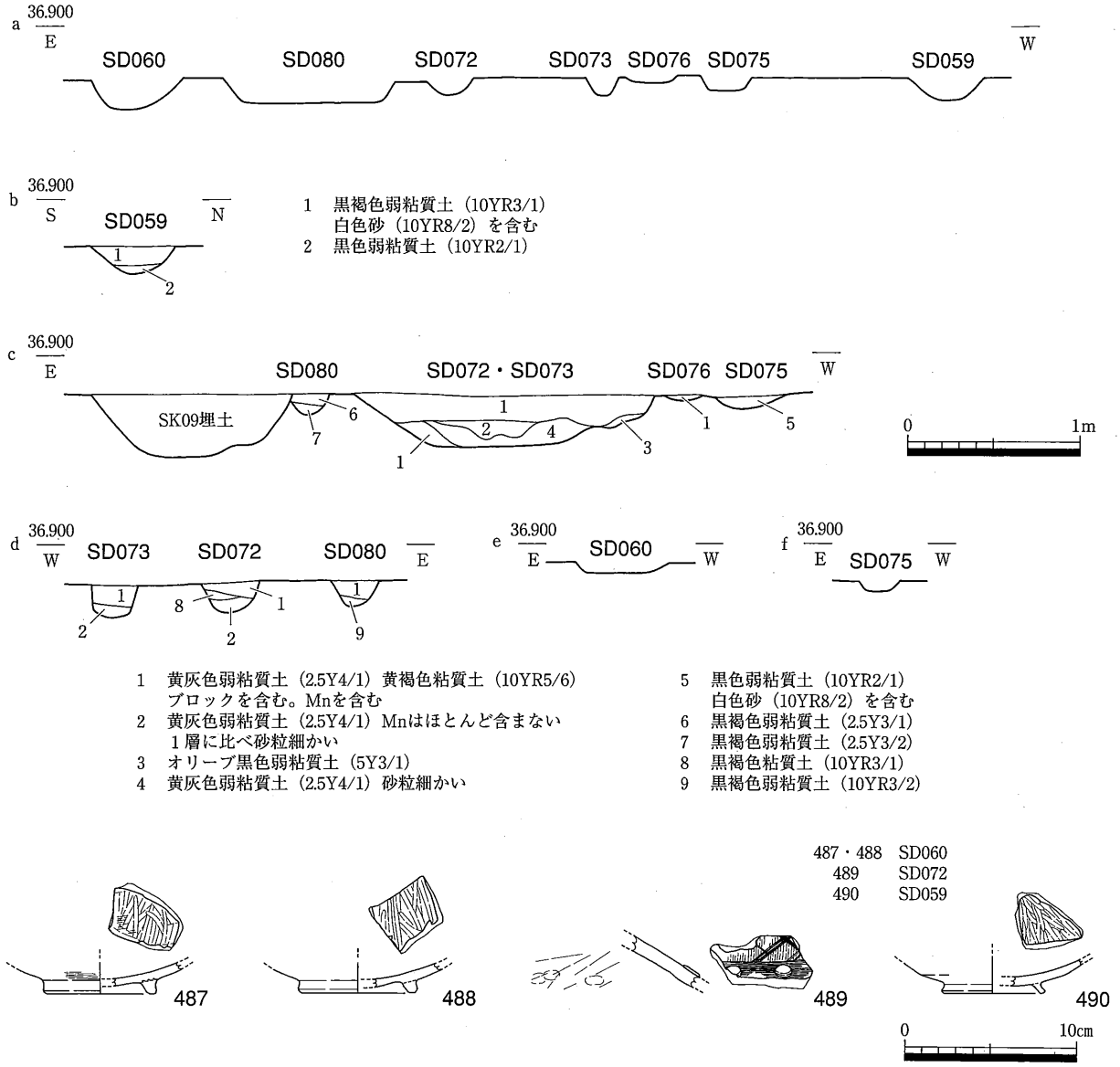
493は弥生土器甕である。胴はあまり張らず、弥生時代中期頃のものと考えられる。

いずれも埋土中からは弥生土器が出土しているが、溝の方向性や位置関係から遺構の時期は中世頃と考えられる。

Ⅳ区SD035（第５・80図）

Ⅳ区北西部で検出した溝状遺構である。SD052の北から約３mの位置で西へ直角に分岐する。SD052の東側では検出できなかった。幅34cm、深さ24cmで、埋土は黒色粘土で白色砂を含む。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

492はサヌカイトである。表面にはひびわれ状に亀裂が走るのが認められる。加工をしやすくするため、石



第79図　Ⅳ区SD059・060・072・073・075・076・080断面図（1/40）、SD059・062・072出土遺物（1/4）

を加熱したと考えられる。

遺構の時期は遺構の重複関係や埋土の類似性から、SD035と同時期と考えられる。

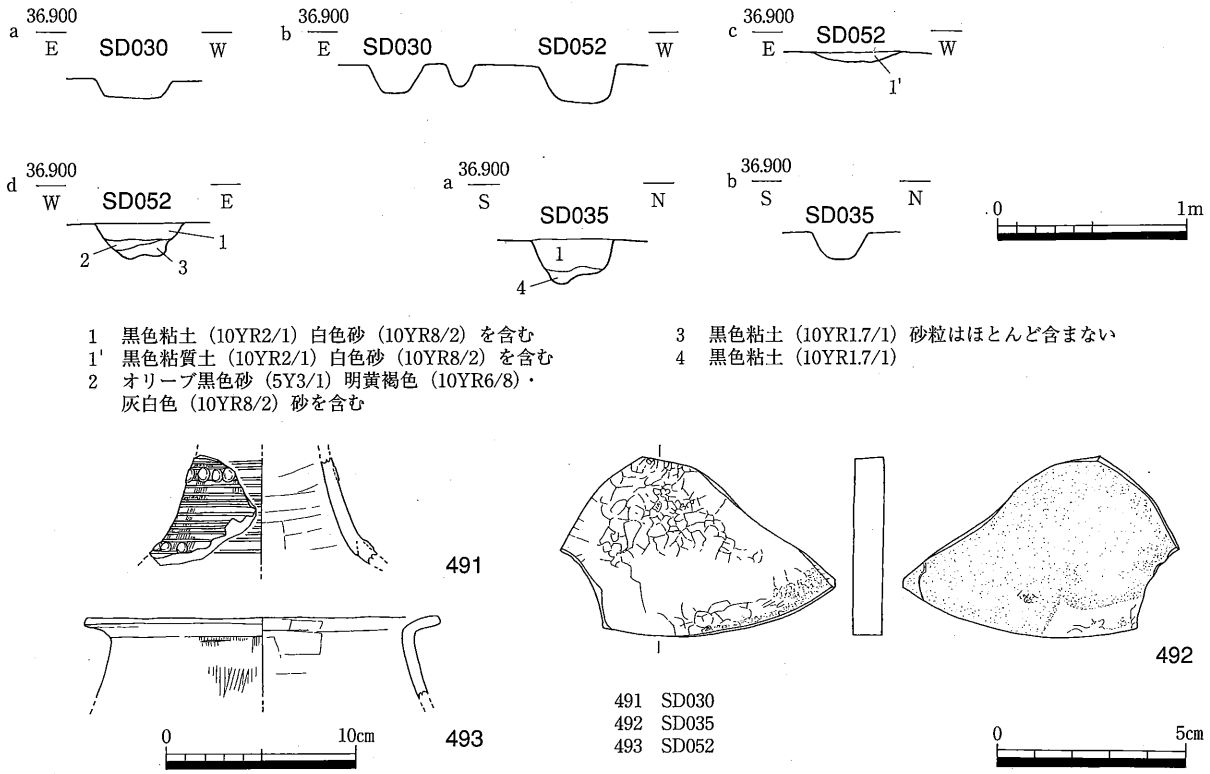
Ⅳ区SD043～045（第５・81図）

Ⅳ区西部付近で検出した溝状遺構である。SD030・052の約11m西側で検出した。SD043～045は互いに重複しながら非常に近い位置で検出した。

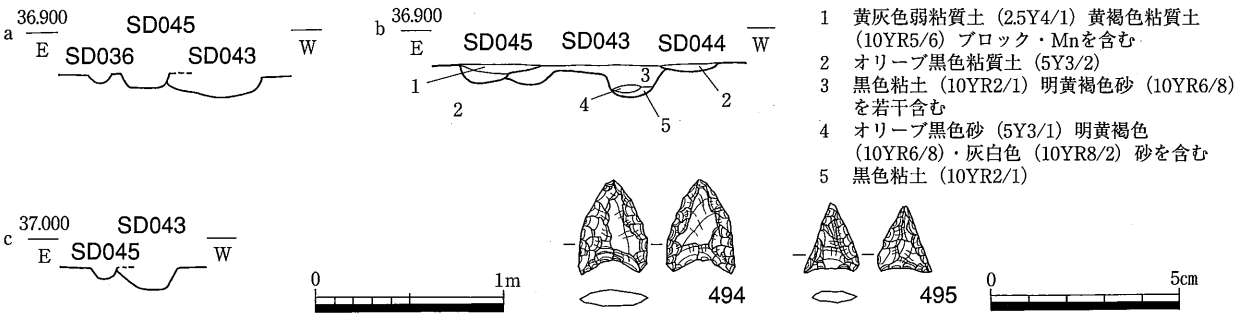
SD043は調査区を縦断して検出した。北から2.3mの位置でSD035と交差する。東側ではSD045に、西側ではSD044に切り込まれる。幅51cm程度、深さ17cm、埋土は概ね黒色粘土で砂を含む。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

494・495はサヌカイト製石鏃である。ともに凹基式である。

SD044はSD043の西側の上面から掘り込まれた溝状遺構である。約8.5mを検出した。幅15cm、深さ８cm程度、埋土はオリーブ黒色粘質土である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。



第80図　Ⅳ区SD030・035・052断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第81図　Ⅳ区SD036・043～045断面図（1/40）、SD043出土遺物（1/2）

SD045はSD043の東側の上面から掘り込まれた溝状遺構である。幅42cm、深さ12cmを測り、埋土は黄灰色弱粘質土である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

これらの遺構の時期は埋土や溝状遺構の方向からいずれも中世と考えられ、SD043はSD035・052と同時併存、SD044・045は後出すると考えられる。

Ⅳ区SD036（第５・81図）

Ⅳ区西部付近、SD043の約0.15m東側で、約５mを検出した。幅12cm、深さ６cmを測る。埋土中からは弥生土器小片が出土した。遺構の位置関係からSD043と関係が深いと考えられ、遺構の時期も概ね同時期と考えられる。

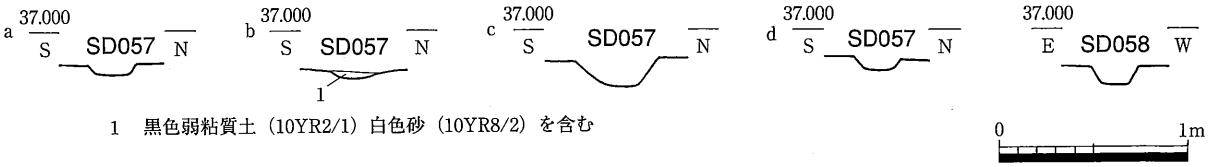
Ⅳ区SD057（第５・82図）

Ⅳ区南部で検出した溝状遺構である。約34mを検出し、概ねⅣ区を横断する。溝状遺構の東端はSD072～074を中心とする溝群で、ほぼ11m間隔で南北方向の溝状遺構と交差する。幅24～44cm、深さは概ね６cm程度で、埋土は黒色弱粘質土で白色砂を含む。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

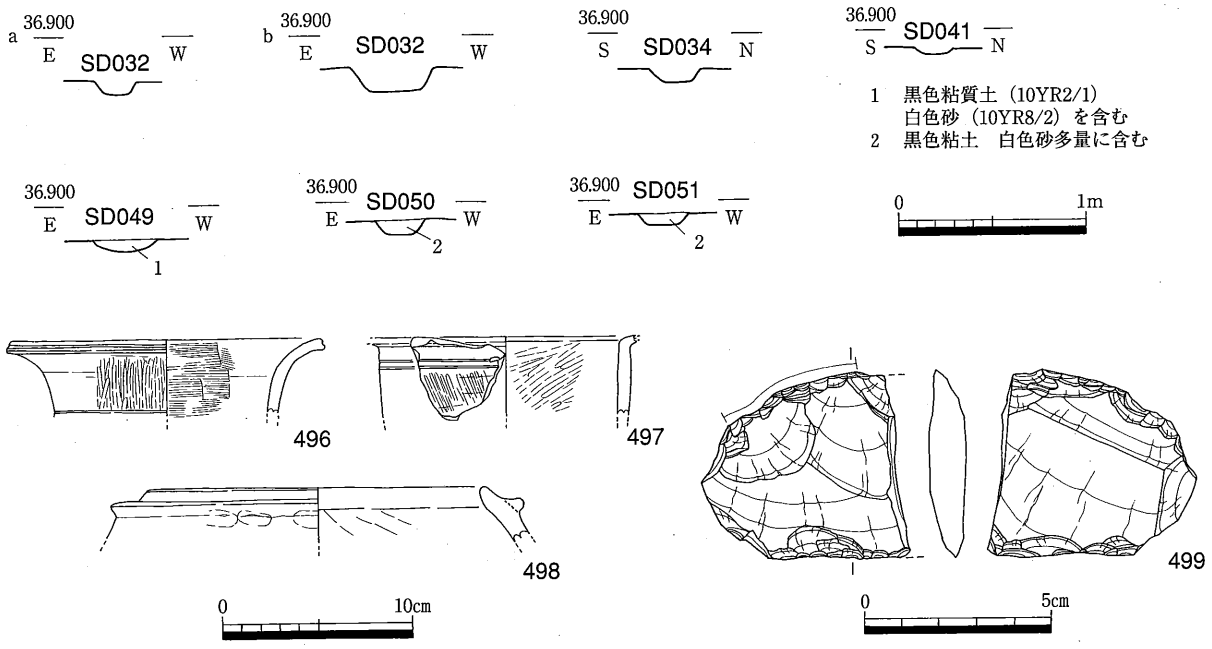
遺構の時期は他の遺構との関係から中世と考えられる。

Ⅳ区SD058（第５・82図）

Ⅳ区中央やや東寄りで検出した溝状遺構である。SD052の約11m東側、SD073の約11m西側で検出した。遺



第82図　Ⅳ区SD057・058断面図（1/40）



第83図　Ⅳ区SD032・034・041・049～051断面図（1/40）、SD032出土遺物（1/4・1/2）

構の南部でSD057と交差するが、遺構の前後関係は認められない。幅24cm、深さ10cmを測る。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

遺構の時期はSD057と同じ中世と考えられる。

Ⅳ区SD032（第５・83図）

Ⅳ区西端付近で検出した溝状遺構である。Ⅳ区の西側の調査区外から延び、北方向へ向くが、途中北から５m程度の位置で屈曲し、条里型地割の方位と揃える。遺構の重複関係により、SD036より古い。溝状遺構が北方向へ向く箇所は幅44cm、深さ13cm程度で、条里型地割と同じ方向の箇所では幅20cm、深さ９cmである。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片、土師質土器片が出土した。

496・497は弥生土器である。496は壺で、口縁端部に１条、頸部に１条以上沈線を巡らせる。497は如意状口縁を持つ甕で、体部にはヘラ描き沈線を２条施す。497は弥生時代前期中頃の遺物である。498は土師質土器脚釜口縁部である。端部の退化が進み、器面の調整も丁寧には行われない。499はサヌカイト製のスクレイパーである。上部に敲打痕を残す。

遺構の時期については遺構の重複関係によりSD036より古い。

Ⅳ区SD034（第５・83図）

Ⅳ区西端付近で検出した溝状遺構である。Ⅳ区の西側の調査区外から延び、SD032の北側約5.5mの位置を北方向へ延び、SD032の北端付近でこれと合流する。幅30cm、深さ８cmを測る。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

遺構の時期はSD032と同じと考えられる。

Ⅳ区SD041（第５・83図）

Ⅳ区SD032の南端付近で合流する、条里型地割に沿う小規模な溝状遺構である。Ⅳ区西側の調査区外から延び、SD032の東側では検出していない。幅20cm、深さ５cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

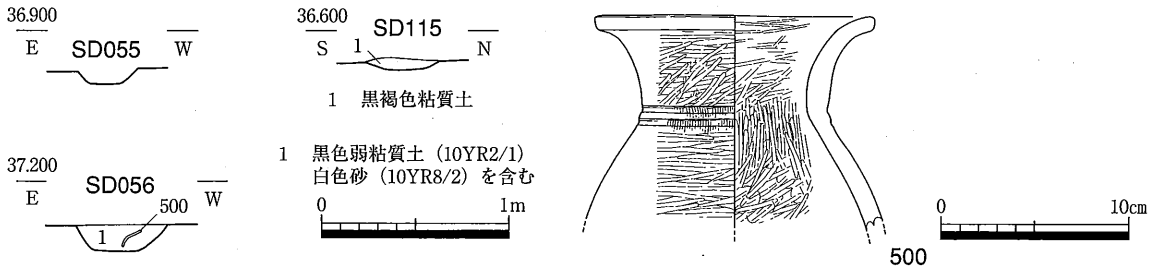
遺構の時期は、遺構が条里型地割の方向を向くことから、中世と考えられる。

Ⅳ区SD049～051（第５・83図）

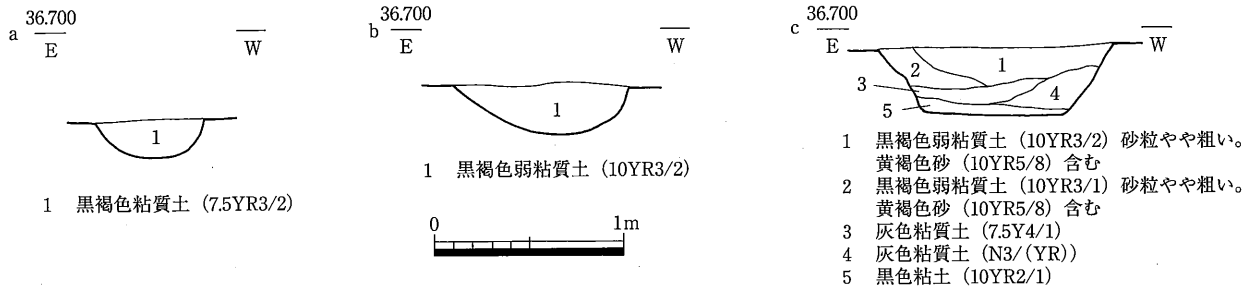
Ⅳ区東南部で検出した小規模な溝状遺構である。

SD049はSD052から約5.7m西側、SD043からは約5.7m東側で、約６mを検出した。幅32cm、深さ７cmを測り、埋土は黒色粘質土で白色砂を含む。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

SD051はSD049の南側約1.4mの位置で、約1.8mを検出した。幅26cm、深さ６cmで、埋土は黒色粘土で白色砂を多量に含む。SD049との位置関係から、これらは同一遺構の可能性もある。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

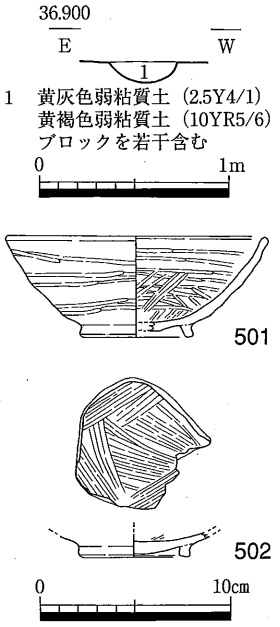


第84図　Ⅳ区SD055・056・Ⅴ区SD115（断面図）（1/40）、SD056出土遺物（1/4）



第85図　Ⅱ区SD013断面図（1/40）

SD050はSD051の西側をほぼ北方向へ向く溝状遺構である。約3.5m分検出した。遺構の重複関係によりSD057より古い。幅26cm、深さ10cmで、埋土はSD051と同じく黒色粘土で白色砂を多量に含む。埋土の類似性により、SD049～SD051は同時並存の可能性が高く、遺構の時期は中世頃と考えられる。



第86図　Ⅲ区SD020断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅳ区SD055（第５・84図）

Ⅳ区中央付近で検出した溝状遺構である。遺構の前後関係により、SB04より古い。約９mを検出した。概ね北西方向へ向くが、北から２m程度の部分だけ条里型地割の方向を向く。南側ではSD056と交差する。幅32cm、深さ８cmを測る。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

遺構の時期は、溝の方向と周辺の状況から中世頃と考えられる。

Ⅳ区SD056（第５・84図）

Ⅳ区中央付近で検出した。概ね条里型地割の方向に沿うが、南側では若干東側へ振れる。溝の中央付近ではSD055と交差し、北側ではSD026により掘り込まれる。幅50cm、深さ15cm、埋土は黒色弱粘質土で白色砂を含む。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

500は弥生時代壺である。頸部に２条のヘラ描き沈線を施す。弥生時代前期後半のものである。

遺構の時期は、溝の方向と埋土から中世と考えられるが、遺構の前後関係からSD026より古い。

Ⅴ区SD115（第６・84図）

Ⅴ区中央やや南寄りで検出した溝である。概ね条里型地割の方位と揃う。約3.8mを検出した。幅38cm、深さ５cmで、埋土は黒褐色粘質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

遺構の時期は溝の方向と周辺の状況から中世頃と考えられる。

Ⅱ区SD013（第３・85図）

Ⅱ区西端部で検出した溝状遺構である。概ね条里型地割に沿う。幅は概ね56cm、深さ20cmで、遺構の中程と南端付近で若干幅が広がっている箇所がある。埋土は概ね黒褐色粘質土で、南側の広がった箇所（SD13ｃ断面）では最下層に黒色粘土層、上層部分は黄褐色砂が混じる。この部分はⅣ区でも見られた出水状遺構として捉えられる可能性もある。埋土中からは土器小片やサヌカイト片が出土しただけであった。

遺構の時期は遺構の方向から中世と考えられる。

Ⅲ区SD020（第４・86図）

Ⅲ区西端で検出した溝状遺構である。西側の調査区外から延び、北方向へ屈曲して北側の調査区外へ続く。概ね条里型地割の方向に沿う。約９ｍを検出した。幅36cm、深さ９cm、埋土は黄灰色粘質土でベースブロックが混じる。埋土中からは黒色土器埦が出土した。

501・502は黒色土器Ａ埦である。内面のヘラミガキは密であるが、外面のヘラミガキは粗い。12世紀後半頃のもので、遺構の時期も同じと考えられる。

５．包含層出土遺物

Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物（第87～89図）

503・504はⅠ区から出土した遺物で、ともに須恵器である。SD001直上の褐灰色粘質土層から出土した。503は杯小片、504は摘み付きの蓋小片である。いずれも９世紀前半頃と考えられる。

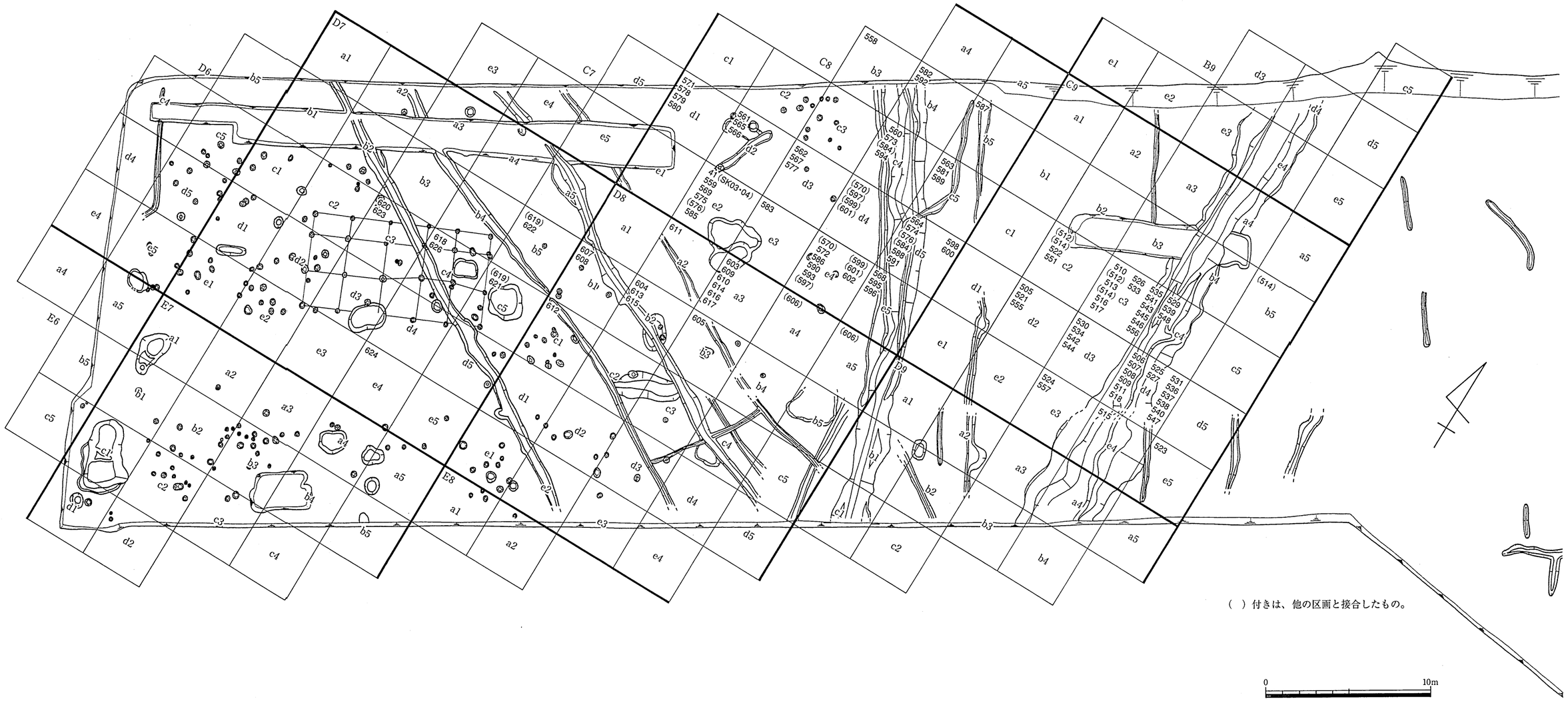
505～557はⅡ区から出土した遺物である。Ⅱ区西半部からⅢ区東半部にかけて堆積する黒色粘質土層・黒褐色粘質土層から出土した。これらの土層は弥生時代後期の溝状遺構と考えられるSD022～024に切り込まれており、弥生時代後期以前に堆積した包含層である。遺物の大半はC9グリッドのSD011南半の上面で出土した。505～548は弥生土器である。505～517は壺である。505～507は頸部破片で、505は３条以上のヘラ描き沈線が、506には２条以上の貼付突帯が巡らされる。507は頸部と体部の境に刻目をつけた貼付突帯が巡らされる。508～511は広口壺である。508は小片で、口縁端部下端部に刻目を持つ。509は口縁端部に緩い凹線を施す。512～515は短頸壺である。斜め上方へ開く短い頸部を持つ。516は小型丸底壺である。外面はヘラミガキを施す。胎土中に角閃石を多量に含む。下川津Ｂ類土器である。517は底部である。518～530は甕である。518～524・526はバケツ型の形態をとる、弥生時代前期の甕の小片である。521は体部片のため口縁部の形態は不明であるが、519は如意状口縁、その他は逆Ｌ字型口縁を持つ。518・519・521・522はヘラ描き沈線を施し、520・523は櫛描き沈線を施す。524・526は無文で、524は丁寧なヘラミガキで調整するが、526は外面はハケ、内面は板ナデで調整する。525は強く屈曲する口縁部にあまり張らない胴部が付く。527～530は球形の胴部が付く甕で、外面は概ねハケ、内面はハケや板ナデで調整する。528にはハケの前に施されたタタキ痕が残る。530は底部に焼成前による穿孔が１孔認められる。また、体部には焼成中に破損したと考えられる円形状の剥離痕が残る。531～535は甕底部である。536は２孔１対の孔が２ヶ所にある。537・538は蓋小片である。539・540は高杯である。539は杯部小片である。内外面をヘラミガキで調整し、口縁短部はわずかに細くする。胎土中に角閃石をわずかに含む。540は脚部小片である。内面はヘラケズリし、脚短部付近に穿孔が１ヶ所残る。胎土中には角閃石を含む。541は台付鉢である。542～548は鉢である。542・543は口縁端部が外側へ屈曲する。544～548は埦形の鉢である。545・546・548は外面に成形時に付いたと考えられるクラックが残る。549～557はサヌカイト製石器である。549～551は凹基式石鏃である。552・553は石鏃と考えられるが、下端部は折損している。554は平基式石鏃である。555はスクレイパーである。556は石庖丁である。上部には敲打痕、側縁部には抉りが認められる。557は楔形石器として図化したが、上・下部が折損した打製石斧の可能性もある。

遺物の時期は505・506・518～524・537・538は弥生時代前期後半～中期初頭、507～509・525は弥生時代中期中頃、その他は弥生時代後期である。包含層の時期は弥生時代後期頃と考えられる。

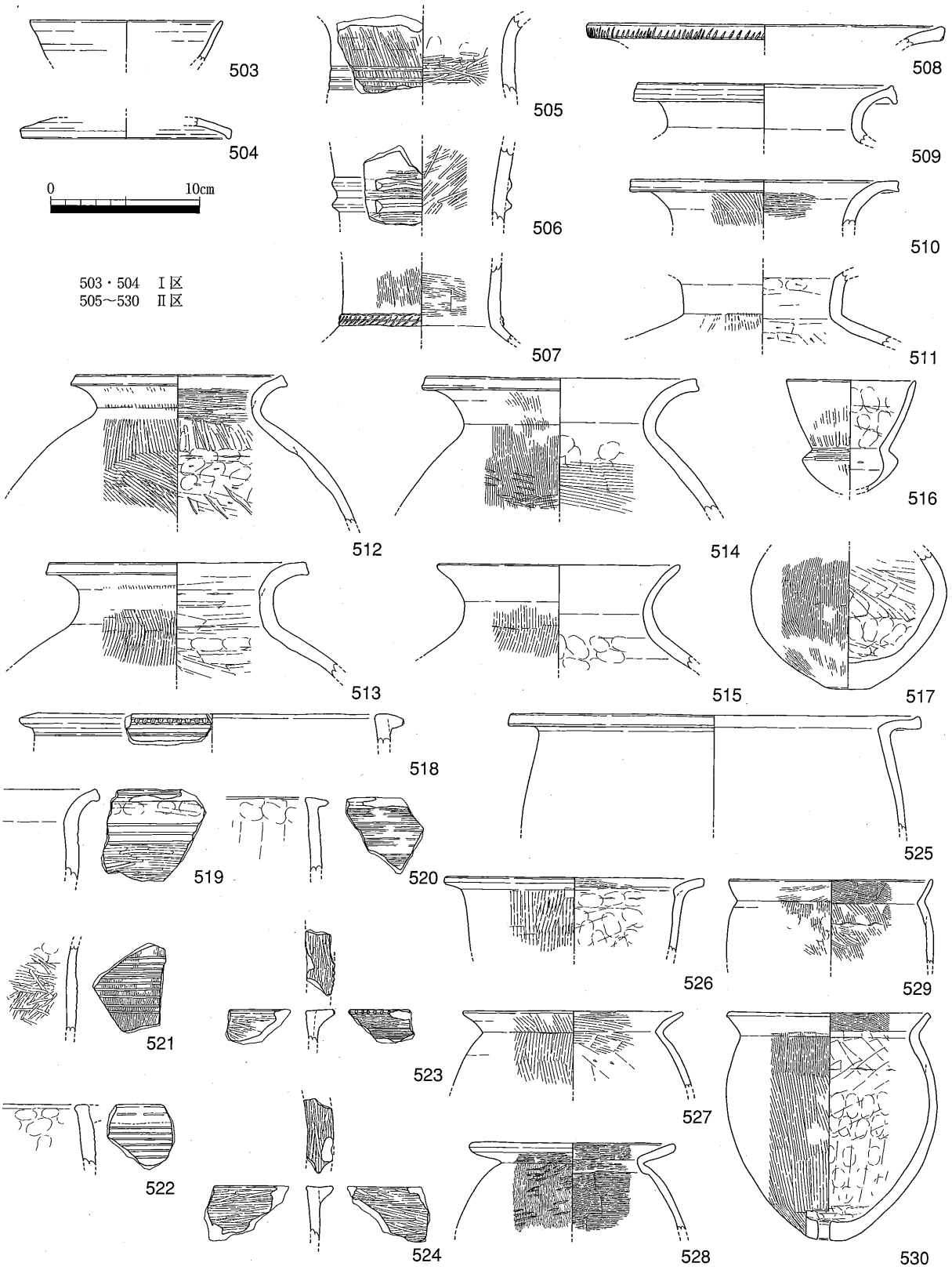
Ⅲ区包含層出土遺物（第４・87～97図）

Ⅲ区ではおもにC8グリットから遺物が多く出土し、次いでD8グリット、D7グリットから出土した。出土層位はⅡ区と同じく黒色・黒褐色粘質土層から出土したと考えられる。出土した位置はほとんどがSD110付近の上面で、SK03・04付近の上面でも一定量認められた。

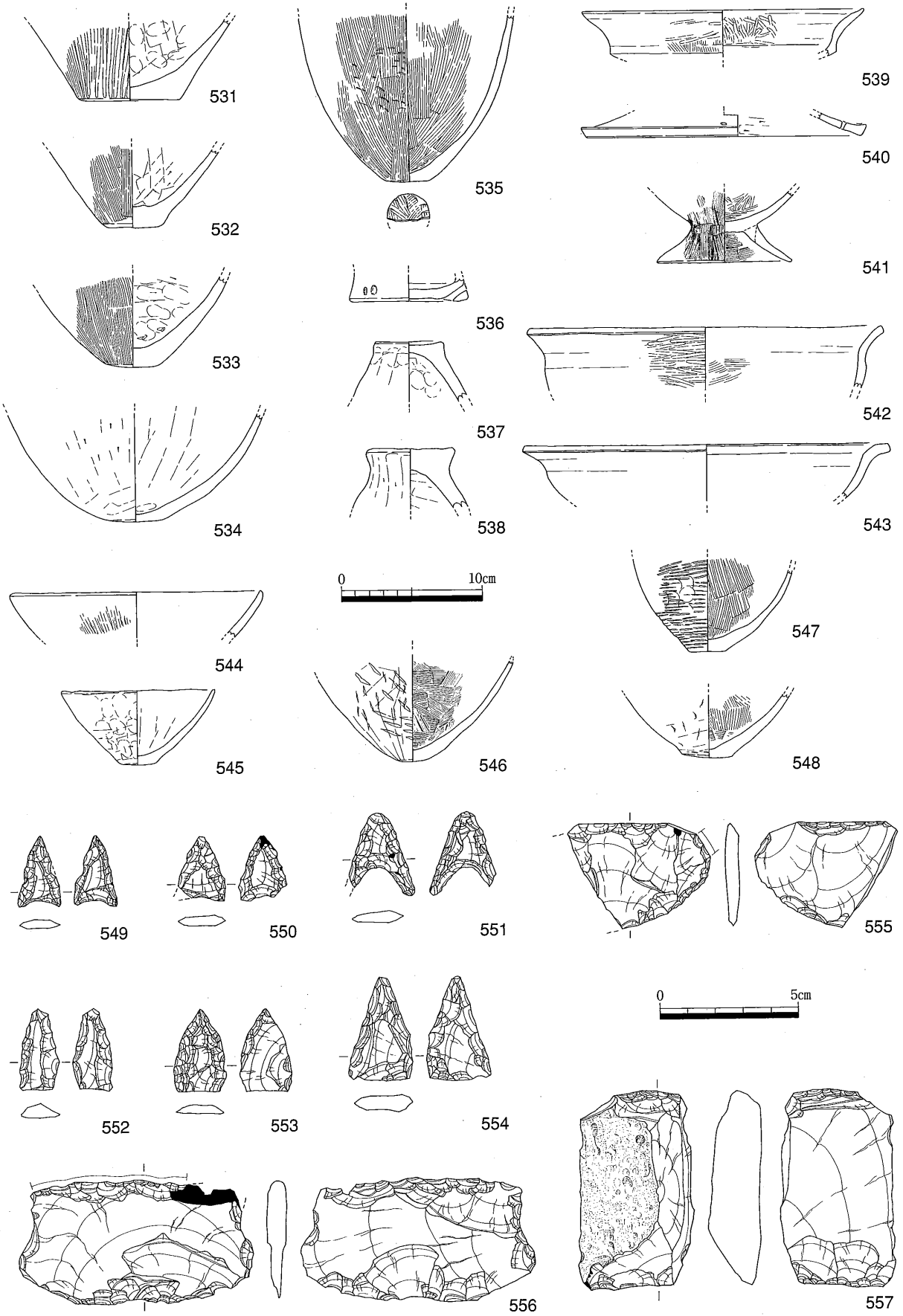
558～602はC8グリット出土遺物である。538～591は弥生土器である。558～563、577は壺である。558は



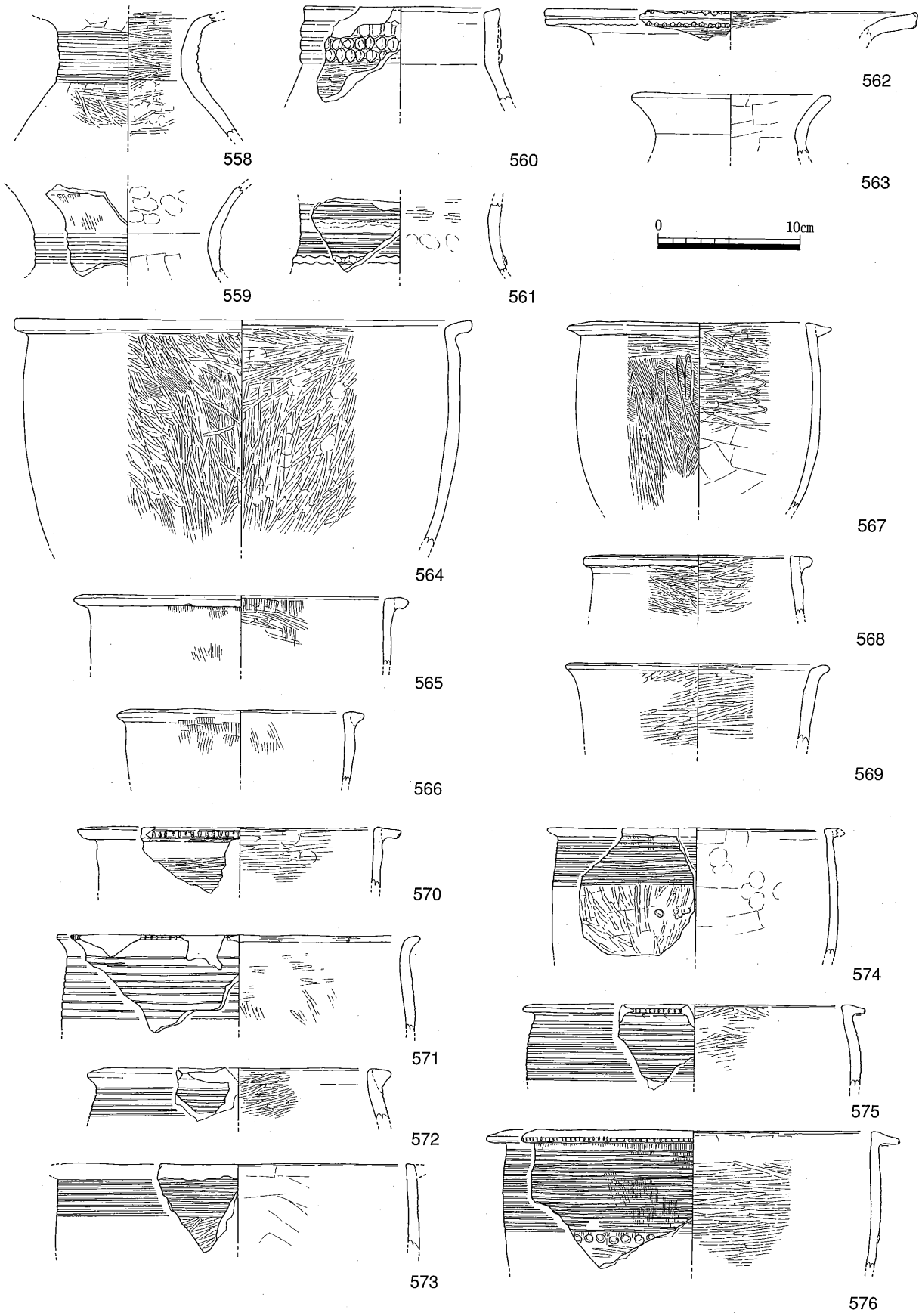
第87図　Ⅱ・Ⅲ区グリッド配置図及び遺物出土状況（1/200）



第88図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物(1)（1/4）

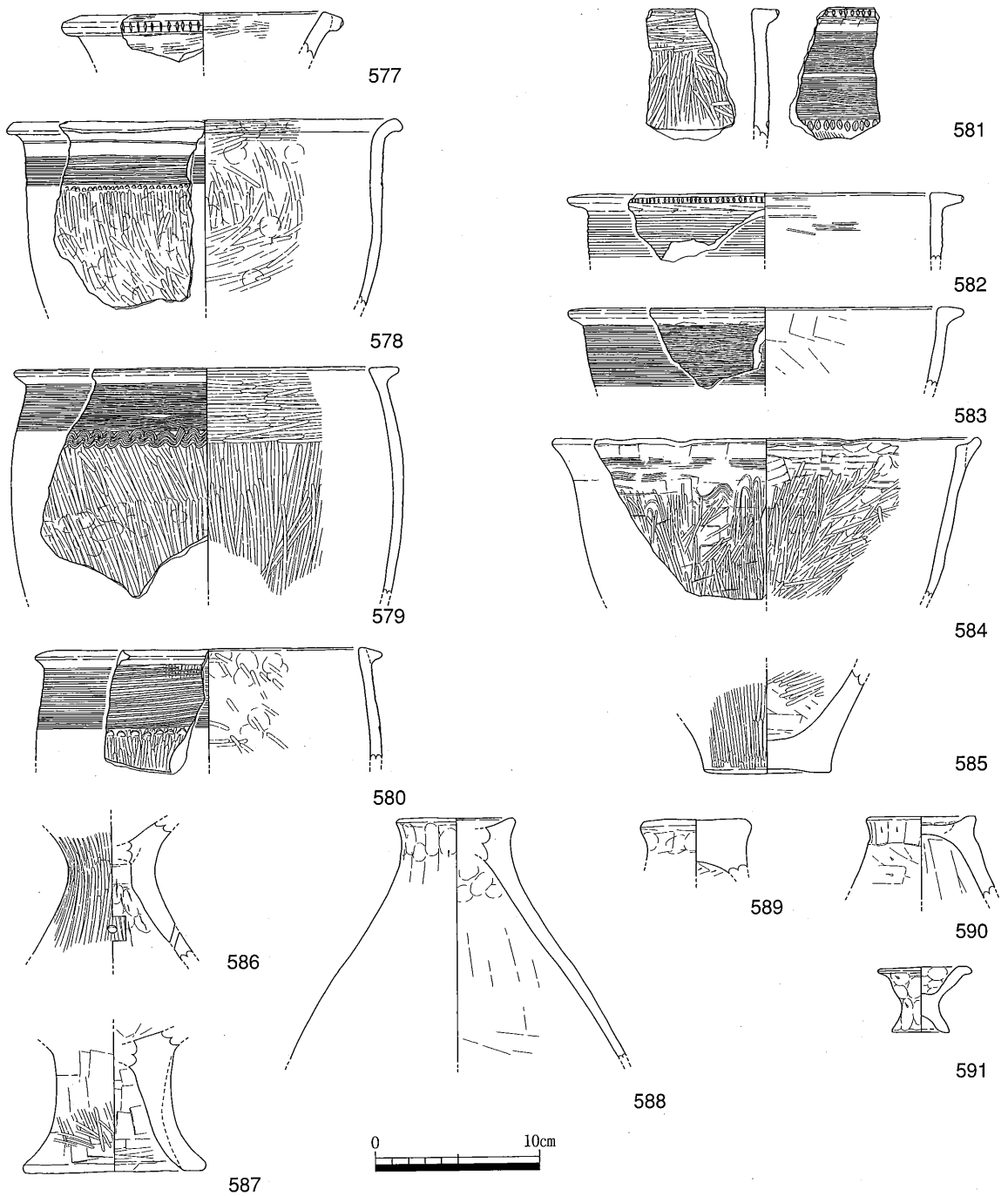


第89図　Ⅱ区包含層出土遺物(2)（1/4・1/2）

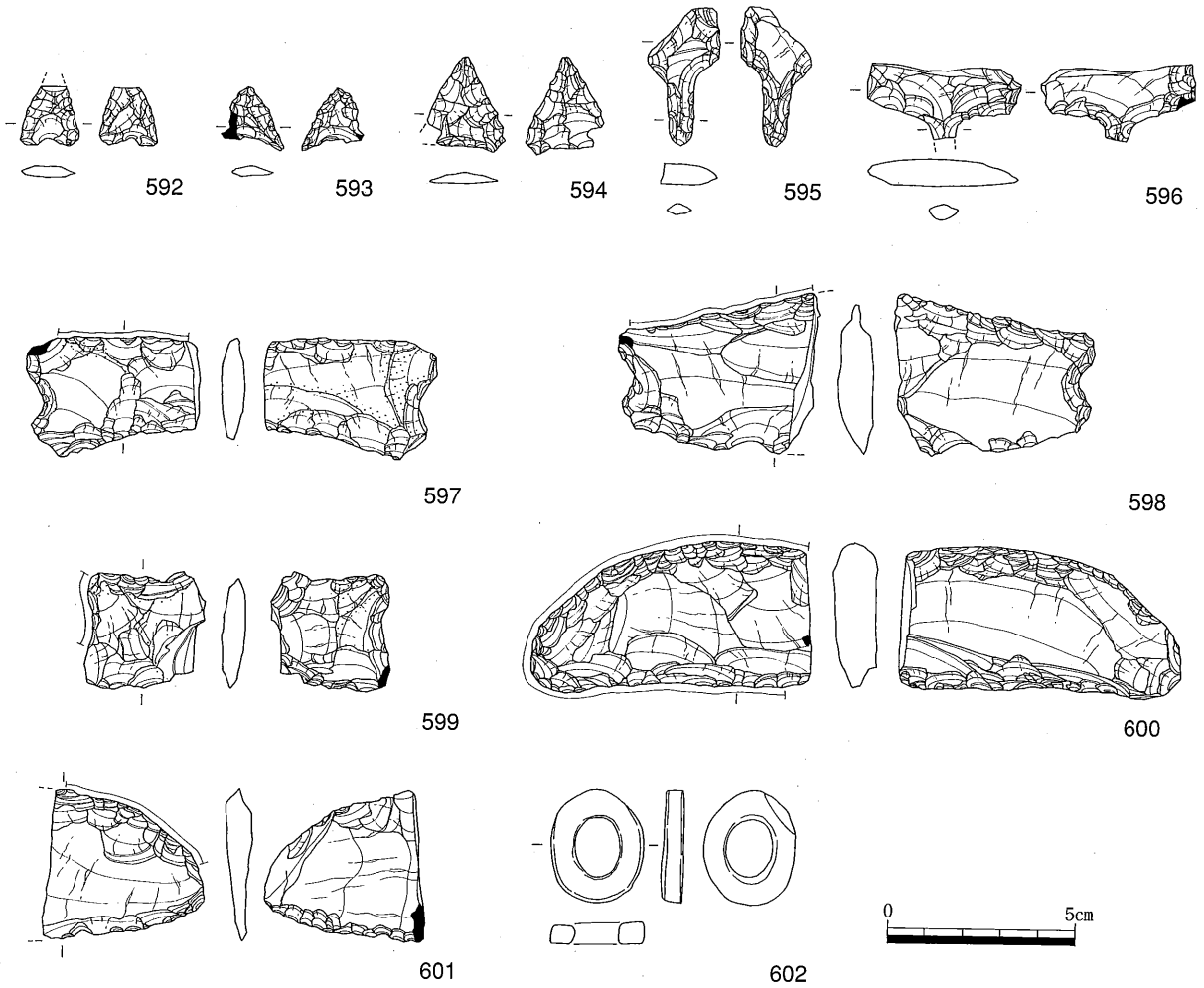


第90図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(1)（1/4）

頸部にヘラ描き沈線を８条施す。559は頸部に削り出し突帯を４条施す。560は短頸壺で、３条の押圧突帯を巡らせる。561は頸部片で、５条程度のヘラ描き沈線文と押圧突帯を交互に巡らせると考えられるが、中位の突帯は剥離している。562は広口壺口縁部小片である。口縁端部の上・下端部に刻目を施す。563は短頸壺片である。577は壺口縁部である。端部に刻目を施す。564～576・578～584は甕で、いずれもバケツ型の形状を示すものである。564～570は体部が無文のものである。いずれも逆Ｌ字型口縁を示し、570は端部に刻目を施す。571～576は体部にヘラ描き沈線文を持つ。571は如意状口縁、残りは逆Ｌ字型口縁を持つものであるが、573は口縁端部が剥離している。概ね８～10条程度の沈線をめぐらせるが、576は21条もの沈線を描き、その下部に円形浮文を貼る。578～583は体部に櫛描き沈線文を施す。概ね４～６条１単位で、２～６単位程度を巡らせる。578はその下部に３角形の刺突文、579は櫛描き波状文、580は楕円形の刺突文を施す。578・581は如意状口縁、他は逆Ｌ字型口縁である。584は口縁端部に貼り付けた粘土紐が斜め上方を向いており、外



第91図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(2)（1/4）



第92図　Ⅲ区包含層C8出土遺物(3)（1/2）

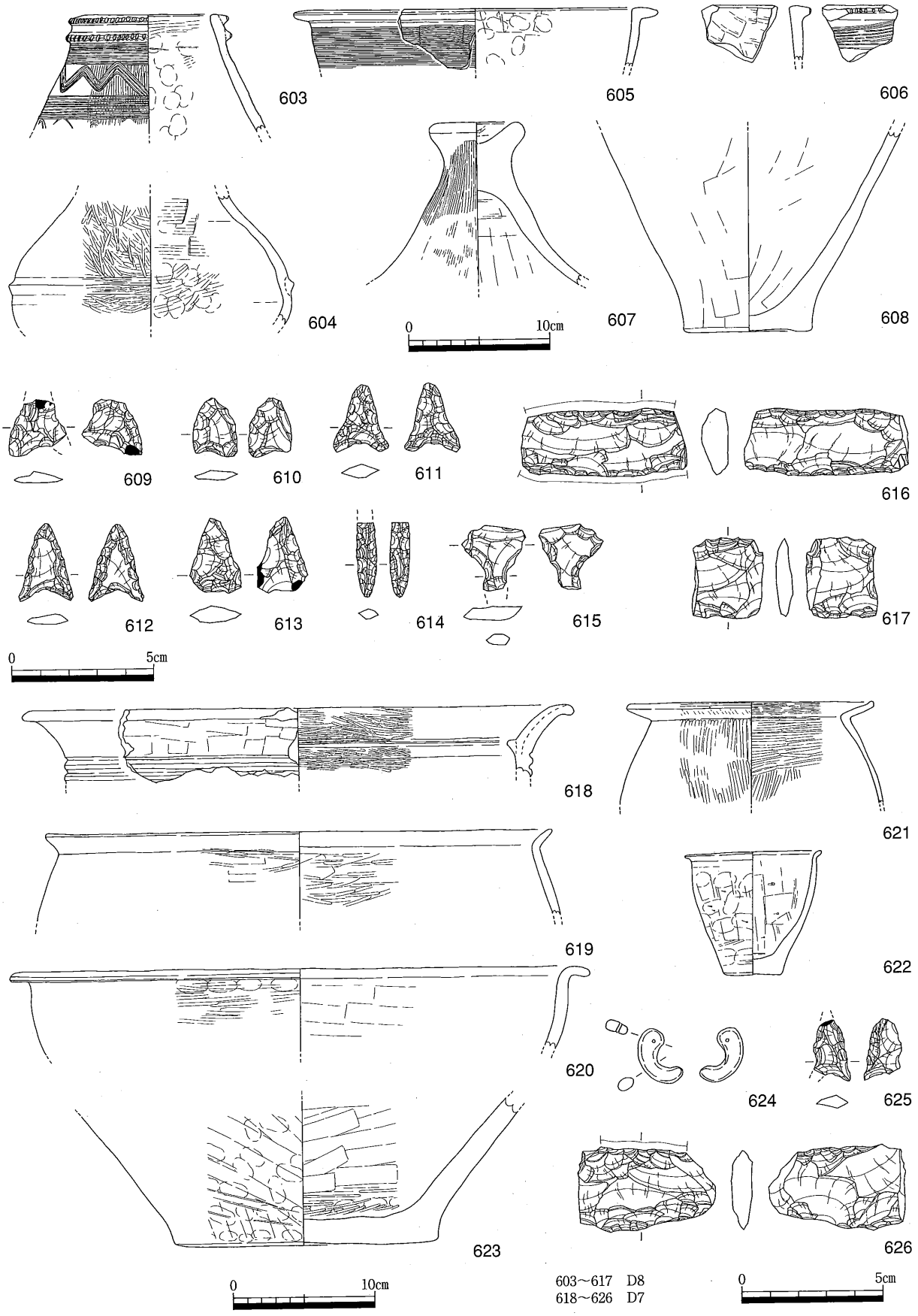
面からみると口縁端部が緩やかに斜め上方へ上がっていくように見える。口縁端部は波打っており、体部には櫛描き沈線文と波状文が描かれているが、浅くはっきりしない。585は甕底部である。586・587は高杯脚部である。586は脚部に穿孔が残る。588～590は蓋である。589はつまみ部分を厚く、590は薄く作る。591は鉢形のミニチュア土器である。全体を手捏ねで作る。

592～601はサヌカイト製石器である。592～594は石鏃で、592・593は凹基式、594は平基式である。595・596は石錐である。597～599は石庖丁である。いずれも半分程度欠損する。側縁部に抉りを持ち、597・598は上部に敲打痕、597・599には摩滅痕が残る。600・601はスクレイパーである。602は用途不明石製品である。球形の砂岩を輪切りにし、中を刳り貫いてリング状にしている。

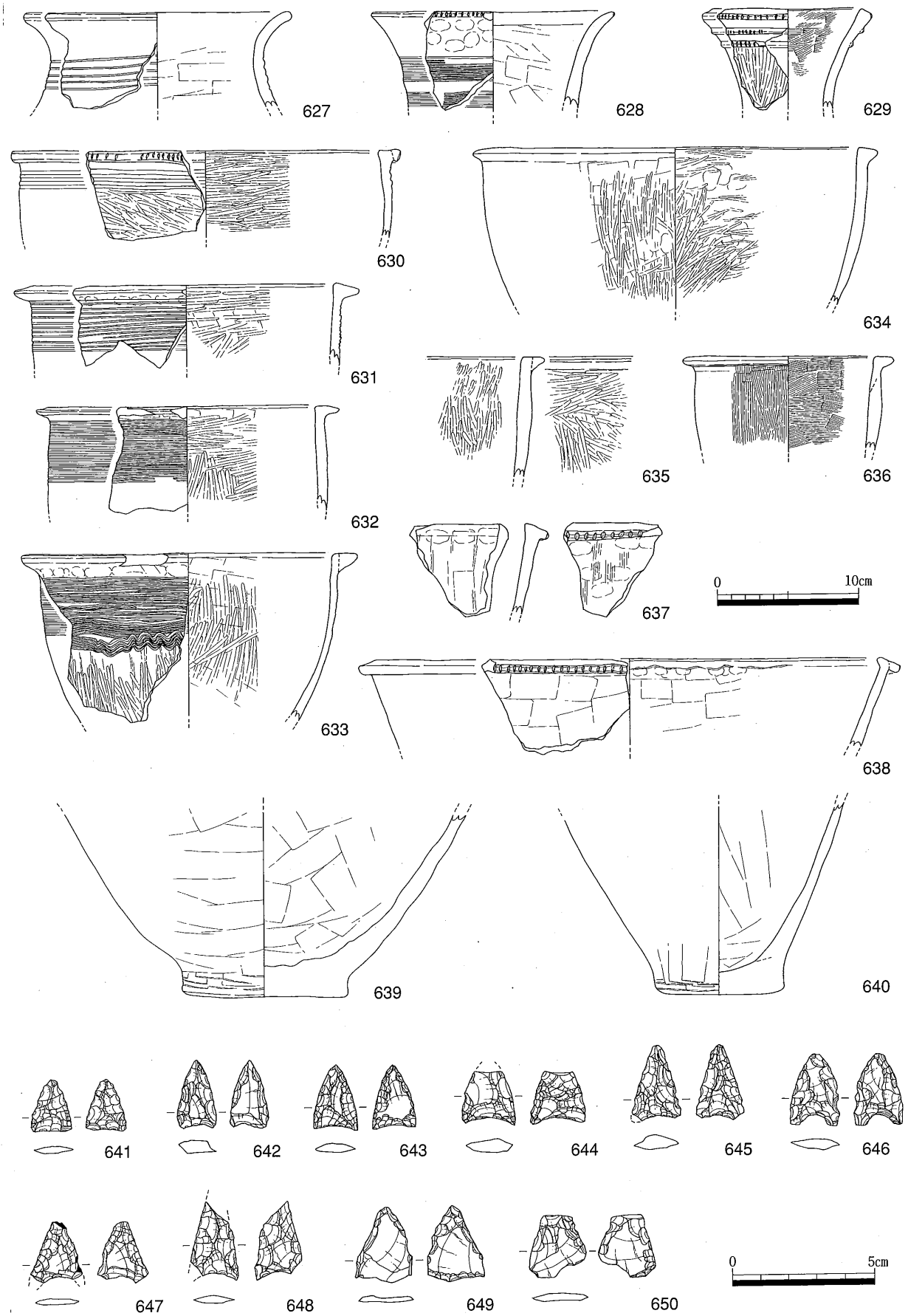
C8出土遺物は弥生時代後期末～中期初頭のもので、SD110の時期と概ね同じ時期である。なお、SK03・04出土遺物の中で報告した49の遺物はこのグリットから出土した遺物と接合関係にある。

603～617はD8グリットから出土した遺物である。D8グリットはC8グリットの南側のグリットに相当する。中でも遺物が多く出土したのはSK03・04上面、SD022の上面である。

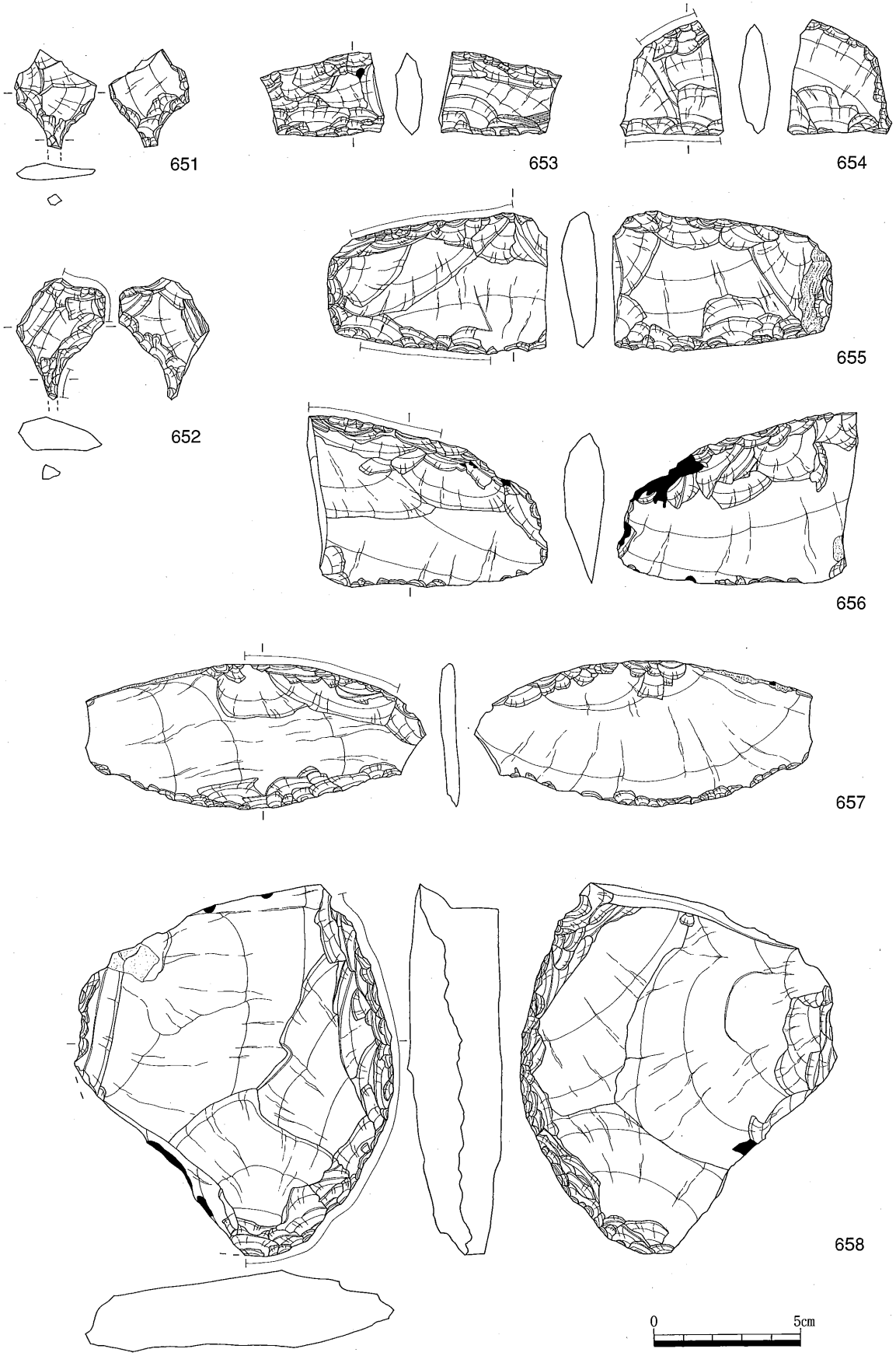
603・604は壺である。603は無頸壺で、口縁端部付近には刻目を持つ2条の貼付突帯、その下部にはヘラ描きの沈線文と山形文がそれぞれ2段以上にわたって施される。604は体部で、最大径付近には貼付突帯が1条施される。605・606は甕である。ともに逆L字型の口縁部を持ち、605は7条1単位の櫛描き沈線文が3単位以上施される。606はヘラ描き沈線文が8条施される。607は蓋である。摘み部分は直径を小さく、厚く作る。608は底部である。609～617はサヌカイト製石器である。609～613は石鏃である。609～612は凹基式、613は加工が不十分であるが、平基式と考えられる。614・615は石錐である。616は石庖丁である。上・下部



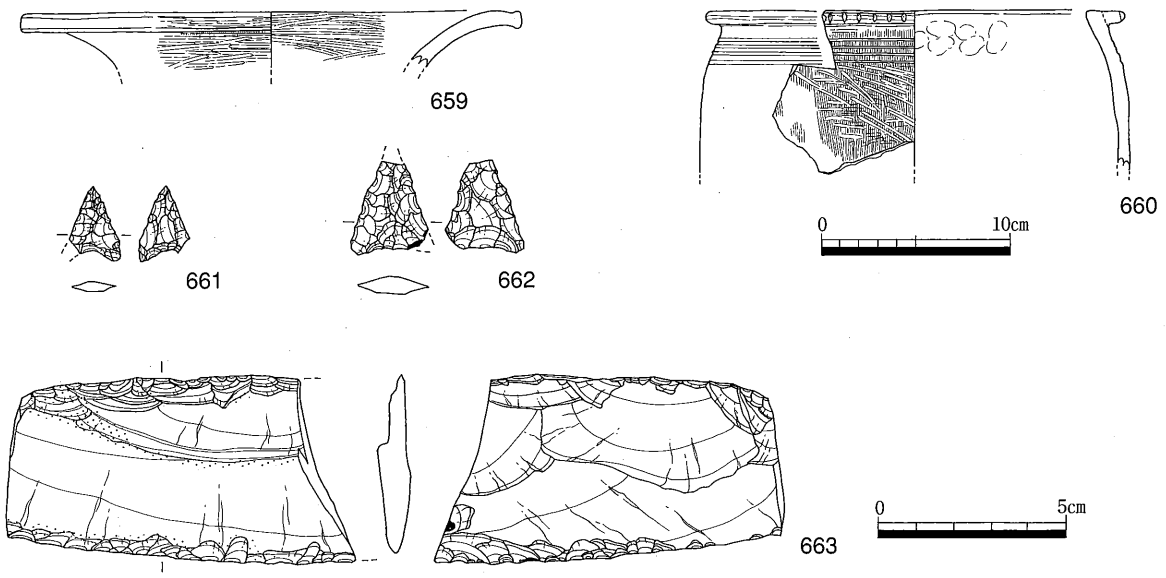
第93図　Ⅲ区包含層D7・D8出土遺物（1/4・1/2）



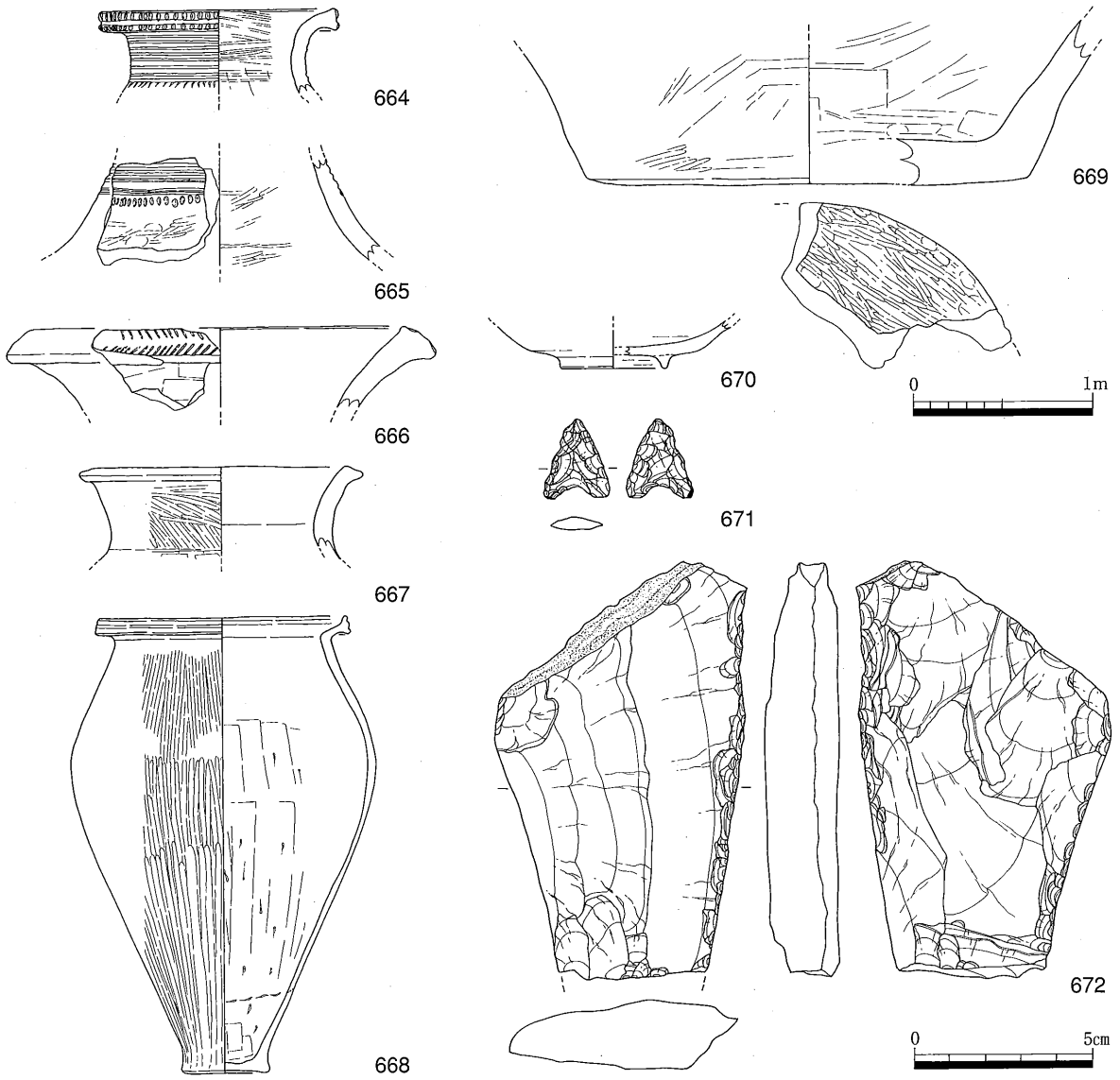
第94図　Ⅲ区その他出土遺物(1)（1/4・1/2）



第95図　Ⅲ区その他出土遺物(2)（1/2）



第96図　Ⅲ区その他出土遺物(3)（1/4・1/2）



第97図　Ⅲ区部分予備調査トレンチ出土遺物（1/4・1/2）

ともに敲打痕がある。617は楔形石器である。

618～626はD7グリット出土遺物である。D7グリットはD8グリットの西側で、遺物は主に北東部で出土しているが、集中して出土した箇所は見られない。618は壺である。頸部には3条以上のヘラ描き沈線文が施される。口縁部内面には突帯が1条巡らされる。619～621は甕である。622は鉢である。口縁端部をわずかに外側へ折り曲げる。外面は成形時のクラックと指押え痕を残す。623は壺底部である。624は土製の勾玉である。625・626はサヌカイト製石器である。625は凹基式石鏃、626はスクレイパーである。

Ⅲ区出土遺物、特に遺物量の多いC8グリットは、Ⅱ区の場合と異なり遺物の大半は弥生時代前期末～中期初頭の頃のものである。この時期は、遺物が最も多く出土したSD011と時期が同じである。C8グリットから出土した遺物は、ほとんどがSD011の最終埋没時のものと考えられよう。

627～658はⅢ区の遺構面精査の際に出土した遺物である。627～629は壺である。627は頸部に5条のヘラ描き沈線文を施す。628は頸部に櫛描き沈線文を施し、口縁端部には刻目を施す。629は頸部上端付近に刻目を持つ貼付突帯を2条巡らせ、口縁端部にも刻目を施す。630～638は甕である。630・631はヘラ描き沈線文で施すものである。630は3条のヘラ描き沈線文を施し、口縁端部には不均等な刻目を施す。631は11条のヘラ描き沈線文を施す。632・633は体部に櫛描き沈線文を施す。いずれも6条1単位の櫛描き沈線文を4単位施し、633はその下部に波状文を施す。634～638は体部無文である。634・635は体部にヘラミガキを、636・637はハケを施す。639は壺の底部、640は甕の底部である。641～658はサヌカイト製石器である。641～650は石鏃である。641は平基式、642～648は凹基式である。649・650は加工が不十分で、650は上・下部が欠損しており、未製品と考えられる。651・652は石錐である。653・654は楔形石器、655～657はスクレイパーである。655は上・下部に、656・657は上部に敲打痕がある。658は打製石斧である。上・下部とも欠損し、刃の残されている部分は全体に敲打痕がある。

遺物は629は弥生時代中期中頃、629以外は弥生時代前期後半～中期初頭のもので、グリットごとに取り上げた遺物の時期と同じである。

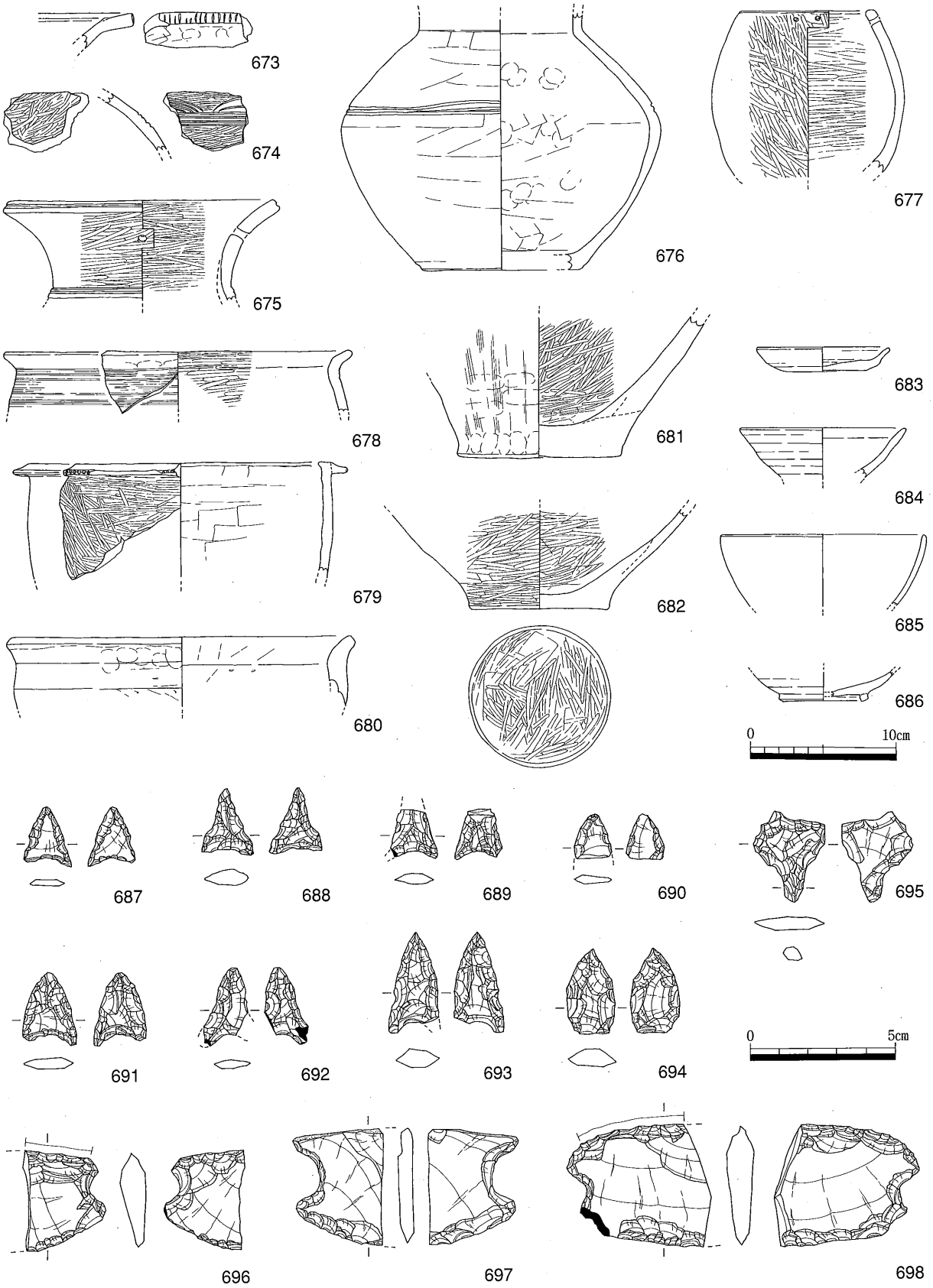
659～663はⅢ区の機械掘削の際に出土した遺物である。659は広口壺口縁部である。660は甕である。4条のヘラ描き沈線を施し、口縁端部には刻目を施す。661～663はサヌカイト製石器である。661・662は凹基式石鏃である。663は石庖丁である。稜線部分に摩滅痕が顕著に残る。

664～672は予備調査を行った際に出土した遺物である。664～667は壺である。664は口縁端部に凹線を施し、その後刻目を施す。頸部は8条のヘラ描き沈線文を施し、その下部に刺突文を付ける。665はヘラ描き沈線文を4条以上巡らせ、その下部には楕円形の刺突文を施す。666は広口壺である。口縁端部に綾杉状のヘラ描き文を施す。668は甕である。口縁端部に凹線を巡らせ、外面はハケで調整した後下半部だけヘラミガキする。内面はヘラケズリをして薄くする。669は壺底部である。670は土師質土器埦である。杯部は体部と底部の境に稜線が残り、底部にはヘラ切り痕が残る。671・672はサヌカイト製石器である。671は凹基式石鏃である。672は打製石斧である。

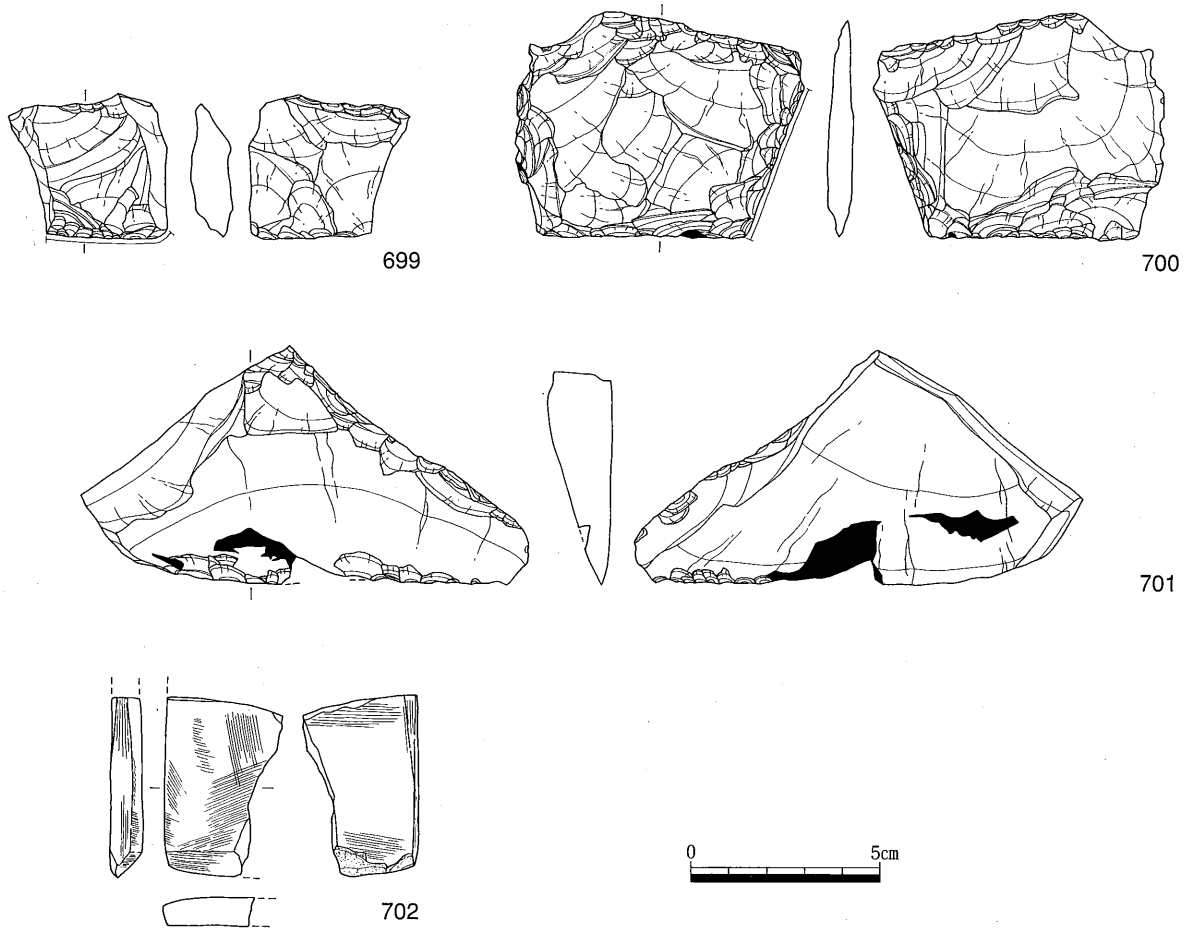
Ⅳ区その他出土遺物（第5・98・99図）

Ⅳ区の遺構面精査時に出土した遺物である。弥生時代の遺物包含層である黒色・黒褐色粘質土層はⅣ区へかけても堆積し、遺物もこの層から出土したと考えられるが、遺物の出土量は少ない。

673～682は弥生土器である。673～677は壺である。673は口縁部小片、674は体部小片である。674は体部に円弧状のヘラ描き沈線があり、弥生時代前期前半頃まで遡る。675は広口壺で口縁端部には凹線、頸部と体部の境には2条の削出突帯を巡らせる。頸部の中程に焼成前の穿孔が1ヶ所に認められる。676は壺体部で、胴部最大径よりやや上部に3条のヘラ描き沈線文が施される。677は無頸壺で、口縁端部に2孔1対の穿孔が1ヶ所残る。678・679は甕である。678は如意状口縁を呈し、体部には櫛描き沈線文が施されるが、摩滅のため条数や単位は不明である。679は逆L字型口縁に刻目を入れ、体部は無文である。680は鉢である。



第98図　Ⅳ区その他出土遺物(1)（1/4・1/2）

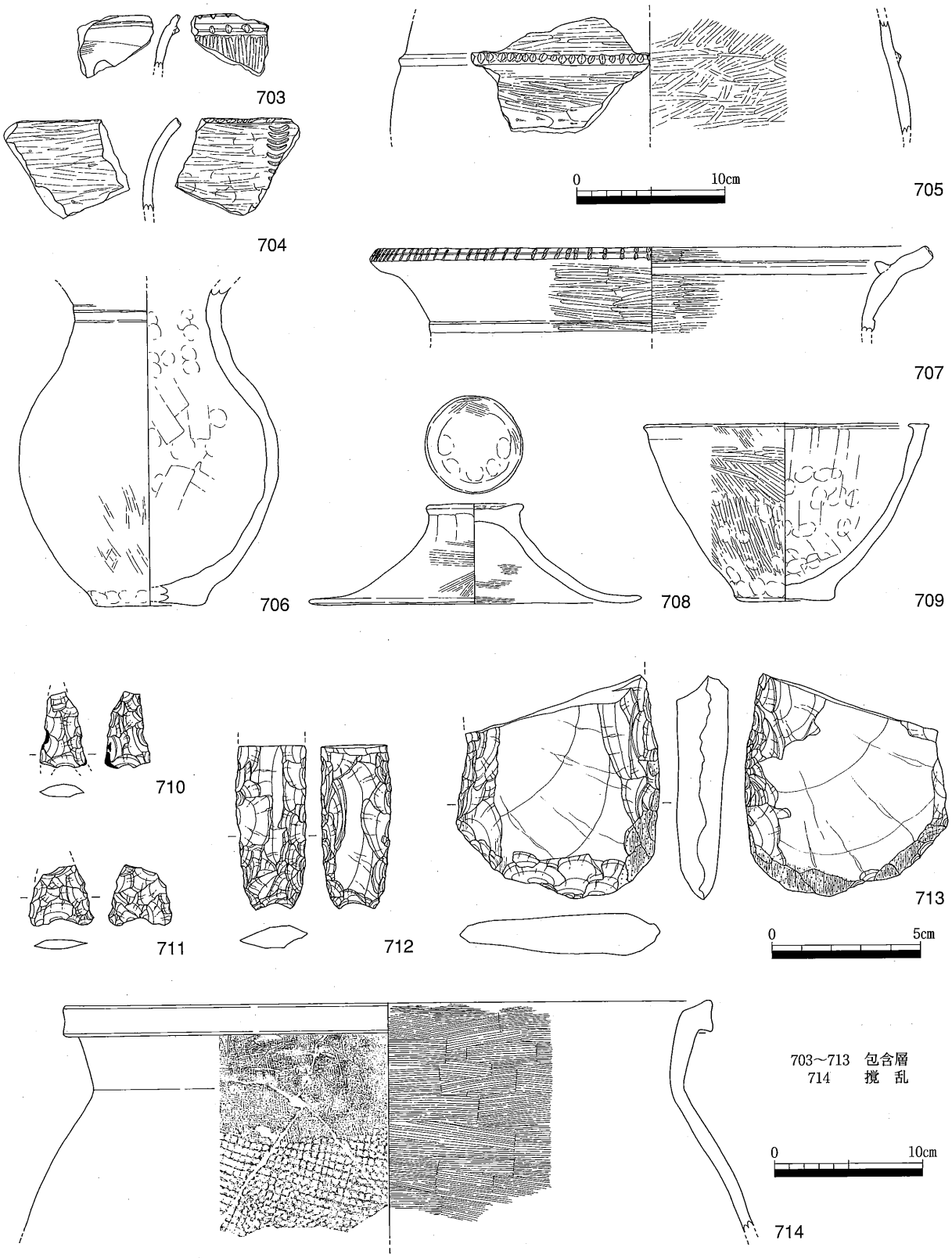


第99図　Ⅳ区その他出土遺物(2)（1/2）

681・682は壺の底部である。683～686は土師質土器である。683は小皿、684は杯、685・686は埦である。687～701はサヌカイト製石器である。687～689・691～693は凹基式石鏃である。690は石鏃と考えられるが、下部は折損する。694は平基式石鏃である。695は石錐である。696～698は石庖丁である。いずれも半分程度欠損する。696・698は上部に敲打痕を残す。699～701はスクレイパーである。702は扁平片刃石斧である。擦痕が多く残る。安山岩製である。

Ⅴ区その他出土遺物（第６・100図）

703～713は遺構面精査の際に出土した遺物である。703～705は縄文土器深鉢である。703は口縁端部に刻み目を付け、それよりやや下がった場所に刻目を持つ突帯を貼り付ける。704は口縁端部に刻目を付け、端部から体部にかけて、上向きの爪形文を縦方向に付ける。705は体部片で、刻目を持つ貼付突帯を巡らせる。縄文時代後期後半～晩期のもので、おおおむねSR02の時期と同じである。706～709は弥生土器である。706・707は壺で、706は頸部にヘラ描き沈線文を３条以上施す。707は口縁端部に凹線を付け、その上部から刻目を施す。頸部には削り出しの突帯を巡らせる。口縁部内面には貼付突帯を１条付ける。708は蓋である。709は埦形の鉢である。弥生土器の時期は、709が後期である以外は前期後半頃のものである。710～713はサヌカイト製石器である。710・711は凹基式石鏃である。712は石槍である。上部は欠損する。713は打製石斧である。端部には擦痕が顕著に残り、摩滅が著しい。710は撹乱から出土した亀山焼甕である。外面は格子タタキ、内面は横方向のハケが顕著に残る。概ね13世紀頃のものである。



第100図　Ⅴ区その他出土遺物（1/4・1/2）

第３節　小結

遺構の変遷（第101図）

縄文時代後期

Ⅴ区西部で自然河川が１条検出された。概ね西から東方向へ向き、調査区外へ延びる。ここからは縄文時代後期の土器がまとまって出土した。土層の堆積状況は砂層やシルト層、Ⅴ区９ベースも砂層・シルト層の堆積がみとめられ、不安定な地盤であったことがわかり、各時期を通じて遺構は希薄であった。現在Ⅴ区の西側を東大東川が流れており、その氾濫原の一部である可能性が高い。東大東川を挟んで西側の池下遺跡Ⅰ区でも縄文時代後期の自然河川を検出しており、現在の東大東川を挟んで東側と西側で当該期の氾濫原があったと考えられる。

弥生時代中期初頭～中頃

Ⅱ区とⅢ区の境に、南東から北西方向へ向く弥生時代中期初頭の溝状遺構が検出された。この溝状遺構は規模の大きいもので、この時期の幹線水路に相当すると考えられる。遺構はこの溝状遺構より西側のⅢ・Ⅳ区で土坑を中心に検出された。土坑は廃棄土坑として利用されたものが多く、住居跡は検出されなかったものの、この付近では当該期と考えられるピットも検出しており、SD011を東限とした集落が展開されていたと考えられる。また、集落に近接して土坑墓・木棺墓も検出された。幹線水路は概ね中期初頭で廃絶するが、土坑の時期は中期中頃まで続き、集落は水路が途絶えた後も続いたと考えられる。

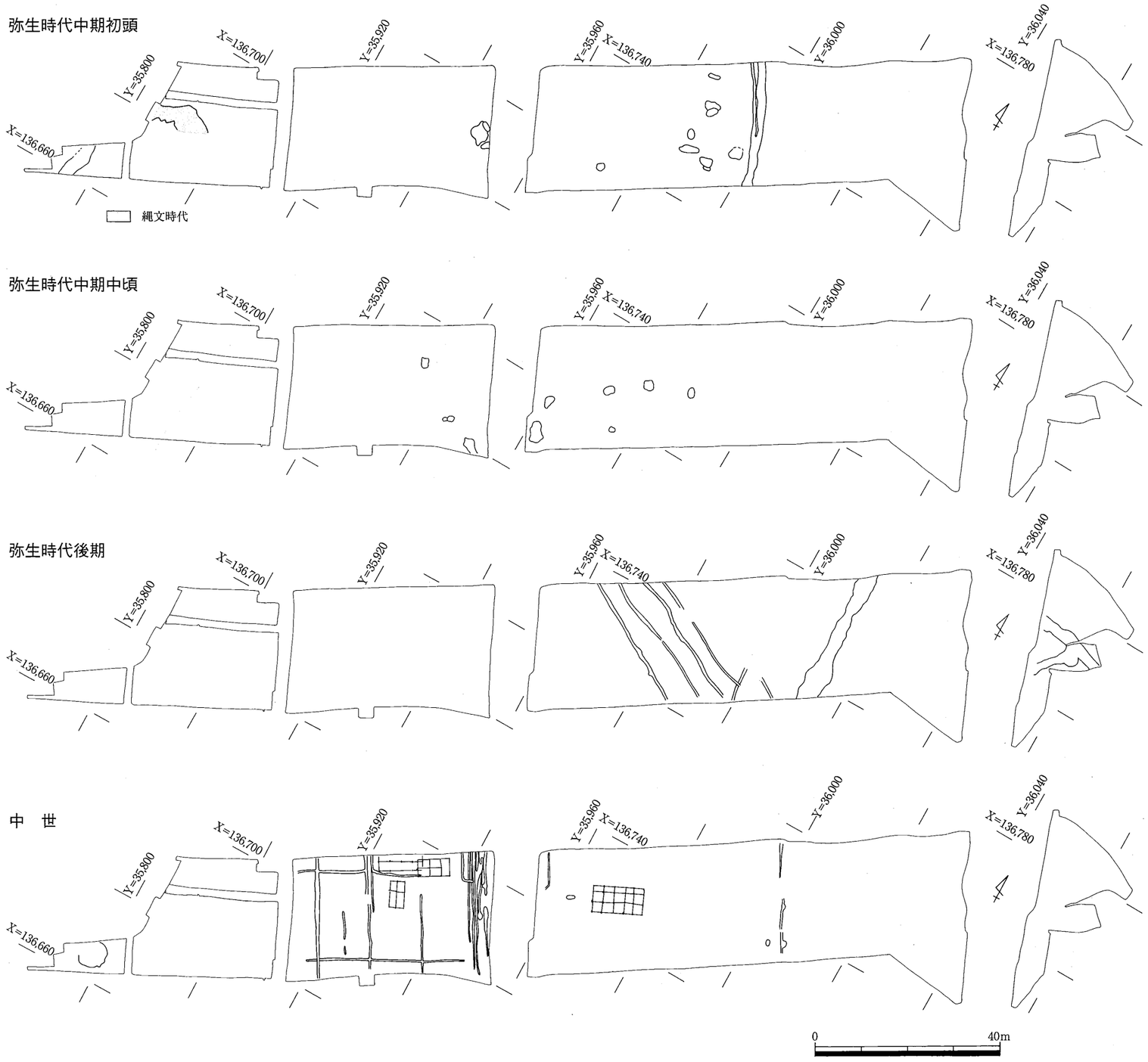
弥生時代後期

Ⅰ区～Ⅲ区にかけて溝状遺構が検出された。Ⅰ区では西方向へ向く、Ⅱ区では北方向へ向く、やや大型の溝状遺構が確認され、これらは幹線水路になると考えられる。Ⅲ区では南東から北西へ向く小規模の溝状遺構を検出した。幹線水路から水を引く水路と考えられる。

弥生時代中期まで見られた集落跡は認められなくなり、水田化されたと考えられる。

中世

主にⅣ区を中心に遺構が検出された。Ⅲ区とⅣ区の境が条里型地割の坪界線に相当するが、このライン上には溝状遺構が重複し、溝が継続的に維持されたことがわかる。また、この西側への約11m間隔で３条の溝状遺構が検出され、規則的な地割であったことが窺える。また、Ⅲ区からⅣ区北半部にかけては庇付きや総柱の掘立柱建物跡が検出された。Ⅳ区SB03には雨落ち溝が伴い、土師質土器が多量に埋納されていた。



第101図　遺構変遷図（1/1,000）

第４章　池下遺跡の調査の成果

第１節　土層序

Ⅰ区の土層（第１・６～８図）

Ⅰ区は調査区の北壁土層、南壁土層、西壁土層および北壁と南壁の間の東西方向の土層の断面実測を行った。わずかに南から北へ傾斜する地形で、調査区の東側では東大束川の氾濫原が認められる。調査区の北東側では黄灰色系のシルト層が遺構面となるが、南西側ではその下部に堆積する砂礫層が上がってきて、遺構面となる。遺構面は１面と考えられる。

ⅰ　西壁土層

Ⅰ区北半部について調査区西壁の土層断面を作成した。厚さ40cm程度の造成土、耕作土を除去した後に遺構面を検出した。遺構面のレベルは概ね35.7mで傾斜はほとんどない。ベース土は暗灰色細砂混粘質シルトで、そこからSD105・106が切り込まれる。暗灰色細砂混粘質シルトの下部には黄灰色細砂混粘質シルト、暗灰橙色粗砂礫混粘質シルトが堆積するが、ここから掘り込まれる遺構はない。

ⅱ　北壁土層

Ⅰ区北側で作成した土層断面図である。遺構検出面は35.7～35.8mで、東から西へ緩やかに傾斜している。ベース土は、西側では暗灰色細砂混粘質シルトであるが、徐々にこの層の堆積は薄くなり、調査区中央付近では消失して、その下部の黄灰色細砂混粘質シルトがベース土となる。調査区の東端付近ではこの層を切り込んで東大束川の氾濫原の堆積土が認められる。遺構は西半部では暗灰色細砂混粘質シルトの上面に堆積する暗灰褐色砂混シルトの上面から、その堆積土が見られない東側では黄灰色細砂混粘質シルトの上面から掘り込まれる。暗灰色細砂混粘質シルトの堆積土はSR11またはSR12の埋土の可能性もあろう。

ⅲ　中央土層

Ⅰ区北壁と南壁の中央付近を東西方向に作成した土層断面である。遺構面はおおむね35.9mで、傾斜はほとんど認められない。調査区の西半部はベース土は概ね暗灰色細砂混粘質シルトと思われ、その上面から遺構は切り込まれる。中央付近の撹乱を挟んで東側では黄色粘質シルトがベース土となる。調査区の東端では東大束川の氾濫原が認められる。

ⅳ　南壁土層

Ⅰ区南壁で作成した土層断面である。遺構面は概ね35.9mで、傾斜はほとんどない。東側では東大束川の氾濫原が観察できる。ベース土は東側では黄色・黄褐色・青灰色シルトが堆積するが、西側では砂層や礫層がベースとなり、その上部のシルト層は堆積しない。遺構や自然河川はシルト層が堆積する箇所ではそこから、礫層が上がってきている箇所では礫層の上面から切り込んでいる。

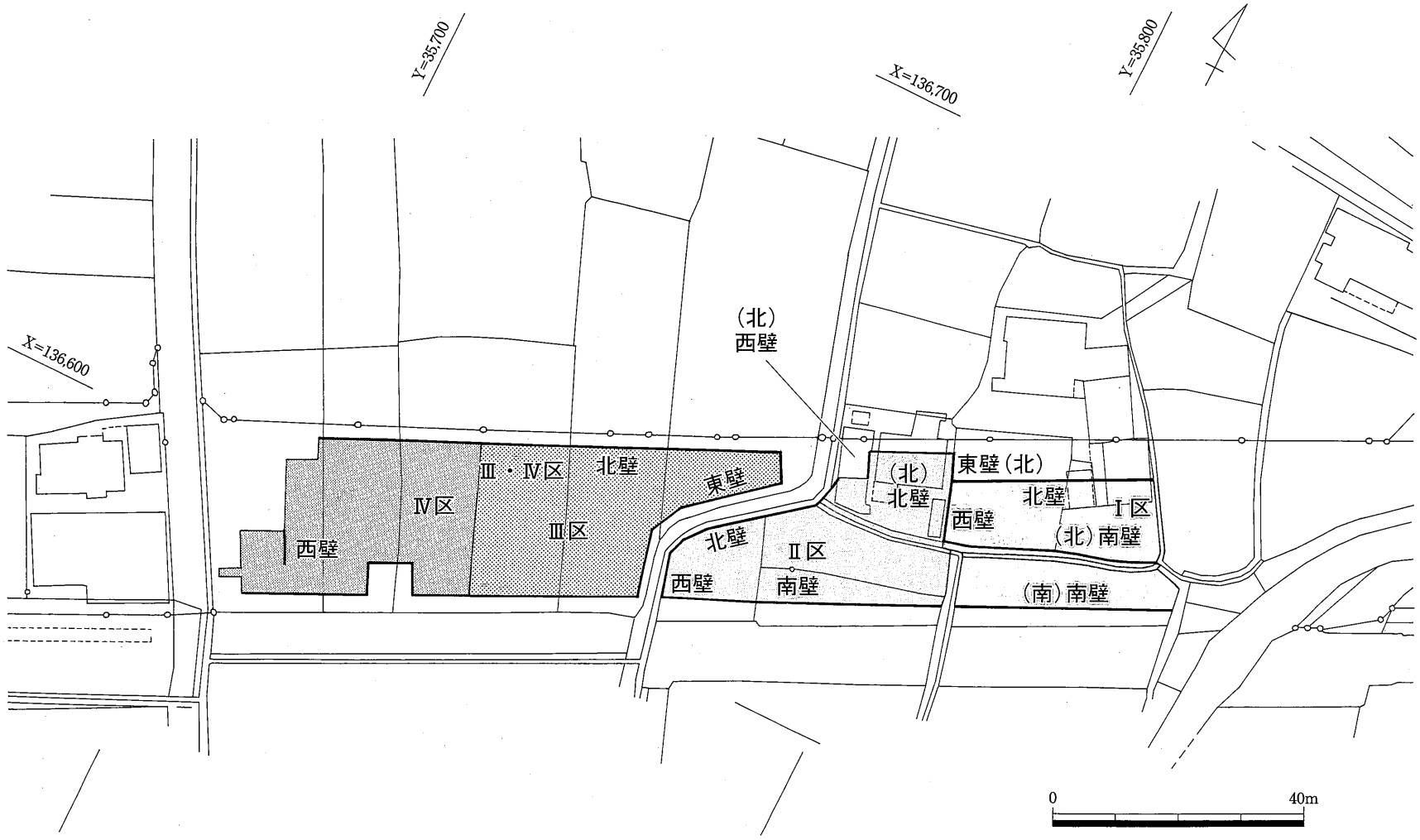
Ⅱ区土層（第１・９～11図）

Ⅱ区は調査区の西南隅から北西隅までと、北側へ拡張した部分の西・北・東壁、南壁の土層断面を作成した。

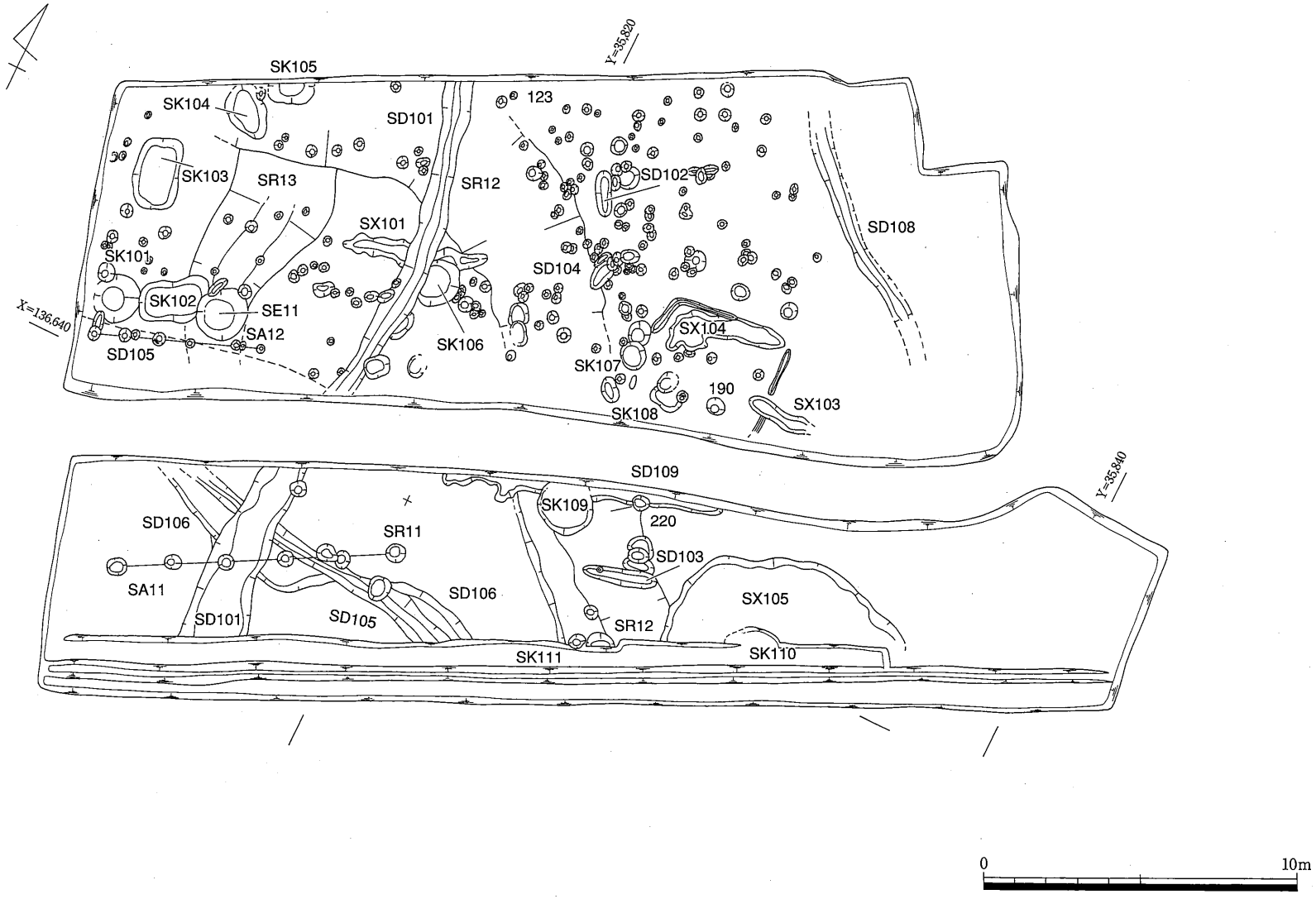
ⅰ　西壁土層

Ⅱ区西壁南部で作成した土層断面図である。遺構面はおおむね35.6mで、ベース土は黄灰色砂混粘土である。耕作土、床土の下部に褐灰色粗砂混シルトの遺物包含層が約20cmみられ、その下部にSD210の掘り込み面が認められる。

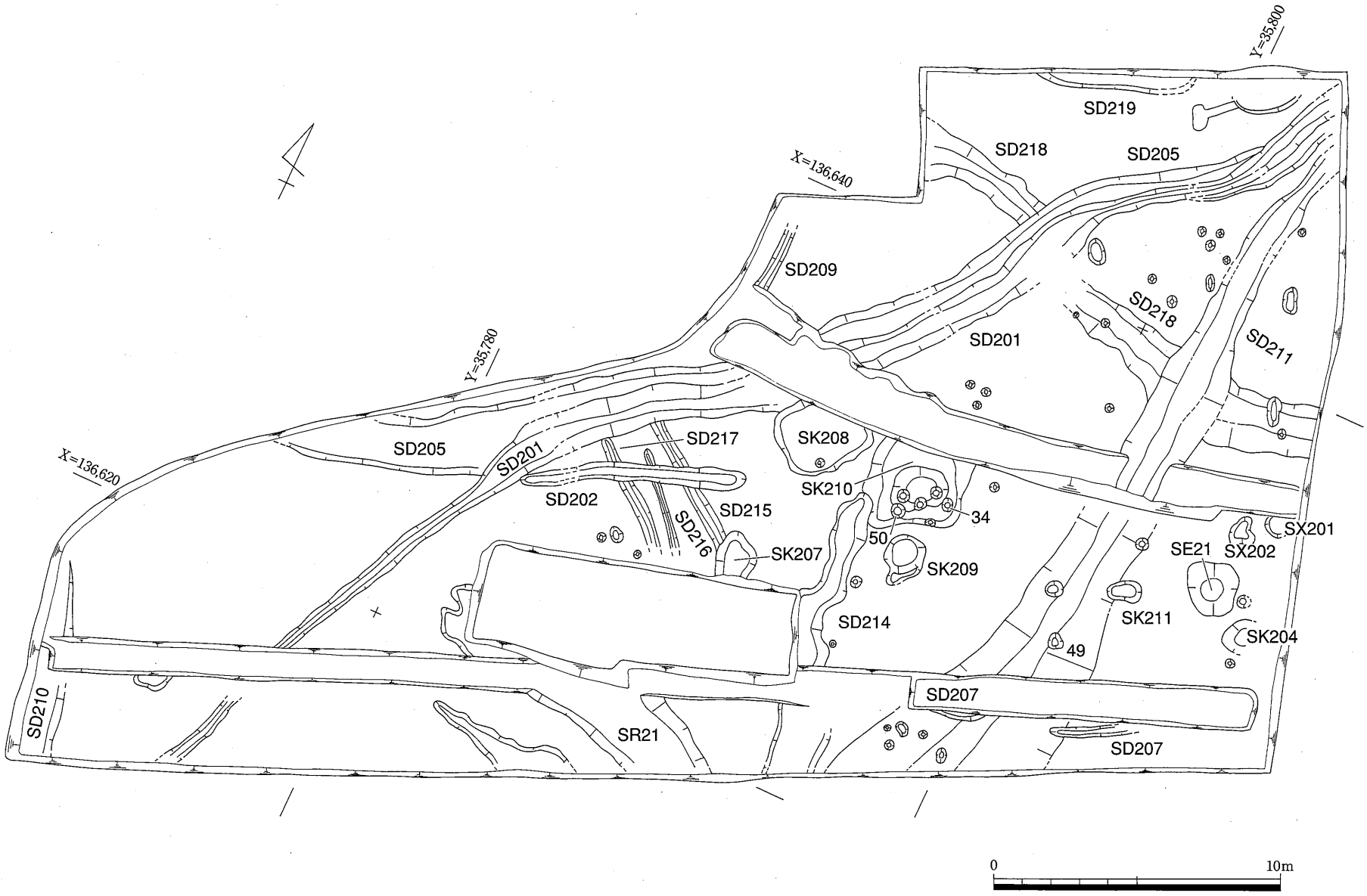
Ⅱ区西壁北部で作成した土層断面図である。遺構面のレベルは35.4～35.6mで、北へ向かって緩やかに傾斜する。耕作土、床土の下部には20～30cmのにぶい褐色砂礫混シルト、青灰色細砂混シルト、褐灰色細砂混



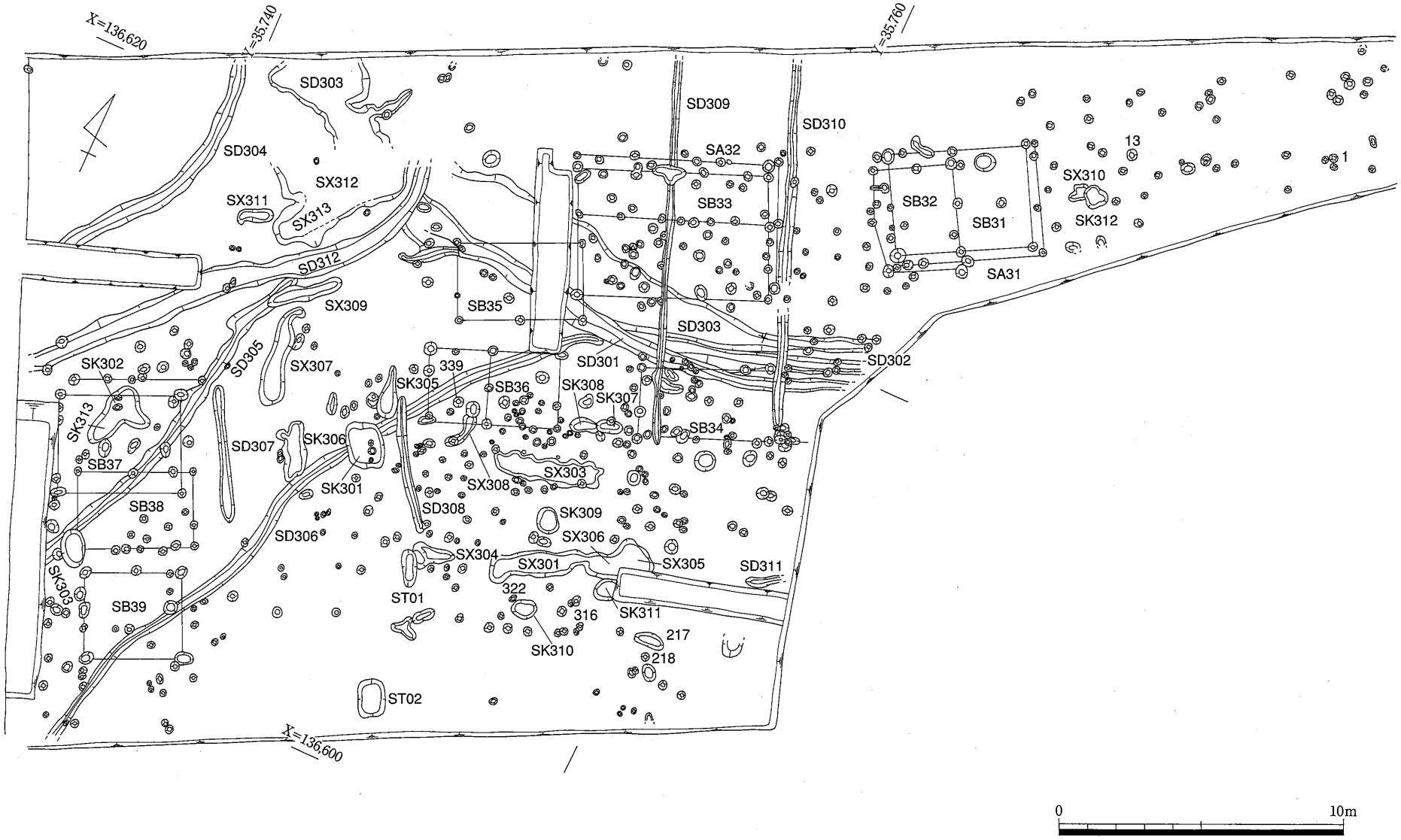
第１図　調査区割図（1/1,000）



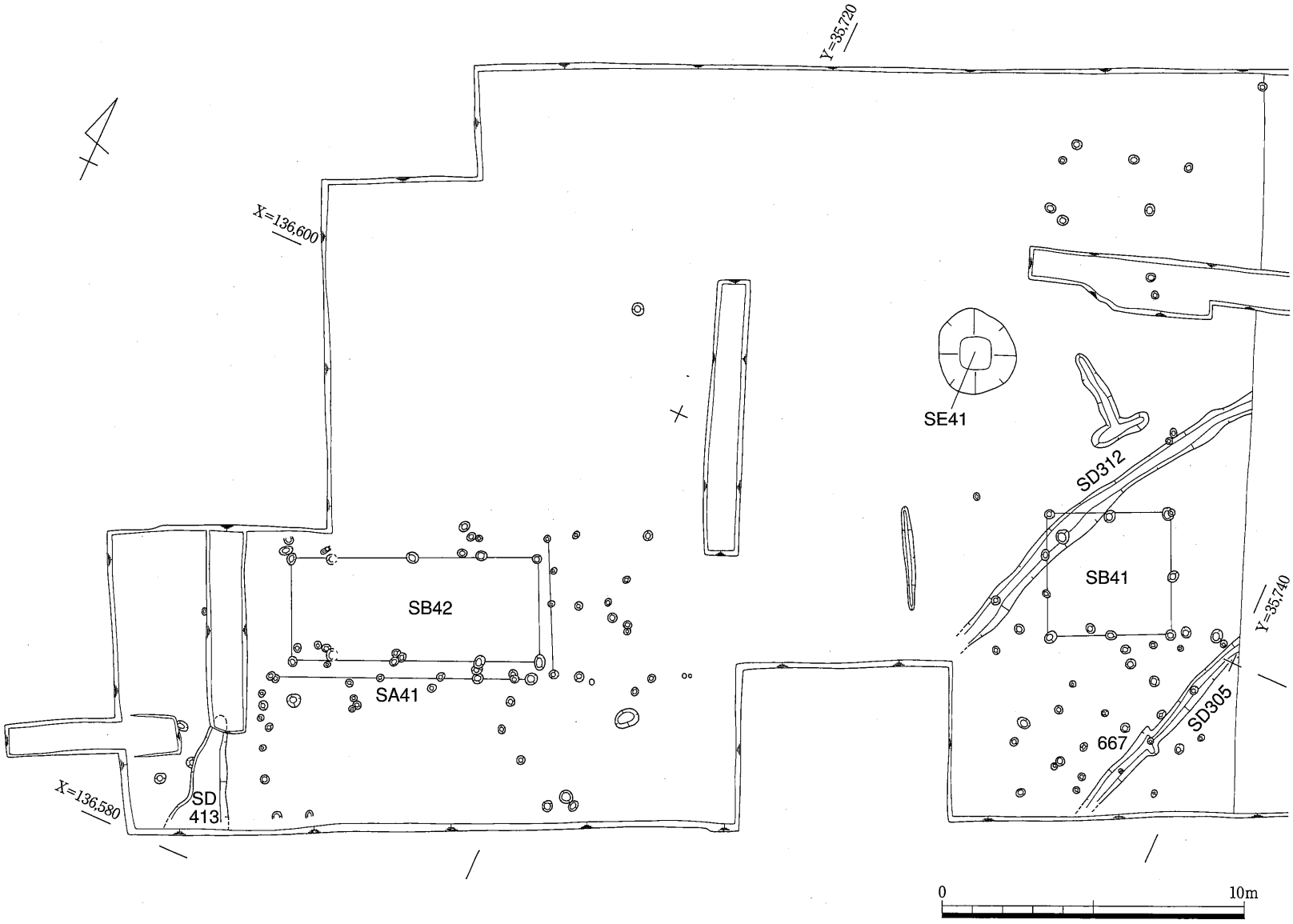
第２図　Ⅰ区遺構配置図（1/200）



第３図　Ⅱ区遺構配置図（1/200）

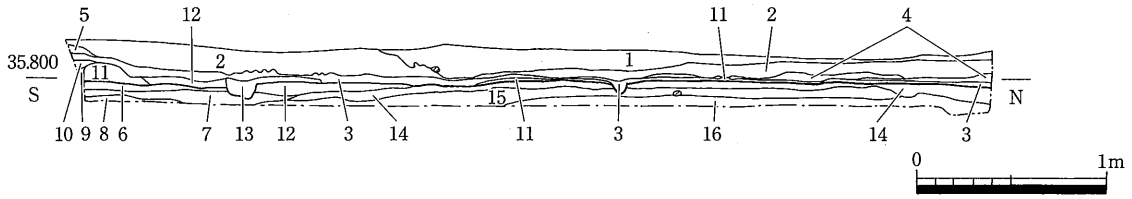


第４図　Ⅲ区遺構配置図（1/200）



第５図　Ⅳ区遺構配置図（1/200）

Ⅰ区西壁



1　撹乱
2　耕土
3　淡褐色粗砂混じりシルト
4　橙灰色砂混じりシルト
5　橙褐色細礫混じり細砂
6　暗褐灰色砂混じり弱粘質シルト
7　黒灰褐色砂混じり粘質シルト
8　黒褐灰色砂混じり粘質シルト
9　灰色細砂
10　暗青灰色砂混じり粘土
11　暗灰橙色砂混じりシルト
12　灰褐色砂混じりシルト（灰味が強い）
13　黒灰色粗砂混じり弱粘質シルト
14　暗灰色細砂混じり粘質シルト
15　黄灰色細砂混じり粘質シルト
16　暗灰橙色粗砂礫混じり粘質シルト

6～8・12　SD105・106

第6図　Ⅰ区土層断面図(1)（1/40）

シルト等が堆積し、遺構面はその下部となる。遺構面は褐灰色シルト混細砂、明褐色細砂混シルトなどで、その30～40cm下部で橙灰色砂混粘質シルトを検出した。ベース面は安定せず、流路の氾濫源となっていた様子が窺える。遺構はすべて同じ面から掘り込まれていた。

ⅱ　南壁土層

調査区の南壁で作成した土層断面図である。地表面のレベルは調査区東端の方が西端より20cm程度高いが、遺構面のレベルは概ね35.8mで、ほとんど傾斜は認められない。調査区の東端から30m付近までは概ね厚さ15～20cm程度の暗灰褐色砂混粘質土・砂質土、黒褐色粗砂質土の遺物包含層が堆積する。遺構のベース土は暗褐灰色細砂混粘質土、暗灰褐色・褐灰色礫混細砂、暗褐色礫混中砂などで、その下部20～40cmの下部に黄灰色砂混粘土層が形成される。黄灰色砂混粘土層の堆積は調査区中央付近ほど低く、調査区中央付近ではベース土が安定しなかった様子が窺える。それより西側では耕作土の下部は暗灰褐色中砂、暗褐灰色砂礫のベース土で、さらに約40cmほど下部に黄灰色砂混粘土層のベースが認められる。

ⅲ　北壁土層

調査区北部の西壁から東壁にかけてコの字状に作成した土層断面である。遺構面は35.4～35.6mで、東から西へ緩やかに傾斜する。ベース土は褐灰色シルト混中砂などである。調査区北西隅付近では明褐色細砂混シルト層の下部に砂層の堆積が10cm程度と薄い。

Ⅲ・Ⅳ区土層（第1・12～14図）

北壁・南壁をⅢ・Ⅳ区を通して断面図を作成した。また、Ⅲ区東壁とⅣ区西壁の土層断面図を作成した。

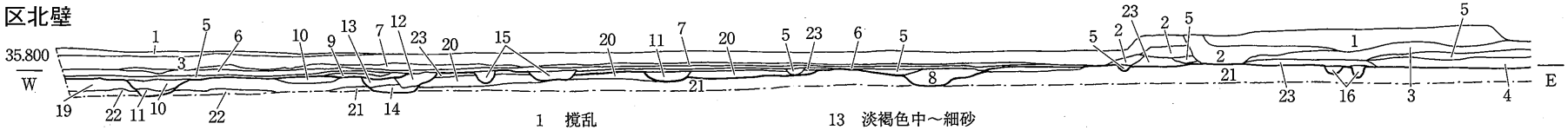
ⅰ　北壁土層

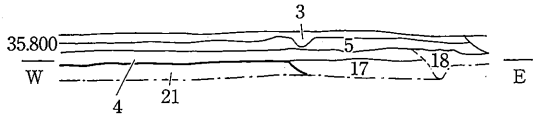
Ⅳ区の東から12m付近から、Ⅲ区の西から26.5m付近にかけて作成した土層断面である。遺構面は東から西へ傾斜している。整地土、耕作土の下部に近世以降の堆積土と考えられる灰褐色・淡灰褐色・暗灰褐色・褐灰色砂混シルトが厚さ15～20cm堆積し、その下部に厚さ10cm程度の灰色砂質土が堆積する。ベース土は褐灰色砂混シルト、黄色砂混粘質土で、遺構は褐灰色砂混シルトから掘り込まれるものと、灰色砂質土から掘り込まれるものがある。遺構の埋土から、時期は後者が近世以降、前者はそれ以前と考えられる。

ⅱ　南壁土層

Ⅲ区から、Ⅳ区の東から10m付近にかけて作成した土層断面図である。遺構面は東から西へ傾斜している。Ⅲ区東側では耕作土・床土の直下で黄灰色砂混粘土、橙灰褐色砂混シルトのベース土が検出されるが、Ⅲ区中央付近からⅣ区にかけては近世の包含層と考えられる淡灰褐色・暗灰褐色・灰色砂混シルトが厚さ8cm程度堆積する。Ⅲ区中央付近から西側ではベース土は主に灰青色砂質土を呈し、部分的に灰褐色細砂と暗灰色粘質土のラミナ状の堆積を呈する。遺構はベース土から掘り込まれるものと近世の包含層から掘り込まれる

Ⅰ区北壁

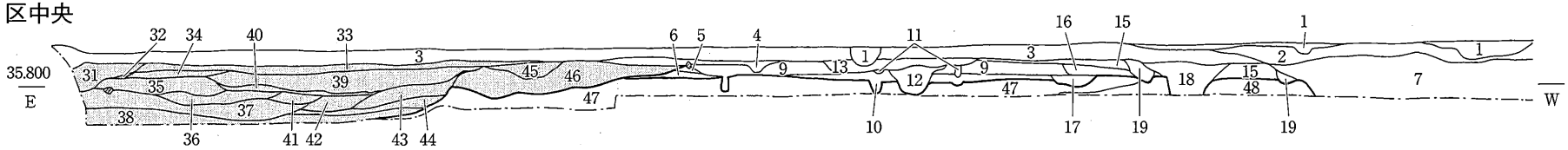


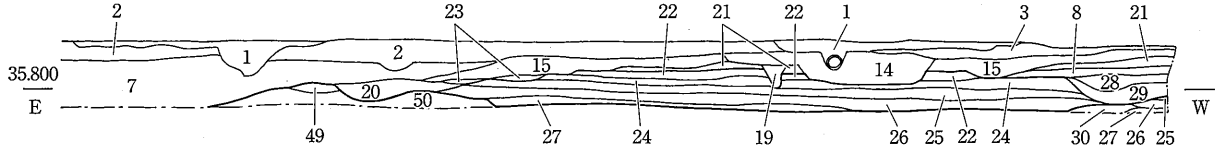


1 撹乱
2 花崗土
3 耕土
4 褐黄灰色砂混じり粘質シルト
5 淡褐色粗砂混じりシルト
6 橙灰色砂混じりシルト
7 淡褐色砂混じりシルト
8 淡褐色～明褐色砂
9 暗灰橙色砂混じりシルト
10 暗褐灰色砂混じりシルト
11 褐灰色砂混じり弱粘質シルト
12 暗灰褐色粗砂混じり砂質シルト
13 淡褐色中～細砂
14 明褐色中～細砂
15 灰褐色砂混じりシルト
16 暗灰褐色砂混じりシルト
17 暗灰褐色礫混じり砂質シルト（氾濫原）
18 （淡）褐灰色砂混じり砂質シルト
19 暗灰色細砂混じり粘質シルト
20 暗灰色細砂混じり粘質シルト（褐色を帯びる）
21 黄灰色細砂混じり粘質シルト
22 暗灰橙色粗砂礫混じり粘質シルト
23 暗灰褐色砂混じりシルト

0 1m

Ⅰ区中央



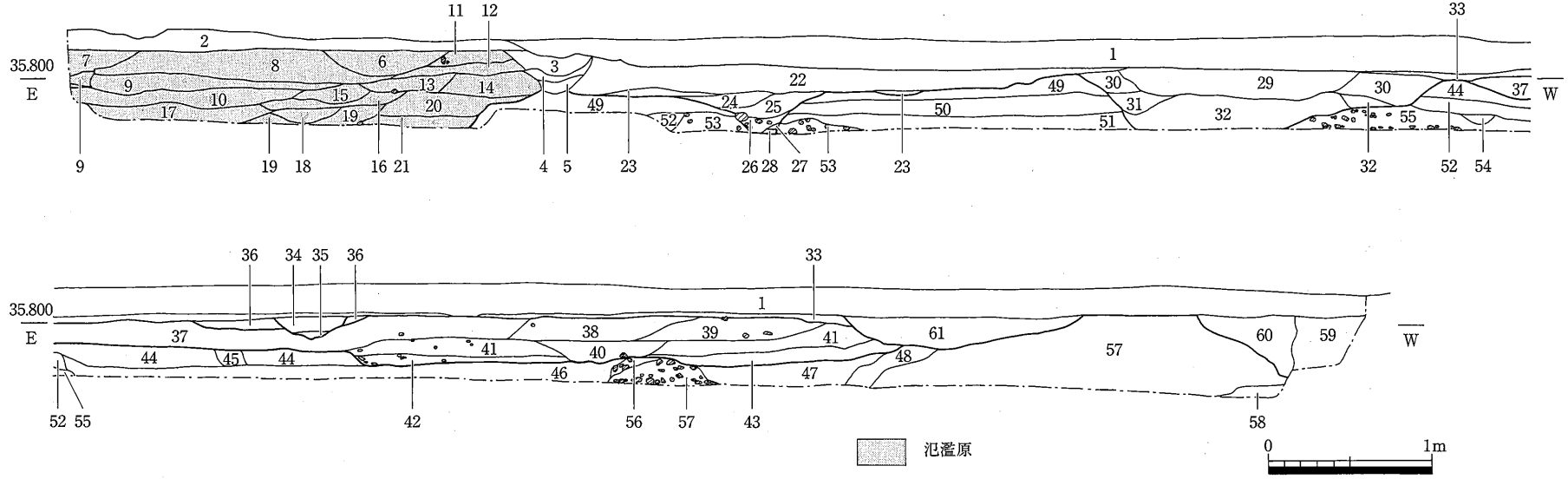


氾濫原

1 撹乱
2 撹乱（炭化物と瓦を含む層）
3 耕土
4 淡褐色砂混じりシルト
5 暗褐色細砂混じり弱粘質シルト
6 褐黄灰色砂混じり粘質シルト
7 暗灰色シルト～φ２～20cmの礫層～中粗砂層
8 淡褐色粗砂混じりシルト
9 暗褐色細礫砂混じりシルト
10 暗灰黄色砂混じりシルト
11 灰色砂混じりシルト
12 黒褐色砂礫混じりシルト
13 灰色粗砂混じりシルト
14 灰色粗砂混じりシルト（僅かに礫混）
15 灰褐色砂礫混じりシルト
16 ９層と類似
17 暗灰褐色砂混じりシルト
18 暗灰色礫混じり砂質シルト
19 灰褐色粗砂混じりシルト
20 淡褐色～明褐色砂
21 橙褐色細礫混じり細砂
22 灰色細～中砂
23 灰色シルト
24 灰褐色砂混じりシルト
25 暗褐灰色砂混じり弱粘質シルト
26 黒灰褐色砂混じり粘質シルト
27 黒褐灰色砂混じり粘質シルト
28 灰色細砂
29 暗青灰色砂混じり粘土
30 黒灰色細砂
31 灰褐色砂礫混じりシルト
32 明褐色細砂
33 黒灰褐色礫混じりシルト
34 灰褐色砂礫混じりシルト
35 暗褐灰色砂混じりシルト
36 橙灰色砂混じりシルト
37 灰色砂混じりシルト
38 暗黄灰色砂混じり粘質シルト
39 灰褐色砂混じりシルト
40 黒灰色砂混じりシルト
41 36層と類似。鉄分を多く含む
42 37層と類似
43 暗灰褐色砂礫混じりシルト
44 暗灰褐色砂礫混じりシルト（43層より礫が多い）
45 褐灰色粗砂混じりシルト
46 黒灰色砂礫
47 黄（灰）色粘質シルト
48 暗橙灰色粗砂～細砂
49 暗灰色細砂混じり粘質シルト
50 黄灰色細砂混じり粘質シルト

第７図　Ⅰ区土層断面図(2)（1/40）

Ⅰ区南壁

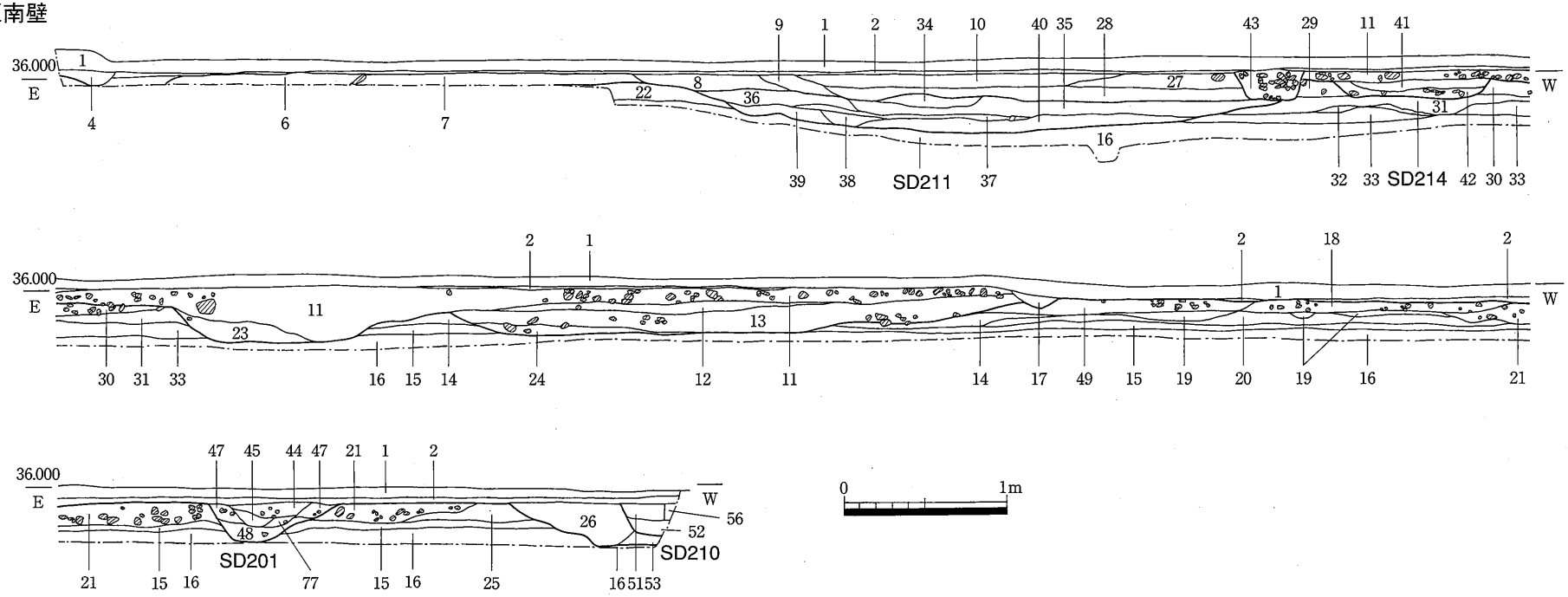


1 撹乱
2 耕土
3 淡褐色シルト
4 黒灰色粘土
5 暗灰色砂混じりシルト
6 濁灰褐色砂混じりシルト（砂とシルトが互層となりラミナ状にみえる）
7 黄色シルト
8 黄灰色砂混じりシルト（僅かに粗砂含む）
9 灰黄色砂混じりシルト（８層より砂粒は細かい）
10 灰褐色シルト混じり細砂（僅かに粗砂、砂礫を含む）
11 褐灰色砂混じりシルト（僅かに礫含む）
12 暗灰色砂混じりシルト（僅かに褐色のMnを含む）
13 灰褐色粗砂混じりシルト（僅かに褐色のMnを含む）
14 暗褐灰色粗砂混じりシルト（僅かに褐色のMnを含む。12・13層より褐色味が強い）
15 灰色砂混じりシルト
16 灰色砂混じりシルト（Fe含む。15層より砂粒の大きさが様々で砂の混入度が高い）
17 淡灰褐色細砂シルト（細砂とシルトの互層でラミナ状）
18 灰色細砂（非常に細かい砂。少し粘り気を帯びる。一部淡褐色細砂のラミナ）
19 灰色中砂シルト（中砂とシルトの互層ラミナ）
20 17層と類似
21 黄褐色砂と黒灰色粘質細砂の互層（ラミナ）
22 暗灰褐色砂混じりシルト
23 濁暗灰褐色砂混じりシルト（僅かに細礫を含む）
24 暗灰色砂混じり弱粘質シルト（僅かに細礫）
25 灰褐色砂混じり弱粘質シルト（24層より砂粒が細かい）
26 灰色粘質シルト（粘り気はあるがしまりは緩い）
27 ベース50層と26層の混合土
28 暗青灰色粘土（僅かに砂含む）
29 暗褐灰色多粗砂シルト（結構しまる）
30 褐灰色粗砂シルト（29層より粗砂少、色味淡い。しまりは緩い）
31 ベース50層と30層の混合土
32 黒灰褐色砂（粗砂と細砂の互層、ラミナ状）
33 暗灰褐色砂混じりシルト（砂の混入は少し）
34 黒褐色砂質シルト（しまる）
35 黒灰色粗砂（小礫も混）
36 黒褐色シルト（砂の混入僅か）
37 黄色砂混じりシルト（小礫と白い砂粒の混入僅か。よくしまる）
38 黄灰色砂混じりシルト（小礫僅か）
39 黄灰色砂混じりシルト（小礫僅か、37→38→39の順に灰みが強まり砂の混入度は高くなる）
40 暗褐灰色弱粘質砂混じりシルト（礫僅か、底部に縄文土器含む）
41 黄灰褐色砂混じり弱粘質シルト（縄文包含層、40層より西部は砂質が強く緩い）
42 灰黄色砂混じり弱粘質シルト（縄文包含層）
43 灰黄色シルト細砂（42層の砂とシルトの混入度が逆転した感じ。とても緩い）
44 灰黄色細砂混じり弱粘質シルト（42層より淡く、青色が強い）
45 暗灰色中砂
46 青灰色細砂混じりシルト
47 青灰色多砂混じりシルト（46層より砂の混入度も高く、砂目は粗い）
48 暗褐色砂（粗～細砂が混じって構成、僅かに粘り気のある緩いシルトがつなぎ）
49 黄褐色砂混じりシルト
50 黄色シルト（弱粘性）
51 青灰色シルト（弱粘性、50層のグライ化）
52 青灰色砂混じり弱粘質シルト
53 暗灰色砂礫（φ５～10cm程の礫。礫の混入は少なく、砂粒の間にはシルトっぽい土も）
54 57層と類似。57層より砂質が強い（粗砂や小礫も混じる）
55 暗褐色砂礫（中砂がベースで粗砂とφ５cmまでの小礫が混合。よく見ると黒褐色粗砂と褐色中砂のラミナ）
56 暗灰色礫混じり細砂（φ５～10cm）
57 暗褐色砂礫（φ５～10cm）
58 黄灰色粘質シルト
59 濁暗青灰色土（砂礫混じりシルト）（撹乱）
60 濁暗褐灰色土（砂混じりシルト）（撹乱）

3～5・59・60 撹乱
6～21 旧東大東川
29～32 SR12
34・35 SD105
36 SD106
37～43 SR11
49～52 ベース

第８図　Ⅰ区土層断面図(3)（1/40）

Ⅱ区南壁

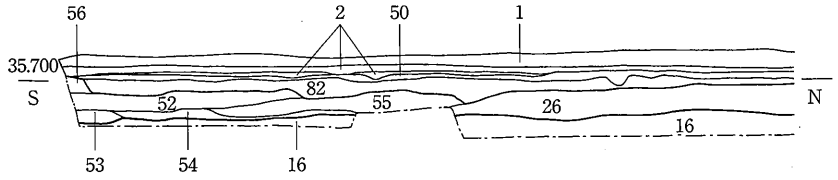


1　耕作土
2　床土
3　床土より褐色が強い
4　濁灰色砂混じり粘質土（水口設置時の撹乱）
5　暗灰色砂混じり弱粘質土（鉄分沈着あり）
6　暗灰褐色砂混じり粘質土（弥生包含層）
7　暗灰褐色砂質土（弥生包含層）
8　灰褐色砂質土
9　灰褐色シルト混じり砂質土
10　暗灰褐色細砂質土（φ５cm程度の礫を若干含む。土器を含む）
11　黒褐色粗砂質土（拳大の礫混じる。土器を含む）
12　暗褐色中砂
13　黒褐色砂礫（φ５cm程の礫、黒色粘土を含む。固くしまる）
14　濁暗灰褐色細砂（わずかに粗砂含む）
15　灰褐色細砂混じりシルト
16　黄灰色砂混じり粘土
17　濁褐灰色砂質土
18　暗灰褐色中砂（φ３cm程の礫が混じる）
19　暗灰褐色シルト混じり中砂
20　灰色シルト混じり細砂
21　暗褐灰色砂礫（φ５～10cm程の礫が混じる）
22　暗褐灰色細砂混じり粘質土
23　暗灰色礫混じり中砂（φ５cm程の礫とφ３cm～拳大の風化礫を含む）
24　黒灰色礫混じり中砂（φ１～３cm程の礫の密度が高く、拳大のものも若干含む）
25　暗灰褐色砂（21層の礫を含まないかんじの土）
26　暗褐色砂礫混じりシルト（５～10cm程の礫がかなり密。土器含む）
27　暗褐色礫混じり粗砂質土（φ５cm～拳大の礫、土器を含む）
28　灰褐色細砂混じりシルト
29　暗灰褐色礫混じり細砂（φ５cm程度の礫）
30　褐灰色礫混じり細砂（φ５cm程度の礫）
31　灰色細砂
32　灰色礫混じり細砂（φ５cm程度の礫）
33　灰色細砂
34　暗灰褐色細砂（10層より褐色味は弱い。φ２cm程の礫を若干含む）
35　灰褐色細砂（28層より褐色味は強い。φ２cm程の礫を若干含む）
36　灰褐色礫混じり細砂質土（φ５cm程の礫。９層より褐色味弱。土器を含む）
37　灰色粘質シルト（φ３cm程の礫を若干含む）
38　灰色細砂質土（37層より暗い）
39　暗灰色礫混じり細砂（φ３cm～拳大の礫）
40　灰色粘質シルト（37層より暗い）
41　黒褐色中砂
42　黒褐色礫混じり中砂（拳大の礫）
43　暗灰褐色砂礫混じり粘質土（拳大の礫、土器を含む）
44　暗灰褐色砂質土（φ３～５cm程の礫含む）
45　黒褐色砂混じり粘質土
46　暗灰褐色礫混じり砂質土（φ３～５cm程の礫）
47　暗灰褐色砂混じりシルト（礫わずかに含む。若干粘りあり）
48　黒褐灰色粗砂質土（φ３～５cm程の礫含む）
49　暗褐色礫混じり中砂（φ３cm～拳大の礫が混じる）

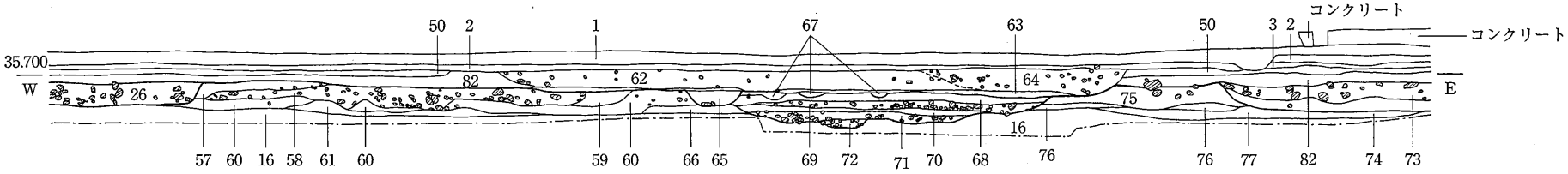
34～40　SD211
41・42　SD214
44～48　SD201

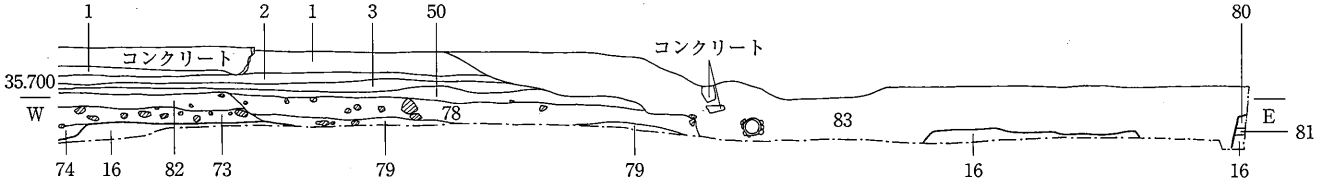
第９図　Ⅱ区土層断面図(1)（1/40）

Ⅱ区西壁



Ⅱ区北壁

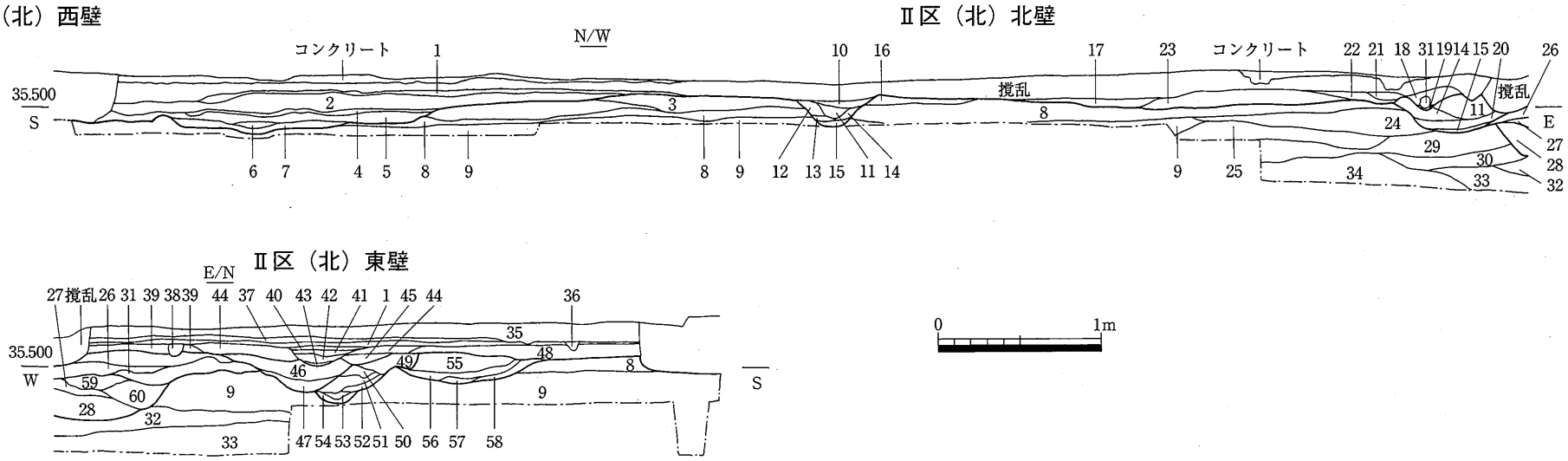




50　灰褐色砂質土（Mn粒含む）
51　褐灰色粗砂混じりシルト（φ３～５cm程の礫を含む。土器含む）
52　黄灰色砂混じりシルト（わずかに小礫を含む）
53　暗灰褐色細砂（小礫含む）
54　暗灰色細砂（土器を含む）
55　灰色粗砂混じりシルト（小礫、土器を若干含む）
56　暗褐色砂混じりシルト（26層と似ているが礫混入はなし）
57　暗褐灰色粗砂混じりシルト
58　褐灰色砂礫混じりシルト（φ３cm～拳大の礫が多量に混じる）
59　褐灰色砂礫混じりシルト（礫の密度が低く、大きさはφ５cm程度）
60　褐灰色細砂質土（59層より明るい）
61　灰褐色細砂質土
62　暗褐灰色砂質土（所々にφ３cm程度の礫を含む）
63　黄灰色シルト
64　暗褐灰色礫混じり粗砂質土（φ５cm程度の礫をわりと含む）
65　褐灰色粘質土（φ３～５cmの礫を２～３含む）
66　濁赤褐色中砂質土
67　灰褐色粗砂混じり粘質土
68　灰褐色細砂質土（67層より褐色が強い）
69　褐灰色礫混じり細砂（φ５cm程度の礫が混じる）
70　黒灰色粗砂混じり粘質土（φ３～５cm程度の礫を若干含む）
71　暗灰色礫混じり粗砂（φ３～９cmの礫が混じる）
72　灰色砂礫（φ２～10cmの礫が混じる。密度が高い）
73　褐灰色礫混じり細砂質土（φ３cm～拳大の礫が混じる）
74　黄灰色シルト質土（φ４cmの礫を1個含む）
75　灰褐色砂質土
76　灰黄色シルト
77　灰色粗～細砂
78　灰褐色砂混じりシルト（φ２cm～拳大の礫が混じる）
79　暗褐灰色中細砂
80　灰褐色砂質土（黒褐色砂質土がブロック状に混じる）
81　灰褐色砂質土
82　褐灰色粗砂混じりシルト（φ３～５cm程の礫を含む）
83　撹乱

26・51～56　SD210

第10図　Ⅱ区土層断面図(2)（1/40）

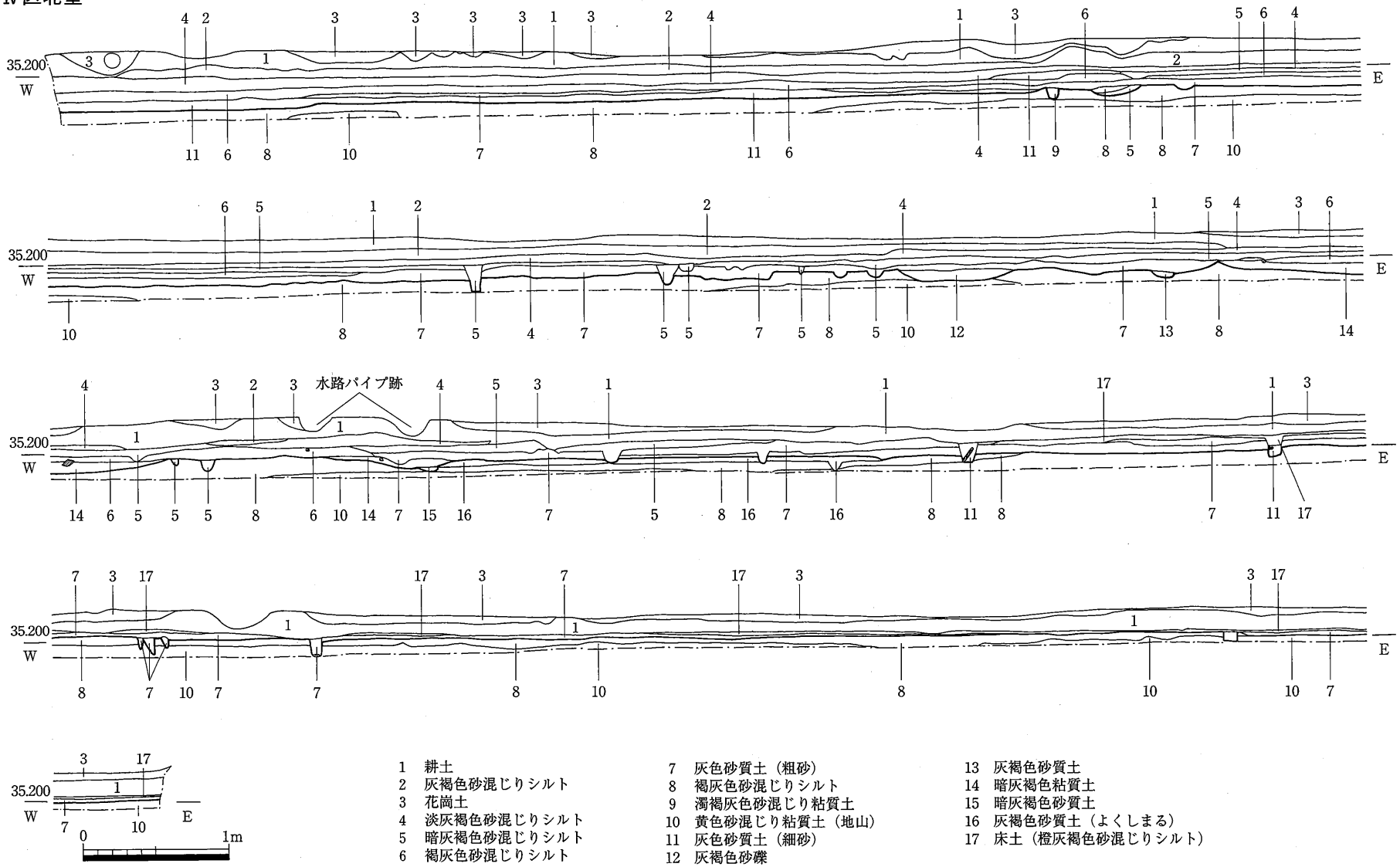


1　橙灰褐色砂混じりシルト（床土）
2　にぶい褐色砂礫混じりシルト（拳大の礫・土器片を含む）
3　褐灰色シルト混じり細砂（φ３cmの礫を含む）
4　青灰色細砂混じりシルト（φ３cmの礫を若干含む。土器片を含む）
5　褐灰色細砂混じりシルト（土器片を含む）
6　灰褐色砂礫混じり粘質シルト
7　黒褐色粘質シルト（土器片を含む）
8　明褐色細砂混じりシルト
9　橙灰色砂混じり粘質シルト
10　暗褐灰色砂混じりシルト（φ２cmの礫を若干含む）
11　灰褐色細砂混じりシルト
12　褐灰色細砂混じりシルト
13　灰橙褐色礫混じりシルト（φ３cmの礫が混じる）
14　にぶい橙色細砂混じりシルト
15　灰褐色シルト混じり細砂（φ２cmの礫を若干含む）
16　褐灰色シルト混じり細砂（３層と同じ）
17　褐灰色シルト混じり細砂（３層と同じ。φ８cmの礫を若干含む）
18　暗灰褐色砂混じりシルト
19　黒褐色シルト混じり砂礫
20　褐灰色砂質土
21　黒褐色砂混じりシルト
22　灰白色細砂混じりシルト（土器片を含む）
23　褐灰色シルト混じり砂礫（φ３～５cmの礫が混じる）
24　灰褐色シルト混じり中砂
25　褐灰色シルト混じり中砂（24層より砂の密度が高い）
26　褐灰色細砂（橙灰色粗砂が混じる）
27　黄灰褐色中砂
28　黄灰色細砂（黒褐色の粗砂が混じり、ラミナ状に堆積）
29　黒褐色礫混じり粗砂（φ５cm～拳大の黄褐色礫が混じる）
30　灰白色細砂
31　灰白色細砂混じりシルト
32　灰黄色砂礫（黄橙色の拳大の礫が多量に混じる）
33　黒褐色礫混じり粗砂（29層と同じ。29層より拳大の礫が多く混じる）
34　灰黄色礫混じり細砂（29層と同じ礫が混じる）
35　黒褐色砂混じり粘質土
36　淡黄灰色シルト
37　灰白色砂混じり粘質土
38　淡黄灰色シルト（36層と同じ）
39　褐灰色砂混じり粘質シルト
40　暗褐灰色砂混じりシルト
41　灰褐色砂混じりシルト
42　暗褐灰色シルト混じり砂質土（土器片を含む）
43　濁灰褐色粘質シルト
44　褐灰色砂混じりシルト
45　暗褐灰色砂質土（小礫を若干含む）
46　黒褐色砂混じりシルト（φ４cmの風化した礫が若干含まれる）
47　褐灰色シルト混じり砂質土（小礫を若干含む）
48　褐灰色砂混じり粘質シルト（39層と同じ）
49　淡褐灰色砂質土
50　暗灰褐色砂混じりシルト
51　褐灰色細砂混じりシルト
52　灰褐色シルト混じり細砂（拳大の礫をわずかに含む）
53　暗灰褐色細砂混じり粘質土
54　暗灰色砂（ゆるい粘土と砂の混合）
55　暗灰褐色砂質土（粗砂礫を若干含む）
56　淡褐灰色細砂（黒褐色粗砂を若干含む）
57　淡灰褐色砂混じり粘質シルト
58　暗灰褐色砂混じり粘質シルト
59　褐灰色シルト混じり砂質土
60　黒褐色粗砂礫（黄褐色小礫の密度が高い）

6・7　SD218
8・9　ベース
10～15・20　SD219
27・28・31・59・60　SD211
49～54　SD205

第11図　Ⅱ区土層断面図(3)（1/40）

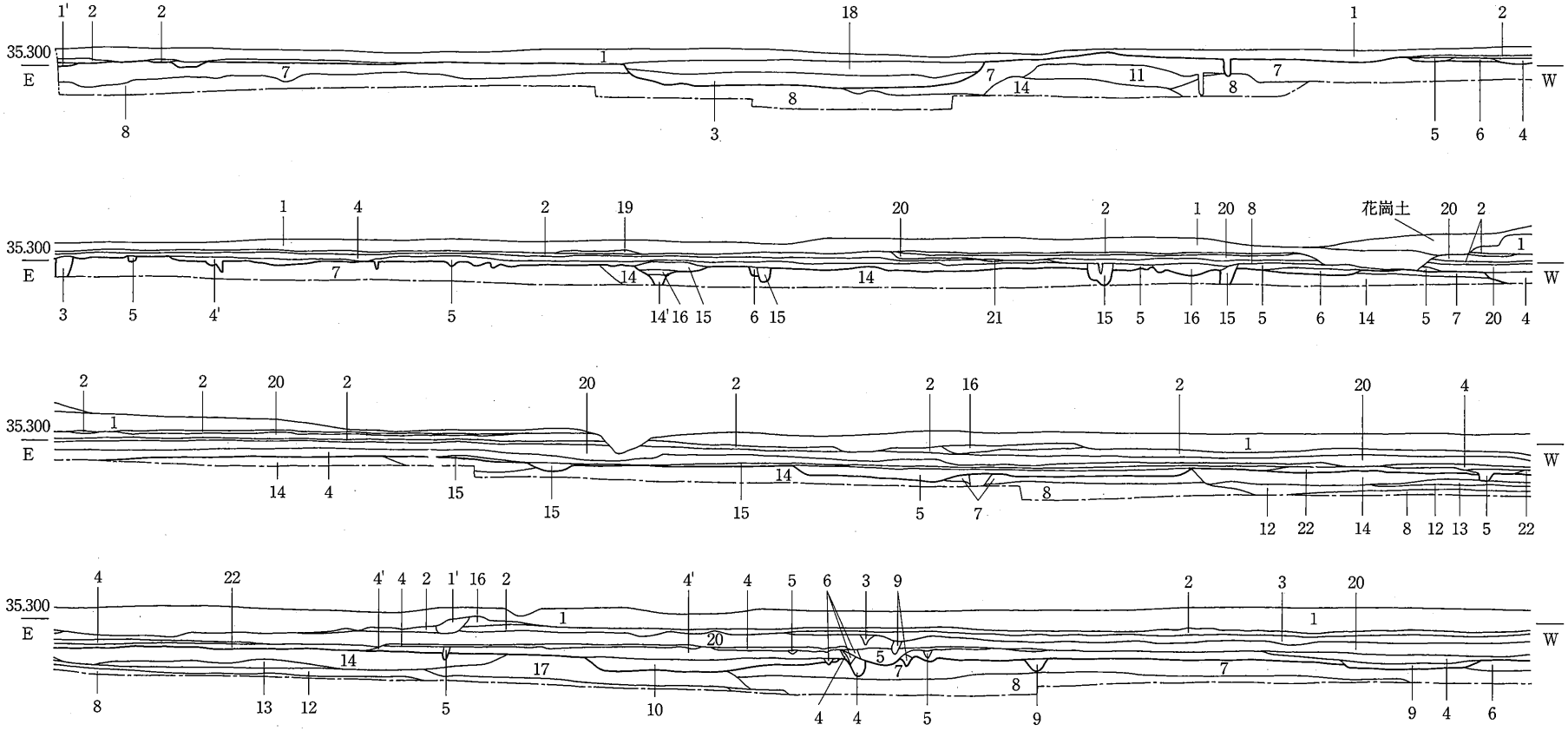
Ⅲ・Ⅳ区北壁

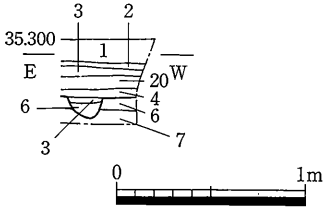


1　耕土
2　灰褐色砂混じりシルト
3　花崗土
4　淡灰褐色砂混じりシルト
5　暗灰褐色砂混じりシルト
6　褐灰色砂混じりシルト
7　灰色砂質土（粗砂）
8　褐灰色砂混じりシルト
9　濁褐灰色砂混じり粘質土
10　黄色砂混じり粘質土（地山）
11　灰色砂質土（細砂）
12　灰褐色砂礫
13　灰褐色砂質土
14　暗灰褐色粘質土
15　暗灰褐色砂質土
16　灰褐色砂質土（よくしまる）
17　床土（橙灰褐色砂混じりシルト）

第12図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(1)（1/40）

Ⅲ・Ⅳ区南壁

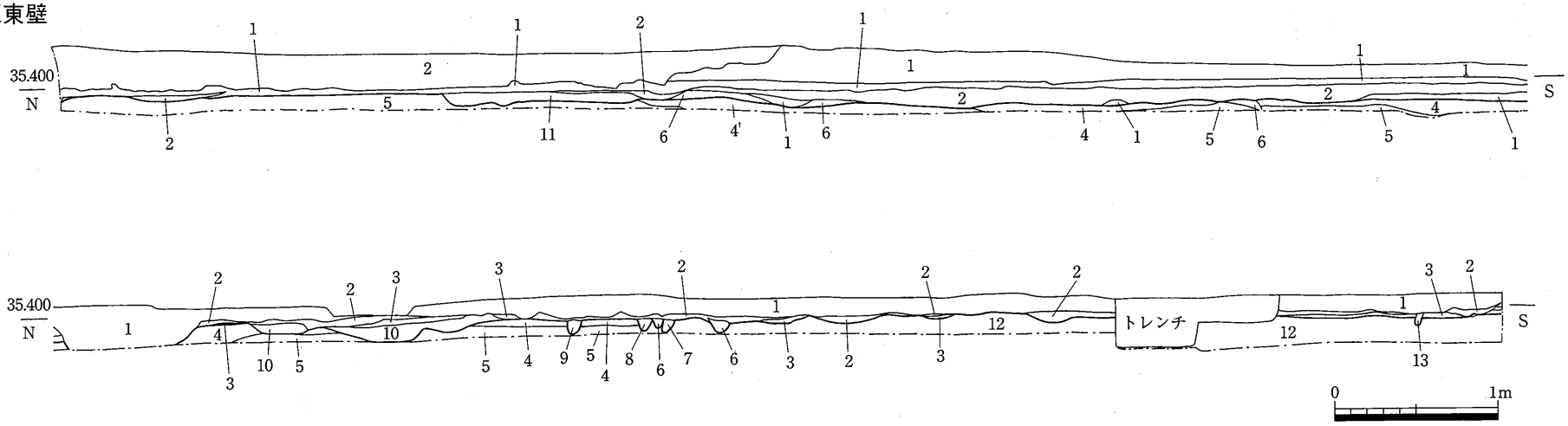




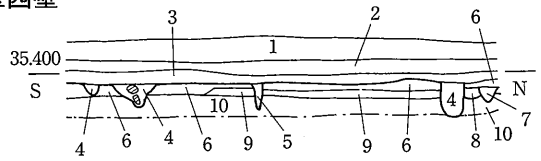
1　耕土
1'　耕土にFe含む
2　床土（橙灰褐色砂混じりシルト）
3　灰褐色砂混じりシルト（ベースブロック混）
4　淡灰褐色砂混じりシルト
4'　淡褐灰色砂混じりシルト
5　暗灰褐色砂混じりシルト
6　灰色砂混じりシルト
7　黄灰色砂混じり粘土
8　橙灰褐色砂混じりシルト（7層より砂質強い）（ベース）
9　灰褐色砂混じりシルト（黄色粘土ブロック状に含む）
10　褐灰色砂混じりシルト（7層より砂質強い）
11　灰褐色砂質土（よく締まる）
12　暗灰色粘質土
13　灰褐色細砂（灰色の中にFe分含む）
14　灰青色砂質土（粗砂）
14'　灰青色砂質土（青みがかかっている）
15　暗褐灰色砂混じりシルト
16　黒褐色砂混じりシルト
17　灰褐色砂混じりシルト（3層より砂質強い）
18　明褐灰色シルト（ベースブロック混）
19　明灰色砂質土（旧耕土）
20　明黄灰色砂質土（旧耕土）
21　黄灰色シルト（Mn混）
22　橙褐色砂質土

第13図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(2)（1/40）

Ⅲ区東壁



Ⅳ区西壁



Ⅲ区　東壁
1　耕作土
2　整地土（花崗土）
3　床土
4　灰褐色砂質土（細砂）
4'　灰褐色砂質土（粗砂）
5　灰橙褐色粘土（黄色砂混じり粘土）
6　灰褐色砂混じりシルト
7　灰褐色砂混じりシルト
（炭・焼土のようなものを含む）
8　暗灰褐色砂混じりシルト
9　灰褐色砂混じりシルト
（黄色粘土ブロック状に含む）
10　灰色砂礫（SD301～303）
11　灰褐色粘質土（炭化物のようなものを含む）
12　灰橙褐色粘土（黄色砂混じり粘土）
13　灰色砂混じりシルト

Ⅳ区　西壁
1　耕土
2　床土（灰褐色砂混じりシルト）
3　床土（淡灰褐色砂混じり弱粘質シルト）
4　暗灰色砂混じり粘質シルト（炭化物をわずかに含む。地山ブロック混入）
5　灰色粘土
6　灰色砂混じりシルト（わずかに鉄分ぽい赤みが見える）
7　暗灰褐色砂混じり粘質シルト（４層と比べると色目は明るい）
8　暗灰褐色砂混じり粘質シルト（７層と比べ、混入の砂目は細かく粘質が強い）
9　濁褐灰色砂混じり粘質土
10　黄色砂混じり粘土（地山）

第14図　Ⅲ・Ⅳ区土層断面図(3)（1/40）

ものがある。

iii　東壁土層

Ⅲ区東壁で作成した土層断面図である。厚さ15～40cm程度の耕作土・床土の下部で灰橙褐色粘土のベース土を検出した。地表面は東側ほど高いが、遺構面は概ね水平である。遺構は土層観察からすべて灰褐色砂質土から掘り込まれている。

iv　西壁土層

第１図Ⅳ区西壁の部分で作成した断面図である。厚さ30cmの耕作土・床土の下部に厚さ約５cmの近世の包含層と考えられる灰色・暗灰砂混粘質シルトが堆積し、その下部で黄色砂混粘土のベース土を検出した。ピット状の遺構が近世の包含層の上面から掘り込まれるが、これらは近世以降の遺構と考えられる。

第２節　遺構・遺物

１．縄文時代の遺構・遺物

Ⅰ区SD105（第15図）

Ⅰ区南西部で検出した溝である。SR11を切り込んでいる。遺構の重複関係により、弥生時代中期初頭が想定できるSD101より古く、SD106・SR11より新しい。幅90cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は概ね黒褐色砂混シルト、最下層に黒灰色粗砂が堆積する。南東から北西方向へ流れ、SD106またはSD105がⅡ区で検出したSD218へ続く可能性が高い。埋土中からは縄文土器小片が出土した。

１・２は縄文土器である。１は深鉢口縁部で、口縁端部内面には２条の沈線を施す。小片で全体の形態は明らかではないが、波状口縁を呈すると考えられる。２は底部で、底部と体部の境に底を充填した痕跡が残る。全体に摩滅が著しい。

縄文土器はSR11からの混入の可能性もあろうが、遺構内からは縄文土器しか出土していないので、遺構の時期については縄文時代としておく。

Ⅰ区SD106（第15図）

Ⅰ区南西部で検出した溝である。SR11の上面から切り込む。遺構の重複関係により弥生時代前期と考えられるSD101や、SD105より古く、SR11より新しい。幅120cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は暗褐色シルトである。SD105の北東または南西側で重複しながら南東から北西へ流れ、SD106またはSD105がⅡ区SD218へ連続する可能性がある。埋土中からは縄文土器の小破片が出土した。

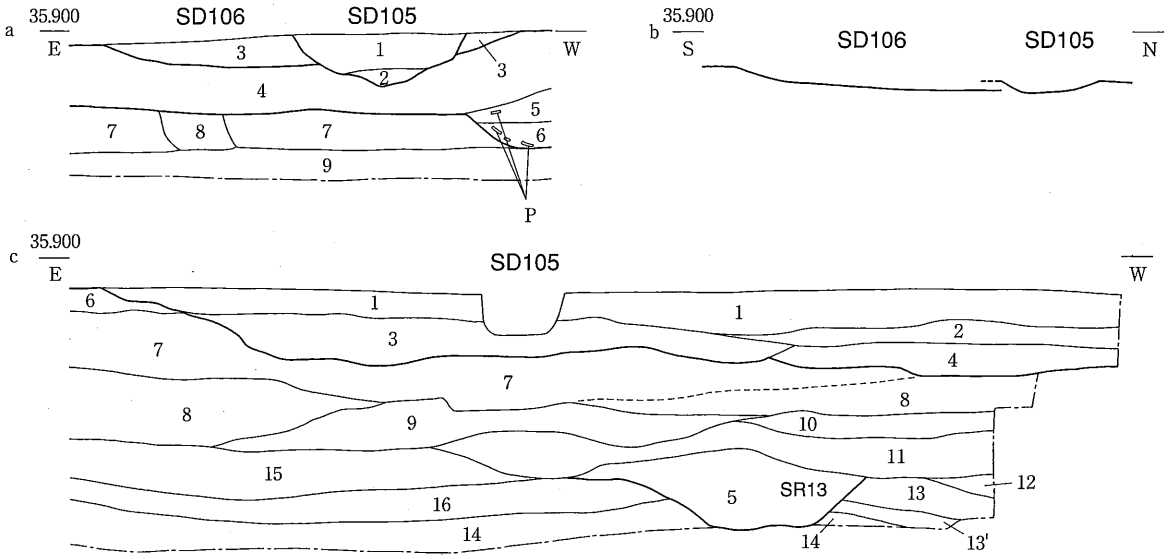
遺構の時期については、SD105同様、埋土中から出土した縄文土器はSR11からの混入の可能性もあろうが、遺構内からは縄文土器しか出土していないので、遺構の時期は縄文時代としておく。

Ⅱ区SD215・216・217（第15図）

Ⅱ区中央付近を南東から北西へ向く溝である。遺構の重複関係により弥生時代中期が想定できるSD201・205より古い。検出長はいずれも４m程度、SD215は幅40cm、深さ６cm、SD216は幅20cm、深さ２cm、SD217は幅33cm、深さ５cmを測り、埋土はいずれも淡灰褐色細砂、断面形状は浅い皿状である。遺構の遺存状態は非常に悪く、上面はかなり削平を受けていると考えられる。SD215の埋土中からはサヌカイト製石錐が出土したほかは小破片が出土しただけであった。

５はSD215から出土した遺物で、サヌカイト製石錐の未製品と考えられる。下部は欠損し、上部は加工が不十分である。

遺構の時期は、SD218と同様SD201・205の下部から検出したことから縄文時代としておく。

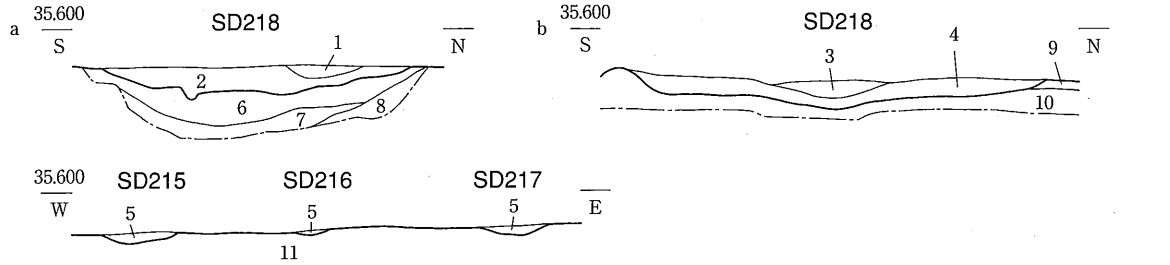


1 黒褐色砂混シルト（よくしまる）
2 黒灰色粗砂（小礫も混じる）
3 暗褐色シルト（わずかに砂を含む）
4 黄色砂混じりシルト（小礫と白色砂粒をわずかに含む。よくしまる）
5 黄灰褐色砂混じり弱粘質シルト
6 灰黄色砂混じり弱粘質シルト
7 灰黄色細砂混じり弱粘質シルト（6層より淡く、青色が強い）
8 暗灰色中砂
9 青灰色細砂混じりシルト

1・2 SD105
3 SD106

1 黒褐灰色砂混じり粘質シルト
2 黒灰色粗砂混じり弱粘質シルト（1層より粗砂の混入が高く、しまりがゆるい）
3 暗灰色砂混じりシルト
4 暗灰色砂礫（細砂～φ10cmの礫の層。硬くしまる）
5 濁暗褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
6 暗灰色砂混じりシルト
7 黄灰色細砂混じり粘質シルト
8 青灰黄色細・中砂
9 8層と10層がブロック状に混じり合う層
10 黒灰色中砂
11 黒灰色中砂～φ10cmの礫（砂岩・花崗岩の円礫が多い）
12 淡灰色細砂（淡褐色砂がラミナ状にみえる）
13 灰褐色粗砂（有機物を含む黒く濁ったブロックがみられる）
13' 褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
14 黒色粘土
15 褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
16 黄褐灰色礫混じり中砂

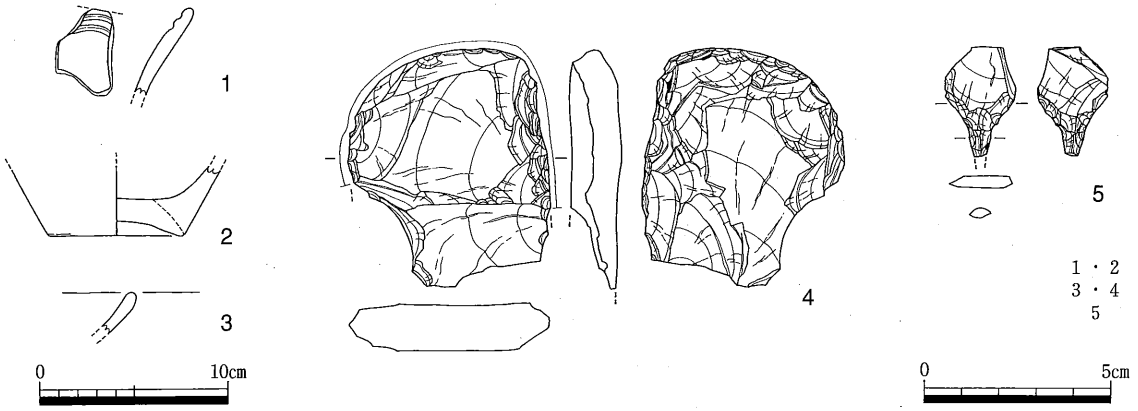
1～4 SD105
5 SR13



1 灰褐色粗砂
2 暗褐灰色砂混じり粘質土
3 灰褐色砂礫混じり粘質シルト
4 黒褐色粘質シルト（土器片を含む）
5 淡灰褐色細砂
6 濁黄灰褐色砂混じりシルト
7 暗灰黄褐色粘土（炭が混じる）
8 灰褐色シルト混じり細砂
9 明褐色細砂混じりシルト
10 橙灰色砂混じり粘質シルト
11 黄褐色細砂混じりシルト

1～4 SD218
5 SD215・216・217
6～11 ベース

0 1m



1・2 SD105
3・4 SD218
5 SD215

第15図　Ⅰ区SD105・106・Ⅱ区SD215～218断面図(1/40)、Ⅰ区SD105・Ⅱ区SD215・218出土遺物(1/4・1/2)

Ⅱ区SD218（第15図）

Ⅱ区北半部付近で検出した溝である。やや蛇行気味に東から西へ流れる。遺構の重複関係により、弥生時代中期中頃と考えられるⅡ区SD201・205・211より古いことがわかる。幅160cm、深さ15cm、埋土は概ね暗褐灰色砂混粘質土、黒褐色粘質シルト、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土中からは縄文土器片、打製石斧片が出土した。この溝はⅠ区SD105・106から連続する可能性が高い。

3は縄文土器口縁部小片である。摩滅が著しい。4はサヌカイト製打製石斧である。上部から側縁部にかけて敲打痕が残る。

遺構の時期は縄文時代と考えられる。

Ⅰ区SR11（第16・17図）

Ⅰ区南西部で検出した自然河川である。流路の東側のラインは検出したが、西側のラインは未検出で、Ⅰ区北部への連続性も不明瞭である。深さ70cm、幅は土層断面から8.44mを測り、断面形状は浅い皿型を呈する。上層・中層・下層に分けて掘り下げた。上層は概ね黄灰色砂混シルト、中層は暗褐灰色弱粘質砂混シルト、黄灰褐色砂混粘質シルト、下層は灰黄色砂混弱粘質シルトである。緩い落ち込み状の遺構を呈する。埋土中からは縄文土器が多く出土した。縄文土器はおもに中層より下部から出土した。

6～16は下層から出土した遺物である。6～14は縄文土器で、6～9は内外面をヘラミガキで調整する。10～14は内面をヘラミガキ、外面はヘラ描きにより文様を施し、その内側に縄文を施すものである。12は突起状にした口縁部の小片で、端部を内側に折り曲げ、その頂部に刻目を施す。外面にはヘラ描き沈線による文様と縄文が観察できる。15・16はサヌカイト製凹基式石鏃である。

17～35は中層から出土した遺物である。17は浅鉢の口縁部である。口縁端部は内側へ屈曲させ波状口縁とし、口縁端部の最も高い部分には円孔を施す。体部にはヘラ描きによる文様を施す。18～27・29～31は口縁部小片である。18・20～27は外面にヘラ描きによる文様を施し、口縁端部を波状にする。21～24ではヘラ描きにより区画された部分に縄文が観察できる。29は端部小片で、筒状にする。28は把手状の小片で最も高い部分に列点を施す。32～34は深鉢である。外面にはヘラ描き沈線と縄文による文様を施す。32・34は口縁部で、32は端部に刻目、34はヘラ描き沈線による文様を施す。35はサヌカイト製の凹基式石鏃である。

36～40は上層から出土した遺物である。36～39は口縁端部である。36は内側へ強く屈曲させ、37～39は端部を波状にする。外面はヘラ描き沈線と縄文による文様を施す。40は底部である。

流路の時期は出土遺物から縄文時代後期後半と考えられる。

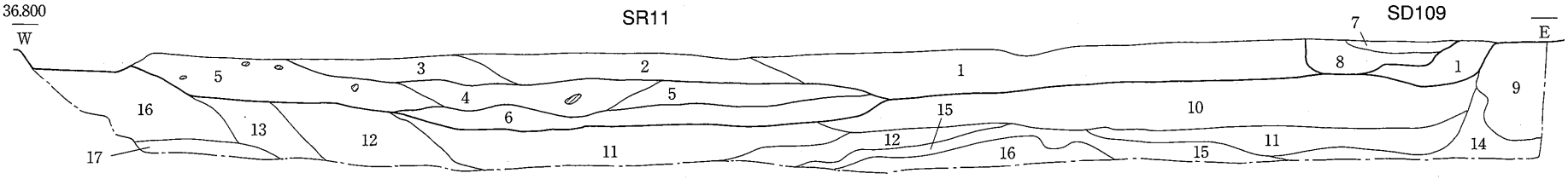
Ⅰ区SR12（第18・19図）

Ⅰ区中央付近から検出された自然河川跡である。遺構を切り込むベース土は細・粗砂層や砂礫層が互層に堆積しており、河川の氾濫源であったことが考えられる。南東から北西へ流れるが、調査区北端部付近で西側へ大きく屈曲する。幅3.4m、深さ46～62cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は暗褐灰色・褐灰色粗砂混シルト、最下層には黒灰褐色粗砂が堆積する。調査区南側では下層の砂層の堆積が厚く一定量の流量があったと考えられるが、北部付近は堆積状況から緩い落ち込み状の遺構であったことが考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅰ区SR13（第18・19図）

Ⅰ区北西部で検出した南から北へ流れる自然河川跡である。SR12の下部で検出した。Ⅰ区南部では検出できず、全容は不明である。幅4.6m、深さ1.0mで、断面形状はボウル状である。埋土は濁暗褐灰色砂礫が大半を占め、流路が急激に埋没した様子が窺える。埋土中からは縄文土器・サヌカイト小片が出土した。

遺構の時期は出土遺物から縄文時代であったと考えられる。

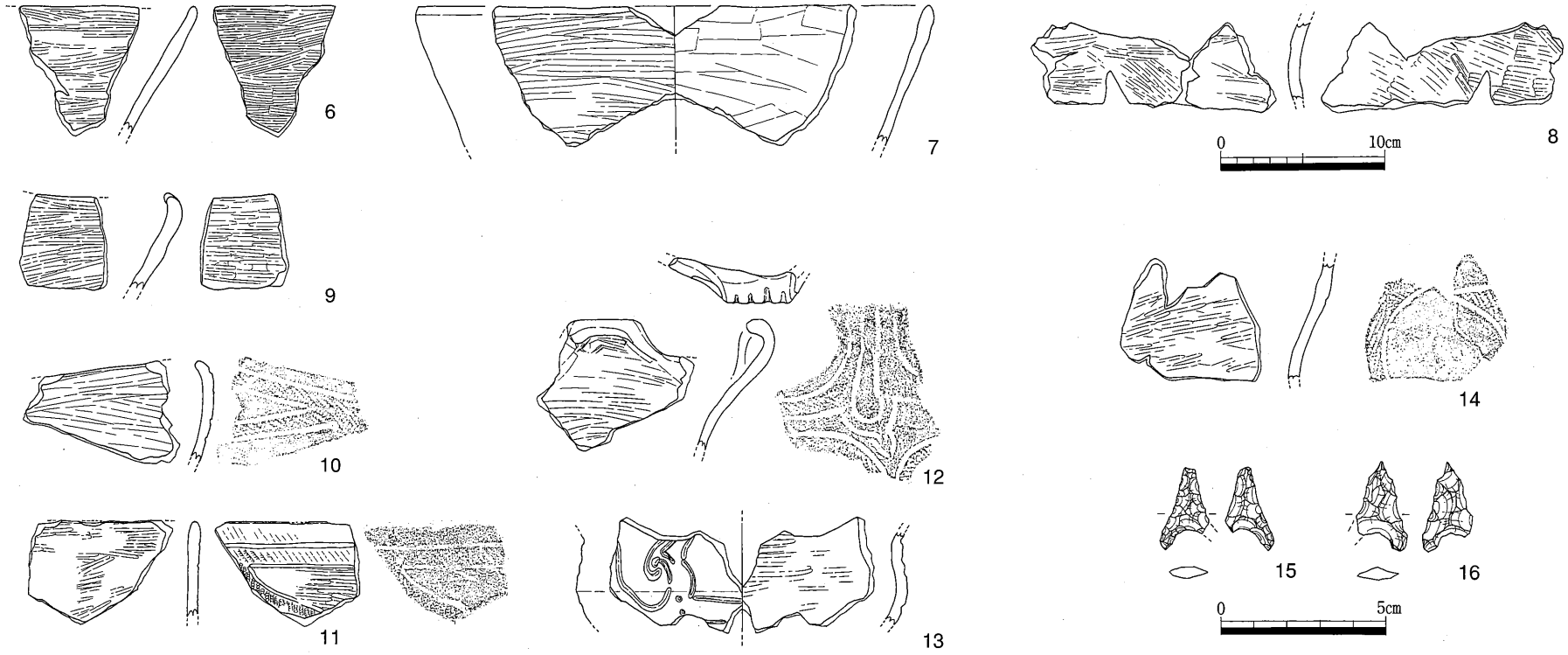


1　黄色砂混じりシルト（小礫と白色砂粒をわずかに含む）
2　黄灰色砂混じりシルト（小礫わずかに含む）
3　黄灰色砂混じりシルト（小礫わずかに含む。
　２層より砂の混入が多い）
4　暗褐灰色弱粘質砂混じりシルト（礫をわずかに含む。
　底部に縄文土器を多く含む）
5　黄灰褐色砂混じり弱粘質シルト
6　灰黄色砂混じり弱粘質シルト
7　灰褐色砂混じりシルト（しまりゆるい）
8　暗黄灰色砂混じりシルト（よくしまる）
9　褐灰色粗砂混じりシルト
　（しまりゆるい。砂質）
10　灰黄色細砂混じり弱粘質シルト
11　青灰色細砂混じりシルト
12　青灰色多砂混じりシルト
　（11層より砂目粗い）
13　暗褐色砂
14　黄色シルト（弱粘性）
15　暗灰色礫混じり細砂
　（φ５～10cm）
16　暗褐色砂礫（φ５～10cm）
17　黄灰色粘質シルト

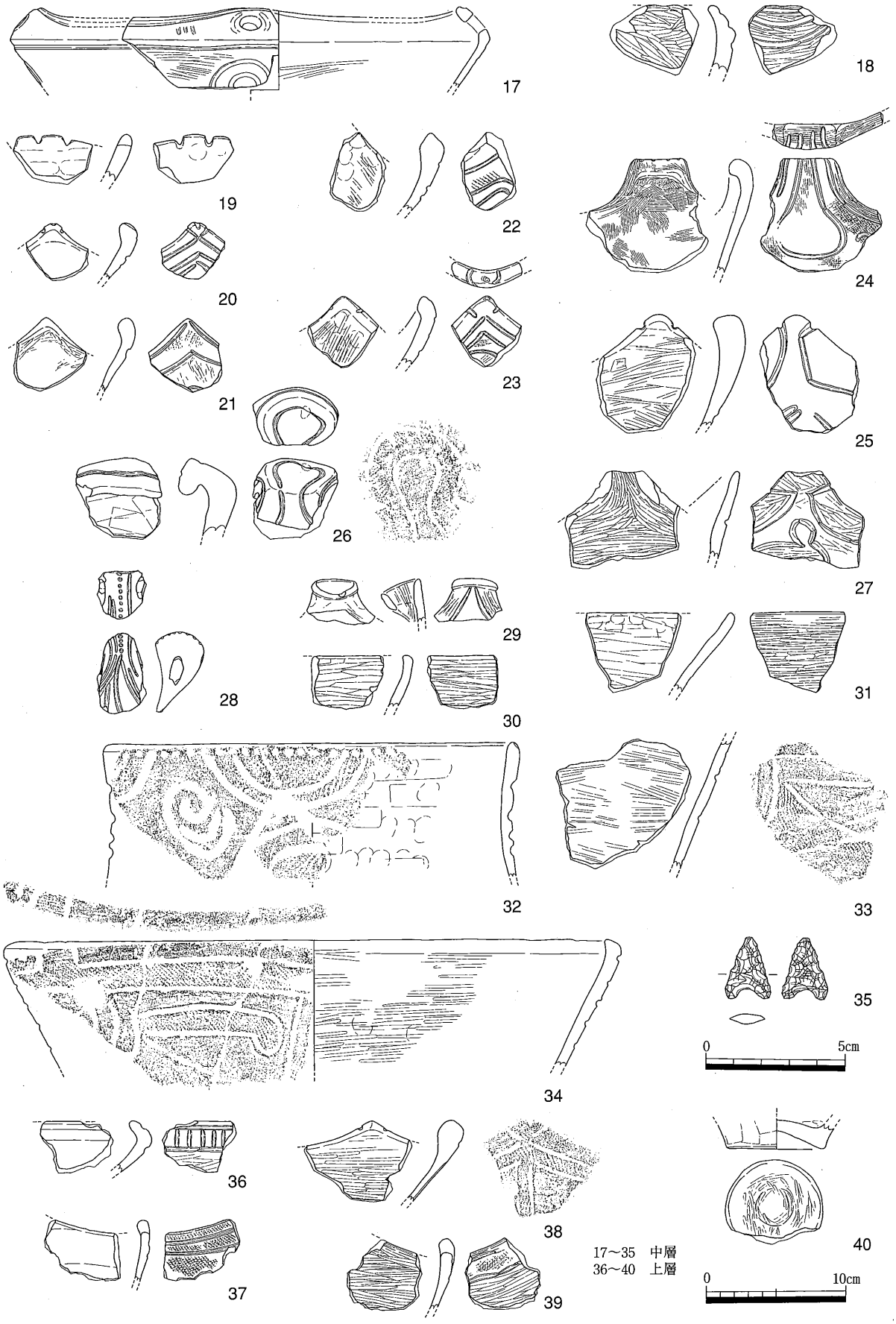
1～3　SR11上層
4・5　SR11中層
6　SR11下層
7・8　SD109

▨ 石

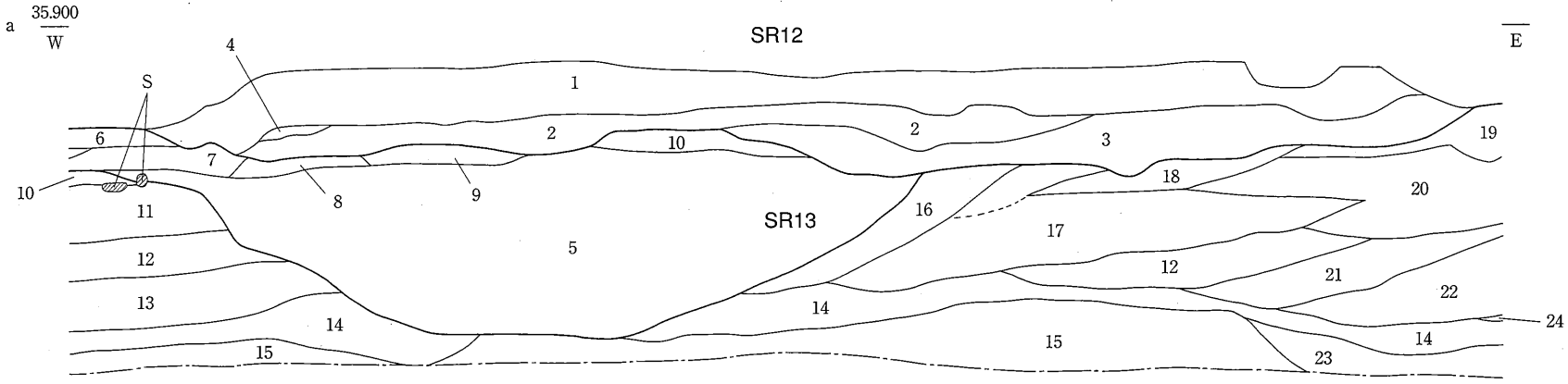
0　1m



第16図　Ⅰ区SR11断面図（1/40）、SR11下層出土遺物（1/4・1/2）

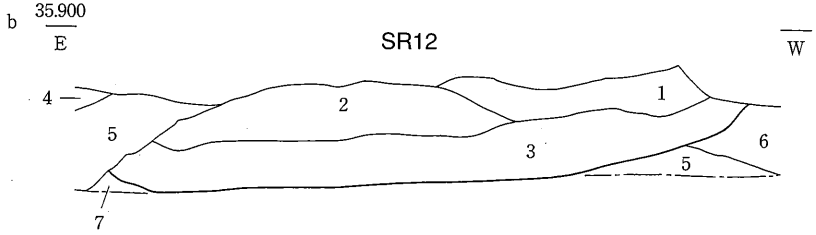


第17図　Ⅰ区SR11出土遺物（1/4・1/2）



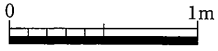
1　暗褐灰色多粗砂シルト（よくしまる）
2　褐灰色粗砂シルト（１層よりしまりがゆるい）
3　黒灰褐色砂（粗砂と細砂の互層）
4　１層と２層の混合
5　濁暗褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
6　褐灰色粗砂混じり細砂（よくしまる）
7　暗褐灰色中砂（２層より色調は明るく、砂っぽい）
8　褐灰色多粗砂シルト（φ５cmの黄色砂岩礫を含む）
9　８層と２層がブロック状に混じり合う
10　淡褐色細砂と褐灰色中砂の互層
11　淡褐色細砂
12　淡灰色細砂（淡褐色砂がラミナ状にみえる）
13　灰褐色粗砂（有機物を含む黒く濁ったブロックがみられる）
14　褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
15　黒灰色粘性砂質土
16　灰黄色礫混じり中砂（灰色中砂がラミナ状に堆積）
17　暗褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂礫の層）
18　青灰黄色細砂
19　青灰黄色粗砂礫混じり細砂
20　暗褐灰色礫混じり粗砂
21　暗褐色粗砂（黄灰色細砂がラミナ状に混入）
22　淡灰色粗砂（黄褐色粗砂がラミナ状に混入）
23　黄褐灰色礫混じり中砂
24　灰黄色細砂（橙色細砂がラミナ状に混入）

1～4　SR12
5　SR13

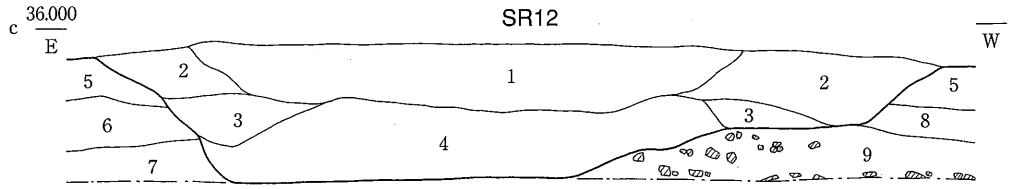


1　暗褐灰色多粗砂シルト（よくしまる）
2　褐灰色粗砂シルト（１層より
　しまりがゆるい）
3　黒灰褐色砂（粗砂と細砂の互層）
4　黄灰色粘質シルト
5　青灰黄色細・中砂
6　黄灰色細砂混じり粘質シルト
7　黒灰色中砂

1～3　SR12

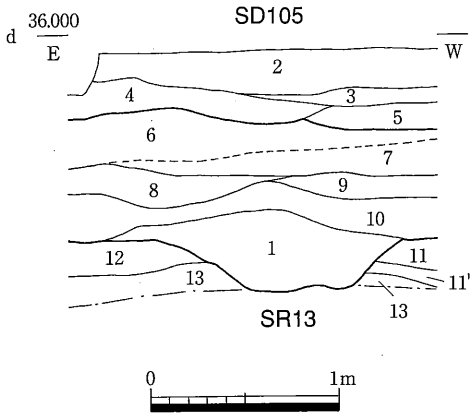


第18図　Ⅰ区SR12・13断面図(1)（1/40）



1　暗褐灰色多粗砂シルト（よくしまる）
2　褐灰色粗砂シルト（1層よりしまりがゆるい）
3　6層と2層の混じり合った層
4　黒灰褐色砂（粗砂と細砂の互層）
5　黄褐色砂混じりシルト
6　黄色シルト（弱粘性）
7　青灰色シルト（弱粘性6層のグライ化）
8　青灰色砂混じり弱粘質シルト
9　暗褐色砂礫（中砂に粗砂～φ5cmの礫が混じる黒褐色粗砂と褐色中砂のラミナ）

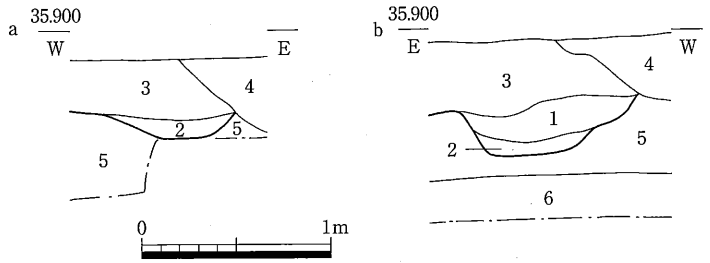
1～4　SR12



1　濁暗褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層）
2　黒褐灰色砂混じり粘質シルト
3　黒灰色粗砂混じり弱粘質シルト（2層より粗砂の混入が高く、しまりがゆるい）
4　暗灰色砂混じりシルト
5　暗灰色砂礫（細砂～φ10cmの礫の層。硬くしまる）
6　黄灰色細砂混じり粘質シルト
7　青灰黄色細・中砂
8　7層と9層がブロック状に混じり合う層
9　黒灰色中砂
10　黒灰色中砂～φ10cmの礫（砂岩・花崗岩の円礫が多い）
11　灰褐色粗砂（有機物を含む黒く濁ったブロックがみられる）
11'　褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂岩礫の層。褐灰色砂礫（粗砂と黄色砂礫の層）より砂岩礫少ない）
12　黄褐灰色礫混じり中砂
13　黒色粘土

1　SR13
2～5　SD105

第19図　Ⅰ区SR12・13断面図(2)（1/40）



1　暗褐色粗砂混じりシルト
2　暗褐色粗砂混じりシルト（礫が混じる）
3　暗灰褐色礫混じり砂質シルト（風化した花崗岩混じる）
4　淡褐灰色砂混じり砂質シルト（わずかにφ5cmまでの礫を含む）
5　黄灰色粘質シルト
6　灰褐色中砂

1・2　SD108
3・4　東大東川氾濫源
5・6　ベース

第20図　Ⅰ区SD108断面図（1/40）

Ⅰ区SD108（第20図）

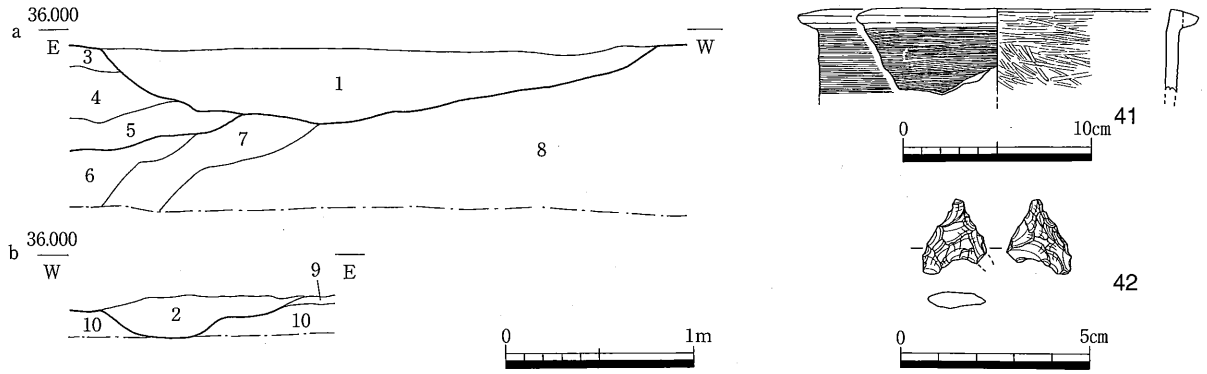
Ⅰ区東端付近で検出した溝である。東大東川の氾濫源にほぼ重なる位置で、SD108の東肩および南側は東大東川の氾濫源により消失する。幅94cm以上、深さ28cm、埋土は暗褐色粗砂混シルトである。埋土中からは縄文土器の小片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により縄文時代と考えられる。

2．弥生時代中期の遺構・遺物

Ⅰ区SD101（第21図）

Ⅰ区西部を概ね南から北へ流れる溝である。ベース土は砂層や砂礫層により構成されており、河川氾濫源の上面から掘削されたことがわかる。SR11・12、SD105・106の上面から掘り込み、SA11、SX101、SK106に掘り込まれる。幅1.1～2.9m、深さ20～40cmを測り、断面形状は浅い皿状である。埋土は黄褐色シルト～粗砂または淡褐色～明褐色砂（わずかに5cm大の礫を含む。粗砂と細砂のラミナ）で、一定量の水量を保った様子が窺える。溝の上部が削平されて下部のみが残ったものの可能性もある。埋土中からは弥生土器甕片やサヌカイ



1　黄褐色シルト～粗砂
2　淡褐色～明褐色砂（わずかにφ５cmの礫を含む。粗砂と細砂のラミナ）
3　暗灰褐色砂混じりシルト（砂の混入は少し）
4　黄灰褐色砂混じり弱粘質シルト
5　灰黄色シルト細砂
6　青灰色多砂混じりシルト
7　暗褐色砂（粗砂～細砂）
8　暗褐色砂礫（φ５～10cm）
9　暗灰褐色砂混じりシルト
10　黄灰色細砂混じり粘質シルト

1・2　SD101
4・5　SR11

第21図　Ⅰ区SD101断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

ト片が出土した。

41は弥生土器甕である。逆Ｌ字型口縁を呈し、体部には６～７条１単位の櫛描き沈線文を３単位以上施す。42はサヌカイト製石鏃である。凹基式であるが下部は欠損する。

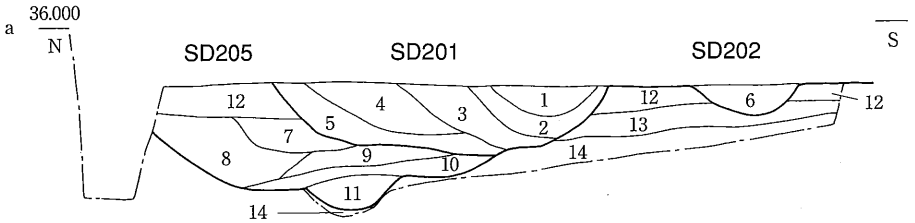
遺構の時期は出土遺物により弥生時代中期初頭と考えられる。

Ⅱ区SD201（第22・23図）

Ⅱ区西部を南西から北東へ流れる溝状遺構である。幅1.00～1.82m、深さ32～45cm、埋土は暗褐灰色・黒褐色シルト・砂・礫混粘質土・砂質土などで、堆積情況から徐々に埋没が進んだ様子が窺える。調査区西端部中央付近からは、西から流れてきたSD205と重複し、土層断面によりSD205よりも新しいことがわかる。埋土中からは28ℓ入りコンテナ１箱分の弥生土器、石器などが出土した。

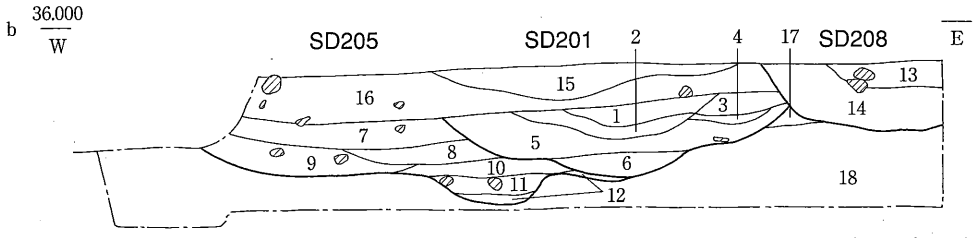
遺物は層位ごとに取り上げた。43～47は第５層から出土した遺物である。43～45は弥生土器壺である。43・44は広口壺で、口縁端部下部を拡張させ、43はそこに斜格子文を描く。44は口縁部内面に列点文を施す。45は直口壺で、頸部に２条以上の貼付突帯を巡らせる。46は体部がバケツ型を呈する甕で、体部は無文、口縁端部は逆Ｌ字型を呈する。47はサヌカイト製打製石斧で、下半部は欠損する。両側縁に抉りが残り、片面には自然面を広く残す。48は第４層から出土した土師器高杯脚部片である。摩滅が著しい。49・50は第３層から出土したサヌカイト製石器である。49は凹基式石鏃、50は石錐である。51は第２層から出土した弥生土器壺体部片である。頸部に押圧突帯を巡らせる。52・53は第１層から出土した遺物である。52は広口壺口縁部小片で、口縁端部を上下にわずかに拡張させ、口縁端部には斜線文を施す。53はサヌカイト製石鏃で、下端部が欠損するが、凹基式の石鏃と考えられる。54～57は層位不明の出土遺物である。54・55は弥生土器で、54は甕である。如意状口縁を呈し、３条のヘラ描沈線を巡らせる。55は鉢で、口縁端部外面に刻目を施し、口縁部直下にも３条の刻目突帯を巡らせる。刻目突帯には２条１組の縦方向の棒状突帯を貼り付ける。56は土師質土器足釜小片である。57はサヌカイト製石鏃で、凹基式である。58はSD201・202・205トレンチから出土した遺物で、弥生土器甕底部である。

出土遺物の時期は43～45・51・52・55が弥生時代中期中頃、46・54が弥生時代前期後半頃、48は古墳時代前期、56は中世のものである。56は混入、48は第３層出土であるが、他の出土遺物が弥生時代中期を中心とするものなので、遺構の時期は弥生時代中期中頃以降とするのが妥当と考えられる。



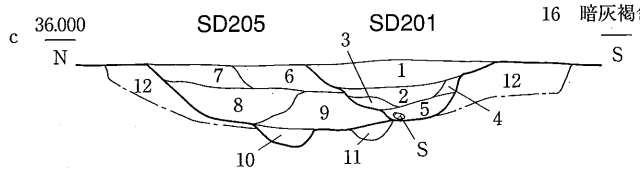
1　黒褐色砂礫混じりシルト
2　暗褐灰色砂混じり粘質土
3　暗褐灰色礫混じり砂質土
4　暗褐灰色シルト混じり砂質土
5　黒灰褐色砂質土
6　灰褐色砂質土（小礫を含む）
7　暗褐灰色砂混じり粘質土（上層）
8　暗褐灰色礫混じり砂質土（拳大の礫）（中層）
9　褐灰色砂（中層）
10　灰色砂礫（φ３～５cm程の礫）（中層）
11　暗灰色砂（ゆるい粘土と砂が混じり合った層）（下層）
12　灰褐色シルト混じり砂礫
13　黄灰色砂質土
14　黄灰色砂混じり粘土

1～5　SD201
6　SD202
7～11　SD205
14　ベース



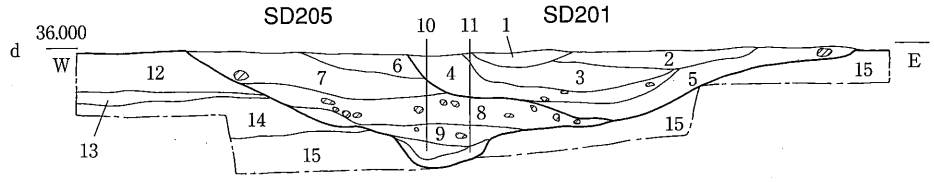
1　暗灰褐色細砂混じり粘質土
2　黒褐色細砂混じり粘質土（１層より弱粘性）
3　灰褐色細砂質土
4　暗灰褐色砂混じりシルト
5　黒褐色細砂質土（φ３cm程の礫をわずかに含む）
6　灰褐色礫混じり砂質土（φ５cm程の礫）
7　暗灰褐色細砂混じりシルト（φ3cm程の礫をわずかに含む）（上層）
8　褐灰色細砂質土（φ３cm程の礫をわずかに含む。土器片含む）（上層）
9　暗灰褐色細砂質土（φ５cm程の礫をわずかに含む。土器片含む）（中層）
10　灰褐色シルト混じり細砂（西肩に若干小礫含む）（中層）
11　暗灰褐色砂礫（ゆるい粘土と砂と小礫の混合土）（下層）
12　灰黄褐色細砂混じりシルト（下層）
13　黒灰褐色細砂混じり粘質土（礫をわずかに含む。土器片多）
14　暗灰褐色礫混じり細砂質土（φ３cm～拳大の礫、土器片を含む）
15　撹乱
16　暗灰褐色細砂質土（φ５cm～拳大の礫をわずかに含む）
17　暗灰色細砂質土
18　黄灰褐色細砂混じりシルト

1～6　SD201
7～12　SD205
13・14　SK208
18　ベース



1　黒褐色砂混じり粘質土
2　暗灰褐色砂質土
3　２層と９層が混じり合った土
4　12層のブロック
5　暗灰色細砂質土
6　暗褐灰色砂混じり粘質土（上層）
7　褐灰色砂礫混じり弱粘質土（上層）
8　暗褐灰色礫混じり砂質土（拳大の礫）（中層）
9　褐灰色砂（中層）
10　暗灰色砂混じり粘土（ゆるい）（下層）
11　暗灰色砂混じり粘土（粘性が強い。SD205下位のピット）
12　黄灰色粘土

1～5　SD201
6～10　SD205
12　ベース



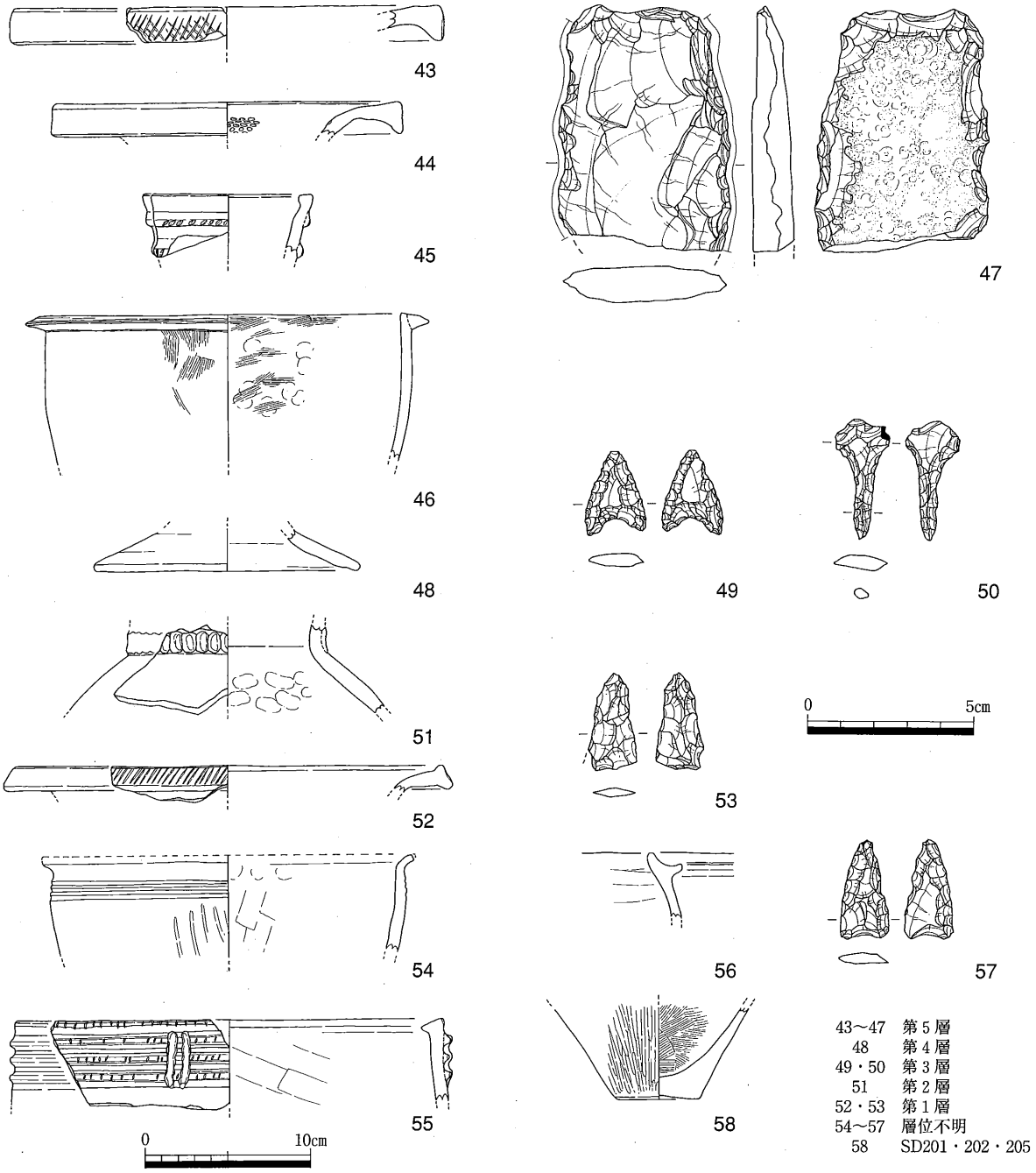
1　暗灰褐色砂混じり粘質土
2　黒褐色細砂混じり粘質土
3　暗灰褐色細砂混じり粘質土
4　黒褐色細砂混じり粘質土
5　黒灰褐色細砂混じり粘質土
6　暗褐灰色砂混じり粘質土（上層）
7　暗灰褐色砂混じりシルト（上層）
8　褐灰色細砂混じりシルト（φ３cm程の礫をわずかに含む）（中層）
9　灰褐色シルト混じり細砂（中層）
10　暗灰褐色細砂混じり粘質土（下層）
11　暗灰色砂（ゆるい粘土と砂の混合土）（下層）
12　黄褐灰色礫混じり砂質土
13　褐灰色細砂
14　灰褐色細砂混じりシルト
15　黄灰色粘土

1～5　SD201
6～11　SD205
15　ベース

第22図　Ⅱ区SD201・205断面図　(1/40)

Ⅱ区SD205（第22・24図）

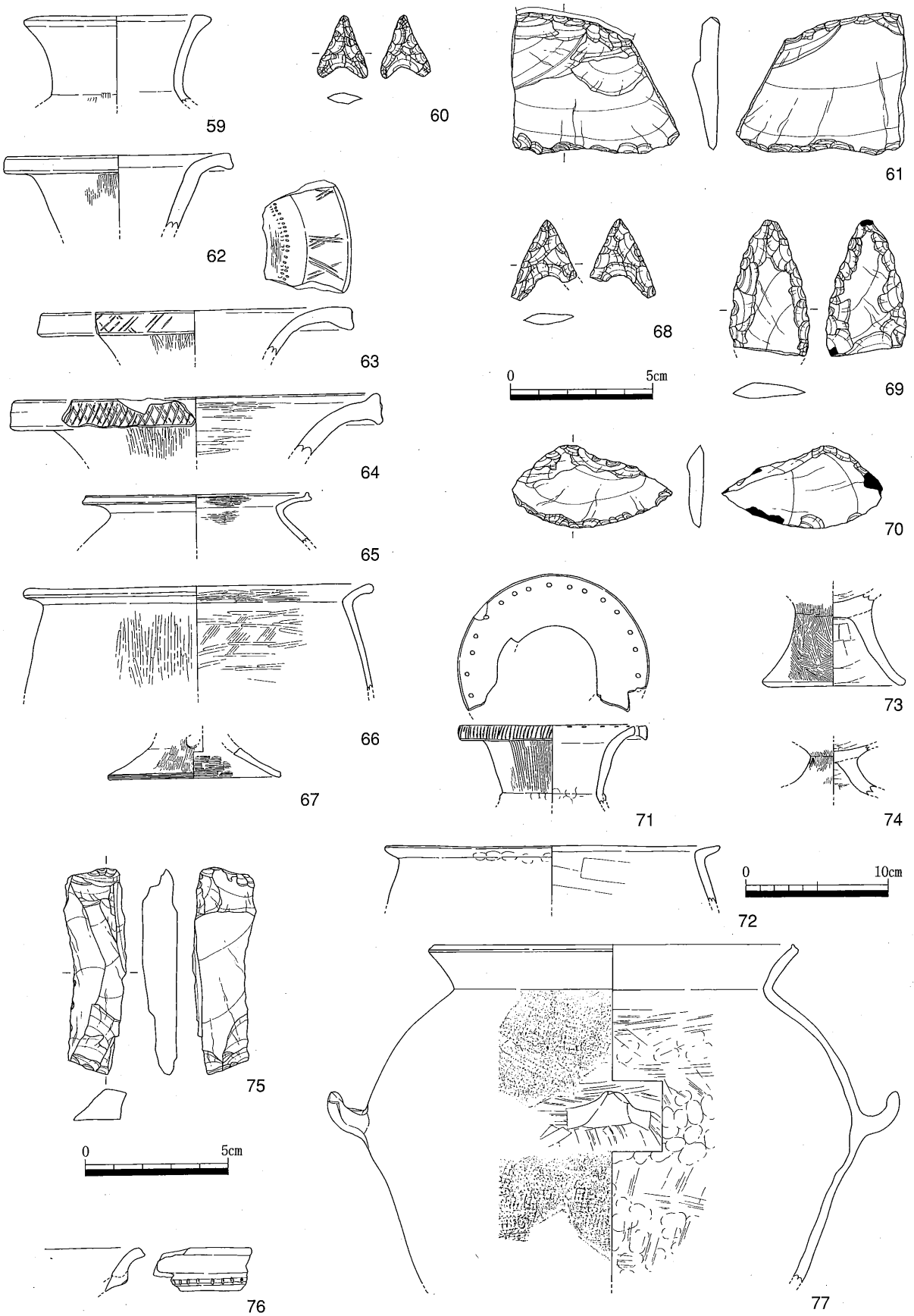
Ⅱ区西部付近、SD201と重複して検出した溝状遺構である。調査区の西側から出現し、SD201により溝の東側のラインを壊される。幅２m程度、深さ48～68cmで、最下部には幅30～60cm、深さ10～15cm程度の落ち込みが認められる。埋土は概ね上層が土壌化の進んだ暗灰褐色・暗褐灰色砂混粘質土、中層は暗褐灰色・褐灰色細砂・砂質土などで、埋土中に礫や砂を含む。下層は砂層や締りの悪い粘土層で、断面からも深い落ち込み状になって観察できる箇所で、溝の底を掘り直した様子が観察できる。SD205はSD201の前身として灌漑用水路と



第23図　Ⅱ区SD201出土遺物（1/4・1/2）

しての役割を果たしたと考えられる。埋土中からは弥生土器、石器が出土した。

遺物は上・中・下層に分けて取り上げた。59～61は下層から出土した遺物である。59は弥生土器直口壺である。60・61はサヌカイト製石器である。60は凹基式石鏃、61はスクレイパーである。上縁に敲打痕がある。62～70は中層出土遺物である。62～67は弥生土器で、62～64は広口壺である。63は口縁端部に斜格子文があり、口縁部内面にも斜格子文、列点文を巡らせる。64は口縁端部に斜格子文を施す。65・66は甕である。65は胴部が丸みを帯び、66はあまり胴部が張らないもので、外面は丁寧に磨き上げる。67は高杯脚部である。穿孔が１ヶ所に残される。68～70はサヌカイト製石器である。68は下部が少し欠損するが、凹基式石鏃である。69は下部が欠損するが、尖頭器と考えられる。70はスクレイパーと考えられる。刃部をわずかに作るのみである。71～74は上層から出土した遺物で、いずれも弥生土器である。71は壺で、口縁端部をわずかに下側に拡張させ、口縁端部に斜線文、内面には列点文状に穿孔する。72は甕である。73・74は高杯脚部である。



59～61　下層
62～70　中層
71～74　上層
75　層位不明
76・77　上位

第24図　Ⅱ区SD205出土遺物（1/4・1/2）

いずれも外面はハケで、脚部分を後で継ぎ足す。75は層位不明遺物で、サヌカイト製の楔形石器である。76・77はSD205の上面精査で出土した。76は縄文土器浅鉢である。77は須恵器把手付き甕である。

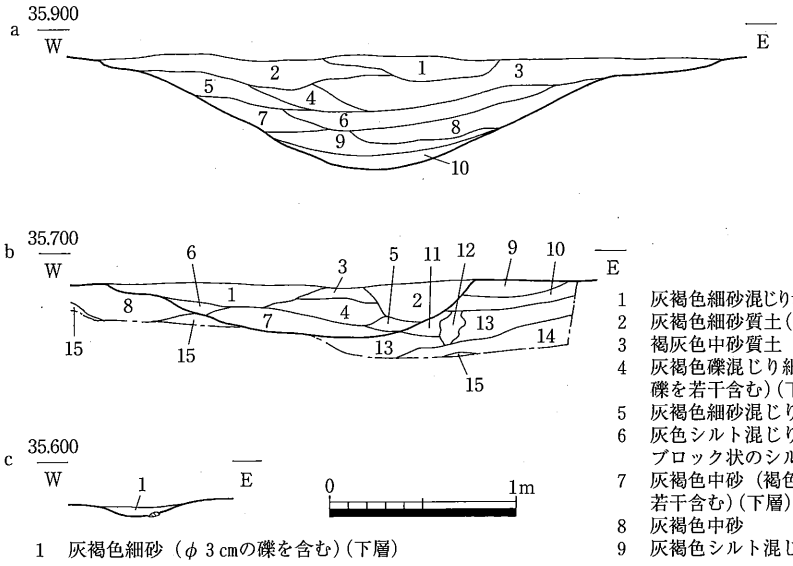
遺構の時期は出土遺物から概ね弥生時代中期中頃と考えられ、SD201とはそれほど時期差はないと考えられる。76・77は他からの混入と考えられる。

Ⅱ区SD211（第25・26図）

Ⅱ区東部を南北方向に流れる溝である。溝の規模は北側ほど小さく、溝底のレベルは北側ほど高く、溝は北から南へ流れたと考えられる。幅は58～330cm、深さ6～60cmを測り、断面形状は緩いボウル状である。埋土は概ね最上層は灰褐色細砂層、上層は褐灰色シルト層、中層は褐灰色中・細砂層、下層は灰褐色中砂層であるが、削平を受け、中央部分では中層以下、最も北側では下層しか残されていなかった。遺構の前後関係からSD218より新しい。

78～81は下層で出土した遺物である。78～80は縄文土器深鉢である。78は波状口縁を呈し、外面には沈線を3条巡らせる。80は波状口縁を持ち、口縁端部は肥厚させる。外面は刻目を持つ貼付突帯とヘラ描き流線で飾る。81は弥生土器壺体部で、外面には4条1単位の櫛描き沈線文が3単位残される。沈線文の下部には3角形の刺突文がある。82～84は中層出土遺物である。82は如意状口縁を持つ甕で、外面には2条のヘラ描き沈線文が施される。83は体部で、外面には6条1単位の櫛描き沈線が4単位以上残され、下部には3角形の刺突文を施す。84はサヌカイト製石鏃で、凹基式である。85～87は上層出土遺物である。85・86は弥生土器で、85は壺体部、86は壺底部と考えられる。85は頸部から体部にかけてで、6条1単位の櫛描き沈線文と波状文が残される。87はサヌカイト製スクレイパーで、上縁部には敲打痕が残る。88・89は最上層から出土した遺物で、ともに弥生土器甕である。88は口縁端部は外側へ強く屈曲する。90～94は層位不明出土遺物である。90～92は弥生土器である。90は壺体部で、体部最大径付近に刻目を持つ貼付突帯を巡らせる。91は甕である。体部があまり張らない器形で、外面は縦ハケ、内面はヘラミガキを施す。92は手捏ねの土器で、分厚い底部から体部を引き上げて作り出す。内外面ともハケメや板ナデで粗く器面を整える。93は土師質土器足釜小片である。94はサヌカイト製石鏃で、凹基式である。

最上層から出土した甕は弥生時代後期まで下るものであるが、その他については層位により時期差は認められない。遺構の時期は概ね弥生時代中期初頭頃と考えられ、SD201・205とはそれほど時期は隔たらないと考



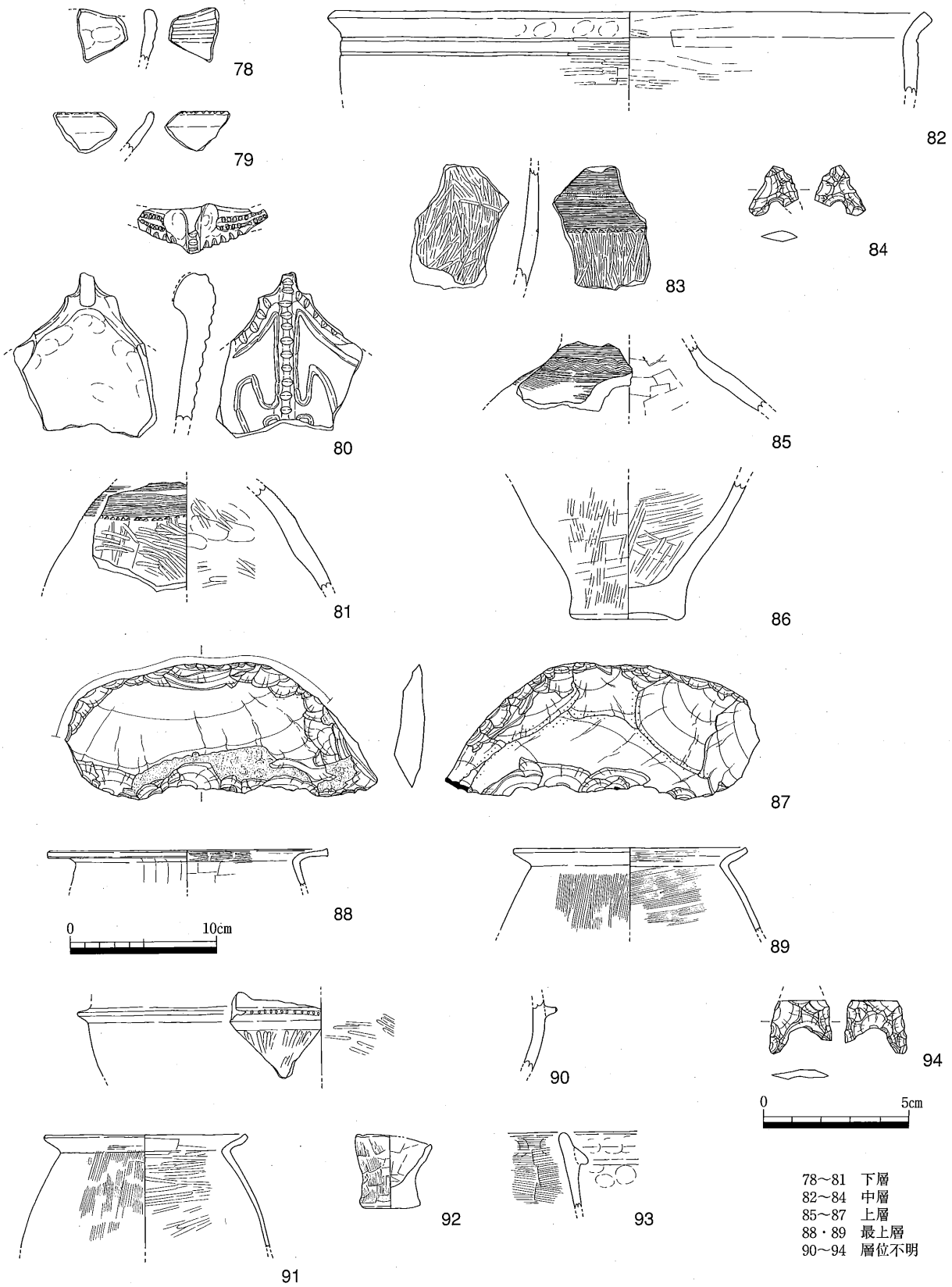
1 灰褐色細砂（φ3cmの礫を含む）（下層）

1 灰褐色細砂（最上層）
2 灰褐色細砂（1層よりも砂粒が大きい）（最上層）
3 褐灰色細砂混じりシルト（下部ほど灰色が強い）（上層）
4 褐灰色シルト混じり細砂（3層より砂粒が粗い）（上層）
5 褐灰色中砂（Mn粒を多く含む）（中層）
6 灰褐色細砂混じりシルト（中層）
7 灰色中砂（下層）
8 灰褐色細砂質土（6層より若干暗い）（下層）
9 灰褐色中砂（下層）
10 暗灰色微砂質土（下層）

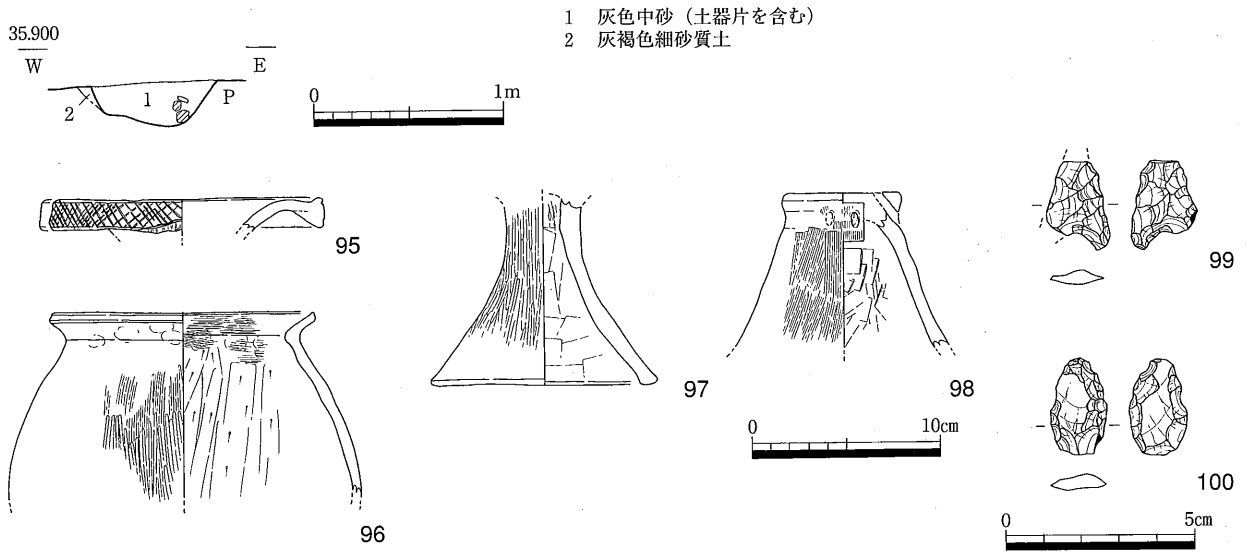
1 灰褐色細砂混じりシルト（土器片を含む）（中層）
2 灰褐色細砂質土（φ2cmの小礫を若干含む）（中層）
3 褐灰色中砂質土（細砂～中砂）（中層）
4 灰褐色礫混じり細砂（φ2cmの風化した礫を若干含む）（下層）
5 灰褐色細砂混じりシルト（下層）
6 灰色シルト混じり細砂（風化した褐色礫やブロック状のシルトを若干含む）（下層）
7 灰褐色中砂（褐色シルトをブロック状に若干含む）（下層）
8 灰褐色中砂
9 灰褐色シルト混じり砂質土
10 灰褐色細砂混じりシルト（9層より灰色が強い）
11 灰色シルト混じり粘土
12 灰色細砂質土
13 灰黄褐色細砂混じり粘質土
14 灰黄色シルト
15 黄褐色細砂混じりシルト

1～7 SD211
9～15 ベース

第25図 Ⅱ区SD211断面図（1/40）



第26図　Ⅱ区SD211出土遺物（1/4・1/2）



第27図　Ⅱ区SD214断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

えられる。

Ⅱ区SD214（第27図）

Ⅱ区南部中央付近で検出した溝状遺構である。南側は調査区外へ延び、北側ではSK210により消失する。幅67cm、深さ22cmを測り、埋土は灰色中砂である。埋土中からは弥生土器、サヌカイト片が出土した。

95～98は弥生土器である。95は壺で口縁端部を下側へ拡張させ端部には斜格子文を施す。96は甕で、口縁端部には凹線を１条巡らせる。97は高杯脚部、98は蓋である。蓋の摘み部分には２孔１対の穿孔がある。99・100はサヌカイト製石鏃である。99は凹基式、100は平基式と考えられるが加工は充分ではない。

遺構の時期は弥生時代中期中頃と考えられる。

Ⅲ区SD301・302・303（第28図）

Ⅲ区中央付近を東から西方向へ流れる溝である。少しずつ位置をずらせながらも、ほぼ重複して３条の溝を検出した。土層断面観察からSD302→SD303→SD301の順序で掘削されたことがわかる。

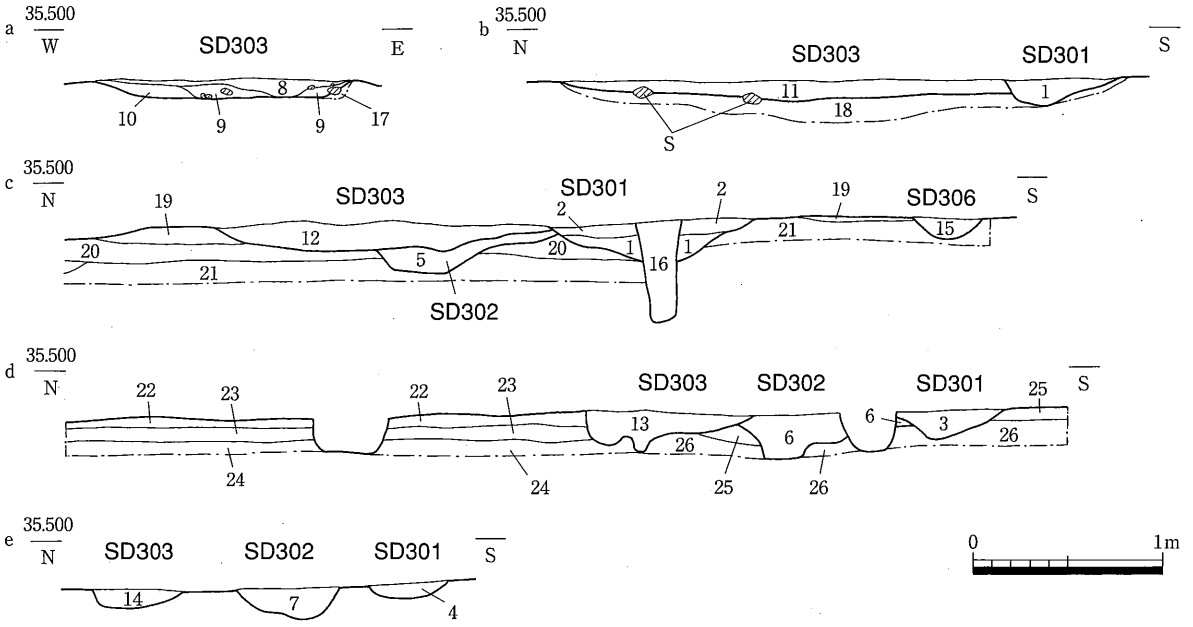
SD302は大半がSD301・SD303の掘削により消失しており、調査区東端付近でわずかに規模が確認できるだけであるが、幅54cm、深さ17～22cmを測る。埋土は概ね灰褐色砂礫混シルトである。溝の底のレベルは西ほど下がっており、西へ流れたことがわかるが、ｂ畦ではSD302を断面で確認することはできず、ｂ―ｃ畦間で消失したと考えられる。

SD303はSD302の北側に位置をわずかにずらして掘削された。幅45～122cm、深さ10～17cm、断面形状は浅い皿状を呈し、溝の東側と西側の溝底のレベルの差はほとんどない。埋土は概ね暗灰褐色砂混シルト・礫混粗砂である。溝のラインは不明瞭で浅く、安定した水量を保った水路としての役割を果たしたとは考えにくい。

SD301はSD302の南側で検出した。幅40～102cm、深さ８～18cmで、溝の底のレベルから東から西へ流れたと考えられる。断面形状は浅い皿状～緩いＶ字状、埋土は黒褐色砂混シルト、暗灰褐色砂礫混シルトなどである。

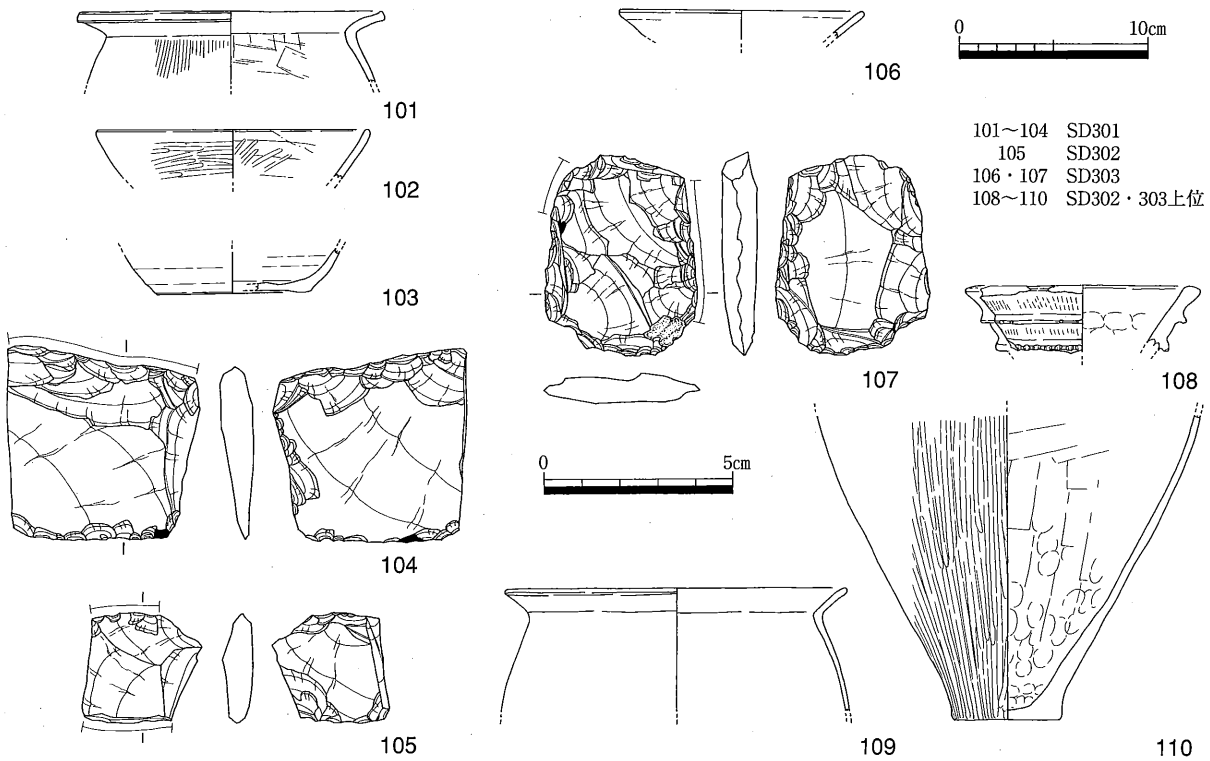
いずれも上面を削平されたと考えられ、遺構の遺存状態は悪いが、遺構の連続性や出土遺物から、Ⅱ区SD205と連続する可能性が高いと考えられる。

101～104はSD301から出土した遺物である。101は弥生土器甕である。102は土師質土器埦、103は須恵器杯である。102は内外面にヘラミガキを施し、口縁端部には重ね焼き痕跡を残す。104はサヌカイト製の楔形



1　黒褐色砂混じりシルト
2　黒褐色粘質土
3　暗灰褐色砂礫混じりシルト
4　灰褐色礫混じり粗砂
5　灰色礫混じり砂質土（黄色粘土ブロック混じる）
6　灰褐色砂礫混じりシルト
7　暗灰色小礫混じり細砂
8　暗灰褐色砂混じりシルト（φ２cmの小礫を含む）
9　灰色礫混じり細砂
10　灰橙色シルト混じり細砂
11　暗灰褐色砂混じりシルト（粗砂）
12　暗灰色砂混じりシルト（粗砂）
13　暗灰褐色砂混じりシルト
14　暗灰褐色礫混じり粗砂
15　黒褐色砂混じりシルト
16　灰褐色砂混じりシルト
17　灰橙褐色細砂混じりシルト（φ５cmの礫が混じる）
18　褐灰色シルト（粘質強い。礫混じる）
19　灰褐色砂質土
20　褐灰色砂混じりシルト
21　褐灰色シルト（20層より褐色みが強く、粘質強い）
22　灰褐色細砂
23　灰褐色中砂
24　灰色細砂
25　褐灰色砂混じりシルト
26　褐灰色粘質土

1～4　SD301
5～7　SD302
8～14　SD303
15　SD306
16　SP埋土
17　ベース



101～104　SD301
105　SD302
106・107　SD303
108～110　SD302・303上位

第28図　Ⅲ区SD301～303断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

石器である。上部に敲打痕を残す。105はSD302出土遺物である。サヌカイト製の楔形石器で、上・下部に敲打痕を残す。106・107はSD303出土遺物である。106は土師質土器杯である。107はサヌカイト製打製石斧である。側縁部に敲打痕が残る。108～110はSD302・303上位層で出土した遺物で、いずれも弥生土器である。108は壺で、外面に刻目突帯が2条残る。109は甕である。摩滅が著しい。110は甕底部である。外面は丁寧に磨き上げる。

SD301・303の埋土中からは弥生時代中期頃の遺物と13世紀頃の土師質土器や須恵器が出土しているが、溝の上面は13世紀代のピットに掘り込まれており、当該期の集落が存在したことと溝の方向性から、遺構の時期は弥生時代中期頃と考えられ、13世紀代の遺物は混入と考えられる。また、互いに近接して掘り込まれていることから、3条の溝にはそれぞれ時期差はほとんどないと考えられる。

Ⅲ区SD304（第29図）

Ⅲ区北西隅で検出した溝である。調査区南西側から出現し、やや弧を描きながら調査区の北へ延びる。幅28～54cm、深さ4～21cm、断面形状は概ね逆台形である。埋土は暗褐灰色シルト、灰色礫混粗砂、灰褐色細砂であるが、調査区北側では削平が著しく、下層の一部分しか残存しない。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

遺構の時期は明確ではないが、弥生土器小片が出土していることから弥生時代と考えられる。

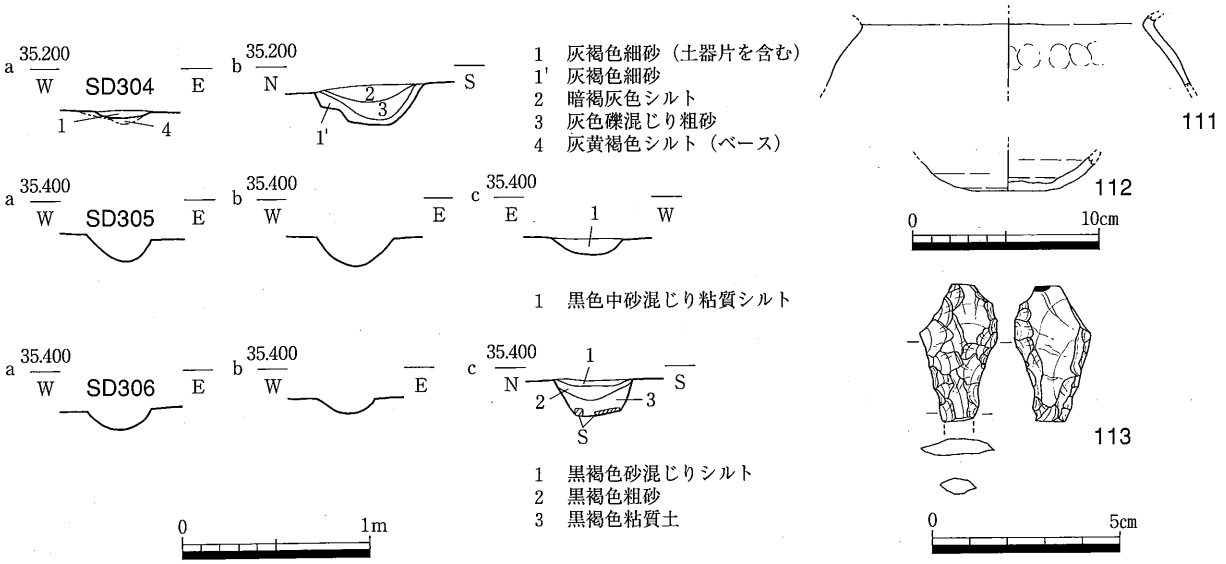
Ⅲ・Ⅳ区SD305（第29図）

Ⅳ区東部からⅢ区西部にかけて南西から北東方向へかけて検出した溝である。幅32～38cm、深さ8～14cmで、埋土は黒色中砂混粘質シルトである。ベースの標高は南側のほうが高いが、溝底のレベルはどの地点もほぼ同じである。SX309に掘り込まれ、SD312の手前で消失する。埋土中からは弥生土器、土師器、須恵器小片が出土した。

Ⅲ区SD306（第29図）

Ⅲ区西部で検出した南西から北東へ流れる溝である。幅30～40cm、深さ8～18cm、埋土はおおむね黒褐色砂混シルト・粗砂・粘質土である。SD308・SK301より古く、SD301の南側で消失する。溝の方向性はSD305と同じである。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

111は弥生土器甕である。摩滅が著しい。112は土師質土器杯底部である。113はサヌカイト製石錐である。



第29図　Ⅲ区SD304～306断面図（1/40）、SD306出土遺物（1/4・1/2）

遺構の時期は弥生時代後期と考えられるが、土器の摩滅が進んでおり、SD304・305・312との関連性を検討しながら慎重に時期を決める必要があろう。

Ⅱ区SR21（第30図）

Ⅱ区南部で検出した流路である。幅6m程度、深さ53cmを測る。断面形状は二又に分かれる形状で、埋土は東側の筋が黒褐色粗砂質土、暗灰色礫混中砂、西側の筋が暗褐色中砂、黒褐色砂礫、黒灰色礫混中砂で、それらの上面に南西側の筋の埋土である黒褐色粗砂質土が堆積する。下層に砂層や礫層、上層には礫混の砂質土層が堆積し、一定量の水量で流れた後、徐々に平地化したようである。埋土中からは弥生土器片、サヌカイト片が出土した。

114・115は弥生土器である。114は壺で、体部に櫛描き沈線文と波状文を施す。やや摩滅しており、櫛描きの単位は不明である。115は甕体部で、緩く張った胴にくの字に曲がる口縁部が付く。116はサヌカイト製石器で、平基式石鏃の基部と考えられる。

遺構の時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

3．弥生時代後期の遺構・遺物

Ⅱ区SK208（第31図）

Ⅱ区中央部付近で検出した土坑である。隅丸方形を呈すると考えられるが、遺構の北半部は後世の撹乱により消失する。推定で長軸約3.2m、短軸2.6m、深さは26cmを測る。断面形状は浅いⅢ状で、暗灰褐色礫混砂質土、灰色細砂により埋没した後に再度掘削されて黒褐色礫混粘質土、暗灰褐色細礫混細砂質土により埋没する。最上層部分からは多量の礫とともに土器片が出土した。

117～119は弥生土器である。117・118は甕で、外面はタタキ、内面はヘラケズリする。体部は丸い。119は鉢である。外面はタタキの後底部付近のみヘラケズリ、内面はハケの後ヘラミガキを施し、器面を密にする。いずれも弥生時代後期後半のものであり、遺構の時期も弥生時代後期後半と考えられる。

4．古墳時代の遺構・遺物

Ⅱ区SE21（第32・33図）

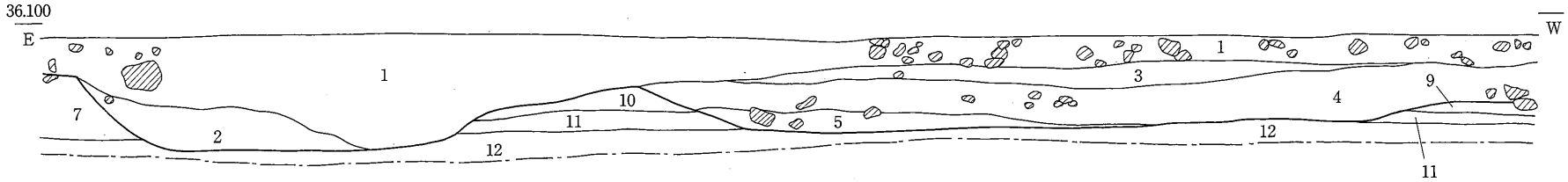
Ⅱ区東南部で検出した井戸である。隅丸方形に近い形状を呈し、長軸1.96m、短軸1.75m、深さ85cmを測る。土層断面から遺構がいったん埋没した後に2度再掘削され、3度目の掘削の後に土器が投棄され、上層が埋没する。最終的に掘削された部分は多量に礫と土器片が出土しており、最後は廃棄土坑として使用されたようである。ただし、上層から出土した遺物はすべて小片で、実測可能な遺物はなかった。埋土は下層部分が暗褐色・暗灰褐色細砂混粘質シルト・シルト、黒褐色粘土などで、中層部分が黒色粘土、上層部分が黒色粘土に礫と土器の砕片が密に詰まり、最終的には暗褐灰色中砂質土により埋没する。

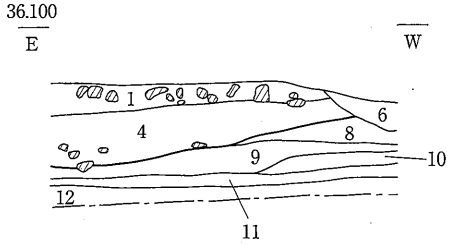
120～128はいずれも土師器である。120は最下層から出土した遺物で土師器杯である。内面は放射状の、外面は横方向のヘラミガキをする。121は下層から出土した遺物で、土師器甕である。122～128は中層から出土した遺物である。122は広口壺である。123～125は甕である。球形に近い体部で、外面はハケ、一部ヘラミガキ、内面は概ねヘラケズリをする。126は高杯で、脚部と杯部の接合場所が剥離している。127は鉢である。128は土玉である。

遺構の時期は出土遺物により古墳時代前期と考えられる。

Ⅲ・Ⅳ区SD312（第34図）

Ⅳ区東部からⅢ区西部へかけて検出した溝である。幅50～124cm、深さ8cm程度で、断面形状は浅いⅢ状、埋土は暗灰色粗砂、灰褐色礫混粗砂である。Ⅲ区SD301～303の上面で検出し、これらより新しいことがわかる。

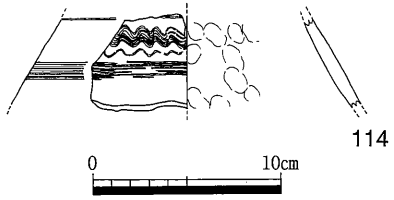


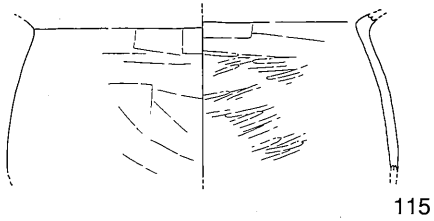


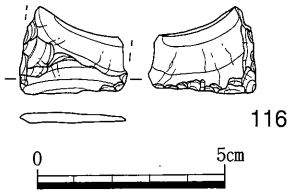
1　黒褐色粗砂質土（拳大の礫含む。土器包含）
2　暗灰色礫混じり中砂（φ５㎝程の礫、φ３㎝～拳大の風化礫含む）
3　暗褐色中砂
4　黒褐色砂礫（φ５㎝程の礫、黒色粘土を含む。固くしまる）
5　黒灰色礫混じり中砂（φ１～３㎝程の礫の密度が高く、拳大のものも若干含む）
6　濁褐灰色砂質土
7　灰色細砂
8　暗褐色礫混じり中砂（φ３㎝～拳大の礫）
9　濁暗灰褐色細砂（わずかに粗砂含む）
10　灰色シルト混じり細砂
11　灰褐色細砂混じりシルト
12　黄灰色砂混じり粘土

1～5　SR21

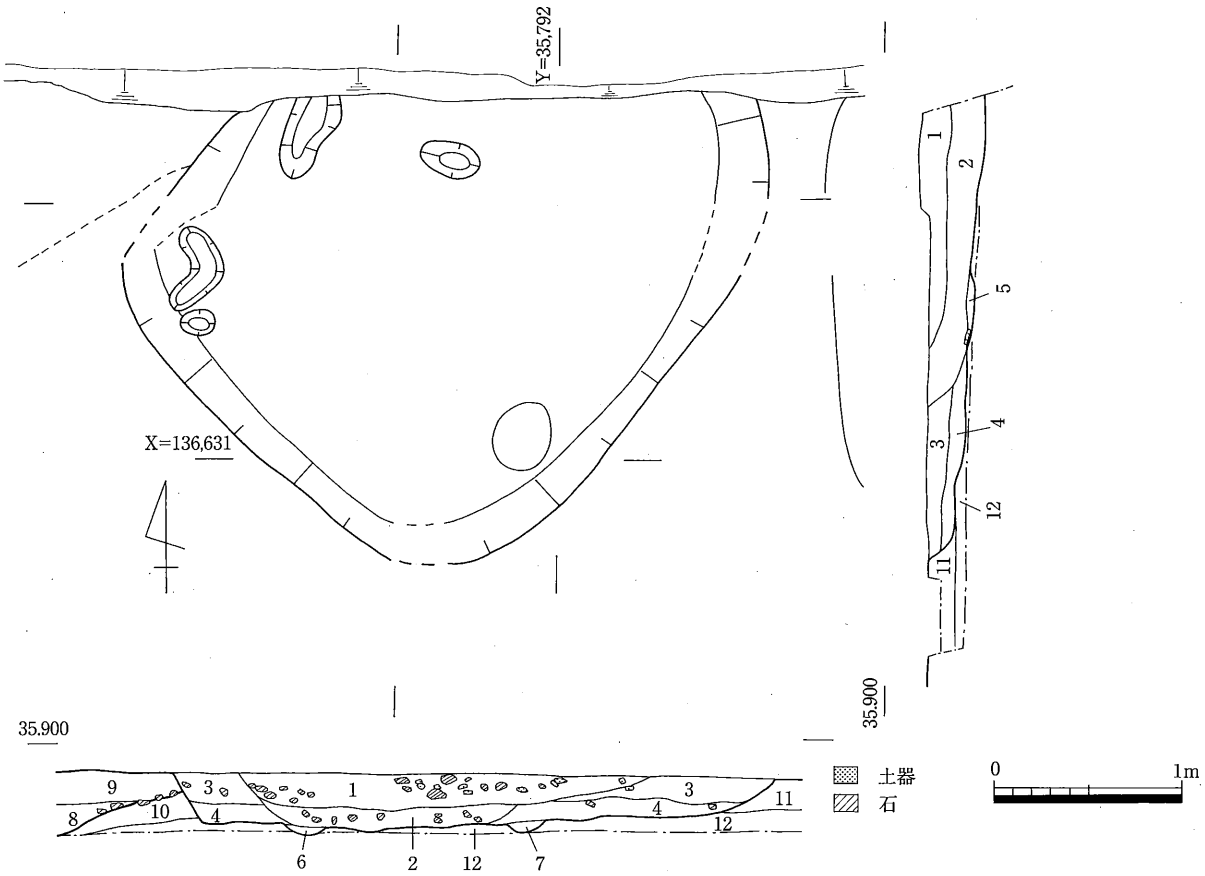
0　1m





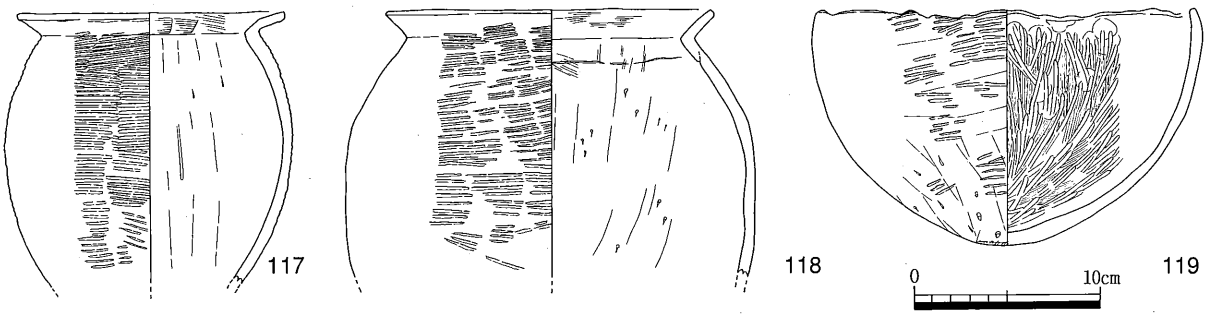


第30図　Ⅱ区SR21断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



1　黒褐色礫混じり粘質土（土器片とφ３～４cmの礫を多量に含む）
2　暗灰褐色礫混じり細砂質土（１層より礫の密度が低い）
3　暗灰褐色細礫混じり細砂質土（風化した細礫）
4　灰色細砂
5　濁灰色砂質土（４層にベースブロックの混入）
6　灰褐色細砂質土（風化した細礫をわずかに含む）
7　暗褐灰色砂混じり粘質土
8　灰褐色細砂質土
9　暗灰褐色細砂質土
10　灰褐色中砂質土
11　灰褐色砂礫
12　黄灰色シルト

1～7　SK208
8・9　SD201
12　ベース

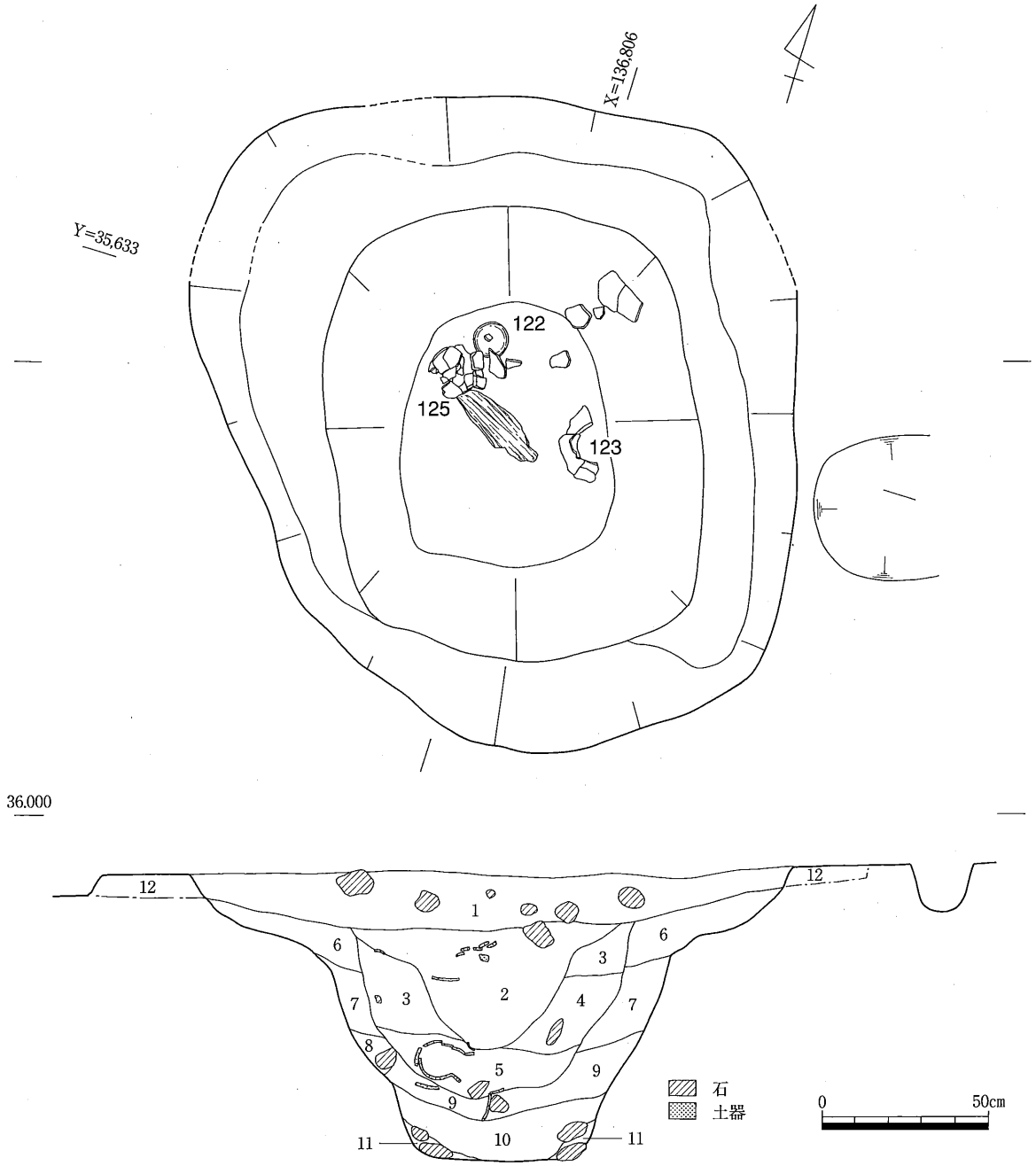


第31図　Ⅱ区SK208平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅲ区SD304の南東側約2.4～6.4mの位置を概ね平行して流れ、北へ屈曲する地点もほぼ並行する地点であることから、両者は関連する遺構である可能性もある。溝底のレベルは南西側のほうが低く、流れは北東から南西であったと考えられる。埋土中からは須恵器片、サヌカイド片が出土した。

129は弥生土器広口壺である。口縁部の外側に粘土を足して肥厚させている。口縁端部にはヘラ描きによる斜格子文を施す。130～132は須恵器である。130・131は杯身で退化した返りを持つ。130の外面には土器を焼成した際の溶着痕跡がある。132は摘み付きの蓋である。133～146はサヌカイト製石器である。133～144は石鏃で、133・139・144は平基式、その他は凹基式である。145は石錐、146は楔形石器である。

遺構の時期は131・132の時期である７世紀初め頃と考えられる。



1　暗褐灰色中砂質土
2　黒色粘土（φ２～８cmの礫と小さく割れた土器片が密につまる）（上層）
3　黒色粘土（2層と比べ、礫と土器片の密度が低い）（中層）
4　２層と７層の混じり合った土（中層）
5　黒色粘土（３層よりさらに礫と土器片の密度が低い。壺出土）（中層）
6　暗褐色細砂混じりシルト（土器片を含む）（下層）
7　暗灰褐色細砂混じり弱粘質シルト（下層）
8　ベースのブロック（下層）
9　暗灰色砂混じり粘質土（７層より砂の密度が低い）（下層）
10　黒褐色粘土（下層）
11　暗灰色粗砂混じり粘質土（しまりはゆるく、拳大の礫を含む）（下層）
12　ベース

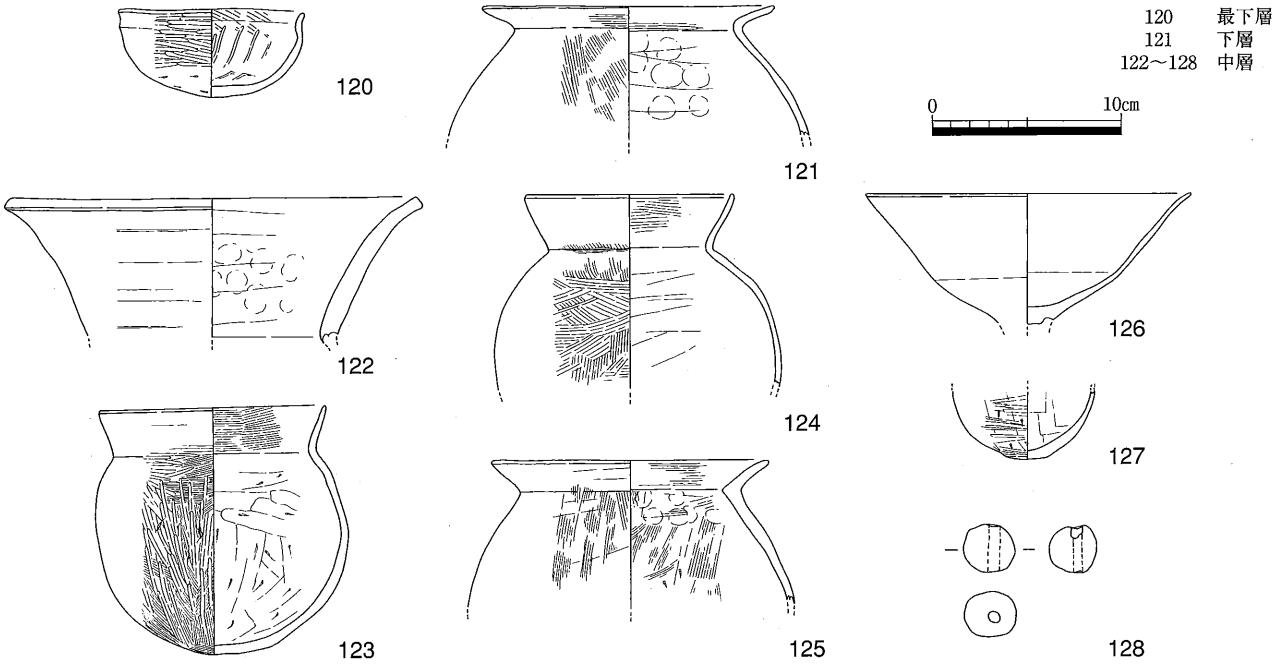
第32図　Ⅱ区SE21平・断面図（1/20）

5．中世の遺構・遺物

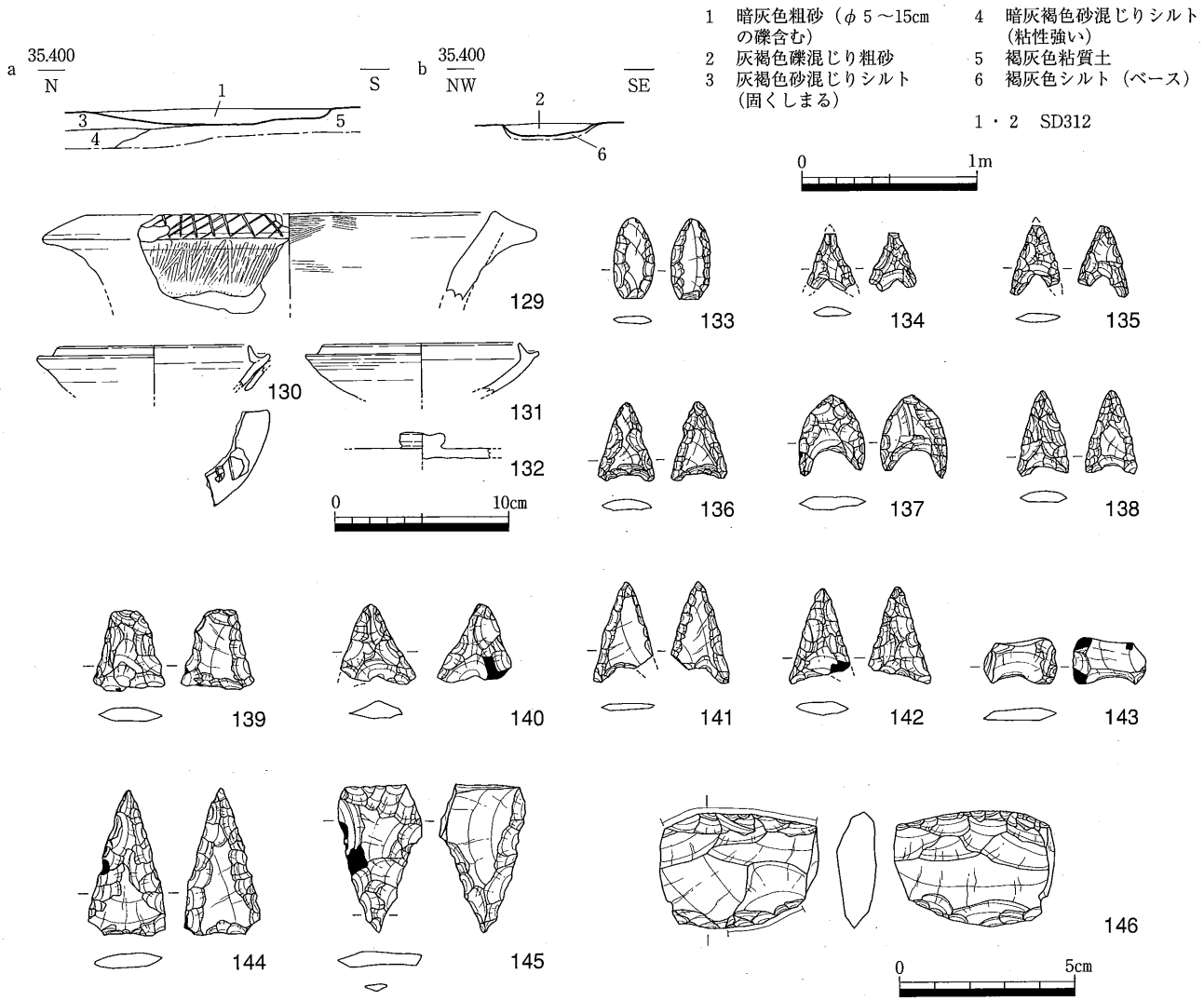
Ⅰ区SA12（第35図）

Ⅰ区西端付近で検出した東西方向の柵列である。５間分を検出した。延長5.3m、柱間は概ね0.8～1.0mであるが、東から２間目だけは1.5mと長い。東から２穴目はピットが重複している。柱穴は円形で、直径22～30cm、深さ12～20cmを測る。柱掘り方の埋土は橙褐色砂混シルト、灰褐色シルト、暗灰色粘質シルト、暗灰色粘土である。西から２穴目には直径９cmの柱材とその下部の根石が検出された。

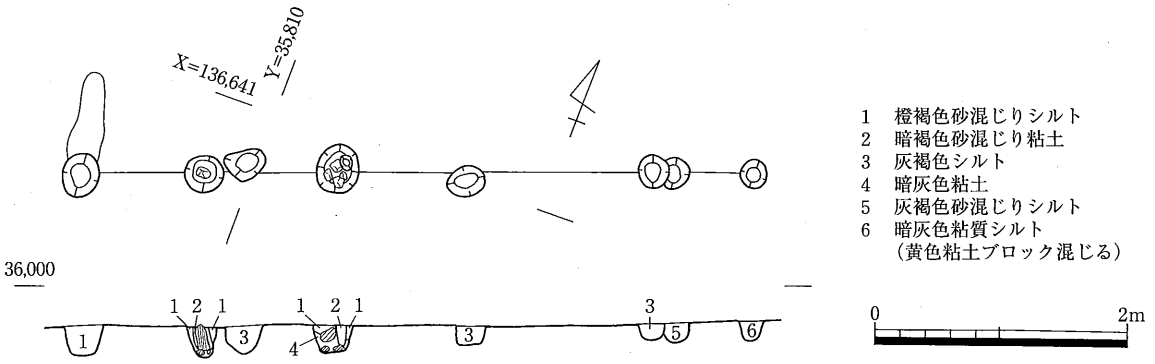
埋土中からは出土遺物はなかったが、ピットの埋土から中世頃と考えられる。



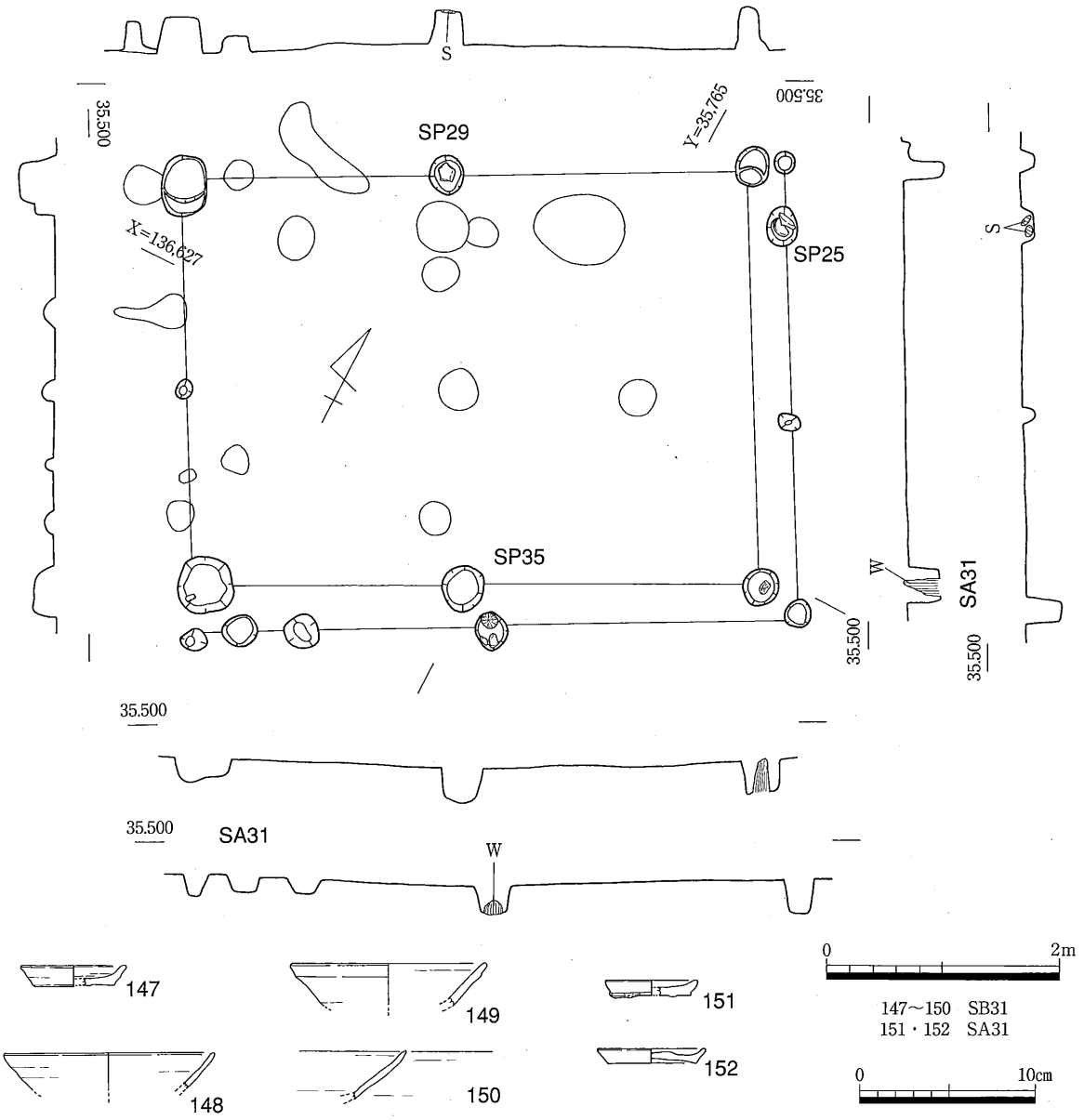
第33図　Ⅱ区SE21出土遺物（1/4）



第34図　Ⅲ・Ⅳ区SD312断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第35図　Ⅰ区SA12平・断面図（1/60）



第36図　Ⅲ区SB31・SA31平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

Ⅲ区SB31・SA31（第36図）

Ⅲ区東部で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（4.8m）、梁間１間（3.5m）で、面積は16.8㎡、主軸方位はN28°Wである。柱間は桁方向が2.3～2.5mを測る。柱穴は円形で、概ね直径30～50㎝、深さは21～33㎝を測る。南東隅の柱穴には直径14㎝の柱材が、北側の柱穴列の中央の柱穴には根石が残されていた。西側の柱穴列には中間の位置に直径16㎝、深さ12㎝の小ピットが検出されており、このピットも掘立柱建物跡を構成する柱の可能性もある。

SB31の東側と南側、SB31から35㎝離れた位置でSA31を検出した。東辺は3.9mを測り、柱間は0.6m～1.7mで、北側だけ極端に狭い。南辺は5.2mを測り、柱間は西から0.4・0.6・1.6・2.6mで、西側で狭い。柱穴の形状は円形で、直径20～30㎝、深さ10～30㎝で、南側中央の柱穴には直径14㎝の柱材が、この同じ柱穴と東側の北から２穴目からは根石が残されていた。

147～150はSB31から出土した遺物である。147・148・150は南側柱穴列のSP35から、149は北側柱穴列のSP29から出土した。147～149は土師質土器で、147は小皿、148・149は杯である。150は須恵器杯である。いずれも13世紀後半～14世紀前半頃である。

151・152はいずれもSA31東柱列のSP25から出土した土師質土器小皿である。口径５～６㎝を計り、底部は回転ヘラ切りによる。いずれも13世紀後半～14世紀前半頃である。

遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半頃である。

Ⅲ区SB32（第37図）

SB31の西半部に重複して検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（3.5～3.7m）、梁間２間（2.6～2.7m）の南北棟で、面積は約9.5㎡、主軸方位はN29°Wである。柱間は桁行が1.35～2.35m、梁間が1.25～1.55mを測る。柱穴は円形で、直径32～52㎝、深さ８～38㎝である。南東隅の柱穴からは根石が検出された。出土遺物と建物の方向性からSB31とはあまり隔たらない時期と考えられる。

153は南隅のピットから出土した遺物で、土師質土器小皿である。13世紀後半頃である。

Ⅲ区SB33・SA32（第38図）

Ⅲ区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。柱通りがやや悪いが、桁行３間（6.7m）、梁間２間（4.3～4.4m）で、面積は29.1㎡を測り、主軸方位はN24°Wである。柱間は概ね西から2.6m、1.8m、2.6m、梁間は北から1.7m、2.6～2.7mで、中央には間仕切りと考えられる柱列がある。柱穴は概ね円形で、直径25～42㎝を測るが、南側柱列の東から２穴目だけは直径58㎝を測り、根石を持つ。深さは５～26㎝を測る。南東隅および北西隅のピットから土師質土器片が出土した。

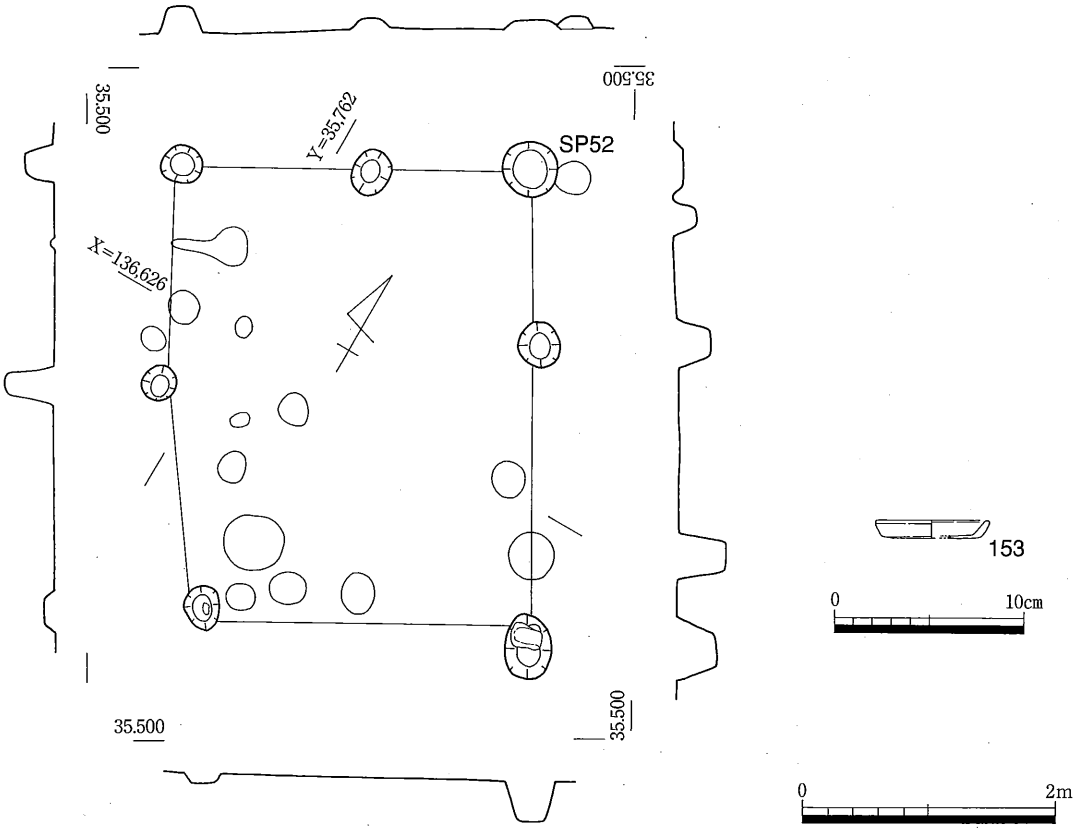
SA32はSB33の北40～50㎝、東20～30㎝の位置で検出した柵列である。北側は４間（7.1m）、東側は２間（4.4m）を検出した。柱間は、北側は概ね2.0～2.2mであるが、東から２穴目と３穴目のみは0.8m、東側は2.1～2.3mである。柱穴は円形で、直径18～40㎝、深さは６～26㎝を測る。東側の柱列の中央のピットから土師質土器片が出土した。

154～156はSB33は東隅ピットSP086から出土した土器である。154は小皿、155・156は杯で、いずれも13世紀中～後半のものである。157は東側柵列のSP100から出土した土師質土器小皿である。155～157と同様13世紀中～後半のものである。

遺構の時期はSB33・SA31ともに13世紀中～後半と考えられる。

Ⅲ区SB34（第39図）

Ⅲ区中央付近で検出した掘立柱建物跡である。SD301・302の上面で検出された。桁行は４間（7.6m）以上、梁間２間（2.5m）で、面積は19.0㎡以上、主軸方位はN24°Wである。柱間は桁方向が概ね1.4～1.9mであるが、



第37図　Ⅲ区SB32平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

西から３～５間目は0.5～1.0mで間隔が狭い。梁方向は南側が1.0m、北側が1.6mである。柱穴は概ね円形で、直径20～34cm、深さは14～28cmで、西隅の柱穴には根石が残される。埋土中からの出土遺物はなかったが、周辺の掘立柱建物跡と概ね同時期と考えられる。

Ⅲ区SB35（第40図）

Ⅲ区中央部付近、SB33の西側に接して検出した掘立柱建物跡である。SD301の上面で検出された。桁行２間（4.3m）、梁間１間（2.7m）、面積は11.6㎡、主軸方位はN24°Wである。柱間は桁行方向が2.1～2.2mであるが、北側の柱列では中央部分の柱穴は検出できなかった。柱穴は概ね円形で、直径24～34cm、深さ12～54cmを測る。

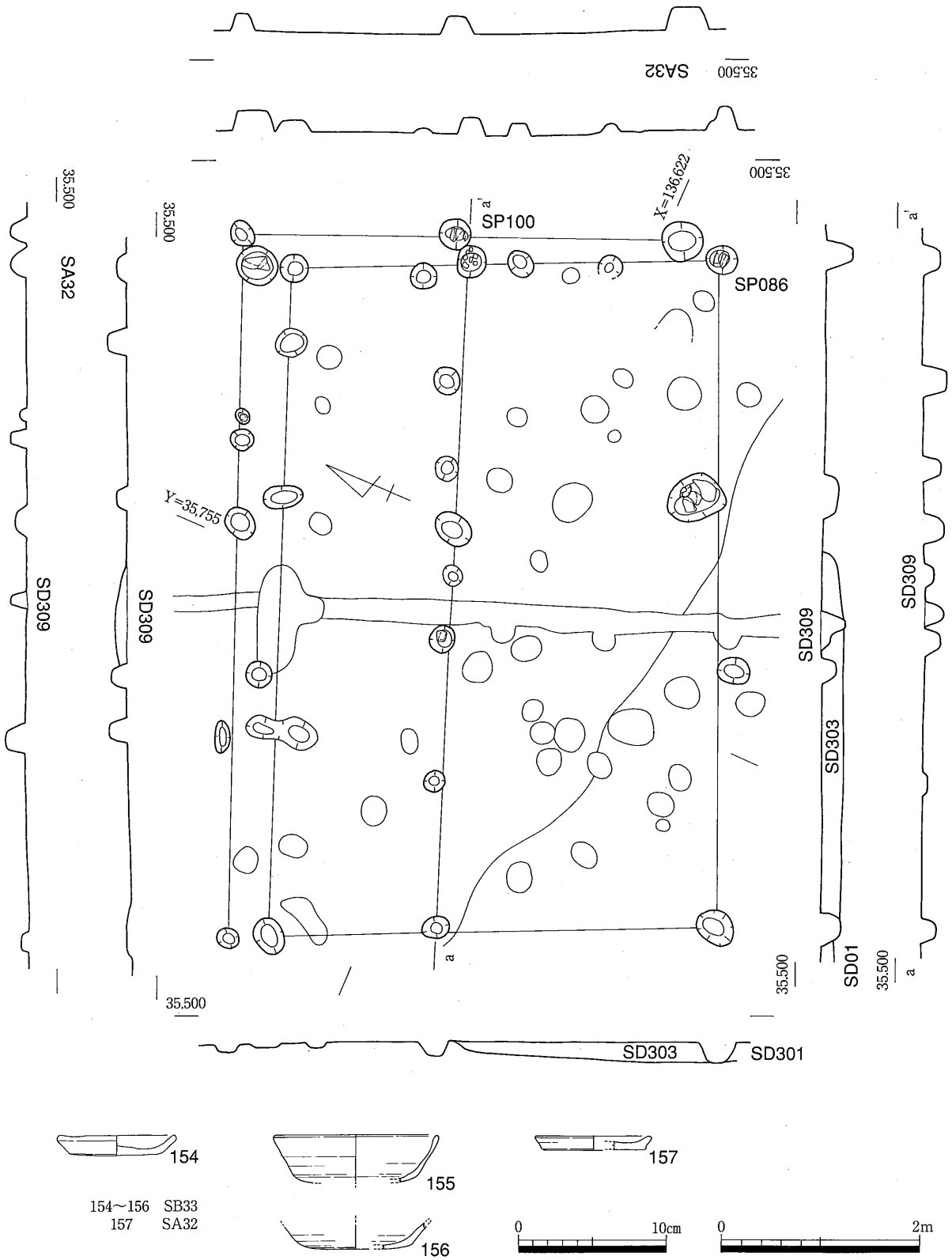
埋土中からは出土遺物はなかったが、周辺の建物と概ね同じ時期と考えられる。

Ⅲ区SB36（第41図）

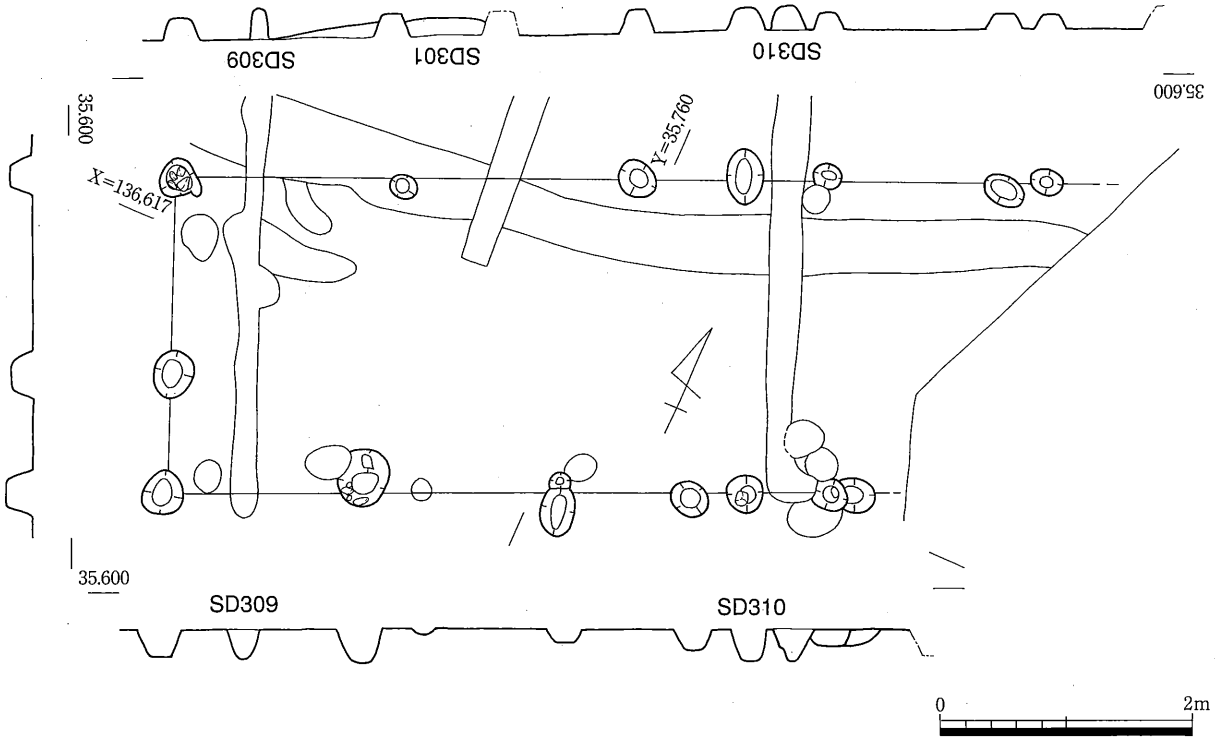
Ⅲ区中央部付近、SB35の南側で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（4.5m）、梁間２間（2.6m）、面積は11.7㎡、主軸方位はN23°Wである。柱間は桁行方向が2.0～2.5m、梁方向は0.8～1.9mとややばらつきがある。柱穴は円形で直径20～40cm、深さ14～62cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかったが、周囲の建物と概ね同じ時期と考えられる。

Ⅲ区SB37・Ⅲ区SA33（第42・43図）

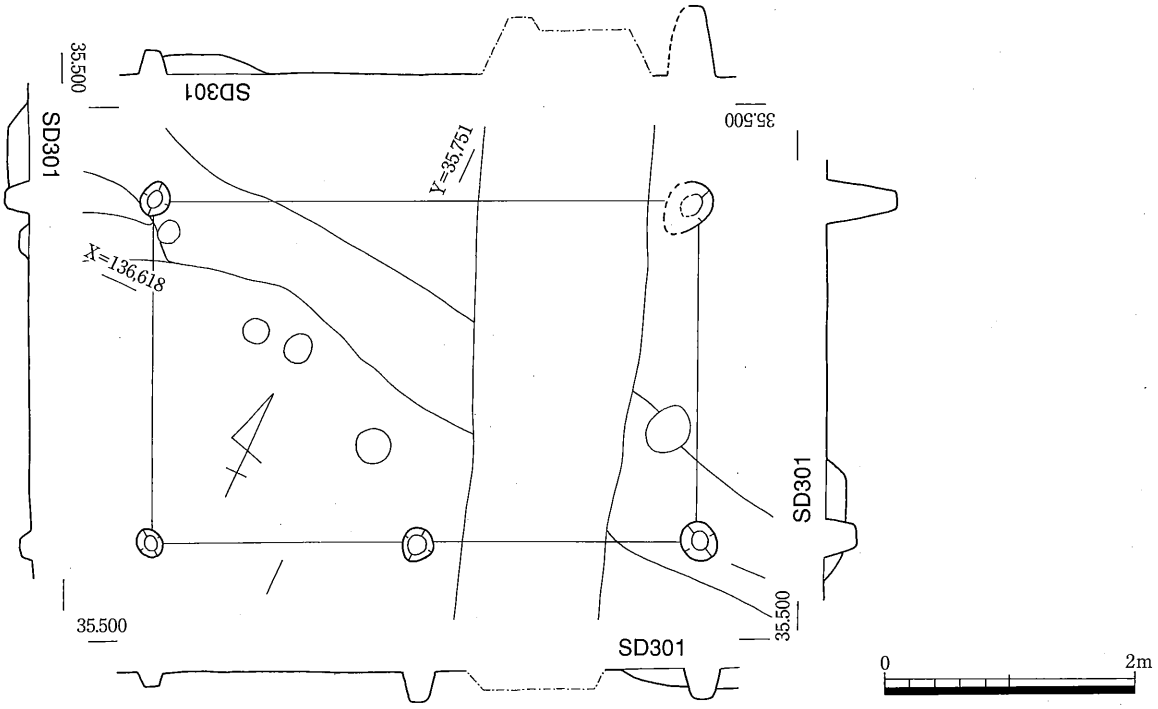
Ⅲ区西端付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間（4.2m）、梁間１間（3.5m）で、面積は14.7㎡、主軸方位はN24°Wである。桁方向の柱間は1.9mであるが、南側の桁筋の中央部分の柱は検出できなかった。柱穴は概ね円形で、直径26～36cm、深さ18～38cmを測る。南隅のピットからは根石を検出した。東隅のピット



第38図　Ⅲ区SB33・SA32平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第39図　Ⅲ区SB34平・断面図（1/60）

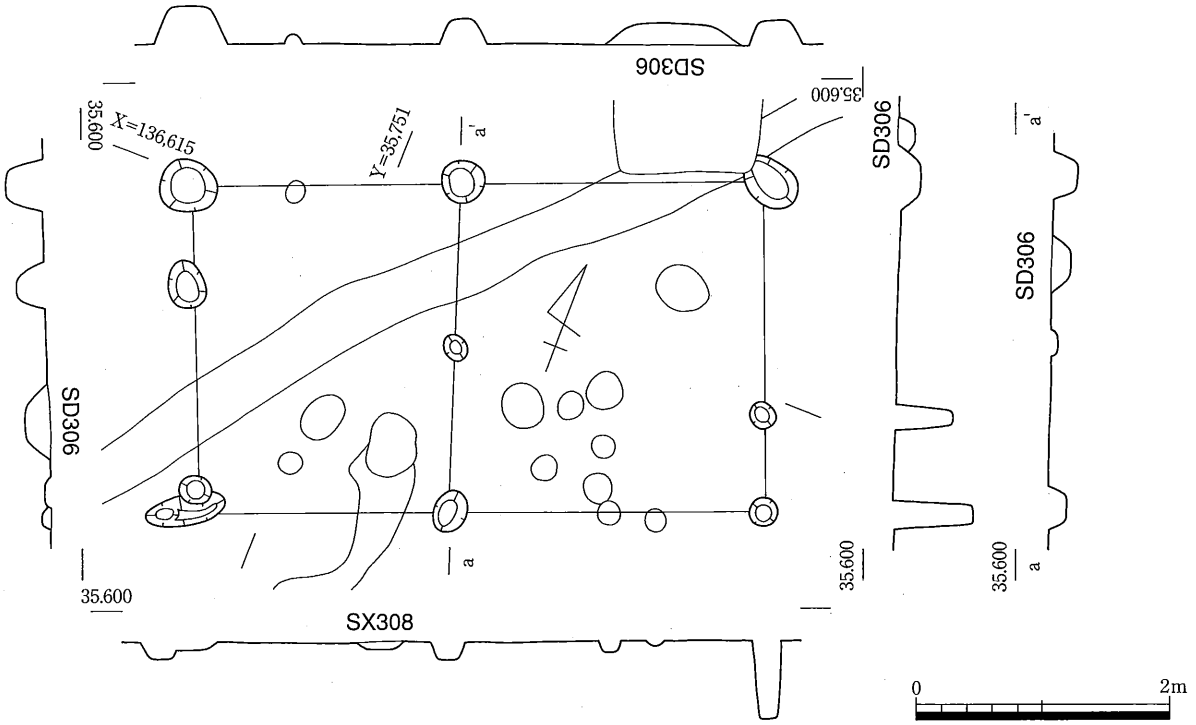


第40図　Ⅲ区SB35平・断面図（1/60）

（SP447）からは土師質土器や瓦質土器が出土した。

SB37の北側の桁筋から約0.5m北側でSA33を３間分（4.1m）検出した。柱間は0.9～2.3mとばらつきがある。柱穴は円形で、直径26～30cm、深さ13～39cmを測る。西端のピット（SP442）と西端から２穴目のピット（SP441）には根石が残され、土師質土器が出土した。

158～164はSB37－SP447から出土した遺物である。158～162は土師質土器である。158～160は小皿で、直



第41図　Ⅲ区SB36平・断面図（1/60）

径は6.4～6.6cmを測る。160は底部をヘラ切りする際に失敗したと考えられ、底部に孔があいている。161は杯、162は埦口縁部である。163・164は瓦質土器捏鉢である。口縁端部は四角くする。163・164は同一個体の可能性もある。

165はSA33－SP441から出土した遺物で、土師質土器足釜である。内外面ともハケで調整する。166はSA33－SP442から出土した遺物で、土師質土器杯である。

出土遺物はいずれも13世紀後半頃の遺物と考えられ、遺構の時期もその頃と考えられる。

Ⅲ区SB38（第42・43図）

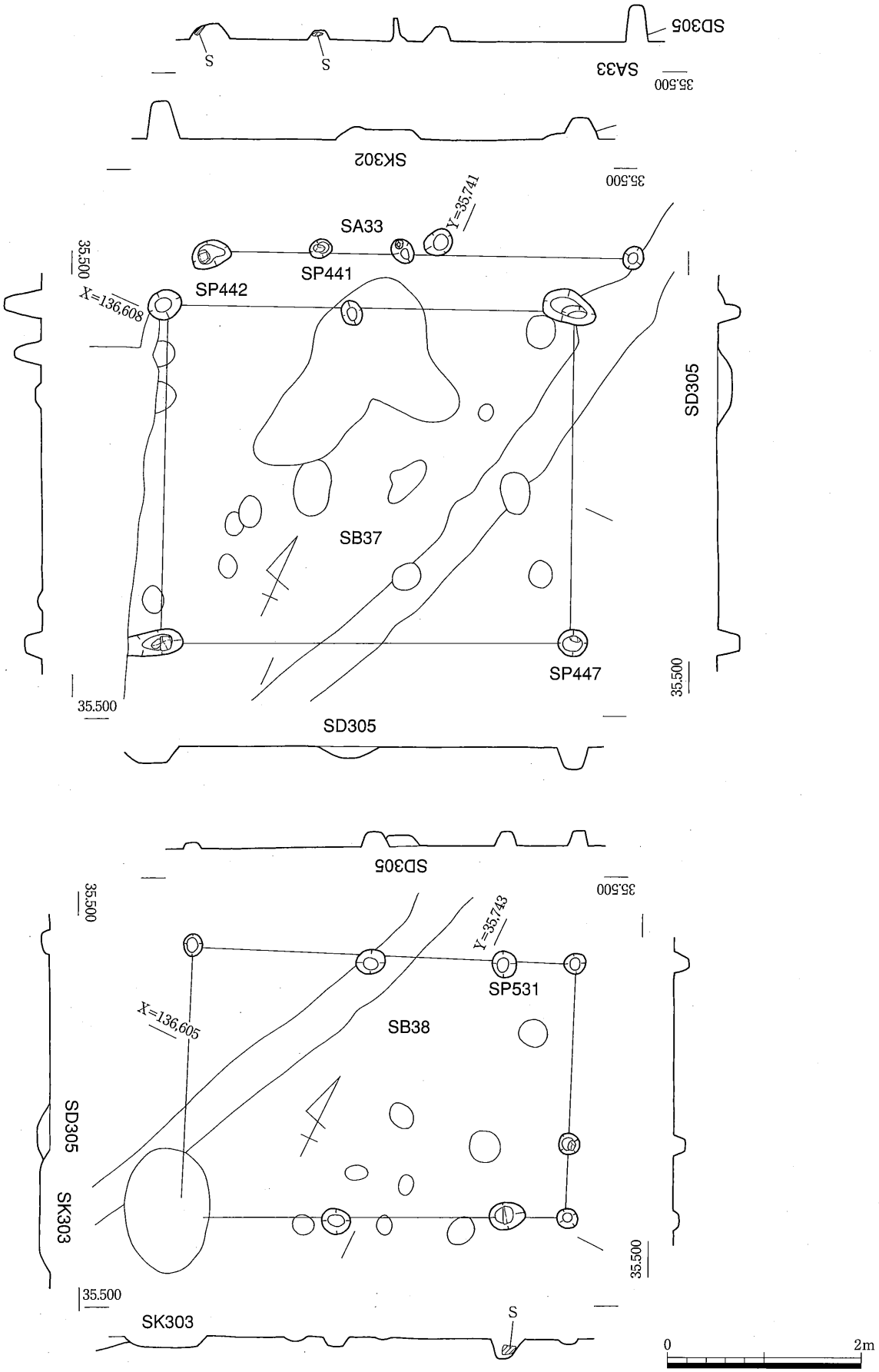
Ⅲ区西端付近で検出した掘立柱建物跡である。桁行３間（4.0m）、梁間２間（2.6m）で、面積は10.4㎡、主軸方位はN25°Wである。柱間はばらつきが見られ、桁行方向は西側の柱間から概ね1.8m程度、1.3～1.7m、0.7m程度、梁間方向は南側が0.8m、北側が1.9mである。柱穴は円形で直径22～34cm、深さは８～23cmを測る。南側の柱筋の東から２穴目と東側の柱筋の南から２穴目には根石が残されていた。北側の柱列の東から２穴目（SP531）からは土師質土器が出土した。

167は土師質土器小皿である。口径は7.2cm、底部はヘラ切りである。

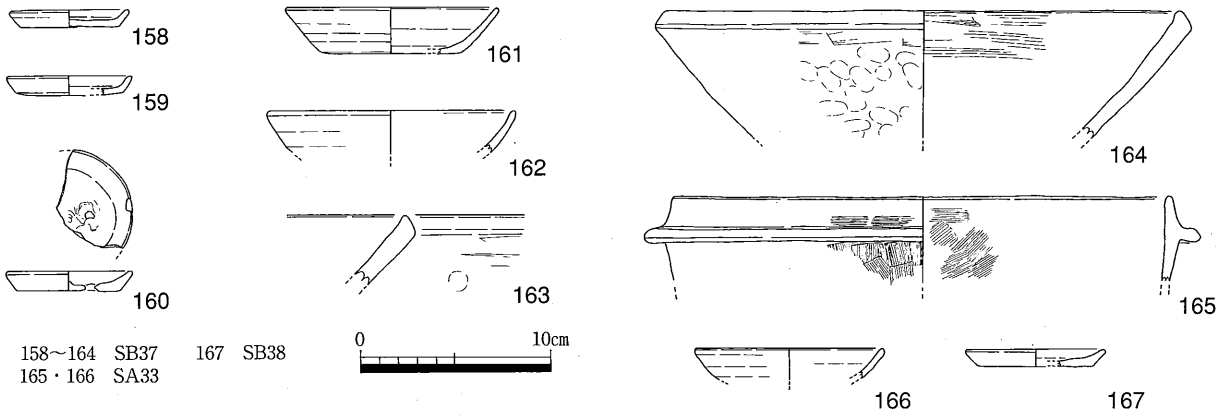
遺物の時期は概ね13世紀後半頃であり、遺構の時期も同時期と考えられる。

Ⅲ区SB39（第44図）

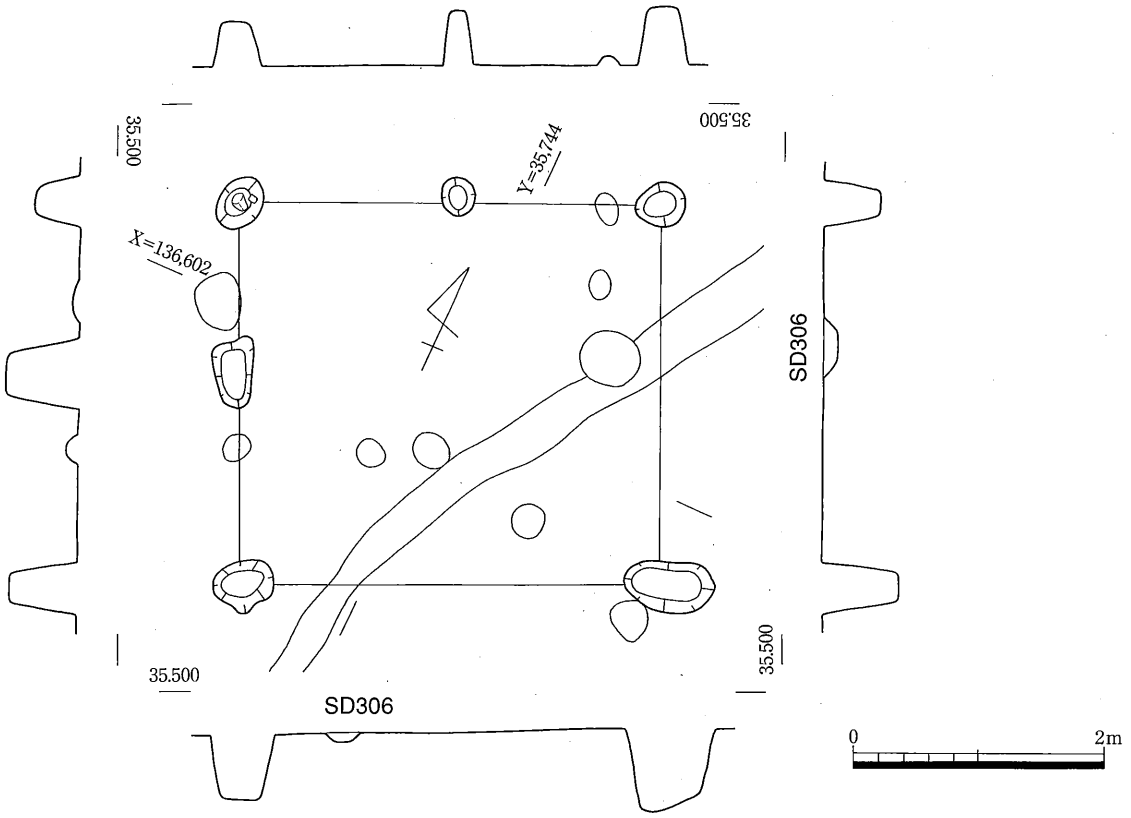
Ⅲ区西端付近で検出した掘立柱建物跡である。SB38の南側に接して検出した。桁行２間（3.3m）、梁間２間（3.0m）で、面積は9.9㎡、主軸方位はN25°Wである。東・南側の柱筋の中央のピットは検出できなかった。柱間は桁方向は1.6～1.7m、梁間は1.4～1.7mである。柱穴は概ね円形で34～47cm、深さは36～64cmである。埋土中からは出土遺物はなかったが、周辺の掘立柱建物跡と概ね同時期と考えられる。



第42図　Ⅲ区SB37・38・SA33平・断面図（1/60）



第43図　Ⅲ区SB37・38・SA33出土遺物（1/4）

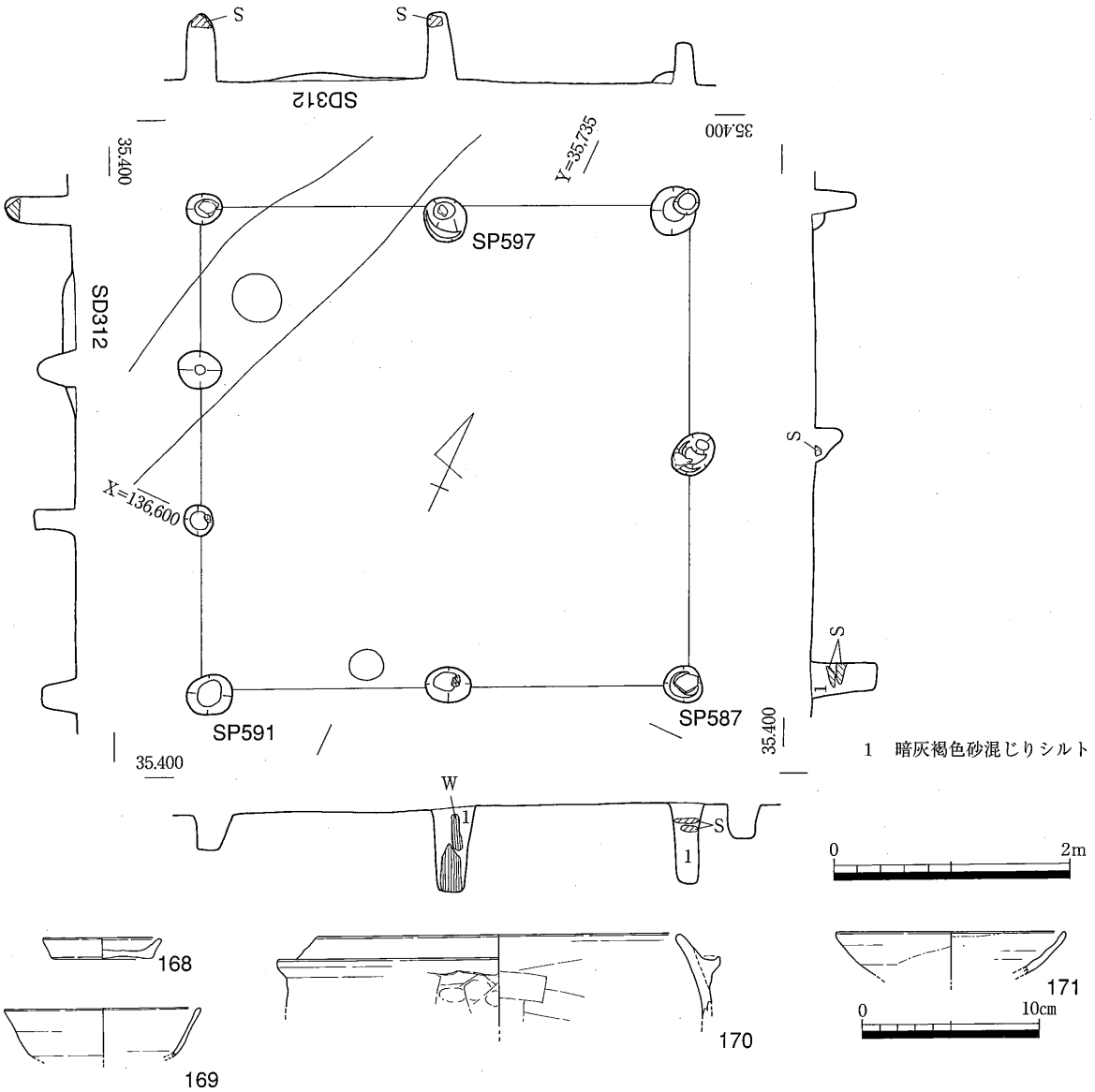


第44図　Ⅲ区SB39平・断面図（1/60）

Ⅳ区SB41（第45図）

Ⅳ区東部で検出した掘立柱建物跡である。桁行２間または３間（4.1m）、梁間２間（4.0m）、面積は16.4㎡で、主軸方位はN25°Wである。西側の柱穴列は３間で、柱間は1.35～1.45m、他の柱穴列は２間で、柱間は2.0～2.1mを測る。柱穴は円形で直径は28～42cm、深さ21～73cmである。南側柱列の中央の柱には直径16cmの柱材が残されていた。北側柱列の西から１・２穴目には根石が残され、南東隅の柱穴には石が落ち込んだ状態で検出された。柱穴からは土師質土器、須恵器が出土した。

168～170は土師質土器である。168は小皿、169は杯で、13世紀～14世紀前半のものである。170は足釜で、鍔部分を貼り付ける。鍔の下部は指押えの後軽く板ナデで調整する。171は須恵器埦である。口縁端部は重ね焼きにより変色する。ヘラミガキは観察できない。



第45図　Ⅳ区SB41平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

遺構の時期は出土遺物により13世紀後半～14世紀末頃である。

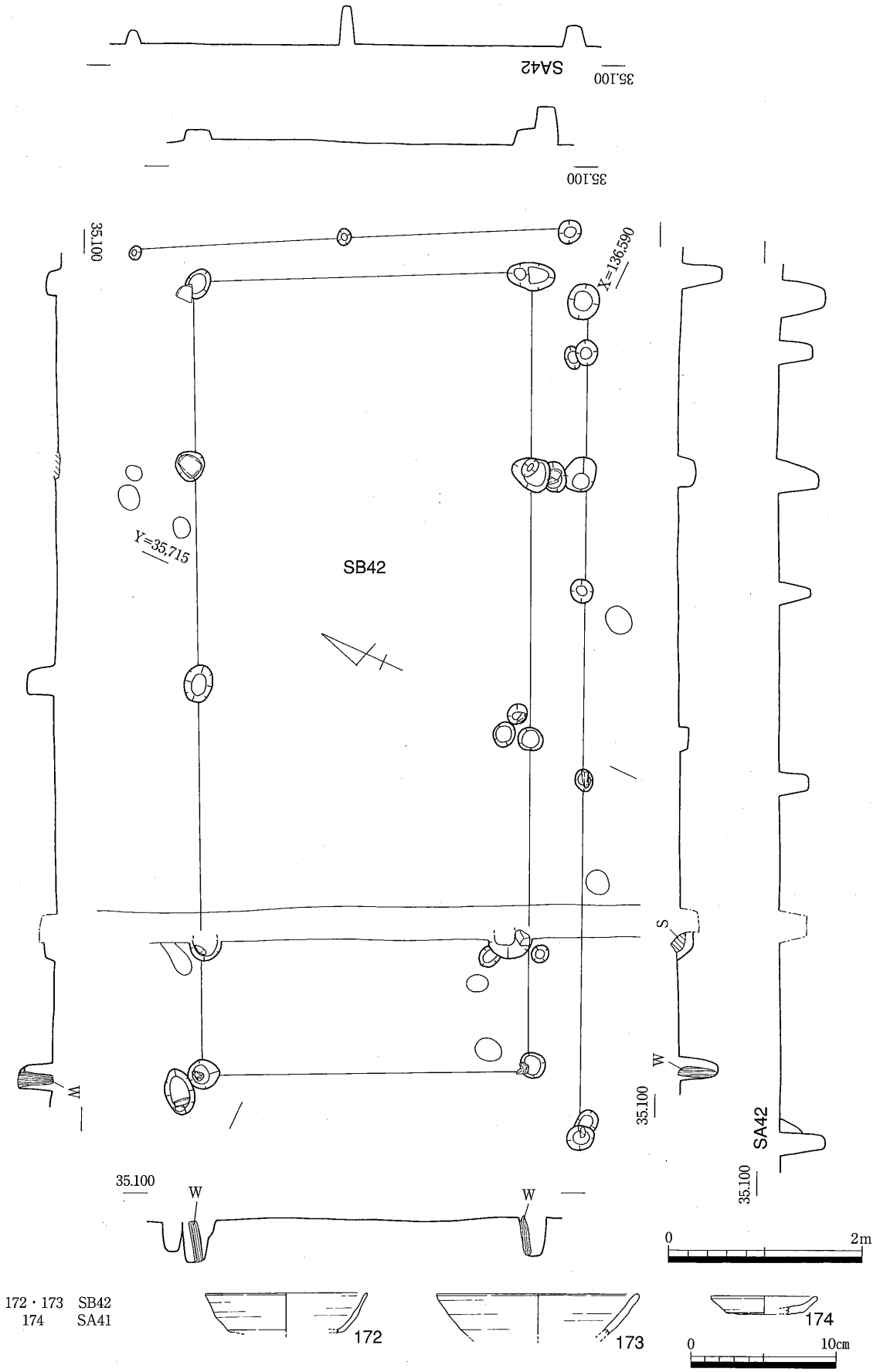
Ⅳ区SB42・SA41（第46図）

Ⅳ区西部で検出した掘立柱建物跡と柵列である。桁行４間（8.2m）、梁間１間（3.4m）で、面積は26.7㎡、主軸方位はN24°Wである。桁行の柱間は概ね2.0～2.8mであるが、最も西側の柱間だけは1.4mで狭い。柱穴は円形で、直径25～42cm、深さは10～40cmを測る。西側の柱穴列には直径10cmの柱材が、北側柱列の東から２穴目には根石が残されていた。

SB42の東側40cm、南側50cmの位置でSA41を検出した。東側の柱列は２間分（4.5m）で、柱間は2.2～2.3mである。柱穴は円形で、直径12～22cm、深さ16～42cmである。南側の柱列は６穴を検出した。柱間は0.6～3.6mでばらつきがある。柱穴は円形で直径22～34cm、深さ32～46cmを測る。

172・173はSB42柱穴跡から出土した遺物である。ともに土師質土器杯である。174はSA41出土遺物で、土師質土器小皿である。底部はヘラ切りである。

遺構の時期は出土遺物により13世紀前半～中頃である。



第46図　Ⅳ区SB42・SA41平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

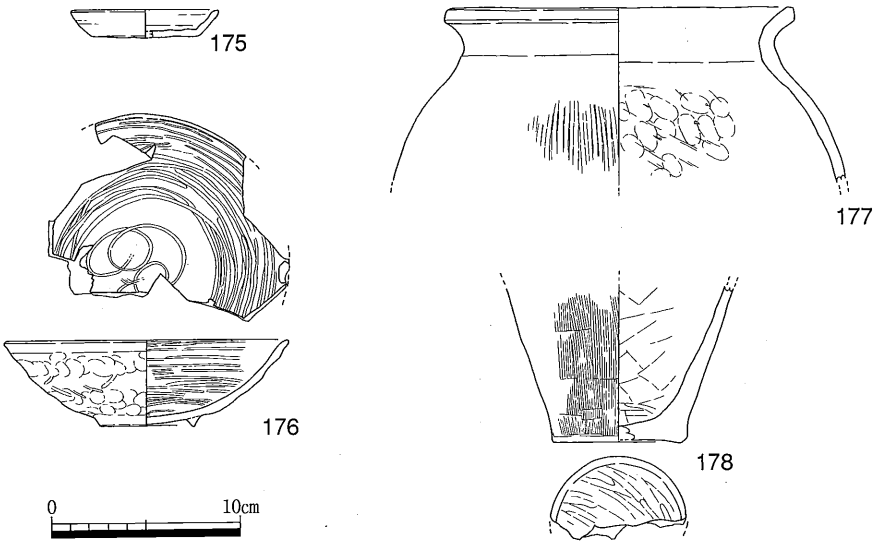
Ⅰ区ピット（第47図）

Ⅰ区のおもに北部で円形のピットを200穴程度検出した。特に北東部分で密集度が高く、掘立柱建物跡があった可能性が高いが、復元するまでには至らなかった。

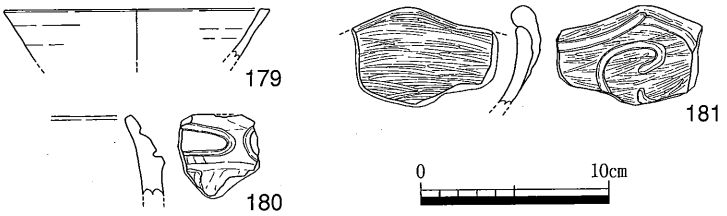
175・176はSP123出土遺物である。175は土師質土器小皿、176は和泉産瓦器埦である。外面のヘラミガキは雑で、指押え痕跡が多く残る。ピットの時期は13世紀前半頃である。

177はSP190出土遺物で、弥生土器甕である。外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りをする。遺物は弥生土器中期後半頃と考えられるが、周囲の遺構状況から混入の可能性があろう。

178はSP220出土遺物で、弥生土器底部として図化したが、蓋の可能性もある。弥生時代中期頃の遺物であるが、中世の溝であるSD109の上面で検出していることから、ピットの時期はそれ以降である。



第47図　Ⅰ区ピット出土遺物（1/4）



第48図　Ⅱ区ピット出土遺物（1/4）

Ⅱ区ピット（第48図）

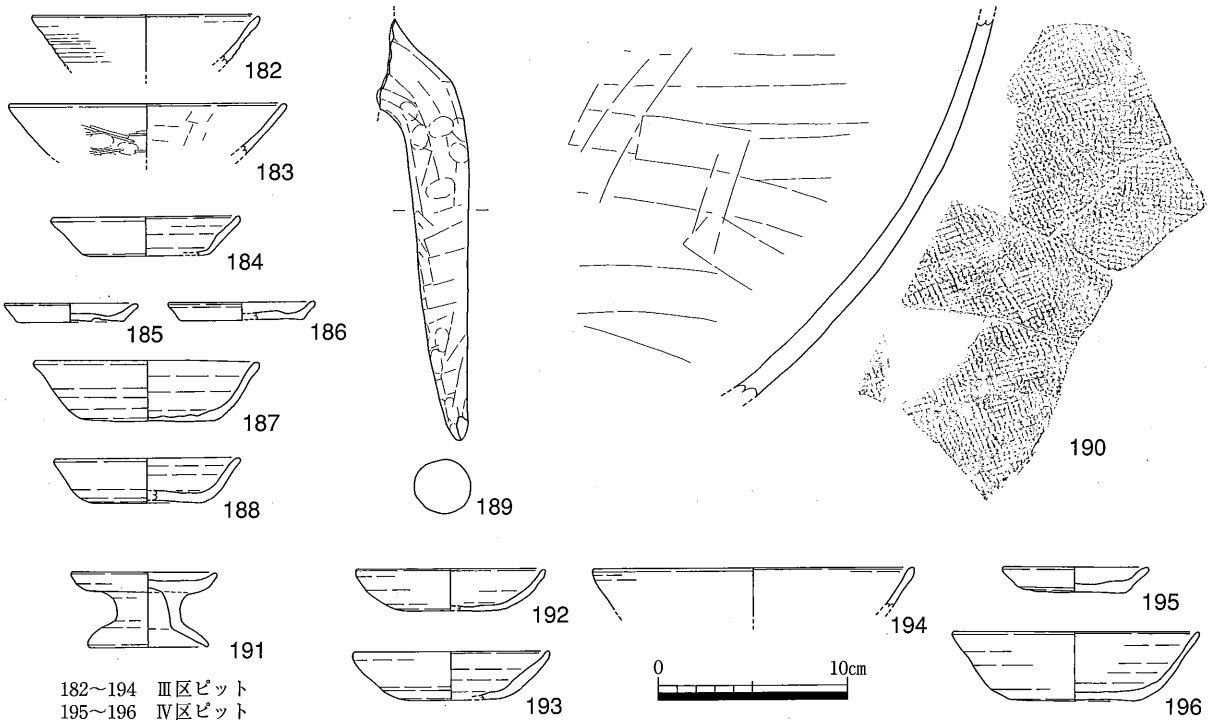
Ⅱ区はピットの密度は低く、検出したのは50穴程度であった。特に南西部では遺構は希薄であった。遺物が出土したピットはⅡ区の中央部付近であった。

179はSP034から出土した土師質土器杯である。SP034は弥生時代後期の遺構であるSK210を掘り込んでいる。口縁端部は角張っている。13世紀前半頃の遺物である。180はSP045から出土した縄文土器浅鉢である。SP045はSD211を掘り込む。波状口縁を持ち、外面にはヘラによる渦巻状の文様を持つ。縄文時代後期後半で、SR11などと同時期の遺物であるが、弥生時代中期の溝であるSD211を掘り込んでいるので、遺構の時期はそれ以降である。181はSP050出土遺物で、縄文土器浅鉢である。口縁部は波状口縁で、高い部分は肥厚させる。外面にはヘラ描き文様を施す。180同様縄文時代後期後半のものであるが、SP050はSK210を掘り込んでおり、遺構の時期はそれ以降である。

Ⅲ区ピット（第49図）

Ⅲ区では13世紀代の集落が営まれており、ピットは約500基を検出した。概ね集落と同時期のものと考えられる。

182・183はSP001から出土した遺物である。182は土師質土器杯である。外面の轆轤目は顕著で、底部外面はヘラ切りの後板状圧痕がある。183は須恵器埦で、内面には板ナデ痕を残す。184はSP013から出土した土師質土器杯である。185～187はSP217から出土した土師質土器である。185・186は小皿、187は杯である。187には底部外面に板状圧痕が残る。188・189はSP218から出土した土師質土器で、188は杯、189は足釜の脚部



第49図　Ⅲ・Ⅳ区ピット出土遺物（1/4）

である。190はSP316から出土した須恵器甕である。外面は格子タタキ、内面は板ナデである。191はSP322から出土した土師質土器の脚付小皿である。小皿に脚を足した器形で、接合粘土はほとんどない。192～194はSP339から出土した遺物である。192・193は土師質土器杯、194は須恵器埦小片である。

出土遺物から、いずれもピットの時期は概ね13世紀中頃～後半と考えられる。

Ⅳ区ピット（第49図）

Ⅳ区では南部で中世の集落の広がりが認められたが、北部ではピットはほとんど検出できず、ピットの数も減少する。

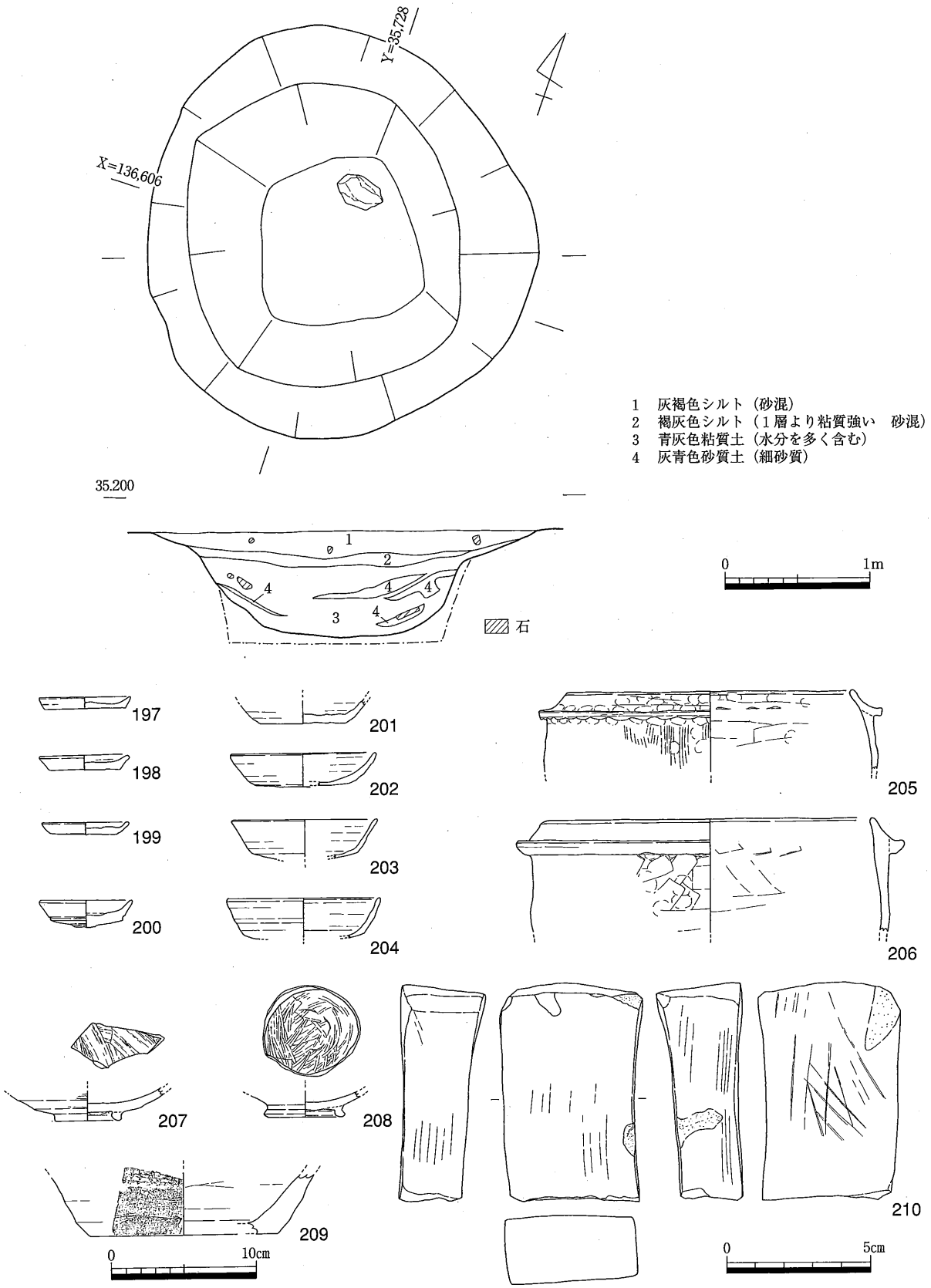
195・196はSP667から出土した土師質土器である。SB41の南側で検出した。195は小皿、196は杯である。196は底部に板状圧痕が残る。13世紀前半頃の遺物で、遺構の時期もこの頃と考えられる。

Ⅳ区SE41（第50図）

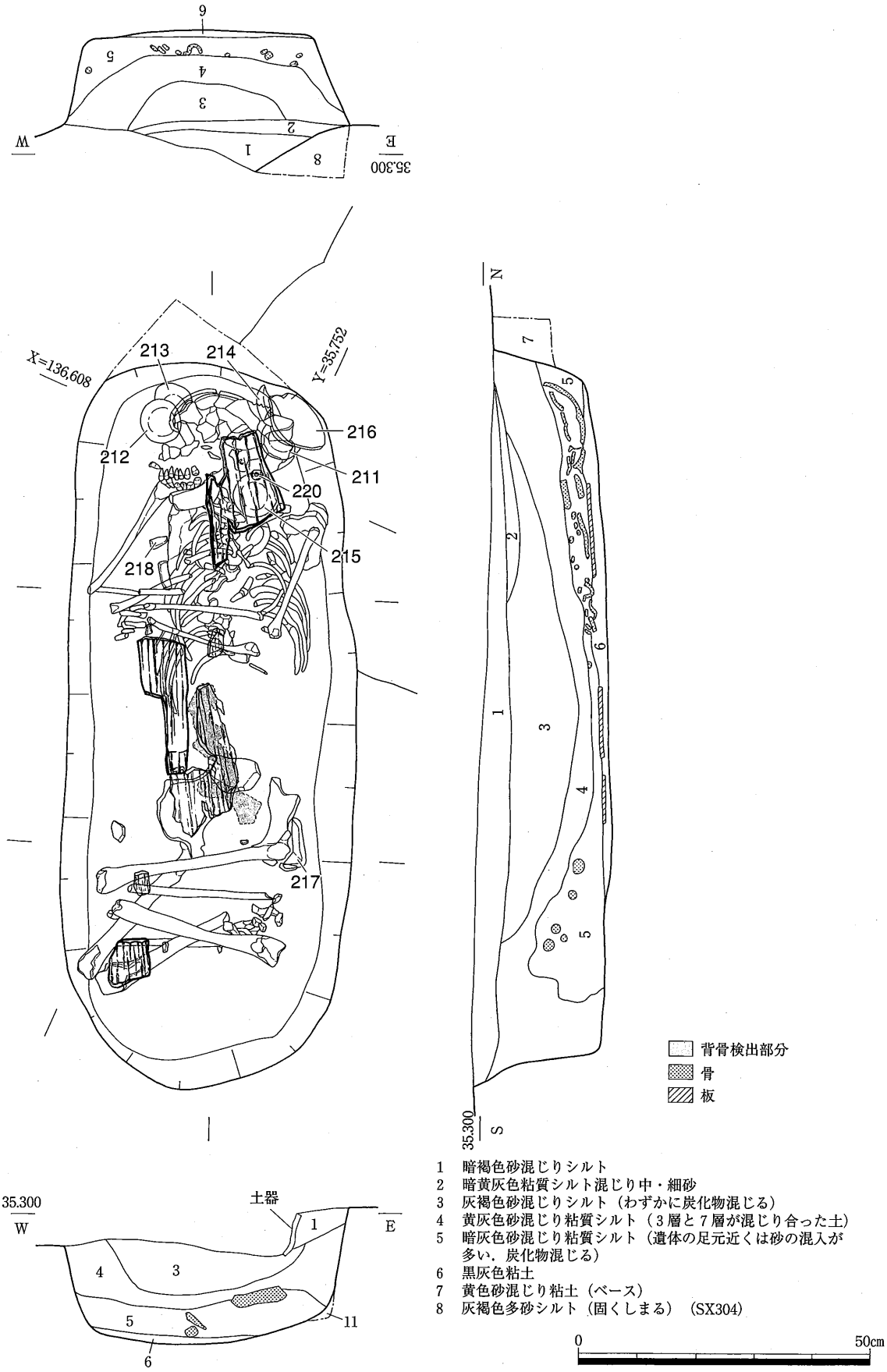
Ⅳ区東寄りで検出した素掘りの井戸である。円形を呈し、直径2.68～2.84mを測るが、上部は法面が崩れてなだらかになっているので、本来は1.85～2.10m、深さは75cmの素掘りの井戸と考えられる。井戸の埋土はおおむね水分を多く含む青灰色粘質土で、所々で筋状に灰青色砂質土を含む。埋土には木の葉や枝などの植物遺存体が多く含まれる。埋土中からは土師質土器や須恵器が出土した。

197～206は土師質土器である。197～200は小皿で、口径5.8～6.4cmを測る。底部は回転ヘラ切りで、197・199には板状圧痕が残る。201～204は杯である。口径8.2～9.8cmで、体部には轆轤目が顕著に残る。205・206は足釜で、205は鍔部分から口縁部分にかけてを、206は鍔部分を粘土で足している。206には鍔の下部に工具痕が残る。207・208は須恵器埦である。外面にはヘラミガキは観察できず、内面には放射状の板ナデ痕が残る。209は須恵器甕底部である。内面はナデ、外面には格子タタキ痕が残る。210は砥石である。

遺構の時期は出土遺物により13世紀後半頃と考えられる。

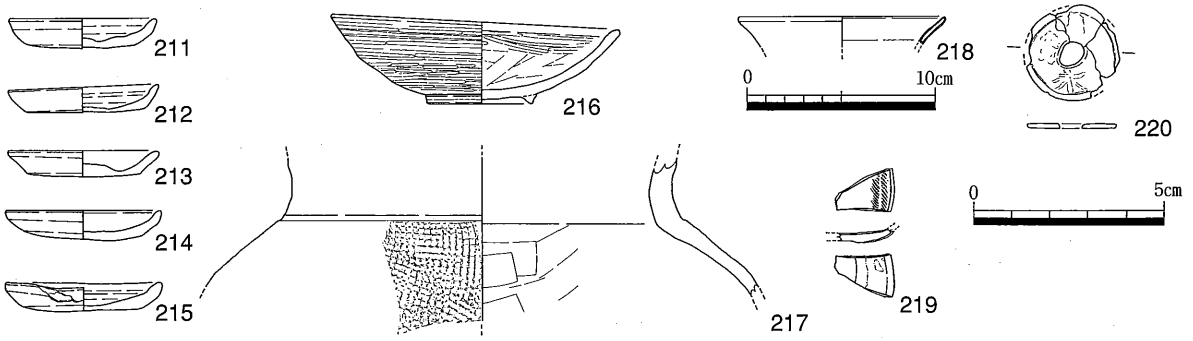


第50図　Ⅳ区SE41平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



1　暗褐色砂混じりシルト
2　暗黄灰色粘質シルト混じり中・細砂
3　灰褐色砂混じりシルト（わずかに炭化物混じる）
4　黄灰色砂混じり粘質シルト（3層と7層が混じり合った土）
5　暗灰色砂混じり粘質シルト（遺体の足元近くは砂の混入が多い．炭化物混じる）
6　黒灰色粘土
7　黄色砂混じり粘土（ベース）
8　灰褐色多砂シルト（固くしまる）（SX304）

第51図　Ⅲ区ST01平・断面図（1/10）



第52図　Ⅲ区ST01出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区ST01（第51・52図）

Ⅲ区南部で検出した。集落の南端に近く、ピットの密度が低くなる場所である。隅丸方形を呈し、長軸1.24m、短軸0.49m、深さは22cmを測る。最下層約1.5cmには黒灰色粘土層、その直上に底板を敷き、遺体が埋葬される。遺体は北枕西向きの頭位で、腕は胸の前でしっかり組まれ、脚は西向きに倒された状態で折り曲げられているが、脚の骨の下部には砂の混入が多く、土圧で西側へ倒れたのかもしれない。遺体の頭部には土師質土器小皿と須恵器埦が置かれていた。また、遺体の頭部の下部、底板の直上に宋銭と考えられる銅銭が1枚副葬されていた。遺体の底には底板が敷かれ、遺体の上部に板状の木製品の断片が残されていたが、断面観察では側板に相当する痕跡は認められず、自然堆積の様相を示しており、また、側壁の設置できるスペースもないので、木棺墓ではなく、土坑墓であったと考えられる。

211～216は頭部直上付近から出土した土器である。211～215は土師質土器小皿である。口径は7.6～8.2cm、器高1.4～1.6cmで、底部にはヘラ切りの後板状圧痕が残る。215は口縁部を1ヶ所窪ませている。216は須恵器埦である。外面には密にヘラミガキを施し、内面には放射状の板ナデを施す。217は須恵器甕である。埋没過程で入り込んだものと考えられ、土層の上部から出土した。外面は格子タタキ、内面は板ナデをする。十瓶産と考えられる。218は青磁椀小片である。219は青磁皿底部小片である。見込みには片彫り状の文様が彫り込まれる。同安窯系の製品である。220は銅銭である。底板の直上、遺体頭部の下に埋葬されていた。傷みが著しく、銭種は明らかではない。

遺構の時期は副葬された土器から13世紀前半と考えられ、周辺のピットや掘立柱建物跡よりわずかに早いようである。

Ⅲ区ST02（第53・54図）

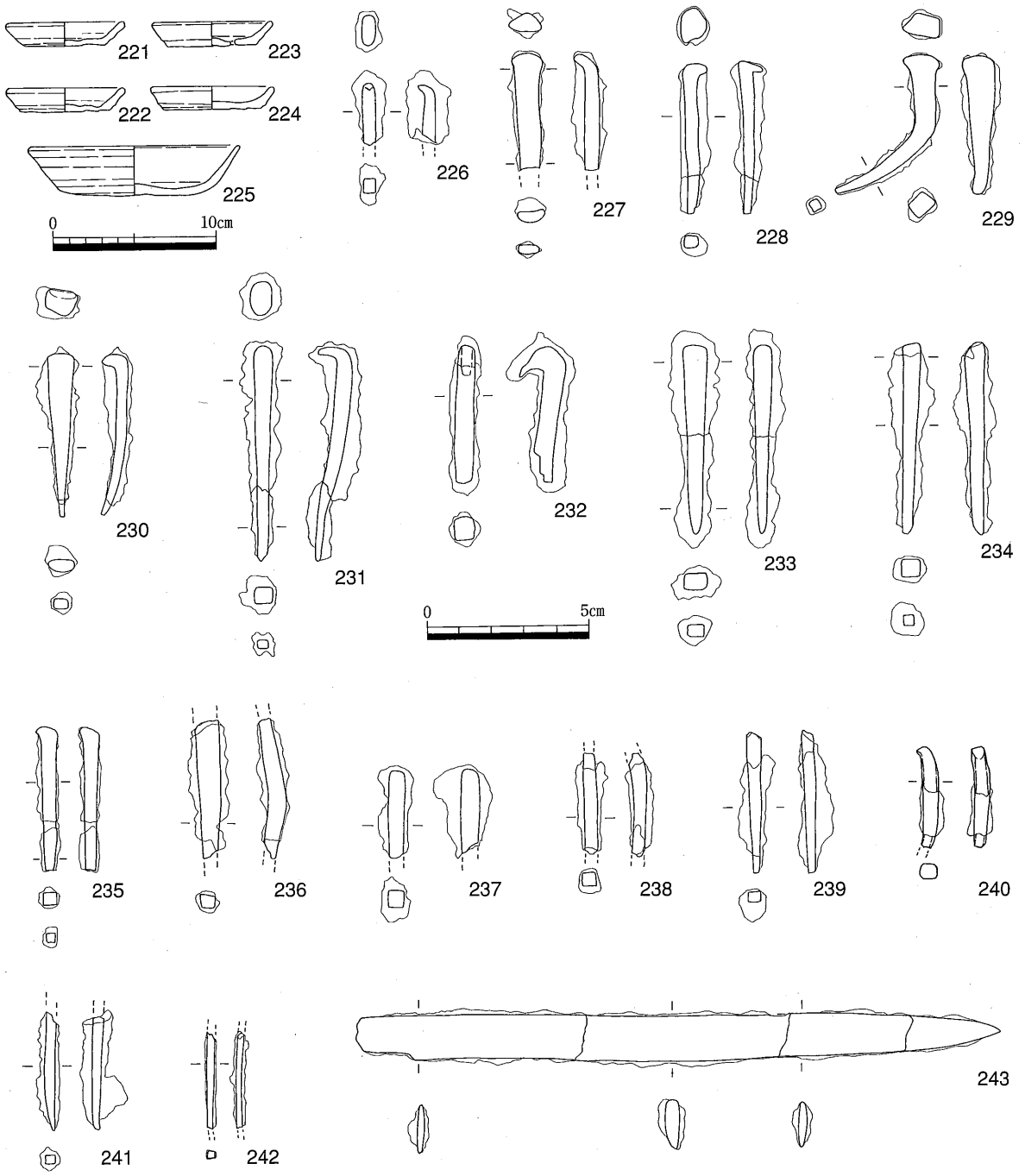
Ⅲ区南端付近、ST01より3.5m南側で検出された。遺構の主軸はST01と同じである。隅丸方形を呈し、長軸1.23m、短軸0.91m、深さは20cmである。土坑内は長軸1.08m、短軸0.62mの長方形の範囲で20～60cm大の川原石が敷かれ、石敷きの外縁上には長さ50～110cmの石を積んでいる。土坑を掘削した後、ベースとよく締まった暗灰色砂混粘質土との混ざった土を土坑法面に貼り付け、底部は黒灰色粘土、側面はよく締まった暗灰色砂混粘質土で石を固定する。石敷きの上面では、北側に頭蓋骨片、中央付近に上腕骨片、南側に大腿骨片と考えられる骨片が出土した。残存状況は悪く、どのような体位で埋葬されたのかは明らかではないが、残っている骨を観察する限りでは、頭位は北向きで、腕、足とも折り曲げられていると考えられる。頭蓋骨の西側に土師質土器杯が1点、足元に土師質土器小皿が4点副葬されていた。また、石敷きの4隅それぞれに3～4点の釘が、また、東辺中央付近に1点鉄釘が出土した。おそらく石敷きの上部に木棺を据え、4隅にそれぞれ釘を打ち付けたと考えられる。遺体の東側の腕付近では鉄刀が副葬されていた。ST01とは関連が深いと考えられるが、ST01より埋葬施設や副葬品は整っている。

221～225は土師質土器である。221～224は小皿である。口径7.0～7.4cm、器高1.4～1.5cmである。底部は回

第53図　Ⅲ区ST02平・断面図（1/10）

転ヘラ切りのみである。225は杯である。底部には回転ヘラ切りの後の板状圧痕が残る。226～242は鉄釘である。226・242以外は石敷きの４隅と石敷きの東辺の中央付近で出土したもので、木棺に使われたものであろう。226・242は出土位置が明らかではない。243は遺体の東側の腕付近に副葬されていた鉄刀である。

遺構の時期は土師質土器の時期から13世紀前半と考えられ、概ねST01と同時期である。



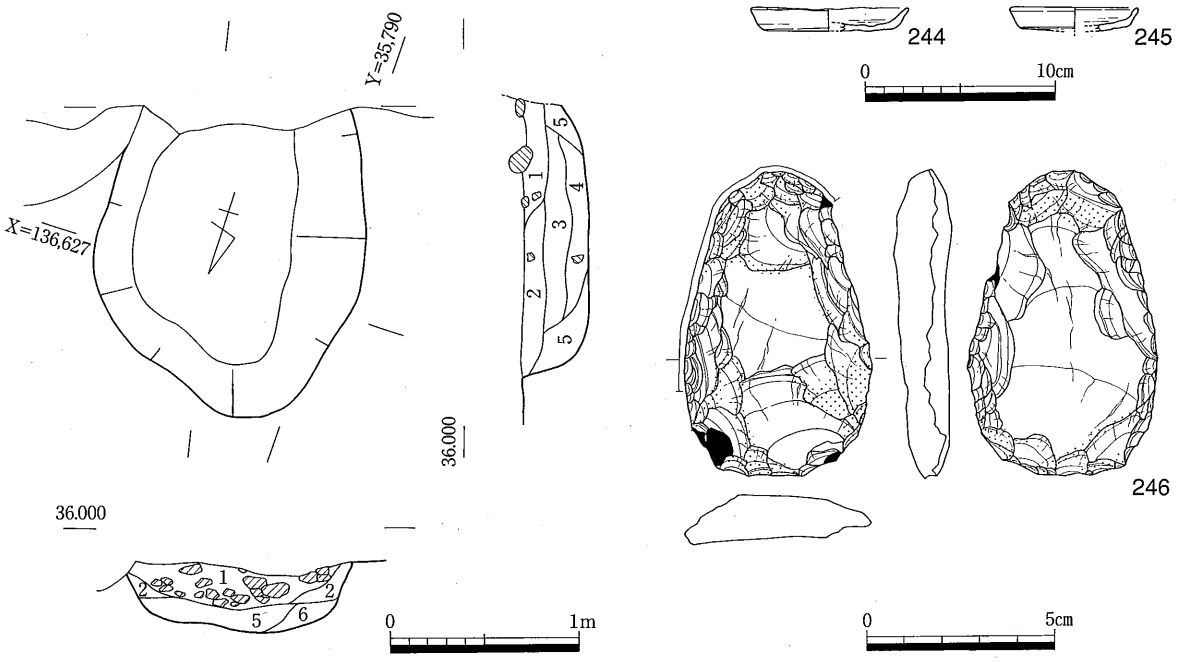
第54図　Ⅲ区ST02出土遺物（1/4・1/2）

Ⅱ区SK207（第55図）

Ⅱ区中央部付近で検出した土坑である。楕円形と考えられるが、土坑の南端部分は後世の撹乱により消失する。長軸1.54m以上、短軸1.35m、深さは33cmを測る。埋土は下部に暗灰褐色砂質土が、上部には灰褐色・褐灰色・灰色砂質土が堆積し、最上層からは礫が多量に出土した。埋土中からは土師質土器小皿、サヌカイト製打製石器が出土した。

244・245は土師質土器小皿である。245は口縁端部に調整痕跡がなく、口縁端部はガタガタで、端部は角張っている。13世紀前半頃である。246はサヌカイト製打製石斧である。上部には著しい敲打痕および摩滅痕が残る。

遺構の時期は13世紀前半頃と考えられる。



1　灰褐色礫混じり砂質土（拳大～φ30cm程の礫が多量に詰まっている）
2　灰褐色砂質土（φ3cmの礫をわずかに含む）
3　褐灰色砂質土（風化した礫（黄色砂岩）が混じる）
4　灰色砂質土（少し粘り気がある。φ5cm程の礫をわずかに含む。3層と同じ風化した礫が混じる）
5　暗灰褐色砂質土（3層と同じ風化した礫をわずかに含む）
6　暗灰褐色砂質土（5層より明るい）

第55図　Ⅱ区SK207平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

Ⅱ区SK210（第56図）

Ⅱ区中央やや東寄りで検出した土坑である。隅丸方形を呈すると考えられるが、土坑の北半分は後世の削平により消失する。一辺3.4m程度、深さ34cmを測り、断面形状は浅い逆台形、埋土は下層がベースブロック混の灰黄褐色細砂質土・暗灰色細砂混シルト、中層が概ね灰褐色中砂質土・礫混細砂質土、上層は暗褐灰色細砂質土の埋土で充填されている。遺物は主に中層から出土した。埋土中からは土師質土器小皿・杯・足釜片などが出土した。

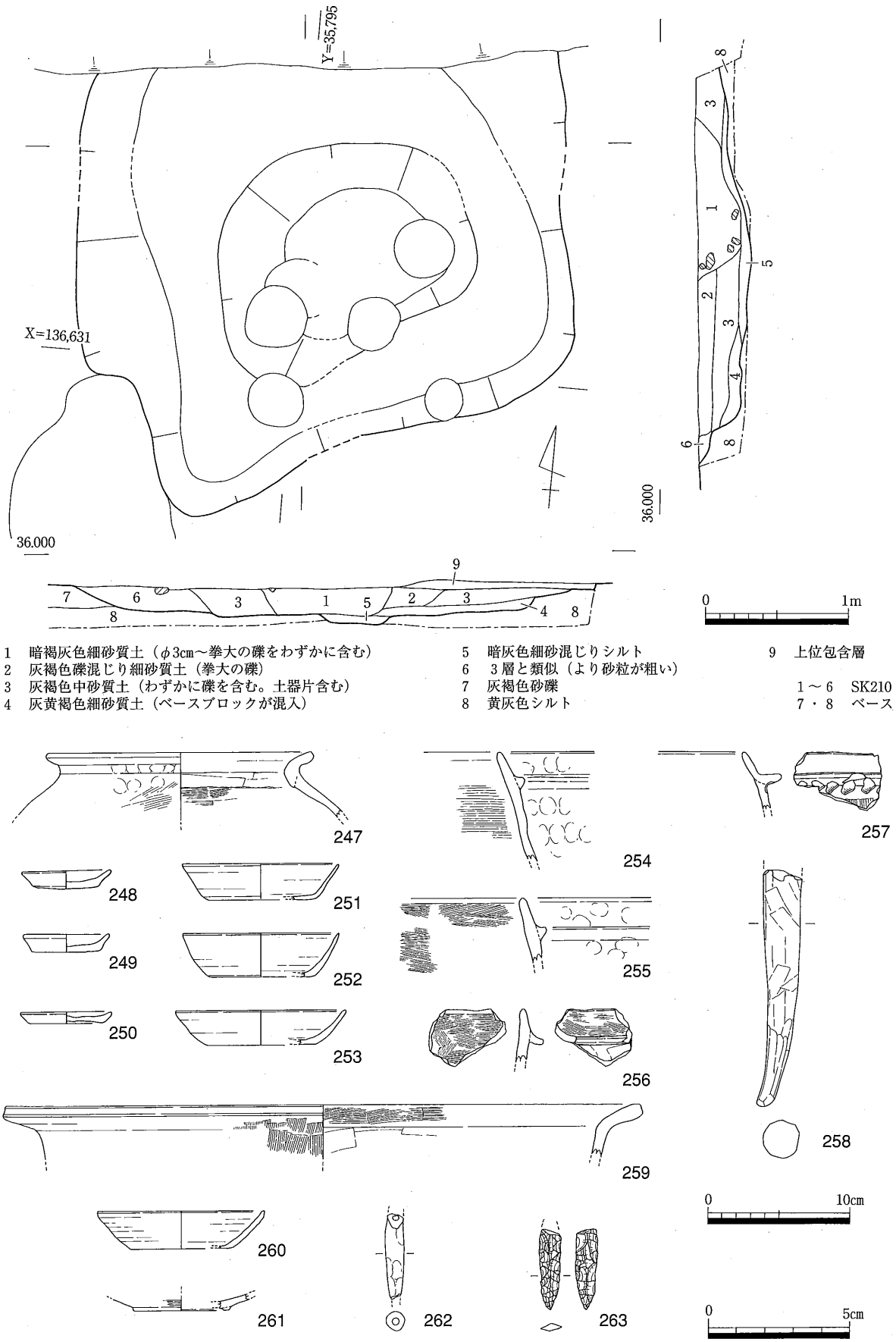
247は弥生土器甕である。弥生時代後期のもので、SD214からの混入と考えられる。248～259は土師質土器である。248～250は小皿で、口径は6cm前後である。251～253は杯で、口径は11～12cm程度を測る。底部は小皿・杯ともヘラ切りである。254～257は足釜口縁部で、いずれも小破片である。257以外は鍔部分を後から付け、内面は刷毛により調整する。257は鍔から口縁部にかけて後から付け足し、外面鍔下部付近には工具痕が残る。258は足釜脚部である。259は鍋小片である。260・261は須恵器である。260は杯で、体部には轆轤目を顕著に残す。261は小片で、退化した高台を付け、外面にはヘラミガキが残る。262は管状土錘である。上・下部とも欠損する。SD214からの混入と考えられる。263はサヌカイト製石錐である。

出土遺物により遺構の時期は13世紀後半頃と考えられる。

Ⅲ区SK307（第57図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸88cm、短軸42cm、深さ11cm、埋土は黒色砂質土である。遺構の前後関係によりSK308より新しく、ピット群より古い。埋土中からは土師質土器片等が出土した。

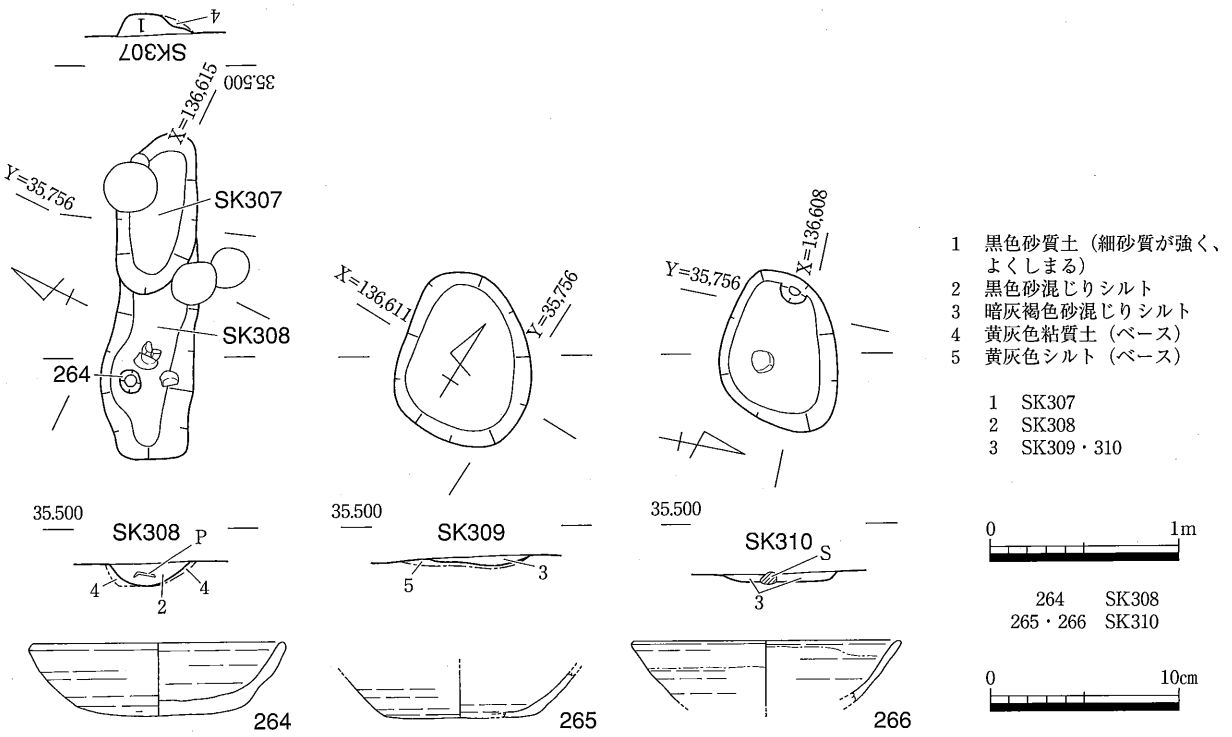
出土遺物により、遺構の時期は中世頃と考えられる。



1　暗褐灰色細砂質土（φ3cm～拳大の礫をわずかに含む）
2　灰褐色礫混じり細砂質土（拳大の礫）
3　灰褐色中砂質土（わずかに礫を含む。土器片含む）
4　灰黄褐色細砂質土（ベースブロックが混入）
5　暗灰色細砂混じりシルト
6　3層と類似（より砂粒が粗い）
7　灰褐色砂礫
8　黄灰色シルト
9　上位包含層

1～6　SK210
7・8　ベース

第56図　Ⅱ区SK210平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第57図　Ⅲ区SK307～310平・断面図（1/40）、SK308・310出土遺物（1/4）

Ⅲ区SK308（第57図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。SK307の下部から検出されたため、全体の規模は不明であるが、長軸1.1m程度、短軸48cm、深さ11cm、埋土は黒色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

264は土師質土器杯である。底部外面には板状圧痕が残る。

遺構の時期は出土遺物により13世紀前半頃と考えられる。

Ⅲ区SK309（第57図）

Ⅲ区中央南寄りで検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸93cm、短軸72cm、深さ5cm、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

Ⅲ区SK310（第57図）

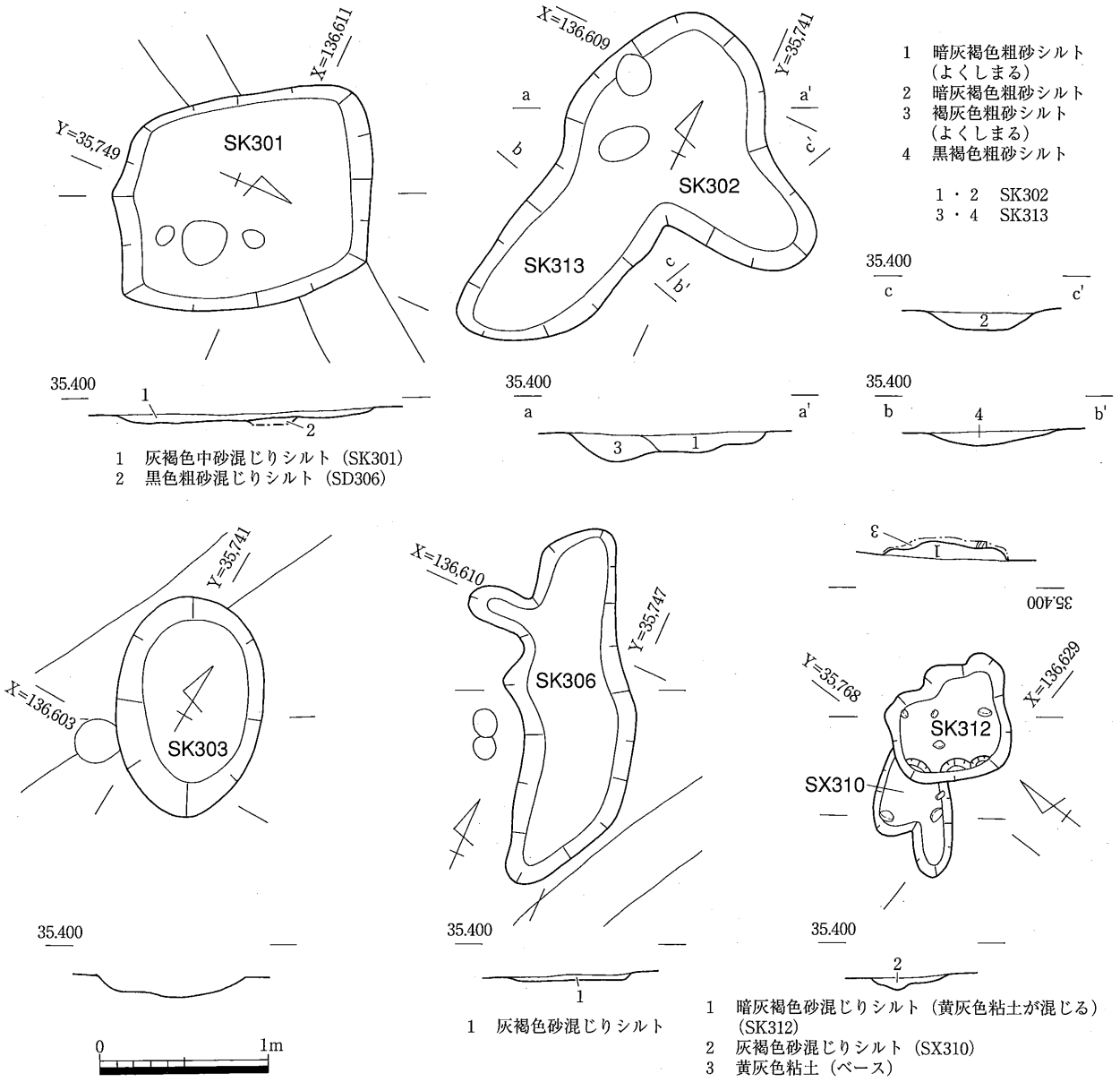
Ⅲ区中央南寄り、SK309の2.4m南側で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸80cm、短軸48cm、深さ5cm、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。遺構の規模・形状はSK309と類似し、埋土はこれと同じである。埋土中からは土師質土器、須恵器が出土した。

265は土師質土器杯である。266は須恵器埦である。口縁端部に重ね焼き痕跡が残る。

遺構の時期は出土遺物により13世紀前半頃と考えられる。

Ⅲ区SK301（第58図）

Ⅲ区中央やや西寄りで検出した土坑である。SD306の上面で検出した。概ね隅丸長方形を呈し、長辺1.52m、短辺1.26m、深さ6cmで、埋土は灰褐色中砂混シルトである。埋土中からは須恵器、土師質土器杯小片が出土した。



第58図　Ⅲ区SK301・302・303・306・312・313・SX310平・断面図（1/40）

Ⅲ区SK303（第58図）

Ⅲ区西端付近で検出した土坑である。SD305の上面で検出した。楕円形を呈し、長軸1.31m、短軸0.88m、深さは14cmである。埋土中からは須恵器杯片、土師質土器杯片が出土した。

須恵器杯片はSD305からの混入の可能性が高く、遺構の時期は土師質土器杯の時期の中世頃と考えられる。

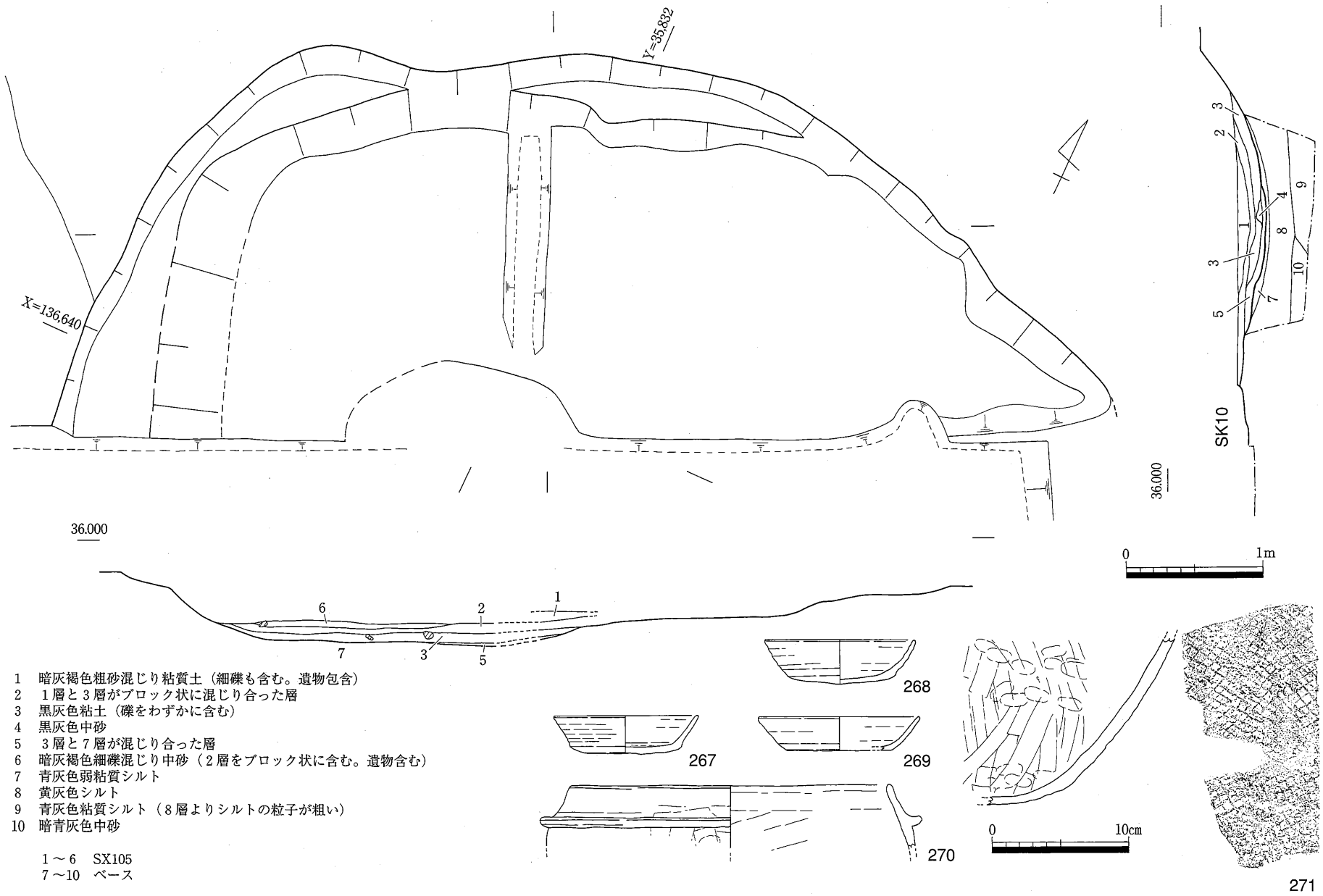
Ⅲ区SK313（第58図）

Ⅲ区西部で検出した土坑である。SK302と重複し、断面観察によりSK302より古い。全体の規模・形状はSK302との境が不明確なため明らかではないが、概ね楕円形と考えられ、長軸2.33m、短軸0.73m、深さ8cm、埋土は黒褐色粗砂シルト・褐灰色粗砂シルトである。

埋土中からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

Ⅲ区SK302（第58図）

Ⅲ区西部で検出した土坑である。SK312と重複し、断面観察によりSK312より新しい。概ね楕円形を呈する



1　暗灰褐色粗砂混じり粘質土（細礫も含む。遺物包含）
2　１層と３層がブロック状に混じり合った層
3　黒灰色粘土（礫をわずかに含む）
4　黒灰色中砂
5　３層と７層が混じり合った層
6　暗灰褐色細礫混じり中砂（２層をブロック状に含む。遺物含む）
7　青灰色弱粘質シルト
8　黄灰色シルト
9　青灰色粘質シルト（８層よりシルトの粒子が粗い）
10　暗青灰色中砂

１～６　SX105
７～10　ベース

第59図　Ⅰ区SX105平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

と考えられ、長軸1.66m、短軸は1.5m程度、深さ10cm、埋土は暗灰褐色粗砂シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅲ区SK306（第58図）

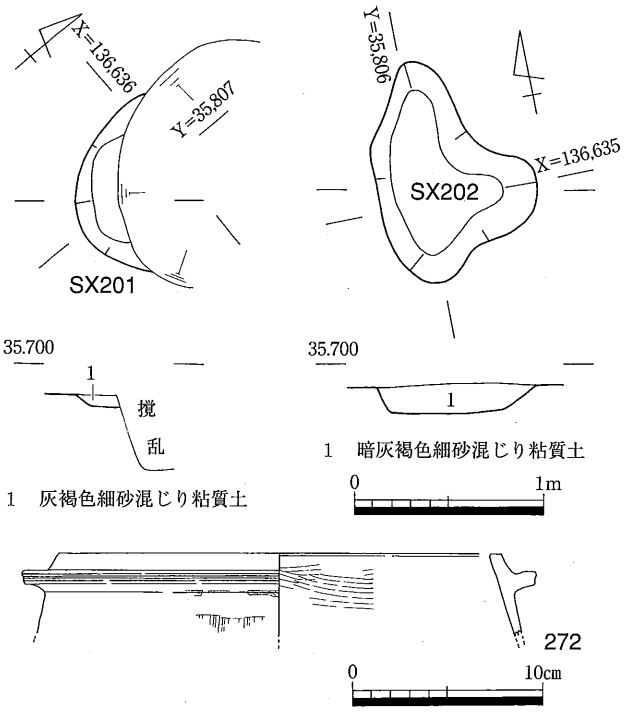
Ⅲ区南西寄りで検出した土坑である。隅丸長方形を呈し、長軸1.94m、短軸0.66m、深さ4cm、埋土は灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器杯小片が出土した。

遺構の時期は13世紀前後と考えられる。

Ⅲ区SK312（第58図）

Ⅲ区東部で検出した土坑である。やや歪な隅丸方形を呈し、一辺0.72m、深さ11cm、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。遺構の重複関係によりSX310より新しい。埋土中からは弥生土器底部、土師質土器杯片が出土した。

遺構の時期は13世紀前後と考えられる。



第60図　Ⅱ区SX201・202平・断面図（1/40）、SX201出土遺物（1/4）

Ⅲ区SX310（第58図）

Ⅲ区東部で検出した遺構である。遺構の東半部はSK312により消失する。不整形で長軸0.80m以上、短軸0.60m、深さ7cm、埋土は灰褐色砂混シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅰ区SX105（第59図）

Ⅰ区南東隅付近で検出した遺構である。南側は調査区外へ延び、東側は東大東川の氾濫源により消失する。検出範囲では不整円形を呈し、直径7.8m以上、深さ50cm、断面形状は浅いボウル状、埋土は上層が暗灰褐色粗砂混粘質土・細礫混中砂、下層は黒灰色中砂・粘土である。埋土中からは土師質土器、須恵器が出土した。

267～270は土師質土器である。267～269は杯で、口径は10.4～11.6cm、底部はヘラ切りで267・269には板状圧痕がある。270は足釜口縁部で、口縁端部にさらに粘土を足して端部を長くする。271は須恵器甕である。底部付近であるが、傾きはやや不確かである。外面は格子タタキ、内面は板ナデである。

遺構の時期は出土遺物からは13世紀後半頃と考えられる。東大東川氾濫源の痕跡の可能性もある。

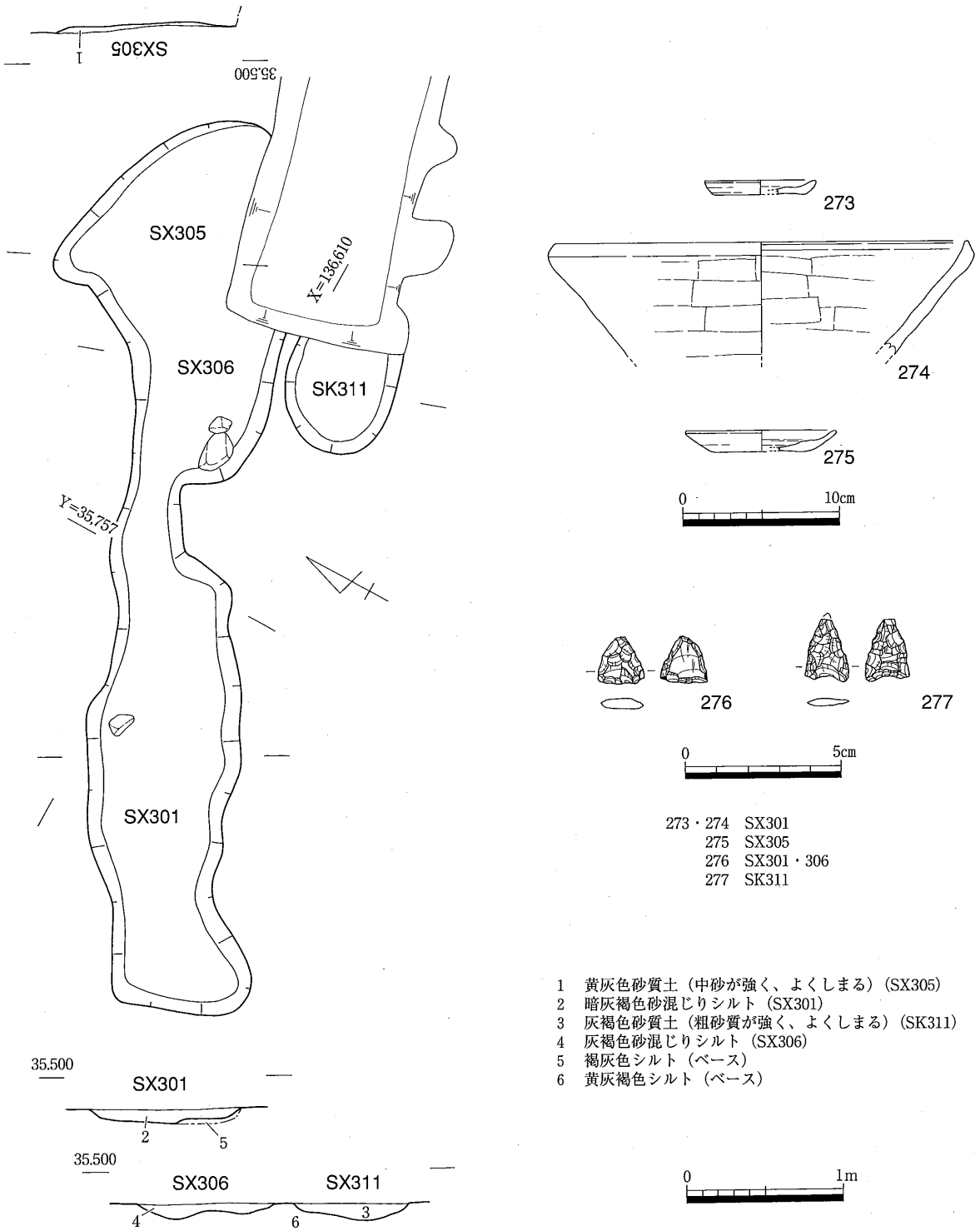
Ⅱ区SX201（第60図）

Ⅱ区東端で検出した遺構である。遺構の大半は後世の撹乱により消失し、規模、形状とも不明である。深さは6cm、埋土は灰褐色細砂混粘質土である。埋土中からは土師質土器足釜の口縁部が出土した。

272は土師質土器足釜である。内外面ともハケにより調整する。10世紀代のものである。

Ⅱ区SX202（第60図）

Ⅱ区東部で検出した遺構である。不整形を呈し、長軸1.18m、短軸0.82m、深さは15cm、埋土は暗灰褐色細砂混粘質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。



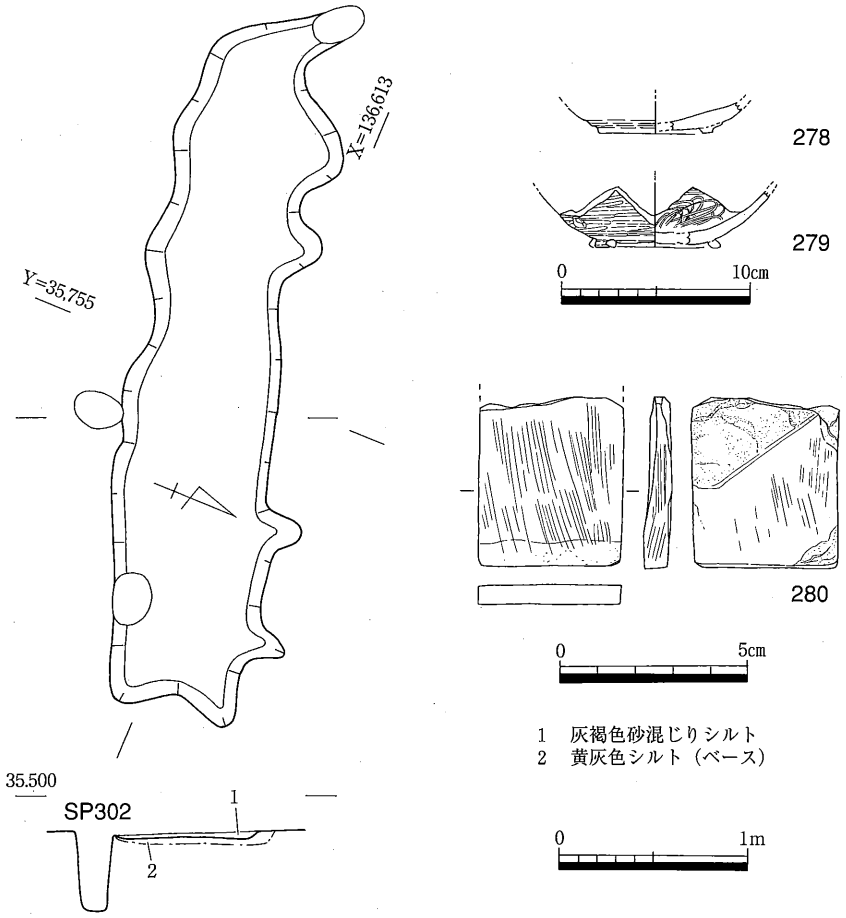
第61図　Ⅲ区SX301・305・306・SK311平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区SX301・305・306（第61図）

Ⅲ区中央付近南東寄りで検出した遺構である。SX303と方位と西側の面を揃え、SX303とは2.5m程離れる。延長5.60m、幅は155cm程度、深さは3～10cm、断面形状は浅い皿状である。埋土は東部が黄灰色砂質土、中部は灰褐色砂混シルト、西部は暗灰褐色砂混シルトであるが、遺構の連続性や断面形状からこれらは同一の遺構と考えられよう。埋土中からは土師質土器小皿、須恵器捏鉢等が出土した。

273・275は土師質土器小皿である。273は西部、275は東部で出土した。274は須恵器捏鉢である。276はサヌカイト製石鏃である。

遺構の時期は13世紀前半頃と考えられる。



第62図　Ⅲ区SX303平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区SK311（第61図）

Ⅲ区中央付近、SX301に接して検出した。遺構の東半部は後世の撹乱により消失する。楕円形を呈し、長軸0.7m以上、短軸0.70m、深さ11cm、埋土は灰褐色砂質土、断面形状は浅い皿状である。埋土中からはサヌカイト石鏃が出土した。

277はサヌカイト石鏃で、凹基式である。

Ⅲ区SX303（第62図）

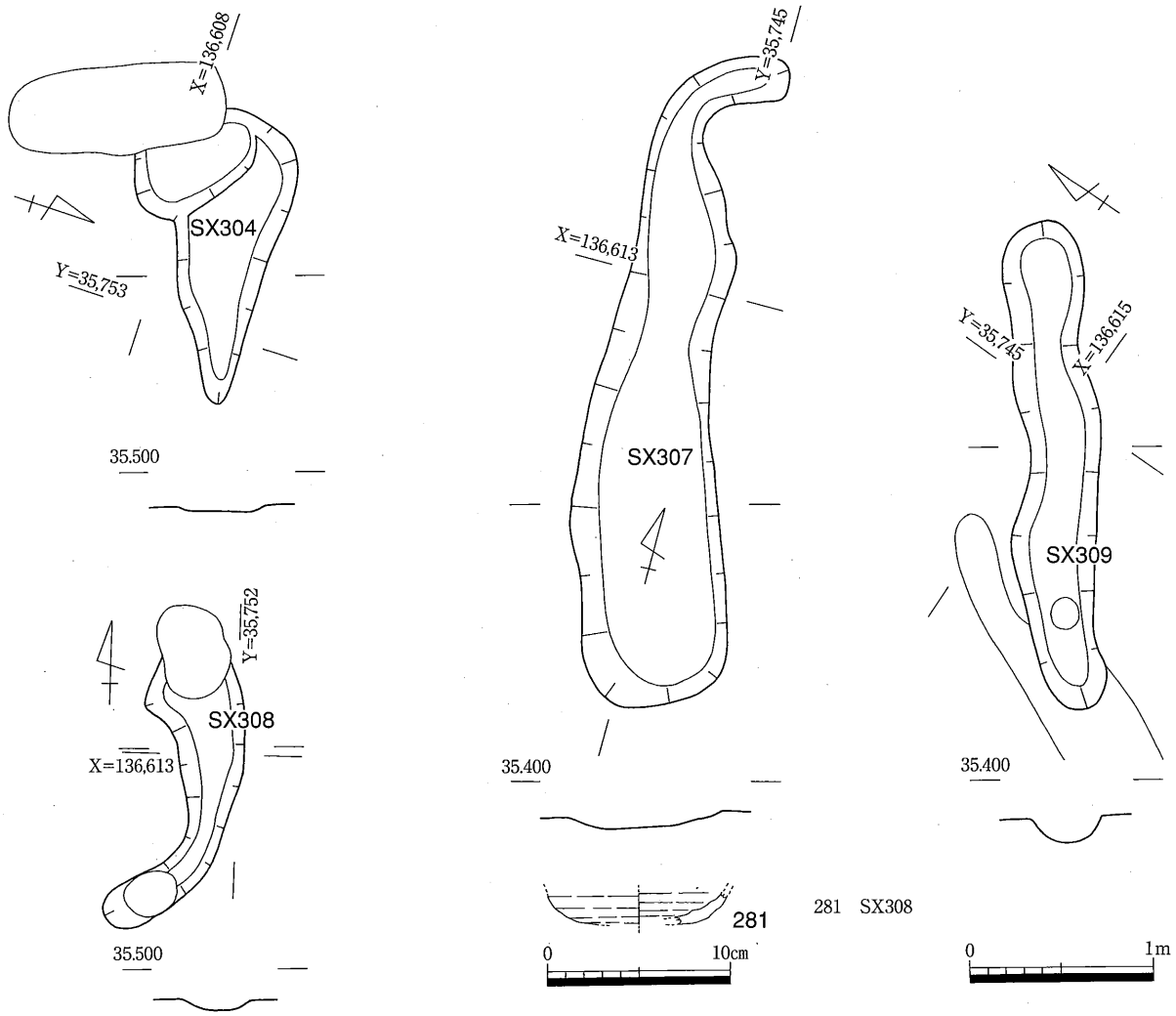
Ⅲ区中央やや南寄りで検出した長方形状の遺構である。SX310の北側約2.5mの位置で、西側の面を揃えて検出し、SX301と関連する遺構と考えられる。長軸3.6m、幅82cm、深さ4cm、埋土は灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器埦、砥石が出土した。

278・279は土師質土器埦である。279には外面に横方向の、見込みには螺旋状のヘラミガキが観察できる。280は砥石である。

出土遺物により、遺構の時期は12世紀後半～13世紀前半と考えられる。

Ⅲ区SX304（第63図）

Ⅲ区やや南寄りで検出した遺構である。不整形を呈し、南西側はST01を掘削した際に消失したが、ST01の土層断面により、SX304の方が新しい。長軸1.62m、短軸0.46m、深さ3cmで、浅い皿状を呈する。SX301ほぼと同じライン上に並び、関連する遺構、または本来は連続する遺構の可能性もある。埋土中からは土師質土器杯・小皿小片が出土した。



第63図　Ⅲ区SX304・307～309平・断面図（1/40）、SX308出土遺物（1/4）

遺構の時期は出土遺物によりSX301と同じ13世紀代と考えられる。

Ⅲ区SX307（第63図）

Ⅲ区中央やや西寄りで検出した遺構である。長楕円形を呈し、北端部では鍵型に東へ屈曲する。長軸約3.5m、幅0.81m、深さ7㎝を測る。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。

Ⅲ区SX308（第63図）

Ⅲ区中央部付近で検出した遺構である。溝状を呈し、南端部では西へ屈曲する。延長約1.8m、幅20～36㎝、深さ6㎝程度である。埋土中からは土師質土器が出土した。

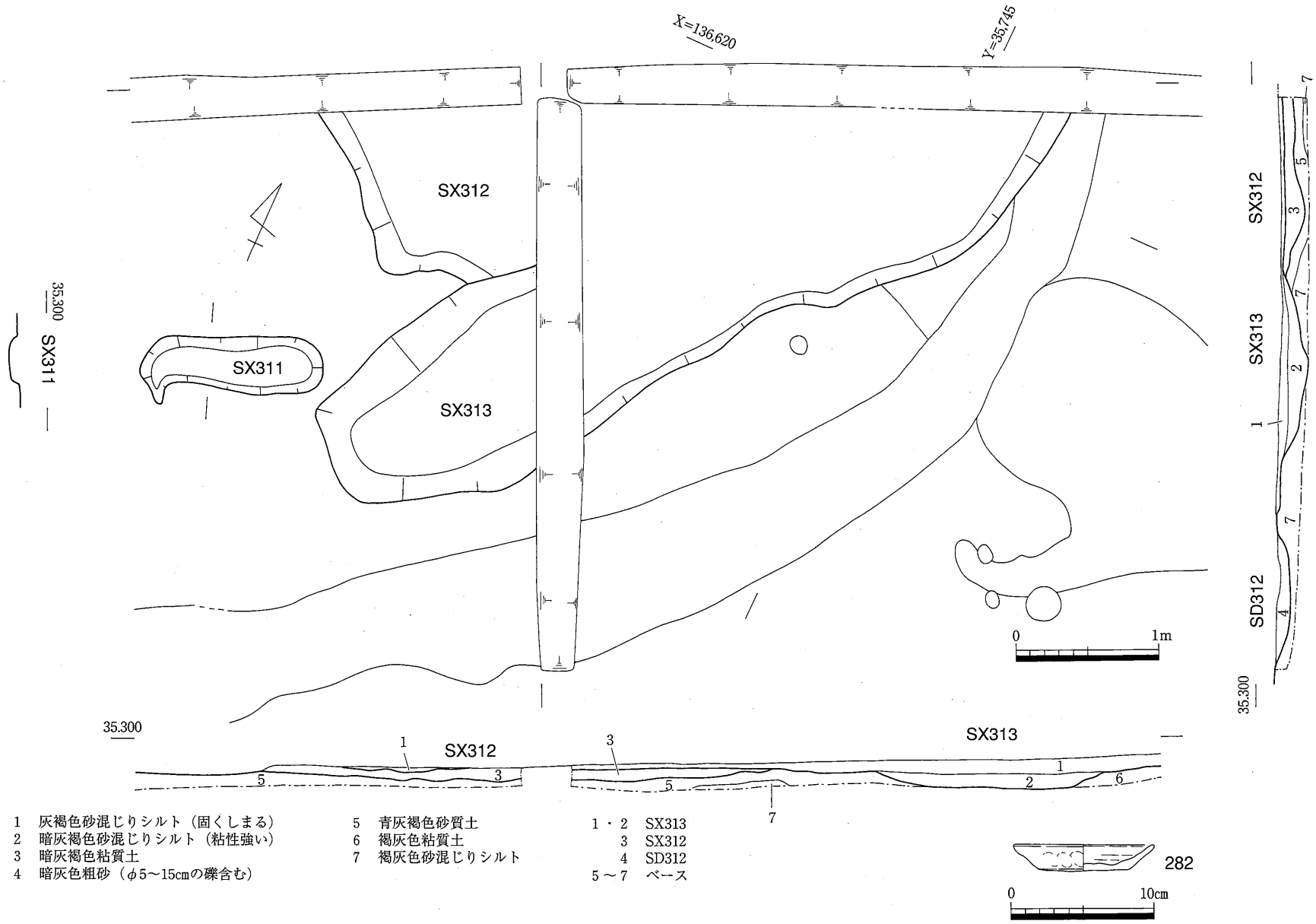
281は土師質土器杯底部である。13世紀代と考えられ、遺構の時期も同じと考えられる。

Ⅲ区SX309（第63図）

Ⅲ区西部で検出した長楕円形の遺構である。遺構の重複関係によりSD305より新しい。長軸2.68m、幅50㎝、深さ14㎝を測る。埋土中からは遺物は出土しなかった。

Ⅲ区SX312・313（第64図）

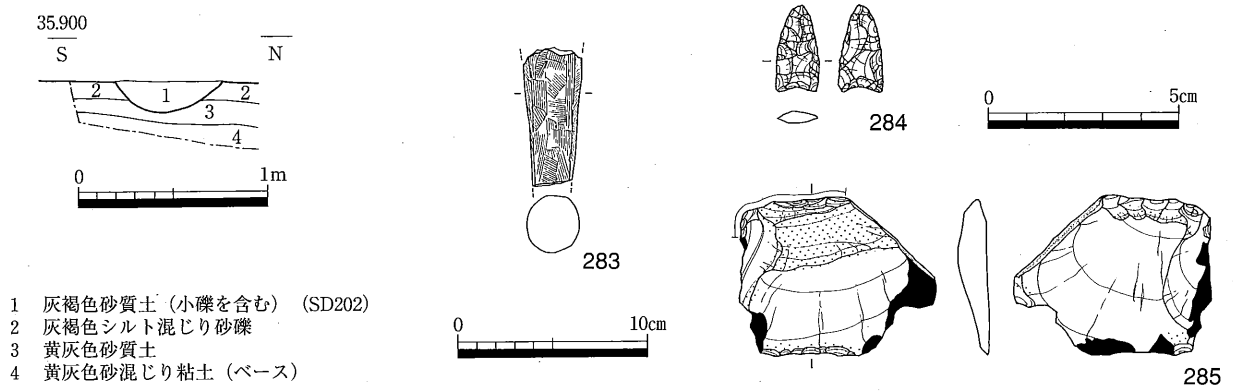
Ⅲ区北西部で検出した不定形の遺構である。SX312とSX313が埋没した後に、両方の遺構を覆う厚さ2～10㎝



1　灰褐色砂混じりシルト（固くしまる）
2　暗灰褐色砂混じりシルト（粘性強い）
3　暗灰褐色粘質土
4　暗灰色粗砂（φ5～15cmの礫含む）
5　青灰褐色砂質土
6　褐灰色粘質土
7　褐灰色砂混じりシルト

1・2　SX313
3　SX312
4　SD312
5～7　ベース

第64図　Ⅲ区SX311・312・313平・断面図（1/40）、SX313出土遺物（1/4）



第65図　Ⅱ区SD202断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

の灰褐色砂混シルト土層（土壌化層）が堆積する。断面観察により、SX313よりSX312が古い。

SX312は北半部は後世の削平により消失し、全体の規模、形状は不明であるが、深さ9cmを測り、埋土は暗灰褐色粘質土である。埋土中からは土師質土器小皿小片が出土した。

SX313は北部は後世の削平により消失し、全体の規模は不明であるが、概ね長楕円形を呈すると考えられ、長軸5.8m以上、幅1.26m、深さ15cmを測り、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

282はSX313から出土した土師質土器杯である。体部には指押えの痕跡がある。13世紀末～14世紀前半頃のもので、遺構の時期も同じと考えられる。

Ⅲ区SX311（第64図）

SX312の西側に接して検出した遺構である。長楕円形を呈し、長軸1.28m、短軸0.32m、深さ7cmを測る。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅱ区SD202（第65図）

Ⅱ区中央付近で検出した東西方向の溝である。SD201・215～217の上面で検出した。延長8m、幅65cm、深さ15cm、埋土は灰褐色砂質土で小礫を含む。埋土中からは土師質土器足釜脚部片が出土した。

283は土師質土器足釜脚部片である。284・285はサヌカイト製石器である。284は石鏃で凹基式、285は楔形石器で、上部に敲打痕を残す。

遺構の時期は、溝状遺構の方向が条里型地割と同じことと出土遺物から、13世紀代と考えられる。

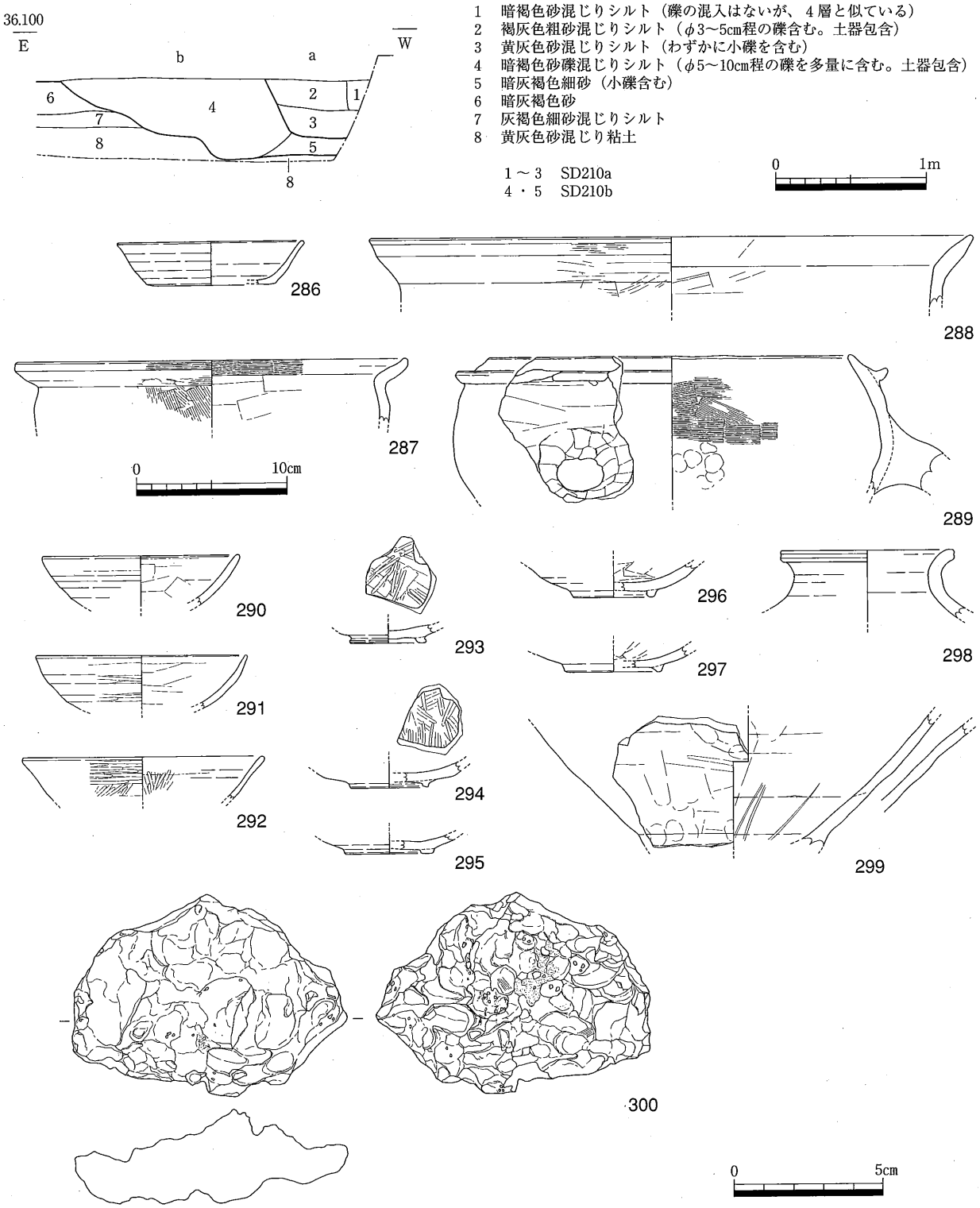
Ⅱ区SD210a・b（第66図）

Ⅱ区西端で検出した、重複する2条の溝状遺構である。断面観察により、SD210aの方が新しい。

SD210aは、西肩は調査区外へ延び、全体の規模は明らかではないが、幅0.70m以上、深さ38cm、断面形状は逆台形を呈し、しっかりと掘り込まれた遺構である。埋土は褐灰色粗砂混シルト、黄灰色砂混シルトなどで、褐灰色粗砂混シルト層には礫と土器を包含する。SD210bはSD210aの前身と考えられる溝状遺構で、調査区南壁の土層断面によればSD210aと同一方向を向いており、この位置に継続して溝が掘削されたことを窺わせる。遺構の西肩はSD210aにより壊され、全体の規模は明らかではないが、幅2m以上、深さ54cm、埋土は暗褐色砂礫混シルトで、礫・土器を含む。断面形状は緩いボウル状である。

SD210a・bの区別は遺構検出時は不明確で、土層断面の観察により判明したため、遺物の取り上げは、SD210a・b同時に行い、分けて取り上げることはできなかった。

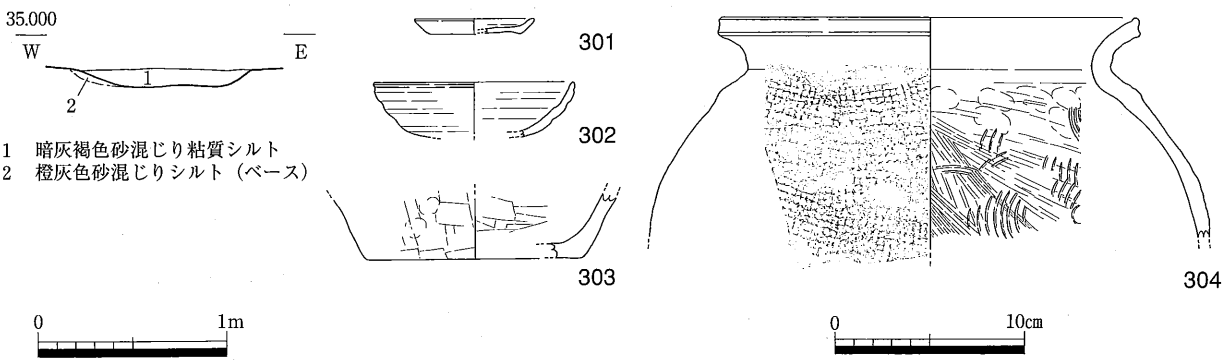
286～289は土師質土器である。286は杯、287・288は鍋である。289は足釜である。外面は板ナデ、内面



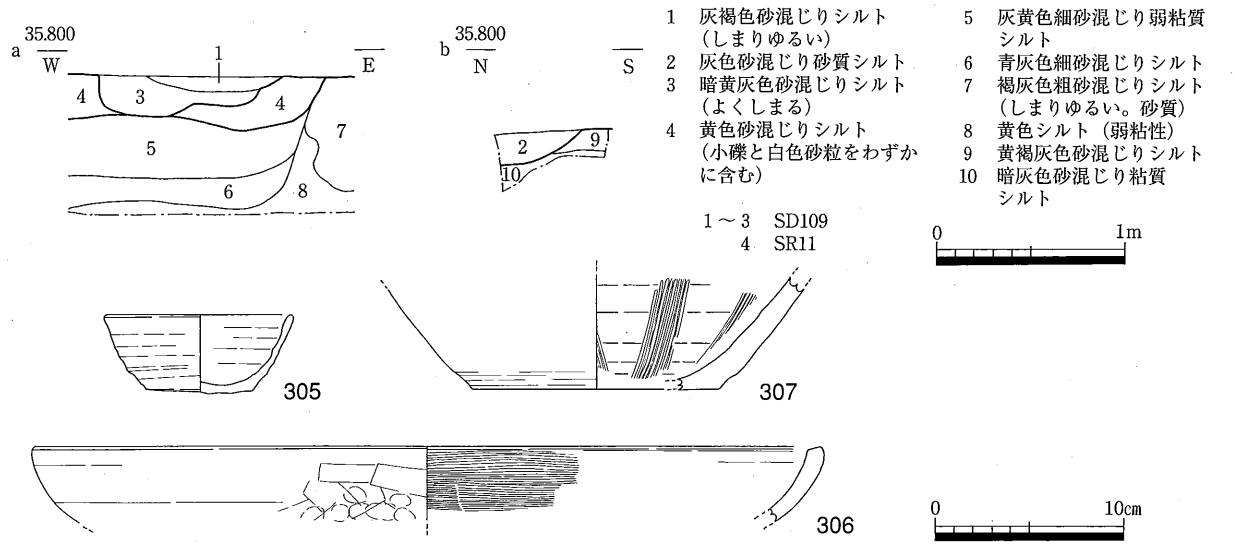
第66図　Ⅱ区SD210断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）

はハケで調整するが、脚部が取り付く場所だけは内面に指押え痕が顕著に残る。290～299は須恵器である。290～297は埦である。概ね体部外面には粗いヘラミガキを残し内面は放射状の板ナデを施す。293・294は見込み部分にヘラミガキを残す。298は壺である。口縁部外面をわずかに肥厚させる。299は捏鉢体部小片である。300は鉄滓である。凹面部分にはわずかに木炭痕跡が残る。

遺構の時期は概ね13世紀前半頃と考えられる。



第67図　Ⅳ区SD413断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



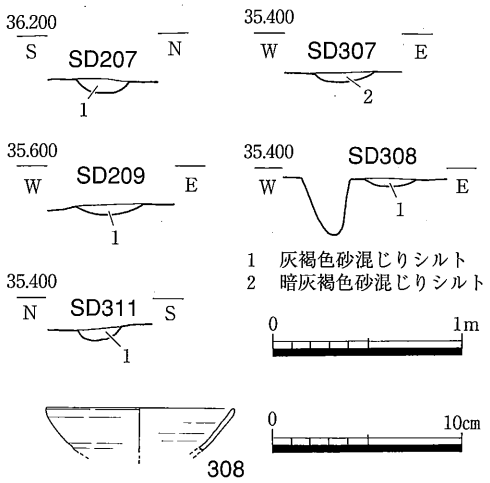
第68図　Ⅰ区SD109断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

Ⅳ区SD413（第67図）

Ⅳ区西端付近で検出した溝状遺構である。南側は調査区外へ伸び、北側は後世の攪乱により消失する。概ね条里型地割の方位と合う。幅88cm、深さ８cmを測り、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器、須恵器が出土した。

301・302は土師質土器である。301は小皿、302は杯である。303・304は須恵器である。303は壺底部小片、304は甕である。304は亀山焼で、外面は格子タタキ、内面には当て具痕跡が残るが、概ね調整により消されている。焼成は非常に悪く、軟質である。

遺構の時期は概ね13世紀後半頃と考えられる。



第69図　Ⅱ区SD207・209、Ⅲ区SD307・308・311断面図（1/40）
Ⅲ区SD311出土遺物（1/4）

Ⅰ区SD109（第68図）

Ⅰ区中央付近で検出した溝である。溝の大半は現畦畔下にあると考えられ、全体の規模は明らかではない。概ね条里型地割の東西方向と同方向を示し、検出長は９m、幅45cm以上、深さ16cmを測り、断面形状は逆台形、埋土は上層が

灰褐色砂混シルト、下層は暗黄灰色砂混シルトである。遺構はSK109により壊される。埋土中からは土師質土器杯・鍋、陶器擂鉢が出土した。

305は土師質土器杯である。底部はヘラ切りし、板状圧痕を残す。306は土師質土器鍋の口縁部である。器表面は黒く燻し、外面には指頭痕が残る。307は陶器擂鉢である。素焼きの色調で、内面の８条１単位の卸目は使用による摩滅が顕著である。

遺構の時期は14世紀末～15世紀前半と考えられる。

Ⅱ区SD207（第69図）

Ⅱ区南東部で検出した溝状遺構である。約3.8mを検出した。SD211の上面で検出した。概ね条里型地割に沿う東西方向の溝で、幅27cm、深さ７cm、埋土は灰褐色砂混シルトである。埋土中からは土師質土器杯が出土した。

遺構の時期は13世紀前後と考えられる。

Ⅱ区SD209（第69図）

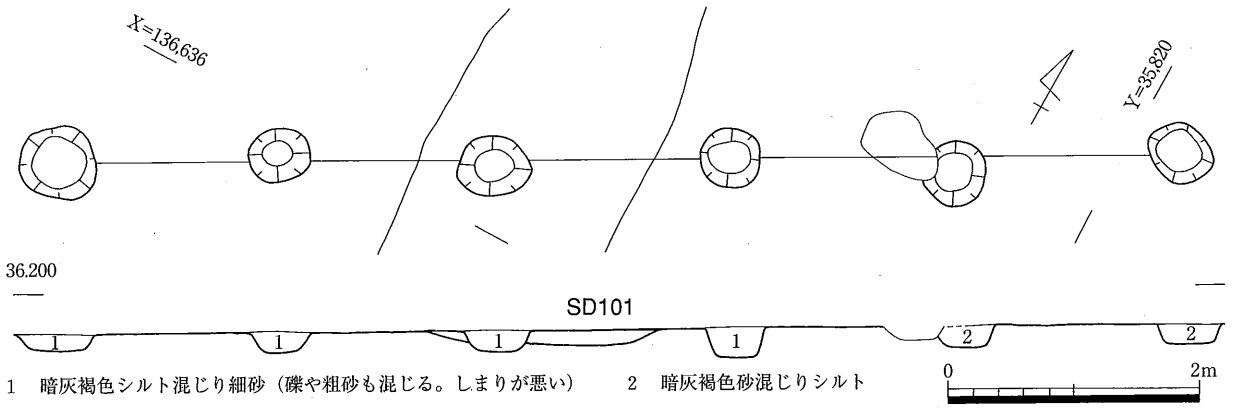
Ⅱ区北西端付近で検出した溝状遺構である。現在の地割と同方向で検出した。南側は現代の攪乱により消失し、それより南では検出していない。検出長2.5m、幅35cm、深さ５cmを測り、埋土は灰褐色砂混シルトである。

埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土の類似性から遺構の時期はSD207と同じ13世紀前後と考えられる。

Ⅲ区SD307・308・311（第69図）

Ⅲ区中央南寄り付近で検出した、いずれも小規模な溝である。いずれも条里型地割の方向を持ち、SD307・308は南北方向、SD311は東西方向である。SD307とSD308は互いに約6.3mの距離を持つ。SD307は検出長4.8m、幅30cm、深さ６cm、埋土は暗灰褐色砂混シルト、SD308は検出長4.8m、幅28cm、深さ６cm、埋土は灰褐色砂混シルト、SD311は東部分が調査区外へ延びるため、延長距離は不明であるが、幅23cm、深さ６cm、埋土は灰褐色砂混シルトである。SD307・SD311から土師質土器杯・小皿の小片が出土しており、いずれも13世紀前後の遺構と考えられる。SD308はSD307・311と規模や埋土が類似することから、概ね同時期に機能したと考えられる。

308はSD311から出土した遺物で、土師質土器杯である。13世紀後半頃のものと考えられる。



第70図　Ⅰ区SA11平・断面図（1/60）

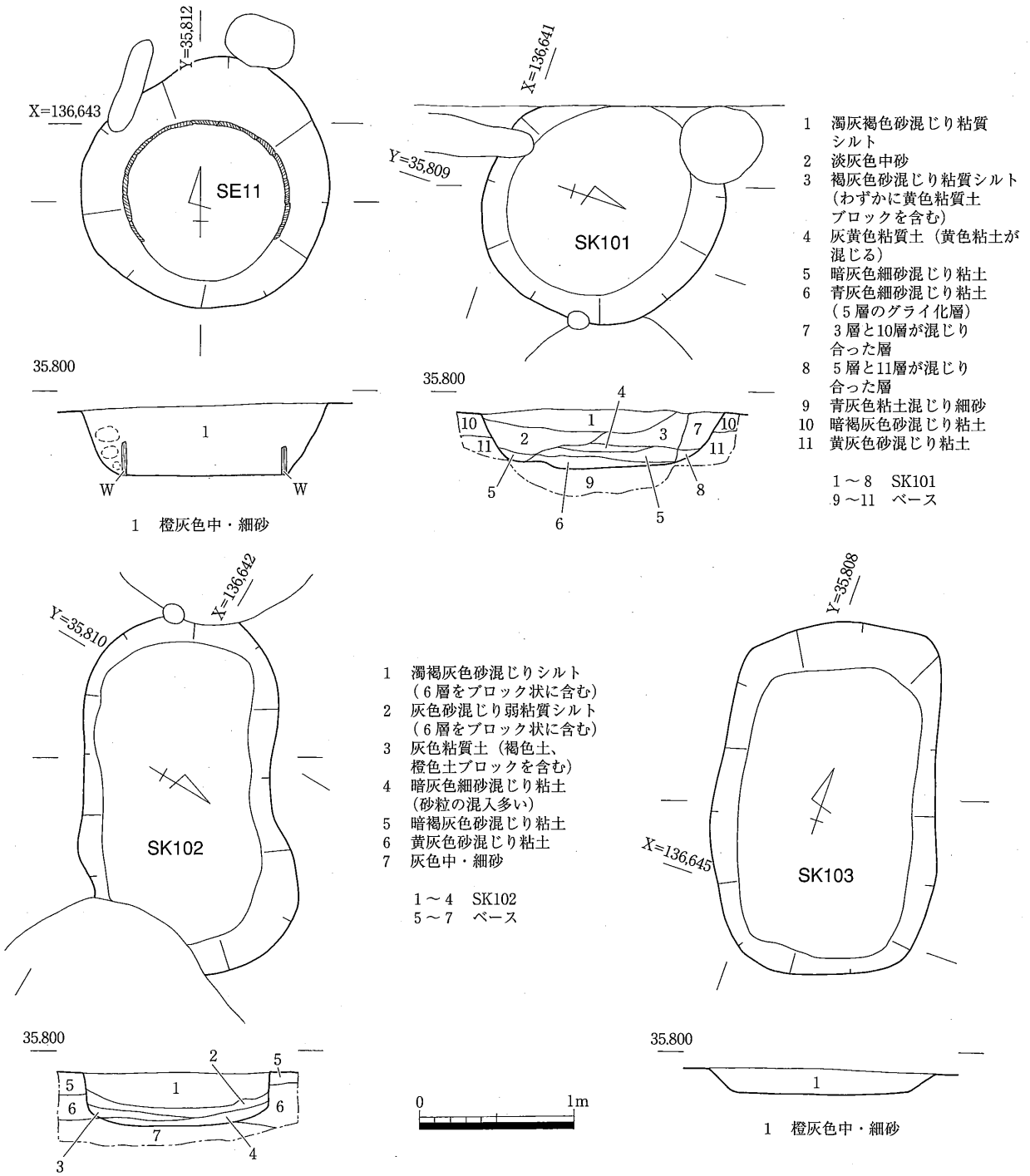
6．近世の遺構・遺物

Ⅰ区SA11（第70図）

Ⅰ区南西部で出された柵列跡である。SD101の上面で５間分を検出した。延長9.0m、柱間は1.75～1.90mである。東から２穴目はピットが重複している。柱穴は円形で、直径45～60cm、深さ12～24cmを測る。埋土は暗灰褐色シルト混細砂、暗灰褐色砂混シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。埋土はSK111と共通し、遺構の時期もSK111と同じ近世と考えられる。

Ⅰ区SE11（第71図）

Ⅰ区西寄りで検出した井戸跡である。遺構の重複関係によりSK102より新しい。円形を呈し、直径1.56m、



第71図　Ⅰ区SE11・SK101～103平・断面図（1/40）

深さ24cm、埋土は橙灰色中細砂である。遺構内には直径1.00mの桶の側板が残されており、その外側には10～15cm大の川原石が裏込め石として残されていた。埋土中からは土師質土器井戸枠が出土した。遺構内には桶の底板は残されておらず、桶の側板を井戸枠とし、その上部に土師質土器の井戸枠を設置したのであろう。

遺構の時期は土師質土器井戸枠の時期から近世以降と考えられる。

Ⅰ区SK101（第71図）

Ⅰ区西端付近で検出した土坑である。遺構の西端付近は調査区外へ延びるが、概ね円形と考えられ、直径1.56m、深さ36cmを測る。遺構の重複関係によりSK102より新しい。埋土中からは磁器埦などが出土した。

遺構の時期は近世以降である。

Ⅰ区SK102（第71図）

Ⅰ区西端付近で検出した土坑である。東側をSE101に、西側をSK101により消失するが、概ね隅丸方形と考えられ、長軸約2.3m、短軸1.19m、深さ35cm、埋土はSK101と類似するが、上半部にはベースブロックを含み、掘削後まもなく埋め戻した様子が窺える。埋土中からは土師質土器杯片が出土した。

遺構の時期はSK101との埋土の類似性から近世以降と考えられる。

Ⅰ区SK103（第71図）

Ⅰ区北西部で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸2.24m、短軸1.42m、深さ15cmを測る。埋土は橙灰色中・細砂で、SE101と類似する。埋土中からは磁器鉢片、瓦質土器羽釜片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により近世以降と考えられる。

Ⅰ区SK104（第72図）

Ⅰ区北西部で検出した土坑である。土坑の北端部分は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明であるが、楕円形を呈し、長軸2.08m、短軸1.18m、深さは27cmを測る。埋土は暗灰褐色粗砂混シルト、淡褐色砂である。調査区北壁の土層断面からSK104はSK105より古いことがわかる。埋土中からの出土遺物はなかった。

Ⅰ区SK105（第72図）

Ⅰ区北西部、SK104に接して検出した土坑である。遺構の北半部は調査区外へ延びるため、全体の規模・形状は不明である。深さは7cm程度、埋土は暗灰橙色砂混シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。

Ⅰ区SK106（第72図）

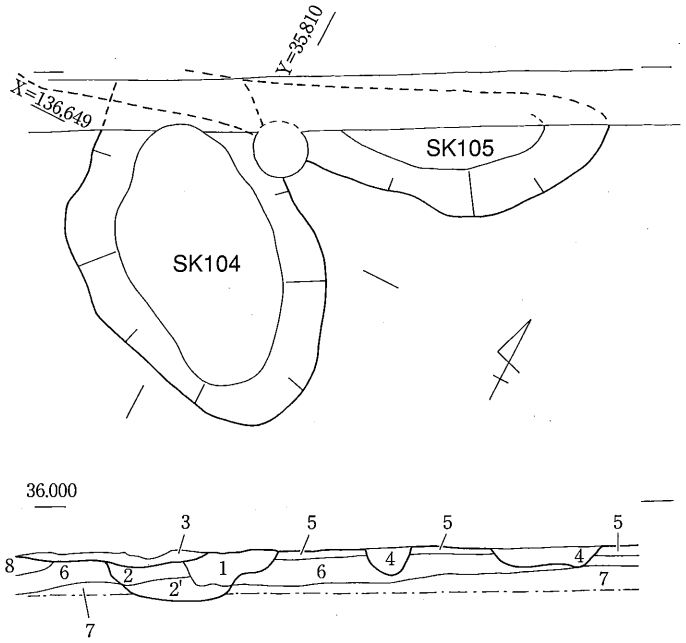
Ⅰ区中央付近で検出した土坑である。遺構の重複関係によりSX101より新しい。円形を呈し、1.50m、深さ20cm、埋土は濁灰色シルトである。埋土中からは近世の燻し瓦、磁器片が出土した。

遺構の時期は出土遺物により近世以降である。

Ⅰ区SK107（第72図）

Ⅰ区中央付近で検出した土坑である。遺構の北側は段掘り状で浅くなっており、本来は長軸92cm、短軸63cmの楕円形の土坑であったと考えられ、深さは21cmを測る。埋土は灰褐色シルトで、土坑の底には直径50cmの底板が敷かれていた。埋土中からは円盤状高台を持つ土師質土器杯が出土した。

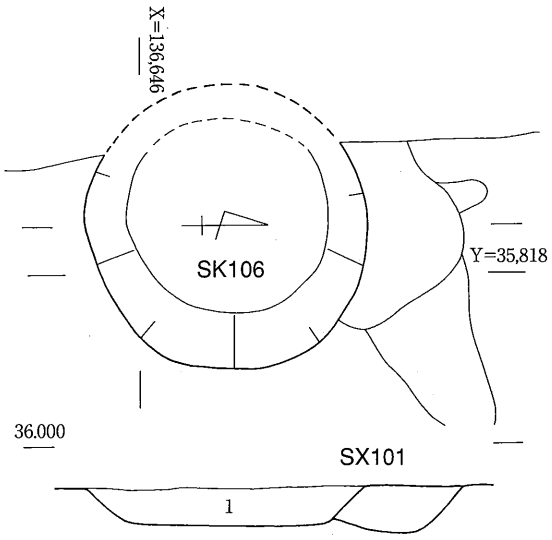
出土した遺物は古代末～中世初頭であるが、桶の底板が出土する状況から遺構の時期は近世以降と考えられる。



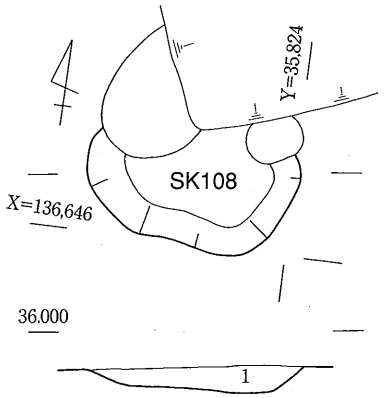
1　暗灰褐色粗砂混じり砂質シルト
2　淡褐色砂（中砂～細砂の互層）
2'　明褐色砂（中砂～細砂の互層）
3　暗灰橙色砂混じりシルト
4　灰褐色砂混じりシルト
5　暗灰褐色砂混じりシルト
6　暗灰褐色細砂混じり粘質シルト
（砂の混入は少ない）
7　黄灰色細砂混じり粘質シルト
8　暗褐灰色砂混じりシルト

1・2・2'　SK104
3　SK105

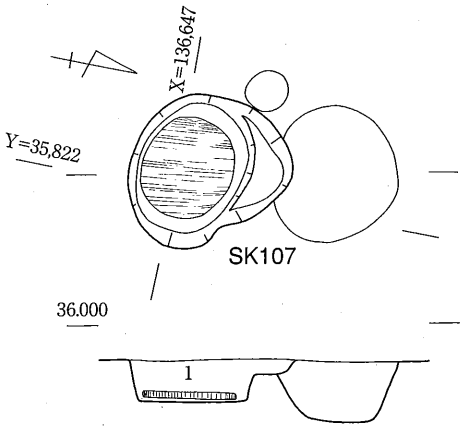
0　1m



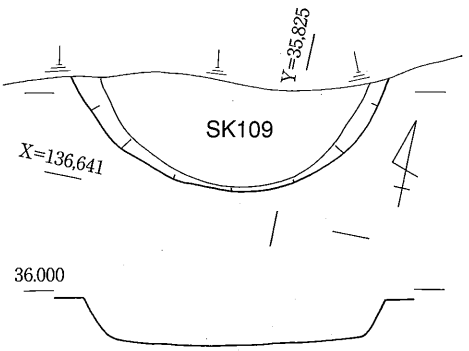
1　濁灰色シルト



1　灰褐色シルト



1　灰褐色シルト



第72図　Ⅰ区SK104～109平・断面図（1/40）

Ⅰ区SK108（第72図）

Ⅰ区中央付近で検出した土坑である。土坑の北半部は後世の撹乱やピットにより消失するが、概ね楕円形と考えられ、長軸1.13m、短軸約0.7m、深さ14cm、埋土は灰褐色シルトである。埋土中からは出土遺物はなかったが、埋土がSK107と類似することから、遺構の時期は近世以降と考えられる。

Ⅰ区SK109（第72図）

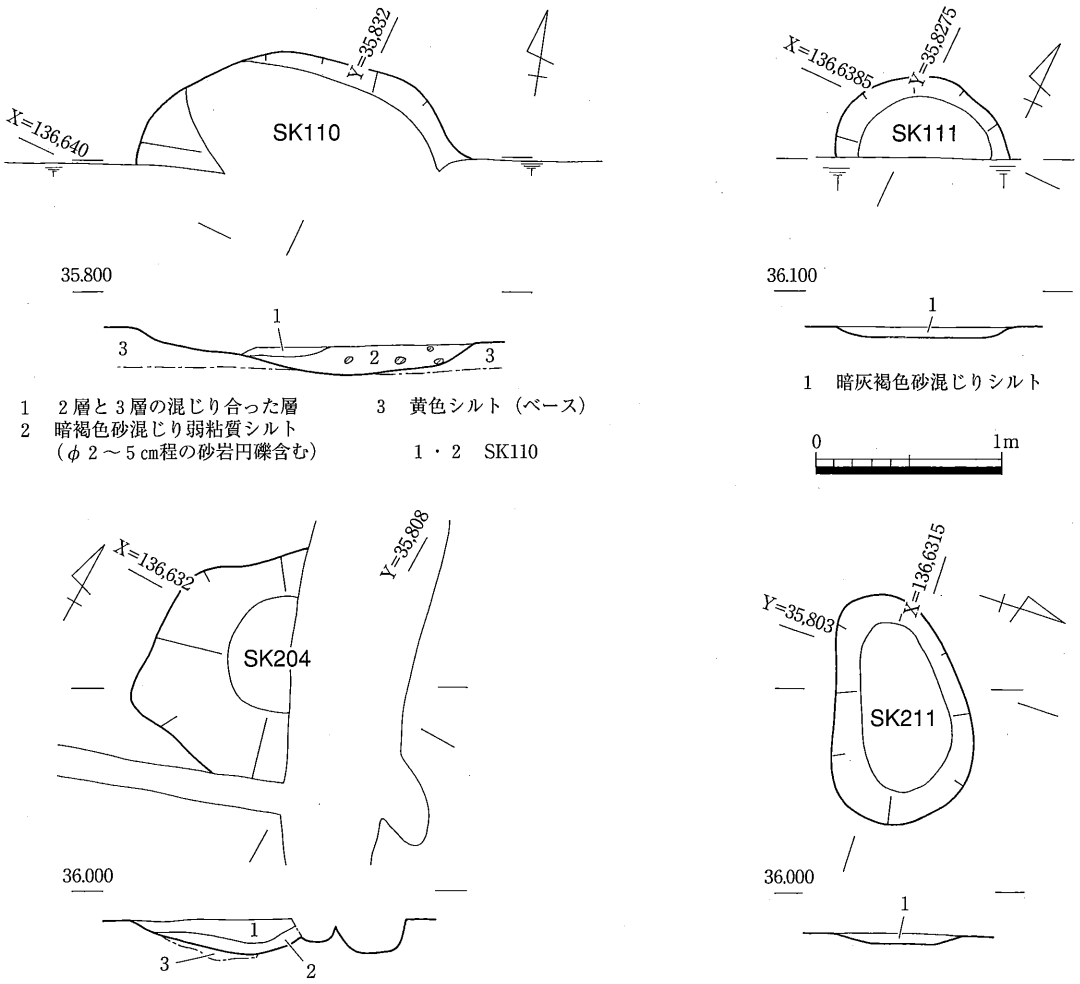
Ⅰ区中央付近で検出した土坑である。遺構の北端は調査区外へ延びるが、概ね円形と考えられ、直径約1.7m、深さ25cmを測る。遺構の重複関係によりSD109より新しい。埋土中からは近世の燻し瓦片が出土した。

遺構の時期は近世以降である。

Ⅰ区SK110（第73図）

Ⅰ区南部で検出した土坑である。遺構の南半部分は後世の撹乱により不明である。概ね円形と考えられ、直径約1.7m、深さ14cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は暗褐色砂混弱粘質土である。

埋土中からは土師質土器杯が出土した。



1　2層と3層の混じり合った層
2　暗褐色砂混じり弱粘質シルト
（φ2～5cm程の砂岩円礫含む）
3　黄色シルト（ベース）
1・2　SK110

1　暗灰褐色砂混じりシルト

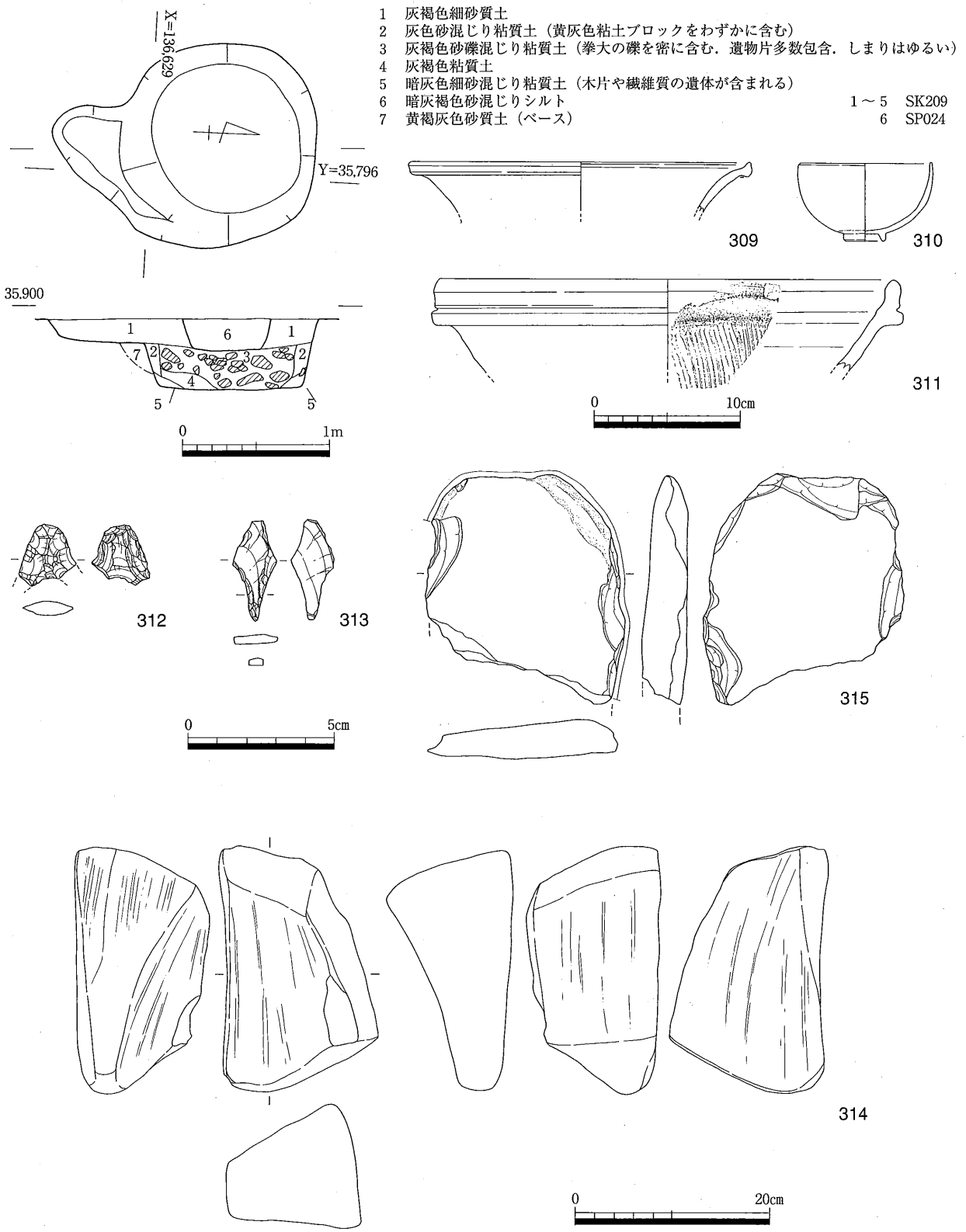
1　灰褐色砂質土（土器片を含む）
2　暗灰褐色砂質土（上位に黒褐色粘土が混じる）
3　濁暗灰褐色砂混じり粘質土（中世ベース）
1・2　SK204

1　灰褐色砂混じり粘質土

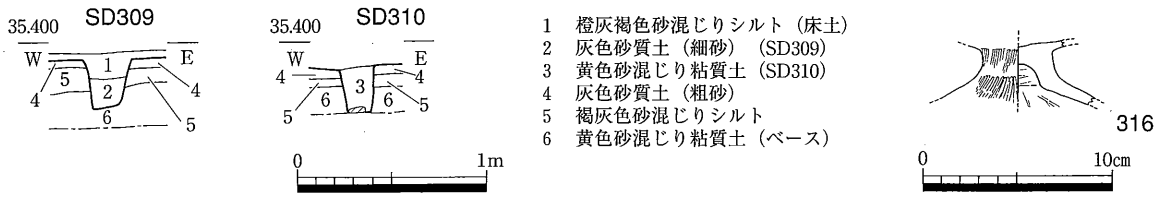
第73図　Ⅰ区SK110・111　Ⅱ区SK204・211平・断面図（1/40）

Ⅰ区SK111（第73図）

Ⅰ区南部で検出した土坑である。遺構の南半部は後世の撹乱により消失する。直径90cm程度の円形の土坑と考えられ、深さ６cm、埋土は暗灰褐色砂混シルトである。埋土中からは出土遺物はなかった。



第74図　Ⅱ区SK209平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2・1/6）



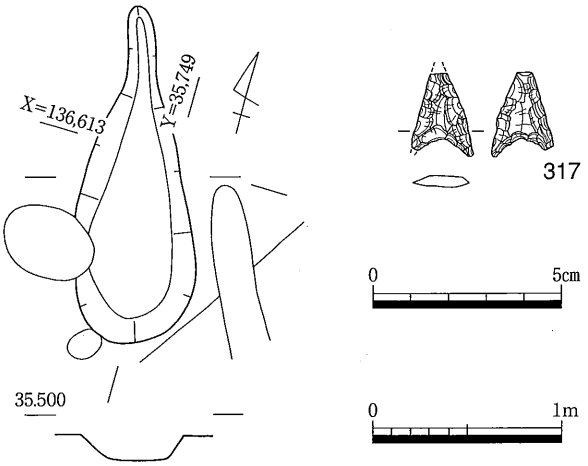
第75図　Ⅲ区SD309・310断面図（1/40）、SD309出土遺物（1/4）

Ⅱ区SK204（第73図）

Ⅱ区南東隅で検出した土坑である。土坑の東半部は後世の攪乱により消失するが、概ね隅丸方形または不整形を呈すると考えられ、一辺0.8～1.2m程度、深さ18cmと考えられる。埋土中からは土器小片が出土したが、遺構の時期を決定することはできなかった。

Ⅱ区SK211（第73図）

Ⅱ区南東部で検出した土坑である。SD211の上面で検出した。楕円形を呈し、長軸1.34m、短軸0.73m、深さ５cmを測り、埋土は灰褐色砂混粘質土である。埋土中からは磁器小片が出土した。遺構の時期は近世以降である。



第76図　Ⅲ区SK305平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）

Ⅱ区SK209（第74図）

Ⅱ区中央部付近で検出した土坑である。隅丸方形で、南側に張り出しを持つ形状である。一辺1.34～1.39m、深さ49cmで埋土はおもに灰褐色砂礫混粘質土で、礫や土器片を密に含み、締りが悪い。最下部には植物遺体が多く含まれる。土坑の上面からピットが掘り込まれるが、遺物はほとんど灰褐色礫混粘質土層から出土しており、出土遺物の時期が遺構の時期を反映していると考えられる。

309は縄文土器浅鉢小片である。310は京焼風陶器埦で、高台部は無釉、体部外面は無紋である。311は備前焼擂鉢で、内面には12条１単位の卸目を施す。312・313はサヌカイト製石器である。312は凹基式石鏃で、基部は欠損する。313は加工が不十分なため、石錐の未製品と考えられる。314は砥石である。４面に使用痕がある。315は結晶片岩製打製石斧である。

遺構の時期は近世以降と考えられる。

Ⅲ区SD309・310（第75図）

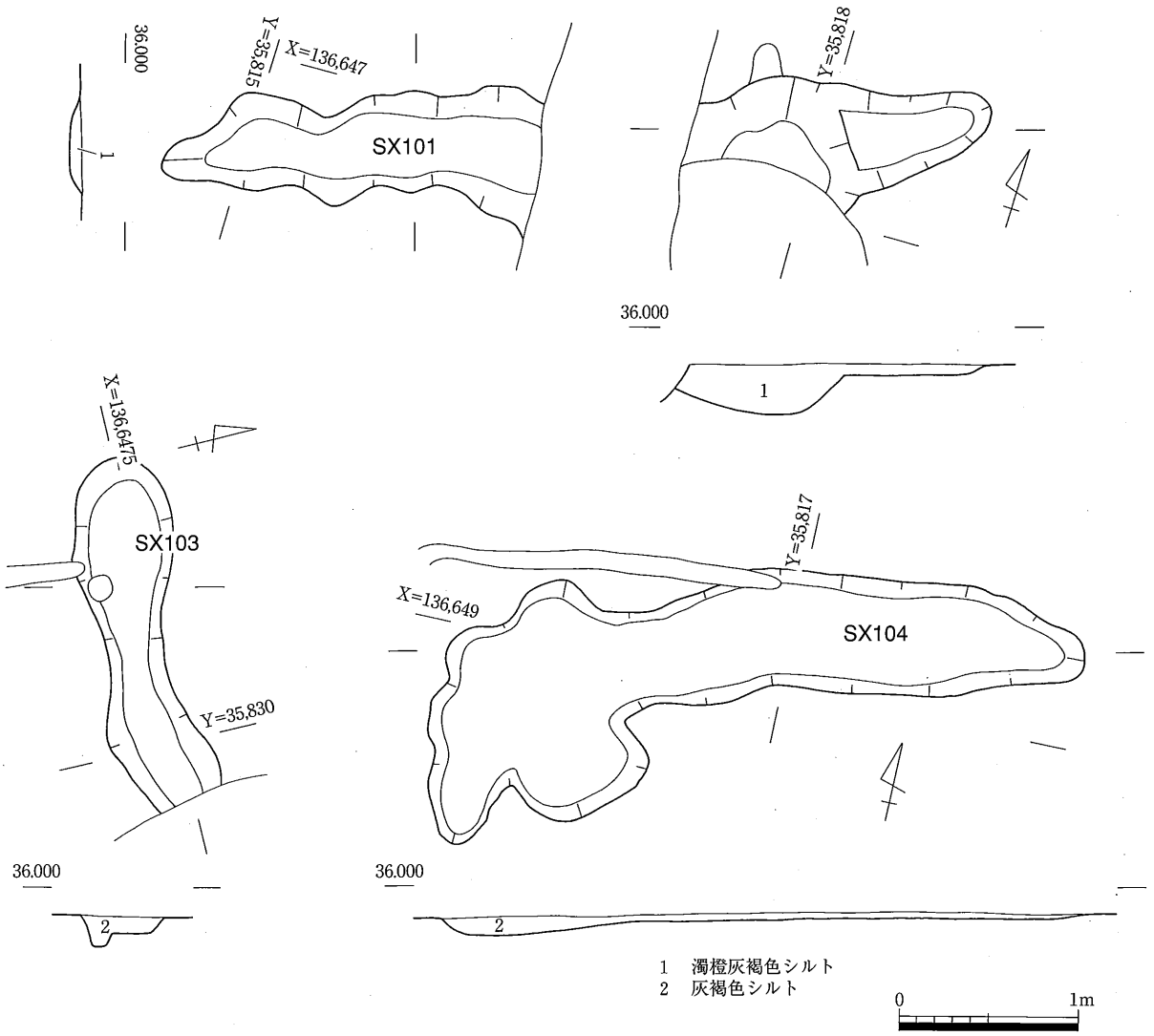
Ⅲ区中央付近で検出した溝状遺構である。概ね条里型地割の方位に沿い、互いに約４mの間隔を持つ。ともに北から13.5mまで検出した。

SD309は幅30cm、深さ30cmで、断面は逆台形を呈する。埋土は上部が床土と同じ橙灰褐色粗砂混シルト層、下部は灰色砂質土層である。

SD310は幅18cm、深さ24cm、断面形状は逆台形を呈する。埋土は黄色砂混粘質土で、底に石を敷く。

SD309の埋土中からは土師器高杯が、SD310の埋土中からは土師質土器杯・甕片が出土したが、ともにSD101～SD103および中世と考えられるピットの上面で検出していること、SD309は埋土が床土であること、遺構の断面形状がしっかりした逆台形を呈することから、近世以降の溝状遺構と考えられる。

316は土師器高杯である。混入品と考えられる。



第77図　Ⅰ区SX101・103・104平・断面図（1/40）

Ⅲ区SK305（第76図）

Ⅲ区中央付近で検出した土坑である。長楕円形を呈し、長軸1.78m、短軸70cm、深さ16cmを測り、遺構の軸は条里型地割の方向を指す。埋土中からは石鏃が出土したが、遺構の時期を示す遺物は出土しなかった。

317はサヌカイト製石鏃である。凹基式である。

Ⅰ区SX101（第77図）

Ⅰ区中央付近で検出した遺構である。SK106の下面から検出した。長楕円形を呈し、長軸4.56m、幅0.54～0.72m、深さ6～30cm、埋土は濁橙灰褐色シルトである。埋土中からはサヌカイト小片が出土した。遺構の重複関係によればSK106より古い。

遺構の時期は埋土から近世以降と考えられる。

Ⅰ区SX103（第77図）

Ⅰ区東部で検出した遺構である。長楕円形を呈し、遺構の東端は東大東川の氾濫源により消失する。長軸1.94m以上、幅58cm、埋土は灰褐色シルトである。埋土中からはサヌカイト小片が出土した。

遺構の時期は埋土から近世以降と考えられる。

Ⅰ区SX104（第77図）

Ⅰ区東部、SX103に隣接して検出した遺構である。長楕円形で西側でやや屈曲した形状で、屈曲する部分がやや幅広くなる。延長約4.06m、幅0.62～1.25m、深さ10cm、埋土は灰褐色シルトである。埋土中からはチャート片が出土した。

遺構の時期は埋土から近世以降と考えられる。

Ⅰ区SD102～104（第78図）

Ⅰ区中央やや北寄りで検出した楕円形状の遺構である。埋土はいずれも灰褐色シルトを呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。SD103・104はSR12の上面で検出した。

SD102は長軸1.5m、幅38cmで深さは10cmを測る。埋土中からの出土遺物はない。

SD103は長軸2.3m、幅47cm、深さ５cmを測る。埋土中からは縄文土器浅鉢が出土したが、SR12からの混入の可能性が高い。

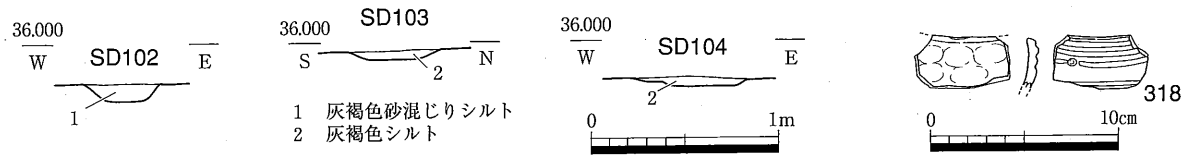
SD104は長軸1.5m、幅55cm、深さは５cmを測る。SR12の上面から掘り込む。埋土中からの出土遺物はない。

これらの遺構の時期ははっきりとはしないが、遺構の形状や埋土から概ね同時期の遺構と考えられよう。埋土からおおむね近世以降の遺構と考えられよう。

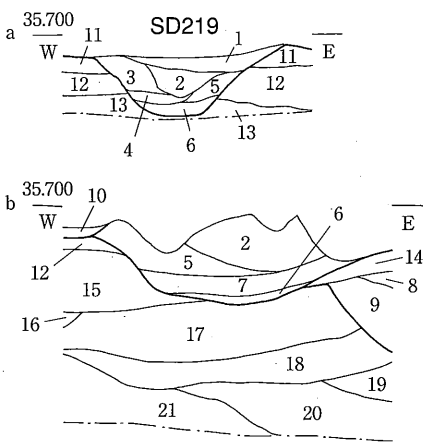
318はSD103から出土した縄文土器浅鉢である。口縁端部は波状にし、外面にはヘラ描きによる沈線を施す。縄文時代後期頃のもので、SR12からの混入と考えられる。

Ⅱ区SD219（第79図）

Ⅱ区北東部で検出した溝である。断面観察によりSD211より新しいことがわかる。調査区の北端部で検出し、西側と東側では調査区外へ延びるが、概ね屈曲しながら条里型地割に平行して流れるものと考えられる。幅は100cm、深さ30cmを測り、断面形状は逆台形、埋土は概ね暗褐灰色・灰褐色・灰橙褐色砂・細砂・礫混シルト



第78図　Ⅰ区SD102～104断面図（1/40）、SD103出土遺物（1/4）

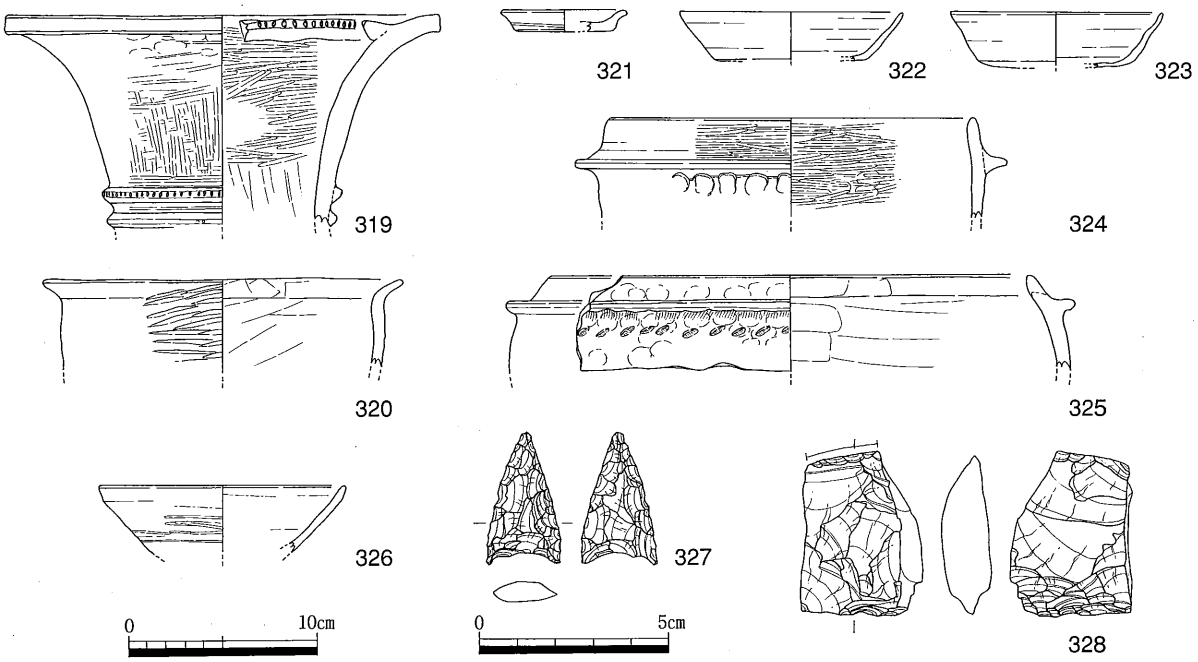


1　暗褐灰色砂混じりシルト（φ２cmの礫を若干含む）
2　灰褐色細砂混じりシルト
3　褐灰色細砂混じりシルト
4　灰橙褐色礫混じりシルト（φ３cmの礫を含む）
5　にぶい橙色細砂混じりシルト
6　灰褐色シルト混じり細砂（φ２cmの礫を若干含む）
7　褐灰色砂質土
8　黄灰褐色中砂
9　黄灰色細砂（黒褐色の粗砂が混じり、ラミナ状に堆積）
10　灰白色細砂混じりシルト（土器包含）
11　褐灰色シルト混じり細砂（φ３cmの礫を含む）
12　明褐色細砂混じりシルト
13　橙灰色砂混じり粘質シルト
14　褐灰色細砂（橙灰色粗砂が混じる）
15　灰褐色シルト混じり中砂
16　褐灰色シルト混じり中砂（15層より砂の密度が高い）
17　黒褐色礫混じり粗砂（φ５cm～拳大の黄橙色礫が混じる）
18　灰白色細砂
19　灰黄色砂礫（拳大の黄橙色礫が多量に混じる）
20　黒褐色礫混じり粗砂（φ５cm～拳大の黄橙色礫が混じる。17層より礫の混入が多い）
21　灰黄色礫混じり細砂（φ５cm～拳大の黄橙色礫が混じる）

1～7　SD219
8・9　SD211

0　1m

第79図　Ⅱ区SD219断面図（1/40）



第80図　Ⅰ区出土遺物（1/4・1/2）

である。埋土中からは出土遺物はなかった。

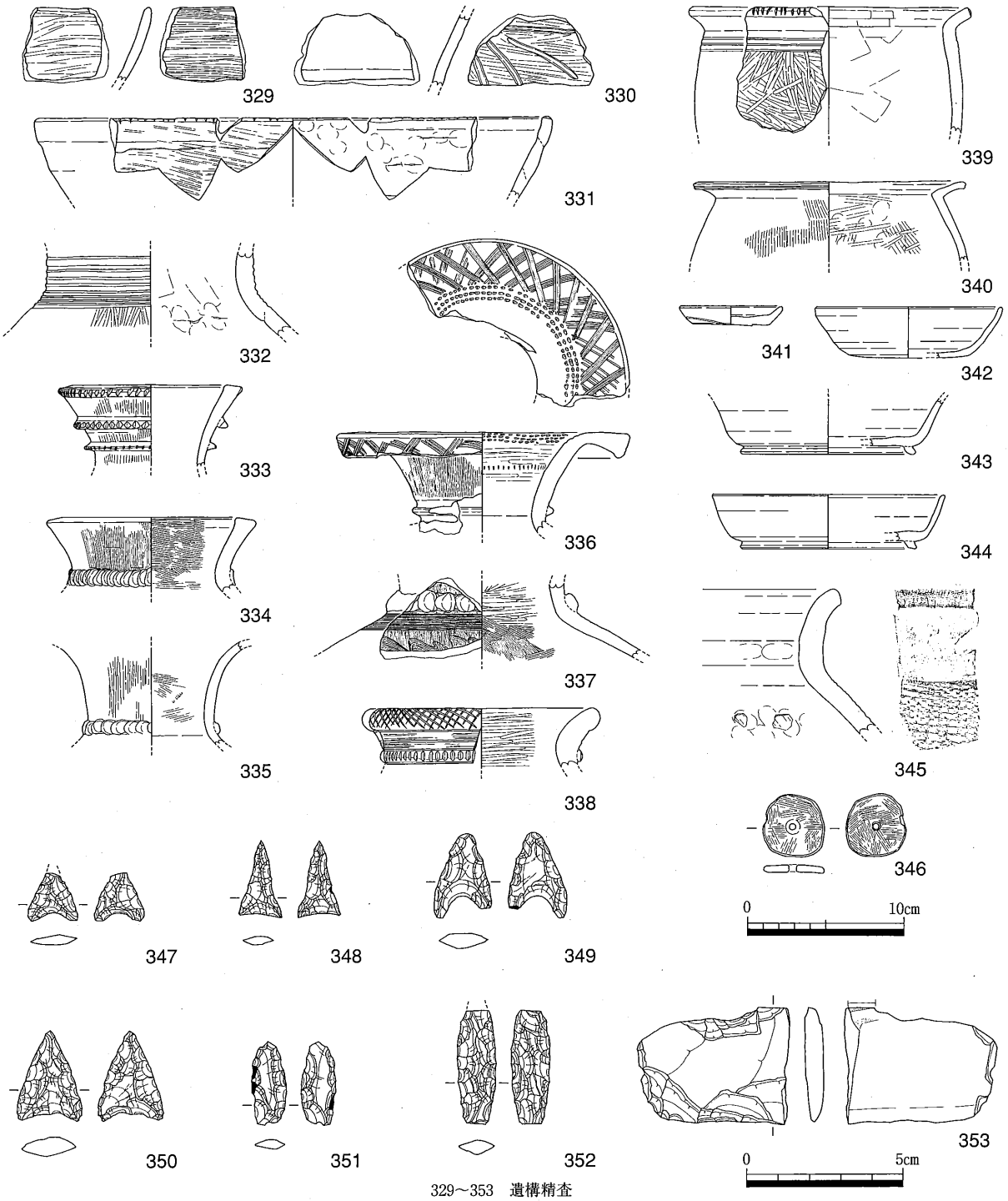
7．包含層出土遺物

Ⅰ区出土遺物（第80図）

319・320は西部の流路上面の掘り下げ・精査中に出土した遺物で、ともに弥生土器である。319は壺で、口縁部内面、体部と頸部の境付近に突帯を巡らせ、その部分に刻目を施す。弥生時代中期中頃である。320は甕で、外面はタタキを施す。弥生時代後期である。その他は遺構精査中に出土した遺物である。321～325は土師質土器である。321は小皿、322・323は杯である。324・325は足釜である。324は鍔部分を足し、外面鍔接合部の下端部には指押え痕が顕著に残る。325は口縁端部を外側へ折り曲げて鍔とし、さらにその上部に粘土を口縁端部を作る。鍔の下部にはヘラ状の工具痕跡が残る。326は須恵器埦である。外面にはヘラミガキ痕がわずかに観察できる。327・328はサヌカイト製石器である。327は凹基式石鏃である。328は楔形石器である。弥生土器と石器を除いた遺物の時期は概ね13世紀中～後半である。

Ⅱ区出土遺物（第81～83図）

329～353はⅡ区の遺構精査中に出土した遺物である。329～331は縄文土器深鉢である。332～340は弥生土器である。332～338は壺である。332は頸部に9条以上のヘラ描き沈線を施す。333は直口壺で、頸部に2条の刻目を持つ貼付突帯を巡らせる。口縁端部にも刻目を施す。334～336は広口壺である。334・335は頸部に押圧突帯を貼り付ける。336は頸部に突帯を貼りつけ、口縁端部外面には斜格子文、内面には斜格子文と3列の列点文を施す。337は頸部に押圧突帯を巡らせ、その下部には9条の櫛描き沈線文、櫛描き波状文を巡らせる。338は短頸壺で、口縁端部には斜格子文、頸部には刻目を持つ貼付突帯を施す。339・340は甕である。339は如意状口縁を持つ甕で、3条のヘラ描き沈線を巡らせる。弥生土器は332・339が弥生時代前期後半～末頃で、その他は概ね弥生時代中期中頃と考えられる。341・342は土師質土器である。341は小皿、342は杯である。343～345は須恵器である。343・344は高台付杯である。345は甕小片である。外面は格子タタキを施す。亀山焼である。土師質土器、須恵器の時期は、343・344は8～9世紀前半、その他は概ね13世紀後半頃と考えられる。346は紡錘車である。弥生土器甕を転用している。347～352はサヌカイト製石器である。

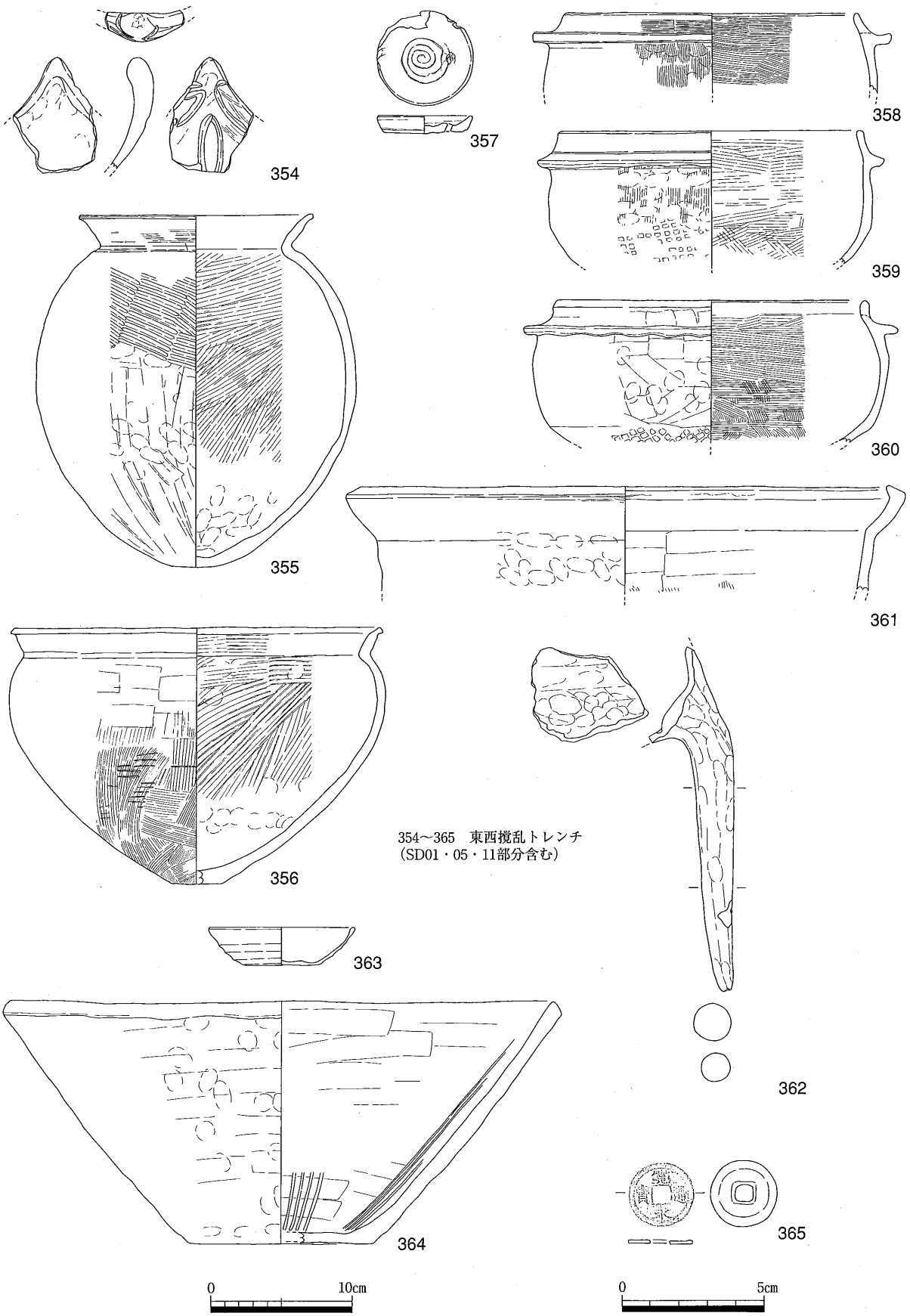


第81図　Ⅱ区出土遺物(1)（1/4・1/2）

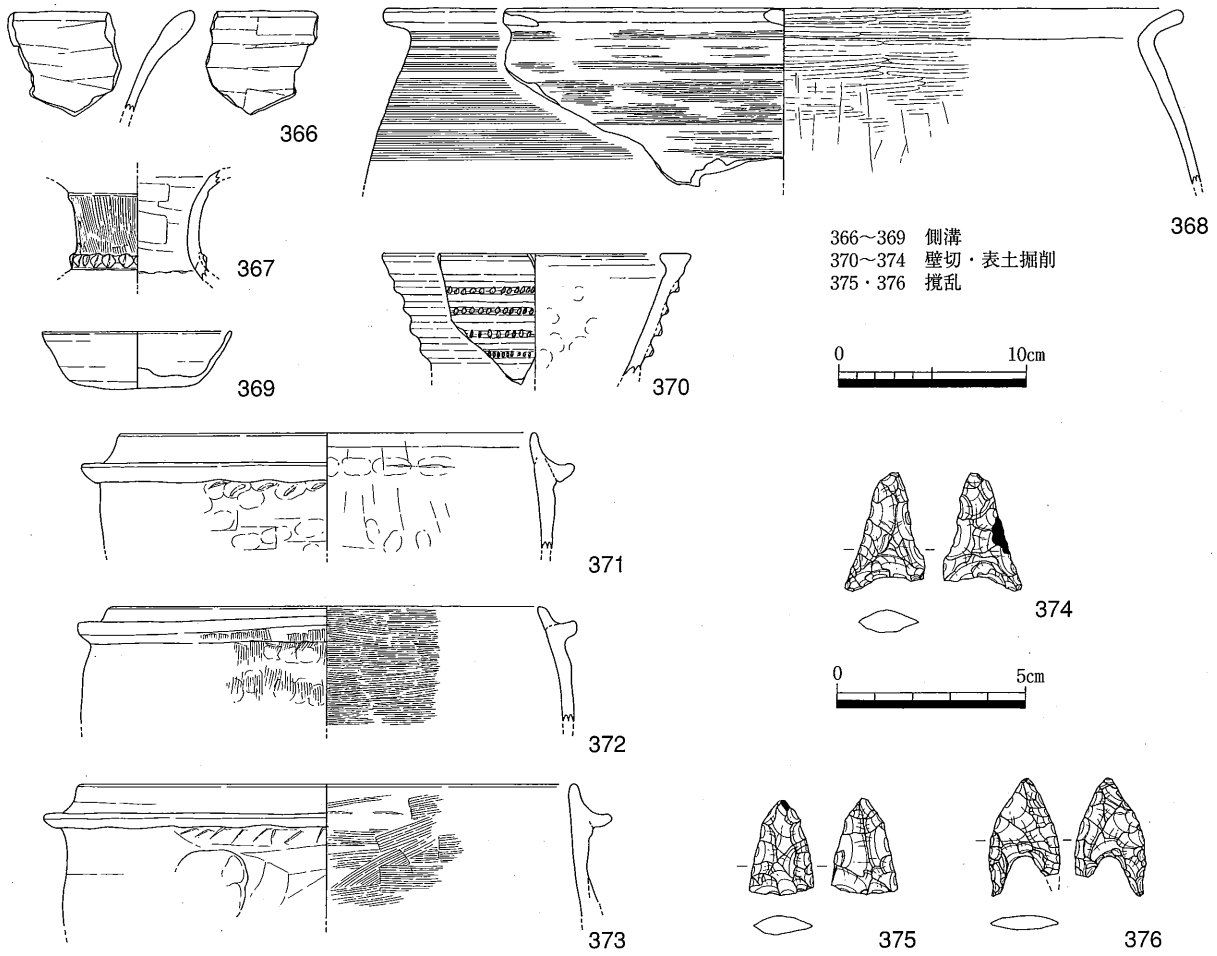
347～350は凹基式石鏃である。351・352は石錐である。353は結晶片岩製の石器で、未製品の磨製石庖丁と考えられる。

354～365はⅡ区の中央付近を東西に走る撹乱部分から出土した遺物である。この撹乱はSD201・205・209・211、SK208・210の一部を壊しており、これらの遺構の遺物を包含している可能性が高いであろう。

354は縄文土器深鉢である。SR11で多く出土したものと同じ型式の土器である。口縁部は波状で、外面はヘラ描き沈線により文様をつける。355・356は弥生土器である。355は甕で、外面上半はタタキ痕跡が明瞭に残る。356は大型の鉢である。ともに弥生時代後期後半頃のものである。357～362は土師質土器である。357は小皿で、底部内面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。底部には焼成前に施した穿孔が残る。358～360は足



第82図　Ⅱ区出土遺物(2)（1/4・1/2）



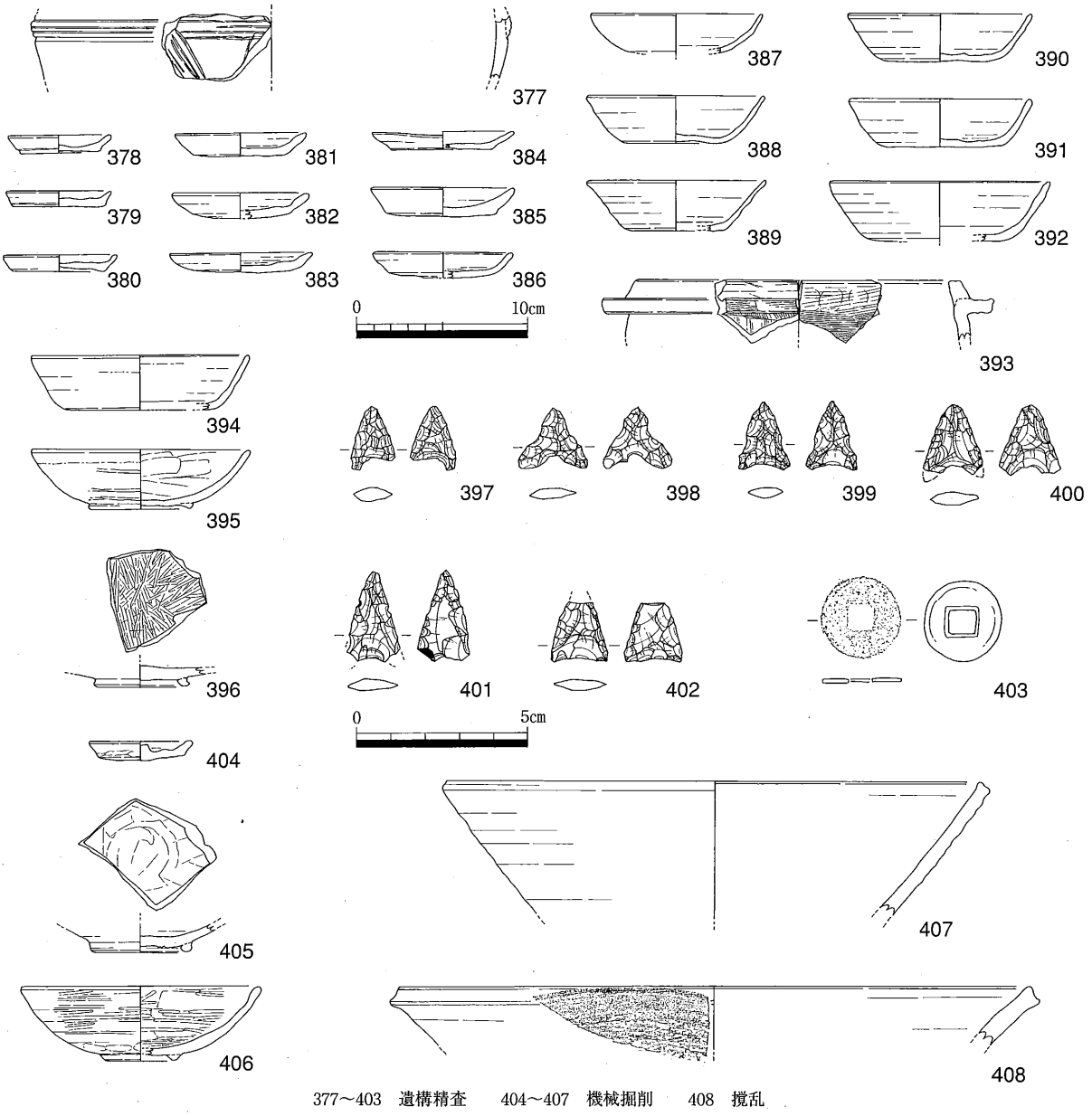
第83図　Ⅱ区出土遺物(3)（1/4・1/2）

釜である。358・359は内外面を、360は内面をハケで調整し、359・360は底部外面には格子タタキ痕が残る。358・360には体部を屈曲させて鍔を作り、その上部に粘土を足して口縁端部を作った痕跡が観察できる。361は鍋口縁部である。口縁端部は内湾しながら立ち上がり、端部は内側へ拡張する。362は足釜脚部である。363・364は須恵器である。363は杯である。外面には轆轤目が顕著に残る。364は擂鉢である。４条１単位の卸目がある。土師質土器、須恵器の時期は13世紀末～14世紀後半頃と考えられる。365は寛永通宝である。裏面は無文である。

366～369は側溝掘削の際に出土した遺物である。366は北部の側溝を掘削した際に出土した縄文土器深鉢である。367・368は弥生土器である。367は広口壺の頸部で、頸部には押圧突帯を巡らせる。368は甕である。体部には多条の櫛描き沈線文を施す。体部はやや丸みを帯びる。弥生土器は概ね弥生時代中期前半頃のものである。369は土師質土器杯である。13世紀末前後のものである。

370～374は壁切り、表土掘削時に出土した遺物である。370は弥生土器直口壺である。頸部には４条以上の刻目を持つ貼付突帯を施す。弥生時代中期中頃である。371～373は土師質土器足釜である。371は鍔と口縁端部を別粘土で貼り付けて作り出し、372は体部上端を外反させて鍔を作り、その上部に粘土を足して口縁端部を作る。371には口縁端部を足した痕跡が内面に明瞭に観察できる。また、外面の鍔の直下には工具痕が残る。土師質土器の時期は13世紀末～14世紀前半頃である。374はサヌカイト製の凹基式石鏃である。

375・376は撹乱から出土した遺物で、サヌカイト製の石鏃である。375は平基式、376は凹基式である。

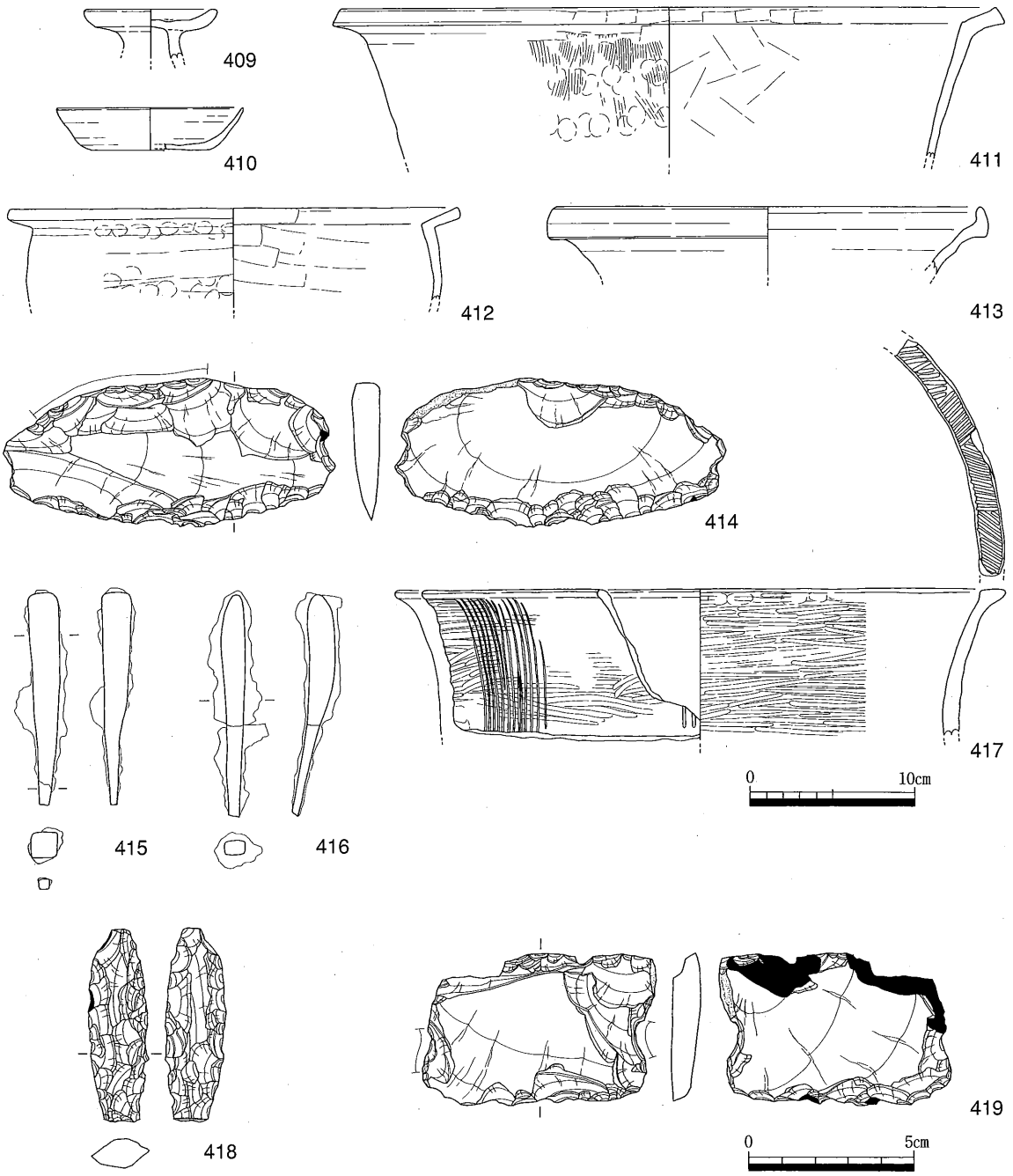


第84図　Ⅲ区出土遺物（1/4・1/2）

Ⅲ区出土遺物（第84図）

377～403は遺構精査中に出土した遺物である。377は縄文土器深鉢の体部片である。378～393は土師質土器である。378～386は小皿である。口径は5.7～6.5cmの小型もの（378～380）と7.6～8.3cmのやや大振りのもの（381～386）にわかれる。底部調整は小型のものは回転ヘラ切りで、378・379は板状圧痕を残す。やや大振りのものは、回転ヘラ切りの後ナデを施す。前者は13世紀後半頃、後者は13世紀前半頃である。387～392は杯である。口径は9.9～10.7cmのもの（387～391）と12.8cmのもの（392）に分かれる。底部調整は観察できるものはいずれも回転ヘラ切りの後ナデを施す。393は足釜である。体部上端を外側へ折り曲げて鍔とし、口縁端部は粘土を足している。394～396は須恵器である。394は杯で、口縁端部には重ね焼痕跡を残す。395・396は埦である。395は外面に粗い横方向のヘラミガキを施し、内面には放射状の板ナデで調整をする。396は見込み部分にヘラミガキが観察できる。387～396の時期はおおむね13世紀前半頃と13世紀後半頃に分かれ、これらはⅢ区で検出した中世の集落の時期を反映していると考えられる。397～402はサヌカイト製石鏃である。402は平基式、その他は凹基式である。403は銅銭である。錆化が著しく、種銭は不明である。

404～407は機械掘削の際に出土した遺物である。404は土師質土器小皿である。内面の調整は粗く、中心



409～416　遺構精査　417～419　側溝・壁切り

第85図　Ⅳ区出土遺物（1/4・1/2）

部分が盛り上がっている。13世紀後半のものである。405・406は須恵器埦である。405には見込み部分に放射状の板ナデ痕が残る。406は内外面に横方向のヘラミガキを施す。須恵器は12世紀後半～13世紀前半である。407は須恵器捏鉢である。

408は撹乱部分から出土した須恵器甕口縁部である。口縁部外面に格子タタキの痕跡が残る。亀山焼である。

Ⅳ区出土遺物（第85図）

409～416は遺構精査中に出土した遺物である。409～412は土師質土器である。409は脚付小皿で、小皿に脚部をつけた形態のものである。410は杯、411、412は鉢である。413は須恵器捏鉢である。東播系である。414はサヌカイト製の石庖丁である。両側に抉りをいれ、上部には敲打痕がある。415・416は鉄製品である。

417～419は側溝掘削、壁切りの際に出土した遺物である。417は縄文土器深鉢である。口縁端部には刻目

を持ち、体部には縦方向にヘラ描きの文様を描く。418・419はサヌカイト製石器である。418は石錐で、下部は欠損する。419は打製石庖丁で、両側に抉りを入れる。

第3節　小結

遺構の変遷（第86図）

縄文時代後期

Ⅰ区で自然河川跡と溝状遺構を検出した。Ⅰ区東側には東大束川が流れており、地盤は不安定である。主に自然河川跡からは当該期の土器が出土した。東大束川を挟んで東側の北内遺跡Ⅴ区でも同様の状況が認められた。これらの自然河川は現在の東大束川の氾濫源と考えられる。

弥生時代中期

Ⅰ区西半からⅢ区にかけて溝状遺構を検出した。Ⅰ・Ⅱ区では南から北方向へ向く溝と南西から北東へ向く溝、Ⅲ区では東から西へ向く溝がある。埋土中からは中期中頃までの遺物が出土し、溝も同時期まで機能していたと考えられる。いずれも農業用水路であったと考えられる。遺構の中心は溝で、集落はなく、農地であったことが窺える。

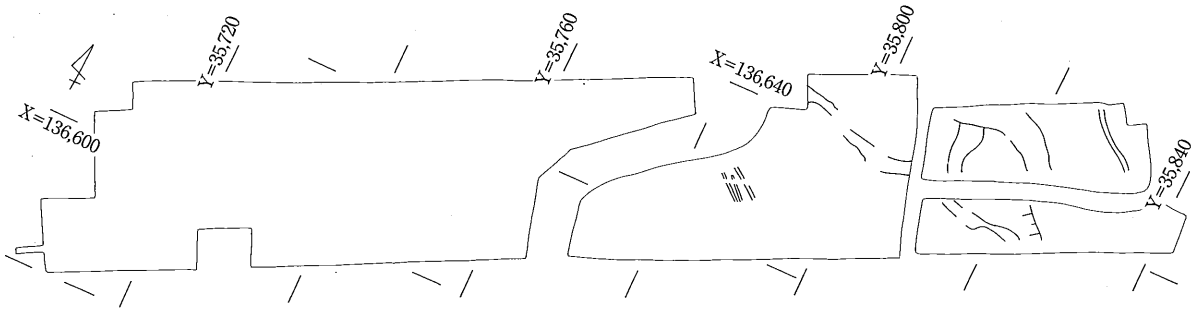
弥生時代後期～古墳時代

遺構は明確ではない。溝状遺構を1条、土坑を2基検出したが、遺構は散漫としている。

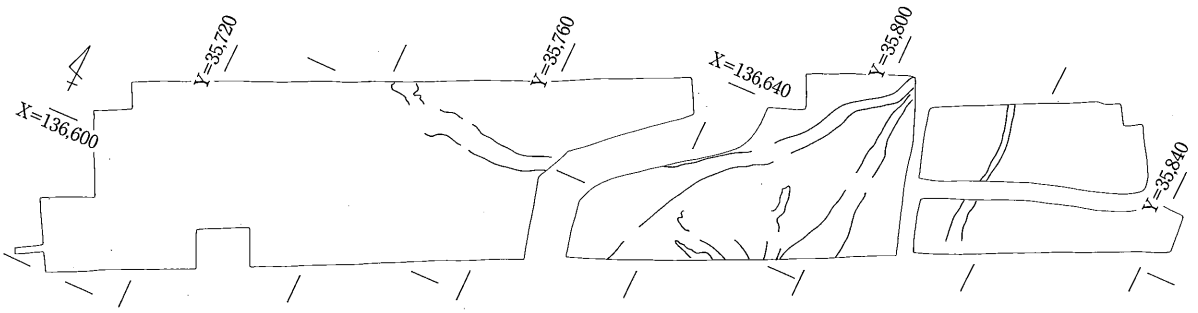
中世

Ⅲ区からⅣ区の微高地上にかけてピット・土坑などが多数検出された。掘立柱建物は11棟復元し、そのうち4棟は目隠し塀を持つ。ピット内の出土遺物から主にⅣ区では13世紀前半を中心とする時期、Ⅲ区では13世紀後半を中心とする時期であったと考えられ、13世紀後半より集落は発展したと考えられる。区画のための溝はほとんど見られない。掘立柱建物跡のほか、Ⅲ区で、集落にやや先行して13世紀前半の土坑墓が2基検出された。

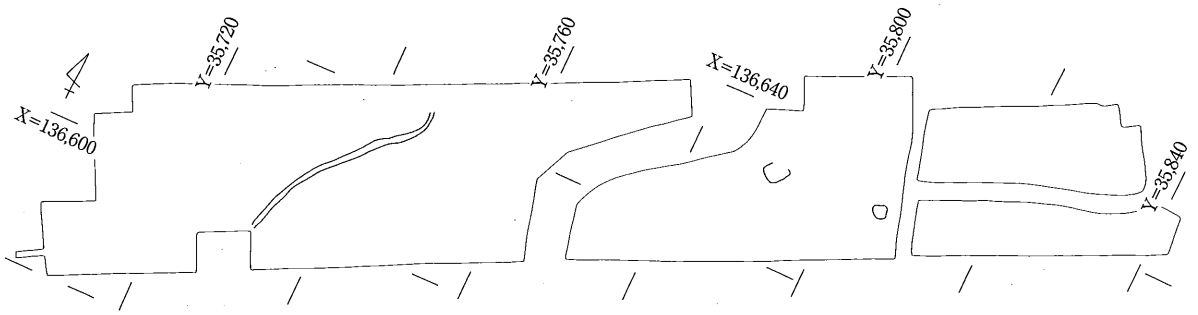
縄文時代



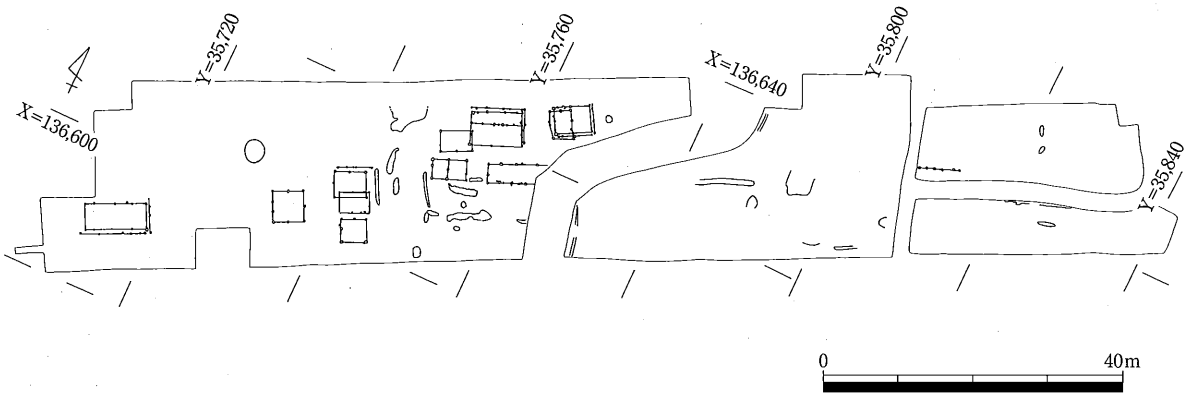
弥生時代中期



弥生時代後期～古墳時代



中　　世



第86図　遺構変遷図（1/1,000）

第５章　自然科学分析の結果

第１節　北内・池下遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、北内遺跡より出土した広鍬の未製品１点、鍬の未製品１点、割材１点、池下遺跡より出土した棺材１点、柱材１点の木材５点である。

３．方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1,000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

ツガ属　Tsuga　マツ科　図版１

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、１分野に２～４個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガには、ツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科　図版２

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横 断 面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

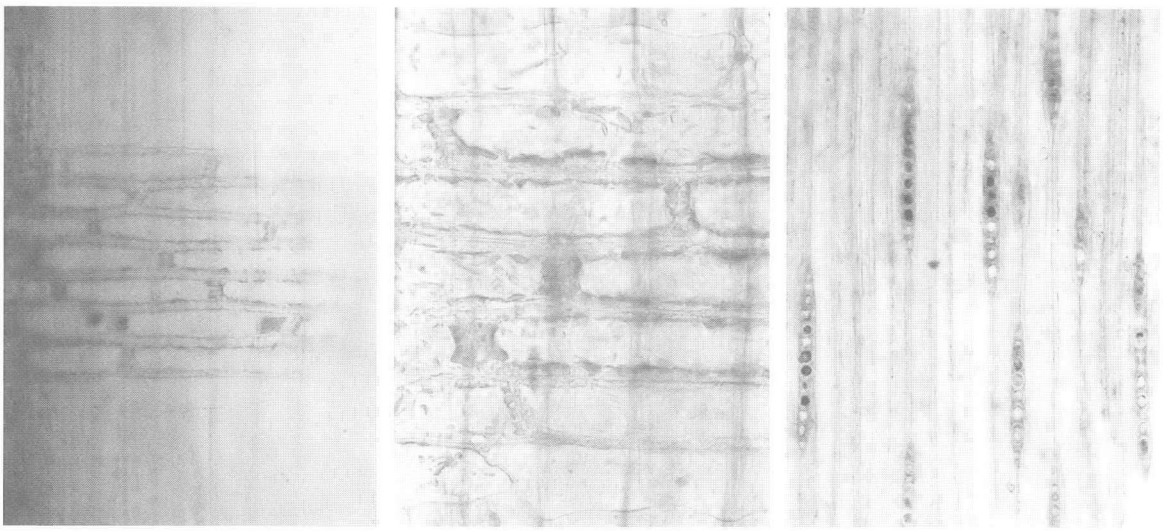
放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

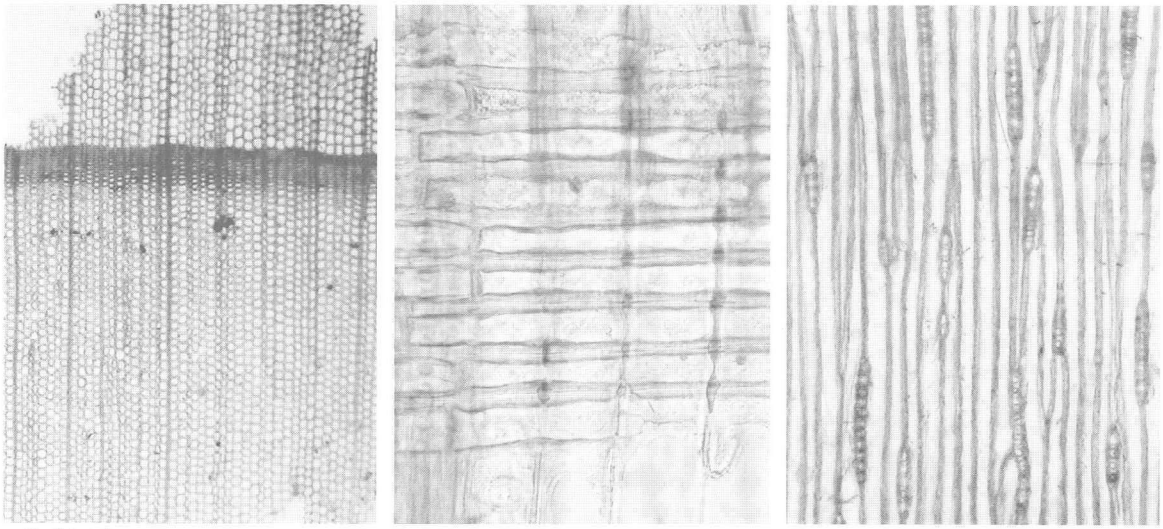
クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版３

横 断 面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に



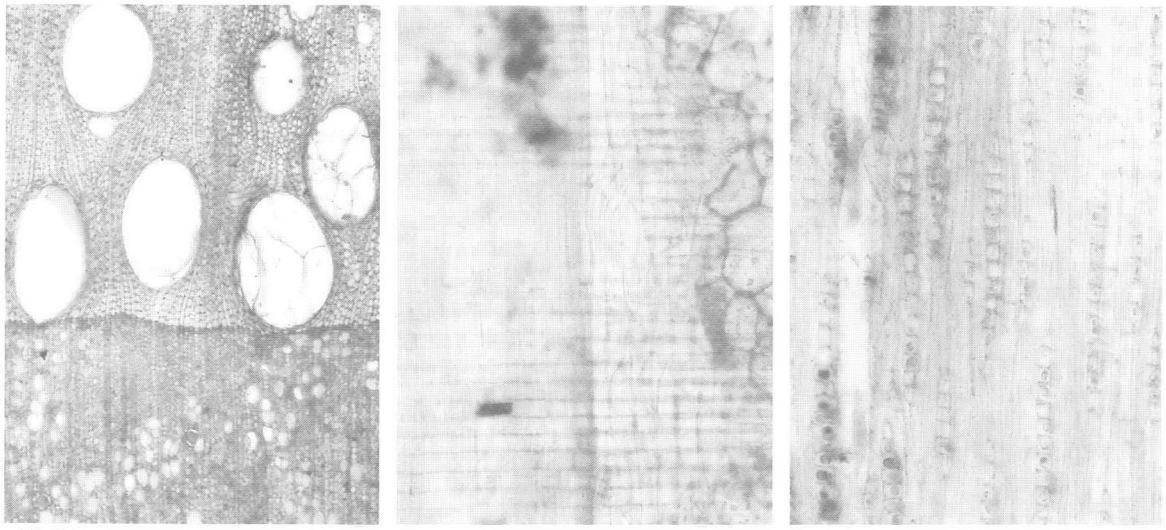
横断面 ：0.1㎜　放射断面 ：0.05㎜　接線断面 ：0.2㎜

図版１・試験番号４　池下遺跡　棺材　ツガ属



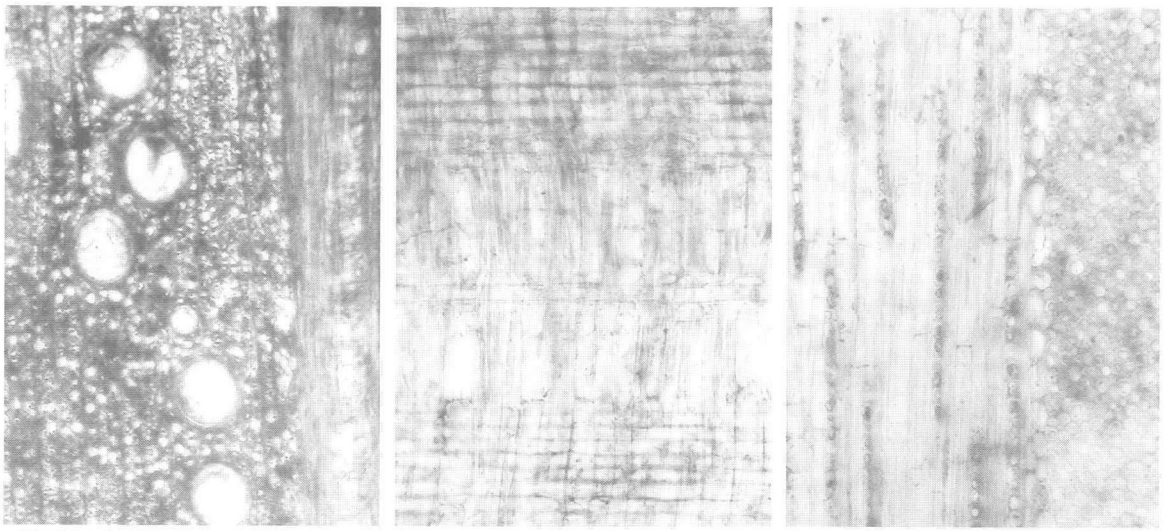
横 断 面 ：0.5㎜　放射断面 ：0.05㎜　接線断面 ：0.2㎜

図版２・試験番号５　池下遺跡　柱材　ヒノキ



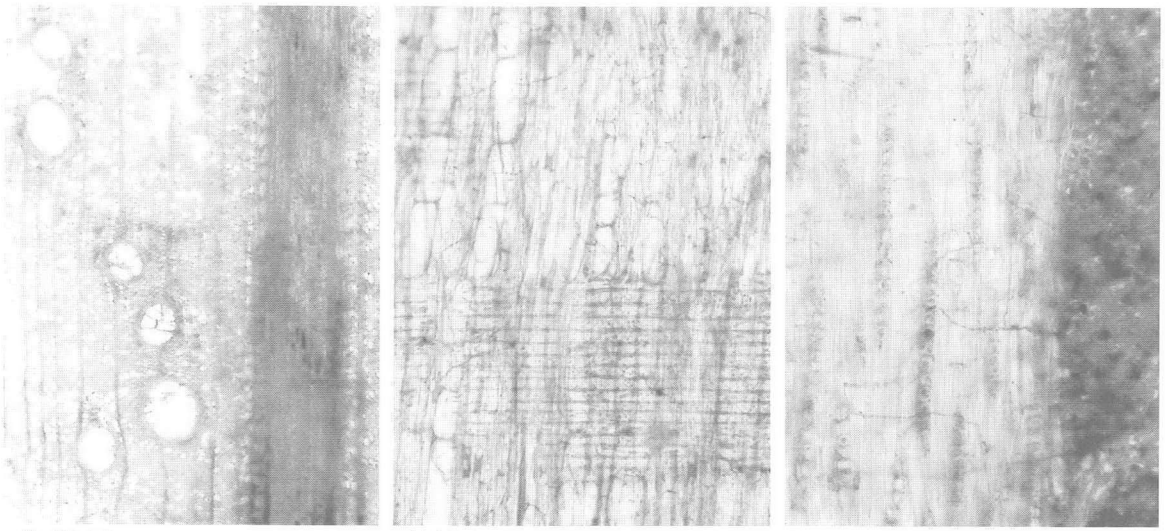
横 断 面 ：0.5㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜

図版３・試験番号２　北内遺跡　鍬の未製品　クリ



横 断 面 ：0.5㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜

図版４・試験番号１　北内遺跡　広鍬の未製品　コナラ属アカガシ亜属



横 断 面 ：0.5㎜　放射断面 ：0.2㎜　接線断面 ：0.2㎜

図版５・試験番号３　北内遺跡　割材　コナラ属アカガシ亜属

配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版4・5

横 断 面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

5．所見

同定の結果、北内・池下遺跡の木材は、コナラ属アカガシ亜属2点、ツガ属1点、ヒノキ1点、クリ1点、であった。コナラ属アカガシ亜属は、広鍬の未製品、割材に使用されている。材質は弾力性があり強く硬い材である。コナラ属アカガシ亜属は西南日本ではほぼ普遍的に農耕具に用いられている。ツガ属は棺材であるが、材質は木理が概ね通直で肌目は粗く、耐朽性、保存性は中庸で、切削、加工はやや困難である。あまり用いられない材である。ヒノキは、柱材に使用されている。材質は木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。クリは鍬の未製品に使用されている。材質は重厚で保存性が高い。

いずれの樹種も温帯ないし温帯下部の暖温帯に生育する樹種ばかりであり、本遺跡周辺からもたらされたと考えられる。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.20－48。

佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.49－100。

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296。

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242。

試料番号	報文番号	遺跡名	区名	遺構名	層名	器種	結果（学名／和名）	
1	368	北内遺跡	Ⅰ区	SD103	最下層	広鍬の未製品	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
2	369	北内遺跡	Ⅰ区	SD103	最下層	鍬の未製品	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc	クリ
3	370	北内遺跡	Ⅰ区	SD103	最下層	割材	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis.*	コナラ属アカガシ亜属
4		池下遺跡	Ⅲ区	ST01		棺材	*Tsuga*	ツガ属
5		池下遺跡	Ⅰ区	SP095		柱材	*Chamaecyparis obtusa* Endl.	ヒノキ

第4表　北内・池下遺跡における樹種同定結果

第２節　池下遺跡　Ⅲ区ST01・ST02出土人骨の鑑定結果

香川医科大学法医学教室　助手　木下博之

財団法人　香川県埋蔵文化財センター（当時）が調査した池下遺跡（香川県丸亀市綾歌町477-1番地外）の発掘調査において出土した２体の人骨について、同センターの主任文化財専門員　藤好史郎氏（当時）により鑑定嘱託を受け、必要な検査を行った。鑑定を行うにあたり、香川医科大学法医学教室　飴野節子助手、大井敏彦技官、香川医科大学歯科口腔外科　大林由美子歯科医師、小川尊明歯科医師に協力いただいた。

鑑定事項は、それぞれの人骨について

Ａ　年齢

Ｂ　性別

Ｃ　遺骨の血縁関係の有無

Ｄ　身長および栄養状態

Ｅ　その他参考事項

である。

１．検査所見

１）Ⅲ区ST01

遺骨を収集する前に、埋葬状態について見学させていただいた。

顔面を右向きに、左右上肢は組んだ状態で、また下肢は屈曲して右に向いた状態で、ほぼ１体分の遺骨が、解剖学的位置関係を保ったまま埋葬されていた。

遺骨を慎重に取り上げていただいた後、香川医科大学法医学教室に搬入した。これらの骨のうち、比較的よく形態をとどめている部位、さらに、特徴を有する部位についてさらに検査を行った。

⑴　頭蓋骨（写真１、２）

取り上げた状態では、頭蓋冠を形成する骨、顔面骨、下顎骨が混在していた。これらについてそれぞれ分類した後、特徴ある部位について検査した。

①　乳様突起（写真３）

比較的大きく、ごつごつしている。頬骨隆起の発達も比較的良好である。

②　縫合の状態（写真４、５）

確認できた部位はいずれも骨の縫合が全く消失していなかった。

そこで、これらの骨片の中で部位の特定が可能であった部位を再構築した。

⑵　下顎骨（写真６）

①　下顎枝角

鋭角で、約78度である。

②　下顎角の状態

下顎角の部分の隆起はそれほど著明ではない。

③　左下第１および第２小臼歯の状態（写真７）

歯と残存する骨の位置関係から、これらの歯は萌出していなかった可能性がある。

発見された際の位置関係、およびその形状を対照の人骨と比較して、以下の骨を識別した。また、測定可能ないくつかの計測項目を測定した。

(3) 鎖骨（写真８、９）

(4) 肩甲骨（写真10、11）

(5) 上腕骨（写真12、13）

中央最大幅（左20㎜、右21㎜、以下同様）、中央最小幅（14㎜、14㎜）、骨体最小周（57㎜、58㎜）。

(6) 橈骨（写真14、15）

(7) 尺骨（写真16、17）

(8) 腸骨（写真18）

(9) 大腿骨（写真19、20）

骨体中央矢状径（22㎜、22㎜）、骨体中央横径（24㎜、26㎜）、骨体中央周（73㎜、78㎜）。

左の粗線下部で内外側顆上の線が平行になる部位で膝窩面の最も近位側の位置と顆間窩の最上点の距離が7.8㎝。

右の骨頭最高点と小転子の中点の距離が5.7㎝。

(10) 脛骨（写真21、22）

中央最大径（23㎜、27㎜）、骨体最小周（67㎜、68㎜）。

(11) 腓骨（写真23、24）

(12) 歯牙（写真25）

再現した下顎骨と歯牙について、大林、小川の両歯科医師の協力を得て、エックス線撮影を行った。エックス線検査から、第３大臼歯は萌出しているものの歯根が未完成であることが明らかとなった（添付のエックス線フィルム参照）。

２）Ⅲ区ST02

遺骨を収集する前に、埋葬状態について見学させていただいた。

墓の一端に平板上になった骨の一塊、少し離れた位置にほぼ対象にそれぞれ長管骨の破片があり、さらに少し離れた位置に長管骨の破片がある（写真）。慎重に取り上げていただいた後、香川医科大学法医学教室に搬入して検討した。

(1) No.１（写真26）

板状の骨が小片となっている。頭蓋冠を形成する骨の一部と考えられる。

(2) No.２および３（写真27、28）

形態から上腕骨の一部と考えられるが、具体的な部位の特定は困難である。

(3) No.４（写真29）

形態から大腿骨の一部と考えられるが、具体的な部位の特定は困難である。

(4) 歯牙（写真30）

右上第２または第１小臼歯と思われる歯と、左下第１または第２第臼歯と思われる歯が残存する。両者の咬合面と後者の遠心面にはう蝕がみられる。

２．説明

A　年齢

年齢は、頭蓋冠の縫合、歯の萌出および咬耗状態、長管骨の骨端の性状などから判断する。今回は、頭蓋の縫合および歯の状態から判断した。

ST01について、残存する骨の縫合（矢状縫合）には、癒合がみられなかった。また、脱落した下顎第2大臼歯の歯根は完成しているが、エックス線検査から、第３大臼歯は萌出しているものの歯根が未完成であることが明らかとなった。このことから、埋葬された人の死亡時の年齢は比較的若く、特に歯の所見を現代人のデータに当てはめると17歳前後であろうと考えられる（文献２）。

B　性別

性別は、一般に骨の形態で性差が認められる部分（頭蓋骨では眉弓の隆起、乳様突起、下顎角など、骨盤の形状など）から判断される。この例では頭蓋骨の断片化が著しく、また、残存する骨盤の形状からは、判断が困難である。そこで、残存していた頭蓋骨の乳様突起、下顎角の状態、下顎枝角について検討した（文献１）。

ST01の乳様突起は比較的大きく、ごつごつしており、男性型の特徴を有する。また、下顎枝角は78度であり、男性型の可能性が強い。しかし、下顎角の部分の隆起はそれほど著明ではない。全体として判断すると、男性の可能性が高いと考えられる。また、長管骨の計測値もどちらかというと男性の値に近いと考えられる（文献１）。

C　遺骨の血縁関係の有無

残存する歯牙の歯髄からDNAの採取を試みたが、現在までのところ、ST01、ST02とも採取できていない。

D　身長および栄養状態

身長推定には、一般に長管骨（上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨など）の最大長が用いられる。今回の例では、完全な状態の長管骨がないので、大腿骨の残存部分の大きさから最大長を推定した（文献１）。左の粗線下部で内外側顆上の線が平行になる部位で膝窩面の最も近位側の位置と顆間窩の最上点の距離が7.8cm、右の骨頭最高点と小転子の中点の距離が5.7cmであったことから、左の大腿骨の最大長は40.2cm、右の大腿骨の最大長は34.7cmと推定される。これを日本人の身長推定に用いられる安藤の式（文献１）に代入すると、推定身長は152cmおよび131cmとなった。

骨の最大長の推定に用いられた値は、現在外国人のもので、日本人に関するデータがなく、かなりの誤差がある可能性があること、推定骨長からさらに推定した値であること等の理由で、推定身長の計算値に大きなばらつきが生じたものと考えられる。

ST01について、歯牙はほぼ完全に残存していたが、左下第１および第２小臼歯は萌出していなかった可能性がある。この原因として、下顎が小さいこと、あるいおは外傷を受けたことによる顎骨の変形などが考えられる。

3．鑑定

以上の検査結果に基づき、次の通り鑑定する。

1）Ⅲ区ST01について

A　年齢

年齢は歯の発育状態から、およそ17歳くらい（16～18歳）と推定される。

B　性別

性別は、男性であると推定される。

C　遺骨の血縁関係の有無

現時点では、血縁関係の有無について判断できない。

D　身長および栄養状態

残存する長管骨の長さから推定される身長は計算上約152cmおよび約131cmであった。基準となる数値に、日本人のデータがないため、かなりの誤差があると思われ、正確な値は得られないが、体格は小柄であったことが推定される。

左下第１および第２小臼歯は、萌出しておらず、強い外傷に起因した可能性もある。これ以外には骨に変化をきたすような明らかな疾病や骨折部位は確認できなかった。

E　その他

再埋葬については、発掘時の骨の位置関係に解剖学的な矛盾がないことから、その可能性は低いと考えら

れる。

Ⅲ区ST02について

年齢、性別、血縁関係の有無、身長および栄養状態について、残存する骨からの推定は不可能であった。

参考文献

「白骨死体の鑑定」 瀬田季茂、吉野峰生　　令文社

「現代小児歯科学―基礎と臨床―」 黒須一夫　　医歯薬出版

本鑑定は平成11年12月14日から平成12年３月25日までの間に行った。

平成12年３月25日

香川県木田郡三木町池戸1239-2

香川医科大学法医学教室　助手

鑑定人　医師　　医学博士　　木下博之

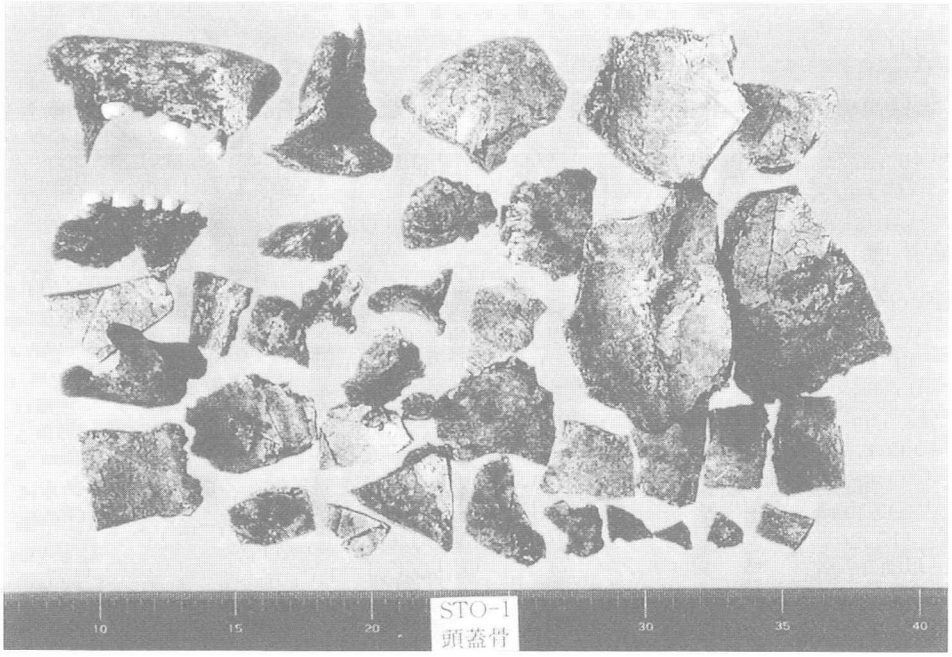


写真１　頭蓋骨の状態

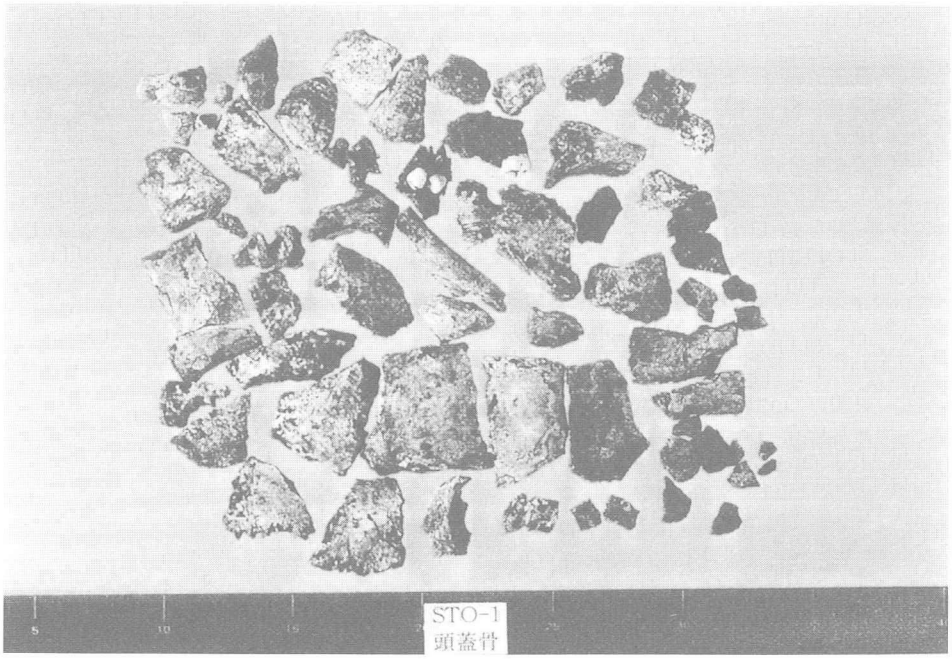


写真２　頭蓋骨の状態

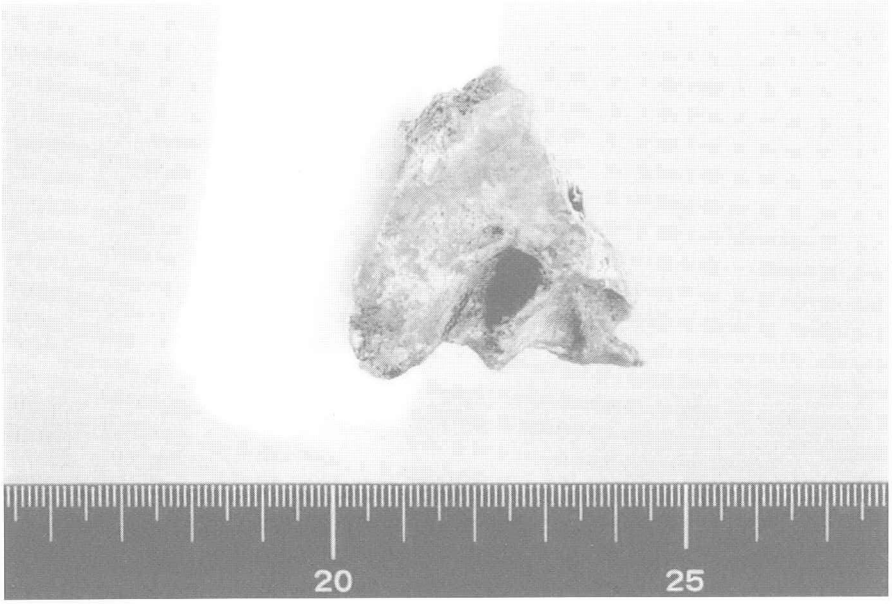


写真 3　乳様突起と外耳道の状態

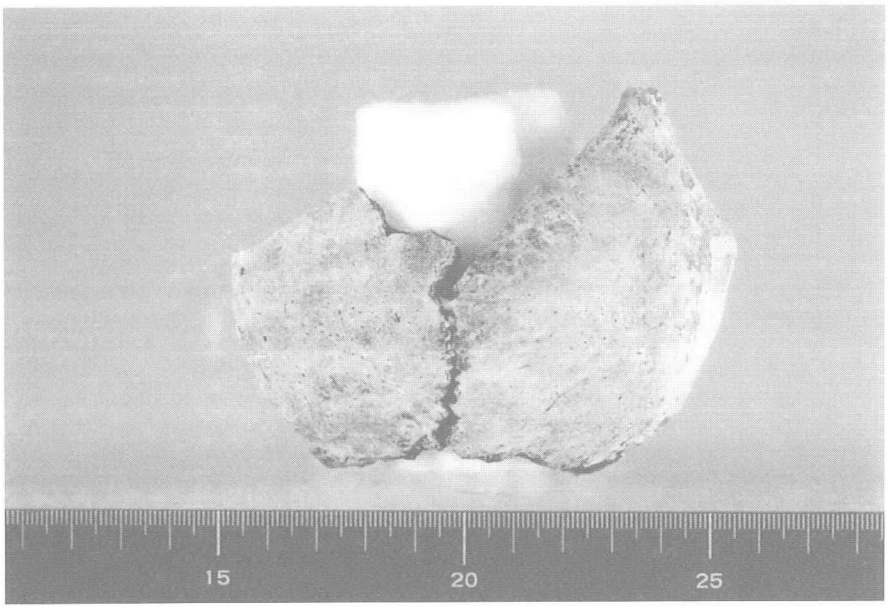


写真 4　頭蓋の縫合の状態

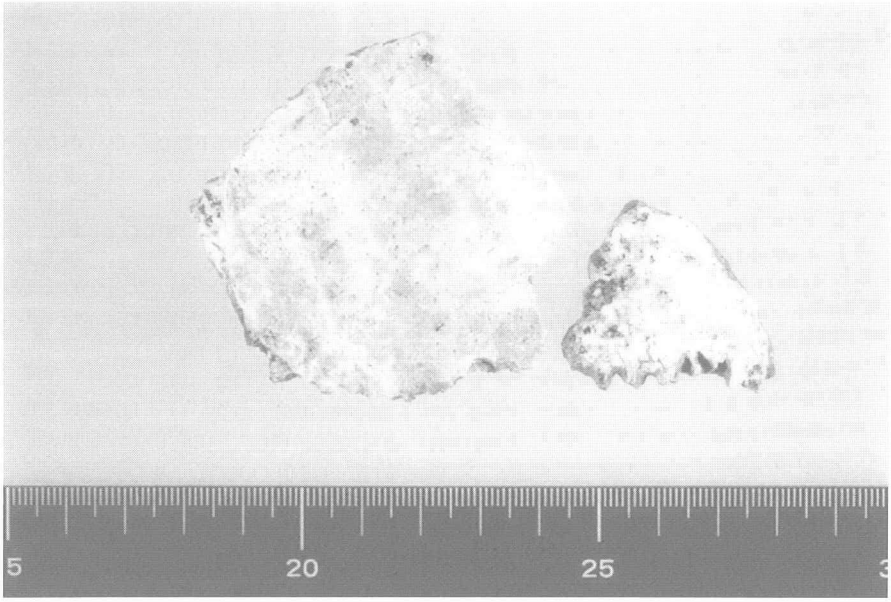


写真 5　頭蓋の縫合の状態

写真 6　下顎骨右側の状態

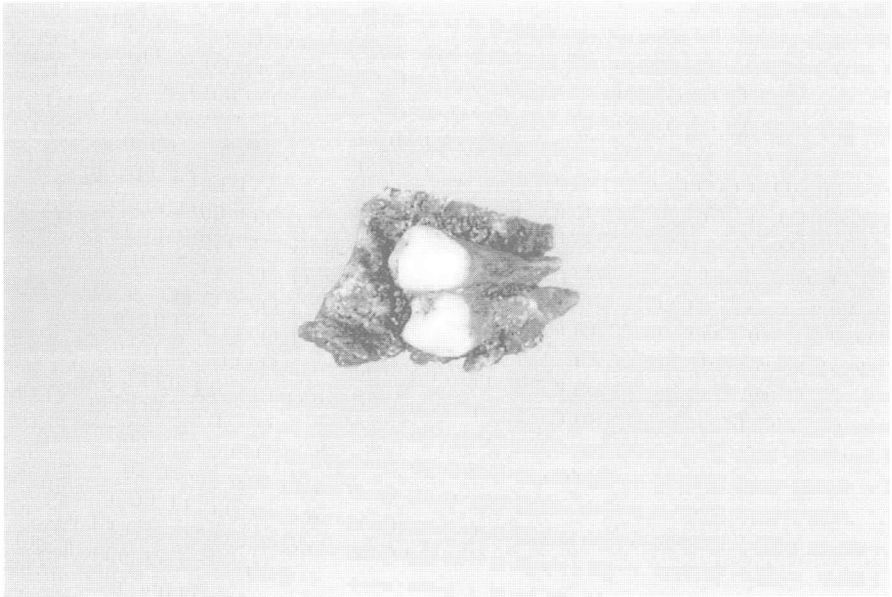


写真７　左下第１、第２小臼歯の状態

写真８　左鎖骨

写真 9　右鎖骨

写真10　左肩甲骨

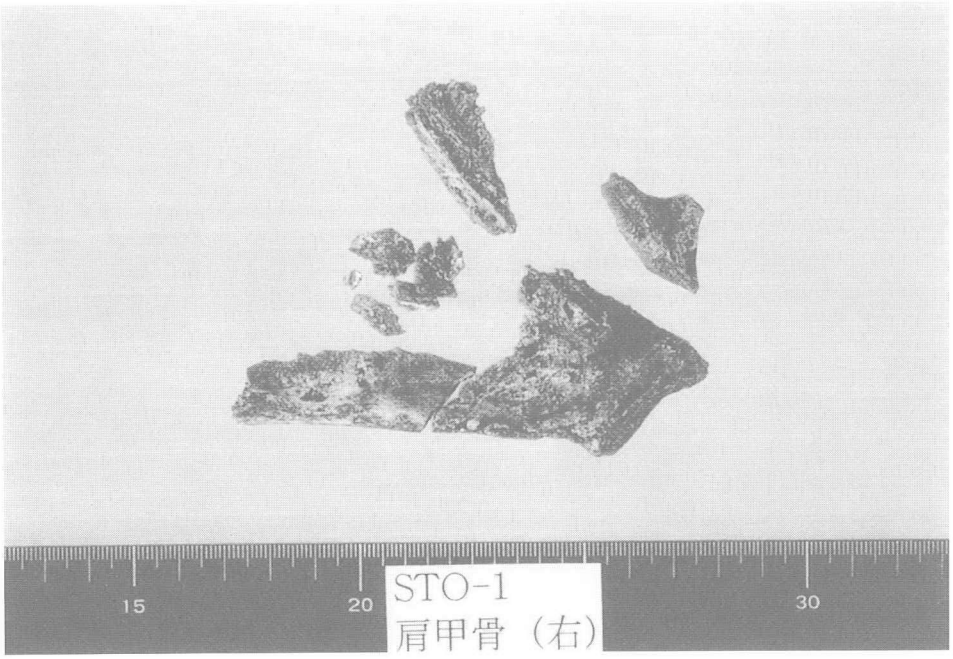


写真11　右肩甲骨

写真12　左上腕骨

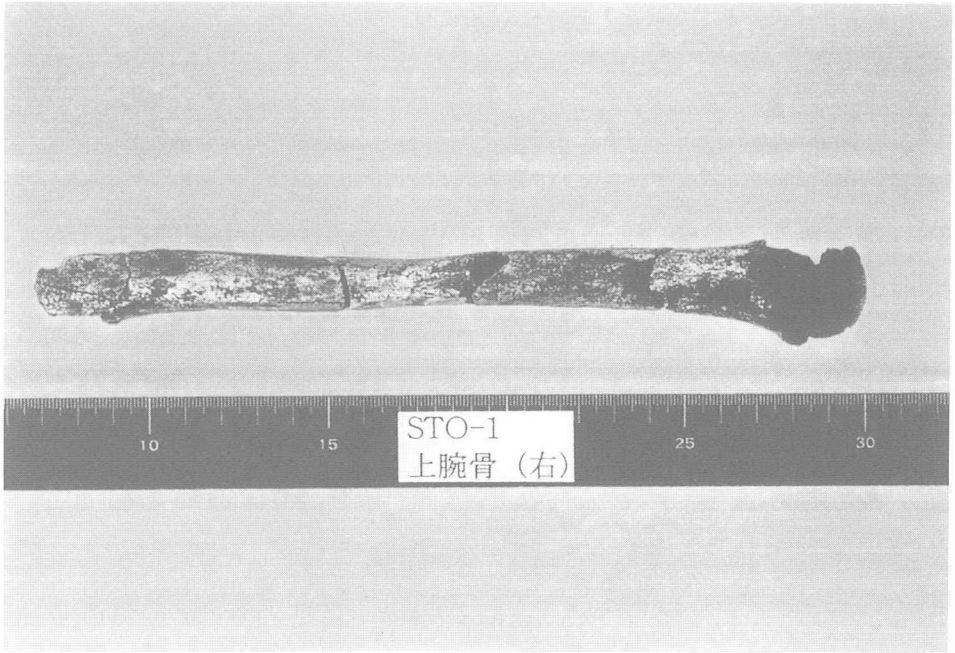


写真13　右上腕骨

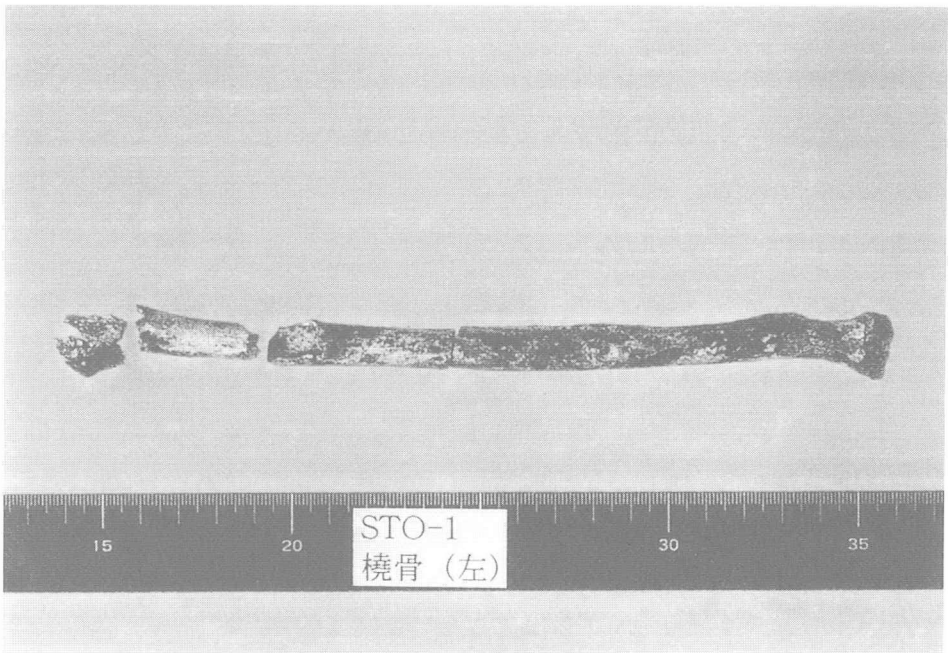


写真14　左橈骨

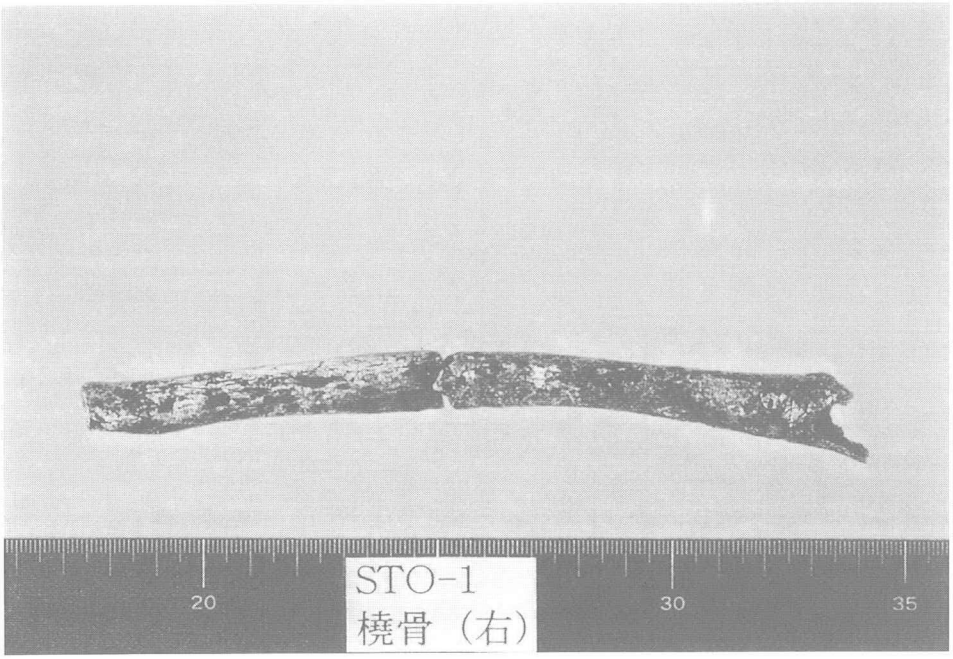


写真15　右橈骨

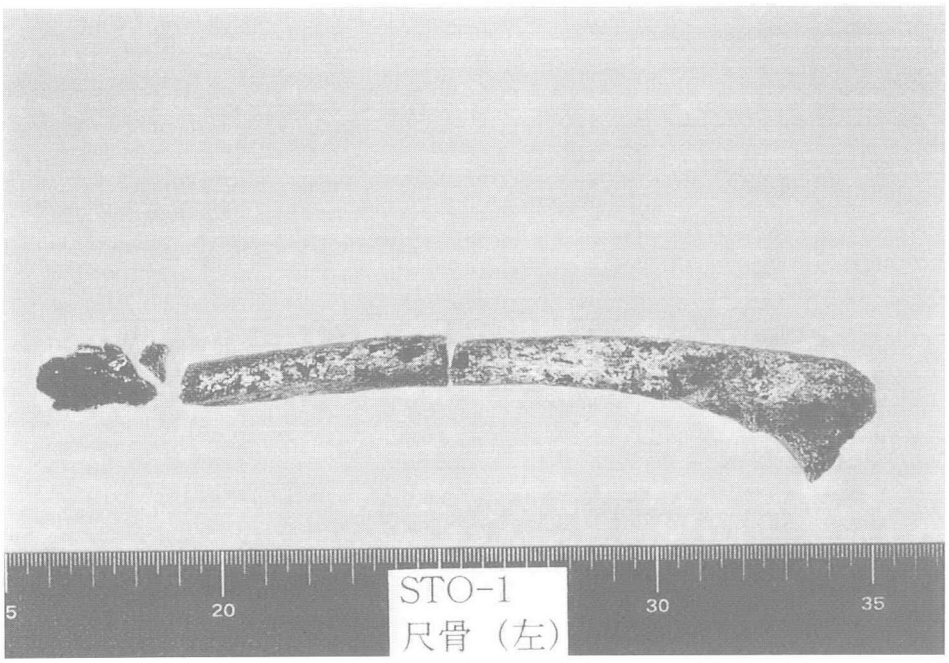


写真16　左尺骨

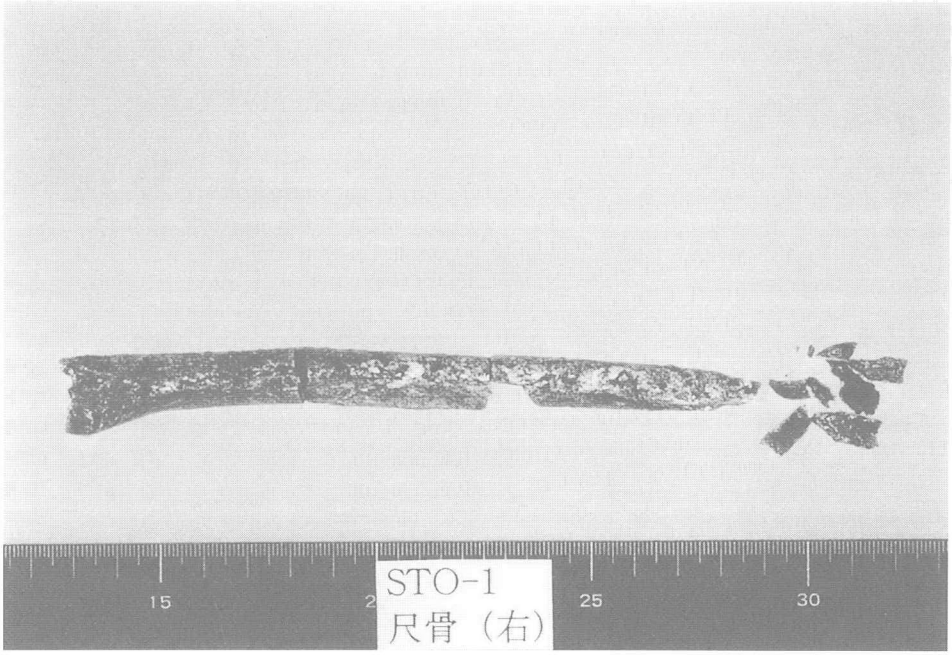


写真17　右尺骨

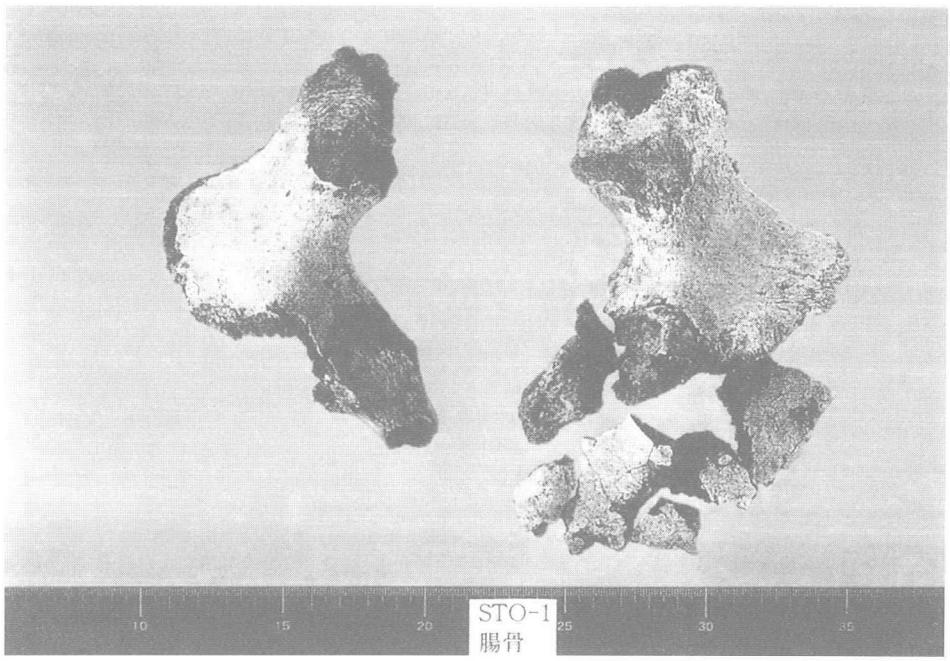


写真18　腸骨

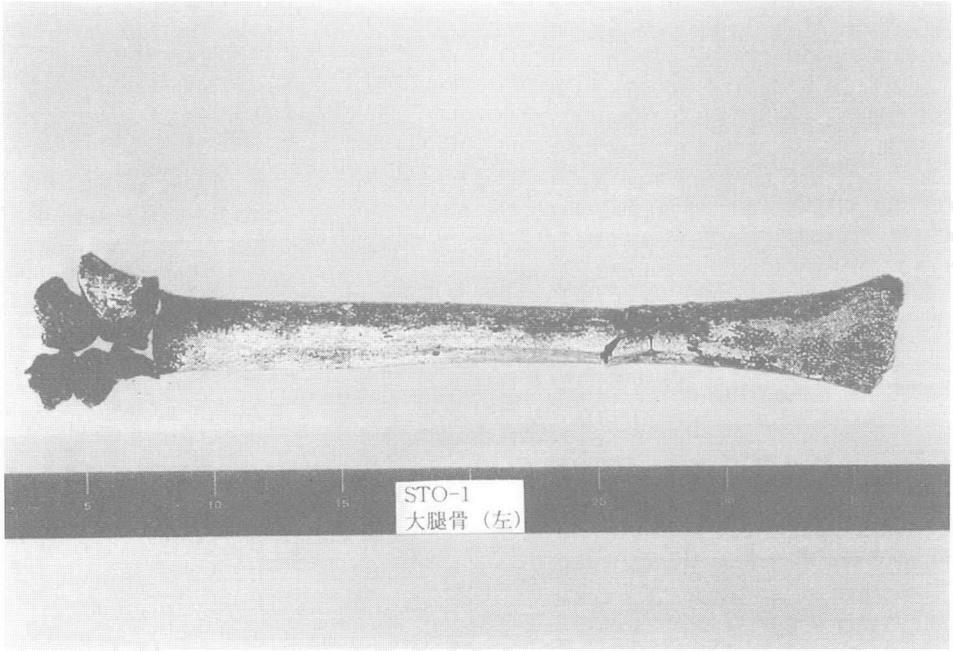


写真19　左大腿骨

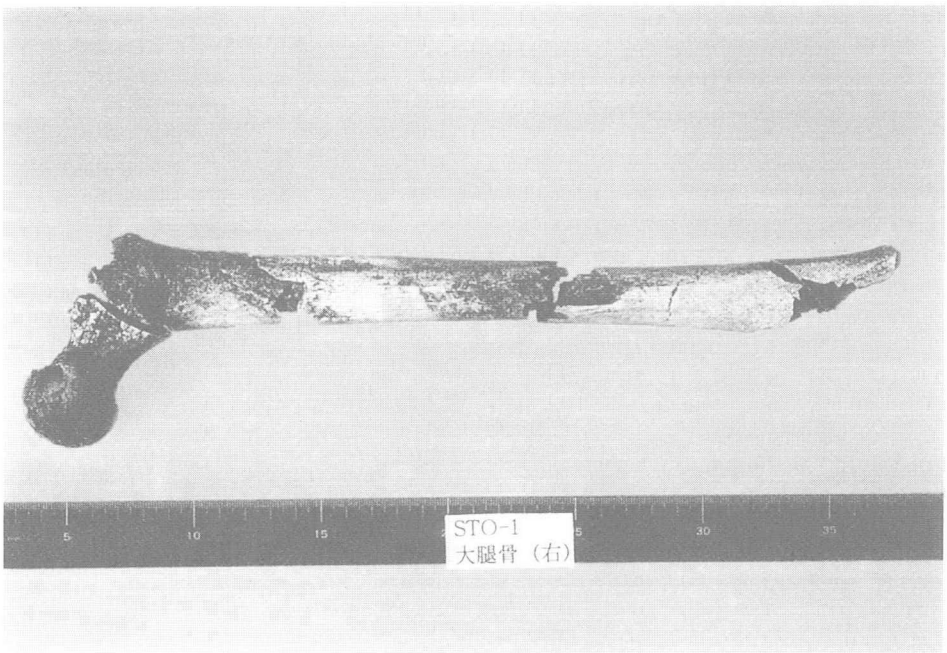


写真20　右大腿骨

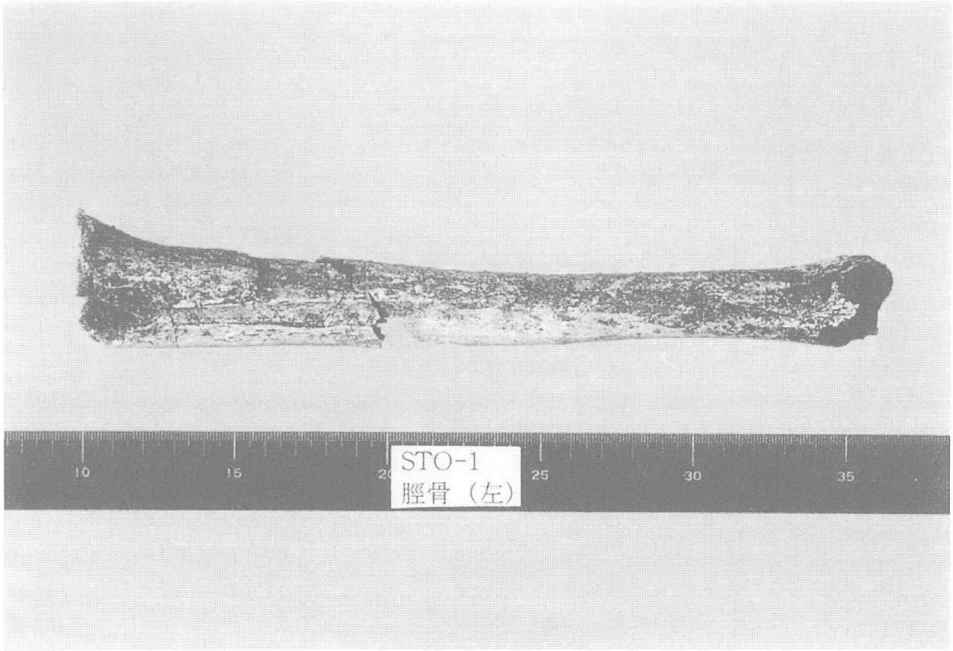


写真21　左脛骨

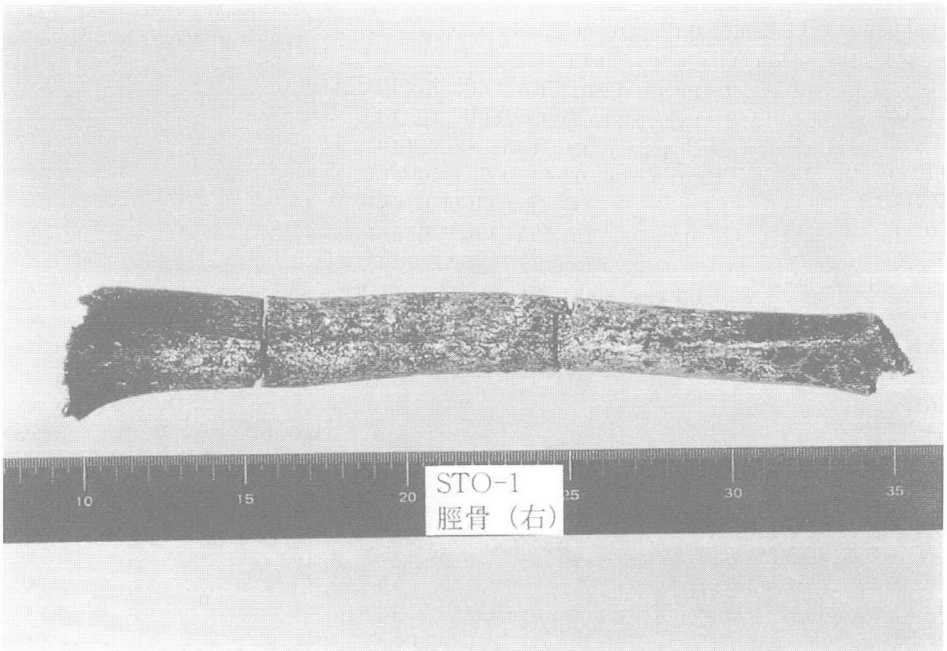


写真22　右脛骨

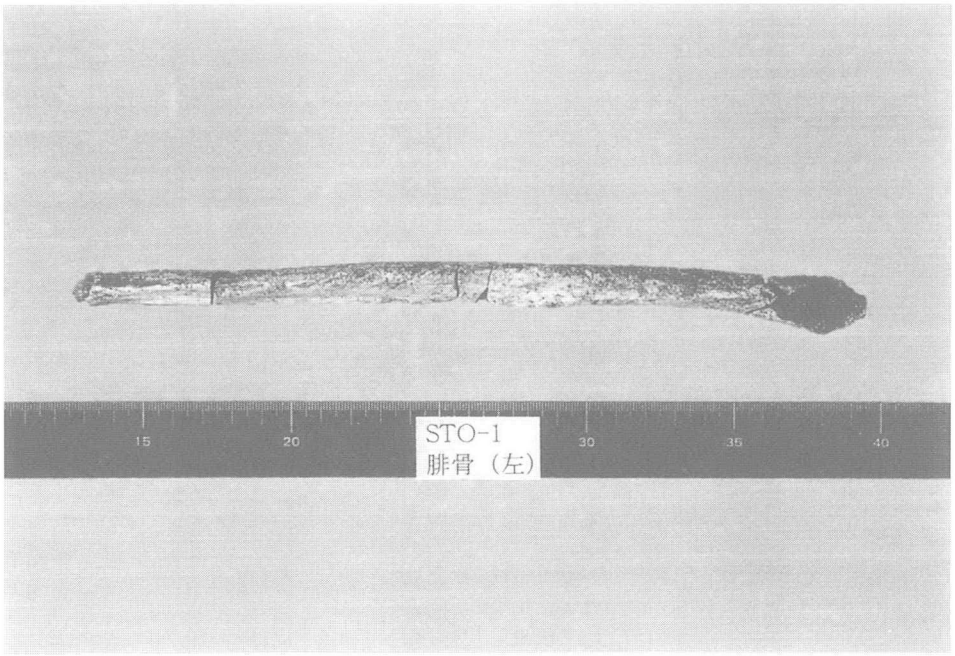


写真23　左腓骨

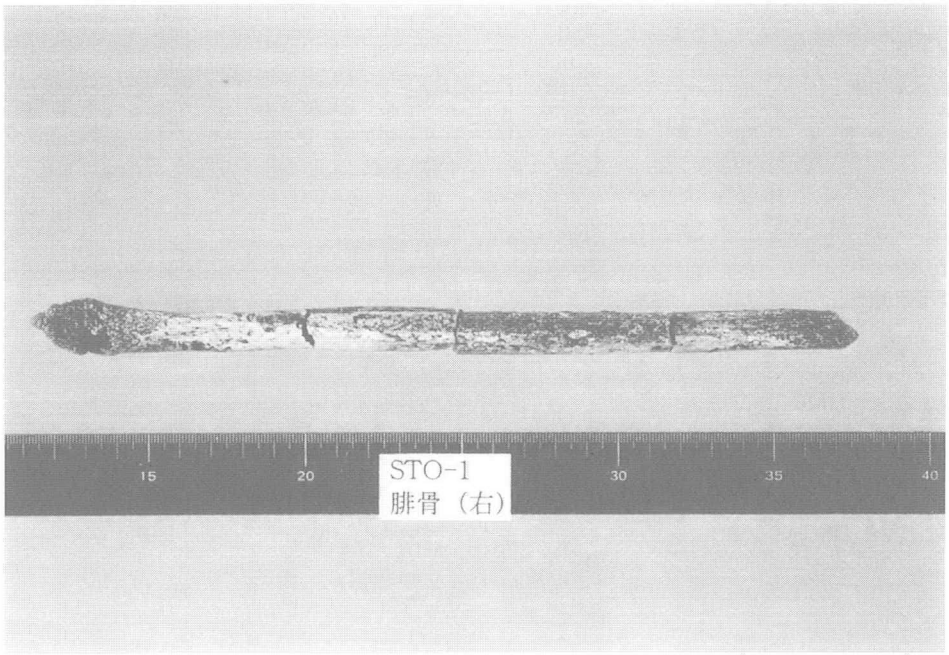


写真24　右腓骨

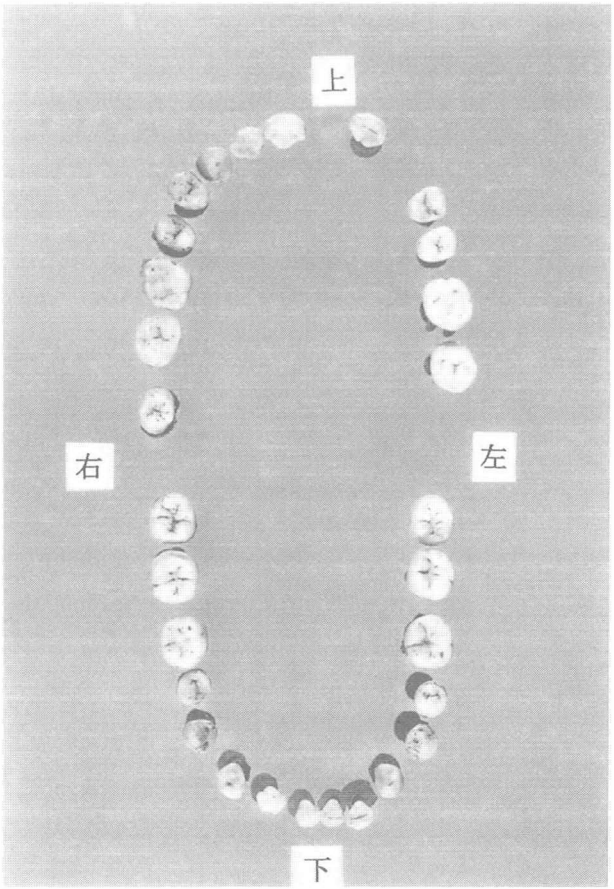


写真25　STO-1の歯牙の状態

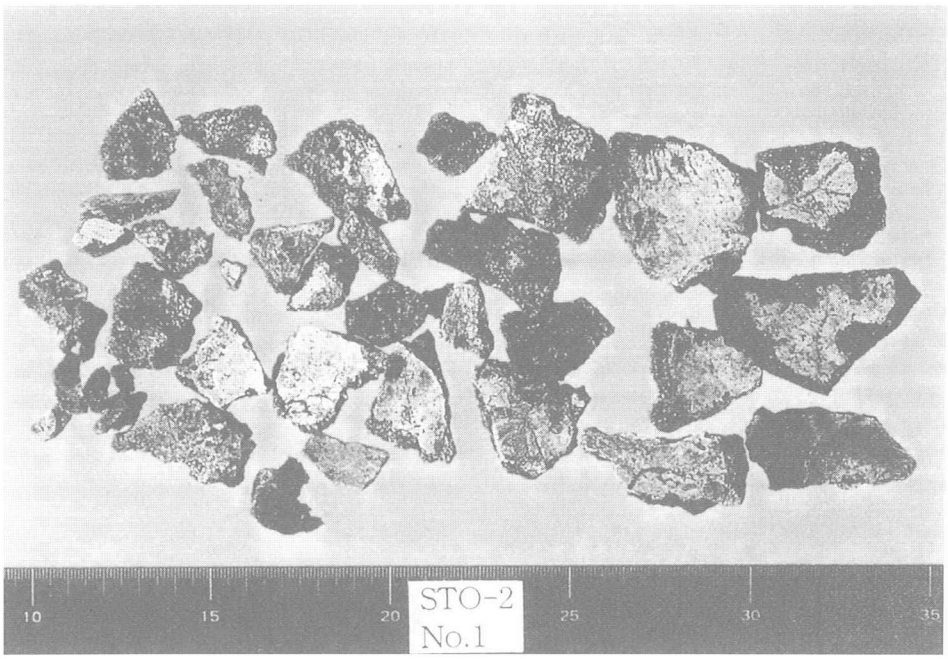


写真26　頭蓋の一部と思われる骨